

古 浦 遺 跡

2005年

古浦遺跡調査研究会
鹿島町教育委員会

古浦遺跡

島根県八束郡鹿島町大字古浦

2005年

古浦遺跡調査研究会

鹿島町教育委員会



卷頭図版 1 遺跡遠景〈中央砂丘部分〉北より 1961年 12月



卷頭図版 2 遺跡近景（平板設置部より左 A調査区）



卷頭図版 3 60号人頭蓋骨（1964年）

例　　言

- この報告書は、島根県八束郡鹿島町大字古浦（こうら）字砂山607-3、607-5、607-34（調査当時）所在の砂丘遺跡の発掘調査研究報告書である。調査地の現在の地番は字砂山607-3、606-100、606-101である。
- 調査は、1961年（昭和36年）から1964年（昭和39年）まで4次にわたり、金関丈夫先生（鳥取大学教授、山口県立医科大学教授、帝塚山大学教授）の主催・指導のもとに行われ、弥生人の形質人類学研究と古墳時代庶民の生活の探求を目的とした。
- この報告書の構成と執筆者は次の通りである。

第1章　自然環境	林　正久
第2章　歴史的環境	赤澤秀則
第3章　立地	藤田　等
第4章　調査の歴史	藤田　等
第5章　調査日記（抄）	藤田　等
第6章　調査区の設定と層位	藤田　等
第7章　遺構と遺物	藤田　等
第8章　島根県・古浦遺跡出土の弥生～古墳時代人骨	中橋孝博・永井昌文
第9章　特論	
古浦遺跡の貝輪	木下尚子
弥生時代の了供用貝輪論	木下尚子
古浦遺跡出土の擬似餅	内田律雄
着色と変形を伴う弥生前期の頭蓋	金関丈夫・小片丘彦
ト骨談義	金関丈夫
第10章　総括	藤田　等
第11章　古浦遺跡関係文献目録	赤澤秀則
あとがき	藤田　等

- 調査中の写真撮影は、永井昌文、金関恕、近藤正、小片丘彦、藤田等が担当した。
- 遺跡周辺の地形図の作製は金関恕が行い、調査中の遺跡・遺構図、人骨出土状態図などは各調査員が分担した。
- 遺物の整理・復原・実測・製図、写真撮影は藤田等が担当したが、特論中の図・図版について

は各執筆者が行った。

また、遺物の復原・実測の一部については静岡大学人文学部史学科考古学専攻の設楽博己、長沼孝、松井和幸、上村弘一、岩出 崇、上垣内邦典、鬼頭紀子、塩崎誠志、早川奈緒美、長井博志、松下敦志、小川弦太、三田敦志、鈴木京太郎、武田朋子、田原淳史、西澤正晴、増田由紀子、森田智子、板井賢次の御協力を頂いた。

- 7 図・図版・表の番号は、本文中では各章ごとに対応した。
- 8 表面採集の遺物は、調査員が調査期間中に採集したものもあるが、主に鹿島町古浦602-51萬鍬原川上一義君（当時忠雲小学校生徒）の努力によるもので、すべて調査團に寄贈された。
- 9 石材鑑定は静岡大学理学部地球科学科海洋地質学北里 洋教授にお願いした。
- 10 占浦遺跡調査研究会の名称は、本報告書作製のために便宜的に付したものである。
- 11 1962年（第2次）調査については、文部省科学研究費19万円が交付された。
- 12 1963年（第3次）調査については、島根県より調査助成金として20万円が交付された。
- 13 占浦遺跡関係の遺物・図・写真・写真原板など資料はすべて鹿島町教育委員会に移管し、鹿島町立歴史民俗資料館で公開する。
- 14 特論の企閑丈夫・小片丘彦「着色と変形を伴う弥生前期人の頭蓋」は『人類学雑誌』第69巻3・4号1962年、企閑丈夫「卜骨談義」（一）～（八）は『島根新聞』1963年8月25日から9月1日に掲載されたものである。
- 15 報告書作製経費は、鹿島町教育委員会の支出による。
- 16 この報告書の編集は、藤田等、鹿島町教育委員会赤澤秀則が行った。

目 次

第1章 自然環境.....	林 正久.....	1
第1節 鹿島町の自然環境.....		
(1) 地形 (2) 地質 (3) 気象・気候 (4) 植生		
第2節 古浦砂丘の形成.....		11
(1) 鹿島町の平野の微地形と構成物の特徴.....		11
(2) 古浦砂丘地形の特徴		13
(3) 平野の古地理の変遷と古浦砂丘の形成.....		20
第2章 歴史的環境.....	赤澤秀則.....	23
第3章 立 地.....	藤田 等.....	29
第4章 調査の歴史.....	藤田 等.....	35
第5章 調査日記 (抄)	藤田 等.....	40
第1次調査 1961年 (昭和36年)		40
第2次調査 1962年 (昭和37年)		44
第3次調査 1963年 (昭和38年)		48
第4次調査 1964年 (昭和39年)		52
第6章 調査区の設定と層位.....	藤田 等.....	58
第7章 遺構と遺物.....	藤田 等.....	69
第1節 表面採集遺物.....		69
第2節 第1次調査 (1961年-昭和36年)		95
(1) 弥生時代の遺構と遺物.....		95
(2) 古墳時代の遺構と遺物.....		99
第3節 第2次調査 (1962年-昭和37年)		123
(1) 弥生時代の遺構と遺物		123
(2) 古墳時代の遺構と遺物		138

第4節 第3次調査（1963年－昭和38年）	177
（1）弥生時代の遺構と遺物	177
（2）古墳時代の遺構と遺物	202
第5節 第4次調査（1964年－昭和39年）	226
（1）弥生時代の遺構と遺物	226
（2）古墳時代の遺構と遺物	243
第8章 島根県・古浦遺跡出土の弥生～古墳時代人骨	
中橋孝博・永井昌文	264
第9章 特　論	
古浦遺跡の貝輪	木下尚子 295
弥生時代の子供用貝輪論 - 古浦遺跡の貝輪によせて -	木下尚子 300
古浦遺跡出土上の擬似鉢	内田律雄 323
着色と変形を伴う弥生前期の頭蓋	金関丈夫・小片丘彦 334
ト骨談義	金関丈夫 340
第10章 総　括	藤田　等 355
第11章 古浦遺跡関係文献目録	赤澤秀則 374
図・図版・表一覧	377
あとがき	藤田　等 387
図版	389

第1章 自然環境

1節 鹿島町の自然環境

(1) 地形

鹿島町は東西に延びる島根半島の中央部やや東寄りに位置する。鹿島町の位置を図1に示す。まず、島根半島全体の地形の概要についてみてみる。

『出雲国風土記』の開拓引の項では、島根半島は西から支豆支の御崎〔去豆（小津）より西側の部分〕、狹田の国〔去豆～多久川（佐陀川・溝武川）〕、闇見の国〔多久川～宇波（稻穂）〕、三穂の崎〔宇波以東〕の4つの地域に区分されている。それぞれ標高300～500mの山塊からなり、標高50m以下の鞍部が境界をなしている。

しかし、地形的配列からみると、島根半島は東北東～西南西に延びる二列の左雁行山地から構成されている。西の山地は轟高山（536.3m）を最高峰とする紡錘状の山地で、弥山山地あるいは出雲北山と呼ばれ、標高350～500mの稜線が連なる。出雲平野に面する南側は、大社衝上断層が想定されており（多井、1973）、急峻で直線的な斜面となっている。分水界は南に偏っており、日本海側の方が傾斜が緩やかである。弥山山地は風土記の支豆支の御崎の範囲と一致する。

中央部は指木山（415.2m）を最高峰とする、東西に細長い山地で、本宮山山地と呼ばれる。標高200～400mの山頂が連なる。分水界は北に偏っており、宍道湖に面する南側斜面の方が緩傾斜で、山麓には標高100m以下の丘陵地が広がる。北側斜面の勾配は急で、平田市十六島鼻から鹿島町古



図1 島根半島地域の地形概観
(等高線は100m毎)

浦にかけて、半調で直線的な海岸線が続く。中央部の山列は朝日山（341.8m）の東で、佐陀川の谷によって、一旦途切れる。しかし、中央部の山列は佐陀川からさらに東、真山（256.3m）や御嶽山（284.7m）を経て松江市本庄町の北東、長海川の南へと続く。本宮山山地の山地の山麓部には、標高50m以下の丘陵地が広く分布する。中央部と東部との山塊の境界は、後述する「穴道断崖」である。

東部の山列は三坂山山地と呼ばれ、鹿島町の神堀山から美保関町地蔵崎へと続く。東部山地中央は最高峰の三坂山（535.7m）をはじめ、大平山（503.8m）や澄水山（507.3m）など、標高300～500mの山々がそびえるが、美保関町の稜線＝手角の線から東側では、高尾山（328.4m）を最高峰とする、標高200～300mの山地となる。中海に面する南側の斜面は比較的急で、東西へ直線的に続く。藤原（1972）は中海側の斜面を断崖崖と述べている。一方、日本海側の斜面は南側に比べて緩傾斜で、分水界は南に偏っている。日本海沿いには多古鼻をはじめ犬堀鼻、港戸鼻、大崎鼻などの小半島や倉内湾、千酌湾、七ヶ浜などの小湾入、小島や離岩など山入りの多い様相を示し、沈海岸の特徴を呈している。

島根半島の南側、穴道湖・中海沿岸には出雲平野をはじめ松江平野など比較的広い平野が発達する。しかし、半島の北側、日本海沿岸では河川の流域が小さいため、平野の発達はよくない。半田市の小津村近や鹿島町の佐陀川河口部にやや広い平野がみられるほかは、三坂山山地の日本海側の小湾部の奥に小規模なものがみられるにすぎない。

鹿島町周辺の地形の概観を図2に示す。鹿島町は中央部山地と東部山地との接点にあたり、町の南に本宮山山地が、北に三坂山山地が、それぞれ東西に走る。両山地の間、佐陀川と講武川の谷沿いに平野が東西に伸びる。また、南の本宮山山地は佐陀川と講武川の谷によって東西に二分され、西側には朝日山や経塚山（316m）が、東側には御嶽山（284.7m）や鳥ノ子山（約250m）の山列が東西に連なる。町の北部は大平山から続く山列が分布するが、標高300m前後の主山稜は御的山（332.2m）から北西に伸びて島根町との境となっている。御的山からは、もう1つの稜線が西方の手結に向かって伸びる。この山列は標高200m以下で、山頂の定高性が認められる。平野と山地の間には小規模ながら標高50m以下の山麓地や丘陵も存在する。なお、鹿島町の最高点は大平山山頂西方、標高約450mの地点である。

本宮山山地と三坂山山地の間を佐陀川と講武川の谷が東西方向に伸びる。佐陀川はかつては講武川下流部の呼称であったが、江戸時代に名分と佐陀宮内の間が開削されて日本海と通ずるようになったもので、穴道湖と日本海を結ぶ。長さは8.3km。穴道湖の水面の標高が30cmであることから、穴道湖が佐陀川上流、忠雲が佐陀川下流ということになる。講武川は大平山を源とし穴道湖へ注ぐ。長さ12.3km、流域面積21.2km²。佐陀宮内より下流では佐陀川の東側を平行して直線的に流れること

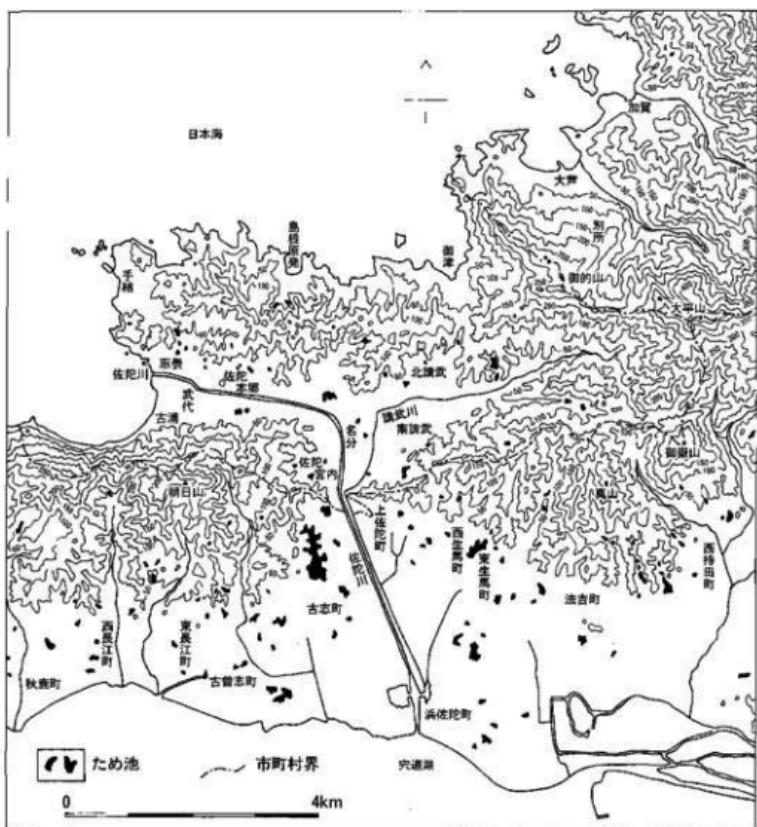


図2 鹿島町周辺の地形概要
(等高線は50m毎)

これらの谷沿いにやや広い平野が存在し、名分の丘陵地が両平野を隔てる。河川の大きさに比べると平野は広い。後述する宍道断層、古殿断層など地形的弱線が谷の発達に大きな影響を与えていた。佐陀川沿いの平野は、宍道湖と日本海から続く海岸平野で、主として三角州からなる。海岸部の占浦付近には砂丘地が広がる。名分より東方のものは講武川によって形成された谷底平野である。疊混じりの砂層や泥から構成され、東小学校の南方では厚さ9mに達する。

(2) 地質

本地域の表層地質はすべて新生代の第三紀および第四紀層からなり、中生代以前のものはみられない。図3に鹿島町周辺の表層地質を示す。第三紀層はすべて中新世に属し、堆積岩として泥岩や砂岩、礫岩、凝灰岩があり、火山岩としては流紋岩や安山岩が分布する。これらの地層に深成岩としての斑れい岩が貫入している。

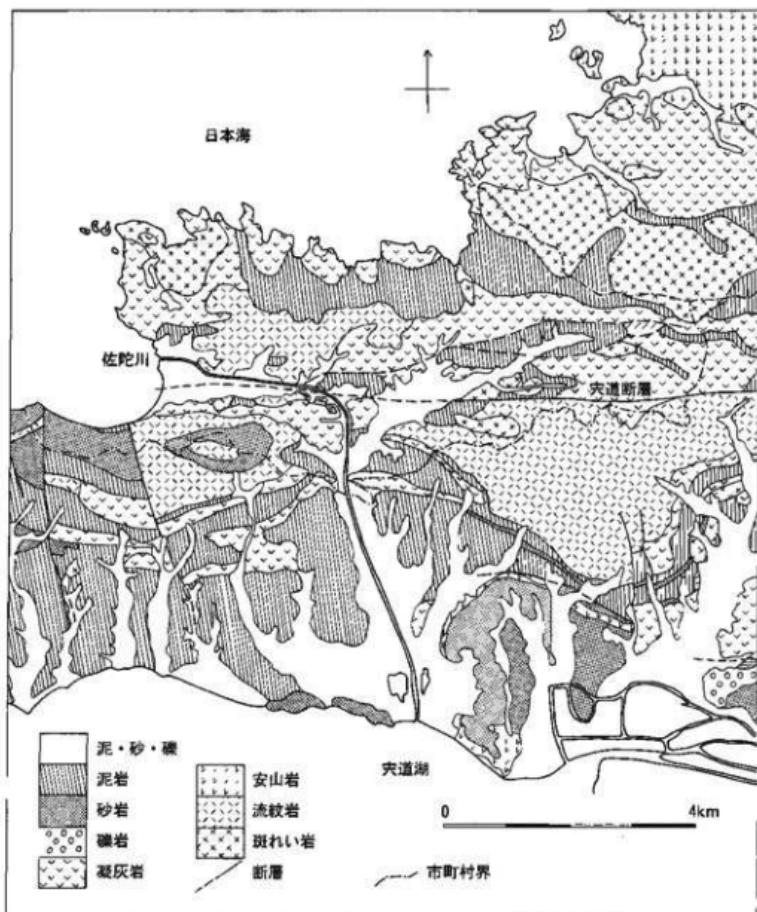


図3 鹿島町周辺の表層地質
土地分類基本調査「松江」「恵曇・今市」「美保関・境港」より編集

砂岩、礫岩、凝灰岩があり、火山岩としては流紋岩や安山岩が分布する。これらの地層に深成岩としての斑れい岩が貫入している。

こうした岩石は層状に重なり合い、東西方向の褶曲軸に沿って小背斜、小向斜をくりかえしながら島根半島の山地を形成している。走行はほぼ東西方向で、山列と平行である。全体として、本宮山山地では南の宍道湖側に地層が傾斜しており、三坂山山地東部では北の日本海側に傾斜する。地形の配列はこのような地質構造や地層の変位と基本的には一致している。

第四紀層は平野を構成する未固結堆積物で、完新世（最近1万年）に堆積したものである。泥がち堆積物および砂がち堆積物、礫がち堆積物に細分され、主として谷底平野は礫がち、一角州は泥がち、砂州・砂丘は砂がち堆積物が卓越する。図には泥・砂・礫として一括して示してある。

本地域の中央を東西に走る断層が鹿島町の地形配置に大きな影響を与えており、その一つが宍道断層である。この断層は、松江市本庄町の北東、中海湖岸から坂本上、納戸東、納戸西、上講武の横立、七田の南方、南講武の南側へと続き、名分湯ノ藤山古墳の南を経て、佐陀川の流路沿いに西へ伸びる。ただ、講武川や佐陀川の平野部では、平野の堆積物に覆われているため、その位置は明瞭ではない。宍道断層は多井（1952）によって命名された右横ずれ断層で、実際の露頭では講武の南で走向N70°W、傾斜40°N、佐陀本郷でN70°W、60°Nと報告されている（小畑、1991）。活断層研究会（1980）によると、活断層 [200万年前から現在までの成る時期に活動し、将来も活動する可能性のある断層] とみなされている。宍道断層沿いには、ケルンバット、ケルンコルなど断層特有の地形が存在し、数本の谷に横ずれが認められる。これらの断層地形の分布を図4に示す。

鹿島町内には、宍道断層と平行してもう一つの横ずれ断層がみられる。宍道断層から北に約1km、

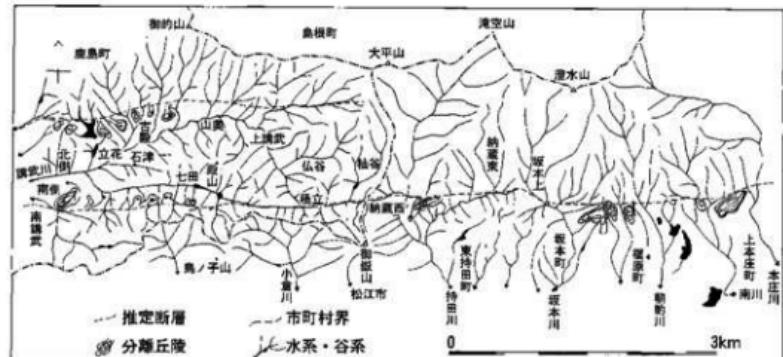


図4 鹿島町東部の断層と水系のずれ

大平山の南から古殿、立花、湯戸の藤山古墳の北を経て、佐陀本郷付近で宍道断層と接する。この断層は古殿断層と呼ばれ、やはり活断層とされている（活断層研究会、1980）。ケルンバット状の分離丘陵は認められるが、水系の横ずれはあまり顕著ではなく、宍道断層に比べてやや古い時期に活動したようにみえる。

（3）気象・気候

日本の気候区分において、島根県の気候は冬季に積雪の多い裏日本型気候に属すると考えられ、北陸など典型的な裏日本型気候に比べると冬季に積雪量がやや少ないとことから、山陰気候として区別されることが多い。近年では、裏日本型という呼称は用いられず、日本海岸気候と表記することが一般的である。実際には、山陰海岸地域は準日本海岸気候、あるいは日本海岸気候と太平洋岸気候との中間漸移地域として理解されるであろう。

鹿島町の月別平均気温と降水量を図5に示す。最寒月は1月で3.8℃、最暖月は8月の25.1℃、年平均気温は13.7℃、年較差は21.3℃である。温量示数 [月平均気温5℃以上の月について、各々5℃を減じた値を各月毎に積算したもの] は106.8となり、暖温帯に属する。

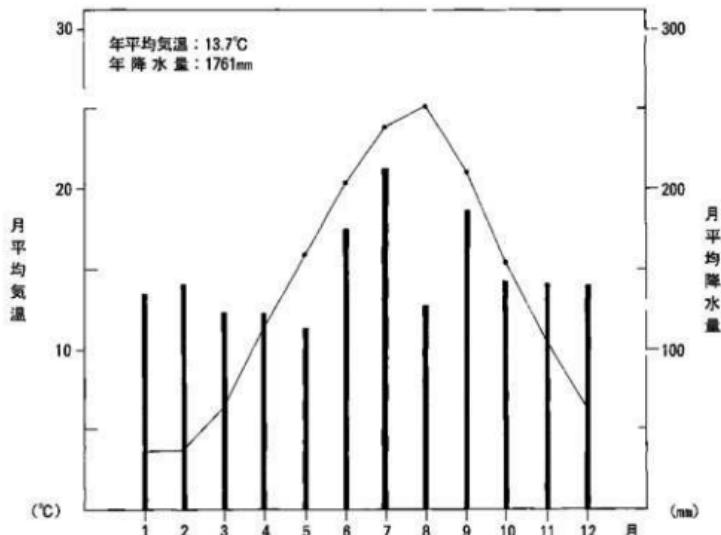


図5 鹿島町における月別平均気温と降水量（島根県気象月報より）
(気温は1979～1991年、降水量は1967～1991年の平均)

降水量についてみてみると、100mmを下回る月はなく、1年中平均して降水がある。年降水量の平均は1761mm。梅雨季と秋霖季がやや雨の多い季節で、冬季の降水量も太平洋岸に比べれば多い。春季と盛夏の降水量は少ない方である。年降水日数は155日、積雪日数は27日、年間日照時間は2000時間である。降水量1460mm、降水日数104日、日照時間1942時間の東京と比べれば鹿島町の雨量は多いが、日照時間は大差ない。鹿島町では冬季には晴天に恵まれないが、4~5月には東京より日照時間が多い。

表1 鹿島および周辺の気候資料（島根県気象月報による）

観測地点		鹿 島	松 江	浜 田	西 郡
平均気温℃	1月平均気温	3.8	4.0	5.7	3.9
	8月平均気温	25.1	26.2	26.0	25.5
	年平均気温	13.7	14.4	15.1	13.8
気温の極値℃	日最高気温	36.8	36.4	37.1	34.6
	起 口	S 53. 8. 20	S 53. 8. 01	S 53. 8. 01	S 53. 8. 01
	日最低気温	-9.8	-8.7	-7.3	-8.9
平均雨量mm	起 口	S 45. 1. 20	S 52. 2. 19	S 56. 2. 26	S 56. 2. 26
	1月平均雨量	136	144	108	156
	7月平均雨量	212	253	275	193
年雨量極値	年平均雨量	1761	1848	1729	1727
	年最大雨量(%)	2568	2604	2732	2132
	同 起 年	S 47年	S 47年	S 47年	S 47年
年雨量極値	年最小雨量(%)	1193	1141	1205	1015
	同 起 年	S 48年	S 48年	S 59年	S 48年
	年平均降水日数(日)	155.4	167.6	145.0	157.9
年平均積雪日数(日)		27.3	30.9	13.6	38.1
年平均日照時間(時間)		2000	2000	1981	2044
日平均風速(m/秒)		2.2	3.3	3.6	3.1

気温と風速については昭和54年から平成3年までの13年間の平均・極値。

その他は昭和42年から平成3年までの25年間の平均・極値。ただし、

欠測年が一例ある。降水日数は1%以上の降雨があった日。

年平均風速は2.2m／秒とあまり大きくない。これは観測地点の北講武が沿岸部ではなく、山間の盆地に位置するため、古浦など海岸部ではこの値より大きい。風向は年間を通じてSWやW成分が卓越する。山陰地方では冬季には北西季節風が一般的であるが、観測地点の地形的な影響から、SWやW成分が優勢である。

表1に鹿島および鳥根県各地の気候資料を掲げる。鹿島町の気候は気象台のある松江のそれと大きな違いはないが、浜田など鳥根県西部では積雪日や降水日数が少なく、太平洋岸気候に近い。

鹿島町における最近の年平均気温と年降水量の推移をそれぞれ図6と図7に示す。気温はこの十数年間、2~3年の周期で1~2°Cの変動を繰り返しているが、全体としては上昇傾向にある。降水量は変動幅が大きい。極大年と極小年で2倍以上の違いがある。年降水量の値は梅雨季の降雨の動向に強く規制されている。例えば、近年の最大降水を記録した昭和47年では梅雨末期の集中豪雨による雨量が、最大の渇水年、昭和48年には空梅雨であったことが年降水量に大きく影響している。

鹿島町周辺の気候の特徴をまとめれば、夏は暑く、梅雨時の雨量が大で、集中豪雨にみられることが多い。冬はあまり寒くなく雪も少ないが、曇天・雨天の日が多い。秋雨前線による降雨も多いが、台風による雨は稀ということになる。中村ほか(1986)は温湿度示数・積雪量をもとに、本州

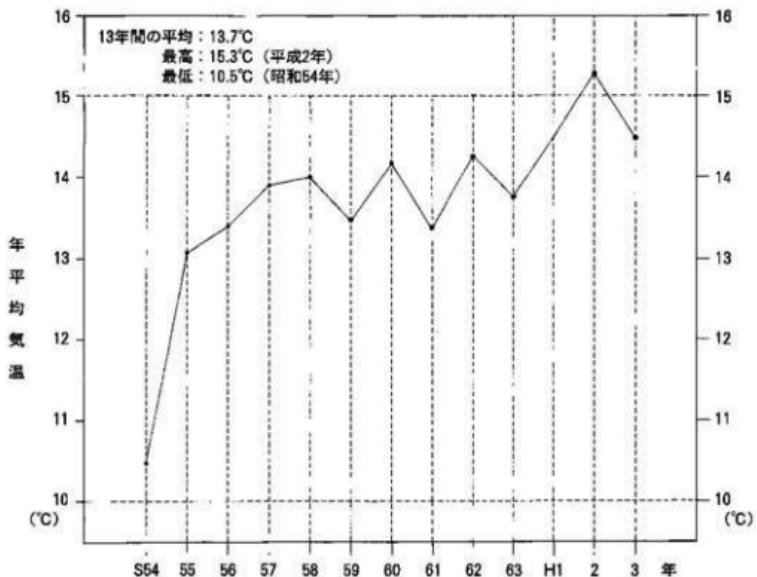


図6 鹿島町における年平均気温の推移(昭和43~平成3年):鳥根県気象月報より

を暖温帯として、サンベルト、スノーベルト、瀬戸内、内陸の4気候区に区分しているが、鳥取県西部から西は太平洋岸と同じくサンベルトに加えている。

なお、気象データは、鹿島町北講武の地域気象観測所（北緯35°31'00"、東経133°01'05"）の気象観測データを利用した。

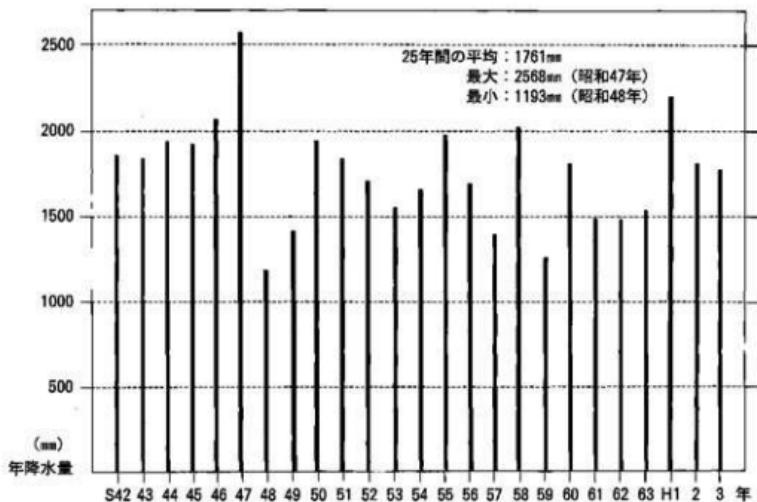


図7 鹿島町における年降水量の推移（昭和43～平成3年）：島根県気象月報より

（4）植生

島根県東部の横生分布を図8に示す。島根県は本州西南部にあたり、自然植生としては、低地の照葉樹林帯と高所のブナ帯に2分される。照葉樹林は常緑広葉樹を構成種とし、日本ではタブ林やシイ林、カシ林の三つの森林型が知られる。島根半島では、シイ林が点在する。半島部の山地・丘陵で優勢なものは、マツ＝常緑広葉樹林である。マツは常緑広葉樹林の二次林として形成されたものである。クロマツは海岸部で、アカマツはやや内陸側で卓越する。島根半島の日本海側の斜面ではクロマツ＝常緑広葉樹林が、南側斜面ではアカマツ・常緑広葉樹林となっている。クロマツは砂質海岸の防風・防砂林として人工的に植林されることが多い。谷底平野など平地では自然植生はほとんど見られず、水田・畑・集落となっている。

学術上価値の高い植生として、古浦の海岸西方に自生するモクゲンジ（ムクロジ科の落葉低木、実は数珠の珠に利用）があげられている（文化庁、1977）。



図8 島根県東部の植生（文化庁、1977より）

2 節 古浦砂丘の形成

(1) 鹿島町の平野の微地形と構成物の特徴

古浦砂丘の形成を考える上で、まず、鹿島町の平野の特徴とその形成過程について考察しなければならない。図9に地形分類図を示す。基本的には林(1991a, 1991b)行った宍道湖・中海沿いの平野における地形分類と大きな違いはない。鹿島町の平地は、名分の丘陵を境にして、東方の講武川上流のものと、西方の佐陀川下流部のもの、佐陀宮内より南の宍道湖に続くものの二つに分けられる。講武川上流のものは谷底平野で河川の浸食・堆積作用によって形成されたものである。小規模な谷底平野は支流の小谷沿いにも点々と存在する。佐陀川下流と宍道湖側には三角州が分布する。三角州は河川と海(湖)の両方の作用によって形成されたもので、その標高や形状から三角州Ⅰ面と三角州Ⅱ面に分けられる。三角州Ⅰ面は標高2~5m、谷底平野に連続するが、谷底平野面に比べると傾斜が緩やかである。内陸側では河川によって運搬された上砂に薄く覆われる所もあるが、下部には海成の泥層が存在し、非常に平坦な地形を呈する。三角州Ⅱ面は標高3m以下、現在の海岸・湖岸に統くもので、非常に平坦で洪水時には冠水しやすい低湿な土地となっている。出雲平野や松江平野では三角州Ⅱ面は三角州Ⅰ面より一段低く、三角州Ⅰ面を切り込んで形成されてお

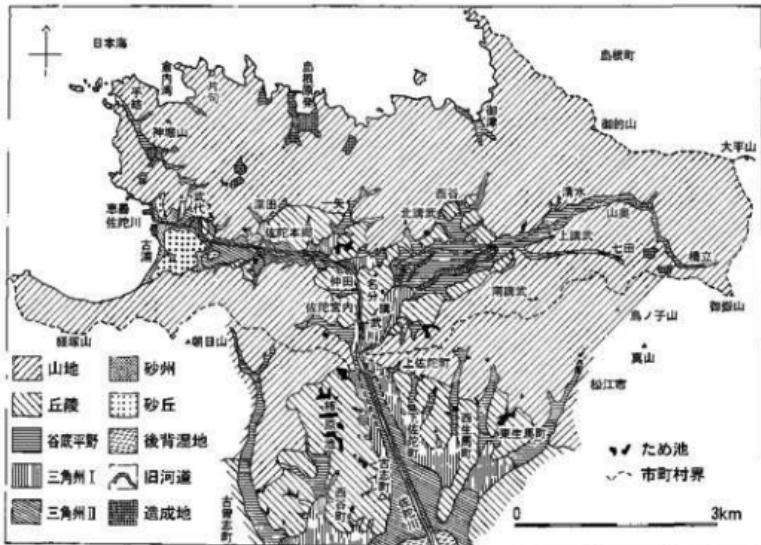


図9 鹿島町周辺の地形分類

り、両者の境界には数10cm～1mの比高の小岸が存在する地点もある。本地域ではこうした小岸はほとんどみられない。佐陀宮内付近で佐陀川両岸の比高の違いから、その行在が推定できる程度で、ほとんどの地域では水田の圃場整備によって、両三角州面の境界は明瞭ではない。三角州Ⅱ面が現在のように陸地化したのはかなり新しい時代で、『出雲國風土記』には池・潟地・潟湖の記述はあるが、三角州Ⅱ面上に位置する神社・寺院などの記載は全くない。条理製造構も三角州Ⅰ面上のものは報告されているが、三角州Ⅱ面上では見つかっていない。(鹿島町教育委員会、1986)。なお、穴道湖・中海では三角州Ⅱ面の前面に近世の新田や干拓地が広がる。

佐陀川下流や講武川沿いには後背湿地や旧河道がみられるが、自然堤防はほとんどみられない。河川の流域面積が小さく運搬土砂量が少ないためであろう。

佐陀川の河口には砂州・砂丘地が分布する。表面はいずれも未固結の粗い砂で覆われるが、標高5m前後に平坦な地形が帶状に取り巻いており、約5mまでが隆起砂州で、それより上が砂丘と判断される。砂州を構成する大量の砂を供給するような大河川の存在はこの付近にはないことから、砂は沿岸流による漂砂が貯まつたものであろう。砂州面は背後の三角州Ⅱ面とは比高2～3mの明瞭な小岸で境される。砂丘面には複数の小丘が海岸線と直交して東西方向に伸びる。砂丘の最高点は標高約25mに達する。

平野を構成する堆積物をボーリング資料からみると、次のようになる。平野地帯には第三系からなる基盤岩と切って谷状の地形が存在する。佐陀川沿いでは町役場付近で標高-15m、恵豊付近では-21mとなる。講武川沿いでは、松江市浜佐付近で標高-25m、名分の東で0mである。こうした谷は水期の低海水準に対応して形成されたもので、佐陀川河口部に向かって日本海へ流れるものと、講武川沿いに穴道湖へ向かい、松江方向からの谷と合流して大社方面へ流れる二つの谷がある。基盤岩の谷を覆って、厚さ数mの砂礫層が存在する。これを基底礫層と呼ぶ。最大4cmの円礫を含む河成の砂礫層である。

基底礫層の上には貝殻を含む軟弱な泥層が存在する。これは中海・穴道湖周辺の平野地下に広く分布しており、中海粘土層(小畠、1967)、中海層(水野ほか、1972)と呼ばれている。ここでは、中海層と呼ぶ。厚さは3～10m、穴道湖側の講武川河口では20mを超す所もある。中海層は約1万年前以降の海成堆積物で、三角州Ⅰ・三角州Ⅱ面の主要構成物である。古浦の海岸部では中海層相当の泥層は認められず、厚さ数mの砂層が卓越し、砂州を構成する。砂層の下には最大径7cm、平均2～3cmの礫を含む砂礫層と砂層の互層が存在する。これらの砂礫層は現在の海岸の最大疊高5cm、平均疊径1～2cmからみてやや粗粒である。砂層には貝殻細片が混入している。こうした砂礫層の形成時代は中海層と同時期で、いわゆる縄文海進に起因する高海水準に対応して形成された砂州と考えられる。縄文海進について、川雲平野では6000～5000年前に、海面は現在より3～4m(林、

1991a)、松江平野では同時期に2～3m(林、1991b)高かったという。白神(1987)も講武川沿いで約5000年前に2m高かったと報告している。この時期には、大社から宍道湖・中海・美保湾へと海が続き島根半島が島となっていた。

中海層の上面の標高は-2～-4mと起伏が小さい。中海層より新しいものを一括して上部層と呼ぶ。宍道湖側では上部層の泥中に有機物の量がやや増加するが、中海層との境界はあまりはっきりしない。一方、佐陀川の三角州Ⅱ面では中海層の上に厚さ3～5mの泥炭層や有機物を大量に含む泥層が存在する。これは現地では「オモカス」と呼ばれている。泥炭層上面の標高は0～+1.6mに達する。貝殻はほとんど含まれず、繩文海進以後の海退に対応して堆積したものである。この時期には繩文高頂期の海面は低下はじめ、汀線は現在よりも低い位置にあったと考えられる。こうした小海退期の時代は、出雲平野では3700年前から2600年前より後までつづき、2700年前に斐伊川の三角州が島根半島とつながり宍道湖が外海から切り離されたといい(林、1991a)、松江平野では2400年前以降に汀線が現在より1m低い位置にあり、意宇川平野では3200年前から2600年前より後まで海退期が続き、海水準は現在より2m以上低かったといわれ、低海水準に対応して三角州Ⅰ面を切り込む浅い谷が形成されたと報告されている(林、1991b)。こうした谷の存在は確認できなかったが、本地域でも海成層がみられないことからみて、3500～2000年前には2m前後の小海退期であったと推定される。上部層の最上部は河成の砂、粘土の薄層などの氾濫原堆植物や造成土・耕作土など人為的なものが覆う。

なお、講武川上流の平野では河成の砂礫層が基盤岩を直接覆う。その厚さは3～9mである。

(2) 古浦砂丘地の特徴

古浦砂丘は鹿島町の西端、古浦から恵雲、武代に広がる砂州の上に発達する南北1km、東西700mの砂丘地で、西部の海岸部に沿って集落が密集する。

砂州からなる地域は標高5m以下で比較的平坦な地形を呈する。人工的な改変によってその正確な原型ははっきりしないが、砂丘の平面形は西から東に伸びる細長い楕円状をなし、断面形は西側で緩やか、東側で急傾斜という非対称な形となっている。これは西側が風上、東側が風下であることを示唆し、砂丘は西風によって形成されたと考えられる。砂丘頂部の標高は20m前後に達し、東西方向に伸びる小丘と小丘の間には凹地も存在する。東西方向の断面から地形を詳細にみると、こうした小丘は単一の砂丘ではなく、最も東の内陸側の小丘の海岸側前面に標高10m前後のやや低い小丘が重なっているようにみえる。

古浦遺跡の発掘断面から、砂丘の構造が報告されている(小片、1956; 藤田、1983; 島根人文学考古学研究会、1983)。現在、発掘遺跡は残存しておらず、断面の上層の記載についてもまちまちで

あるが、遺物と土層との関わりは次のようにまとめられる。

砂丘上部から下位に向かって、

①層：新鮮な砂丘砂（厚さ5~10m）

②層：粘土混じり茶褐色砂土層／赤色粘土混じり砂層／褐色 古墳～奈良時代遺物

③層：灰黑色斑紋入り白砂層 弥生終～古墳時代遺物

④層上部層：貝粉混じり淡褐色斑紋入り白砂層／堅い灰褐色砂層 弥生中期遺物

④層下部層：貝粉混じり白砂層 弥生前期遺物

⑤層：下部灰褐色砂土層／黒色砂土層 無遺物層

これより下は不明であるが、⑥層の下は、おそらく海成の砂州層であると予想される。

武代浄水場付近の露頭で砂丘地の構成物を観察すると同時に、分析用の試料を採取した。この付近では、最上部にやや粗粒で無層理のルーズな砂層（試料番号92100831と92100824）が厚さ5m以上堆積する。その下に厚さ約10cmの土壤化をうけた暗灰色の細粒の層（92100823）があり、さらにその下部にはやや細粒で無層理の風成砂層（92100821）が厚さ3m以上にわたって分布する。土壤化をうけた暗灰色層とその下の風成砂層の間には、厚さ約30cmの淡黄色の斑紋入り黄褐色風成砂層（92100822）があり、その下の風成砂層に漸移する。試料採取地点と立地を表2に示す。これらの層位は従来の報告と対照すれば、それぞれNo.92100831と92100824が①層、No.92100823が③層、No.92100822が④層上部層、No.92100821が④層下部層に対比されると考えられる。

表2 鹿島町古浦付近の砂質堆積物の試料の採取地点

試料番号	色調（土色咲の色）	試料採取地点と層状			標高
92100811	暗灰黄 (2.5Y 5/2)	古浦海岸	前浜の汀没土	地表下20cm (多量の貝殻片を含む)	0.5m
92100812	オリーブ緑 (2.5Y 4/3)	古浦海岸	後浜 地表下20cm	(多量の貝殻片を含む)	1m
92100831	オリーブ緑 (2.5Y 4/6)	古浦砂丘地	最上部風成砂層	(厚さ5m以上:貝殻片を含む)	15m
92100824	黄褐 (2.5Y 5/4)	古浦砂丘地	最上部風成砂層の下部	(貝殻片を含む)	12m
92100823	暗灰黄 (2.5Y 4/2)	古浦砂丘地	黒褐色土壤混じり砂質土	(厚さ10cm:貝殻片を含む)	11m
92100822	黄褐 (2.5Y 5/6)	古浦砂丘地	斑紋入り風成砂層	(厚さ30cm:貝殻片を含む)	11m
92100821	黄褐 (2.5Y 5/4)	古浦砂丘地	風成砂下部層の上部	(厚さ3m以上)	10m

海成砂と風成砂を比較するために現在の古浦海岸の前浜、後浜からも砂質試料も採取し、それらの特徴を把握するために粒度分析と鉱物分析を行った。充分に乾燥させた試料、約100 gを取り、水洗いして細粒物質を除去した。粒度分析は標準筋 $1/2\phi$ 毎にふるいわけ、それぞれを秤量し、百分比を求めた。鉱物分析は粒径3~3.5 ϕ (88~125 μ) の砂粒を偏光顕微鏡下で観察した。

表3および表4はこれらの砂層の試料全体についての粒度分析の結果である。③層と④層上部層はやや細粒でシルト・粘土分が多く含まれていることは分かるが、平均粒径、淘汰度など海岸の砂と風成砂とが識別できるほど明瞭な特徴は認められない。そこで、小礫や細粒分を除き-1 ϕ ~1

表3 広島町古浦付近の砂質堆積物の粒度組成(全試料)

測定試料 試料番号乾燥重量 (g)	粒度別割合 (%)											
	$\geq 4\phi$	$\sim 330\mu$	$\sim 200\mu$	$\sim 140\mu$	$\sim 100\mu$	$\sim 71\mu$	$\sim 59\mu$	$\sim 35\mu$	$\sim 25\mu$	$\sim 17\mu$	$\sim 12\mu$	$\leq 6\mu$
-2 ϕ	-1.5 ϕ	-1 ϕ	-0.5 ϕ	0 ϕ	0.5 ϕ	1 ϕ	1.5 ϕ	2 ϕ	2.5 ϕ	3 ϕ	3.5 ϕ	4 ϕ
92100811 102.359	-	-	0.47	1.92	2.51	1.29	1.26	5.39	26.37	45.10	14.83	0.72
92100812 100.540	-	0.06	0.19	0.99	2.98	3.26	3.81	12.66	33.60	35.52	5.94	0.59
92100831 98.354	-	-	0.00	0.03	0.06	0.20	1.42	14.44	53.71	28.16	1.65	0.16
92100824 102.392	0.09	0.05	0.02	0.03	0.04	0.11	0.62	5.66	43.32	43.29	4.02	0.40
92100823 99.550	-	-	-	0.01	0.01	0.06	0.33	3.66	30.39	43.98	6.03	1.17
92100822 103.300	-	-	0.02	0.01	0.04	0.12	0.70	5.18	34.43	41.20	4.38	0.70
92100821 97.573	-	-	-	-	0.01	0.07	0.66	4.97	32.75	56.23	3.95	0.48

$\phi = \log(D/D_0)$: D : D₀は粒径 (mm)

表4 広島町古浦付近の砂質堆積物の粒度特性(全資料)

試料番号	ϕ_s	ϕ_{s0}	ϕ_m	ϕ_u	中央粒径		淘汰度 $\mu\phi$	垂度 $\alpha\phi$	尖度 $\beta\phi$
					Md ϕ	M ϕ			
92100811	-0.21	1.31	2.25	2.61	1.87	1.78	0.47	-0.19	2.00
92100812	-0.14	0.94	2.12	2.41	1.64	1.53	0.59	-0.19	1.16
92100831	0.86	1.18	2.00	2.20	1.57	1.59	0.42	0.05	0.60
92100824	1.11	1.36	2.14	2.47	1.75	1.75	0.39	0.00	0.74
92100823	1.27	1.45	2.71	4.39	1.93	2.08	0.63	0.24	1.48
92100822	1.15	1.39	2.51	4.36	1.87	1.95	0.56	0.14	1.87
92100821	1.18	1.41	2.15	2.29	1.85	1.78	0.37	0.19	0.50

ϕ_s : 標算重量 5%時の粒径 (ϕ 値)

Md ϕ : ϕ_m

M ϕ : $(\phi_u - \phi_m)/2$

$\sigma\phi$: $(\phi_u - M\phi)/\sigma\phi$

$\alpha\phi$: $(M\phi - Md\phi)/\sigma\phi$

$\beta\phi$: $\{(\phi_u - \phi_s)/2 - (\phi_u - \phi_m)/2\}/\sigma\phi$

の粒度についてだけを統計処理したのが、表5および表6である。中央粒径や平均粒径では大きな違いは認められないが、淘汰度と尖度の値からみると砂丘地のものと海岸の砂とに明瞭な差がある。すなわち、砂丘地の砂はすべて淘汰度0.40以下で海成砂に比べて砂粒の選別が良好であり、尖度においても、海成砂が1.0以上で砂丘地のものは0.75以下となっている。正規分布の時の尖度は0.65であることから、砂丘地のものは成る粒径に非常に集中しているといふことがいえる。実際、粒径0.3~0.2mmのものが80%以上にも達している。また、細粒分を除くと③層と④層上部層も風成

表5 鹿島町古浦付近の砂質堆積物の粒度組成（-1φ~4φの粒径だけ）

試料番号	粒径別重量比 (%)										合計 (g)
	~2000μ -1φ	~1410μ 0.5φ	~1000μ 0φ	~710μ 0.5φ	~500μ 1φ	~350μ 1.5φ	~250μ 2φ	~177μ 2.5φ	~125μ 3φ	~88μ 3.5φ	
92100811	0.48	1.93	2.51	1.29	1.26	5.40	26.39	45.13	14.87	0.72	0.05 102.271
92100812	0.19	0.99	2.99	3.27	3.63	12.71	33.73	35.66	5.96	0.59	0.08 100.154
92100831	0.00	0.03	0.06	0.20	1.42	14.45	53.77	28.19	1.65	0.16	0.06 98.246
92100824	0.02	0.03	0.04	0.11	0.61	5.80	44.36	41.33	4.11	0.41	0.22 100.008
92100823	-	0.01	0.01	0.06	0.38	4.26	35.34	51.16	7.02	1.36	0.40 85.580
92100822	0.02	0.01	0.05	0.13	0.80	5.94	39.48	47.24	5.02	0.80	0.51 90.092
92100821	-	-	0.01	0.07	0.67	5.00	32.98	56.62	3.98	0.49	0.20 96.915

$\phi = -\log_{10} D$: Dは粒径 (mm)

表6 鹿島町古浦付近の砂質堆積物の粒度特性（-1φ~4φの粒径だけ）

試料番号	ϕ_z	ϕ_m	ϕ_u	ϕ_n	中央粒径 Mdφ	平均粒径 Mφ	淘汰度 $\sigma \phi$	重度 $\alpha \phi$	尖度 $\beta \phi$		
										Mdφ : ϕ_m	Mφ : $(\phi_m + \phi_u) / 2$
92100811	-0.22	1.31	2.25	2.61	1.87	1.78	0.47	-0.19	2.01		
92100812	-0.12	0.94	2.12	2.39	1.64	1.63	0.59	-0.19	1.13		
92100831	0.86	1.24	2.00	2.19	1.56	1.62	0.38	0.16	0.75		
92100824	1.11	1.36	2.12	2.25	1.74	1.74	0.38	0.00	0.49		
92100823	1.25	1.41	2.18	2.52	1.85	1.80	0.39	-0.13	0.63		
92100822	1.09	1.36	2.15	2.38	1.79	1.76	0.40	-0.08	0.61		
92100821	1.18	1.41	2.15	2.25	1.85	1.78	0.37	-0.19	0.45		

ϕ_z : 算定重量 5% の時の粒径 (ϕ 値)

Mdφ : ϕ_m

Mφ : $(\phi_m + \phi_u) / 2$

$\sigma \phi : (\phi_u - \phi_m) / 2$

$\alpha \phi : (Md\phi - M\phi) / \sigma \phi$

$\beta \phi : ((\phi_n - \phi_z) / 2 : (\phi_n - \phi_m) / 2) / \sigma \phi$

砂の範囲に入る。土壤化などの影響を受けているが本質的には上下の風成砂と同じ母材である。図10に示した累加曲線の形態からみても風成砂同士の類似性や風成砂と海成砂との違いは明らかであろう。

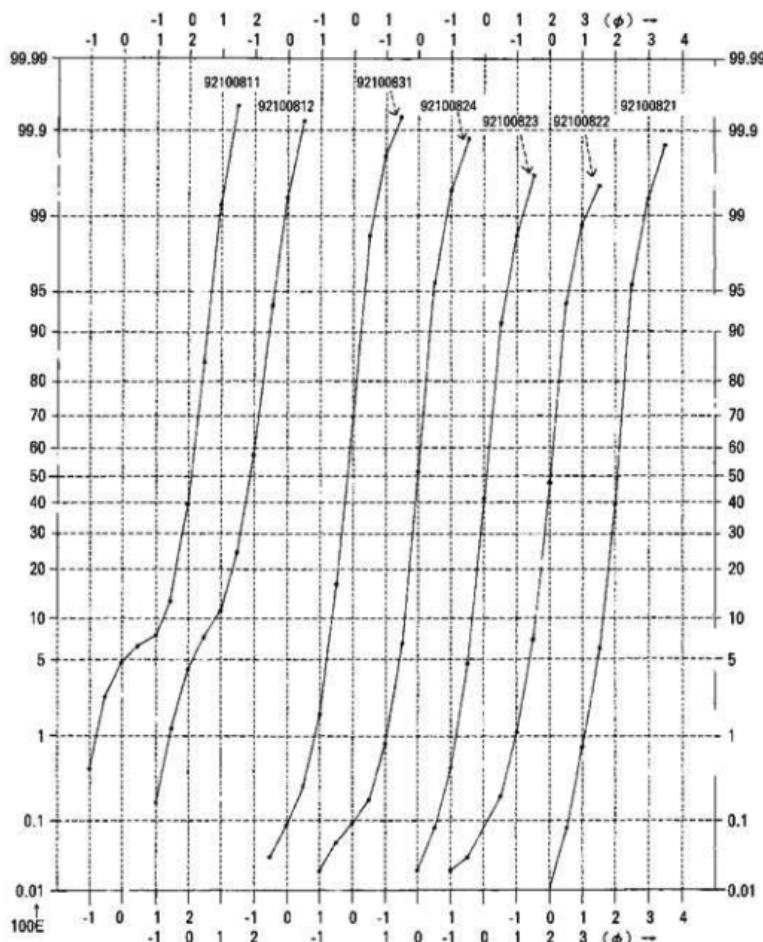


図10 古瀬付近の海成・風成砂の正規確率紙上の粒径累加曲線
($-1 \phi \sim 4 \phi$ の粒径だけ)
92100811と92100812が海浜の砂。

次に砂粒を構成する鉱物の観察結果についてみてみる。砂粒の形としては、角ばっているものが多く、表面が磨耗されて丸くなつたものは、風成砂と海成砂いずれにも少ない。貝殻など生物遺骸が混在している。鉱物組成の分析結果を表7に示す。1試料について約400粒を観察したが、表面が風化して判別困難なものが多く、それらを除いて集計してある。全般的に石英・長石類などの軽鉱物が大部分を占める。特筆すべきは、少量ながら火山ガラスが含まれていることである。ガラスの屈折率・成分分析などは行なっていないが、透明で扁平な形状のものが多く、いわゆるバブル=ウォール型に属することから、鬼界アカホヤ火山灰（K-A h）起源のガラスと考えられる。アカホヤ火山灰は九州の南、鬼界カルデラから今から約6300年前に噴出したといわれる（町田・新井、1978）。④層上部層に多く含まれる他、①層・③層・④層下部層にも少量存在しており、アカホヤ火山灰の噴出は④層下部層形成中あるいはそれよりも古いといえる。すなわち④層下部層の堆積は今から6300年前以降のことと考えられる。

表7 鹿島町古浦付近の砂質堆積物の鉱物組成（3φ～3.5φの粒径の百分比）

試料番号	鉱物別組成 (%)						鉱物粒計
	a.p	gl	bi	hb	opx	cpx	
92100811	74.0	-	13.0	2.8	0.6	7.9	0.6 177
92100812	63.1	0.5	9.4	10.8	5.9	5.9	4.4 203
92100831	81.3		6.3	3.5		9.0	- 144
92100824	74.9	5.7	8.6	2.9	-	6.9	1.1 175
92100823	82.0	1.2	7.0	5.8	0.6	3.5	- 172
92100822	66.8	21.9	4.6	5.1	1.0	0.5	- 196
92100821	78.5	2.5	9.5	5.0		4.0	0.5 200

q.p：石英および長石 gl：火山ガラス bi：黒雲母 hb：角閃石
opx：斜方輝石 cpx：单斜輝石 mt：鉄鉱物

註) 1試料について、約200粒を検鏡したが、風化物・生物遺体など鉱物判定ができない粒を除いて百分比を求めた。

火山ガラスを含めた軽鉱物の割合は風成砂では80%以上を占めており、海成砂に比べてやや高い値となっている。重鉱物より軽鉱物の方が風で移動しやすく、やはり風による選別作用を反映したものであろう。

以上をまとめてみると、古浦地区の砂丘は砂州上にのる海岸砂丘で、時代を異にする何枚かの風成砂が重なった累重砂丘である。主として、西風によって形成されたものである。砂丘の構成物は海岸の砂州からの砂を供給源とし、風による移動・運搬によって堆積したものである。ただ、堆積するまでにそれほど長い距離を運ばれてはいない。形成時代についていえば、少なくとも遺物の出土する④層下部層の形成は縄文前期以前にさかのぼることはない。③層にみられる腐植の存在は砂丘の安定期を示し、風向・風速の変化などによって砂の移動量が少ない時期があったことを示す。その後、再び砂の移動・運搬が起こり、①層が堆積したことになる。

今回の調査では、古浦砂丘の形成期について、必ずしも十分に考察できたとはいえない。そこで他の地域での研究例との比較検討をしてみる。

日本には海岸砂丘が点在し、研究例もかなり多い。地域や場所によって形成条件や形成期がかなり異なるが、いずれも海岸沿いに発達する海岸砂丘で、海岸の砂州や浜堤の存在が砂丘の形成に大きく関与していること、海岸線と平行に数列の砂丘が配列したり、古い砂丘が新しい砂丘砂に覆われて累重構造を示すなど、いくつかの異なる砂丘形成期・固定期の存在することが知られている。砂丘の形成期は井関（1975）によって次のように二分されている。一つは古砂丘で洪積世に形成されたもの、次に旧砂丘は縄文前期の海進時およびそれ以前の先新世の砂丘、三つめは新砂丘で古墳時代以降に形成されたものである。旧砂丘と新砂丘の間にはクロスナと呼ばれる黒色（黒褐色）土壌が挟在するが多く、その時代は約2000年前で砂丘の固定・安定期を示すという。場所によってはクロスナ層が複数存在し、新砂丘もさらに細分されている。

鳥取から北条～弓ヶ浜～出雲の砂丘地を調査した豊島（1975）は先新世の砂丘を次の4つに区分した。古いものから、新砂丘Ia（形成期は縄文時代）、新砂丘Ib（古墳時代）、新砂丘IIa（中世）、新砂丘IIb（近世以降）。IaとIbの間にクロスナa、IbとIIaの間にクロスナb、IIaとIIb間に黄色風化の土壌が挟在し、それぞれ砂丘の安定期を示すという。クロスナaは弥生時代に、クロスナbは古墳時代後期に対比されている。また、砂丘の形成期は海水準と密接な関係をもち、砂丘形成の少し前にそれぞれ異なる砂州が形成されたと報告している。新砂丘Iaは井関（1975）のいう旧砂丘に相当する。

これらの研究例から古浦砂丘をみてみると、④層が旧砂丘に、③層がクロスナaに対応するようみえる。①層は層相が若干異なるが、層準的にはクロスナbに対応しそうである。低海水準期が砂丘固定期でクロスナなど土壌が形成され、その前の時期、高水準にあった海面が低下する時期が

砂丘形成期に相当していることになる。⑤層の黒褐色土についてははっきりしないが、出雲砂丘地にみられる4700年B.P.の泥炭層（林、1991a）に相当する可能性がある。

（3）平野の古地理の変遷と古浦砂丘の形成

平野の地形からみた最近1万年の古地理の変遷と古浦砂丘の形成は次のようにまとめられる。

1万年前までは氷期の低海水準に対応した谷が形成されていた。西方の佐陀川沿いに日本海に流下する水系と講武川沿いに南流して宍道湖方面へ向かう水系の二つがあった。

1万年前から海面は急激に上昇を始める。いわゆ黄繩文の海進で、氷期に形成された谷は溺れ谷となり、島根半島は本土から切り離された島となる。海進のピークは6000～5000年前で、宍道湖側からは、名分の七日市のやや北まで、忠臣側から仲田付近まで海が湾入していた。佐太講武貝塚のやや南付近で両湾がわずかに隔てられていたと考えられる。湾内にはシルト・粘土が沈殿し中海層が堆積する。高海水準に対応して、古浦付近に砂州が形成された。砂州の一部はこの時期に離水していたようである。

高頂期が終わり、海面が後退し始めると砂州の大部分が離水し、表面の砂は西風で運ばれ背後に堆積して砂丘を形成した。これが④層に相当する。砂丘形成は高頂期の直後に始まったであろう。海面の後退によって、内湾の奥の方では中海層の一部が陸地化し、三角州Ⅰ面が形成された。

海面は後退を続け、3500～2000年前の或る時期に小海退のピークを迎える。低海水準に対応して松江平野などでは三角州Ⅰ面を刻む小谷が形成されるが、この付近では明瞭ではない。この時期の汀線は宍道湖側では松江市との町境よりやや南方に、佐陀川沿いでは現在の海岸線よりやや西方にあったと推定されるが、古浦付近の砂州・砂丘が堰止めの形で障害となっているため、砂州の東から佐陀木郷一帯にかけては浅い沼状の池が存在した。気候的にやや寒冷であったことと、こうした低温な条件下で、泥炭（オモカス）が堆積した。古浦付近の砂丘の砂の移動は減少し、埴生が被覆することによって砂丘が固定化し、土壤が形成された。これが③層に相当する。

弥生時代が終わると海面はほぼ現在と等しくなり、古墳時代までの或る時期に再び砂丘の移動・形成があった（②層）。平野部では大きな変化は認められず、内湾や池沼の埋積が少しづつ進行して、三角州Ⅱ面の形成が始まっていた。

奈良時代の海水準についてははっきりしないが、およその状況は「出雲國風土記」の記述から考察できる。現在の講武川は鳥根郡側では多久川、秋鹿郡側では佐太川と呼ばれ、宍道湖に接する佐太水海（さだのみづうみ）に注いでいる。佐太水湖の周囲は3.74kmされており、現在の松江市浜佐陀の「潟の内」と呼ばれる潟湖が以前はひとまわり大きな湖であったことが分かる。図9の南端中央部にある後背湿地が湖水面に該当する。佐太川下流部には河川の存在は全く示されておらず、

周囲3.2kmという恵曇陂（えとものつつみ）が記載されているだけである。弥生時代からの池沼の状態が続いているようである。その深さは明記されていないが、蓮が枯れたりしている記述からみて、泥沼状の低湿地であったと考えられる。佐陀川下流部およびその支流の谷には、ほかにも深田池、杜原池、峰崎池、佐久難池など周囲数百mの小さな池が点在していた。古浦地域は恵曇浜と呼ばれ、広さ1.4kmとされている。恵曇の北端から古浦の南端までの海岸（延長約1.2km）を指しているが、白砂が積もると記載されることからみて、砂丘の移動・形成期に当たる（①層に相当）と推定される。穴道湖側では、この時期までに一角州Ⅱ度のほとんどが陸地化している。

中世の古地理は明らかでないが、近世初頭までは佐陀川下流部の沼沢地は残存していたようである。現在のような姿になるのは近世になってからである。特に清原太兵衛による大明8年（1788）完成の佐陀川運河の開削によって、沼沢地が排水され新田開発が進んだことが大きい。

なお、「出雲國風上記」の記載については、秋本（1958）、加藤（1981）を参考にした。

引用文献

- 秋本吉郎校注（1958）：出雲國風土記『日本古典文学大系2風土記』、岩波書店、93-256。
井関弘太郎（1975）：砂丘形成期分類のためのインデックス、第四紀研究、14、183-188。
小片 保（1956）：『出雲國八束郡恵曇町古浦砂丘遺跡発掘報告』、米子、1-24。
小畠 浩（1967）：中海・宍道湖付近の第四系と地形発達史、第四紀研究、6、69-78。
小畠 浩（1991）：『中国地方の地形』、古今書院、262P。
鹿島町教育委員会（1986）：『鹿島の遺跡小集 第2集一』、10P。
活断層研究会（1980）：『日本の活断層』、東京大学出版会、363P。
加藤義成（1981）：『修正出雲國風上記参考』、今井書店、545P。
鳥取県（1972）：『土地分類基本調査—5万分の1 東山・今市一』、50P。
鳥取県（1974）：『土地分類基本調査—5万分の1 横江一』、59P。
鳥取県（1980）：『土地分類基本調査—5万分の1 美保關・境港一』、44P。
鳥根大学考古学研究会（1983）：『宮田考古』no. 16、1-19。
白神 宏（1987）：FeS₂含有量からみた穴道南北岸低地における完新世海水準変動、日本地理学会予稿集、no. 31、84-85。
多井義郎（1952）：鳥取半島中央区の編序と構造 一鳥取半島第三紀の地質学的研究（その1）、地質学雑誌、58、573-583。
多井義郎（1973）：いわゆる穴道褶曲帯について、地質学論集、9、137-146。
青島占則（1975）：山陰の海岸砂丘、第四紀研究、14、221-230。
中村和郎・木村充治・内崎善兵衛（1986）：『日本の気候』、日本の自然 5、岩波書店、237P。
林 正久（1991a）：山陰平野の地形発達、地理学評論、64（A）、26-46。
林 正久（1991b）：松江周辺の沖積平野の地形発達、地理科学、46、55-74。
藤田 等（1983）：島根県古浦遺跡、「日本の弥生遺跡」、284-289。

- 藤原健藏（1972）：鳥取県弓ヶ浜半島の発達過程、船越謙策教授退官記念事業会編『地理科学の諸問題』、180-185。
- 文化庁編（1977）：『地図・主要動植物地図32島根県』、国土地理協会、31P。
- 町田 洋・新井房夫（1978）：南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ — アカホヤ火山灰、第四紀研究、17、143-163。
- 水野薫行・大崎和男雄・中尾征三・野口寧世・正岡栄治（1972）：中海・宍道湖の形成過程とその問題点、地質学論集、no. 17、113-124。

第2章 歴史的環境

縄文時代 佐太講武貝塚が現在鹿島町域内で知られる最も古い遺跡であり、1933年に史跡指定を受けている。この貝塚では、貝塚本体は縄文時代前期の所産と判明した¹が、貝層に面する低湿地部での調査²では、貝層に対応する層とそれ以後の中期、後期、晚期、弥生時代、古墳時代にわたる遺物包含層が、良好に残存することを確認している。

貝塚を構成する貝は、ほとんどが汽水性のヤマトシジミで占められ、海水産の貝はわずかである。このことから貝塚が形成された縄文時代前期、周辺部が汽水湖としてこうした貝の成育に適した環境にあったことが知られる。この汽水湖は、後の「出雲國風土記」にいうところの 佐太水海³、
えとものんみ「惠靈波」の前身と考えられ、貝塚は南北に
それぞれ汽水域をひかえる分水嶺に位置しており、地形的にも卓越した地点にあることがわかる。こうした汽水域からヤマトシジミを中心とする貝類を採取する一方、貝層中には堅果類の果皮が大量に含まれ、周辺の山野で堅果類をもとめていたことが明らかになった。また、篩選別の結果、貝層中には海水産の魚よりも、コイ、フナ科の魚骨が大量に含まれ、魚類についてもヤマトシジミの採取と類似した水系での漁労活動が推定できる。しかし、貝塚を形成した人々の集落そのものはまだ明らかでない。

鹿島町域内の縄文時代の様子は佐太講武貝塚を除いてまだよく判明していない面があるが、塙部第1遺跡⁵で多数の後期土器と晚期系の突帯文土器が、北講武氏元遺跡⁶でも晚期系の突帯文土器が出土するなど、徐々にその姿を見しつつある。

弥生時代 弥生時代には北講武氏元遺跡で遠賀川系の弥生土器が出土し、講武盆地を舞台



図1 北講武氏元遺跡出土土器

に初期水田が開発されたことが想定される。ここでは遠賀川系の弥生土器とともに縄文晩期系の突帯文土器が出上しており、遠賀川系の上器を使うひとびとと突帯文系の上器を使うひとびとがともに集落を形成していた可能性がある。北講武氏元遺跡から300mの堀部第1遺跡は、北講武氏元遺跡に暮らした人々の墳墓と考えられる遺跡である。弥生時代前期の約60基からなる集団埋葬が検出されている。ここでは墓壇内に木棺を組み、その上面を数個から百数十個の石材で覆う様石木棺墓とも称すべき墳墓が、長者の墓と呼ばれる円丘を取り囲むようにつくられていた。集落では遠賀川系と突帯文系の両者の土器を使いながら、墳墓には遠賀川系の土器のみを供獻しており、興味深い。

北講武氏元遺跡では、弥生時代の時期を異にして掘削された灌漑用と考えられる水路群、古代と中世の水田面も検出している。ここでは、時期が降るに連れて沖積して高くなる水田面に対応して、高所へ水路が移ってゆく様が明らかになっている。

古浦砂丘内側の潟湖を『出雲國風土記』は「恵譽波」と伝える。この恵譽波の南岸の山腰には、銅鐸2、銅劍6を埋納した志谷奥遺跡⁵がある。銅鐸は、外緣付紐1式四区袈裟襷文のものと、偏平紐式四区袈裟襷文のもので、銅劍はいずれも中広形に属する。周辺の集落での祭祀に使用されたものと考えられる。偶然の機会に発見されたものであるが、調査によって埋納場が検出されている。また、大量の木製品を検出した稗田遺跡⁶が、やはり「恵譽波」の西岸にあり、ここでは農具、

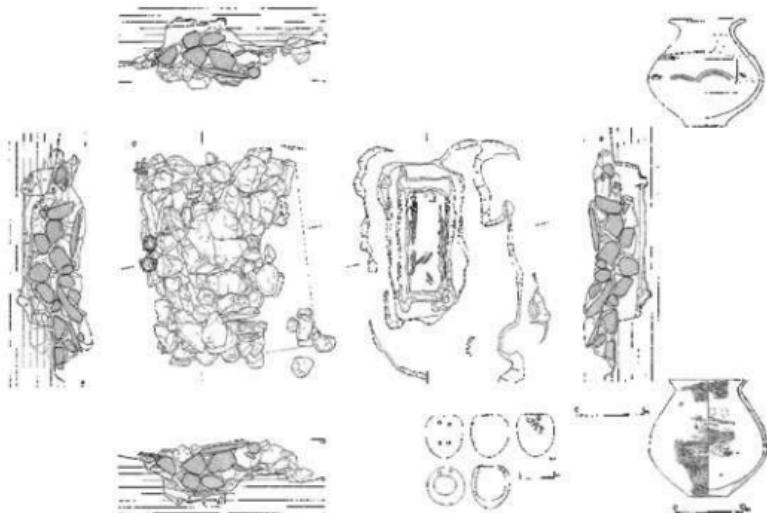


図2 堀部第1遺跡 5号墓

- 古瀬遺跡
- 佐久間遺跡
- 高瀬遺跡
- 七瀬遺跡
- 木曾川遺跡
- 横田遺跡
- 佐久原遺跡
- 名瀬田遺跡
- 阿賀子小瀬遺跡
- 前田遺跡
- 南木曾川遺跡
- 藤子古墳群
- 名木曾古墳群
- 中ノツク古墳群
- 向山古墳群
- 躑躅古墳
- 須坂古墳
- 箕谷古墳
- 山古墳群
- 山之手古墳
- 新村古墳群
- 今井根穴古墳
- 地藏塚穴古墳
- 天神塚穴古墳
- 御井塚穴古墳
- 鶴見山塚
- 大瀬山塚
- 舟山塚
- 下伊勢塚
- 北伊勢塚



図3 古瀬遺跡と周辺の遺跡 (1/50000)

建築材など多数が出土している。木製品には那材や準構造船材も含まれており注目された。状況からはこの遺跡に隣接して集落が存在するものと考えられる。断続はあるものの、縄文晩期から古墳時代前期までの遺物が出土しており、「恵譽波」周辺での初期農耕の成立があった可能性がある。墳墓である古油遺跡に対応する集落である可能性も考慮される。

講武盆地南西端に位置する大字佐陀宮内にも弥生前期からの佐太前遺跡⁷が存在する。部分的な調査しか経ていないが、各時代にわたる大量な遺物、遺構が存在するようで、付近の拠点集落とも目される遺跡である。その一方で、弥生時代では前期の遺物のみを出土した佐太講武貝塚低湿地部、中期の遺物のみを出土した名分塚田遺跡⁸など、拠点集落からの分村を行ながらもごく短期間で撤退したと考えられる遺跡もあり、水田可耕地の開発は曲折を経ながら進行したものと考えられる。

その他、四隅突出型埴丘墓の可能性のある南講武小窓遺跡⁹が知られ、また弥生時代末から古墳時代前期の近畿系の土器が大量に出土した南講武草田遺跡¹⁰が知られている。南講武草田遺跡では近畿系を中心とする搬入土器が大量に出土しており、弥生時代終末、かなりの人数の集団がこの地を訪れたことが想定される。こうした直接的な交流を経て、地方が古墳時代を迎えるものと考えられる。

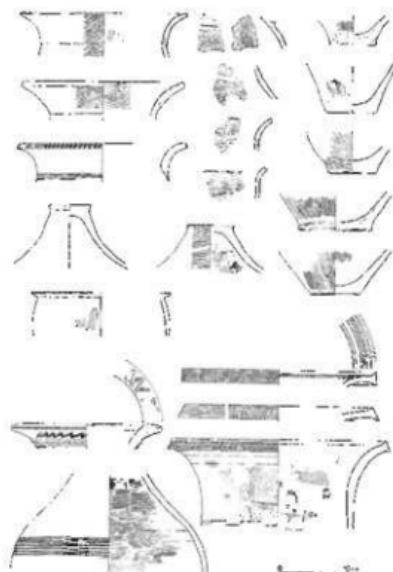


図4 佐太前遺跡出土土器

一方、佐太講武貝塚低湿地部では、縄文晩期前半に相当する層から朝鮮半島の孔列文土器の影響を受けて製作されたと考えられる上器が、また、鹿島町沖の日本海海底からは東洋郡製と考えられる瓦質土器が引き揚げられるなど、日本海に面する島根半島の位置を象徴する遺物もある。

古墳時代 古墳時代を迎えると、講武盆地を中心に水田を見下ろす丘陵上には奥才占墳群¹¹をはじめ、累々と古墳群が築かれている。古墳は前期から後期までを通じての築造が確認できる。奥才占墳群では、確床と呼ぶ小石敷き箱式石棺や木棺を主体部とする。この占墳群には、内向花文鏡、方格文鏡、石劍や紡錘車型石製品など、優秀な副葬品をもつものがあった。一方、「奥才型木棺」と仮称している長い襖敷きの木棺を2~3室に区切った

木棺は、この島根半島と九州北部、丹後、但馬にはば分布が限られており、海上交通を通じての交流を端的に表わすものと考えられる。奥才古墳群第8支群³では、奥才古墳群本体に先行して築造されていることが判明している。

奥才古墳群と水田をはさんで向かい合う独立丘陵には10余基からなる鶴瀬山古墳群³が知られている。この古墳群中には柄鏡形の墳丘をもつ前方後円墳があり、前期にまで遡る可能性があるほか、群構成も奥才古墳群に類似しており注目される。さらにこの北の丘陵上には、7基からなり、全長約40mの前方部の大きく開く古式の墳丘をもつ名分丸山古墳群⁴が知られており、高い密度で古墳の分布することが明らかになりつつある。

これらをはじめ、周辺の古墳群で主体部の判明するものでは、奥才古墳群と同様に礎床や箱式石棺あるいはその両者を採用するものが多く、箱式棺を有し、鉄劍等を出土した中ノソラ古墳⁵など、前期から後期前半代にまで古墳群毎に若干の時期差を有しながらも築造されており、非常に強い齊一性を示している。また、講武地区には70mを超える前方後円墳である可能性が高い堀部1号墳⁶が知られている。その他の地区では単独墳が主で群を成すとしても、2～3基程度のよう、安定した水田を有する講武地区が卓越した生産力を有していたものと考えられる。後期にいたってもこの傾向は変わらず、やはり講武盆地に、横穴式石室を有していたと伝えられ、鉄劍や須恵器等持蓋を出土した向山古墳⁷、切石造りの石棺式石室である岩屋古墳⁸などの首長墓が築かれる一方、各地に横穴墓が営まれる。20穴以上からなる寺の奥横穴群、丸天井形の寺尾横穴群、整正家形の恵谷横穴群などをはじめ、非常に多い。横穴墓群の分布からは古墳時代後期の段階には、現在の集落の原形がすでに成立しているものと考えられる。

歴史時代 『出雲國風土記』の著された8世紀代には当町は島根郡、秋鹿郡にまたがり、古浦遺跡は秋鹿郡寒雲郷に、講武盆地は島根郡の余戸里や生馬郷の一部に含まれるようである。平安時代末には、佐太神社の周辺は安来寺院に寄進され、佐陀社が成立する。『風上記』に「佐太御子社」とみえる佐太神社は、山城国一宮である熊野大社に次ぐ二宮であり、古代末から中世にかけて大きな勢力を誇っていた。鎌倉時代初期に佐陀社の下に職に補任された朝山氏は、承久の乱後、佐太神社神主を兼ね、莊園支配の実務にあたったと考えられる⁹。この朝山氏は佐陀氏を名乗り、南北朝期には佐陀城（芦山城か）に拠り、戦乱に巻きわっている。佐陀社は戦国末期には、尼子氏にかわって勢力をはった毛利氏の支配下に入り、毛利家臣による所領分割によって蚕食され、莊園としての体制は失われていくようである。南北朝期から戦国期にかけての戦乱に際して、この一帯にも多くの山城が築かれており、殿山・海老山・大勝間・芦山・池平城跡など、相当の規模をもつものもある。このうち大勝間山城は、史料としての信憑性は低いが、『陰徳太平記』といった軍記物に名前が見えている。

この頃には農・漁業の他に海岸部の恵譽・古浦地区では製塩が行われていたことがわかるほか、船便を利用した交易もあったことがわかっており、多様な生産・交易の舞台ともなっている。

近世には宍道湖から日本海へ抜ける人工の河川である佐陀川の開削があり、宍道湖沿岸の水害が緩和されると同時に、流域の水田開発に大きく寄与したほか、宍道湖側との水運による交易が開かれ、この地域に経済的発展をもたらすこととなった。

- 1 「佐太講武員塚発掘調査報告書2」鹿島町教育委員会 1994年
- 2 「佐太講武員塚 主要地方道松江鹿島美保関線交通安全施設整備工事に伴う調査」鹿島町教育委員会 1997年
- 3 1998~1999年鹿島町教育委員会調査。『開拓者の眠るところ 速報! 塚部第1遺跡木棺墓群』鹿島町立歴史民俗資料館 1999年、『塚部第1遺跡 鹿島町福祉ゾーン整備事業に伴う調査1』鹿島町教育委員会 2005年
- 4 「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書4 北講武氏元遺跡」鹿島町教育委員会 1989年
- 5 「志谷廻遺跡」鹿島町教育委員会 1976年
- 6 「下谷遺跡・神田遺跡 佐太南地区農村活性化住環境整備事業に伴う発掘調査」鹿島町教育委員会 1994年
- 7 「佐太前遺跡」鹿島町教育委員会 1987年
- 8 「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書1 名分塚田遺跡」鹿島町教育委員会 1985年、「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書3 名分塚田遺跡2」鹿島町教育委員会 1987年
- 9 「南講武小畠遺跡『鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書1』」鹿島町教育委員会 1986年
- 10 「講武地区X県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草出遺跡」鹿島町教育委員会 1992年
- 11 「奥才古墳群」鹿島町教育委員会 1985年
- 12 「奥才古墳群第8支群 県道御津東牛馬線改良工事に伴う調査」鹿島町教育委員会 2002年
- 13 「背田考古」16 島根大学考古学研究会 1983年
- 14 「島根原子力発電所P R館移設計画に伴う名分丸山古墳群測量調査報告書」鹿島町教育委員会 1984年
- 15 山本 清「山陰地方村落古墳の様相 出雲地方を中心として」『島根大学論集(人文科学)』9号 1959年
- 16 「省田考古」17 島根大学考古学研究会 1995年 この報告では円墳として測量、紹介されているが、近年の分布調査の結果、前方後円墳の可能性が強い。
- 17 「講武地区X遺跡分布調査報告書2」鹿島町教育委員会 1988年
- 18 注17書。
- 19 井上寛司「佐陀莊」『島根県大百科辞典』山陰中央新報社 1982年

第3章 立地

古浦遺跡は、島根県八束郡鹿島町古浦字砂山にある。古浦は東西に延びる島根半島のほぼ中央部、半島を構成する本宮川山地の東の端近くに位置し、佐陀川左岸の砂州上に形成された、風成砂丘に立地している。

宍道湖と日本海を結ぶ現在の佐陀川は、8.3kmで日本海に注いでいるが、かつて講武川の下流となっていた。しかし、江戸時代天明7年（1787年）に開削され、現在の佐陀川となった。江戸時代の開削以前は、『風土記』に記されているように、宍道湖に注ぐ佐太川と名分・佐陀宮内・神田の小丘陵群によって分けられ、北西に流れ日本海に注ぐ小河川とが存在した。主にヤマトシジミで構成されている佐太講武遺跡（鶴瀬貝塚） 繩文早期～前期はこの小河川の谷奥に立地した貝塚であろう。

『出雲國風土記』の最終筆録編纂者は秋鹿郡の人、神宅臣全太理である。『出雲國風土記』（『日本古典文学大系』2 岩波書店 1958年）の「恵曇」に関する記述に触れてみよう。秋鹿郡の項によると「恵曇」の本来の字は「恵伴」で、神龜二年（726年）に恵曇と改めたとして、恵曇郷は「郡家の東北のかた九里畳歩」にあり、関連する神社として「恵伴毛社」・「恵曇海邊社」と「同海邊社」の3社を挙げている。註によると恵曇海邊社と同海邊社は同一境内にあると考えられている。

また、恵曇の池について「恵曇の池 陂を築く。周囲六里なり。鷺鷺・鳧・鴨・鯉あり。四邊に葦・草・苔生ふ。養老元年より以往は、荷藻自然叢れ生ひて太大多かりき。二年より以降、自然失せて、都べて莖なし。俗人いへらく、其の底に陶器・瓦・磚等多かり。古より並時時人溺れ死にき。深き浅きを知らず。」と記述している。

註によると恵曇池は鹿島町佐陀木郷と武代の東方にあり、現在は田畠であるとしている。池の周囲六里を一里535mで換算すると約3110mである。また、土地の人がいうには池底に多くの陶器等があるとしている。

古浦遺跡のある恵曇の浜については「恵曇の浜 幾度一里一百八十步なり。東と南とは並に家あり。西は野、北は大海なり。即ち、浦より在宅に至る間は、四方並びに石木なし。白沙の積れるがごとし。大風の吹く時は、其の沙、或は風の間に雪と零り、或は店流れて蟻と散り、桑麻を施覆ふ。即ち、彫り立てる盤壁一所あり。一所は厚さ三丈、廣さ一丈、高さ八尺なり。一所は厚さ二丈、廣さ一丈なり。一所は厚さ一丈、廣さ一丈、高さ一丈、高さ一丈なり。其の中に川を通し、北に流れ大海に入る。……川の口より南の宝、出の邊に至る間は、長さ一丈八十步、廣さ一丈五尺なり。

源は田の水なり。上の文に謂へる佐太川に西の源は、是の同じき處なり。凡て、渡の村の田の水の南と北とに別れるのみ。古者の傳へていへらく、嶋根の郡の大領社部臣訓麻呂が祖波蘇等、稻田の傍に依りて、彫り掘りしなり。』と記している。

忠雲の演は廣さ2里180歩。1里を535m、歩を1.78mで換算すると1390.4mである。古浦から佐陀川を隔てて江角までを含めた地域を指していると考えられる。方位については北に大海ありとしているが、海は西で陸が東であるから、90度方向を転換しなくてはならない。東（北の誤記）、南（東の誤記）であるから、東と南=北と東に集落があり、西（南の誤記）は野であるとしている。南は320.7mの絆塚山を控えた北向きの岩礁性の海岸であり、標高200mの大日峰を経て松江市西長江町に達している。

海岸から集落にいたる間は砂丘で、大風が吹くと砂が飛び、桑・麻に被害を与えるほどであるとしている。桑・麻は砂丘の後背低湿地に面した場所に栽培されていたのであろうか。冬季の北西の季節風による飛砂の凄まじさは調査期間中にも経験した。

この記述には古浦遺跡の黒褐色粘質砂上層（第1層）の須恵器・土師器、生活空間としての記述は見られない。『出雲國風土記』が大平五年（733年）二月三十日勘造された前後には、黒褐色粘質砂上層（第1層）は完全に白砂で覆い広くされていたのであろうか。しかし、8世紀の須恵器・土師器が相当量出土していることも事実である。また、古浦遺跡南側の丘陵斜面に立地する下谷遺跡（鹿島町佐陀本郷2056他）、標高12～18mでは、小規模の占墳時代住居跡と中世の住居が調査されている（鳥取県鹿島町教育委員会「下谷遺跡・稗田遺跡」佐太郎地区農村活性化伴環境整備事業に伴う発掘調査 1994年）。

佐陀川については人工的に削削した記録を残している。重要なことは「川の口より南の方、出の邊に至る間は、長さ一百八十步、廣さ一丈五尺なり。源は田の水なり、佐陀川河口から南（東の



図版1 古浦遺跡（1959年—昭和34年）

誤記)に水田までは320.4m、幅約4.5mで、水源は田の水をしている。恐らく砂丘後背低湿地からの細流が西に流れ海に達していたと考えられ、この流れを利用して開削が進められ、波蘇らが開削した3箇所の石盤は、困難な工事の中でも特に記憶に留めたのである。

鹿島町教育委員会が調査した稗田遺跡(鹿島町佐陀本郷1758他)は古浦砂丘の後背地にあるが、2層に別れて木器・木製品が出土し、上層は地表下約1.5m(標高約1.2m)で古墳時代の木器群が、下層は地表下約2~3m(標高約0.6~-0.4m)付近の「オモカス」と呼ばれている泥炭層から弥生時代中・後期の木器・木製品が出上している。下層の木器の性格を調査者は、集落の施材を低湿地に踏み込んだとして、泥炭層の性格を『山雲国風土記』に見える「恵曇池」の記述との関連を指摘し、上層の古墳時代の木器については、東西方向に基層材を置き、南北方向に材が並べられていることから、軟弱な水田面に人が踏み込む際に利用したか、畔の可能性があるとしている(鳥根県鹿島町教育委員会「下谷遺跡・稗田遺跡」佐太南地区農村活性化住環境整備事業に伴う発掘調査 1994年)。恐らく「出雲國風土記」に記述されている佐陀川の開削は、後背低湿地の排水を図り、乾燥を進め水田の拡大のために着手したと考えられる。

古浦砂丘は、恵曇・古浦・武代に広がり、南北1km、東西700mにおよび、調査時には砂丘全面に人家(巻頭図版1、7章図版1)が存在していたが、現在ではより一層稠密になっている。

砂丘は東西の線を軸にして長楕円形の小丘が諸處に点在し、最高所は標高24.5m、標高20~15m前後の砂の小丘が各所に存在し、その間には小さな谷が展開している。砂丘の先端は根連木、佐陀本郷にまでおよび、1990年台に圃場整備が行われ水田が整備され旧情を留めていないが、現在の水田面は根連木で標高0.6~1.0m、その西南の佐陀本郷で標高1.5~1.6mで、恐らく武代集落が点在している標高2mが砂丘の東端を示しているのである。とすると砂丘は部分的ではあるが、海岸線から900mも達している可能性がある。



(右頁 中段崖面の中央より左が1961~1964年A調査区、右がB、C、G、H、F区)

調査B（図1）の南側に近接して標高16m、その南東約100mにも標高14mの小丘がある。しかし、この様な砂丘形成の活動が停滞するのは何時の時期なのであろうか。調査の内容からすると黒色砂層（第5層）・灰黑色砂上層（第3層）と黒褐色粘質砂土層（第1層）には有機質が含まれ、砂丘活動が停滞した時期と考えられる。

文献によると明徳2年（1391年）11月に竹中越中守貞昌が多久和辻左衛門に宛てた譲渡状によると「彼在所、身の祖師分として竹たいの内貳丁、屋敷帯所、塩漬貳反」を譲り渡している。塩漬貳反は「一反ハ江すみみなミ衙門抱、一反ハ古浦次郎大抱を」（鹿島町「鹿島町史料」27頁 1976年）とある。塩田の所有者として古浦次郎の名が見られ、古浦に塩田が開かれていたことを物語っている。塩田は近世まで持続し佐陀川に連接した場所に存在したと考えられる。この資料によると中世には塩田労働者が砂丘上で生活した可能性は大きい。さきに記した下谷遺跡B区で中世住居跡が検出されていることも注目しなければならない。

古浦砂丘上に現在に続く民家・集落が形成されたのは何時の頃なのであろうか。少なくとも砂丘前面に集落が形成されれば、砂丘の形成活動停滞の一つの要因となることは否定できないし、砂丘形成が盛んであれば、砂丘上に集落が進出することは困難を伴ったと考えられる。

調査中に第1層黒褐色粘質砂上層の上に堆積する純砂層中からの出土遺物にも気をつけたが、調査B区南にある標高16mの小丘標高10m前後から陶器片1（布志名焼？）を採集したに過ぎない。しかし、小片保が調査した第2地区の近世墓は地表下1mと記録され、藤田が調査区に近接する標高16mの砂丘上で見た「日本海海賊者墓」は1905年（明治38年）5月末以後に建立されたものであるから、砂丘形成の停滞は相当古い時期にまで遡ることが考えられる。

古浦遺跡が形成された弥生・古墳時代の砂丘の様相はどのようなものであったのだろうか。鹿島町教育委員会は、古浦地区における下水道埋設工事に伴う立ち合い調査の結果を踏まえて、管路187で見えた黒褐色砂層の東へ向かう傾きが、古墳時代初頭の砂丘の傾斜であるならば、当時の砂丘は現在に比べて非常に小さいものであったことになる。」として、さらに「弥生時代前期、遺跡が墳墓域として営まれたころには、古浦砂丘はさきに予想した古墳時代初頭のものよりさらに小規模な砂丘であったと考えられる」（鳥根県鹿島町教育委員会「下水管埋設事業に伴う古浦砂丘遺跡立会調査報告書」30～31頁 1993年3月）としている。

管路187は、調査地点からほぼ南に160mの地点にあり、最上層の包含層（黒褐色砂層）の標高は最高所で標高7.76m、傾斜度は包含層下面で約20度である。この傾斜度は、調査時の包含層の傾斜度15°～20°と著しく異なっているとはいえない。ただし、出土遺物が弥生後期末～古墳時代初頭である点では、調査時の第2層（茶褐色砂層）に相当する層であり、この層の最高所の標高が7.30m前後であることと大きな矛盾はない。ただ下水道管の埋設工事に伴う調査であるため、広範囲に調

1903.8.19現在(金剛館)測

図1 古城遺跡附近地形図



査がおよんではいるが、深さの点では限界があると言わざるを得ない。

調査で極めて小範囲で確認した第5層黒色砂層は、その上面で標高6.75～6.60mで東西方向の傾斜は不明であるが、南北方向はほぼ水平である。林正久は本報告書の「自然環境」で、第5層の下が、恐らく海成の砂州であろうと予測し、これを基盤として古浦砂丘が形成されたとしている。

弥生時代前期に砂丘が墓地として使用された段階での第4層の標高は、1962年のF区で標高660～800cm、層中に貝粉を多く含み有機物を含まないことや、埋葬とともに地上標識・供獻土器の出土状態からすると、砂丘の活動は活発で砂の堆積が進んでいたことを物語っている。

1959年（昭和34年）の写真（3章図版1）からすると、砂丘の前面は比較的急な傾斜を持っている。集落の進出とともに宅地化が進み、さらに砂採りによって砂丘前面の破壊が進行し、弥生・古墳時代の砂丘も破壊され、海岸線に最も近い砂丘の最高所の位置は不明であるが、少なくとも弥生の埋葬、古墳時代の埋葬と生活面は砂丘内陸面の緩傾斜面に形成され、その範囲は弥生時代末～古墳時代初頭では、少なくとも伊勢川左岸から南へ250mの範囲に及んでいた。

古浦砂丘の全面的な調査は行われていないし、発掘調査も砂丘の最前面と最後部で行われているに過ぎない。弥生・古墳時代の砂丘が、現在の様な東西に軸をもつ小丘を伴っていたか、内陸に向かってどの程度に展開していたかは不明である。しかし、現在のような地形が、小規模であっても展開していた可能性も考えなくてはならないが、海岸線に平行に何列かの砂丘が波状に展開していたのではないだろうか。その中で海岸線に最も近い砂丘の内陸側が、弥生時代前・中期に墓域として選択され、古墳時代前・中期には砂丘活動が活発化する中で生活が持続され、墓地として利用された可能性がある。古墳時代後期には包含層の情況からして砂丘活動は穏やかとなり停滞期に入り、砂丘面での生産活動は活発に行われたと考えられ、また一部が墓地として利用された。

砂丘は活動期には活発に移動し、風・雨によって浸食を受け様相が変化する。古浦砂丘における考古学的調査によって、明らかにされた層・層位は極めて変化に富んでいる。今後さらに砂丘の層の変化、構成物質の解明、文化遺物の時代・時期を含めた詳細な検討が必要である。

第4章 調査の歴史

古浦遺跡の調査について、島根大学山本清によると、「古浦の砂山からたくさんの遺物、特に人骨が何十体と出て、大変注目を引いたのです。この古浦砂丘遺跡を私が初めて知りましたのは古浦の横尾さんの宮永さん、先代の宮永さんが、あの辺りの方が見つけた土器を佐太神社を持って来られて。こういう（直径15cmくらい）可愛らしい脚の付いた壺でした。これは大変なものだと、拾われた場所がどこか聞いていただきたいと言っておいたら、ちょうど渕橋を渡った、うしろの砂山の辺りから出たということが判りました。

昭和23年8月14、15日の盆ごろだったと思いますが、その砂山の辺りを、図面に書いておこうと思いました。当時私は師範学校におりまして、生徒や卒業生数名で、測量に行っておりました。お昼に休憩した。そうしたところが、砂山の崖を誰か生徒がこうやって（手のひらで撫でるように）触ったんです。そこへ人間の頭が現われたんですね。顔に赤いものが塗ってある。そういうのが出て参りました。

その写真を撮っておきたいんだけれど、当時まだ昭和23年でカメラもありませんし、フィルムもなかなか手に入らない、そういう頃だったんです。そこで、きっと新聞社はカメラ持ってるだろうと思って、朝日新聞かどこかへ電話しました。うまいこと来てくれまして、写真を写したんです。その写真を1枚、こちらへ寄越しなさいっていうことで、写真が1枚だけ。（アルバムを広げながら）ちょっと小さくて見えんと思いますが。こういう写真が1枚しかなかったもんで。そういうことがあります。

その後、崖の様子も写真に撮りたいが思うようにいかない。そうしたら、師範学校の同僚の先生が、検察庁の知り合いの人があると。検察庁にはカメラがある。それを借りてひとつ撮ってやろうということで、撮ってもらった写真がこの中（アルバム）にあるんです。」（山本清「かしまの歴史－鹿島町立歴史民俗資料館開館記念講演会『鹿島を撮る－よみがえる伝説の資料－』1992年特別展図録 鹿島町立歴史民俗資料館）と講述されている。

遺跡発見の端緒は、遺物や人骨、ことに古浦天満宮宮司宮永歎が弥生土器を佐太神社（佐太考古館）にもたらしたことである。この土器の



図版1 山本 清調査人骨
(1948年—昭和23年8月15日)

出土地点は第2次調査D地点の東約30m付近、調査当時の恵農巡査駐在所付近であろうと考えられる。

昭和23年8月の記録は「八束郡恵農村佐陀川南岸砂丘遺物包含地写真撮影位置図」—青焼き—(図1)と「人骨出土地点附近関係位置要図」—青焼き—(図2)として残されている。山本清は

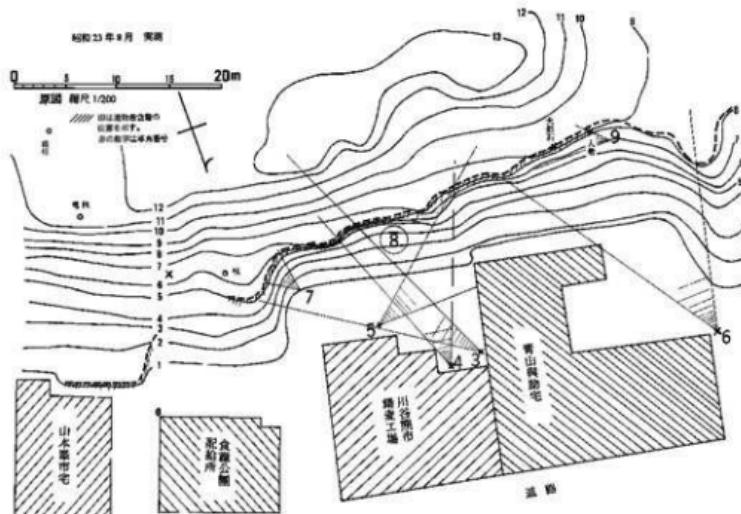


図1 八束郡恵農村佐陀川南岸砂丘、遺物包含地写真撮影位置図
山本清氏原図(青図)による。
文字・数字はすべて手書き。(一部改変)

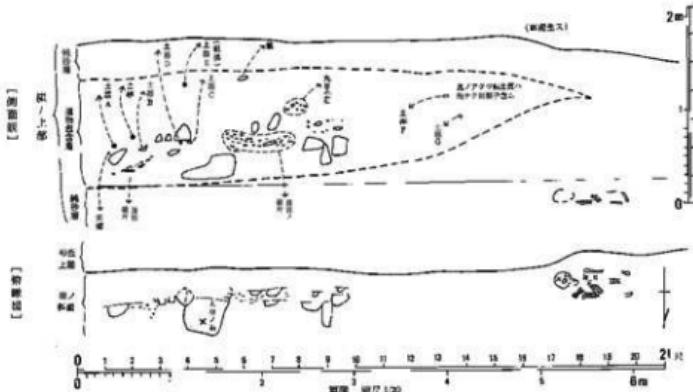


図2 人骨出土地点附近関係位置要図
山本清氏原図(青図)による。
文字・数字はすべて手書き。(一部改変)

昭和23年・昭和29年に人骨を調査しており、その内容は山本清「土器を主とする砂丘遺跡の埋葬例について」（『日本考古学協会彙報 別編3 第14回総会研究発表要旨』1954年10月）に「近年この砂丘の南麓に家屋を建て並べたので、その砂丘を切り取って」と記述しており、溝渠の冒頭の「特に人骨が何十体と出て」は、砂丘の宅地化のための砂採りによって出土したと考えられる。小片保は「出雲国八束郡恵養町古浦砂丘遺跡発掘報告」1956年（昭和31年一孔版）では「約20年以前にこの上地の所有者川谷熊市、青山与助両氏が住宅建設の為、排砂作業を行った處、夥しい人骨及び遺物が出土したとの事である。」と記録している。昭和23年調査の人骨が学術調査された最初の古墳人（図版1）である。この山本清の記録は太平洋戦争後の考古学研究の困難さと、研究に対する取り組みの真摯な姿勢と情熱を物語っている。

1952年（昭和27年）に鳥取大学医学部解剖学教室に着任した小片保は、人類学的研究のために古人骨の調査を精力的に行い、鳥取大学医学部標本室（鳥取県米子市）に資料を収集した。

古浦遺跡調査は、1956年（昭和31年）3月下旬から4月上旬に行われた（小片保「出雲国八束郡恵養町古浦砂丘遺跡発掘報告」1956年一孔版）。調査の目的は古人骨の人類学的研究にあり「所謂山雲族は文化人類学的又は文献学的見地より可成り累積が公けにされているが、純自然科学的追究は従来行われておらず、従って暗中模索の感が深い。…特に古浦人骨は出雲海濱部の古代人として興味が深い。又、猪日洞窟弥生式人ととの関連性も重要であり、最大の興味は大和地方人及び朝鮮人との比較にある。即ち古代山陰人の日本の於ける形質的位置が問題となるであろう。」として、鳥取大学医学部解剖学教室が主体となり、鳥取大学山本清・学生、佐々木古代文化研究室（鳥取県米子市）の協力で行われた。

調査は、青山与助邸南約27mの砂丘上（第1地区A地点一区版2）と、北東に近接するC地点、A地点の北東約40m隔たったB地点、さらに砂丘の前面（海側）の第2地区を調査している。

調査は困難を極め、第1地区C地点で暴雨風で落盤した上砂中から発見した恵養第2号人骨と第2地区で銅環、連なった有機物の小玉、碧玉・骨製大型骰子3個を胸部付近に副葬した人骨を調査した。人類学的所見は恵養第1号人骨（昭和29年山本清調査）と恵養第2号人骨（第1地区C地点出土）について触れ、古墳時代人骨として所見を述べている。また、小片保は古浦人骨の拔歯についても論究している（小片保・大賀美利雄・小村京子・益本宗「日本古墳時代人骨の拔歯」『鳥取大学解剖学教室業績第四集』



図版2 小片 保調査第1地点
(1956年一昭和31年8月20日)

昭和31年12月)。

この調査によっても明らかのように、小片保は第2地区が古老によれば墓地として利用されていたこと、出土人骨が地表下1mであったことからすると純砂層中の出土であることは明らかで、古浦砂丘には様々な時代の埋葬が行われたと考えられる。藤田自身、記憶は明確ではないが、砂丘上で「日本海海戦死着者之塚」と記された砂に埋もれた墓石を、1959年(昭和34年)に見た記憶がある。恐らく源氏のロシア人を埋葬したのである。

小片保の第1地区は、山本清が1948年(昭和23年)に調査した青山与助宅裏に近接した地点から約27m南に位置し、8年間で砂の採取が進み遺跡が消失したことを物語っている。

金闇丈夫による、1961年(第1次調査)～1964年(第4次調査)の古浦遺跡の調査は、金闇の鳥取大学医学部第2解剖学教室着任によって計画され、金闇の九州大学医学部解剖学教室を主体とした、西日本における広範な人類学的研究の延長線上にあり、また、古墳時代人の形質の人類学的研究と庶民生活の解明を目的とした。

本報告書で触れる金闇丈夫の調査地点A・Bは、青山与助宅から南東約40m、純砂層が採取され黒褐色粘質砂土層(第1層)が露出したテラス状の地区であり、F区は南南東約40～55mの範囲にあって約6～8mの崖面となっており、砂採りは白色砂層(第4層)にまでおよんでいた。調査時付近は川汁用の籠子を下す魚下場として広範囲に利用されていた(3章図1参照、7章図版2)。

島根大学考古学研究会は、1983年(昭和58年)9月「菅原考古」16号で「-地域とともに-」を集めて、古浦遺跡の問題を取り上げ、調査の歴史・成果に触れ問題点を指摘し、遺跡保存の重要性を訴えている。

金闇丈夫の調査以後は本格的な調査は無く、1985年(昭和60年)鹿島町教育委員会による家屋移転に伴う緊急調査(島根県鹿島町教育委員会「鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書!」1986年)で、湊橋の南、旧昭栄保育所敷地内で3箇所が試掘調査された。また、1985年(昭和60年)古浦遺跡の宅地化計画が起り、遺跡の重要性から一部を町有化のために、2×2mの試掘坑4箇所を設定して事前調査を行い、包含層の存在を確認している(島根県鹿島町教育委員会「下水管埋設事業に伴う古浦砂丘遺跡立会調査報告書」付箋1983年3月)。

1991年(平成3年)8月～1992年(平成5年)1月に、古浦地区の下水管埋設工事に伴う調査が広範囲に行われた。下水道基礎工事であるために2.20～2.50m、マンホール部分が3m程度掘り下げられている。大部分は白色砂層で所々で薄い有機質を含む層を確認しているが、近世か近代の層であろうとしている。ただ管路187・24m区では、1～1.20mで黒褐色砂層・茶褐色砂層・淡茶褐色砂層から弥生後期前半・後半、古墳時代初頭の土器を検出し、管路122で古墳時代前期・中期土器と僅かな弥生中期・後期土器を検出している(島根県鹿島町教育委員会「下水管埋設事業に伴う

古浦砂丘遺跡立会調査報告書」1993年)。その調査結果から、古浦遺跡が現在の砂丘よりも可成り小さな砂丘上に形成されていたと推測している。

古浦砂丘遺跡の調査は、山本清、小片保、金間丈大によって行われた。その間砂取りによって遺跡は破壊され、遺物は色々な人達に採集された。幸い地元の人々の協力によって採集され町・調査団に寄贈されたり、研究者によって研究報告されているが(第11章 古浦遺跡関係文献目録 参照)、四散した遺物は相当な数量におよぶと考えられる。

第5章 調査日記(抄)

第1次調査

調査期間 1961年(昭和36年)12月17日～12月27日

調査責任者 金関 丈夫(鳥取大学教授 医学部)

調査員 山本 清(島根大学助教授 文理学部)

永井 昌文(九州大学助教授 医学部)

小片 丘彦(鳥取大学助手 医学部)

近藤 正(島根県立博物館)

藤田 等(鳥取大学助手 医学部)

調査補助員 山田 高利(鳥取大学医学部解剖学教室)

鹿島 稔(鳥取大学医学部解剖学教室)

田口 史枝(鳥取大学医学部解剖学教室)

調査参加者 内田 才(島根県安来市柿谷町)

池田 満雄(島根県松江市立第三中学校教諭)

勝部 昭(島根県立松江北高等学校生)

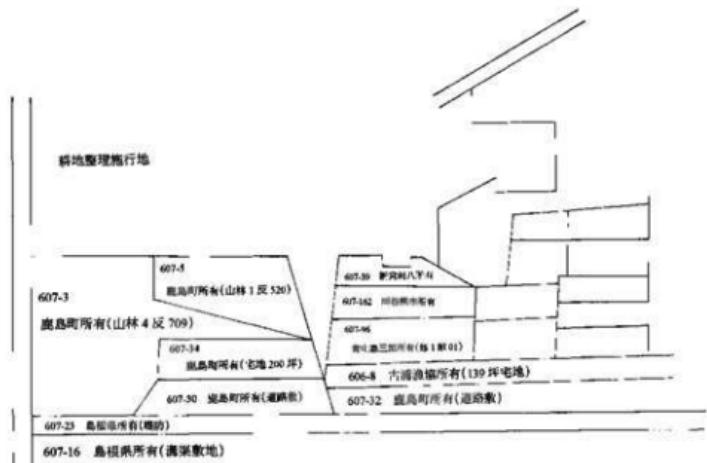


図1 鹿島町大字古浦字砂山埋蔵文化財所在見取図(地番は調査当時、下が北)

12月17日（日）小雨のち曇り。

鹿島町総務課長青山康次氏・区長宮永哲氏（山城屋）立会の上で、調査地点を古浦砂丘北端、佐陀川左岸に近い鹿島町所有の古浦字砂山耕地整理施行地と鹿島町所有607-3（山林）、607-5（山林）および607-34（宅地）とすることを確認し（図1）、10時に作業開始。

砂取り場・ポンプ小屋に沿った、ほぼ東西に延びた崖面上に調査区（A区）を設定し、黒褐色粘質砂土層（第1層）上の純砂層の除去を行った。崖面に石塊の露出が2箇所認められた。17時作業終了。

12月18日（月）曇り。

8時作業開始。前日の作業を継続して行う。午後、恵曇小学校児童発掘作業に参加。17時作業終了。

12月19日（火）曇り時々雨。

8時作業開始。崖曲に沿って幅2m・長さ15mの調査区を東西方向に設定。1調査区を 2×3 mとし、砂丘であることを考慮して各区間に1mの隔壁を設け、西（海側）からA-1～4区とした。また、A-1区の南側に直交して1mの間隔を置いて 2×3 mのB区、さらにB区西壁延長線上に2mの間隔をおいて 2×3 mのB区。さらに、B区西壁延長線上に2mの間隔をおいて 2×2 mのC区を設定した。C区は調査面積が小さいために、隔壁を設げず 1×1 mに区分し1～4区とした。午後さらに2・4区を西側に1m拡張し5・6区とした。C区は崖面に露出した石塊群の調査を目的としたものである。

A-1、B・C区の黒褐色粘質砂土層（第1層）は東（陸側）に向かって傾斜している。第1層を10cm単位で掘り下げを行う。須恵器・土師器の小片、貝類（アワビ・サザエ）などが出土した。



図版1 暖を取る（左より金関、永井、藤田）1961年

C区崖面に見えた石塊は、粗雑な石組遺構で西南に向かって延びていると考えられた。17時作業終了。

12月20日（水）曇り時々小雨、のち晴れ。

8時作業開始。A-1区は黒褐色粘質砂土層（第1層）を除去して、茶褐色砂層（第2層）を調査する。第2層は第1層に比較して有機物が殆ど含まれず粘性も低い。出土する土器は土師器の細片が大部分で量的にも少ない。第1層下端で骨礫が出土した。

B区は西側の崖面まで調査区を拡大しB-2区とし、第2層中の石塊群（石組遺構）を調査した。石塊群は北側で稠密、南側で疎になっており、C区の石塊群と連続すると考えられる。

C区では茶褐色砂層（第2層）中の石塊群（石組遺構）を調査。石組遺構は東に向かって傾斜しており、石組遺構の最高部から約50cm掘り下げた。石組遺構の下端付近では比較的大形の土師器片が散在している。新しくC-2・6区の南側に調査区を拡張し、C-7区（60×150cm）を設定したが、崖面の崩壊が予測されたので、C-7区北側の第1・2層を調査後に除去した。またB・C区の石塊群と石組遺構の連続を確認するために、その間の土砂を除去することが必要となり、B-1区西壁に接して崖面に達するB-1・2区南壁とC区北壁を結ぶ線（4m）、C区東壁（2m）、B-1・C区東南隅を結ぶ線（4.5m）に囲まれた三角形のB-3区を設定した。その結果B・C区は連続した形となった。B-1区南西隅の石組遺構下層で人骨（脛骨・大腿骨）の一部が露出した。17時作業終了。



図版2 調査風景（1961年）
(左より山本、永井)

12月21日（木）曇り時々小雪。終日風強く砂飛ぶ。

8時10分作業開始。A-2区の黒褐色粘質砂土層（第1層）も東（陸側）に向かって傾斜している。西北部は堅く黒みを帯び、木炭片を含んでいる。土師器・須恵器片・鉄製刀子・鉄片、エイの尾骨などが出土した。

B-1区東壁に平行して2×3mのB-4区を設定した。B-1～3区・C区で石組の検出を行い、写真撮影後に実測の準備にかかる。B-1区石組中で復原可能な甕型土器・高杯、B-3区西南部で人骨片（側頭部・骨盤）が出土した。B-4区の第1層の傾斜も他の区と同様である。第1層を10cm単位で掘り下げ第2層に達した。東壁沿いで第1層上端から-60～-70cmで人骨（四肢骨）

が出土した。第1層は-50~80cmにおよぶと考えられる。

C-1・7区の東南隅を結ぶ線までC-7区を拡張し調査を開始した。17時作業終了。

12月22日（土）曇り時々霰。終日風強く寒し。砂飛ぶ。

8時30分作業開始。A-3区黒褐色粘質砂土層（第1層）の調査を行う。遺物は須恵器・土師器を主体とし、上製支脚・甕などの破片が出上する。また、アワビ・サザエなど貝類が出土。

B・C区の石組造構の尖測を行う。B-4区で人骨の一部を検出。16時猛烈な風と霰で作業を中止し、遺物の整理と簡単な梱包を行う。

12月23日（日）曇り、午後一時霰。

8時30分作業開始。A-3区第1層下端の調査を行う。遺物の山土状況は前日と変化はなく、須恵器・土師器片が出土した。自然石数個が点在しているが、格別の意味を持つとは考えられない。午後、茶褐色砂層（第2層）の調査を行う。上師碗・上製支脚・把手など出上。

B・C区石組平面図と一部の断面図を作製し、攪乱されていると考えられる石塊の除去を行う。石組造構上には比較的大形の土師器片・人骨が散乱している。調査区東の土取り場で、4~5才の小児骨が第2層中からまとまり無く出上した。詳細な出上状態・年代については確認できなかった。17時作業終了。

12月24日（月）雨のち晴。終日風強く寒し。砂飛ぶ。

起床時は強い雨。10時に雨小降りとなり作業開始。A区の調査は見合わせる。

B・C区は引き続き石組造構の尖測を行い、攪乱された石塊の除去を行う。石組造構は東（陸側）に傾斜し、下端部には比較的大形の土器片が置かれている。B-4区で人骨の調査・尖測を行い取り上げ、さらに掘り下げる。南壁の白砂層（第4層）から乳児骨（1号人骨）を検出し写真撮影後に実測。埋葬姿勢は仰臥伸展、東西方向に埋葬している。17時20分作業終了。

12月25日（火）晴時々霰。霰混じりの氷雨。

9時作業開始。調査区の地形図・調査区配置図および各実測図の測点・標高の計測を行う。標高は午前11時の潮位を0mとした。1号人骨を取り上げた。

B・C区石組造構の尖測を行い脛骨との関係を確認した後に掘り下げを行う。C-6区最西端の北側崖面第2層中で、ほぼ完全な弥生中期筒形土器を検出。口縁部の二条の突帯に繊細な刻みがある。17時20分作業終了。

12月26日（水）終日小雨、時々霰混じり。

起床時は雨。出発を見合せ、9時20分作業開始。

B-4区で白色砂層（第4層）で仰臥屈膝の乳児（3号人骨）を検出した。

C区は断面図作製のための作業を行い、白色砂層（第4層）上端で亀巣式併行の櫛目文をもつ甕

形土器の小片を発見した。C・5区白色砂層（第4層）で仰臥屈葬の小児骨（2号人骨）を発見した。右前腕に6個、左前腕に8個の貝輪を着装。17時10分作業終了。

12月27日（水）終日小雨。

8時20分作業開始。2号人骨の実測、A・B・C区の白色砂層（第4層）の掘り下げを行う。B・1区で仰臥屈葬の小児骨（4号人骨）を検出。約1/2が欠失した骨製有孔円盤を副葬していた。B・C区をつなぐ壁面の実測を行う。15時30分作業を終了し第1次調査完了。

第2次調査

調査期間 1962年（昭和37年）8月23日～9月3日

調査責任者 金関 大丈（山口県立医科大学教授）

調査員 山本 清（島根大学助教授 文理学部）

国分 直一（下関水産大学校教授）

永井 昌文（九州大学助教授 医学部）

三島 格（熊本県荒尾中学校教諭）

金関 恵（大隅大学助教授 教養部）

近藤 正（島根県立博物館）

金関 恵（広島大学助手 医学部）

藤田 等（鳥取大学助手 医学部）

調査補助員 山田 高利（鳥取大学医学部解剖学教室）

田口 史枝（鳥取大学医学部解剖学教室）

調査参加者 内田 才（島根県安来市柿谷町）

池田 満雄（島根県松江市立第三中学校教諭）

東森 市良（島根県松江市立女子高等学校教諭）

古川 勝之（鹿島町立鹿島中学校教諭）

勝部 昭（島根大学学生）

島根県立松江高等学校生徒

調査協力者 青山 宗市（古浦109番地）

川上 善市（古浦184番地）

青山 清（古浦83番地）

青山 近夫（古浦107番地）

8月23日（木）晴。

午前中、鳥取大学医学部解剖学教室より発掘機材を搬入。

8月24日（金）晴。

9時調査開始。第1次調査でA-3区まで調査完了していたので、A区を東に延長してA-4～9区を設定した。調査区は2×2.5m、隔壁を50cmとした。A-4・5区の黒褐色粘質砂土層（第1層）を調査。層中から須恵器・土師器の环・壺・甕・土瓶、一部に加工の痕跡のある鹿角、铁刀子片など出土。第1層下端に東（陸側）に傾斜した赤褐色粘質土層が見られるが、特に遺構としての痕跡もなく貼床とも考えられない。

第1次調査C-5区の西南西約10m付近が新しい砂取り場となっており、調査開始時に頭蓋骨・四肢骨が新聞紙上に置かれているのを発見した。聞き取りの結果、8月23日夕刻に安達徳雄氏（武代24-4番地）が同地点の白色砂層（第4層）中で発見したものと判明した。この人骨（20号人骨—老年男性）の前頭部に青斑が見られたが、埋葬姿勢などの詳細は不明である。また、黒褐色粘質砂土層（第1層）の上端から-2.5mの地点（白色砂層—第4層）から、弥生土器2点（小形鉢・耳



図版3 調査関係者（1962年）

前列（左から）永井、金関恵、金関恕、金関、国分、三島、藤田
二列（右端）山田、三列目（右から2人目）小片

付き鉢）を検出した。18時作業終了。

8月25日（土）晴。

9時30分作業開始。新しくA-6～9区の調査を始め黒褐色粘質砂土層（第1層）を掘る。第1層に関しては特に4・5区と異なる点はない。部分的には火を受けたようにも観察できるが、炉・焼石・灰などは検出できない。遺物は須恵器・土師器片が主であり、7区で須恵小型壺、9区で金環・骨製品が出土した。

20号人骨の出土した砂取り場付近をF区としたが、この区では第1層上に8～9mの砂が堆積しており、調査区を平面的に設定することが困難であったため、可能な限り上部の砂を排除し、2～3mの平坦面を確保しながら調査を進めた。排土作業は困難を極め、結果的には崖面を掘り崩す形で作業を進めた。

また、20号人骨出土地点を中心に作業を行い、左右の膝関節（22号人骨）を発見した。さらに周辺部に作業を拡張して調査を進め、22号人骨に近接して白色砂層（第4層）中のやや高い位置で幼児骨（21号人骨）を発見した。21・22号人骨の写真撮影を行い、実測を開始した。18時作業終了。

8月26日（日）晴、夕刻小雨。

9時10分作業開始。A区では前日の作業を継続した。

F区21・22号人骨の実測を完成し、取り上げを行う。人骨周辺の砂を簡いで精査したが遺物は検出されなかった。

近藤正が5月と7月に発見保管していた人骨を九州大学に寄託。また、青山芳光氏（占浦602番地）が、宅地の石垣工事中に発見した黒曜石塊の寄贈を受けた。18時30分作業終了。

8月27日（月）晴。

8時30分作業開始。A-4～6区は黒褐色粘質砂土層（第1層）下端の遺物を探り上げ、茶褐色砂層（第2層）、灰黑色砂土層（第3層）を調査し、第1層上面から-140～150cm（第4層）まで掘り下げた。A-7～9区は部分的に第1層上面から-230～240cm掘り下げ、壁面の崩壊の可能性が強いために作業を中止した。

A-9区の北6m付近から北に走る崖面に竪穴状の落ち込みがあり、この周辺をD区（3×1.5m）とした。竪穴内には灰色の砂土が充満し炭化物が多く、下底部には黒褐色土が薄く層状に堆積している。表土を除去すると須恵器・土師器片が散乱していたが、遺構としては明確でなく、全体に土器窯の様な状態をしている。遺物の出土状況を写真撮影し実測図を作製した。18時10分作業終了。

8月28日（火）晴、午後雨。

8時30分作業開始。A-9区の南壁に直角に調査区を設定。幅1.5mの隔壁を置き、2.5×2.5mを1区画とし隔壁を設けず3区を設定し、9区側から10・11・12区とした。取り敢えず10・12区の調

査を行った。A区北壁の実測を行う。

D区では遺物の採り上げを行い、さらに掘り下げる。調査区南端に不整形の落込みがあり、その中から遺物が出た。全面に須恵器・土師器が散在し、鉄分を含むと考えられる粘土塊・砂土塊が混じり、非常に堅く作業は困難を極めた。

F区は東（陸側）に向かって調査区を拡張し、白色砂層（第4層）中から仰臥屈葬人骨（23号人骨）を発見、左前腕に貝輪4個を着装している。15時雨激しく作業中止。

8月29日（水）晴時々曇り、小雨。

9時作業開始。D区は前日の作業を引き続き行う。落ち込み部の灰白色土を除去し、ほぼ全形を明らかにした。写真撮影。

F区は23号人骨を取り上げ、東南岸面の断面図を作製するための清掃中に、白色砂層（第4層）で頭蓋骨（24号人骨）を発見した。白色砂層（第4層）中に砂利層が見られ、また灰黒色砂上層（第3層）中で占式土師器片を検出した。黒色砂層（第5層）を確認し、50cm掘り下げたが層の厚さも遺物も確認できなかった。

F区西側をG区とし、白色砂層（第4層）まで排除したが人骨は検出できなかった。18時作業終了。

8月30日（木）晴。

8時35分作業開始。A-10・12区を午後調査。10区では黒褐色粘質砂上層（第1層）中から古式土師器・器台が検出され、層が複雑されていると考えられた。茶褐色砂層（第2層）中に粘土の貼床と考えられる構築物を発見し、調査区の拡大を決定した。12区には特に変化はなかった。

D区は調査内容を考慮して2班編制で作業を行った。1班は平面調査を主として行い、2班は堅穴西方では南北方向の断面図の作製を行った。全面から須恵器・土師器（上製支脚・壺・鉢）が重複して出土した。土器の間には獸骨・魚骨が混在していた。

F区では24号人骨を検出するために東南岸面を掘り、24号人骨に伴う弧状の配石と置石を検出した。また、配石の直上で25号人骨を発見したが、原埋葬とは考えられない状態である。24・25号人骨を写真撮影・実測後に取り上げた。また、24号人骨東側で26号人骨を発見した。白色砂層（第4層）中の砂利層面のやや下で弥生前期壺片を発見した。18時作業終了。

8月31日（金）晴。

8時30分作業開始。A-11区の北半部、10区の西に2.5×2.5mの13区、8・9区と10・12区の隔壁を10'・13'区として調査を行う。13区の灰黒色砂土層（第3層）の上半部で鉄刀子・鉄津・羽口片・砥石などが出土した。また、下端部で粘土層を発見した。

D区の堅穴は1.2×1.4m、深さ25~35cmの長方形をなしている。底面には灰色の砂土が被膜した

状態である。調査は本日で終了した。

F区では26号人骨の調査を行った。配石と人骨の関係は、弧状に配置された石群のほぼ中央の置石は、被葬者の腹部に位置している。25号人骨は26号人骨埋葬時に掘り出され、配石上に放置されたと考えられる。15時に砂の崩落があり人骨の一部が移動した。18時作業終了。

9月1日(土) 晴。

8時50分作業開始。A区は茶褐色砂層(第2層)中の粘土層の検査作業を主体とした。粘土面は一定の広がりを持つが、全体としてまとまった形態をしているとはいえない。粘土面に密接または食い込む様な土器片は極めて少なく、直上または上方から出土した。また12~13cmの円形の穴が4箇所あり柱穴かとも考えられた。東北角に匂状の溝を持った粘土塊がある。

F区は終日拂土作業を行い、27号人骨の一部を発見した。18時作業終了。

9月2日(日) 晴。

8時40分作業開始。A区では、10・10'・13・13'区の粘土面の清掃・写真撮影・実測を行う。

F区27号人骨の北、26号人骨との間で28号人骨を発見した。27・28号人骨の調査・写真撮影・実測を行う。28号人骨は幼少児で貝小玉多数を伴出したので、人骨の周囲・直下の砂を水篩し無数の貝小玉を検出した。午後、29号人骨を27号人骨の南西で発見した。17時45分作業終了。

9月3日(月) 晴。

8時30分作業開始。F区29号人骨の調査を行い貝小玉多数を検出した。午前中で作業を終え、第2次調査を完了した。

第3次調査

調査期間 1963年(昭和38年) 7月19日~8月1日

調査責任者 金闇 丈夫(山口県立医科大学教授)

調査員 山本 清(鳥取大学助教授 文理学部)

国分 直一(下関水産大学校教授)

永井 口文(九州大学助教授 医学部)

三島 格(熊本県荒尾中学校教諭)

金闇 忽(天理大学助教授 教養部)

小片 丘彦(新潟大学助手 医学部)

近藤 正(鳥取県立博物館)

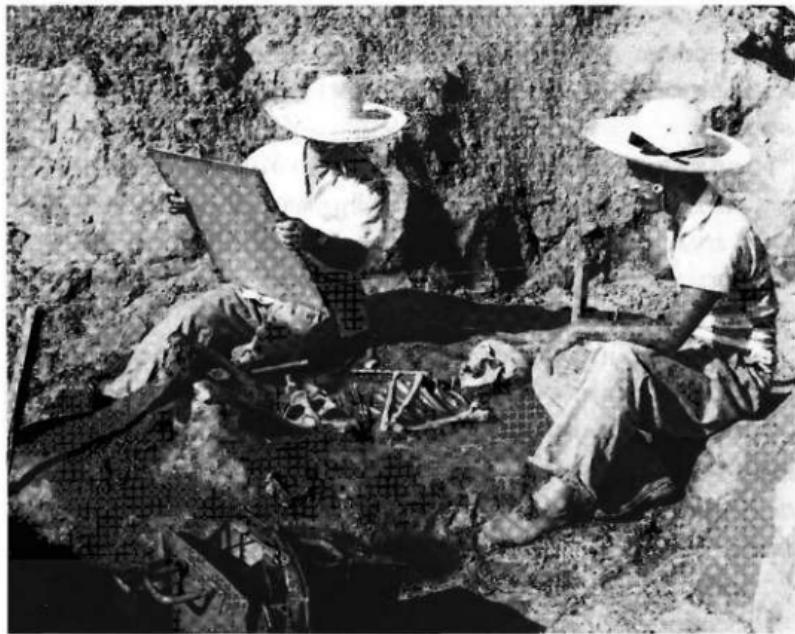
藤田 等(鳥取大学助手 医学部)

調査補助員 山田 高利(鳥取大学医学部解剖学教室)

田口 史枝（鳥取大学医学部解剖学教室）
調査参加者 内田 才（島根県安来市祐谷町）
池田 满雄（島根県松江市立第三中学校教諭）
東森 市良（島根県松江市立女子高等学校教諭）
古川 勝之（鹿島町立鹿島中学校教諭）
藤部 昭（島根大学学生）
石井 悠（島根大学学生）
深見 清（京都大学学生）

7月19日（金）晴。

午前中、発掘機材を鳥取大学医学部解剖学教室から搬出するための作業を行い、13時に米子を出発、14時30分に現地に到着。機材を宿舎・倉庫に搬入し調査の準備を終えた。



図版4 36号人骨実測（左 金蘭、右 永井）1963年

7月20日（土）晴。

8時45分作業開始。第1・2次調査の結果、△地区、特に3区以東では第4層における人骨の検出はなく墓域外と考えられることから、調査をF区（南西方向）に集中することにした。

第2次調査と同一点を計測基準として、前年度の調査範囲の確認を行った。その結果、昨年來砂の採取は余り進展していないことが確認できた。今年度もこの区域を第3次F区とした。

午後、茶褐色砂層（第2層）中で第1次調査で出土した石組遺構に連続すると考られる石塊群を発見した。また、白色砂層（第4層）中で石塊数個を発見した。17時45分作業終了。

7月21日（日）薄曇り。

8時30分作業開始。F区は黒褐色粘質砂土層（第1層）・茶褐色砂層（第2層）の調査を行い、終日排上作業を行った。

F区東側地図をH-1・2×として、石組の清掃を行った。石組遺構上には古式土師器が散乱していた。H区を東に拡張するため、第1層上の砂層を除去し第1・2層を調査した。17時50分作業終了。

7月22日（月）晴。

8時39分作業開始。H区石組遺構の検出を終え、写真撮影・実測を行う。14時に実測図完成。石組を除去し茶褐色砂層（第2層）の調査を行う。石組遺構下層で下顎骨を発見、犬歯抜歎の可能性が強い。

F区は灰黒色砂上層（第3層）・白色砂層（第4層）を掘り下げ、第4層で人骨3体を検出した。また、同区北端で成人骨の一部を発見した。3体の人骨は西南側から30・31・32号人骨とし調査を行った。31号人骨の下肢骨間で多数の貝小玉を検出した。また、32号人骨は左前腕に貝輪5個を着装し、胸部から貝小玉数個、周囲の砂を水洗し10個の貝小玉を検出した。17時30分作業終了。

7月23日（火）晴。

8時45分作業開始。H-2区は茶褐色砂層（第2層）を調査し、多数の上器片を検出した。

F区は黑色砂層（第5層）まで掘り下げながら周辺調査を行い、30号人骨の西南で33号人骨、32号人骨の東北で34号人骨を発見した。30~34号人骨はすべて幼小児で頭位をほぼ同じくし、ほぼ等間隔で埋葬されている。33号人骨の南西、第4層から卜骨を検出した。また、20日に発見した石塊群の約40cm下に35号人骨、35号人骨南西2.5mで36号人骨を発見した。35号人骨の下顎骨右辺で碧玉製管玉1個が出土した。17時40分作業終了。

7月24日（水）曇。風強く砂飛ぶ。

9時作業開始。H-2×は茶褐色砂層（第2層）を引続き掘り下げ、不明瞭な灰黒色砂土層（第3層）を掘り、白色砂層（第4層）に達した。2箇所に石塊群があり南西群をA、北西群をBとし

て調査。A群下から人骨は検出できなかったが、B石塊群（置石）下から頭位をほぼ東にした37号人骨が出上した。北側佐陀川、西側恵摺港を含む遺跡周辺部の1/1000地形図の作製を開始。

F区では、35・36号人骨の実測を行い、36号人骨の左耳付近で碧玉製管玉1個を発見した。また、南西方向へ調査区を拡張した。17時作業終了。

7月25日（木）薄曇り。風強く砂飛ぶ。

8時50分作業開始。H-2区37号人骨（仰臥屈葬）の置石と人骨の関係を撮影後に実測を開始した。さらに置石を除去した後に写真撮影・実測を行った。H-2区で黒褐色粘質砂土層（第1層）上面から-250cmで弥生深鉢形土器を検出した。

F区南端を東南に幅約3m掘り広げ、白色砂層（第4層）中から弥生深鉢形土器を検出した。また、2箇所で置石と考えられる石群と人骨2体（39・40号人骨）の存在を確認した。34号人骨の東南約60cmで38号人骨を発見し、午後には清掃を完了し撮影・実測を行った。18時作業終了。

7月26日（金）晴、風無く暑し。

H-2区東壁の白色砂層（第4層）中で成人の足指骨・足根骨を発見、調査区を東側に拡張するために、黒褐色粘質砂土層（第1層）上に堆積する砂層の除去を行った。

F区を東に拡張することにし、黒褐色粘質砂土層（第1層）上の砂層を除去し、第1～3層まで掘り下げたが、砂層の除去は困難を極めた。30～34・38号人骨下の黒色砂層（第5層）の調査を試みたが層の厚さは確認できず、遺物も検出できなかった。40号人骨の北約1mで41号人骨の存在を確認した。16時作業完了。

7月27日（土）曇、蒸し暑し。

8時40分作業開始。H-2区を東に拡張するために耕土作業を行い、第1層を順次除去した。

F区は夜半の土砂崩壊によって、調査区が埋没していたため、午前中は耕土作業を行い、41号人骨の北約1.5mで置石（42号人骨）を発見した。置石は2群からなり頭部の右群の間に弥生前期盤形土器片が散乱していた。17時30分作業終了。

7月28日（日）快晴。

8時30分作業開始。H-2区を東に約1m拡張し、25日に視認した人骨の調査を行い、44・45号人骨を確認した。44号人骨は仰臥屈葬（男性）、45号人骨（女性）は44号人骨左下肢骨上方に散乱している。44号人骨左肩部上方約20cmで碧玉製管玉1個が出土したが、45号人骨の副葬品であろうか。

F区では39～43号人骨は清掃後に写真撮影・実測を行い取り上げ。17時作業終了。

7月29日（月）晴のち曇。

9時作業開始。H-2区は前日の作業を継続し、44・45号人骨の清掃を行い、45号人骨を実測し

た。44号人骨の左脛側に平行して46号人骨（幼小児）が出土した。45号人骨は46号人骨の埋葬時に掘り上げられ、旧地表面に放置されたのであろう。

F区北端で崩壊した土砂を除去し、白色砂層（第4層）から弥生土器2点と第3層直下で鹿角製擬似鉗を発見したが写真撮影後に崩落し、地点の確認、出土状態図の作製はできなかった。これは25日に出土した弥生深鉢形土器に近接した地点である。また南端部の39号人骨の西南部で47号人骨、中央部付近で頭蓋骨（48号人骨）を確認した。17時作業終了。

7月30日（火）晴。

9時作業開始。H区44・46号人骨、F区47・48号人骨の清掃・写真撮影・実測を行う。47号人骨のみ調査終了後に取り上げ。17時10分作業終了。

7月31日（水）晴。

8時50分作業開始。H区44・46号人骨を取り上げ。II-2区を北東に拡張し、茶褐色砂層（第2層）中で人骨（50号人骨）を発見、周辺に土師器が散乱していた。古墳時代人またはそれ以後の人骨と考えられる。

F区48号人骨の直下を掘り下げ遺物の存否を確認した。南端部に砂利が存在したので、その周辺を掘り白色砂層（第4層）から弥生前期鏡形土器を検出した。さらに砂利を追って東南に調査区を拡張し崗石・列石を発見、崗石下で人骨（49号人骨）を確認した。下顎骨付近で翡翠製勾玉1個・碧玉製管2個が出土した。

8月1日（木）晴。

9時作業開始。49・50号人骨の調査。49号人骨は極めて保存が悪く、足根骨は消失し痕跡も留めていない。さらに南側崖内で幼小児（51号人骨）と考えられる骨を検出したが、次年度の調査に譲ることとした。24日から作業を開始した1/1000地形図が完成。17時に第3次調査終了。

8月2日（金）晴。

調査用解散。

第4次調査

調査期間 1964年（昭和39年）7月18日～8月1日

調査責任者 金間 丈夫（山口県立医科大学教授）

調査員 島 五郎（大阪府立大学教授 医学部）

山本 清（島根大学助教授 文理学部）

国分 直一（下関水産大学校教授）

永井 昌文（九州大学助教授 医学部）
三島 格（熊本県荒尾中学校教諭）
金関 惣（天理大学助教授 教養部）
小片 丘彦（新潟大学助手 医学部）
近藤 正（鳥根県立博物館）
藤田 等（山口県立医科大学助手）
調査補助員 山田 高利（鳥取大学医学部解剖学教室）
田口 史枝（鳥取大学医学部解剖学教室）
調査参加者 池田 満雄（島根県立松江南高等学校教諭）
伊東 照雄（山口県下関市立勝山小学校教諭）
山名 巍（鳥取県立科学博物館）
古川 勝之（鹿島町立鹿島中学校教諭）
鶴郷 昭（鳥根大学学生）
石井 悠（鳥根大学学生）
伊藤 聖一（熊本大学学生）

7月18日（土）。

午前中、鳥取大学医学部解剖学教室の発掘機材の借用について了解を得る。山陰豪暴風雨のため一部不通。米子よりバスで松江に向かう。

7月19日（日）。

悪天行きバスは県道の上砂崩れのために終日不通。現地入りできず松江市金関先生宅にて待機する。松江市大宮建設越野嘉久社長より、黒褐色粘質砂土層（第1層）上に堆積する純砂層除去のためのブルドーザー提供の申し出がある。

7月20日（月）。

一畑バス忠雲線は佐太神社前までは定時運行とのことで乗車したが、鹿島中学校から佐太神社前まで歩く。途中山崩れで十砂が県道を越え佐陀川まで流入している。関係者によると明日までには土砂を除去すること。

14時作業開始。金関・山田・藤田の3名で前年度の調査範囲を明らかにするために崩落した砂を排除する。17時作業終了。

7月21日（火）。

8時15分作業開始。大宮建設提供のブルドーザーは、佐陀川に架かる橋の重量制限のため、搬入不

可能とのことで利用を諦める。午前中に土砂運搬用の一輪車を購入するために松江市に行く。午後、昨年度調査線の検出作業を行う。17時30分作業終了。

7月22日（水）。

8時30分作業開始。前日の作業を続行し、午後は第3次調査区の埋設部分の復旧作業を行う。17時30分作業終了。

7月23日（木）。

8時40分作業開始。第3次49号人骨の出土地点を調査終了時の状態にした。午後も崩落した砂の排除を行い、17時30分作業終了。

7月24日（金）。

8時40分作業開始。昨年度D区東側に近接する地域を、調査終了時の状態にするための排土作業を行う。茶褐色砂層（第2層）中に石組が露出し、砂の乾燥とともに崩落が著しくなる。特に東側での崩落が激しいために、黒褐色粘質砂土層（第1層）上の砂層の排除を集中的に行った。調査区西南端で2体の人骨（60・61号人骨）を検出した。60号人骨は頭蓋骨に青斑が見られた（図2）。



図版5 F区発掘情況（1964年）

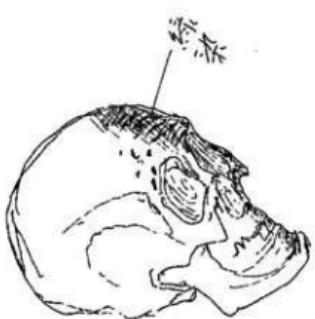


図2 60号人骨頭蓋骨図スケッチ
(金関恕による)

17時30分作業終了。

7月26日(日)。

8時40分作業開始。61号人骨の西南部を約 $5 \times 3\text{m}$ の範囲で掘り広げ、60号人骨の北東部分の調査区を拡張するために排土作業を行う。60号人骨の北西方、約6mの白色砂層(第4層)中で人骨(62号人骨・仰臥伸展葬)を発見した。頭蓋骨の上方30~40cmに1個の置石が見られ、人骨の周辺から須恵器・土師器片が検出された。61号人骨の南西部に2体の人骨(63・64号人骨)を発見した。山陰考古学会の見学会あり。

山陰考古学会の見学会。17時30分作業終了。

7月27日(月)。

8時50分作業開始。62号人骨の検出・実測と63号人骨の調査・実測準備を終える。60・61・62号人骨を午後から夕刻にかけて取り上げを行った。63号人骨は白色砂層(第4層)上半部にあり人骨の遺存状態は悪い。調査区の南西部で茶褐色砂層(第2層)中の右組を検出するため、同区域の黒褐色粘質砂上層(第1層)上の純砂層の除去を行う。17時30分作業終了。

7月28日(火)。

8時30分作業開始。茶褐色砂層(第2層)中の右組遺構(長さ約6.5m)を検出し、清掃後に写真撮影・実測を行う。61・63号人骨のほぼ中間地点で人骨を発見し64号人骨とした。17時30分作業終了。

7月29日(水)。

9時作業開始。右組遺構の実測が完了したので、北東端から石塊の除去を行い、約1/2部分で断面の写真撮影と実測を行う。右組下の白色砂層(第4層)の上半部で弥生壺形土器片2個体分が

一部写真撮影を行い、排土作業の都合から再度砂で覆い、上部と西南部分の排土を試みた。17時30分作業終了。

7月25日(上)。

8時50分作業開始。61号人骨の西南部を約 $5 \times 3\text{m}$ の範囲で掘り広げ、また60号人骨の北東部分の調査区を拡張するために排土作業を行う。60号人骨の北西方約6mの白色砂層(第4層)中で、人骨(62号人骨・仰臥伸展葬)を発見した。頭蓋骨の上方30~40cmに1個の置石が見られ、人骨の周辺から須恵器・土師器片が検出された。61号人骨の南西部に2体の人骨(63・64号人骨)を発見した。山陰考古学会の見学会あり。

出土した。実測後さらに掘り下げる一群の弥生土器片を発見した。また、石組下の灰黒色砂土層（第3層）と白色砂層（第4層）の接点で石圓いを発見。石圓い中に弥生土器中期壺形土器（焼成後に底部に穿孔）と柱状の石塊1・石塊1を検出。石圓いの最上面は灰黒色砂土層（第3層）中にあると考えられた。また、石組遺構の北東端の白色砂層（第4層）で頭蓋骨1と膝蓋骨2を発見した。位質関係から2体の人骨の存在が考えられた。64号人骨の調査を完了し取り上げ。17時30分作業完了。

7月30日（木）。

9時10分作業開始。石圓い中の調査を行い、遺存状態の悪い人骨（66号人骨）を検出した。柱状の石塊の下方から頭蓋骨が検出され、打製石斧片も出土した。前日、頭蓋骨1・膝蓋骨2を発見した地域の調査区を東に拡大し人骨（67・68号人骨）を発見、下部の人骨（68号人骨）の膝蓋骨上に置石があった。68号人骨の東北部に足根骨（69号人骨）のみが乱れない状態で出土し、その西方に頸椎・歯があった。17時30分作業終了。

7月31日（金）。

9時30分作業開始。66号人骨の石圓い中の柱状の石の下から、弥生中期土器片が出土した。また右



図版6 調査関係者（1964年）

前列（右から）山田、国分、伊東、三島、小片、藤田

囲中の白色砂層（第4層）上半部から弥生前期上器片が出土した。65号人骨上顎の下から碧玉製管玉1個が出土した。また、65号人骨に重複して70号人骨が検出された。67・68号人骨の北東部で、散乱した状態の頭蓋骨片・下顎骨・歯1を発見した。67・68・69号人骨の実測と取り上げを行う。17時30分作業終了。

8月1日（七）。

9時作業開始。65・70号人骨の写真撮影・実測を行った後に、調査区を拡大するために東南部の崖面を掘り広げ、2体の人骨を発見し71・72号人骨とする。また、その間に散乱した人骨を検出した。71・72号人骨の写真撮影・実測を終了し取り上げ、第4次調査を17時30分に無事終了した。

* 第2次～第4次調査では、古浦地区の4～5名の方々に調査に協力して頂いたが、第2次調査以外は記録に留めていないために割愛せざるを得なかった。

第6章 調査区の設定と層位

古浦遺跡は、鳥取県八東郡鹿島町古浦から恵雲、武代—南北1km・東西700m- の間に広がる砂丘上に立地している。砂丘は、砂州上に形成された風成砂丘で東西方向を基軸として、西から東方向に長楕円形状に形成され、最高所は21.5mにおよんでいる。西風・北西風によって形成された風成砂丘であるために、西（海側）は急斜面、東（陸側）では緩傾斜面となっている。墓地・包含層は陸側の緩傾斜面に形成されているために、調査した範囲では層は東に緩く下降し、南北方向ではほぼ水準の状態である。弥生時代の墓地も同じ条件のもとに形成されているために、埋葬は当時の地表から一定の深さに掘り下げたとすると、標高は内陸側の埋葬は海側の埋葬よりも低い。

調査区は、町・町内会長立会いの上で町所有地と決定したことは、第5章調査日誌（抄）の冒頭に記した。第1次調査は予察的な性格を持たせたので、予算・期日と調査員数の点から、調査の容易な地点を選定した。

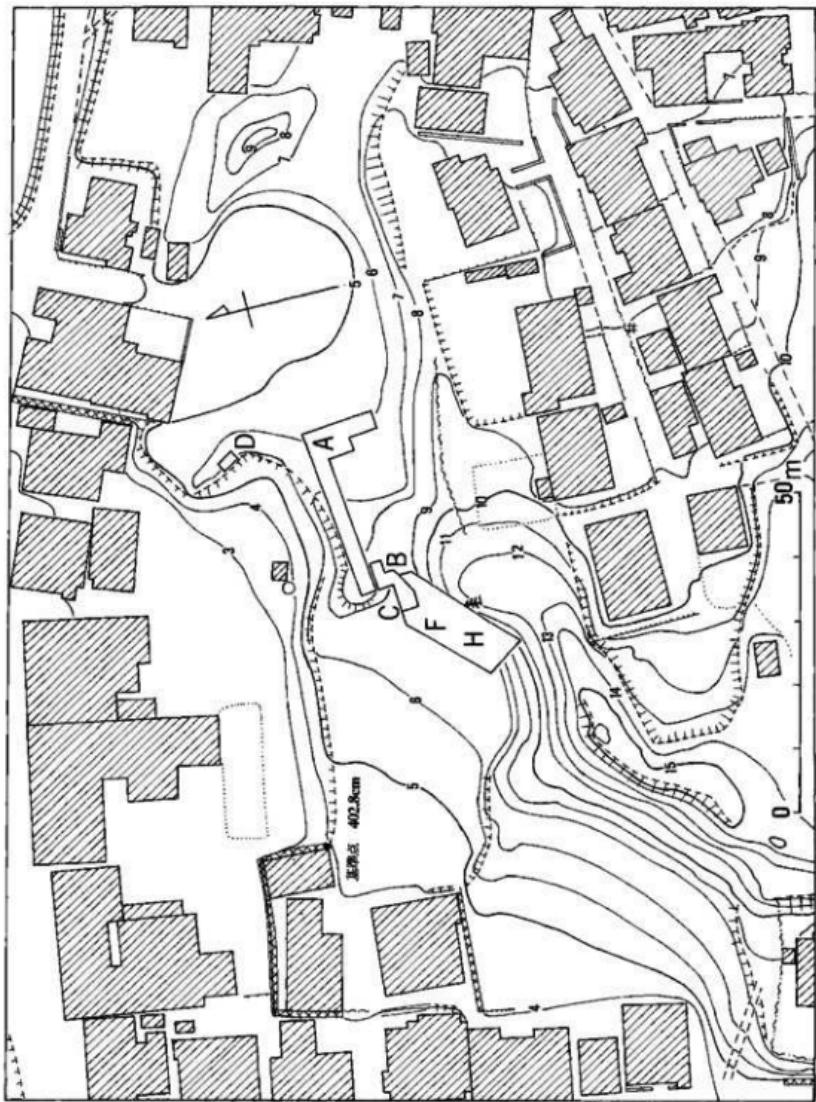
1948年8月の山本清が調査を試み、記録を残した地形図に記載されている山本峯一宅、食糧公團配給所、川谷熊一精米工場、青山與助宅は、1963年に遺跡周辺の地形図を作製した当時も、多少増改築されながらも健在であった。山本清はこれらの家々の裏手に近接した砂丘を調査地（4章図1参照）に選定している。山本峯一宅は佐陀川の左岸、湊橋を渡って河口に向かって右折した2軒目であり、5軒目が青山與助宅である。

1961年には砂丘は砂採りのために後退し、特に食糧公團配給所、川谷熊市工場、青山與助宅の裏手は魚干場として利用されていた（7章図版2）。湊橋を渡って直進すると、民家の裏手に標高5mの線が湾入した状態であり、右手に緩傾斜面が展開していた。これは南側正面の砂丘上に家屋があり、崩落を恐れて砂採りの対象外とし、西方向に向かった砂採りを行ったのであろう。また、D区を設定した地点が土手状に残っていた。これも粘土質を帯びた土と焼灰・多くの遺物を含む土が、砂採り後の利用に適さなかったために残されたと考えられる。

D区から南西に延びる崖面に包含層が観察され、標高7~8mの線が蛇頭状に残り、その南には砂丘が、砂丘上には老松が境界標として残っていた。東は幅15m、長さ40mの緩傾斜面で、純砂層が殆ど取り去られ包含層が露出した状態であった。この緩傾斜面にA調査区を設定した。1962年以後はA調査区の拡大、D区の調査を行いながら、調査の主力は西南方向に向かう。

包含層に関する記述は、山本清「上師器を中心とする砂丘遺跡の埋葬例について」（『日本考古学協会報別編3』1954年 19~20頁）で、遺跡は「速河佐太川の河口に近い岸に接している。近年

図1 トレンチ配置図



この砂丘の南麓に家屋を建て並べたので、その砂丘の麓を切り取って、そのため、その際に東西60mばかり厚さ1～2mばかりの遺物包含層の断面を露出することになった」としている。この包含層から「弥生式土器、土師器、須恵器、貝類、獸骨、人骨等であるが、弥生式土器は少量であり、須恵器も比較的少なく、土師器が大部分を占めている。」、出土遺物の「大部分は住居関係のものと考えられる。」。人骨については埋葬されたもので「遺跡の一部は墓地」で、既に10体ばかりが発見されているとしている。

この報告の基礎となった青図「八東郡恵雲村、佐陀川南岸遺物包含地、写真撮影位置図昭和23年8月」と「人骨出土地点付近関係位置図」1／20図（4章1・2図参照）が残されている。

「八東郡恵雲村、佐陀川南岸遺物包含地、写真撮影位置図」によると、佐陀川左岸に並ぶ山本峯・宅から青山寺助宅までと、その南側の砂丘東西約70m・南北50mが測量されている。食糧公团配給所の東南隅を0mとし、砂丘の最高所は13mである。平面図では包含層は短い斜線で表現され、西側で8～9m、途中不明の所があるが東側で高さ1mの位置に記入されて、包含層の傾斜を知ることができる。

「人骨出土地点付近関係位置図」（4章図2）では、包含層は人骨出土地点から東（内陸側）へ約6mが実測され、地層はほぼ水平で、遺物包含層は遺物・石塊を中心に点線で「レンズ状」に描かれている。人骨の直上に水平に線が引かれ純砂層と記載されている。

層としては純砂層・遺物包含層・純砂層と注記しており3層に区分している。第1層の純砂層は我々の調査した黒褐色粘質砂土層（第1層）上に堆積する純砂層で、人骨が埋葬されている第3層は白色砂層（第4層）に相当する層で、人骨は第4層の上半部分に位置していると考えられる。

包含層の外端部分に「此ノアタリ粘土質ハ所ナク貝類ヲ含ム」の注記があり、層自体が粘性を帯びていることを示している。この地点では、われわれが調査した第1層黒褐色粘質砂土層に比較して、粘性はあるが有機物の含有が少なく、第2層茶褐色砂層との区別が困難であったのである。恐らく石塊が集中している部位が茶褐色砂層（第2層）に相当すると考えられる。また、第3層灰黑色砂土層は希薄であるか、存在しなかった可能性がある。

小片保は「出張図八東郡恵雲町古浦砂丘遺跡発掘報告書」1956年（孔版）で、全体としては「明確に3層となり、第2層が包含層をなす。この層は貝類及び土器片が多量に露出している。岸面は東西に約26m、南北に23mの長さあり、鍵の手をなす。該層を見ると西方は地表面に近いが、東方へ間断なく連続している。南北の断面では南方は地平面に平行に続くが、北に及ぶと急激に強い勾配を示し、その末端は宅地の地平面に近づく。」としている。前に触れた図（4章1図）の状況とはほぼ同じである。

調査は、第1地区A・B・C、第2地区の4箇所で行われ、第1地区は佐陀川左岸の道路に面し

た、青山與助宅裏の道路端から約9mに縫形に展開する崖面で、AとC地点は南崖面にあり、△地点は高さ11m（宅地面を0m基準として計測したと考えられる。）の砂丘上、C地点は△地点に近接した崖面、B地点は△地点の北東約22mの崖面に設定されている。

△地点では「包含層の厚さは40cmに及んでいる。遺物包含層の上を第1層、包含層を第2層、それ以下を第3層とし、第3層以下には遺物を認めず、宅地平而迄統くと考えられる。」として、包含層中には上師器が圧倒的に多く須恵器は極めて少なく、人骨は第3層に埋葬されている可能性を指摘している。

B地点では「表十から剥がしていくと、深さ20cmの處で包含層に達する。これは△地点の第2層の連続と考えて差支えない。表上を第1層、この層を第2層とする。第2層は黒褐色の粘土層で砂粒も含む。その下は矢張り同様な粘土層であるが、これには赤土の塊を含み全体として黄褐色に見える。第4層は堅い砂層で灰褐色であり、これ迄を第4層とし、それ以下は遺物が無いので省略する。以上の如く△地点とは可成り異なった層位を示し、複雑で遺物の種類も多く、且数も多量である。」と詳細に記述している。

遺物について「第1層に遺物を見ず、第2層からは少數の土師器破片を見るのみ、第3層との境界近く須恵器破片を混入す。次第に深層に行くに従って遺物も増加、遂に自然石の並列に至る。これを第4層とする。第4層の遺物の主体をなすものは圧倒的に土師器であり、中に少數の弥生土器を含む。また少量の須恵器もある。」とし、第1地区△地点とB地点の層位について異なった状態を示していることを記述している。

第1地区C地点では人骨の出土位置について、第2層（遺物包含層）の直下の第3層の上部に存在していたとし、崩落の危険があるために詳細な調査は不可能であったとしている。第2地区は砂丘の前面にあたる場所で包含層についての記述は見られない。

このように、調査地点によって層位は異なり、層内の有機物の包含状態や粘土の含み具合、それに基づく色相の違いなどがある。砂丘の形成の速度・停滞・風・雨水による浸食、草類の繁茂、人間活動など様々な条件によって複雑な堆積を繰り返すと考えられる。

金門丈夫・藤田等「鳥取県八束郡鹿島町古浦砂丘遺跡」『日本考古学協会第29回総会研究発表要旨』 昭和38年4月一では「遺跡は、内陸に向かって傾斜する砂丘面に形成された4つの包含層より成っている。第1層は粘土を混えた茶褐色砂土層で須恵器を包含し、第2層は斑文を有する白砂層で古式土師器を包含し、第3層は上部灰黒色砂層中期弥生式土器、第4層は前期弥生式土器・人骨を包含している。」（文責 藤田）と第1次調査に基づいて報告しているが、第5層の黒色砂層の存在を確認しない段階で、第3層を上部黑色砂層とした理由が明確でない。これは、第2次調査（昭和37年）で確認した第5層の記憶の影響であろう。

ついで、企闘丈人・藤田等「鳥取県八束郡鹿島町古浦砂丘遺跡」『日本考古学協会昭和38年度大会研究発表要旨』一昭和38年10月ーで「遺跡は第1包含層上の3~4mの新鮮砂層を除くと、その下に5層あり、第1層は粘土を混えた茶褐色砂上層で、第3・4式須恵器を包含し、第2層は斑文を有する白砂層で、少量の第2式須恵器と古式土師器を包含し、石塁が構築されている。第3層は上部黒褐色土層で中期弥生式土器、第4層は貝粉を多く含む白砂層で前期弥生式土器を包含している。今回の調査で、4層は一部、貝粉を含み斑文のある白砂層（第4層上部）と貝粉を含む白砂層（第4層下部）に区別されることが明確になったが、4層上部の年代は弥生前期を下ると考えられない。第5層は下部黒褐色砂土層であるが、今回の調査では遺物は出土しなかった。』（文責 藤田）と第4層を上部と下部に区分し、第5層の調査を試みたことを、第3次調査の結果に基づいて報告している。この内容は出土遺物について問題を含むものの、基本的な層位の確認が確立した状態を物語っている。

『日本考古学年報』は、調査年次と出版年月日に差があるために内容が錯綜している点で問題がある。藤田等は『日本考古学年報』14 昭和36年度（1966年刊）では、第1次調査の層位について「包含層は大略4層に区分され、第1層は3・4式須恵器および上師器を包含し、粘土でかためた部分もあった。第1層はさらに数層に区分できる。第2層は古式土師器を包含し、この層中には石塁が発見された。第3層は灰黒色の砂層で極めて薄く、遺物は発見されなかった。第4層は貝粉を混えた砂層で、前期弥生式土器を包含している。」とし、内容的には二つの協会の研究発表要旨を踏まえた記述を行っている。

金闘丈人は『日本考古学年報』15 昭和37年度（1967年刊）で、第2次調査の層位について「包含層は4層よりなり、第1層は粘土を混えた褐色の砂土層である。主として須恵器及び比較的少量の土師器を包含する。第2層は黒色の斑文を有する砂層で、古式土師器及び比較的少量の須恵器を包含する。第3層は上部灰黒色の砂層で少量の中期弥生式を含む。第4層は淡灰乃至白色の砂層で、前期弥生式完形土器と埋葬姿勢を保有する人骨群を包含している。第4層の下には黒色の砂層があるが、遺物は包含されていない。」と初めて第5層の存在に触れている。

また、金闘丈人は第3次調査の層位について『日本考古学年報』16 昭和38年度（1968年刊）では「日本考古学協会第29回総会研究発表要旨」一昭和38年4月ーに準拠して記述をしている。『日本考古学年報』17 昭和39年度（1969年刊）で企闘丈人は第4次調査の結果について、特に層位に触れずに、人骨の出土層位を第4層上部と下部に区分し、第4層上部が有機物を含み人骨の保存状態が極めて悪いこと、仰臥伸展葬の古墳時代埋葬が存在することを指摘している。

金闘・藤田の報告内容は、層位・包含層を主体としているし、調査が長期間におよび内容的に各年度の調査日誌に基づいて記述されたこと、すべての調査資料の整理が、調査後直ちに行われなかっ

たこととも関係している。ことに第3層の年代については、調査時点では調査員の間で統一した見解を持ち得なかったことも事実である。第4層には複数できるほど貝粉を多量に含む白色砂層であり、そのことが良好な人骨の遺存を可能にしたことは明らかである。しかし、第3次調査で第4層上部に斑文のあることを確認した。また、第4次調査において第4層上部は単に斑文を持つだけではなく、有機質を含み人骨の遺存状態が悪い部分のあることが確認され、層の堆積状態が一様でないことが調査時点でも明らかになった。

島根大学考古学研究会は、1963年に『菅田考古』第1号を刊行し、同年8月の第2号に第1次調査から参加していた教育学部2年の勝部昭が「山浦砂丘遺跡第三次調査参加記」を発表している。それによると「地層の状態は凡そ次のようである。上—遺物を含まない層、中—奈良・古墳時代の層、下—弥生の層に人別できる。即ち上は3m以上の所謂砂、中は人工的な土（乾くと固くなる）が50cm、黒い層10cm、泥を含む砂1m位、…下は中との境に黒い層10cmがありその下1m位のところまでに人骨ができる。」としている。上の遺物を含まない層が第1層上に堆積する新鮮砂層、中が第1層で、泥を含む砂1mが第2層、「下は中との境に黒い層10cm」が第3層、その下が第4層と考えることができる。

1986年鹿島町教育委員会は佐陀川に架かる渓橋の南端の緊急調査を行い、標高約6.2mの地点に3箇所の調査区を設定している。層位についてG-1区では「地表下約30cmは暗灰色の表層、その下は白色純砂層、礫混じりの白色砂層で、再び白色純砂層となっている。」とし、G-2区では「表層にはG-1区と同様に暗灰色土が約20cmの厚さで堆積し、この下層には白色砂層が堆積し、…白色砂層の下層は淡い茶色を呈する砂層で、約50cmのこの層の下には白色の純砂層が堆積している」(『鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書1』1986年3月)と報告している。この地点は、1962年第2次調査のD地点に近い場所であるが、標高の関係であろうか様相を異にしている。

林正久は本報告書の第1章「自然環境」の中で、古浦砂丘を砂州の上に西風によって形成された累重砂丘で、従来の調査の層位に関する記述を総括し、

0層：新鮮な砂丘砂（厚さ5~10m）

- ①層：粘土混じり茶褐色砂土層／赤土混じり砂層／褐色 —— 古墳～奈良時代遺物
- ②層：灰黒色斑紋入り白砂層 —— 弥生終～古墳時代遺物
- ③層：上部黒褐色砂土層／黒褐色粘土層／灰黑色砂土層（厚さ10cm） —— 弥生中期遺物
- ④層上部層：貝粉混じり淡褐色斑紋入り白砂層／堅い灰褐色砂層 —— 弥生前期遺物
- ⑤層：下部黒褐色砂土層／黑色砂土層 —— 無遺物層

と整理している。各報告の層名が併記しており、「これより下は不明であるが③層の下は、おそ

らく海成の砂州層であると予想される。と整理している。

さらに、武代浄水場付近の露頭での砂丘地構成物の観察と分析資料の採取、古油海岸での砂質試料による粒度分析と鉱物分析の結果、少量の水山ガラスが含まれ、その起源を鬼界アカホヤ火山群

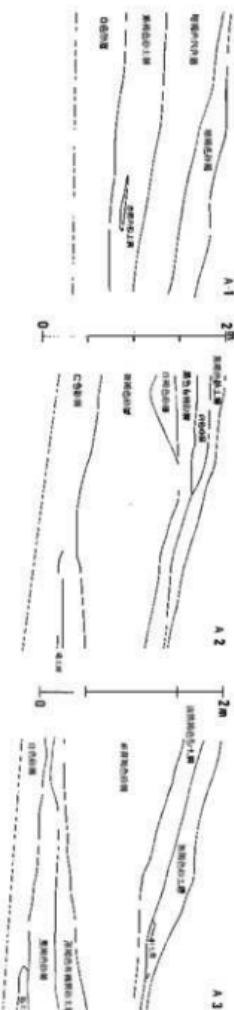


図2 A-1・2・3区北壁断面図

に求め、それが④層上部層に多く含まれるほか、①層・③層・④層下部層にも少量存在することを確認し、④層下部層の形成は繩文前期以前にさかのぼることはない。③層に見られる腐植土の存在は砂丘の安定期を示しているとしている。

以上が古浦遺跡の層位に関する既述である。調査の年代、場所によって観察は異なり複雑な様相を呈している。ことに層の色彩、有機質の含有など観察の条件で異なる場合があることはいうまでもなく、表現も種々である。

次に各調査年度の調査区（図1・図3）の層位について説明する。調査区の設定は調査日誌（抄）に記したように、A・B・C・D区までは多少の広狭はあるが規則的に設定している。F・H区については第1層上に堆積する純砂層が5～6mもあり、広範囲に砂層を除去することができず、調査は手掘りで階段状に進め（5章図版5参照）、崖面を掘り崩す状態で調査が進められ、調査区の設定は不可能であった。また、乾燥による層の崩落が著しく断面の図化は困難であった。しかし、F・H区の層序は安定し、層位に混乱は見られなかった。

古浦周辺には水準点もなく、三角点も最も近い所で南1.5kmの朝日山山頂（標高341.8m）であるために、基準点を移動することは困難であった。そのために1961年（第1次）は、古浦での午前11時の海面を標高0 mとして、小範囲の地形図を作製した。1962年（第2次）では古浦における干潮時と満潮時の中间海面を標高0 mとし、1962・1963・1964年（第2・3・4次調査）はこの基準を使用した。そのために基準高が二つになり、混乱を避けるために、1961年と1962年の一部の資料には標高を記載していない。

A-1～3区北壁（1961年－第1次調査）

A-1～3調査区北壁（図2）は、砂採りで露出した包含層（第1層）に、東西方向に設定した調査区である。調査区は $3 \times 2\text{ m}$ 、各区間の隔壁は1mである。標高については先に触れた理山で記載されていない。A-1区から3区は、西海側から、東一陸側に緩やかに下降している。

A-1区では、僅かに残っていた純砂層を除去すると暗褐色砂層（第1層）で、厚さ10～30cm、西端部分は削平された可能性がある。部分的に粘性を持ってはいるが、全体としては上層の純砂層に近い成分である。標高は西端で8mを僅かに越える程度である。

第2層は暗褐色包含層で、厚さ40～60cmで西側が厚い。全体に粘性を帯び、最も多く有機質を含んで、部分的に炭化物が薄い帶状の層をなしている。

第3層は茶褐色砂上層で、厚さ25～50cm、東に向かって僅かに下降している。有機質は極めて少ない。一部に幅60cm、最大厚5cmのレンズ状に赤褐色砂土が堆積している。

第4層は白色砂層で貝粉が混入し、有機質は全く見ることができない。

A-2区は純砂層を取り除くと、黒褐色砂土層（第1層）で東に下降している。第2層は白色砂層でレンズ状に埋み込んでいる。

第3層は黒色有機砂層、厚さ10～20cm前後である。第1・2層は第3層が部分的に削平されたのちに堆積した層と考えられ、その意味では西端にある第4層の白褐色砂層も再堆積層であろう。

第5層－事実上の第3層（黄褐色砂層）で、65～100cmで厚く堆積し、下面は水平に近い状態を示している。第6層は白色砂層で、貝粉が混入し、有機質は見られない。東側に粘土層があるが、防塗ではなく自然に堆積したものである。

A-3区は傾かな純砂層を取り除くと黒褐色砂土層（第1層）で、2区第1層に対応している。東に傾斜し、東端部に薄い粘土層が見られる。第2層は淡黒褐色砂上層で東に下降し、第3層は茶褐色砂層で、厚さは西端で1.3m、東端で50cm、下面は東に向かって傾斜している。部分的な浸食を考えなければならない。

第4層は黒褐色有機質砂上層で厚さは10～30cm、上面に比較すると下面の東への傾斜は緩やかである。第5層は黒褐色砂層で下面は東に向かって僅かに傾斜している。4・5層ともに有機質を含んでいるが、量的には4層の方が多い。

第6層は貝粉を含む白色砂層で、東端に粘土層が見られる。

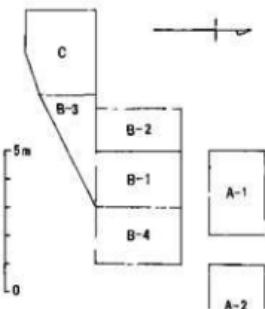


図3 A・B・Cトレンチ配置図

B-3～C区南東壁（1981年－第1次調査）

B-3～C区の南東壁の断面図（図4）は全長7m、トレントの位置関係図（図3）を参照すると解るように、北東から南西を軸にしており本来の層の傾斜を示していない。

純砂層下の第1層は黒褐色砂上層で、厚さ20～50cm、北東に向かって約10度、緩やかに下降し、土師器・須恵器が混入している。北東端部に2個所浸食によると考えられる陥入がみられる。

第2層は淡黒褐色砂土層、厚さ15～40cm、土師器・須恵器を包含している。中央右寄りに幅約70cm、深さ40cmの断面コ字状の掘り込みが観察できるが、その性格は明らかにできなかった。下面は安定性に欠けている。1・2層の間に厚さ10～20cmの白色砂層がレンズ状に堆積している。

第3層は黄褐色砂層で、厚さ30～130cm、石塊が多く見られた。少量の土師器を包含し小さな人骨片を含んでいる。第4層は茶黃褐色砂層で、厚さは20～50cm、下面の割に上面は安定せず、遺物は殆ど包含していない。

第5層は、白色砂層で貝粉を多く含んでいるが、遺物片は殆ど見ることができない。

この断面図で観察できる層位は、比較的安定した状態で、第1層と第2層は有機質の含有量の相違によって色の違いが生じたのであって、第3層と第4層についても同様のことといえるのではないかだろうか。因みにA区北壁との距離は4mである。

A-4～9区北壁（1982年－第2次調査）

A-4～9区北壁断面図（図5）は全長22m、東西を軸とする図でA-1～3区北壁に連続する図である。東に向かって緩やかに下降しているが、4・5・6層になると傾斜は一段と緩やかになる。

純砂層下の第1層は黒褐色砂土層でやや粘性を帶びている。厚さ10cm前後の薄い層で土師器・須

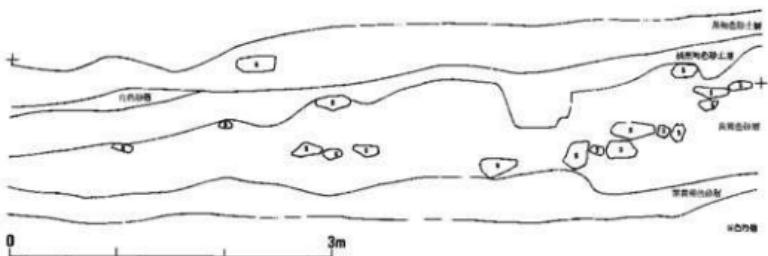


図4 B-3～C区東南壁断面図

患器が含まれている。第2層は赤褐色砂土層で、厚さ10~25cm前後、包含する遺物は第1層と大きな違いはない。

第3層は暗褐色砂層、厚さ60~80cm前後、一部に厚さ10cm前後の黒味の強い部分が見られた。土に上師器を包含しているが量的には少ない。第4層は白色砂層、厚さ15~25cm遺物は含んでいない。東側で第3層との区別が不明瞭になっている。第5層は黒色砂層、厚さ10~15cm前後で遺物は包含していない。1961年A-4区北壁に見られた暗褐色砂層に連続する層と考えられる。

第6層は白色砂層で下端を確認していないが、F区で確認した黒色砂層（標高5m）に連続すると考えられる。

F区崖面断面図（1962年－第2次調査）

F区崖面断面図（第6図）は、24号人頭骨（幼児・仰臥葬）が崖面に露出したのを受けて、全層位と人骨の位置関係を示すために作製した図である。軸が南北であるために層に沿う傾斜が見られない。純砂層を除去すると第1層はほぼ水平に堆積している。砂を主体としているが赤土混じりの粘土層、厚さ20~30cm、他の区に比較すると薄い。須患器・上師器を包含しているが、A・B区に比較すると量的に少ない。

第2層是有色斑点を交える白色砂層で有機質の含有は僅かである。土師器を包含しているが量的に少ない。厚さ60~80cm、A・B区では茶褐色砂層・黄褐色砂層・茶黄褐色砂層・暗褐色砂層と表現されている。

第3層は灰黒色砂層で、厚さは15~25cm、有機物を含む層である。遺物の包含は極めて少なく、上面に近い部分で古式土師器の断片を採集したに過ぎない。

第4層は厚さ100~135cmで最も厚いが、層を斜断したように有色斑文のある白色砂層と僅かに黒味を帯びた純砂層に分類できる。上半部分は有機質の含有が僅かに認められ、中央部に小疊群がありほぼ水平に分布している。このような小疊群をF・H区で数箇所確認したが土器を伴う場合がある。遺物の包含ではなく、人骨以外で出土するのは埋葬に関連した、または関連すると考えられる遺

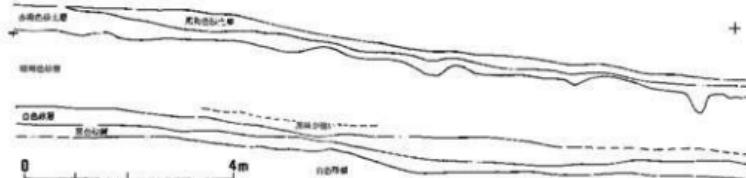


図5 A-4～9区北壁断面図

物のみである。24号人骨は4層下半から出土し、幼児であるにも関わらず遺存程度が良好であるのは、4層中に肉眼で判別できるほど含まれる貝粉のためである。

第3層灰黒色砂土層は、F・H区で広範囲に認められた。有機分の含有から考えて、砂丘活動が停滞し植物が繁茂した可能性がある。この層は遺物の包含が殆どなく年代を決定する資料が充分でない。この層の年代については調査当時、調査員の中で統一した見解を持ち得なかったことは既に触れた。

山本清は、第4層の小礫群に斜行する有色斑文ある白色砂層と僅かに黒味を帯びた純砂層によって生じる面を弥生前期の地表面と考え、第3層灰黒色砂土層中に古式土師器が認められること、人骨出土層位が第3層より余りに深いことを考慮して、第3層は古式土師器の層と考えられた。しかし、第4層中の斜行する面を弥生前期とすると、同様な状態は他の地点では観察できず、小礫群が何故水平に堆積しているのか説明ができない。

全調査を通して、弥生前期人骨は4層上半部と下半部から出土し、伴出する弥生上器に著しい形式差はないこと、少なくとも弥生前期には砂丘の活動は極めて活発で、急激に砂丘が成長していたと考えられること。中期中葉の弥生上器を供獻された66号人骨のL形に配置された置石（地上標識）の上部が、灰黒色砂土層（第3層）にあることから、灰黒色砂土層（第3層）は弥生中期に極めて近い時期に形成された層と考えられる。

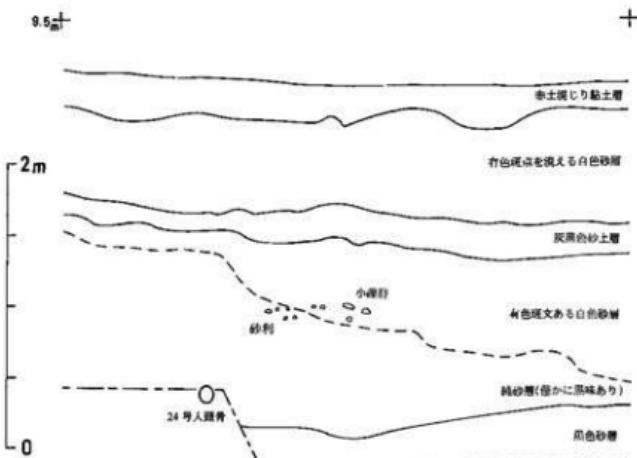


図6 F区東壁断面図

第7章 遺構と遺物

第1節 表面採集遺物（図1～15）

表面採集の遺物は多岐にわたり、弥生土器・上師器・須恵器・土製品・石器・骨角器などがある。遺物は砂丘上に散布したり、崖に露出したり、崩落した土砂中に含まれていた。また、周辺の人々が自家に保管していた遺物を提供されたりした。しかし、最も協力を頂いたのは古浦在住の恵雲小学校生徒川上一義君で、調査開始以前から熱心に遺物を探集し、調査開始後も砂採りに伴って発見された遺物の保管に努力した。調査毎年に採集された遺物を調査間に提供された。その努力と好意に改めて感謝したい。

弥生土器壺（図1-1）は、奥原省一郎が恵雲小学校在任中の、昭和44年から昭和50年の間に、古浦遺跡で採集した資料である（奥田省一郎・一宅博七「八束郡鹿島町古浦遺跡表面採集資料について」島根考古学会誌 第3集 1986年11月）。奥田は2218点の遺物を採集し、その一部を報告している。

弥生土器は採集された資料の中で、復原された唯一の土器である。高さ21.0cm、胴部最大径21.6cm、口縁部径13.2cm、底径8.2×8.6cmで僅かに歪みがみられる。口縁は良く開き、胴部は玉懸状に良く張っている。口縁部直下にヘラ描きに沈線、肩部には削り出しの段があり、段の直下に4条の貝殻施文の平行線が巡っている。焼成は良く、内外面ともに丁寧なヘラ調整が施されている。内面は底部は斜め方向にナデ上げ、下胴部から口縁部まで横方向のヘラナデが見られる。外側は底部側面に指圧痕が並び、底部から胴部まで横方向、上胴部は斜行するように、頸部は縦方向に、口縁部は横方向にヘラで研磨している。他の資料から考えると、内面の下胴部、外側の縁部の縦方向の調整は、縦方向のハケ目による調整と考えられる。底面も一定方向にヘラ調整が加えられ、やや凹底である。下胴部と底面には焼成時の黒度が認められる。前期中葉の土器である。

弥生土器壺（図1-2、図版5）は、小片保が古浦遺跡で砂採り業者から寄贈を受けた資料である。口縁部が欠失しており、極めて新しい割れ面が観察されたので、砂採り中に縁部の一部を破損したのであろう。現存高19.0cm、推定復原高20.5cm、胴部最大径19.5cm、底径7.8cmで、球形の胴部である。器壁は淡白褐色で焼成は極めて良好である。頸部にヘラ刻みを施した突帯1条、肩部には削り出しによる段があり、その直下にヘラ描き沈線2条、上胴部には貝殻腹縁を突き刺し、手前に引いて施文した羽状文が、上方から施されている。さらにヘラ描き沈線2条があり、ヘラ描き沈線は8回の描き継ぎで一周している。沈線2条の下には縦方向に短い直線文が3・4・4・4条と反復して施されている。

調整は「率で、胎土中に砂粒が多く含まれているが表面には殆ど見ることができない。一部にハケ目痕が残っており、ハケ調整後にヘラ調整が行われている。ヘラ調整は内外面ともに行われ、底面にもおよんでいる。内面は胸部から底部にかけて、右斜め上にナデ上げ、口縁部までは横方向のナデを施している。外面は底部のナデは斜交し、頸部はヘラ横ナデの後にさらに細かく横ナデし、口縁部はヘラ横ナデで調整している。前期中葉の土器。

弥生土器壺（図1-3）、重原秀明所蔵品で東森市良が1964年4月に実測した資料である。小形壺で高さ14.0cm、口径7.0cm、胸部最大径14.0cm、底径6.3cmである。器壁は淡茶褐色で大粒の砂粒を含んでいる。焼成は良好で、口縁部から胸部にかけて丹塗りの痕跡がある。

口縁部は良く開き、球形の胸部を持っている。頸部にはヘラ焼きの2条の太めの沈線があり、貝殻腹縁による羽状文、その直下は削り出しの段となっている。また、肩部にも削り出しの段があり、5条の横方向のヘラ沈線が見られ、沈線の間には貝殻腹縁による羽状文がある。それは2段の有軸羽状文のような効果を示し、さらに貝殻腹縁による山形文と連続している。内外面ともにヘラ調整が行われているが、底部付近の調整は粗である。前期中葉の土器である。

弥生土器壺（図1-4、図版6）は、口縁部が欠失しているし、頸部は内面が剥落した破片（1/8）があるに過ぎないが、肩部以下はほぼ完形である。壁体は淡茶褐色で、一部に黒斑が見られる。胎土中には砂粒が多いがヘラ調整で内部に沈んでいる。推定高27.6cm、胸部最大径20cm、底径7.5cmの平底である。胸部の張りは少なく長胴型である。

頸部にヘラ焼きの6条の沈線がある。全体にヘラ調整が施され、沈線の下は短く横方向に、肩部はやや右下がりに、胸部から底部は縦方向に長さ5~6cm程度にヘラ調整がみられる。調整だけから見ると中期的な様相を示している。内壁は剥落して観察ができない。前期後葉から末の土器である。

弥生土器壺（図1-5、図版7）は、口縁部が欠失している。口縁部は余り開かないと考えられる。現存高17.8cm、胸部最大径15.5cm、底径6.0cm、凹底である。肩部最大径は器高の1/2にあり、肩部の段の痕跡が僅かに残っている。器壁は茶褐色で一部に黒斑がある。器壁の調整はハケで整えた後にヘラ調整を行っている。内面は胸部から底部にかけて、幅1.5cmのハケで左斜め方向に調整した後に、ヘラで縦方向に短くナデあげている。胸部から肩部は横方向のヘラ調整、口縁部は一部にハケ調整の後にヘラで短く横方向に調整している。外面は底部にハケ調整の後に指による調整がみられ、胸の一部には横方向のヘラ調整、他の部分は斜め方向の短く「率」なヘラ調整が行われ、口縁部は横ナデをしている。前期後葉の土器である。

弥生土器壺（図1-6）は、口縁部・底部が欠失した小片で、胸部最大径は15.0cmである。器壁は淡褐色で砂粒を多く含み、焼成はやや弱い。外面は剥落が著しいが肩部にハケ目の痕跡が観察で

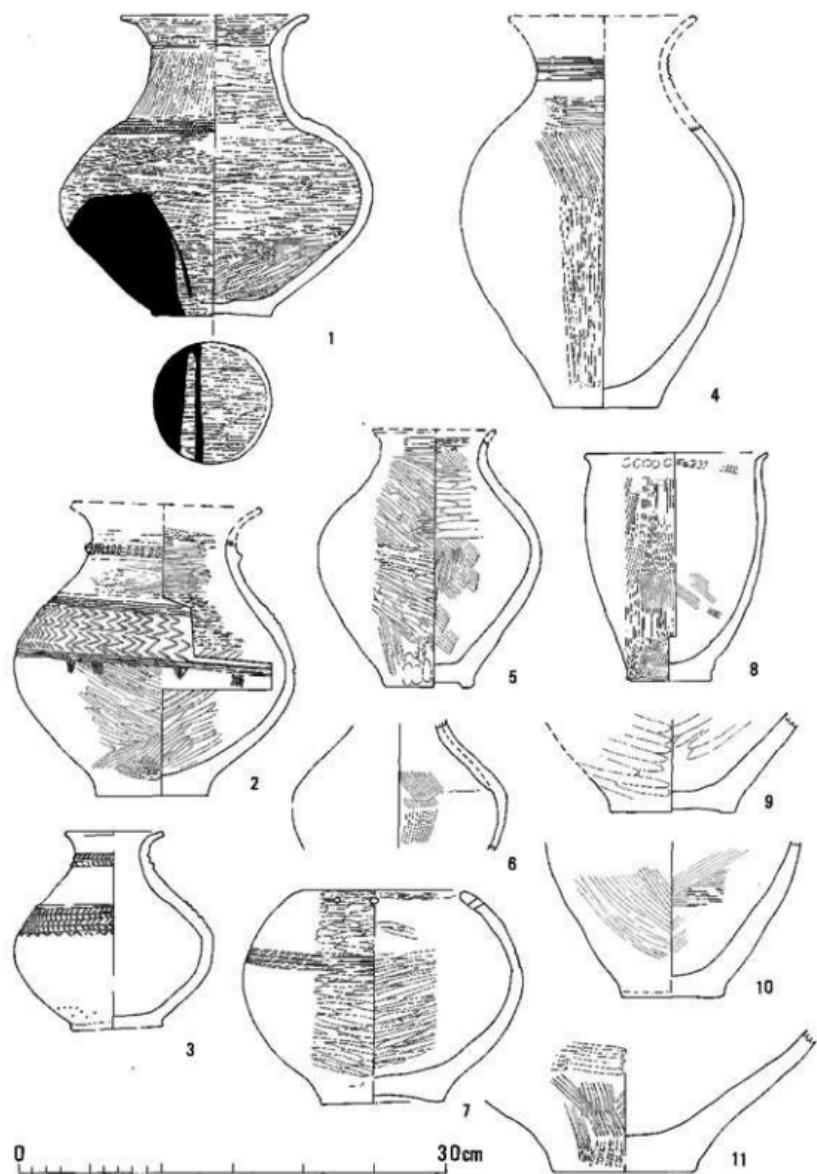


図1 弥生土器1

きる。内面は下胴部に粗いハケ目、上胴部は細かなハケで左斜め方向に調整した後に横ナデを行っている。胴部内面に粘土の張り付け痕があり弧状の痕跡を観察することができる。前期末の土器である。

弥生土器無頸壺（図1-7、図版8）は、完形品である。器高15.2cm、胴部最大径19.5cm、底部径8.5cm、凹底で安定した器形である。器壁は淡褐色、胎土中の砂粒が多いが焼成は良好である。口唇部は丸味を持ち、ヘラ調整が見られる。口縁部には径5.0mm前後の孔が見られ、2個一対2組で紐孔となっている。胴部にヘラ描きの沈線4条があり、一本が3回描き継ぎされている。内外面ともにヘラで横方向に丁寧に調整されているが、口縁部内面は剥落が見られ観察が充分にできないがヘラ調整であろう。前期後葉の土器である。

弥生土器壺（図1-8）。大社町猪日收藏庫蔵品。昭和28年青山與助宅裏で完形の高坏とともに採集されている。器高16.3cm、口径12.5cm、底径5.0cm、平底、口唇部はコ字状で胴部の張りは殆ど見られない。器壁は淡褐色・淡赤褐色、口縁部から胴部にかけて黒変している。胎土中には砂粒を多く含んでいるが、焼成は良好である。外面は口縁部下から底部にかけ全面にやや粗いハケ目調整が行われている。口縁部は横ナデの調整があり、指圧痕が観察される。前期中葉～後葉の上器である。

弥生土器底部（図1-9・10・11）。9は底径9.7cm、凹底である。器壁は淡茶褐色で砂粒を多く含んでいる。調整は内外面ともにヘラ調整で、内面は右斜め上に、外面は左斜め上にナデ上げている。長胴型壺の底部であろうか。10は底径7cm、平底である。器壁は茶褐色で一部に黒斑があるが焼成は良好である。胎土中に砂粒が多いが、調整は丁寧に行われ、外面はヘラで左斜め上にナデつけている。内面もヘラ調整である。長胴型壺の底部であろうか。11は底径10cmの半底である。器壁は淡褐色で一部紅褐色で2次的な火を受けている。調整はハケとヘラで行われている。内面は剥落して観察ができないが、外面は最大幅4.0cmの粗いハケを短く上方に向けて使用し、下胴部からヘラを横方向に使用して調整している。大形壺の底部であろう。3点とも前期中葉から後葉土器の底部である。

弥生土器壺（図2-1、図版10）。口縁部を1／2欠失している。器高は20cm、胴部最大径13.6cm、底径6.1cm、長胴型の壺である。口唇部は丸味があり、かすかに折れ曲つたように開いている。器壁は明淡褐色で一部に黒斑があり、胎土中に砂粒が多く見られる。外面口縁から胴部まで幅2.5～3.0cmのハケで縦方向、口唇部に近い部分は横方向に調整している。胴部から底部は縦方向のハケで整えた後に、軽くヘラで調整している。内面は口縁部はハケで横方向、口縁部から胴部はヘラ横方向、胴部以下は縦方向に調整している。器形的には前期後葉の長胴型壺に類似しているが、口縁部・口唇部の形態、調整方法から中期前葉の土器と考えている。

弥生土器直口壺（図2-2、図版9）。鹿島町立歴史民俗資料館蔵。古浦遺跡発見の端緒となつた壺で、古浦大満宮宮司の宮永庵が開館準備中の佐太考古館にもたらした上器である。島根大学山本清の注目するところとなり古浦遺跡の調査が開始された。

器高15.0cm、口径8.4cm、胴部最大径15.7cm、底径6.7cm、凹底である。器壁は淡褐色・淡橙色で一部に黒斑がある。胎土は精良、焼成は良好で、細かな砂粒を含んでいる。口唇部は直立し、やや回味がある。直立した口縁部には3条のヘラ描き沈線を3段に巡らし、沈線間と上・下に、ヘラ書きの刻みを施している。卡蓋状の胴部外面は横方向のヘラ調整が加えられ、底部にかけては右斜め上方向にヘラ調整。内面は上胴部はハケ付で整え、直口部は横ナデされている。底部の張り出し部分は粘土を張り付けて形造っている。底部下面はナデによる調整。中期後葉の土器である。広島県三次市陣山四隅突出墓で類似の土器が出土している（三次市教育委員会「陣山遺跡」21頁 1996年）。

弥生土器壺（図2-3、図版11）口縁部・胴部は1／3残っているに過ぎない。器高16.5cm、推定口径13.0cm、底径5.0cm、凹底である。器壁は淡褐色・淡赤褐色で、焼成は良く胎土は精良である。く字状の口縁部で口唇部は丸味を帯びている。残存部には煤が付着している。外面は胴部以下はヘラで縱方向に調整し、胴部以上は左斜め上方向に調整した後に右斜め上方向にヘラ調整を加えている。内部調整は不明である。中期中葉の上器であろうか。

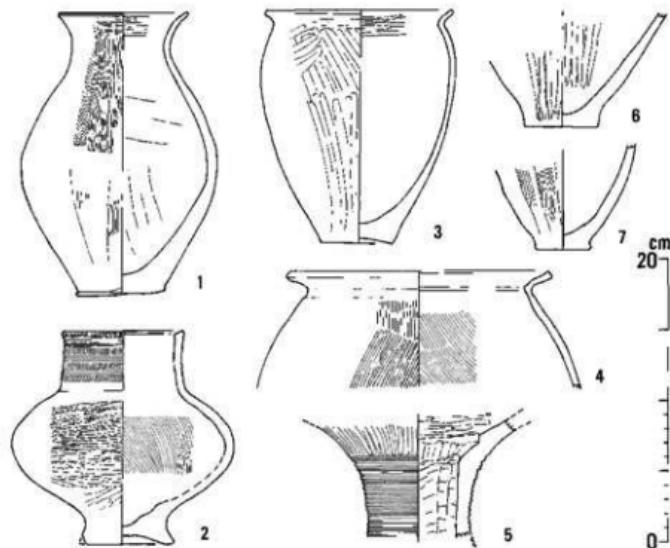


図2 弥生土器2（中期）

弥生土器壺（図2-4）。1/12の小片である。口径18.0cm、残存高8.3cm。口縁部はく字状で、口唇部の上端が僅かに肥厚し跳ね上がり、脇部の張りは強い。器壁は茶褐色で下半部と内面は黒色で、胎土中に砂粒の混入は無く精良、焼成は極めて良い。内外面ともに細かなハケ目で調整され、外面は上から下、左斜め下方向に調整されている。中期後葉の土器である。

弥生土器高壺（図2-5）。大形高壺であるが、壺部と脚部の大部分が欠失している。壺部と脚部の接合部分の径7.0cmである。奥原・三宅によると「壺部には内外面共に入念なヘラ磨きがみられ、壺底部には円盤充填の痕跡が認められる。また、脚部外面には櫛による平行沈線を廻らし、上から1条目・6条目・13条目の各凸線部分にはヘラ先による刺突文を施している」（奥原省一郎・三宅博上「八束郡鹿島町古浦遺跡表採資料について」94頁「島根考古学会誌」第3集 島根考古学会 1986年）と報告している。資料を欠見していないために推論に過ぎないが、ヘラ描き沈線はむしろ凹線文と考えるべきではないだろうか。壺部外面は縦方向、内面は横方向にヘラ調整が行われ、脚部内面はヘラで強く横方向にナデて整形している。中期後葉の大形高壺である。

弥生土器底部（図2-6・7）。6は底径5.0cm、明茶褐色、胎土精良で焼成も極めて良い。調整は内外面ともにヘラ調整で、縦方向に下から上に向けて調整している。7は底径4.0cm、器壁は淡明茶褐色、大粒の砂粒を僅かに含むが精良で、焼成も良好である。内面は縦方向のナデ、外面は幅広のヘラで調整した後にハケによる短い調整を行っている。調整技法からすると中期前葉であるが、前期後葉の可能性も残している。

弥生土器壺（図3-1）。鳥根大学蔵。口径29cm、肩部最大径33.0cmで胴の張りは少ない。現存高32.7cm、推定高40cmに近い大形広口壺で底部を欠失している。口縁部は良く開き、口唇部は上下に肥厚し4条の凹線がある。頸部には13条の不明瞭な凹線がある。上方の口縁部に近い2条の凹線は途中で消滅している。最下段の凹線の上・下にヘラ焼きにノ字状文が見られる。器壁は暗褐色で径1mm前後の砂粒が含まれており、焼成は良好とはいえない。外面は胴部以下に粗い条痕様のハケ目調整が見られ、下脚部では幅2.5cmの刷毛で強く不正常に調整を行い、肩部付近では横方向の調整が見られる。内面は剥落があるが、横方向のヘラ削りが用いられている。貯蔵容器と考えられるが、幼小児埋葬用壺との考え方も捨てられない。

弥生土器壺（図3-2・3）。ともに広口壺である。2は口径14.5cm、3は口径13.5cm。口縁部が僅かに開きながら直立し、幅広い文様帶となっている。どちらもクシによる平行沈線が見られ、2は9条、3には7条施されている。2は黒褐色、胎土は精良で焼成も良い。調整は頸部で粗いハケ目調整の後にヘラ横ナデで、内面は口縁部から頸部上半部までヘラ横ナデ、それ以下はヘラ搔取りで器壁が薄くなっている。3も口縁部内面は横ナデ、それ以下はヘラによる搔取りである。ともに後期前半の土器である。

弥生土器壺 (図3-4・5・6)。いずれもく字形の口縁部で、口唇部が上下に肥厚している。4は口径18.0cm、5は口径11.5cm、6は25.5cmと大形である。4・6は口唇部に凹線文、5は横目による平行沈線文と肩部にクシによる刺突文がある。6の頸部には張り付けの突帯があり、粗い押圧が見られる。調整は口縁部内面から肩部にかけて横ナデが行われ、内壁はヘラで掻取りをしている。いずれも後期前半の土器である。

弥生土器壺 (図3-7・8・9)。いずれも口縁部が開きながら拡張している。7は人形壺で、口径35.5cm、胴部の張りは余り強いとはいえない。器壁は淡灰褐色で薄く、胎土は精良で焼成は良好である。口縁部は内外面ともに横ナデ調整、頭部以下は細かなハケ目調整が施され、内面はヘラの横ナデに統いて丁寧なヘラ削りがなされている。8・9は口径15.0cm、胴部の張りは強く、球状に近い形態と考えられる。調整は口縁部が内外ともに横ナデ、内面は阿部以下は、8は丁寧なヘラ削り、9はヘラによる掻取りである。9には8本単位のクシによる平行線文が施されている。後期末の上器である。

弥生土器壺 (図3-10)。小形特殊壺で胴部の小片である。胴部最大径は15.0cm、玉葱状の張りを持っている。断面図で明らかのように胴の屈曲部に内側から粘土を貼り、その部分を補強するかのように粘土帯を貼りつけ、幅1.5cmの突帯としている。突帶の中央はやや窪みが見られる。器壁は淡褐色、胎土は極めて精良で焼成も良い。突帶には円形の刺突文があり、上下に貼り付け後の調

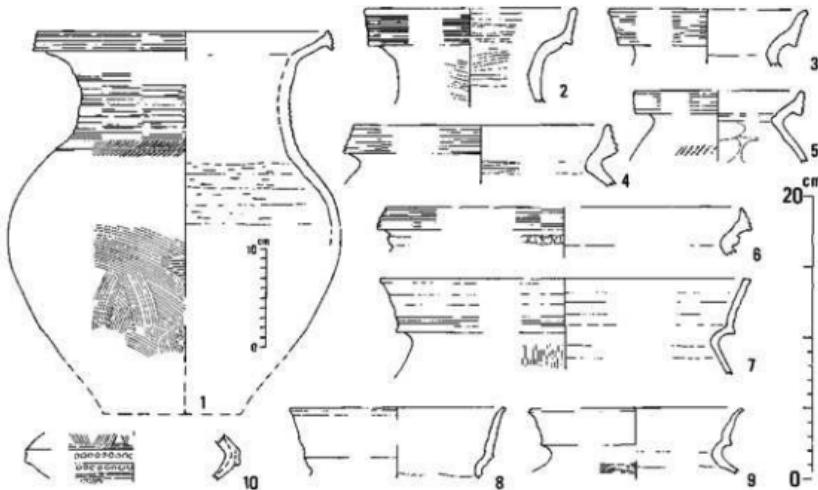


図3 弥生土器3(後期)

整痕が残っている。突帯の上方にはノ字状文が7本を単位として向き合った形で施文されている。また、下方には縦に短い線がある。円形文は切れ目があり、半円形の施文具を用いたと考えられる。文様は鋭く描かれ、施文具は金屬製と考えられる。後期後葉の上器である。

土師器杯（図4-1～5）。一形態に分類できる。1・2・3は半球体で丸底、口縁部が僅かに内傾している。口径は12.0cm・器高5.8cm、口径13.0cm・器高5.6cm、口径12.7cm・推定器高5.3cmで、口唇部はいずれも丸味を持っている。器壁は赤褐色・茶褐色で、1・2の胎土には小砂粒が含まれているが、3では殆どみられないし、内外面ともに丹塗りである。調整はそれぞれ異なり、1の外面の口縁部は横ナデ、次ぎに底部に向かって軽いヘラ削りを加えている。内面は底部近くは指による指圧痕があり、その上方から口唇部までヘラによる斜め方向へのナデあげの後に、縦方向に軽い押さえがみられる。2の外面は下地として面取りの様な軽いヘラ削りがあり、その上をヘラで横ナデしている。内面は底部から斜めにナデあげ、口縁部は横にナデしている。3は丹塗りであるために観察ができない。

4は口径12.5cm・器高3.6cm、平底に近く口縁が外反している。明褐色、胎土精良、焼成はやや弱く、調整は観察できない。底面に木葉の圧痕がある。5は口径17.2cm・器高4.1cm、やや凹みのある底で、口縁は緩く開いている。胎土は精良であるが焼成が弱く、器壁の表面は殆ど剥落して調整技法は観察できない。いずれの土器も時期を明確にできないが、1～3は4・5に比較すると時期は古く5世紀台の上器ではないだろうか。

土師器壺（図4-6・7・8）。6は口径18.2cm、口唇部が上方に拡張し複合口縁である。拡張部が外にやや開き、口縁は内外に僅かに肥厚し、拡張部下辺は張り出し突帯状をなしている。紅褐色で、胎土中に微細な砂粒が含まれている。内外面とともに横ナデ調整され、肩部に細かなハケ目調整が見られる。4世紀の土器である。

7は口径25.0cm、大形壺である。口縁は複合口縁で拡張部は僅かに内傾し、口唇部には僅かな凹部が見られる。拡張部下辺は断面三角形状に強く張り出している。器壁は淡褐色で、胎土中に砂粒が含まれ、焼成は良好である。5世紀前半の上器である。8は口径16.8cm、約1/4の破片である。口縁は複合口縁で、拡張部は直立し、拡張部の上・下辺部は突帯状をなしている。器壁は淡褐色で、胎土中に火粒の砂粒を含んでいるが焼成は良好である。調整は拡張部の内外面は細かな横ナデで、頸部内面はやや粗い横ナデ、それ以下は右斜め方向への「率」なヘラ削りが見られる。肩部は粗い横ハケ、それ以下は斜め下方方向へやや細かなハケ目で調整されている。5世紀前半の土器。

土師器壺（図4-9～13）。く字形の口縁部をしているが微妙に趣を異にしている。9は口径16.0cm、良く張った球形の胴部を持っている。口縁部は外反しているが複合口縁の様な痕跡を残している。器壁は茶褐色で胎土中に細砂を含んでいる。調整は口縁部は内外ともに横ナデ、外面は縦方向

のハケ目の上を右斜め下方方向へ刷毛を、さらに3cmの間隔をおいて横方向にハケ目を加えている。内職は斜め方向にヘラによる搔き取りをしている。

10～13は同一時期の甕で10は口径25.0cm大形甕である。口縁部は9に類似している。胎土中に砂

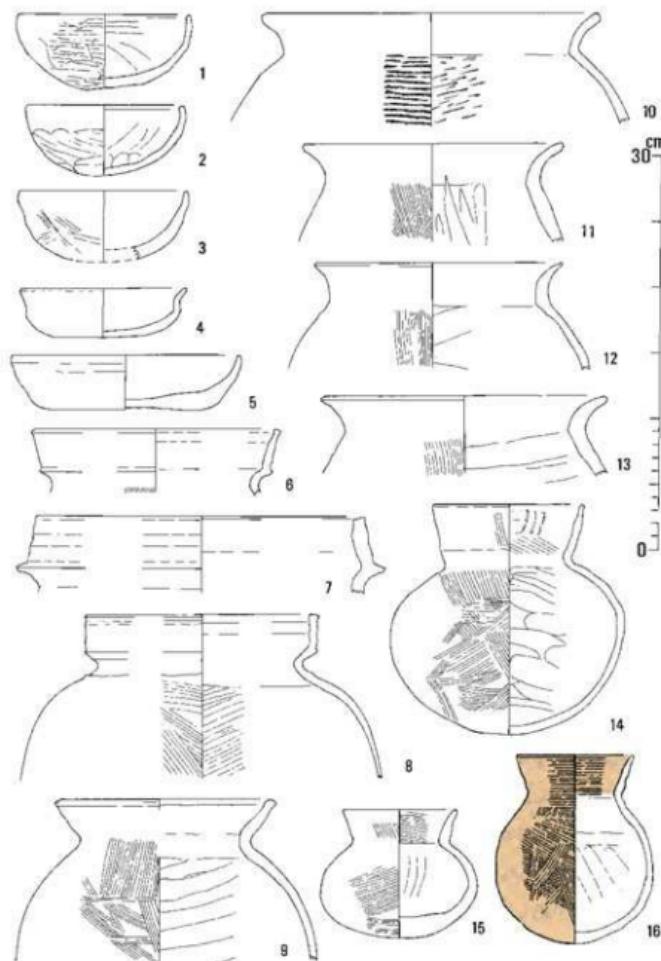


図4 土師器1

粒が多く器壁の外面は淡灰黒色、内面は灰白色で焼成が弱いことを示している。調整は口縁部は内外ともに横ナデ、外面は稠密な横方向のタタキが施され、内面はヘラ削りが見られる。11・12・13は緩く外反する口縁部を持っているが、12は口唇部が薄く尖った感がある。口径は11が19.5cm、12は18.5cm、13は21.2cmである。調整は口縁部の内外面は横ナデであるが、肩部以下の内面は11が下から上へのヘラナデ、12は右斜め上方向への搔き取り、13はヘラ削りで整えている。いずれも5世紀後半の土器である。

土師器壺（図4-14～16）。14は大形で、口径11.3cm、器高17.6cm、胴部最大径17.8cm、丸底である。胴部は良く張っているが僅かに扁平感がある。器壁は明淡褐色で胎土中に砂粒は少ない。調整は口縁部の内外面ともに横ナデの後に、外面は縦のハケ目、内面は横方向のハケの先端の痕跡が残り、それ以下は斜めのハケ目で整えている。外面は肩部以下は斜めのハケ目を基本に、横・斜めと不規則に調整している。底部はやや細かなハケ目が見られる。内面は肩部から底部まで斜め方向の短いヘラ削り痕がある。5世紀前葉の土器である。

15は小形壺で口径8.5cm、器高9.8cm、胴部最大径12.0cm、全体に扁平な感があり、口縁部は僅かに内傾している。器壁は淡褐色、胎土は精良で焼成も良い。調整はやや粗な感がある。外面は肩部付近まで横ナデを行い、口縁部に部分的にハケ目、胴部以下は斜め方向にハケ目で整え、底面は面を取り囲むように短くハケで整えている。16は1／2片、口径8.8cm、器高14.5cm、開いた口縁部と球状の胴部をなしている。器壁は淡灰白褐色、胎土は精良で口縁部内面から外面にかけてすべて丹塗りである。内面には胎上の接合痕が二段あり、それ以下はヘラを左斜め上にナデあげて調整している。外面は肩部付近までやや粗な横ナデが見られ、縦方向のハケ目を基本に右下がりのハケ目を施し、その上を不規則なハケ目で整えている。底部は剥落し調整は観察できない。15は時期不明。16は5世紀後半の土器であろうか。

土師器高坏（図5-1～10、図版13～15）。1は島根大学蔵。坏部口径21.0cm、器高13.2cm、脚高6.5cm、脚端部径11.2cm。坏部は段のあるもので、全体に坏部が大きな感がある。器壁は赤褐色で、胎土中の砂粒は極めて少ない。坏部の段は胎土の接合部分で鋭い棱を持つ段として残っている。全体にハケ目を基調とした調整が行われ、坏部外面は斜めのハケ目の上に、横方向のハケ目が施されている。内面も同様であるが、坏の中心部はナデ調整している。また、ヘラを坏中心部から四方に走らせ放射状の暗文が見られる。脚部外面はナデ調整で段部下面に刷毛目が見られる。内面はナデ・ヘラ削り・ナデと繰り返している。製作は、脚端部から脚上端、坏の段部分まで作り、それに坏部の聞く部分を作りつけた、接合部分が棱を持つ段として残った。脚上端の中空部分に粘土を挿入し、下から棒状の器具で粘土を押し込んで坏部と脚部を接合している。5世紀前葉の土器である。2は脚部のみで、脚高6.3cm、脚端部径9.6cmである。器壁は淡褐色、胎土は精良。調整は坏部と脚部の

接点部分に縦の極めて短いハケ日がある。脚部はヘラ縦ナデ、脚端部の内面は横方向のハケ日が見られる。5世紀前半の土器である。

3・4も环部に段を持つ高坏である。1に極めて類似しているが环部がやや小形である。3は环部口径10.7cm、器壁は明赤褐色、胎土は精良である。坏の接合部の段はL型で1に比較すると弱い。环部外面の調整は斜めのハケ日が基本で、横ナデ、暗文がみられる。内面は底面に短いハケ日がみられ、暗文を底面から口縁へ放射状に見ることができる。4も同様な調整が行われ、环部外面は段部分から口縁部へ粗いハケ日調整を行い、さらに2回の横ナデをしている。内面は粗い横方向のハ

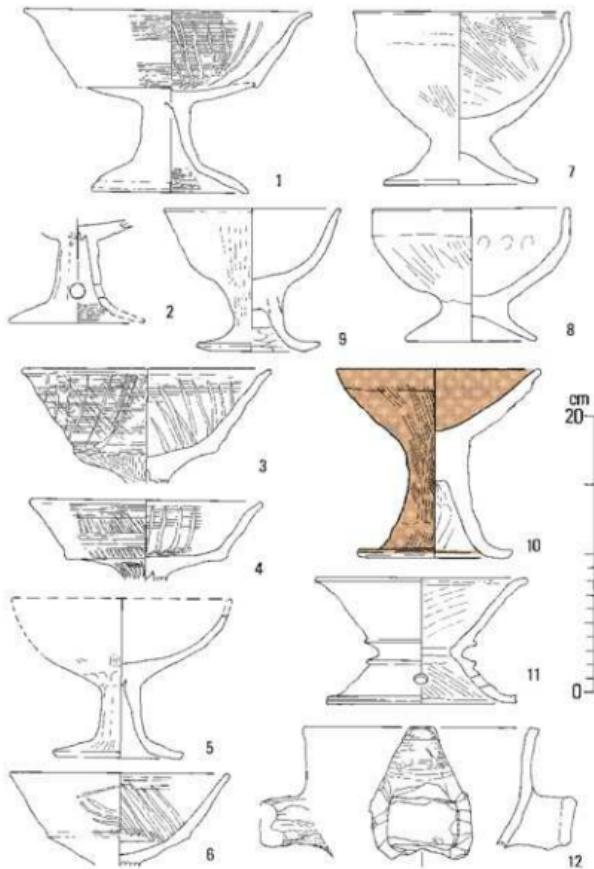


図5 土師器2

ケ日調整の上に、暗文が施されている。暗文は中心部分を外して円形の空白部を作り、それを取り開むように走っている。ともに5世紀中葉の上器である。

5は坏部口徑15.6cm、推定器高11.6cm、脚端部徑9.0cm、坏部と脚部の接合部には貼り付け痕が残っている。調整は坏部外面ではハケ日を施した後にナデを行い、内面では縦ナデで坏の中心から口縁に向けて調整している。脚部外面は上端から軽い削りを行い、脚末端部ではヘラで縦方向にナデしている。内面もナデ調整である。6は坏部に段を持つもので脚部が欠失している。淡紅褐色で胎土は精良、焼成も良好である。調整は段部分でハケ調整が見られ、接合部を調整している。坏部は横ナデの上に暗文が見られ、暗文はやや不規則である。内面は段の内側に横方向の粗いハケ目、口縁部には横にハケ日がある。また、暗文が段部から口縁に向けて斜めにみられる。5・6ともに5世紀後葉の上器である。

7(図版13)・8は深めの坏部を持ち、脚部は低く大きく開いている。7は坏部口徑9.3cm、器高7.5cm、脚端部徑6.5cm、口縁部は内傾し、口唇部は僅かに外反している。器壁は淡赤褐色、胎土には砂粒が含まれているが、焼成は良好である。外面の調整は口唇部は横ナデ、下地に粗いハケの後に、右斜め上方向にヘラナデが見られる。内面は坏底部は放射状のナデ、右下がりのハケの上に、段部分から左上方へハケでナデあげている。脚部の調整は不明である。

8は大社町猪日收藏庫の藏品。昭和28年青山興助宅裏の砂丘から出土したとの注記がある。坏部口徑5.5cm、器高9.8cm、脚端部徑9.1cm。坏の屈曲部に鈍い稜があり、坏部と脚部の接合部にも接合痕が残っている。器壁は明淡茶色で、胎土に砂粒を多く含んでいる。調整は口縁部の内外は横ナデ、外面の稜線から脚部まではハケ日、脚部は横ナデである。内面は稜線部付近に指圧痕が連続して見られ、その下方は縦ナデで調整している。脚部内面はナデ調整である。明確な時期は不明であるが、5世紀後半の上器であろうか。

9(図版14)は7・8と同様に深めの坏部を持っているが、脚が高く、端部が跳ね上げる様に開いている。坏部口徑12.5cm、器高10.3cm、脚部端径は9.0cmである。器壁は赤褐色、胎土は精良で、焼成も極めて良い。調整は外面は全体に縦方向に粗なハケの後にヘラによる横ナデをしている。坏部と脚部の接合痕が観察され、それ以下脚端部まで斜めのナデがみられる。内面は坏部の口縁で横ナデ、それ以下は斜めに丁寧にナデあげている。脚部内面は短くヘラ削りで整えている。

10(図版15)は、浅い坏部とやや大きめの脚部からなり、器壁は厚く、外面は丹塗りである。坏部口徑14.5cm、器高13.7cm、脚端部徑10.9cm。口唇部に近い部分が内曲し、鈍い稜線が見られる。全体に外面には凹凸が見られるが、内面特に坏部は丁寧な横ナデが施され良く整えられている。外面は全体に右下がりの粗いハケ目で調整され、脚部内面は短く左下がりにヘラで整えられている。時期不明の土器である。

土師器器台（図5-11）。鼓形器台である。全体にく字状をしている。受部口径15.0cm、器高9.1cm、脚端部径13.5cm、脚部には径1.0cmの円形の孔が、7.5cm間隔で3箇所に開けられており、筒部の上・下には突帯が巡らされ、脚端部には凹線がある。器体は薄く精妙に作られ、胎土には細砂粒が多いが、焼成は極めて良い。調整は受部内面は右斜め上方向に丁寧に整えられ、脚部内面は細かな削りが見られる。4世紀の土器である。

土師器把手付鉢（図5-12）。小さな破片であるために口径の推定復原が困難であった。図はあくまでも仮の図である。器形は口縁部が緩く外反している。口唇部は平坦で外に肥厚し、器体は僅かに屈折している。この屈折部に半環状の把手が付けられている。把手は上端で径3.0cm、下端で径4.5cm、断面長方形である。器底は淡褐色で、胎土は精良、焼成も良好である。調整は横ナデ、把手部は張り付けのために内外ともに強くナデつけている。そのために器体内面まで張り付けの痕跡が残っている。

須恵器蓋坏（図6-1～14）。時期的には5世紀後半から8世紀後半におよぶ遺物が採集されている。1・2はどちらも大井部を欠失している。1は口径13.8cm、推定器高は4.6cm、口径の割に器高が高く、体部に深みを残している。口縁部の立ち上がりも良く、口唇端部は内傾した面を残している。器底は鼠色、胎土中に砂粒は少なく、焼成は良好である。2は口径13.8cm、推定器高4.7cm、口縁部の立ち上がりも良く、口唇端部に内傾した面を残し、僅かに凹部がある。口縁部は横ナデ、天井部はヘラ削りで調整している。5世紀後半の土器である。

3・4は1・2と全体的な印象は類似しているが、口縁部に違いが見える。3は口径12.7cm、推定器高4.7cm。口縁部の立ち上がりが緩く、口縁端部が丸味を持ち直が消失している。口縁部は横ナデ、天井部は鈍いヘラ削りである。4は完器であるが焼き歪みがある。口径13.1cm、器高4.0cm、口縁部内面に凹線がある。調整は3と同様である。6世紀後半の土器。

5～9は、身受けの有る5・6と身受けの無いものに分けられる。5・6は身受けが有り、全体に扁平である。5は口径8.8cm、器高3.7cm、口縁部は内外ともに横ナデ、天井部外面はヘラ削りの後に縦ナデ、内面は縦ナデで調整している。6は5よりも一段と扁平度が強い。調整は5と同様である。一部に自然釉がみられる。7～9は3・4の系列の蓋坏である。7は完器で口径12.7cm、器高4.5cm、口縁部の立ち上がりが緩く、口縁端部は丸味を持っている。口縁部は内外ともに横ナデ、天井部外面は鈍いヘラ削りの後に縦・横の圧痕が見られる。8は口径12.5cm、推定器高4.2cm。9は小形で口径10.5cm、器高3.7cm。ともに製作技法・調整法に大きな相違はない。9の大井部外面に板目が観察できる。7世紀前半の土器。10～14はつまみの有る蓋坏で、10～12は環状つまみ、13・14は宝珠型つまみである。環状つまみの蓋坏は口縁部の形態で2分できる。10・11は口縁部が直立し、12は身受けがある。10は口径14.6cm、器高2.5cm、11は口径14.8cm、器高2.6cm、調整は口縁

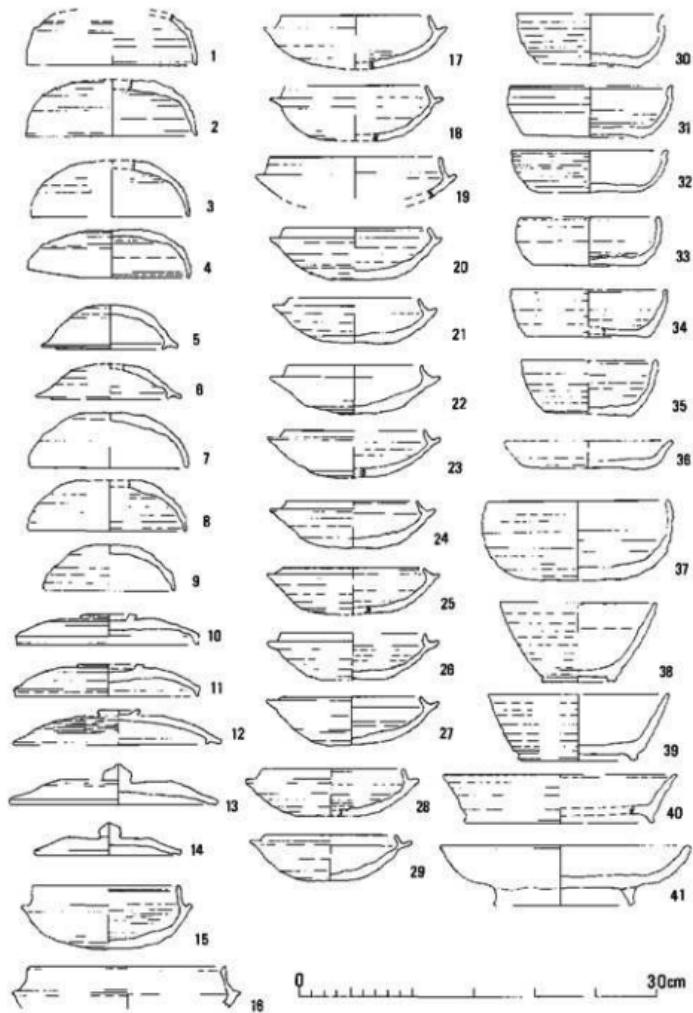


図6 須恵器 1

部の内外面は横ナデ、天井部はヘラ削り、内面は縦ナデである。12は身受があり、口径15.0cm、器高2.9cm、天井部外面はヘラ削りの後にカキ日を施している。7世紀後半の上器である。13・14は人形と小形の蓋杯ではあるが、形態上の相違はない。13は口径16.8cm、器高2.3cm、つまみの先端が潰れている。調整は口縁部は横ナデ、天井部外面は軽い削りの後に横ナデ、つまみの基部は張り付けのナデが見られる。

須恵器坏（図6-15～35・38・39）。5世紀後半から8世紀後半におよぶ資料である。

15（図版16）は元器である。口径12.0cm、器高5.3cm、蓋受けの立ち上がりは良く、受部は丸味を持ち、上方に短く延びている。器壁は青鼠色、胎土は精良で、焼成は極めて良い。口縁部立ち上がりの端部には僅かに内傾する面があり、内側には小さな段がある。口縁部の内外面は横ナデ、底部は深みのある丁寧なヘラ削りが見られる。底の一部に繩目痕がある。5世紀後半の土器。

16は1962年D区西側崖面で採集した坏片である。口径16.0cm、立ち上がりは上に延び口唇部に小さな段があり、受部は小さくやや下がり気味に突き出している。器壁は青鼠色、胎土中に細砂が含まれている。横ナデの調整が見られる。6世紀前半の土器。

17～19は蓋受けの立ち上がりが延びているが、口唇部には面がなく丸味を持って、受けは短く上に延びている。17は口径12.2cm、推定器高4.5cm、口径の割に深みがある。口縁部の内外面は横ナデ、内面底部は軽い縦ナデ、底部は軽い削りの後にナデが行われ、藁状の正痕が見られる。18は口径11.6cm、推定器高4.6cm。整形・調整は17と同じ、19はやや大きく口径14.0cm。いずれも胎土は精良で、調整、焼成も良好である。6世紀後半の土器である。

20～29。極めて規格化された坏である。蓋受けの立ち上がりは殆ど短く内傾している。口径は11.0～12.0cm、器高も4.0～4.5cm、調整も口縁部内外面が横ナデ、内部底面が縦ナデ、底部底面は鈍いヘラ削りである。7世紀前半の土器。

30～35も規格化された坏である。口径は11.0～13.5cm、器高は3.5～4.5cm。口唇部が僅かに外反するものと内弯するものがある。30は底部にヘラ削りが見られるが、他は全て横ナデ調整、底部内面は縦ナデ調整である。底面はヘラで削り後にナデたもの（32）以外は糸切りである。34は糸切りの後にクシで再度調整している。8世紀後半の土器。38・39は高台の付いた坏である。38（図版18）は元器で、口径8.7cm、器高6.5cm。青鼠色、胎土精良で砂質は含まれず器壁も薄い。焼成はやや弱い。外面は全て横ナデ、内面は底面近くまで横ナデ、底面は縦ナデで丁寧に調整している。39は口径14.8cm、器高5.4cm。高台はやや開いている。調整は38と同様であるが、内面調整はやや難である。

須恵器皿（図6-36・40・41）。36は口径13.5cm、器高2.4cm。僅かに外反する口縁部と糸切り底を持っている。調整は口縁部の内外面は横ナデ、内底面は縦・横ナデを交差させている。40は外反する口縁部で口唇部内面に小さな凹みがあり、高台がある。器壁は外面は白鼠色、内面は白色で焼

成は弱く口縁部の内外面ともに横ナデされている。41(図版19)は緩く内寄する口縁部で、高台がある。口径20.4cm、器高5.0cm。器壁は灰黒鼠色で焼成は極めて良い。外面は高台を含めて横ナデ、高台の内面、底面はナデで調整されている。内底面も同様である。8世紀後半の土器。

須恵器碗(図6-37、図版17)。口径15.0cm、器高6.5cm、緩く内寄する口縁部で、口唇部は丸味があり断面形は蛇頭型ともいえ、底部は平底に近い。器壁は青鼠色で胎土は良、調整・焼成も良い。口縁部から底部近くまで横ナデ、底面は軽いヘラ削りの後に横ナデを行い、さらに底周辺部を円形にナデで整形している。8世紀後半の土器。

須恵器高杯蓋・高杯(図7-1~20、図版20・21)。

1・2は高杯蓋。1は口径14.6cm、器高5.0cm、宝珠型のつまみがある。つまみの高さ8mm、幅1.7cm。口縁部はやや開き気味で、肩部に一条の凹線がある。器壁は黒鼠色、胎土中に砂粒が含まれているが、調整は極めて良く、焼成も良好である。調整は内面の中心部は緩ナデ、それ以外は横ナデで外面の肩部にまでおよんでいる。大井部分はヘラによる丁寧で軽い削りが見られ、つまみの周辺はナデしている。2は口径13.3cm、器高5.7cm、つまみがある。つまみの高さ8mm、幅1.7cmでやや扁平。口縁部は開き、口唇部は丸味を持っている。器壁の色、胎土中の砂粒、調整・焼成は1と同様である。

3(図版20)・4・5は有蓋高脚高杯。3は杯部口径13.0cm、器高19.7cm、脚部末端径15.2cm、脚部高15.2cm。蓋受けは厚みがあり、受け部は上方に僅かに延びている。脚部には長方形の透かし2段3箇所、透かしの中間に太めの凹線2条、下段透かしの末端部近くに細い凹線1条がある。脚端部は良く広がり、口唇部は上に肥厚している。調整は杯部の口縁部は内外面ともに横ナデ、内面底部は緩ナデ、外面底部はヘラ削りである。接合部分はナデつけ、脚部は内外面ともに横ナデ、上段透かし部分の脚部内面は絞りが観察できる。4は杯部口径12.6cm、器高17.4cm、脚部末端径14.5cm、脚部高12.9cm、受け部は短く小さい。脚部透かしは長方形2段2箇所。凹線は上・下透かしの間に2条。器壁・胎土・調整・焼成は3と同じである。5は杯部口径12.8cm、器高19cm、脚部末端径15.4cm、脚部高14.5cm、蓋受け部は4と類似している。脚部透かしは長方形2段3箇所で、凹線の配列、器壁色、胎土、調整・焼成は3と同様である。

6・7・8は無蓋高脚高杯である。6は杯部口径11.5cm、器高15.7cm、脚部末端径10.7cm、脚部高15.3cmである。杯部口縁は僅かに開き、口縁下に突起、さらに接合部付近に凹線がある。脚部は良く広がり、末端部は上下に肥厚し、透かしは長方形で2段3箇所にある。器壁は黒鼠色、胎土は精良、焼成も良い。調整は杯部内面は底部近くまで横ナデ、底面は緩ナデ。外面は杯部の凹線までは横ナデ、底面はヘラ削り、接合部はナデつけている。脚部は内外ともに横ナデで、上段透かしの上の方は絞りが見られる。基本的な製作技法は有蓋高杯と違いはない。7は杯部、杯部口径12.7cm。8

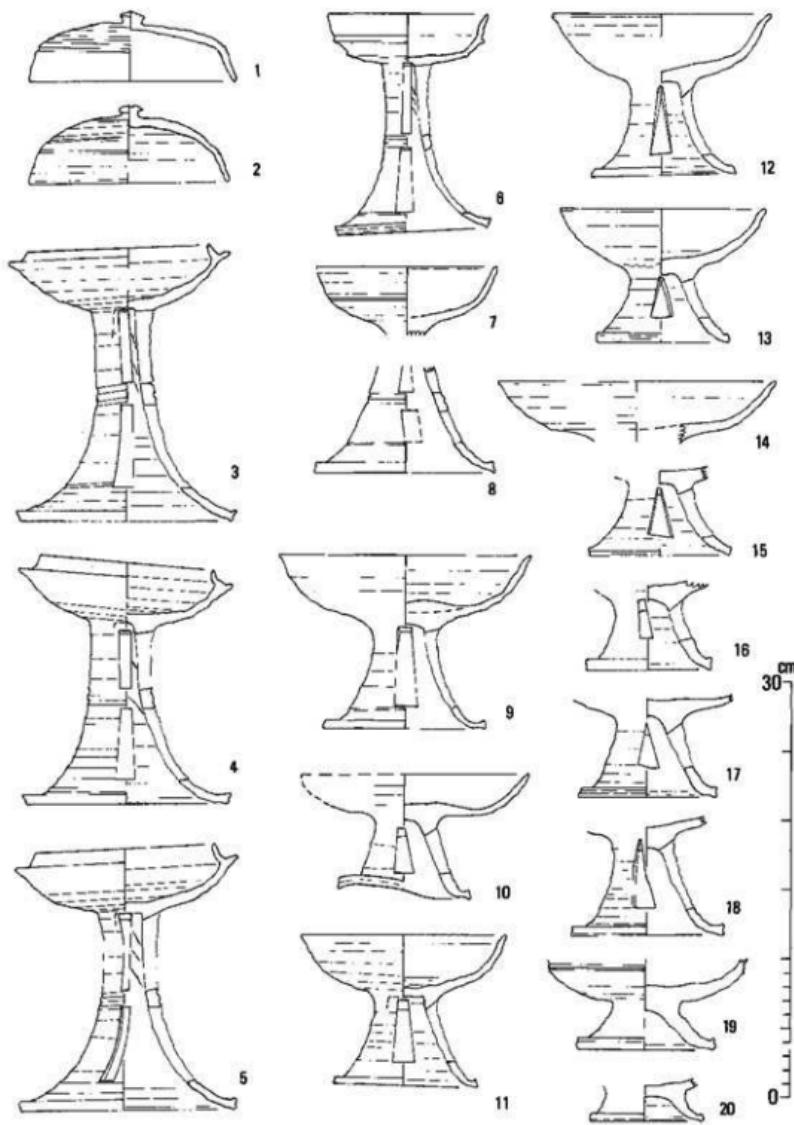


図7 須恵器2

は脚部片で、末端径は13.0cm、長方形透かしが2段あり、上下透かしの間に凹線2条、下段透かし下に凹線1条がある。1～8は6世紀後半の土器。

9（図版21）～20は無蓋低脚高壺。9は壺部口径18.0cm、器高12.5cm、脚部末端径11.5cm、脚高7.5cm。壺部は脚部に比較して大である。口縁部は緩く外反し、脚部の広がりは少なく、端部末端は僅かに肥厚している。脚部に長方形の透かしが2箇所ある。器壁は黒鼠色、胎土は精良で焼成も良い。調整は壺部底面が横ナデ、それ以外は脚部内面は全て横ナデである。10は壺部口径16.5cm、器高9.0cm、脚部末端径8.3cm、脚高6.0cm。焼き歪みが著しい。11は壺部口径14.5cm、器高10.8cm、脚部末端径10.3cm、脚高6.8cmである。脚部の広がりは少なく、長方形の透かしが2箇所にある。器体は鼠灰黒色で、胎土・調整・焼成は9と同様である。12は壺部口径15.5cm、器高11.7cm、脚部末端径10.4cm、脚高7.2cmである。口縁部は緩く外反し、脚部の広がりは少ない。三角形の透かしが2箇所にある。調整は9と同様で、壺内部に鉄分が付着している。13は壺部口径14.5cm、器高9.6cm、脚部末端径6.3cm、脚高5.0cm、脚部に三角形透かし1箇所、接合痕が残っている。14は壺部口径20.0cmで大形である。15～18は台形・長方形・三角形の透かしが2箇所にある。19・20は脚部が一段と低くなり透かしがない。調整方法など他の高壺と同様である。9～20は7世紀後半の上器。

須恵器小形広口壺（図8-1）。口部が欠失している。推定口径9.3cm、推定器高10.6cm、脚部最大径11.0cm、丸底である。口縁部は直口に近いと考えられる。器壁は灰青鼠色、胎土は精良で、焼成も良好である。調整は内面、外面の底部から上は横ナデ、底部は丁寧なヘラ削りである。6世紀後半の土器。

須恵器鶴（図8-2）。口径は11.4cm、器高14.5cm、胴部最大径8.8cm、底径3.6cm、凹底である。口頭部は肩部から広がり、口縁部でさらに一段と広がっている。頭部には凹線1条、胴部に径1.0cmの孔がありその上に凹線がある。頭部には16条のクシ描きの波状文、胴部の凹線の間には柳刺突による長楕円文がある。器壁は灰黒鼠色、胎土・焼成は良い。調整は口径部内面、口縁部から肩部まで横ナデ、底部はヘラ削りである。6世紀後半の上器。

須恵器平瓶（図8-3・4）。3は口縁部を欠失している。推定口径7.0cm、推定器高13.5cm、最大胴部径14.5cm、丸底。肩部に径8mmの円形の貼付文が1対ある。口縁部から底部まで横ナデ、肩部は横ナデの後にカキ目を施し、底部はヘラ削りされている。底面から下脚部にかけて、直線に斜行する2本の線がヘラ描きされている。4も口縁部を欠失している。推定口径6.0cm、推定器高12.2cm、胴部最大径14.5cm、底部は丸底である。肩部に7mmの円形貼付文が1対ある。肩部に自然軸が見られ黒鼠色、その他は青鼠色である。調整は肩部のカキ目がなく、胴部最大径部にヘラ削りがある。それ以外は3と同様である。ともに7世紀前半の土器。

須恵器提瓶（図8-5）。口頭部の一部が欠けている。推定口径7.5cm、推定器高12.0cm、最大胴

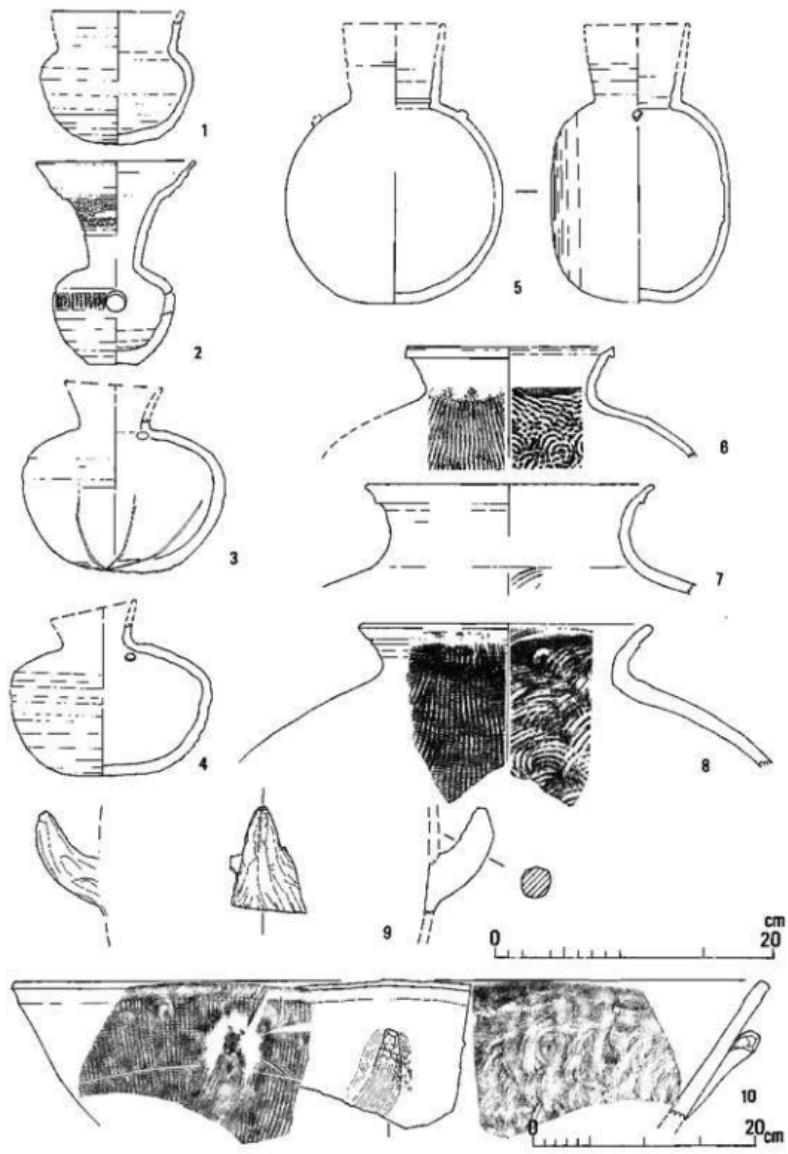


図8 須恵器3

部径15.5cm、円形の貼付（把手）が1対ある。肩部に自然軸が見られる。また、口徑部と胸部の接合部の内面には凹線がある。7世紀前半の上器。

須恵器甕（図8-6・7・8）。6は口徑15.0cm、口縁部が開き口唇部は下に肥厚している。頸部には斜めに軽いタタキがあり、肩部にも平行線状タタキがあり、内面は同心円状のタタキ痕がある。器壁は青鼠色、胎土は精良、調整・焼成とともに良好である。7は口径20.5cm、口唇部直下には段がある。肩部には平行線状、内面には同心円状のタタキ痕がある。6・7は6世紀後半の上器。8は口径20.5cm、短く開く口縁部と球状の胸部を持つ大形甕である。器壁は青鼠色、胎土は精良で、調整・焼成とともに良好である。肩部外面は細かな井桁状のタタキ、内面は半円形のタタキ痕がある。6・7より後出するもので7世紀の土器であろうか。

須恵器瓶（図8-9）。牛角把手部分の小片で口径も推定できない。青鼠色、胎土精良で、調整・焼成も良い。把手は全体にナデつけられており、断面は8角形に近い状態である。6世紀から7世紀前半の土器であろうか。

須恵器（図8-10）。器種不明の大形の土器である。把手付きの盤であろうか。口径67.0cm。浅い鉢状の上器と推定できる。口唇部はコ字状で、外面に僅かな凹部がある。口唇部は横ナデ、直下に格子状のタタキ痕があり、内面は同心円形のタタキ痕を軽くナデて潰している。器体の厚さは口唇部で1.0cmある。把手は器体に沿うように低く張付られ大部分がナデつけられ、把手周辺でも同様の手法が見られる。器壁外面は紫鼠色、内面は灰黒色である。調整は良い。8世紀の土器であろうか。

土製品当具（図9-1・2）。1（図版23）は器高4.6cm、底面径3.9×4.1cm、側面観は紐孔に平行した場合は釣鐘状で下面から1.5cm上方で絞りが見られ、紐穴に直角に見たときは純い二角形状である。紐穴は直径6mm、焼成前に両側から穿孔し、周辺部に摩耗が見られる。下面是円形で端部が下がり半球状である。面には微妙にハケ調整の痕跡を見る能够である。手づくねで淡茶褐色、頭頂部がやや黒味を帯びている。胎土は微小な砂粒を含み、焼成は弱い。全体に摩耗が観察できる。

2は器高4.1cm、底面径3.4×3.8cm、側面観は球体に近い。紐穴は直径6mm、焼成前に穿孔し、穴周辺の摩耗が激しい。下面是円形で周辺部の摩耗が著しく半球状である。灰白褐色で、1/2は淡黒褐色である。手づくねで胎土中に微細な砂粒が含まれ、焼成は弱い。

土製品飯蛸壺（図10、図版22）。器高9.1cm、口徑2.4cm、胸部最大径6.4cm。全体は釣鐘状をなしているが、口部がやや窄まっている。頭頂部は丸く、上部に径7mmの紐孔が斜めに穿たれている。器壁は厚さ7mm前後で口部に比較して内部は広くなっている。器壁は淡茶褐色、胎土中に砂粒が多く、焼成はやや弱い。また、表面に剥離が見られ調整は観察できない。8世紀の土器であろう。

土製品土鍤（図11-1～11、図版24）。すべての資料が同一時期であるかとの問題があるが一括

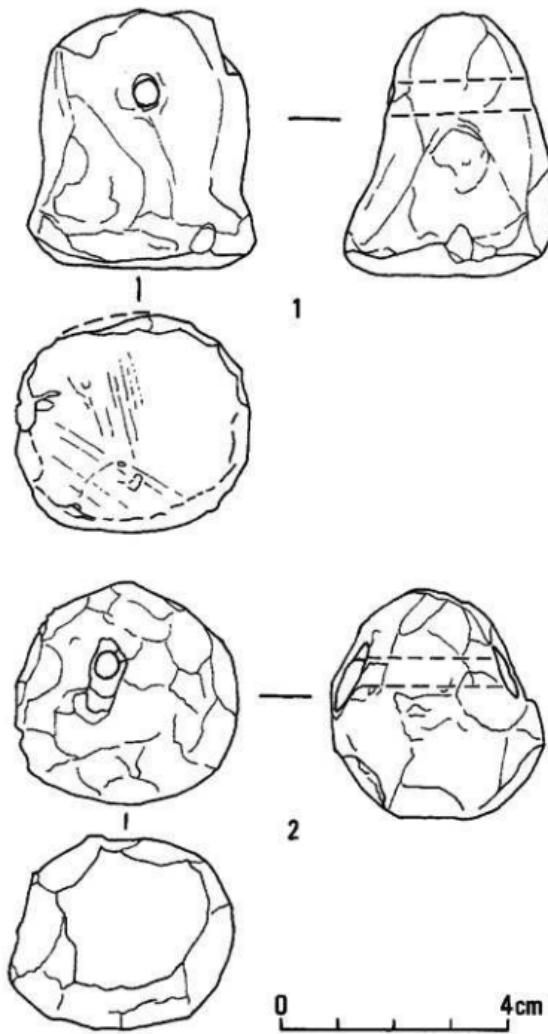


図9 土製品2（当て具）

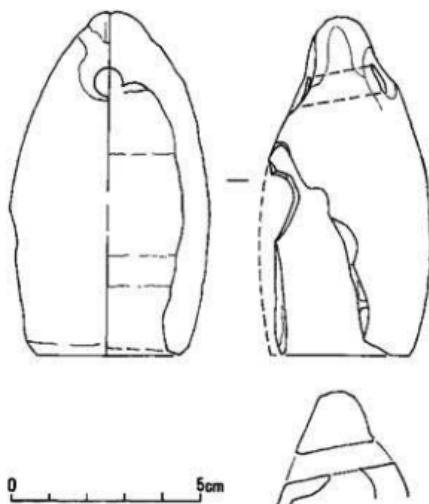


図10 土製品1（飯蛸臺）

して記述する。基本的に手づくねである。形態的には大型（1～8）と細型（9・10）に分類できる。大型は最大幅3.0～3.5cm、長さ4.2～5.0cm、重さ32.8～61.6g、細型は幅2.0～2.5cm、長さ4.0～6.0cm、33.5～34.3gである。側面に僅かな凹凸があり、その位置に微妙なずれがある。指の痕跡と考えられる。7の小口部には板目痕、8には網代痕が観察できる。これは製作時に片方の掌で粘土を握りしめ、粘土を転がしながらさらに握りしめを繰り返し、ある程度の堅さになると両小口部を板で叩いて整形し、紙孔を棒を突き刺して開け、乾燥後に焼成したと考えられる。また、心棒に粘土を巻き手で

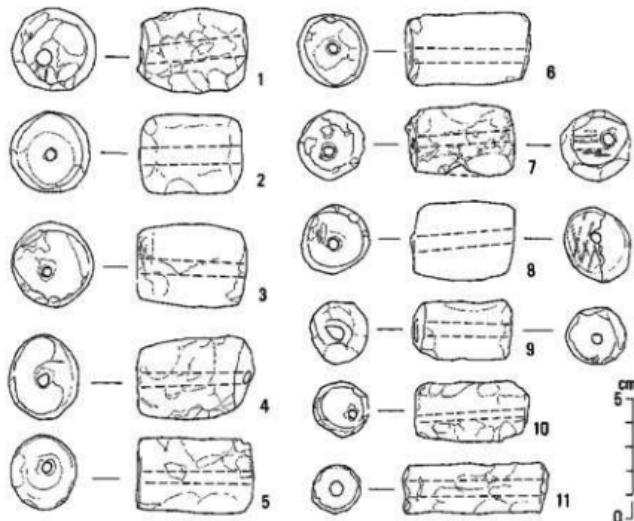


図11 土製品3（土錐）

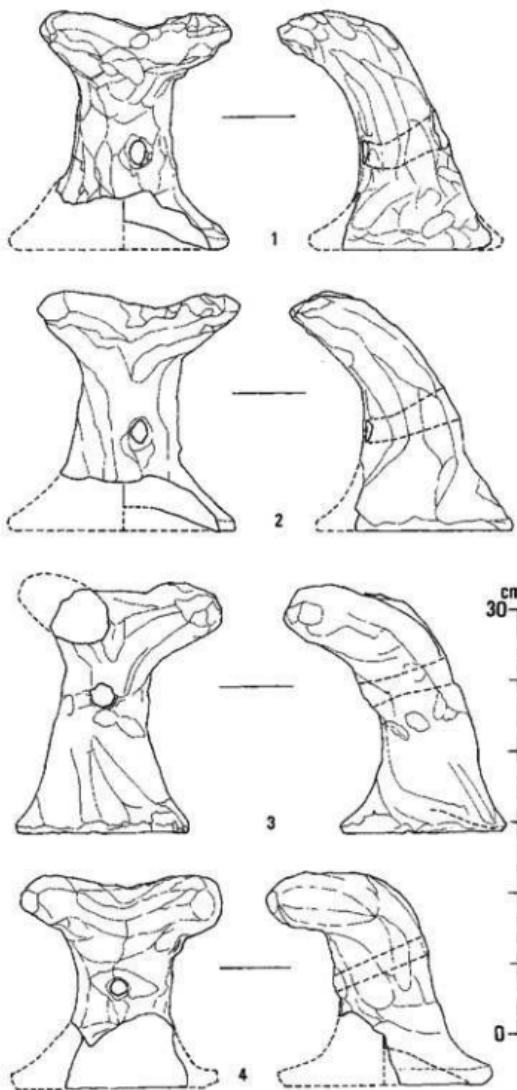


図12 土製品4（支脚1）

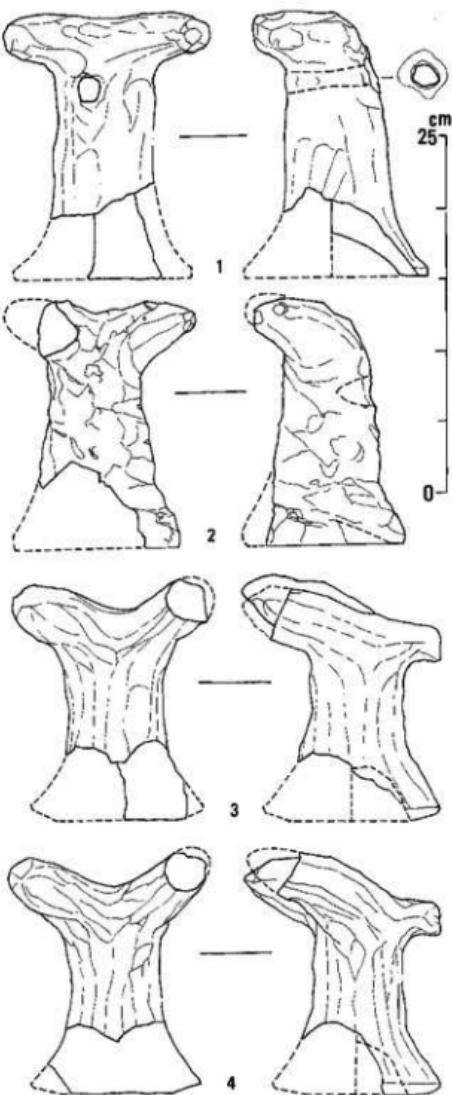


図13 土製品5（支脚2）

握りしめて成型し、心棒を抜き取ってから小口を整えて乾燥させてから焼成したとも考えられる。長さ・重量によって網の種類、使用位置も異なったであろう。

土製品支脚（図12、図版25、図13）。良く張った基部と太めの体部、2木の角状突起からなっている。側面から見ると体部が前傾するもの（図12）と体部が直立するもの（図13）がある。基部は円底で窪みの程度は様々である。体部には焼成前に穿孔され、背部、背部と腹部から穿孔され、その角度は様々である。図12-2のように背部に径2.0 cm、深さ2.4 cmの深い穿孔のあるもの、図13-3・4のように孔がなく、断面長方形の突起のあるものがある。

器高は15.0～18.7 cm、基部径は9.0～15.5 cmである。体部の孔径は1.2～2.8 cmである。孔は乾燥を助け焼成をより容易にして、焼き損じを防ぐためと考えられる。器体は赤褐色・淡褐色・黄褐色があり、二次的な火を受けているものがある。胎土中には砂粒が含まれているが、調整はヘラを中心に、多くの指圧痕が見られ、丁寧に行われている。また、部分的にはハケ目痕もある。表面的に焼成は良好であるが、体部に厚さがあるために内部に焼きが弱い部分もある。6世紀後半以降の土製品である。

骨角器 (図14)。1は鹿角を利用した刀子柄の破片である。長さ7.3cm、最大幅2.1cm、最大厚0.9cm、推定直径は2.5cm前後である。表面には鹿角の表文がみられ、全体に摩耗がみられ、かつ風化が進み白色となっている。上片に切り込みが1~2mm間隔で22箇所に見られる。切り込みの断面はV字型で深さは上辺で1.5~2mm、長さは1~7mmで、鋭利な刃物で滑り止めの切り目を付けている。

2は完形品で、奥原省一郎の表面採集資料である。奥原省一郎・三宅博士によると「鹿角に加工を施した刀子の柄で、全長13.5cm、柄元径2.2cm、柄頭附近最大径2.5cmを測る。柄元の木口には梢円形の茎挿入孔が穿たれ、その深さは8cmで、全体の2/3に及んでいる。本資料の大きな特徴は、茎挿入孔口辺の一端に凹状の欠き取り加工が認められることである。全体に入念な面取りや研磨が施されていて、鹿角の表文は認められない。また、茎挿入孔内に若干の鉄錆が認められることから、この品が成品として使用されたものであろうことがうかがえる。この刀子柄の所属時期は、茎挿入孔口辺の一端にみられる凹状欠き取りの部分に刀子の棟闊がはまるものと判断されるところから、

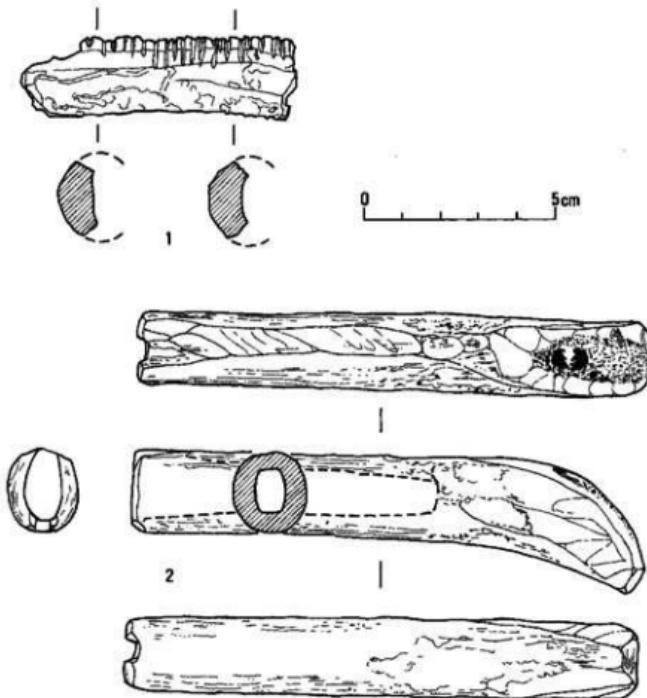


図14 表面採集骨角器（刀子柄）

当地方の刀子に棟闇が出現する時期、つまり古墳時代後半期に当たるものと考えられる。」（奥原省一郎・三宅博士「八束郡庵島町古浦遺跡表採資料について」 95~96頁 島根考古学会誌 第3集 島根考古学会1986年11月）と詳細に報告し論究している。

黒曜石（図15、図版26）。1960年古浦602番地青山芳光氏が自宅石垣の工事中に採集した黒曜石原石である。出土時の情況や状態については不明である。1962年第2次調査時に寄贈された。長さ19.8cm、最大幅17.3cm、最大厚さ9.0cm。前・後・底面には破断面があるが、上・左右面は自然面が残っている。上面には気孔列が見られ、側面にはガラス質が見られる。時期不明の黒曜石であるが、隠岐島産出の可能性と搬入時の原石の形態を留めているのではと考えて記述した。

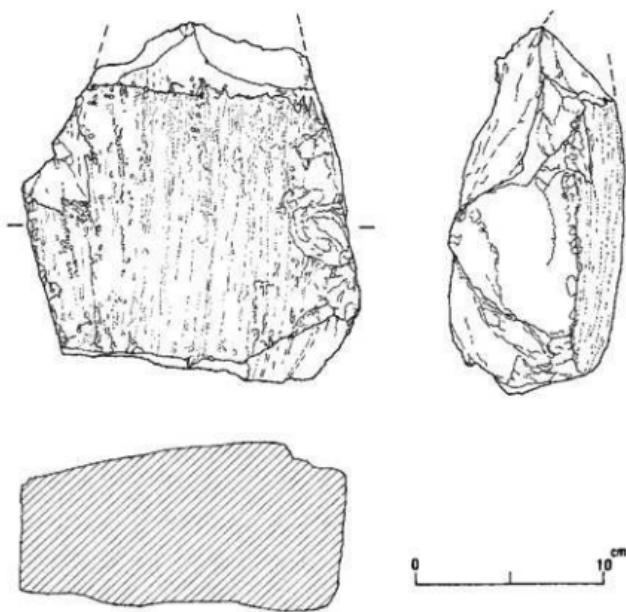


図15 石材（黒曜石）青山芳光氏寄贈

第2節 第1次調査 1961年-昭和36年

(1) 弥生時代の遺構と遺物

2体の埋葬人骨と着装された貝輪、供献された壺形土器。包含層から検出した土器数点があるに過ぎないが、白色砂層（第4層）に埋葬が有ることを確認した。

埋葬

2号人骨（図16・17、図版27～31）

2号人骨は白色砂層から出土した。頭蓋骨の上方10cmに2個の置石があり、置石の上方の石塊は長さ33.0cm、最大幅20.0cm、厚さ14.0cmのほぼ五角形の自然石、下の石塊は長さ22.0cm、横16.0cm、厚さ5.0cmの四角形の自然石である。互いに頭蓋骨の上方で一部が重複するように置かれていた。置石に近接して供献壺形土器が破砕し、積み重なった状態で出土した。埋葬上層の平面形は確認することができなかったが、隅丸長方形（縦65.0cm、横35.0cm、深さ20.0cm）を想定した。これは埋葬された人骨の状態、置石との関係から想定したものである。

人骨は小児、仰臥屈葬、埋葬方位E45°S。右肩胛骨・上腕骨が外方に移動しているように見えるが、骨の生理的位置関係に異常はない。脊柱・足根骨は消失し、右下肢骨の脛骨・腓骨は上端が外方に倒れ、左下肢骨の胫骨は上端が右大腿骨に接するように、腓骨は右大腿骨上に倒れ込んでいる。これは埋葬時に屈肢状態で埋葬されたことを物語っている。胸前腕は胸上に置か

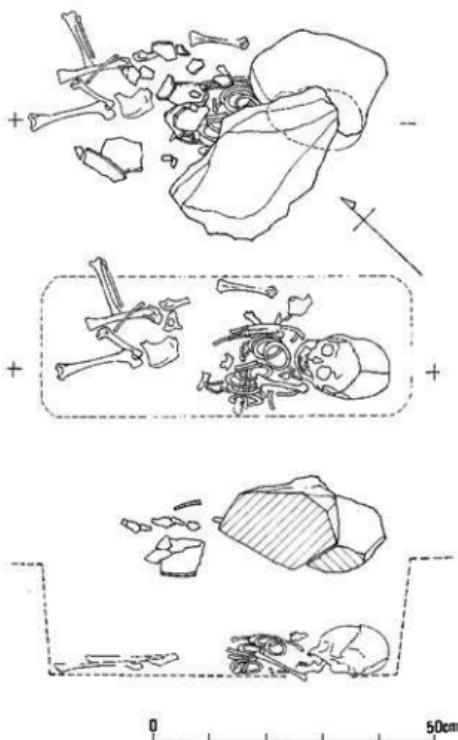


図16 2号人骨出土状態

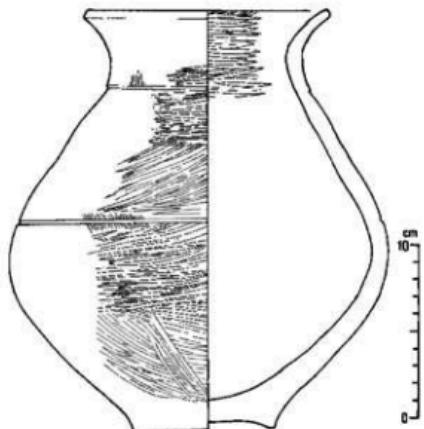


図17 2号人骨供獻弥生土器

れ貝輪が着装されている。右前腕にハイガイ製貝輪6個、左にハイガイ製貝輪8個が着装されている（図版28、30・31）。（貝輪については第9章特論木下尚子論文を参照されたい。）

弥生土器壺（図17、図版29）。器高24.1cm、口径12.6cm、胸部最大径21.7cm、底径8.0cm、凹底である。口縁部は僅かに開き口唇部は丸く、口縁直下に削り出された段、胸部にヘラ書きの沈線1条が巡らされている。器壁は淡褐色、胸部から下胴部にかけて黒斑がある。焼成は良好である。胎土中の砂粒が多く、丁寧な調整が施されている割に器壁表面に点在している。頭部段上と沈線の上下にハケ目が

見られる他はヘラ調整で、頸部の股上部から肩部までヘラ横ナデ、沈線を挟んで上胴部・下胴部は右上方向のヘラナデ、下胴部は右下方向のヘラナデ後に、粗いヘラナデが施されている。口唇部の内面は短く外方向のヘラナデ、口縁部は横方向のヘラナデ調整である。基本的にハケ目の後にヘラ調整が丁寧に行われている。前期後葉の土器である。

3号人骨（図18）

3号人骨は白色砂層から出土したが、墓壙は確認できなかった。乳児、仰臥屈葬、埋葬方位S35°E。右上腕骨・左尺骨、頸椎、肋骨の大部分が消失している。左腕骨が前方に飛び出しているように見える。下肢骨は膝関節を頂点にく字状に左右に開いており、ほぼ水平に埋葬されている。埋葬に伴う施設、副葬品などは出土しなかった。

第1次調査の弥生時代人骨は小兒・乳児の2体のみであったが、前期人骨出土の可能性と、4層中の貝粉の存在から人骨遺存状態が良いことが考えられた。

弥生土器（図19）

A・B区出土の層位不明の土器を主として図とした。

弥生土器筒型土器（図19-1）。C区西端部、黄褐色砂層（第6章、図4参照）から出土した筒型土器である。口縁部・胸部の1/4が欠失している。器高15.7cm、口径10.4cm、底径9.0cm半底で

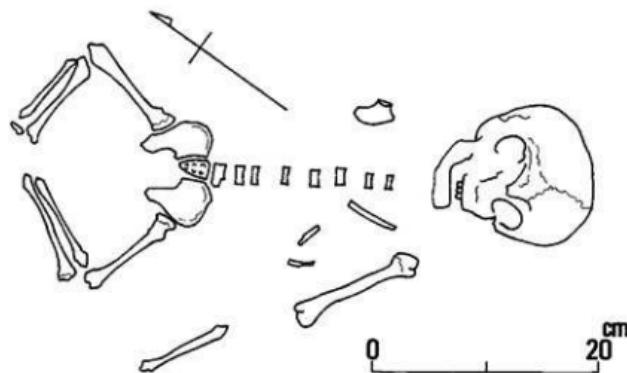


図18 3号人骨出土状態

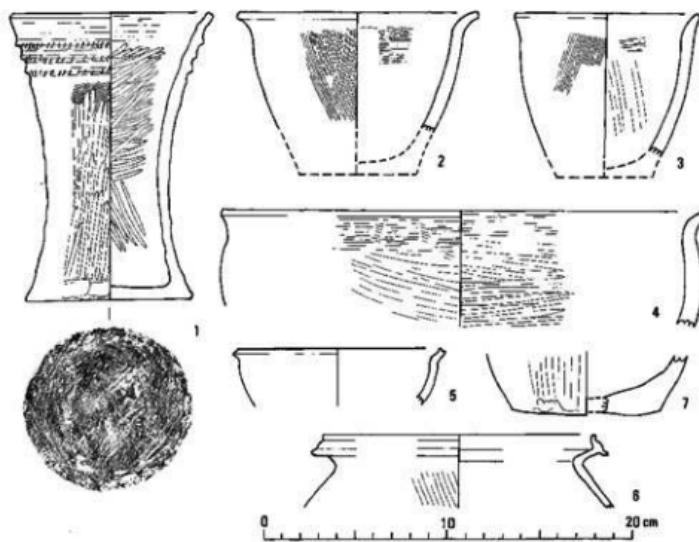


図19 A・B区出土赤生土器

ある。口縁部は直口に近く、口唇部は丸味を持ち内面はやや窪んでいる。口縁直下に断面三角形の貼付突帯3条が巡らされ、突帯には細く鋸い刻みが見られる。器壁は淡褐色、胎土に砂粒は少ない。調整は口唇部から突帯まで横ナデ、突帯下にハケ目があり、その上にヘラの細かなナデが継方向に施され、底部には指圧痕が見られ、底面は外周に沿って短いヘラ調整を繰り返している。内面は口縁部はナデ、突帯附近から胴部中位までヘラで斜め方向にナデあげ、底部は粗いヘラによる逆方向へのナデあげ、外面は基本的にハケ目の後にヘラ調整が行われ、器形との関係もあるうが紙ナデに終始している。中期中葉の土器である。

弥生土器鉢（図19-2）。B-2区排土中から採集した小形浅鉢型土器である。口径12.8cm、現存器高6.4cm、推定器高8.6cmである。口縁部外反し、口唇部は丸味を持っている。器壁は淡灰褐色、内面は淡褐色である。胎土中には砂粒が多く、焼成はやや弱い。調整は細かなハケ調整が交差するように見られ、内面は横ナデである。前期後葉の上器。

弥生土器鉢（図19-3）。B-2区排土中から採集した小形浅鉢型土器である。口径10.0cm、現存器高8.0cm、推定器高9.0cm、底部を欠いている。口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸味を持っている。器壁の外面は淡灰褐色、内面は明褐色である。胎土中に砂粒が多いが、焼成は良好である。調整は外面は剥落が多いが細かなハケ目、内面は口縁部は横ナデ、それ以下は粗なハケ調整が見られる。前期後葉の土器。

弥生土器鉢（図19-4）。A-1区で採集した大形の鉢型土器。口径26.0cm、現存高6.2cm。口縁部が外反し口唇部は凹みを持っている。器壁は外面は淡褐色、内面は黒色であるが、焼成は良い。調整は口縁部外面は粗いハケ目の後に横ナデ、それ以下は丁寧なヘラ横ナデ。内面の口縁部附近は粗いハケの後に横ナデ、それ以下はヘラ横ナデである。前期後葉の土器。

弥生土器鉢（図19-5）。B-3区排土中から採集した極めて小さな破片である。口径11.0cm、現存高3.0cm。口縁部は小さく外反し、口唇部には凹みがある。胴部が僅かに張っているが口径より小さい。器壁は明褐色で、胎土中の砂粒は極めて少なく、焼成は良好である。外面は口縁部は横ナデ、それより以下の調整は不明である。内面はすべて横ナデ調整である。後期前葉の土器。

弥生土器甕（図19-6）。B-3区で採集された小片である。口径14.6cm、現存高4.0cm。口縁部が上に拡張し、下へも下垂している。この部分に鈍い凹線がある。器壁は明淡褐色で胎土中に砂粒は殆どなく、焼成は良好である。口縁部内外面ともに横ナデ、外面は横ナデ、肩部以下はハケ目調整である。凹線文系の土器で、中期後葉の土器。

弥生土器底部（図19-7）。B-4区で採集した土器である。底径8.1cm平底。器壁は淡褐色、胎土中の砂粒は多いが焼成は良好である。底面と内面は剥落が見られるが、外面調整は粗いハケ目で整えられている。中期に属する上器と考えられる。

(2) 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構には埋葬・散乱した人骨・石組遺構などがある。

埋葬

1号人骨 (図20・23、図版35・36)

A-1区南壁側からB区の5層（白色砂層）の上半部から出土したが、墓壇は確認できなかった。人骨は小児、仰臥伸展葬、埋葬方位N40°E。右上腕骨、左右の肩胛骨、手根骨、足根骨等が消失している。頭蓋骨が土圧で潰れた状態であるが、骨の生理的位置関係は正常である。両上肢は体側に沿って伸ばし、左上肢は僅かに肘を張っているが、骨盤にまで達している。下肢骨は右鎖骨側にあり、やや右前にある感があるが、この位置が埋葬当初の位置であろう。ほぼ水平に埋葬されている。副葬品として左腹部から半分に割れた有孔円盤型骨製品1個が出士している。

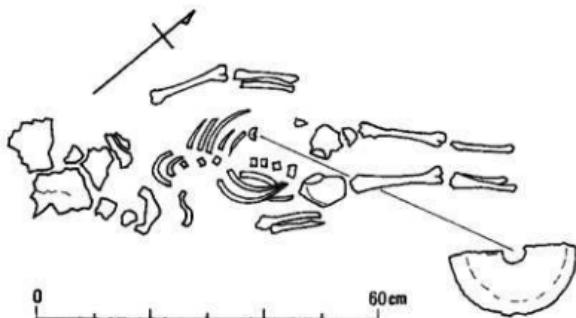


図20 1号人骨出土状態

有孔円盤型骨製品 (図21、図版45)。1/2の破片で、直径3.4cm、厚さは中央部で2.8mm、端部で2.2～2.3mmの円盤形で中央に直径5mmの孔があり、孔は向面から穿孔されている。一面は断面で明らかに端部で研磨が行われ薄くなり全体に平滑である。反対面は平坦に研磨され部分的に骨質が見える。中央の孔を紐孔とすれば装身具と考えられるが類品を知らない。

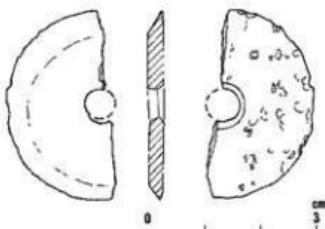


図21 1号人骨副葬骨角器

4号人骨(図22)

白色砂層から出土した。人骨は小児、仰臥伸展葬、埋葬方位N35°E。頸蓋骨の頭蓋冠、頸椎、脊椎、肋骨の一部、手根骨、足根骨が消失している。両上肢は体側に沿って伸ばし、右上肢は肘をやや張って手根骨は骨盤上に達していたと考えられる。下肢骨は平行に真っ直ぐ伸ばし、ほぼ水平に埋葬している。肘を僅かに張る状態は1号人骨と類似している。

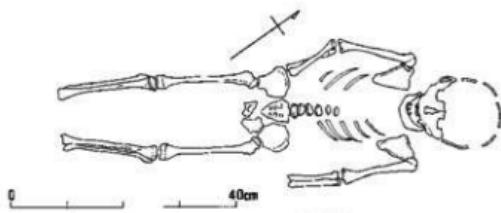


図22 4号人骨出土状態



図23 A-1区石組造構付近人骨と1号人骨出土状態

A-1区石組造構附近散乱人骨(図23・24、図版34)

第1次調査で検出した石組造構は、A-1区北壁断面図の茶褐色沙土層(第3層)中で発見した。この石組造構の北東端部の石組末端部で同一層中から散乱状態の人骨を発見した。人骨は綿まりなく出土し、上下の水準差は15cm程度で、同一個体であるのかどうかも判断できない状態であった。図23には参考のために1号人骨の出土状態を記載したが、水準では約80cmの差がある。人骨は損傷したものが殆どで、保存状態も良好とはいえない。現場で判断できた骨は大腿骨・桡骨・脛骨・腓骨・肋骨などである。これらの人骨は石組構築の際に露出した骨を造棄したと考えられ、他に造棄された人骨は石組構築上でも確認されている。

石組遺構（図24、図版37・38）

調査開始時にA区北側の崖面の茶褐色砂層中に石塊を数個確認していたが、1963・1964年にも同じ遺構が確認され、各年度の遺構が連続する可能性の強いことが明らかになった。第4章調査の歴史でも触れたように、山本清の昭和23年8月調査の「人骨出土地点付近関係位置要図」（第4章図2）の包含層中にも数個の石塊が記載されているし、小片保も第4層に自然石の並列の存在を指摘している。それは風成砂丘で自然の力で移動し集合・堆積したものでないことは明らかである。

石組遺構は、北東・南西を軸に展開している。全長7.7m、幅1.2~1.8mで、西（海岸）から東（陸）に向かって傾斜している。傾斜角度は断面図A-Bで約24°、C-Dで約22°、E-Fで約35°である。断面図C-Dには、黒褐色砂土層（厚さ41cm）・暗褐色砂土層（厚さ29.0cm）の一部と茶褐色砂層（厚さ77.0cm）と白色砂層を記載したが、層の傾斜度と石組傾斜度はほぼ一致している。しかし、C-D断面図の西端で傾斜が変化し、一段落ちて水平に近くなっている。これは石組構築時に白色砂層まで掘り下げるから新たに砂を積み上げ石組を構築したのであろうか。それとも傾斜の変換点近くにこの遺構を構築したのであろうか。石組下から出土した土器片（図30-10）が接合できることからも茶褐色砂層を掘り、石組を構築する傾斜面を確保して構築したと考えるべきであろう。

石組遺構面の上には土器・人骨が散



図24 石組遺構出土状態

乱し、崩落した石材が積み重なっている。しかし、これを除去すると石組の構造は単純で、基本的に下端部（西側）には比較的大形の石材を横位置に並べ、砂土に平らな面を置いて斜面に並べている。少なくとも積み重ねる、積み上げた状態ではない。暗褐色砂土層には土器などの遺物の包含量は多くない。層に含まれる有機質も殆ど見られない。このことはこの層自体が砂丘の活動期であったことを示している。石組構築の目的は何であったのだろうか。

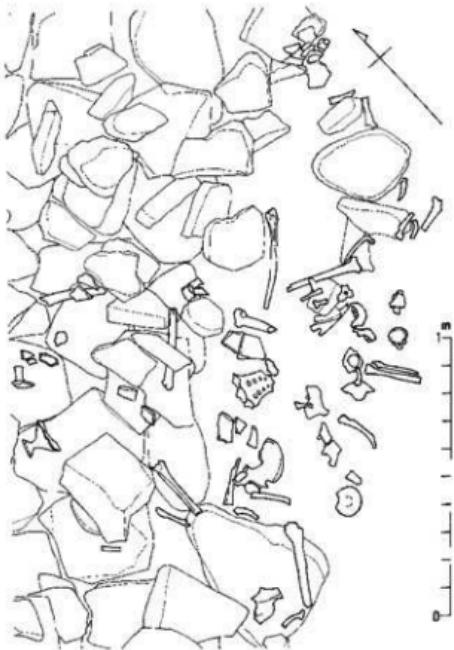


図25 石組構築上人骨出土状態

石組構築上、石組構築下端部の散乱人骨（図25）

石組構築上には人骨・土師器（図版39・40）が散乱した状態で出土した。最も集中していたのは、先に触れた散乱人骨から西南約5m附近の石組下端部である。人骨は1×2mの範囲に集中して出土したが、同一個体であるのか判然としない。骨は下顎骨・脊椎・肋骨・寛骨・仙骨・上腕骨・尺骨・胫骨・腓骨などで、完全な形を保つものは少なかった。先に触れた石組構築附近の散乱人骨も石組上、石組下端部の散乱人骨も石組構築の構築時に掘り山された人骨と考えられるが、再埋葬されることなく散乱した状態に置かれたのであろうか、その理由を明らかにすることはできない。

A-3区1層（図26）遺物出土状態

古浦遺跡の調査については第4章調査の歴史、第6章調査区の設定と層位で触れたように、正規の調査区を設定したのは第1次調査のみであった。3区の調査を担当したのは当時、島根県立博物館学芸員近藤正であった。色々の事情から限られた日数の調査参加であったが、近藤が残した調査日誌と図からその内容を紹介する。近藤は12月22・23日に当該区の調査を担当している。

北側が崖になっているために崖面の観察を参考しながら調査を進め、10cm単位で掘り下げて単位

cm毎にギリシャ数字で層番号をつけている。図26について第Ⅲ層は暗褐色砂層（第1層）の最下層であることを記し、主要遺物の配置区を作製したとして「七器片・獸骨？片の附近に発見された自然石数個を取り除いた際その下部から上層と同様な遺物（土師器・須恵器）が発見されたこと、またこれら自然石の置かれた面が特別に固いものではなかった」と記している。区には数個の自然石が並び、土製支脚・把手・土師器・須恵器片や獸骨・貝殻が秩序無く出土している。第1層における遺物の出土状態は全般的にこのような状態であった。

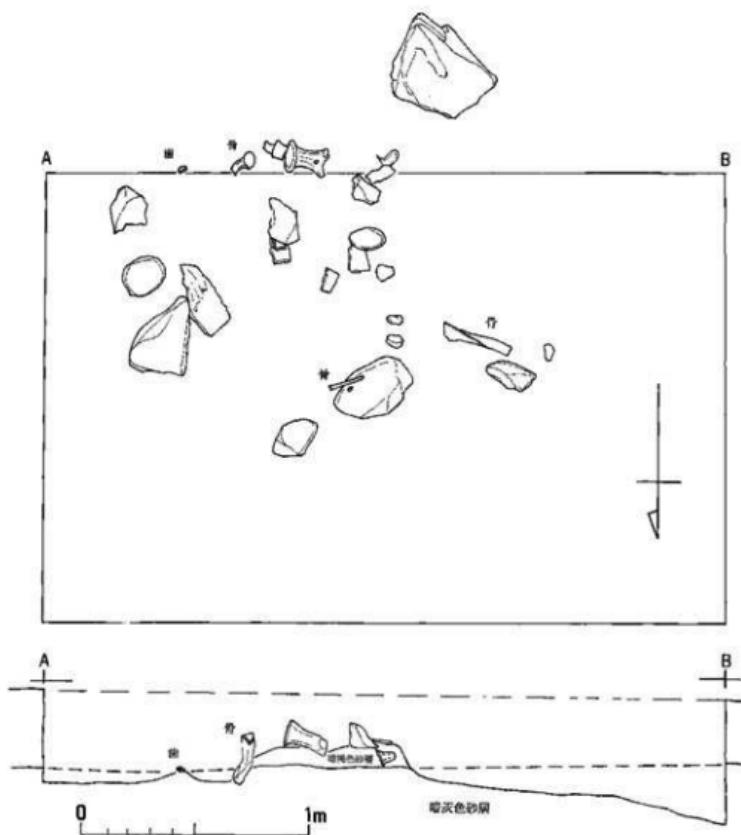


図26 A-3区1層遺物出土状態

A - 1・2・3×1・2層出上須恵器・上師器（図27）

1～15は1層、16～30は2層出土の土器である。

須恵器蓋杯（図27-1・2）。つまみの有る蓋である。ともにつまみは欠失している。1は口径12.4cm、推定高3.0cm、口唇部は小さく屈折している。器壁は淡青鼠色、胎土に砂粒はあるが、焼成は良好である。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、大井部はヘラ削り、内面は縦ナデである。2はやや大型で、口径14.0cm、口唇部が屈折しているが厚みがある。調整の手法は1と同じで8世紀後半の上器である。

須恵器杯（図27-3～10）。蓋受けの有るものと無いもの、高台の有るものと無いものに分けられる。3は口径12.5cm、器高4.3cm。蓋受けの立ち上がり強く、器壁は薄く、口唇部が丸味を持ち、受けは小さく横に延びている。黒鼠色で内面は小豆色で、胎土は精良で、焼成も良好である。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、底部外面はヘラ削りで、内面は縦ナデである。4は蓋受けの立ち上がりが3に比較すると鈍く、肉厚である。調整方法は3と同様である。ともに8世紀後半の土器。5～7はいずれも高台を持っているが、口縁部が欠失している。6では高台部から直接立ち上がっている。いずれも高台の内外に貼り付け痕がみられ、内外面には横ナデ、内面底部には縦ナデ、底部は高台の内側は糸切り技法、7は剥落して不明である。8は口径12.5cm、現存器高4.1cm、9は口径10.5cm、器高4.4cm、10は口径13.0cm、器高4.4cmである。口縁部が異なり、8は口縁部が外に開き、口唇部は丸味を持っている。9は口唇部が僅かに内傾し、丸味はあるが平面を持ち、10は口唇部が小さく外反している。器壁は青鼠色（8・9）・紅褐色（10）で胎土中に小砂粒を含んでいるが焼成は良好である。調整は内外面とともに底面までは横ナデ、内底面は縦ナデ、9・10の外底面は糸切り技法である。8世紀後半の上器。

須恵器皿（図27-11）。口径15.9cm、器高2.5cm、口唇部が短く立ち上がっている。器壁は白鼠色、胎土は精良で、焼成も良好である。口縁部内外ともに横ナデである。8世紀後半の土器。

須恵器横瓶（図27-12）。数少ない資料であるために取り上げたが、編集の都合で上に図を並べた。口径12.4cm。口縁部は開き、頸部には粘土の貼付痕が、また内面にも口縁部製作時の粘土の貼付痕が線となって残っている。黒鼠色、胎土精良で焼成も良好である。調整は口縁部内外面に横ナデ、肩部以下は同心円状のタタキ痕があり、外面には平行線状のタタキ痕が見られる。7世紀の土器であろうか。

土師器（図27-13～15、22～30）

土師器杯（13）は口径12.0cm、器高4.7cm、口縁部が僅かに内傾し、口唇部は丸味を持っている。器壁は褐赤色で胎土中に小砂粒が含まれているが、調整は良好、焼成はやや弱い。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、外底面は指によるナデである。指によるナデは口縁部側は横ナデ、それ以下の

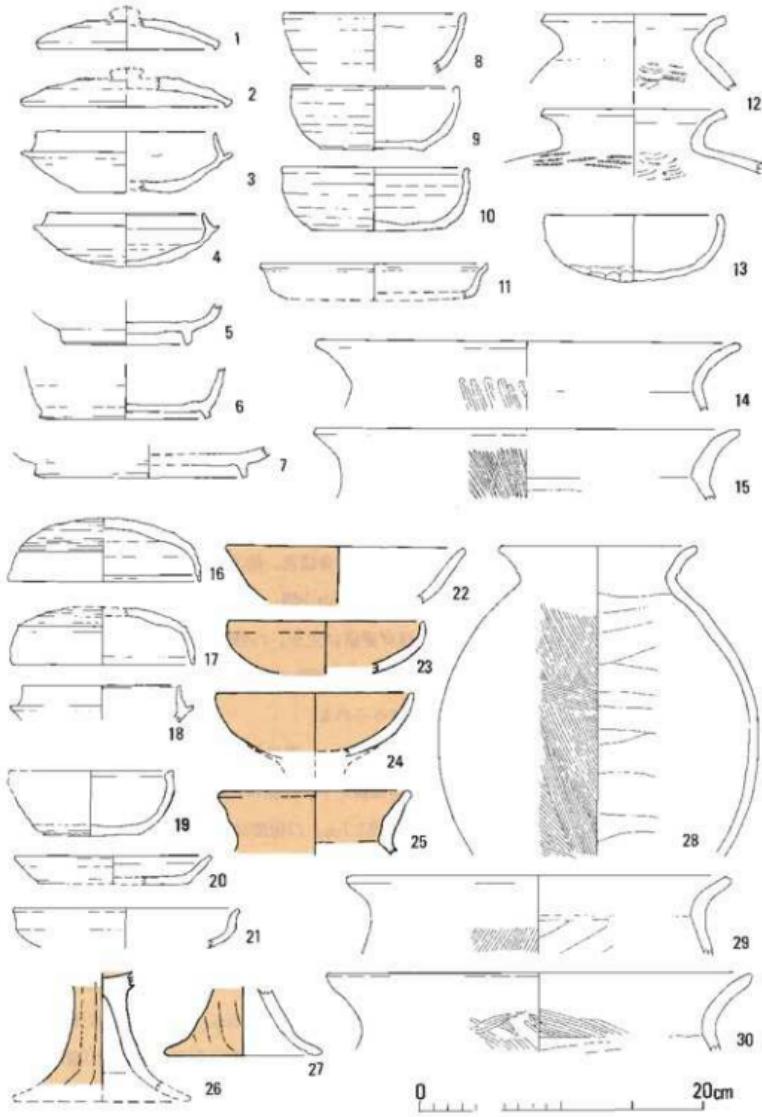


図27 A-1、2、3区 1・2層出土土器（須恵器、土師器）

外底面は縦ナデである。時期は不明である。

土師器壺（図27-14・15）。14は口径29.5cm、大きく外反する口縁部を持ち、胴部の張りは少ないと考えられる。器壁は黒褐色、胎土中には小砂粒が含まれ、調整はやや粗であるが焼成は良好である。調整は口縁部内外面とともに横ナデ、外面は頸部以下は3本単位の粗いハケ目調整で、内面はヘラ搔取りである。15は口径29.5cm、肉厚の口縁部は外反している。胎土は砂粒が多いが、調整も良く、焼成も良好である。口縁部は内外ともに横ナデで調整され、粗いハケ目が上から下へと施されている。これは口縁部での粘土の接合痕の調整も兼ねているためであろう。内壁の搔取りは横方向に強く行われ、搔取られた部分が凹面となっている。6世紀後半から7世紀の土器。

須恵器蓋坏（図27-16・17）。16は口径13.4cm、器高4.4cm、口縁部は垂直に近く立っている。口唇部内面に小さな段があり、口縁部下端には鈍い凹線がある。器壁は青鼠色、胎土は精良で調整・焼成は良好である。調整は口縁部内外面は横ナデ、天井部はヘラ削り、内面天井部は縦ナデである。6世紀前半の七器。17もほぼ同様の器形であるが、口縁部と天井部の境界に稜が認められる。調整も同様であるが、6世紀後半の上器であろうか。

須恵器坏（図27-18）。口径11.0cm、現存高2.6cm。蓋受けの立ち上がりは良く、口唇部には僅かな面がある。受け部は短いが斜めに延びている。器壁は青鼠色、胎土中に小砂粒を含むが焼成は良い。調整は横ナデが観察できるだけである。6世紀前半の土器。19は蓋受けの無い坏で9とはほぼ同形である。口径11.5cm、器高4.6cm。口縁部はほぼ垂直に立ち、口唇部には内傾した面を持っている。器壁は灰白鼠色、胎土中に小砂粒を含み、焼成はやや弱い。調整は口縁部内外面は横ナデ、底面は糸切りで、糸切り後のナデつけが底部周辺でみられる。

須恵器皿（図27-20・21）。20は口径13.7cm、器高2.0cm、青鼠色、胎土は良好であるが焼成はやや弱い。調整は口縁部の内外面は横ナデ、内底面は縦ナデ、底面は糸切りで、糸切り後のナデつけが底部周辺で見られる。21は口径15.8cm、現存器高2.7cm。口縁部は僅かに外反している。器壁は青鼠色、胎土中に砂を含むが焼成は良い。調整は口縁部の内外面とともに横ナデ、横ナデの下に軽いヘラ削り痕が見られるのは、底面が糸切りで糸切り後の調整であろう。ともに8世紀後半の土器。

土師器高坏（図27-22～24・26・27）。22は坏部で口径16.7cm、現存器高4.0cm。段を有する高坏の痕跡を見る事ができる。胎土は極めて良く、焼成も良好である。調整については内外面とともに丹塗りで観察が困難である。23も坏部で、口径13.7cm、現存器高3.6cm。口縁部はほぼ垂直に立ち上がっている。胎土は精良で焼成も良好で、全面丹塗りである。調整は全面に横ナデが観察されるが、外面には口縁部下に軽い削りが見られ、削りの後に横ナデを施している。24も坏部で、口径13.9cm、現存高4.5cm、口縁部は緩く開いている。胎土は精良であるが焼成はやや弱い。全面丹塗りである。調整は丹塗りのために観察できないが、坏部底面に粗いハケ目は見られる。これは脚部

を接合するための下地として施されたと考えられる。26は坏部の殆どと脚部端部を欠いている。脚部末端の推定径は12.2cm、推定高9.1cm、脚端部は緩やかに広がると考えられる。僅かに残る坏部内面、脚部外面は丹塗りである。胎土中に細砂が含まれているが、焼成は良好である。調整は外面は綫にヘラナデ、内面は横ナデで坏部の取り付け部分はヘラで押さえている。27は脚部、末端径は10.5cm、脚部高は4.7cmで外面は丹塗りである。調整は外面はヘラ綫ナデの後に軽い横ナデが見られる。内面は横ナデである。この丹塗り高坏の時期は不明であるが6世紀台の資料であろうか。今後の検討を待ちたい。

土師器壺（図27-25）。口径13.0cm、現存高4.5cm。く字型の口縁部で、口唇部は厚みを減じている。胎土中に小砂を含んでいるが焼成は良い。丹塗り土器である。調整は口縁部内外面とも横ナデで、内面頭部以下はヘラ搔取りである。時期不明。上述の高坏と一群の土器であろう。

土師器壺（図27-28~30）。28は口径13.5cm、胴部最大径は22.4cm、現存器高22.0cm、口縁部はく字型に開き、複合口縁の痕跡を残している。胴部の張りは良く卵形をしている。底部は欠失しているが丸底であろう。器壁は黒茶褐色で、胎土中に小砂があるが焼成は良好である。口縁部内外面ともに横ナデ調整、頸部に僅かにハケ目が見られ、少し空きを置いて全面にハケ目調整されている。内面はヘラ搔取りを横方向に行い、その後、綫に軽くヘラ削りをしている。搔取り面は凹面をなしている。5世紀の土器であろう。

29は口径26.2cm、現存器高5.4cmの大形壺である。口縁部はく字型に外反し口唇には鈍い稜がある。胴の張りは弱いと考えられる。器壁は茶褐色、胎土中に小砂粒を含むが、焼成は良好である。調整は口縁部内外面横ナデ、体部は粗いハケ目調整。内面は右斜め上方に向てヘラによる搔取りが見られる。30も大形壺で、口径29.5cm、現存器高5.6cm。口縁部は緩く外反している。胴部の張りは余りないと考えられる。器壁は淡褐色、胎土中に小砂粒を含むが焼成は良い。口縁部は横ナデ、口縁内面は横ナデの下方は粗いハケ目、それ以下はヘラによる右上方への搔取り、外面は粗いハケによる調整である。2点ともに6世紀後半から7世紀の七器であろう。

B-2・3・4区1・2層出土の弥生土器・須恵器・土師器（図28）

1~15は1層、16~24は2層出土である。24の注印は弥生土器である。

須恵器壺（区28-1~5）。身受けの無いものと有るものがあり、またつまみの無いものと有るものがある。1は口径11.3cm、器高3.5cm。口縁部は僅かに開き、口唇部は丸味はあるものの尖り気味である。口縁部上方に凹線2条がある。器壁は黒鼠色で胎土中に小砂が含まれている。調整は口縁部内外面は横ナデ、大井部はヘラ削りで、内面の大井部は綫ナデである。2は口径14.8cm、推定器高2.1cmである。口縁部は良く立ち、口唇部内面には面がある。全体的にみて扁平である。器

壁は青鼠色、胎土は精良で焼成も良い。調整は遺存部分ではすべて横ナデである。ともに6世紀後半の上器。

3は、口径15.0cm、器高2.5cm、環状のつまみが有る。口縁部は直角に折れ曲がり身受となっている。黒鼠色、胎土中に小砂粒が含まれ燒成はよく、部分的に自然釉がみられる。口縁部内外面ともに横ナデ、天井部はヘラ削り、つまみ附近は貼付痕がある。4は口縁部を欠失している。推定口径16.3cm、推定器高3.3cm。器壁は青鼠色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良好である。調整は外側は大井部まで横ナデ、つまみ内部は縦ナデ、内面天井部は縦ナデである。5は身受が有る蓋壺で口径17.6cm、現存器高2.2cm。器壁は青鼠色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は残存部は口縁部の内外面とともに横ナデ、大井部外面にヘラ削りが見られる。3～5は7世紀後半の土器。

須恵器壺（図28-6）。高台の有る壺で、高台の内径は7.2cm。緩く開く口縁部を持つと考えられる。器壁は青鼠色。高台部分には貼付痕があり、残存部分の調整は外側ともに横ナデである。

土師器壺（図28-7・8）。7は須恵器の器形を模倣した土師器である。高台部分のみで内径は10.3cm、全面丹塗りであるが高台内の底面の丹塗りは軽い。器壁は明褐色、胎土は精良で焼成も良い。調整については丹塗りのために明らかにできない。7世紀後半の上器であろうか。8は口径12.8cm、器高5.8cmで深みのある壺で、口縁部は緩く開き、口唇部は器体が薄くなり尖り気味になっている。器壁は明褐色、胎土は精良で焼成も良い。調整は口唇部が横ナデ、外側は左上方向にヘラで軽く削り、底面は横方向に削っている。内歯は右上方向にヘラで軽くナデあげている。時期不明。

土師器高壺（図28-9・10）。9は鼓形器台とも考えられるが器壁の厚さ、調整方法から小形高壺の外部と考えた。口径13.4cm、現存器高4.1cm、段を有する高壺である。器壁は淡褐色、胎土中に小砂があるが焼成は良好である。調整は外側ともにハケの後にヘラ横ナデである。10は壺部の大部分と脚部の末端部が欠失している。脚に7mmの円形の透かし1個がある。器壁は明褐色、胎土中に小砂があるが焼成は良い。調整は壺部内外面とともにヘラナデ調整。壺と脚の接合部はヘラで上を加えている。脚部はヘラ縦ナデで、裾に近い部分はヘラ横ナデを施している。時期不明の土器である。

土師器壺（図28-11）。口径16.8cm、現存器高4.7cm、複合口縁で立ち上がりの接合部分が弯曲し口唇部に達している。口唇部内面には内傾した緩い面がある。器壁は淡褐色で胎土中に小砂があり焼成は良い。調整は残存部分はすべて横ナデである。3世紀末～4世紀の七器。

土師器壺（図28-12～14）。く字型の口縁部をもつ小形壺である。12は口径14.3cm、13は15.0cm、14は15.5cm。口縁部の形態はそれぞれ異なっていて、14は口唇までの途中で粘土帯を接合している。調整はハケ調整を基本として、口縁部は横ナデ、内歯はヘラ搔取りを行っている。12・13は5世紀

中葉の土器。

土師器羽釜（図28-15）。口径21cm、現存器高4.9cm。大きく開く口縁部と張りのない胴部から羽釜とした。器壁外面は淡黒色、内面は灰白褐色で、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部は横ナデ、外面は極めて粗いハケ目、内面はヘラ搔取りである。7世紀台の土器であろうか。

須恵器壺坏（図28-16・17）。身受の無いものと、有るものに分けられる。16は口径14.6cm、推定器高4.0cm、口縁部の開きは小さく、外面には穂があり内面には凹線がある。調整は残存部では横ナデが観察できる。器壁は青鼠色、胎土中には小砂があるが焼成は良い。6世紀後半の土器。17

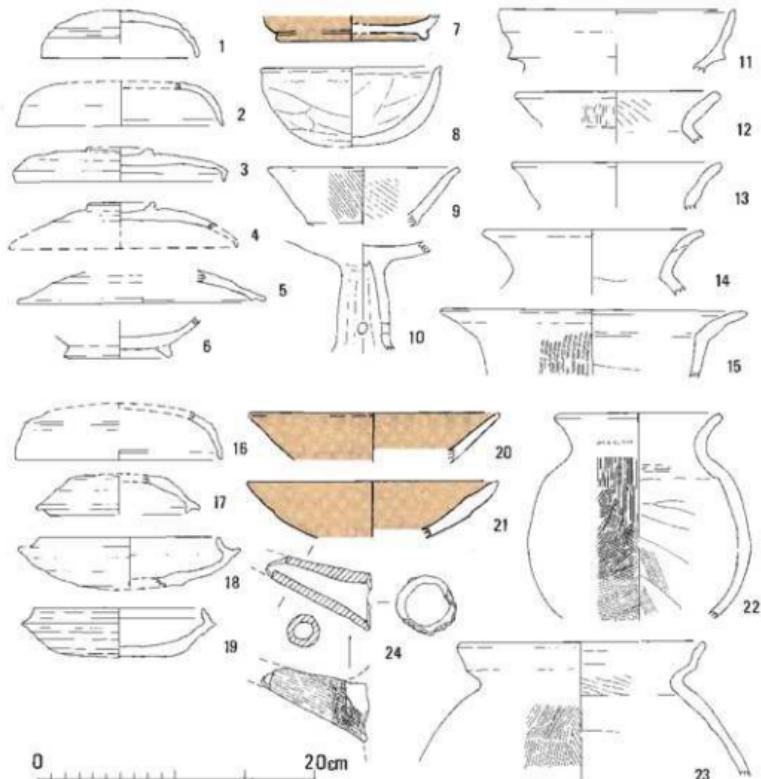


図28 B-2、3、4区 1・2層出土土器（弥生土器、須恵器、土師器）

は口径10.1cm、器高3.0cm、身受があり立ち上がりは内傾し小さく短い。受部も同様である。器壁は青鼠色、胎土中に小砂が含まれるが焼成は良好である。調整は口縁部内外面ともに横ナデで天井部はヘラ削りである。7世紀前半の土器。

須恵器壺（図28-18・19）。18は口径13.0cm、器高3.9cm、口径の割に器高が低く浅い感がある。身受は内傾し受け部は土に近く延びている。器壁は青鼠色、胎土・焼成も良好である。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、内面底部は縦ナデ、底面はヘラ削りである。6世紀後半の土器。19は口径12.4cm、器高3.5cm。身受は内傾し短い。受部も小さくドがっている。器壁は紫黒鼠色、受け部の下から底面まで自然釉が全面に見られる。胎土は精良で焼成も良いが焼き歪みがある。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、内底面は縦ナデ、底面はヘラ削りである。7世紀前半の土器。

土師器高环（図28-20・21）。20は口径17.7cm、現存器高3.7cm、段の痕跡を持つ高环の环部である。胎土は淡茶褐色、胎土は精良で焼成もよい。調整は全面が丹塗りであるために観察できない。21は口径17.7cm、器高4.1cm。口縁部は良く開いているが、口唇部が鈍く尖り、器壁が厚く鈍重な感があり、胎土の接合部が凹状、内面では緩い凸状となっている。器壁は明褐色、胎土は砂粒を含んでいるが、調整・焼成は良好である。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、胎土接合部の外側にはハケ目調整の後に、脚部からヘラによるナデあげが見られる。内底面はナデあげである。ともに時期不明。

土師器壺（図28-22）。小形壺、口径11.4cm、現存器高14.9cm、推定器高16.0cm、胴部最大径16.0cm、丸底と考えられる。口縁部は外反し、口唇部は丸味のある面を持っている。器壁は厚く、茶褐色で胎土中に砂粒が多い。一部が二次的な火を受け、煤も付着している。調整は口縁部内外面は横ナデ、頸部から胴部上半部は縦ハケ、胴部下半部は斜めにハケ目を施している。内面は先ず胴上半部にヘラ横搔き取り、ついで胴下半部に左斜め上方向のヘラ搔取りを行った後に、部分的にハケ目調整を行っている。5世紀後半の土器。

土師器壺（図28-23）。口径17.5cm、現存器高9.7cm、口縁部から胴部の破片である。複合口縁で立ち上がりは外反し、丸味のある口唇部は外傾している。胴部の張りは良い。器壁は淡茶褐色、胎土中に小砂粒が含まれているが焼成はよい。調整は口縁部内面から外側は頸部附近まで横ナデ、それ以下は方向を変えながら斜め方向に短くハケ目を施している。内面頸部附近は粗いハケの後にナデ、それ以下は横方向の丁寧なヘラ搔取りを行っている。5世紀後半の土器。

弥生土器注口土器（図28-24）。注口部だけが出土している。先端部が欠失し基部は本体から貼付痕を残して剥離している。基部上半部は張付のための化粧土が剥落している。径は先端部で外径2.0cm、内径0.9cm、基部外径4.0cm、内径2.8cm、取付角度は上側で10°、下側で30°である。器壁は明褐色、胎土は精良で焼成は良い。調整は注口部には注口と平行にハケ目調整を行い、その後に基

部の貼付部では先端部に向け、恐らく本体部分から連続していると考えられるハケ目がみられ、さらにこのハケ目に直交するハケ調整が行われている。弥生後期の土器である。

八一・2 区3層出土弥生上器・須恵器・土師器(図29)

須恵器壺は蓋・壺・甕、土師器は壺・壺・高壺・甕、弥生土器は甕が出土している。

須恵器蓋壺(図29-1)。口径12.7cm、器高4.5cm、口縁部は垂直に近く、口唇部内面に小さな段がある。器壁は青鼠色、胎土は精良で焼成も良い。調整は口縁部の内外面は横ナデ、天井部にヘラ削りが見られ、内面の大井部は縦ナデである。6世紀後半の土器。

須恵器壺(図29-2~5)。2は口径12.4cm、器高5.2cm。口径と器高の均衡がとれている。受部の立ち上がりは内傾して高く、受部は小さく横に突き出ている。白青鼠色で胎土中に砂粒があるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、底面はヘラ削り、内底面は縦ナデである。3は口径11.9cm、現存器高2.8cm。受部の立ち上がりは内傾し高いが、受部は横に短く突き出し、小さな平坦面がある。器壁は青鼠色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は残存部分では内外面ともに横ナデである。4は口径10.6cm、現存器高3.2cm。受部の立ち上がりに凹線が見られる。受部は小さく斜め上を指している。湖壁・調整は3と同様である。5は口径12.5cm、器高3.9cm。受部の立ち上がりは直立に近く、受部は小さく短い。器壁は青鼠色、胎土中に砂粒があるが焼成は良い。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、外底面はヘラ削り、内底面は縦ナデである。4点とも6世紀後半の土器。

須恵器甕(図29-6)。把手付きの甕で口縁部から胴上半部、底部が欠失している。胴部径29.0cm、両側に把手があり、ヘラで軽く削り成型している。底部は丸底であろう。器壁は黒鼠色、胎土中に砂粒は極めて少なく焼成は良好である。また窓印として大きな×印がある。調整は把手周辺はナデ付け、外面は胴部が平行叩打、底部が斜格子叩打でカキ打が間隔を置いて施されている。内壁は胴部附近は大形の同心円文、底部はやや小振りの同心円文で成型している。6世紀後半から7世紀の土器。

土師器壺(図29-7~9)。7は口径14.8cm、推定器高5.8cm。口縁部は直立に近い状態で、口唇部は丸味のある内傾した皿となっている。内外面ともに丹塗り、胎土は精良で焼成も良い。調整は内面は細かな横方向のヘラナデをしている。外面は指で押さえて調整し、部分的にヘラ横ナデを加えている。8は口径12.8cm、推定器高4.9cm。口縁部は緩く外反している。全面丹塗り、胎土は良好で焼成も良い。調整は口縁部の内外面は横ナデ、外底面はヘラで斜めに軽く削っている。9は口径15.8cm、推定器高4.5cm。口縁部は直立に近い状態で、口唇部に面はない。口縁部には粘土の接合部であろうか鈍い凹部がある。内外面ともに丹塗り、胎土は良で焼成も良い。調整は口縁部の内

外面は横ナデ、外面は底部にかけて横ナデが見られ、内面は縦・斜め方向にハケ目が見られる。時期は明らかでないが、5世紀台の土器であろうか。

土師器壺（図29-12）。口径11.0cm、現存器高4.3cm。口縁部は僅かに開き、口唇部は尖り、外面は緩い凹凸を繰り返している。残存部は全面丹塗りで、胎土は精良で焼成も良い。調整は内外面とともに横ナデである。5世紀台の上器である。

土師器高坏（図29-13～21）。坏部と脚部に分けられ、全体を窺える資料は出土していない。坏部（図29-13～16）は段の有るもの、無いものに分けられる。13は口径19.7cm、口縁部は段の部分から弯曲しながら大きく開いている。全面丹塗り、胎土中に小砂を含んでいるが焼成は良好である。調整は外面は段から口縁部内面まで横ナデ、段以下は左から右への軽いヘラ削りが見られる。14は口径17.6cm、脚部接合部まで残存し器高5.5cm。口縁部は段部分から大きく開き、胎土の接合痕をみることができる。調整は外面の段から内面の段部分まで横ナデ。段以下の外面はヘラナデ、内面段附近は横ハケ目で接合痕を消している。15は口径14.6cmや小形である。口縁部は開いているが、口唇部は钝く太い。器壁は淡褐色で一部淡黒色、胎土中には調砂が見られるが、焼成は良い。調整は段部分以下は縦の粗いハケ目後にヘラナデつけ、段から口縁部内外面、内底面まで横ナデが見られる。段附近の調整は接合痕の修整のための作業である。16は段の無い高坏である。口径12.9cmで、脚の取付部まで残存している。口縁部は直立に近い状態で、口唇部は丸味をもち、全面が丹塗りである。胎土中には砂粒があるが焼成は良い。調整は口縁部内外面とともに横ナデ、外面にはハケ目が見られる。これらの高坏は5世紀後半の土器である。

脚部（図29-17～21）。17は脚端部径9.7cm、裾の広がりは少ない。胎土は精良で焼成はやや弱い。器壁外面は丹塗りである。調整は外面はヘラ縦ナデ、内面はヘラナデである。18は脚端部径10.7cm、残存高4.0cm。脚高の割に裾部分は良く開いている。器壁は淡灰白褐色、焼成はやや弱く剥落が見られる。断面で接合部が観察され、接合部内面には凹面がみえ指で押されており、その上下にハケ目が短く残っている。内面裾部は横ナデ、外面は縦ハケ目が見える。19は推定木端部径10.8cmで、脚裾部の広がりは強い。胎土は精良で焼成も良い。坏部接合の痕跡が残り、剥離した状態が観察できる。外面はヘラ縦ナデの後に丹塗り、内面には絞りが見られる。20は坏部の一部が残り、脚端部径7.0cm、脚部高4.2cmで肉厚である。残存している坏部内面は丹塗り、脚外面は全部、内面の一部も丹塗りである。胎土は精良で焼成も良い。調整は粗いハケで2段に調整しその後に横ナデ、内面は横ナデとヘラ押さえがある。17～20は5世紀後半の上器である。

21は坏部が僅かに残る筒型の脚で、木端径7.8cm、脚部高6.0cmで、坏部、脚部ともに丹塗りである。胎土は良く焼成も良好で、調整はすべて指ナデで行われている。坏部は口径の割に深みのある形であろう。時期不明の上器である。

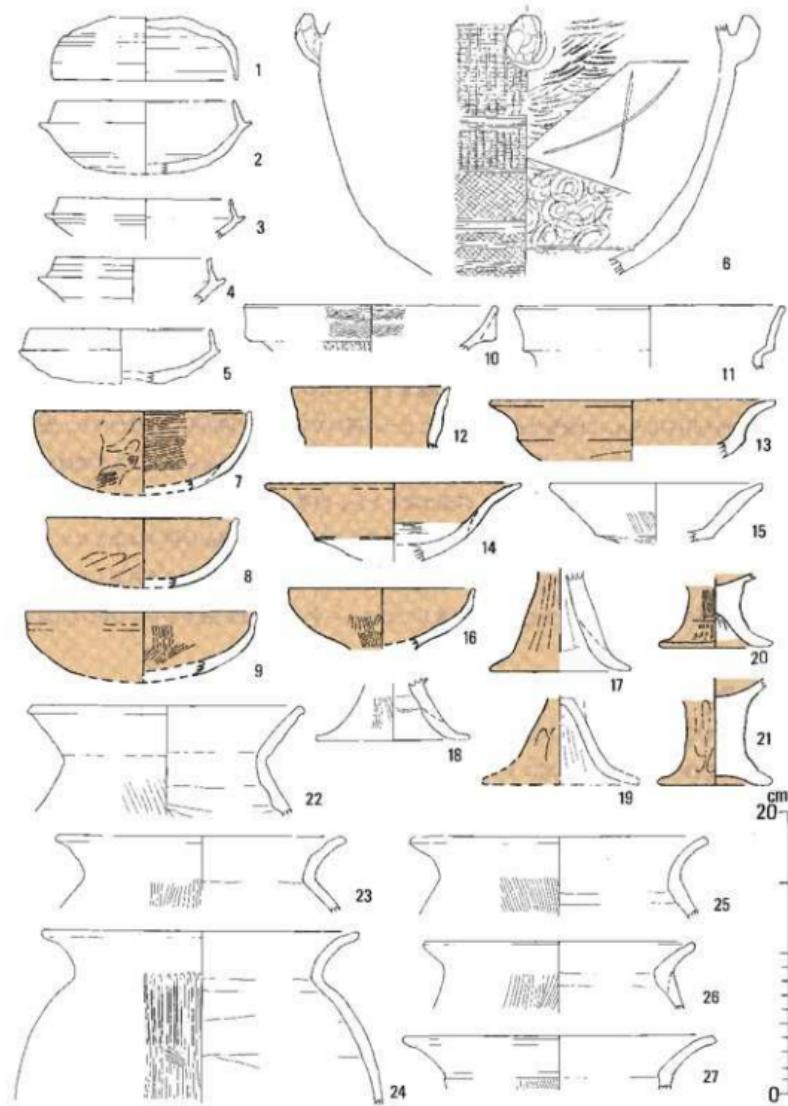


図29 A1、2区 3層出土土器（弥生土器、須恵器、土師器）

土師器壺（図29-22～27）。22は口径18.3cm、く字型の口縁部で大きく開き、口唇部は下に肥厚している。口縁部外面には凹凸があり、頸部では段をなしているよう見える。器壁は茶褐色で、内面は黒色、胎土中に砂粒があるが焼成は良い。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、外側は極めて粗いハケ目で、内面はヘラで左横方向へ搔取り凹面をなしている。23もく字型口縁、口径19.3cm、口唇部で曲がりを強め、内面には粘土接合部の跡を残している。器壁は茶褐色、胎土中に細砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面は横ナデ、外側は粗いハケ目、内面はヘラによる軽い搔取りがみられる。24は口径21.5cm、よく開いた口縁部をもち、胴部最大径26.0cmで良く張っている。器壁は茶褐色、胎土中には砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、それ以下は極めて粗いハケ目を縱方向に、内壁は右から左へヘラ搔取りをしている。25は口径20.3cm、弯曲した口縁部で、口唇はコ字型をしている。器壁は紅褐色、胎土中に小砂があるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面横ナデ、口縁部下はハケ目、内面は右から左方向のヘラ搔取りである。26は口径18.5cm、口縁部は折れ曲がったように開いている。口縁内面に凹部があり、頸部の器壁の厚さは1.4cmあり鉛重な感がある。淡白灰褐色で胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外側は継ハケ目、内壁は左から右へのヘラ搔取りがある。27は口径21.5cm、口縁部はよく延びて開いている。頸部に凹線があり、胴部の張りは余りないと考えられる。器壁は明茶褐色、胎土中に小砂があるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外側は凹線以下はハケ目、内面はヘラ搔取りである。いずれも6世紀後半から7世紀の上器である。

弥生土器壺（図29-10・11）。10は口径17.3cm、口縁部は細かく弯曲して開いている。断面で観察すると粘土貼付け痕が観察され、口唇部から垂れ下がった断面三角形状の貼付けを行い文様帶としている。文様は口縁部の内外面に6本単位のクシで波状文を2段施している。外面の貼付けのドは粗いクシ目調整が見られる。器壁は外側は淡褐色、内側は紅褐色、胎土中に小砂が含まれ、焼成はやや弱い。弥生後期一畿内第5様式の土器。

11は口径18.4cm、複合口縁壺であるが、口縁の広がりは少ない。器壁は淡褐色、一部淡黒色で薄い。胎土中に細砂が含まれ焼成はやや弱い。調整は残存部分で内外面ともに横ナデである。後期終末の土器である。

B 1区3層出土土器（図30、図版41・42・43）

茶褐色砂層出土の土器で、石組遺構の上面や下から出土した土器で、比較的大形の破片が見られた。器種として壺・壺・高壺・壺がある。1～9は石組遺構面の上、または周辺。10・11は石組遺構の上・下または石組間。12～16は石組遺構下から出土した土器である。

土師器壺（図30-1・3）。1（図版41）は口径10.3cm、胸部最大径12.5cm、推定器高14.0cmの小形壺。複合口縁で良く張った球形の胸部と丸底からなっている。口縁部立ち上がりは斜めに良く延び口唇部は外に肥厚している。また立ち上がりの基部は断面正角形の突帯状をしている。器壁は極めて薄く3～4mm前後、明淡白褐色、胎土中に微細な砂粒を含んでいるが焼成は良好である。外面は胸部に見られる横方向の細かなハケ目を除いて横ナデで整え、内面は口唇部から頸部まで横ナデをしている。頸部内面の幅1.2cm前後の面はヘラ横ナデ、肩部は右上方向の丁寧なヘラ削り、胸部以下も頸部とは反対方向への丁寧なヘラ削りで整えている。4世紀前半の上器である。3は口径15.0cm、良く開いた口縁部で内面は滑らかな線であるが、外面は小さな凹凸が見られる。恐らく粘土接合痕であろう。器壁は灰白褐色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部内面で横ハケ日、外面は縦ハケ目の後に横ナデを行っている。時期不明の土器である。

土師器壺（図30-2）。口径12.6cm、現存器高4.2cm、口縁部はつまみ上げたように直立し、口唇部は尖り気味である。やや肉厚の器壁は茶褐色、胎土中には小砂が含まれているが焼成は良い。調整は内面は横ナデ、外面は指で縦にナデつけている。時期不明の土器である。

土師器高杯（図30-4・5）。4は口径16.3cm、現存器高6.7cmで脚部を欠失している。口縁部は大きく開き、段はないが粘土の接合部は小さな回線として痕跡を留めている。器壁は明褐色で小砂を含み焼成は良いがやや焼き重みがみられる。調整は口縁部外面から内底面まで横ナデ。外面は横ナデ以下をハケ目で整えている。また、内面にはヘラによる暗文があり、底面中心部から口縁部方向へ放射状に施されている。脚部から杯部の途中まで一気に製作され、杯中央に粘土塊を詰め脚部から圧を加えて完成させている。5世紀中葉の上器。

5（図版43）は完形の十器である。口径12.0cm、器高9.1cm、やや深めの杯に、良く開いた短い脚が付いている。口縁部は僅かに内傾し、口唇部は丸味のある面を持っている。脚部は肉厚で良く開き据端部に直立した面がある。脚の接合痕が線として残っている。全面が丹塗りで脚部内面にまでおよんできている。胎土は小砂を含んでいるが、特徴的で淡白褐色、丹塗り上器を作成するために選択したのではないかと考えられる。調整は横ナデ、脚内面の丹塗り部分までおよんできている。杯内面には横ナデの後にヘラによる暗文が放射状に中心部から口縁部へつけられ、その後、逆方向に暗文が施されている。時期不明の十器であるが、5世紀台の上器ではないだろうか。

土師器甕（図30-6～9）。6は口径16.5cm、現存器高5.7cm。口縁部はく字状であるが、粘土接合部分が段状に残り、そこから弯曲して開いている。また、内面は外面の段部分が凹面をなしている。器壁は明茶褐色で胎土は良好で焼成も良い。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、外面はハケ日、内面はヘラによる横方向の搔取りである。7は口径16.5cm、6に類似した口縁部である。器壁は淡紅褐色、胎土中に小砂を含んでいるが焼成は良好である。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外

面はハケ目で左下方向と右下方向のハケ目がみられる。内壁は円形の圧痕が全面にあり、後に軽い横ナデが施されている。8は口径22.0cm、緩く外反する口縁部である。器壁は淡褐色、胎土には小砂が含まれているが、焼成は良好である。調整は口唇部直下に粗いハケ目があり、内壁は横方向の軽いハケ目、その下はヘラによる軽い圧痕がある。9は口径22.4cm、く字状の口縁部で、口唇部直下で粘土を接合し、内面に接合痕が線となって残っている。器壁は外側は淡黒色、内面は灰白褐色で胎土には小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、内面はヘラによる短い削り痕がある。これらの甌は5世紀中葉の土器である。

土師器壺（図30-10、図版42）。口径19.5cm、残存器高21.0cm、胴部最大径27.0cm、複合口縁の壺である。口縁部の立ち上がりは外に開き、口唇部には内傾した平坦面がある。口縁部直下に接合痕の痕跡があり、その下方にも接合痕がやや深んだ面として残っている。胴部の張りは強く、倒卵形の体部を持ち丸底と考えられる。器壁は淡明褐色で部分的に赤味を帯びている。胎土中に砂粒は少なく焼成は良好である。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、口縁部の接合痕から底部に向けてハケ目で整えている。ハケ目は横方向に行った後に、肩部では左下がり、胴部以下は右下がりのハケ目で調整し、その後に不規則なハケ目を加えている。また、三角形状のヘラ描きがあり、右下がりの線を先ず描き、次いで左下がりの強い線、最後に右方向の長めの線を描いている。この土器の大部分は石組造構上から出土したが、数片は石組造構下から出土している。5世紀中葉の土器。

土師器壺（図30-11）。推定口径11.2cm、残存器高10.0cm、胴部最大径17.0cm。口縁部と底部を欠失している。口縁部は口縁部直下に接合痕が段状に残っている。器壁は明褐色、胎土は精良で焼成も良い。調整は残存している口縁部では横ナデ、それ以下は粗いハケ目で横・斜めに調整しその後に縦ハケ目を行っている。内面は頸部は粘土接合痕があり、指によるナデあげがあり、胴部から底部にかけてヘラによる搔取りが横・斜めに施されている。石組間で出土した土器で5世紀中葉の土器である。

土師器壺（図30-12・13）。12は石組造構下出土の複合口縁壺で、口径15.0cm、胴部最大径24.0cm、残存器高17.0cm。口縁部の立ち上がりは僅かに外反し、口唇部は僅かに丸味を持つ面である。胴部の張りは良く球形に近く丸底と考えられる。器壁は外面は黒褐色、一部で茶褐色、内面は濃茶褐色である。胎土には小砂が含まれて焼成はやや弱い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は横・縦・斜めのハケ目で整えられている。内面は横方向のヘラ搔取りである。5世紀中葉の土器。13は石組造構下出土の複合口縁壺。口径25.5cm、胴部最大径23.0cm、現存器高12.0cm、球形の良く張った胴部を持ち丸底であろう。口縁部の立ち上がりは僅かに外反し短い。立ち上がり基部も鈍い稜線となっている。器壁は淡褐色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ。外面は縦ハケ目、内面は横方向のヘラ搔取りである。5世紀中葉の土器。

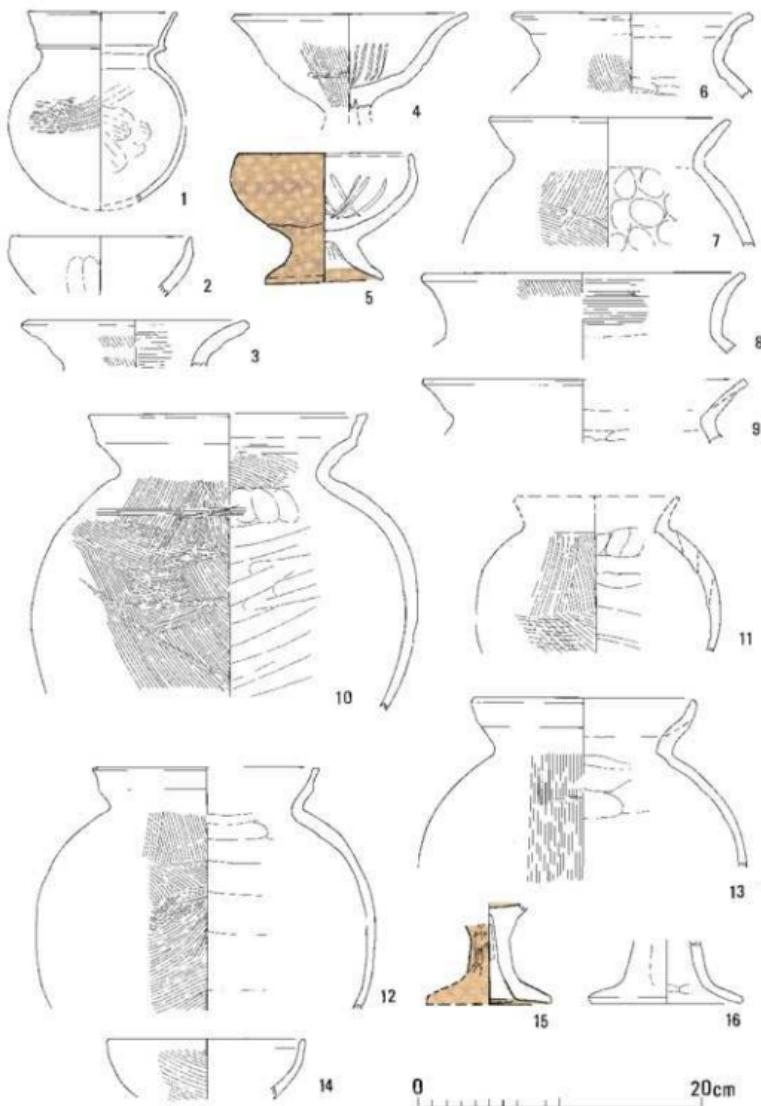


図30 B-1区 3層出土土器（土師器）
1～9 石塚上周辺 10・11 石塚間 12～16 石塚下

土師器壺（図30-14）。口径12.6cm、残存器高4.2cm。口縁部は直立し、口唇部は丸味を持っている。器壁は淡褐色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口唇部の内外面ともに横ナデ、外面は斜め方向のハケ目、内面はナデ上げている。時期不明であるが5世紀台の土器であろう。

土師器高壺（図30-15・16）。15は壺部の一部を残している脚で壺部径8.7cm、現存器高7.0cm、脚高6.3cm。外面と裾部内面が丹塗りである。胎土は精良で焼成も良い。調整は外面はヘラ綫ナデの後に短いハケ目、内面の裾平坦面はヘラナデつけ、脚部内面もヘラナデつけである。16は脚部下半部で、裾末端径は10.5cm、現存器高4.4cmである。裾は折れ曲がるようになっていて、器壁は明褐色、胎土は良好で焼成も良い。調整は外面はヘラナデつけ、内面裾部はヘラナデつけ、それ以外はヘラ削りである。ともに時期不明であるが5世紀台の土器であろう。

B 3区3層出土土器（図31）

土師器壺・高壺・盃・甌が出土している。1～7は石紙遺構面上の出土。8～19は石組の間から出土した。

土師器甌（図31-1）。口径18.6cm、口縁部はく字状で、外側に粘土を張付けて口縁部を形成し、口唇部は丸味を持っている。器壁は明淡褐色で胎土中に小砂を含んでいるが焼成は良い。調整は横ナデ、外面にはハケ目が僅かに観察できる。5世紀中葉の土器。

土師高壺（図31-2～7）。2は口径16.7cm、段のある高壺の壺部で、現存器高7.0cm、壺部と脚部の一部である。壺部口縁は良く開き、残存部はすべて丹塗りである。胎土は白色で精良、焼成も良い。調整は丹塗りであるために観察できない。3は高壺脚部で裾端部の径は10.3cm、脚高は7.8cm、壺部底面の一部が残っている。器壁は厚く外面、裾部内面は丹塗りで、胎土は灰白褐色で良好、焼成も良い。調整は丹塗りの下に縦ハケ目で、裾部は微妙に縦ハケ目が観察できる。内面はヘラで横方向に削っている。4は高壺脚部で裾端部径は9.2cm、脚高は5.1cm、壺接合部の痕跡が残っている。胎土は精良で焼成も良好である。調整は脚部はヘラ綫ナデ、裾部はヘラナデつけ、脚体内面には較りが見られる。外面は濃い丹塗りで内面は部分的に薄い丹を塗っている。5も高壺脚部で、裾端部径は11.5cm、径0.8cmの透かし孔があるが個数は不明である。胎土は茶褐色、胎土中に小砂があるが焼成は良い。外面はヘラナデ、裾端部内面はヘラ削り後にヘラナデ、それ以外はヘラ削りのみである。6も脚部で裾端部径は10.0cm、器壁は紅褐色、胎土は精良で、焼成・調整は5と同様である。7も脚部で裾端部径は14.3cm、径不明の透かし孔があるが全体の個数は不明である。調整は外面はハケ目、端部内面は指ナデとヘラ削りである。3は時期不明であるが、その他の土器は5世紀中葉である。

土師器壺（図31-8・9）。8は口径14.0cm、器高4.8cm浅めの壺で、口縁部は僅かに内湾し、口

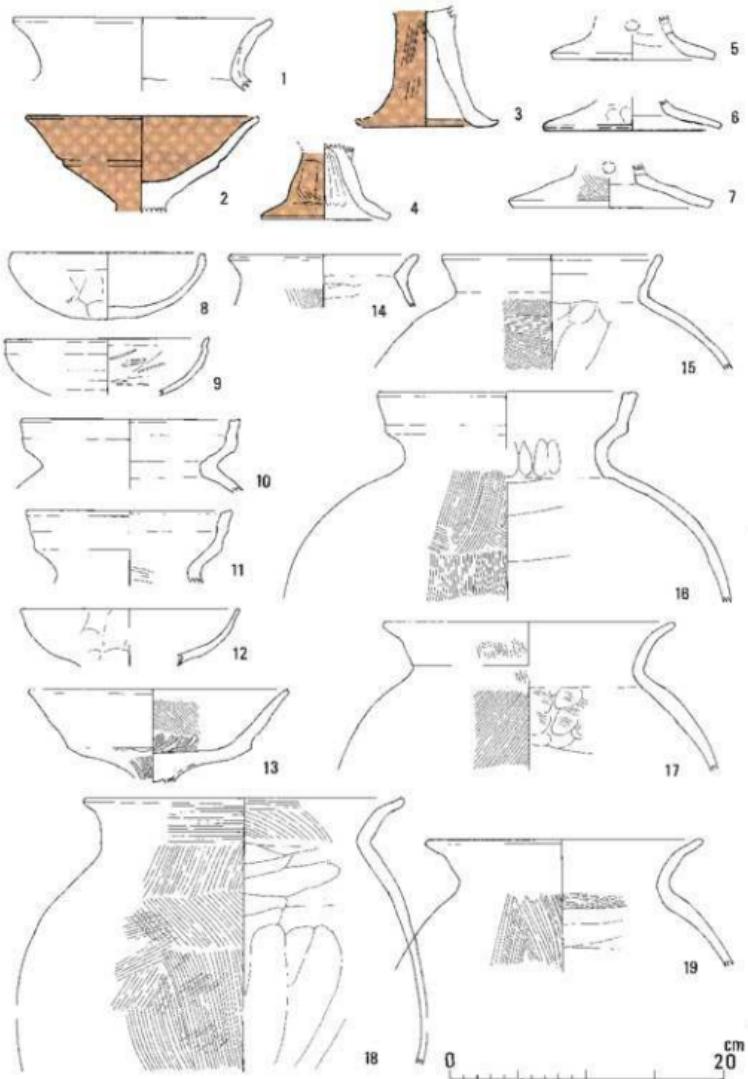


図31 B-3区 3層出土土器（土師器）

1～7 石組遺構直上 8～19 石組遺構間

唇部は丸味を持っている。器壁は明褐色、胎土は良、焼成も良好である。調整は口縁部外側と内面は底面近くまで横ナデ、内底面は縦ナデ、外面口縁部直下はナデ上げ、底面は指圧痕があり、その後ナデが行われている。9は口径14.7cm、推定器高4.4cm、浅めの坏で口唇部が外反している。器壁は明褐色、胎土は精良で焼成も良好である。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、内面はヘラ横ナデと縦ナデが見られ、口縁直下から底面へヘラ横削りが丁寧に行われ底面では斜めに削っている。8・9ともに時期不明であるが5世紀台の土器であろう。

土師器壺（図31-10・11・16）。10は複合口縁壺、口径15.8cm。口縁部の立ち上がりは僅かに外反している。口唇部は内傾した僅かな窪みのある面があり、口縁部内外には鈍い稜線が走っている。器壁は灰白褐色で、胎土中には小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面とともに横ナデ、頸部内面はヘラ横ナデ、内面は軽いヘラによる搔取りである。11も複合口縁壺、口径15.0cm。口縁部の立ち上がりは小さな凸面を持ちながら外反している。口唇部は内傾する平坦面があり、外に向かって僅かに肥厚している。そのために口唇部、凸面、立ち上がり基部が3本の稜線のように見える。器壁は外面は明褐色、内面は灰白色、胎土中に小砂があるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面とともに横ナデ、頸部内面は横ハケのちにナデが行われている。16も複合口縁壺、口径18.5cm、胴部径32.4cm、現存器高15.2cm。口縁部の立ち上がりは外に開き、口唇部は半円状をなし肉厚である。胴部の張りも強く球形をしていると考えられる。器壁は淡褐色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良好である。調整は口縁部の内外面が横ナデ、胴部はハケ目、頸部内面は縦に指圧痕が並び、内壁はヘラ搔取りである。ともに5世紀中葉の土器である。

土師器高坏（図31-12・13）。12は口径15.9cm。椀型の坏部で口縁部は開き、口唇部は外に僅かに肥厚している。器壁は明黄褐色、胎土は精良であるが焼成はやや弱い。調整は口唇部は内外面とともに横ナデ、内底面はナデ、外面は指圧痕があり後にナデしている。脚部は比較的大きいと考えられる。時期不明の土器である。13は段を持つ高坏である。口径18.7cm、脚部接合部まで遺存し、現存器高6.8cmである。器壁は明褐色、胎土中に小砂はあるが焼成は良い。調整は段から上方は内外面とともに横ナデ、段から脚取付け部は細かなハケ目である。内面は細かなハケ目が方向を変えて施され、底面中心から暗文が放射状に見られる。また、段部分の接合面にはクシ刺突があり、粘土の接合が容易なようにしている。5世紀中葉の土器。

土師器壺（図31-15・17～19）。15は口径15.7cm。く字型の口縁部で僅かに開き、胴部の張りは強い。器壁は淡茶褐色、内面は明褐色。胎土中に小砂を含むが焼成は良い。調整は口縁部の内外面とともに横ナデ、外面は斜め・横方向のハケ目調整である。頸内面は指圧後にナデ、それ以下の面は下から上方向のヘラ搔取りである。17は口径20.7cm、口縁部は良く開いている。頸部には胎土接合痕が鈍い稜線となって残っている。胴部は人半が消失しているが倒卵形と考えられる。器壁は淡褐

色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良好である。調整は口縁部の内面は横ナデ、外面はハケ日の後に横ナデしている。外面は左下がりのハケ日の後に交差するようにハケ日を加えている。内面はヘラで細かく削り、ナデを行いさらに軽いハケ目を加えている。18は口径23.0cm、胴部最大径30.0cm、残存器高20.0cmの大形壺である。口縁部は良く開き、口唇部が僅かに反転している。胴下半部は欠失しているが倒卵形と考えられる。器壁は明茶褐色、胎土中には小砂が含まれている。焼成はやや弱く、2次的な火の影響であろうか内外面ともに荒れが著しい。調整は口縁部の内外面とともに横ナデ、外面は肩部は方向を変えながら短くハケ日を施し、胴下半部は短くハケ調整の後に、斜めに長くハケ日を施している。内面は口唇部は横ナデ、斜め方向のハケ、体部は横方向のヘラ搔取りの後に底部から縦方向にヘラ搔取りをしている。19は口径19.4cm、口縁部は良く開き、口唇部は僅かに反転している。胴部は良く張り倒卵形と考えられる。器壁は茶褐色砂層褐色、胎土中に小砂が含まれ焼成はやや弱い。調整は口縁部の内外面とともに横ナデ、外面はハケ日で整え、内面はヘラ搔取りの後にハケ調整を行っている。全体は横方向のヘラ搔取りである。これらの壺は5世紀中葉の土器である。

土製品1（土錠）
 土製品1（図32-1～3）。1はB-4区2層出土。長さ5.2cm、径3.0cm、孔径5mm、重さ54.7g、摩耗が著しい。茶褐色、胎土中に小砂を含んでいるが焼成は良い。2はB-1区3層出土。長さ4.3cm、径2.8cm、孔

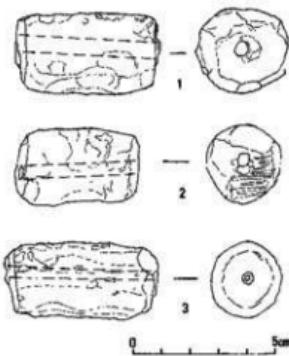


図32 土製品1（土錠）

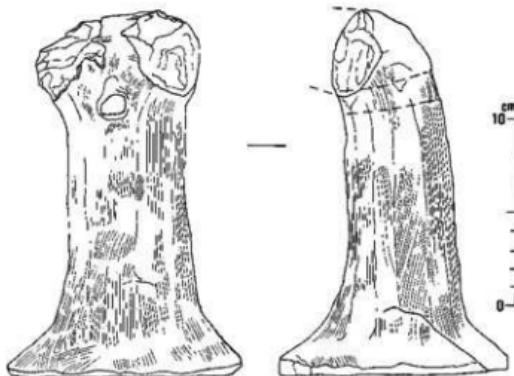


図33 土製品2（支脚）

径5mm、重さ28g、明褐色で胎土精良、全体に掌で握り締めて製作している。木口に板目痕がある。3はB-4区2層出土。長さ5.4cm、径2.7cm、孔径3.5mm、重さ41.7g、淡褐色で一部黒色、胎土中に小砂を含み焼成やや弱い。

土製品支脚 (図33)。A-3区1層出土。角状の支持部は欠失している。器高19.5cm、体部幅約6.5cm、体部厚さ約5.7cm、裾部端部径12.1cm、体部は直立し、底面は溝んでいる。角状支持部の中間部分に直径1.2~1.5cmの孔が、胎土が半乾燥状態のときに前後から穿孔している。全体にヘラでナデつけて形を整えて、ハケ目調整を行っている。底部内面はヘラ横ナデ、天井部分はヘラで刺突している。

石器 (図34-1~3)。1・2ともにA-3区1層から出土した。1は敲石、手墻な自然石を利用したもので、長さ16.2cm、最大幅6.2cm、厚さ3.7cm、断面は橢円形である。先端部が刃状をしているが意図して付けられたものではなく、打撲を加えたためにできたと考えられる。2も敲石。長さ17.0cm、最大幅9.8cm、厚さ4.1cm。上・下面が平坦である。特に加工したとは考えられない。全体に淡い桃色で2次的な火を受けたのであろうか。3は砥石でC-3区3層出土。破断した砥石を再利用し、各面ともに研磨されている。長さ7.7cm、最大幅6.0cm、最大厚2.7cmである。上面と左側面に幅の不揃いな筋状の研磨痕がある。

骨角器未製品 (図35、図版44)。若い鹿の角の根本部分で先端を切断している。部分的に研磨を加え表文が消えていけるが小範囲である。切断部には3箇所の切断面があり、接断部はV型をしている。刀子柄として利用するために加工を試みたのであろう。

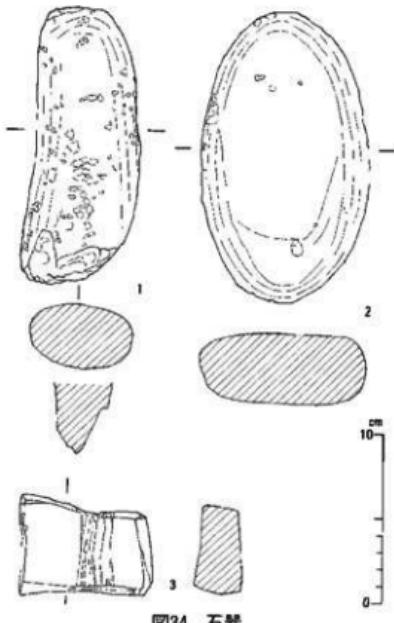


図34 石器

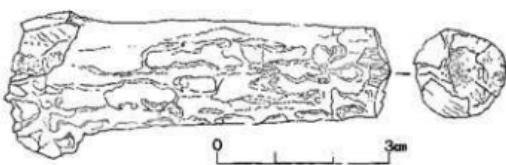


図35 骨角器未製品

第3節 第2次調査 1962年-昭和37年

(1) 弥生時代の遺構と遺物

8体の人骨(成人2体・幼児6体)、地上標識としての尚石・列石を伴う埋葬、貝輪、貝小卡、菅糸などの副葬品を持つ埋葬を調査した。

埋葬

21号人骨(図36、図版46)

白色砂層から出土したが墓壙は確認できなかった。人骨は幼児(4~5歳)、仰臥屈葬、埋葬方位はSS 5° E、頭蓋骨頂水準は711.6cmである。22号人骨と近接し、腰骨上端(上関節面)と22号人骨の左寛骨との間隔は8cm程度である。人骨の生理的位置関係は正常であるが、手根骨・脚骨は消失し、足根骨は乱れている。上肢は体側に沿って伸ばしている。恐らく手は骨盤上に置かれていたのであろう。下肢骨は右胫骨上端が下方に倒れ、左胫骨も大腿骨から離れて上端を下方にして倒れている。屈肢状態では水平に埋葬されている。前頭骨右半部・頬骨に白斑が見られる。右側頭部から8cm、右上腕骨から約4cm離れた位置で人骨と同じ水準で菅糸製管長が出土している。

碧玉製管玉(図37、図版48-左から1・2個月)。21号人骨の副葬品。1は頭蓋骨右側から出土した碧玉製管玉。長さ1.65cm、径4mm、孔径2mm。2は左上腕骨側から出土した碧玉製管玉、長さ1.25cm、径3.5mm、孔径1.5mmである。

22号人骨(図36、図版46・47)

白色砂層から出土したが墓壙は確認できなかった。人骨は女性・熟年、仰臥屈葬、埋葬方位E 5° N、頭蓋骨頂水準は695.4cm、推定身長152.6cm。21号人骨と近接して出土した。人骨の生理的位置関係は正常であるが左手根骨・左右の

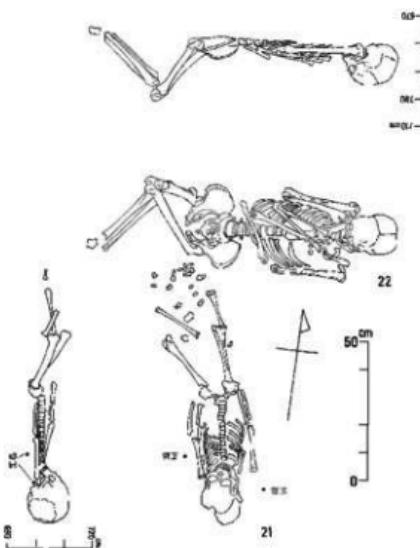


図36 21・22号人骨出土状態

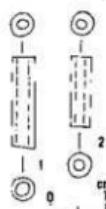


図37 21号人骨副葬品(管玉)

足根骨が消失している。上腕は体側に沿って伸ばし、右下腕骨は胸骨附近に置き、左下腕骨は腹部に横いている。下肢骨は膝関節部を曲げ屈筋状態で、ほぼ水平に埋葬されている。副葬品は伴わないが、下顎左右の大歯（C）、側切歯（L₁）、中切歯（L₂）の6本は風習的抜歯の可能性があり、上顎右大歯（C）は風習的抜歯である。

23号人骨（図38、図版49）

白色砂層から出土したが墓壇は確認できなかった。人骨は幼児（1歳）、仰臥屈葬、埋葬方位E、頭蓋骨頂水準664.3cm。人骨の生理的位置関係は正常であるが足根骨、頸椎などが消失している。左右上腕は肘を張った状態で手根骨は脛骨上にあり、左前腕にハイガイ製貝輪4個（図版49）を着装している。左右下肢骨は膝関節を頂点として左側に倒れている。これは膝関節を曲げ屈筋状態で埋葬されたことを示している。（貝輪については、第9章特論 木下論文を参照されたい。）

23号人骨の東側、水準730～743cmに土器（図45、図版67）を交えた疎らな砂利群が、約150×約80cmの範囲に確認されている。23号人骨の頭蓋骨水準から79cm上方である。また、北側約1mにも

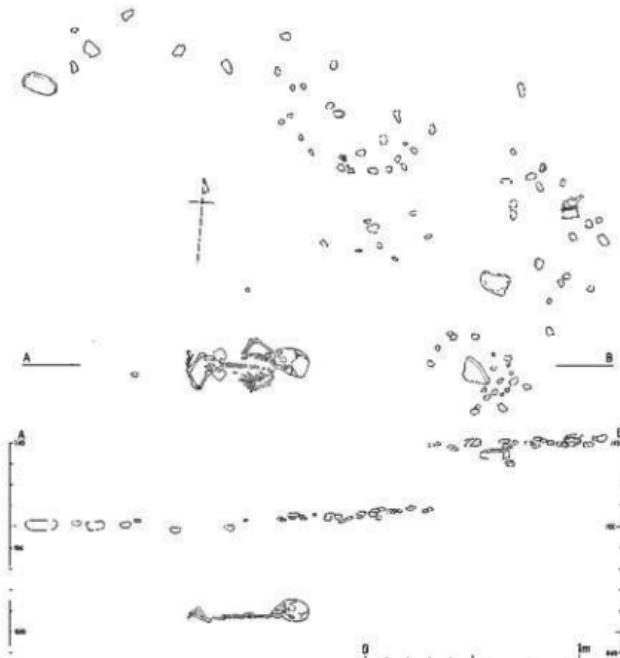


図38 23号人骨出土状態と砾群

約2×約1mの範囲に水準696～710cmの砂利群がある。これらの砂利群の下から人骨は発見されていない。埋葬があれば白色砂層に含まれる貝粉の量から考えて、人骨が消滅するとは考えられない。また、23号人骨の埋葬と直接関係があるとは考えられないが、この砂利群が意図的に散布されたとすると埋葬儀礼に伴う行為と考えなければならない。

24号人骨（図39、図版50～53）

白色砂層から出土したが墓壙は確認できなかった。人骨は幼児（2歳）、仰臥屈葬、埋葬方位N

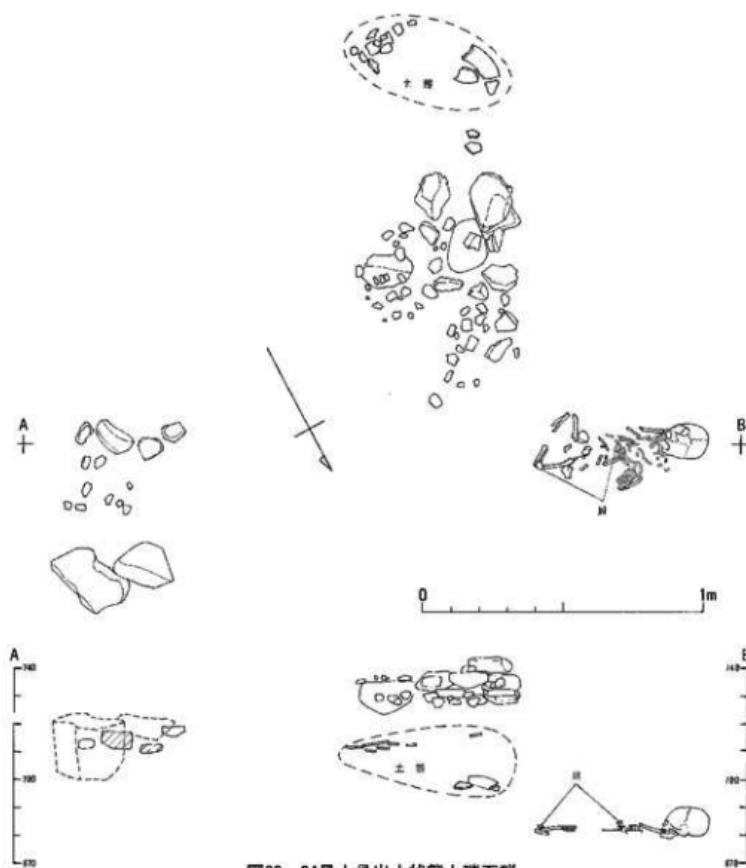


図39 24号人骨出土状態と礫石群

60°W、頭蓋骨頂水準690.9cm。人骨の生理的位置関係は正常であるが頭蓋骨・下肢骨に比較すると上半身がやや乱れ、脊柱・胸郭・足根骨など遺存状態が悪い。右上腕骨は体側に沿って伸ばし、前腕骨は胸郭上に置いている。左上腕も体側に沿って伸ばし、前腕骨は胸郭上に置いたと考えられるが、腐敗時に脱落している。下肢骨は膝関節を頂点に左右に倒れく字状をなし、左寛骨がやや外方に移動している。

左前腕にハイガイ製貝輪（図版52・53）6個を着装している。また、左膝関節上と胸郭部にハマグリ（図版51・53）をそれぞれ1個ずつ置いている。（貝輪については第9章特論 木下論文を参照されたい）。

24号人骨の東側133cm、附近に2個の右塊と12個の礫が、また、南側33cm離れて岩塊・上器が分布している。東側岩塊群は水準700～723cm、南岩塊は水準723～743cm、十器群（図44-1～3）は水準695～716cmの範囲に分布している。岩塊は忠雲の岩礁性の海岸から運んだものであろう。いずれも位置関係、出土水準から24号人骨に直接関係があるとは考えられない。東の岩塊2個はその大きさから置石の可能性が強いが、その下から人骨は出土しなかった。23号附近で検出された砂利群と同一性格のものであろう。

25号人骨（図40、図版54）

26号人骨上の半円形に並べられた5個の列石の最西端の石に一部が乗り掛かるように放置されていた乳児骨である。いずれも正常な位置関係でなく集骨された状態で、前頸骨・下腕骨片・肋骨片・足根骨が繋まりなく出土している。頭蓋骨頂水準は765.8cmである。伴出物はない。

26号人骨（図40、図版55～57）

白色砂層から出土したが墓壙は確認できなかった。人骨の上方約50cm（水準746～762cm）の北側に5個の列石が半円形に並べられている。また、人骨の左上半部に掛かるように2個の置石がある。大きな岩塊は約47×約33cm、厚さ約22cm、水準731～750cmにあり、頭蓋骨上39.0cmにある。さらにその下方約15cmに縦31.0×横19.0cm、厚さ11.0cmの石塊が置かれていた。埋葬に伴う列石は、砂が主に移動源となる西・北西方とは異なる。むしろ砂を受ける位置にあるといえる。置石は砂丘の西南の岩礁性の海岸から搬入したと考えられる。

人骨は、女性・成年・仰臥屈葬、埋葬方位はE8°S、頭蓋骨頂水準は693.1cm、推定身長144.6cmである。人骨は生理的位置関係は正常で遺存状態は極めて良い。上腕骨は体側に沿い、右前腕は折り曲げて胸郭上、胸骨下端附近に置き、左前腕は緩く曲げて腰椎上に置いている。左右の下肢骨はやや開き気味ではあるが、膝関節で折り曲げ立てている。足根骨の位置関係から踵を合わせた状態で、ほぼ水平に埋葬されている。副葬品や供獻された遺物はない。上顎・下顎の左右大歯（C）の抜歯がある。

28号人骨（図41、図版58・59）

白色砂層から出土したが墓壙は確認できなかった。人骨の上方約40cmに砂利群が東西約73cm、南北約80cmの範囲に、殊に撒き散らしたように出土した。この砂利群の周辺部に東西に約93cm、南北に約93cmの間隔で東（足側）に2個、西（頭部）・南・北に1個ずつ計5個の石が配置されている。西側の石が最も小さく、頭蓋骨から約16cmの位置にあり立てた状態に置かれている。これは頭蓋骨を意識したのであろうか。また、この砂利群の上方約10cmに3個の石塊が南西～北東線上に並べられている。この石群は面を平坦な状態に置くのではなく、斜めに立てた状態で砂丘の傾斜とは逆になっている。この3個の石群が28号埋葬と関連が有るのか無いのか明らかではない。また、この石群を標識とした埋葬は発見されていない。

28号人骨は、幼児（1歳）、仰臥屈葬、埋葬頭位はN68.5°E、頭蓋骨頂水準は670.3cmである。人

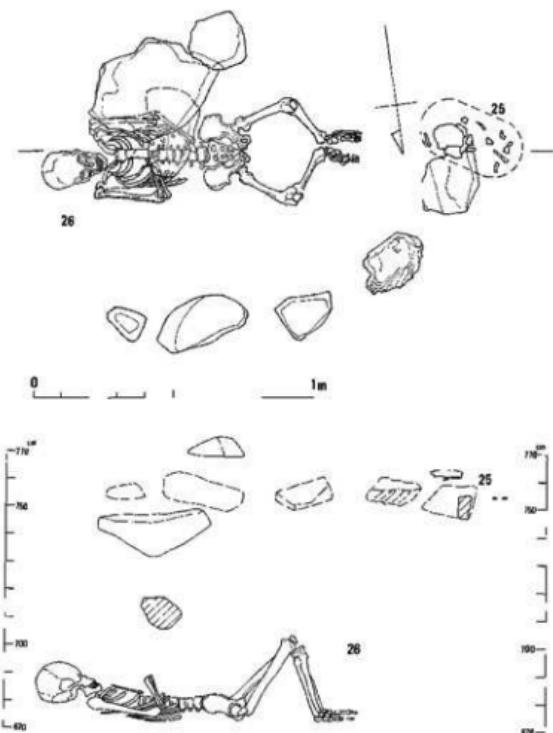


図40 25・26号人骨出土状態

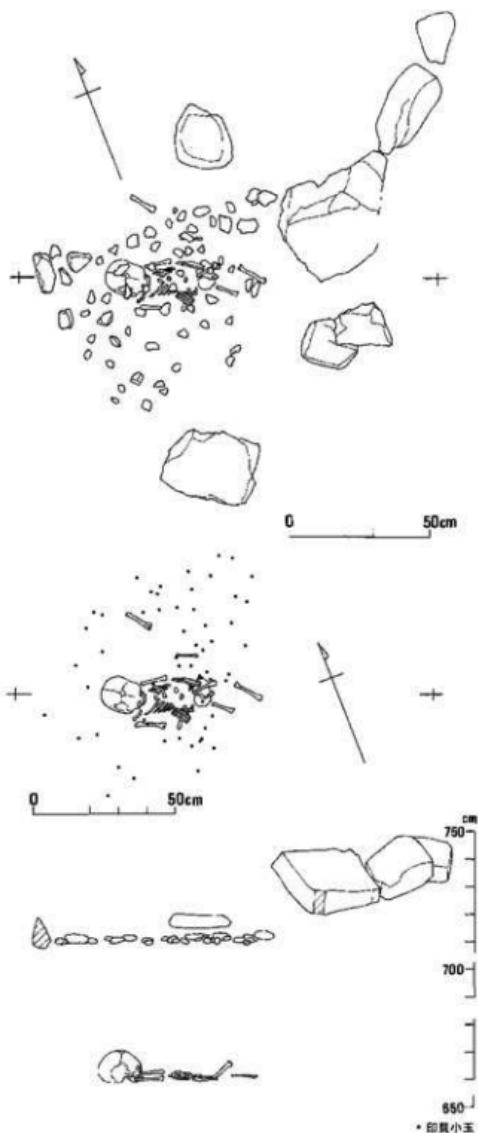


図41 28号人骨出土状態

骨は下肢骨を除いて生理的位置関係は正常で遺存状態も良い。脊椎・手根骨・足根骨は消失し、右大腿骨が約16cm、左腓骨が約9cm離れて位置している。これは調査担当者の不注意、風など自然の力によるとも考えられないので、調査終了時まで現場で保存していたために起こった移動と考えなければならない。

人骨は上腕骨は体側に沿い、右前腕は直角に曲げ腹部に乗せている。左前腕は僅かに曲げ左寛骨上に置いている。下肢骨は左大腿骨が左寛骨上にあり、左右の脛骨は平行している。この人骨も埋葬時には下肢骨を曲げ、屈膝状態であったと考えられる。

右前腕にハイガイ製貝輪5個（図版59）を着装している（貝輪については第9章特論 木下論文を参照されたい）。また人骨周辺で貝小玉が出士した。確認できたのは58個であるが、調査時に拡散した可能性も否定できない。人骨周辺部、下部の砂を水洗した結果2396個の貝小玉（図版60・61）を検出した。

貝小玉は人骨と同一水準よりも下部から大量に出土した。貝小玉2396個から任意に72個を選び、外径・厚さ・孔径を計測し表1とした。貝小玉は外径で2.1～3.05mm、厚さ0.6～

5.5mm、口径0.6~1.3mmの範囲の中にある。厚さで5.5mmは例外的な存在で、他に3.95mmが1例で大部分は1mm前後である。重量については永井昌文が個別の写真撮影時に計測した5点があり表2とした。平均重量は0.01198gである。(貝小玉の製作技法については木下尚子「東亞日珠考」「先史学・考古学論究」Ⅲ 白木原和美先生古稀記念献呈論文集 315~354頁 龍田考古会1999.4を参照されたい)。

表1 28号人骨副葬貝小玉計測値

外径・厚・孔径(単位:mm)

1	2.6×2.5	1.2	1.3	19	2.5×2.5	0.95	1.0	37	2.4×2.35	0.9	0.8	55	2.3×2.25	1.1	0.9
2	2.5×2.4	1.3	1.0	20	2.5×2.5	1.1	0.9	38	2.6×2.45	0.95	1.0	56	2.5×2.4	0.85	0.9
3	2.2×2.1	0.95	1.0	21	2.7×2.7	0.9	1.0	39	2.75×2.5	0.8	0.9	57	2.8×2.5	1.25	0.6
4	2.9×2.65	1.0	0.9	22	3.0×2.65	0.9	1.2	40	2.9×2.65	0.55	1.25	58	2.7×2.6	1.05	0.9
5	2.5×2.45	0.85	1.1	23	2.45×2.3	1.15	0.8	41	2.85×2.7	1.1	1.2	59	2.5×2.4	1.2	0.9
6	2.3×2.3	1.3	1.0	24	2.6×2.5	0.9	1.0	42	2.85×2.7	0.65	1.2	60	2.5×2.25	1.35	0.9
7	2.8×2.75	1.0	0.8	25	2.7×2.6	1.2	0.8	43	2.35×2.35	1.0	1.1	61	2.4×2.25	0.9	0.6
8	2.35×2.25	0.8	1.0	26	2.75×2.45	0.7	1.1	44	2.3×2.0	0.75	1.0	62	2.7×2.5	0.95	0.9
9	2.5×2.4	0.85	0.7	27	2.65×2.3	1.0	0.9	45	2.6×2.5	1.6	1.4	63	3.0×3.0	1.1	1.3
10	2.65×2.3	1.0	0.8	28	2.85×2.8	0.8	1.2	46	2.5×2.45	1.2	0.9	64	2.9×2.9	0.85	1.1
11	2.8×2.75	0.8	1.1	29	2.85×2.8	0.7	1.3	47	2.8×2.75	1.0	1.9	65	3.05×3.0	0.75	1.4
12	2.9×2.85	0.85	1.0	30	3.05×3.0	0.95	1.2	48	2.8×2.75	0.9	1.0	66	3.0×3.0	1.05	1.1
13	2.7×2.65	1.05	0.6	31	2.7×2.6	1.05	1.2	49	2.7×2.7	1.1	0.8	67	2.7×2.7	0.95	1.2
14	2.6×2.5	1.05	0.8	32	2.7×2.6	0.9	0.9	50	3.0×2.9	1.0	1.6	68	3.05×3.05	0.8	1.3
15	2.6×2.5	5.5	1.0	33	2.95×2.85	0.7	1.0	51	2.7×2.4	1.4	1.3	69	2.65×2.6	0.65	1.1
16	2.6×2.6	1.2	1.0	34	2.5×2.2	1.1	1.0	52	2.75×2.7	3.95	1.2	70	3.1×3.1	0.6	1.5
17	2.5×2.5	0.8	0.5	35	2.8×2.6	0.8	1.1	53	2.65×2.6	1.05	0.8	71	3.1×3.1	0.8	0.9
18	2.5×2.4	1.05	1.2	36	2.4×2.35	1.1	0.9	54	2.85×2.65	0.9	0.8	72	2.8×2.8	0.6	1.0

計数2,396個から27個を任意で選択。

表2 28号人骨副葬貝小玉重量(g)

1	0.01264
2	0.01951
3	0.00842
4	0.01108
5	0.00843
平均値	0.01198

*永井昌文計量

29号人骨 (図29、図版74・62・63)

白色砂層から出土したが墓壇は確認できなかった。下半身を覆うように置石3個が2段に積まれていた。下段の2個は人骨上で相接するように置かれ、その上に扁平な石が掛け渡すようになっていた。北側の石塊は縦28cm、横17.0cm、高さ20.8cm、南側の石塊は縦24.6cm、横19.5cm、高さ19.0cmで立て

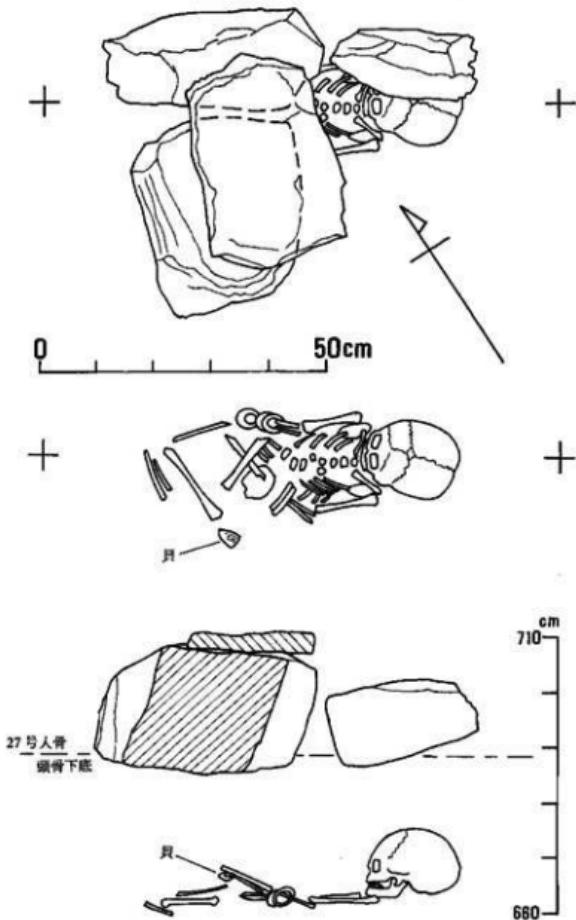


図42 29号人骨出土状態

た状態で置かれていた。2個の上の板石は縦22.0cm、横33.5cm、高さ2.0cmで扁平な面を上にしている。頭蓋骨右部分に置かれた石は、縦18.0cm、横12.7cm、高さ20.3cmで立てた状態である。これら両石の下底の水準は680.5cm、上面の水準は710.0cmである。頭蓋骨頂の水準が676.4cmであるから、その差は4.1cmである。墓壙底の水準が660cmであるから墓壙の深さは20.5cmになる。置石は砂丘の西南に広がる岩礁性の海岸から搬入したのであろう。

人骨は、幼児（2～3歳）、仰臥屈葬、埋葬方位はSS57°E。人骨の生理的位置関係は正常で、頭蓋骨の遺存状態は良いが他の部分の遺存は良いとはいえない。手根骨・足根骨は消滅している。両上腕骨は体側に沿って置かれ、右前腕骨は伸ばされ、左前腕骨は緩く曲げて対角にむき、手根骨は対角骨上にあったといえる。右大脛骨と右脛骨は交差しており、左大脛骨は対角骨からやや離れた位置にある。左脛骨・腓骨はほぼ平行した位置にあって、これは立っていた四肢が内側へ倒れたことを物語っている。右前腕骨にオオツタノハ製貝輪3個、左前腕にハイガイ製貝輪2個が装着されていた。また、体部周辺から貝小玉72個が出た。（貝輪については第9章特論　木下論文を参照されたい。）

貝小玉については外径・厚さ・孔径をmm単位で計測し表3とした。外径は1.9～2.8mm、厚さ0.5～1.4mm、孔径0.7～1.15mmの範囲にある。（貝小玉の制作方法については、木下尚子「東亞貝珠考」『先史学・考古学論究』Ⅲ　白木原和美先生古稀記念献呈論文集　315～354頁　龍田考古会　1999.4を参照されたい。）

表3 29号人骨副葬貝小玉計測値

	外径・厚・孔径(単位:mm)														
1	2.8×2.8	0.7	1.2	1.9	2.0×2.0	0.7	1.1	3.7	1.9×1.9	0.95	0.95	55	2.2×2.1	0.75	1.0
2	2.0×1.95	0.8	0.8	2.0	2.5×2.5	0.7	0.8	3.8	2.2×2.1	0.9	1.1	56	2.2×2.3	0.85	0.9
3	2.8×2.8	0.75	1.1	2.1	2.25×2.25	0.7	0.8	3.9	2.3×2.3	0.9	1.0	57	2.1×2.15	0.95	1.0
4	2.5×2.4	0.62	0.9	2.2	2.3×2.35	1.0	1.2	4.0	2.35×2.3	0.8	0.9	58	2.15×2.05	0.9	0.91
5	2.2×2.2	0.8	1.0	2.3	2.1×2.1	1.05	1.0	41	2.15×2.15	0.95	1.0	59	2.0×1.95	0.9	1.0
6	2.2×2.3	1.0	1.1	2.4	2.25×2.25	0.8	1.4	42	2.0×1.9	0.7	1.0	60	2.3×2.95	0.9	0.9
7	2.25×2.3	1.05	1.0	2.5	2.3×2.25	0.75	1.1	43	2.25×2.25	0.8	1.0	61	2.1×2.1	1.0	1.0
8	2.1×2.15	0.9	0.9	2.6	2.3×2.3	0.85	1.0	44	2.1×2.2	1.0	1.2	62	2.2×2.15	0.75	0.9
9	2.1×2.1	0.7	1.0	2.7	2.25×2.25	0.75	1.0	45	2.3×2.3	0.7	1.0	63	2.2×2.4	0.8	1.0
10	2.2×2.7	0.93	1.5	2.8	2.3×2.4	0.75	1.2	46	2.25×2.3	0.9	1.0	64	2.25×2.3	0.95	1.1
11	2.1×2.1	1.05	1.0	2.9	2.3×2.3	0.85	1.1	47	2.4×2.4	1.05	1.0	65	2.4×2.35	0.7	1.15
12	2.3×2.35	1.0	1.1	30	2.4×2.4	0.9	1.0	48	2.1×2.05	0.95	0.9	66	2.05×2.0	0.5	1.0
13	2.25×2.3	0.85	0.9	31	2.25×2.3	0.9	1.0	49	2.35×2.3	0.95	1.2	67	2.05×2.15	0.8	1.0
14	2.3×2.35	0.9	1.1	32	2.25×2.25	0.7	1.0	50	2.0×2.1	0.85	1.0	68	1.95×2.0	0.6	0.9
15	1.9×1.9	0.65	0.8	33	2.25×2.25	0.85	0.9	51	2.75×2.8	1.0	1.3	69	2.3×2.35	0.75	0.9
16	2.35×2.35	0.8	0.9	34	2.35×2.35	0.95	1.1	52	2.35×2.35	1.0	1.1	70	2.1×2.15	0.9	1.0
17	2.2×2.2	0.9	1.0	35	2.3×2.4	1.0	1.1	53	2.05×1.9	0.7	1.1	71	2.2×2.2	0.85	1.0
18	2.2×2.25	0.7	0.9	36	1.9×2.0	0.75	1.0	54	2.8×2.8	0.9	1.2	72	2.1×2.0	0.9	1.0

1962年山本清調査人骨（図43、図版64・65）

山本清の調査記録によると、昭和37年3月14日午後に角隆司（松江カントリークラブ）より電話連絡を受け現地に赴き調査。出土層位は弥生層と記述されていることから白色砂層の出土と考えられる。砂取り作業中に発見したとのことであったが、全体に70cm前後崖がずり落ちているように見えたと記述されている。

人骨の生理的位置関係は正常であるが、左上肢骨、右腓骨、鎖骨、肋骨に一部が欠失していた。人骨は男性・老年、埋葬方位はWと考えられる。仰臥屈葬で右上肢は前腕を完全に折り曲げて鎖骨に達する位置にある。手根骨は胸椎附近にある。下肢骨は膝関節で曲げている。左下肢骨上に右腓骨が乗り、右腓骨の上端部部分に左大腿骨下端が位置している。上顎左右の大歯（C）が抜歯され、上顎左右の側切歯（I₂）も抜歯の可能性がある。

人骨の遺存状態から考えて左上肢骨などは、砂取り作業中に排除されたと考えるべきで、70cm前後のずり落ちも人骨下の砂を取ったことが原因と考えられる。人骨に伴出品も副葬品も存在しないため年代の決定に問題はあるが、出土層位、埋葬姿勢から考えて弥生時代人骨とした。

A・G・F区出土弥生土器（図44）

第2次調査区で出土した土器で、崖面で採取した土器も含まれている。壺・甌・鉢がある。

弥生土器壺（図44-1、図版66）。F区白色砂層中の砂利層下から出土した。口径10.6cm、胸部最大径16.0cm、現存高12.7cm、推定高17.6cm。口縁部は良く開き、胸部は球形をしている。口縁部直下と肩部に段があり、肩部の段はヘラ压によると考えられる。器壁は淡褐色、胎土中には砂粒が含まれているが器表では殆ど見られない。焼成は極めて良い。調整は口縁部下から頸部段まで粗いハケ目の上に横方向に疊らなヘラナデがあり、胸部も斜め・横方向のヘラナデで調整している。

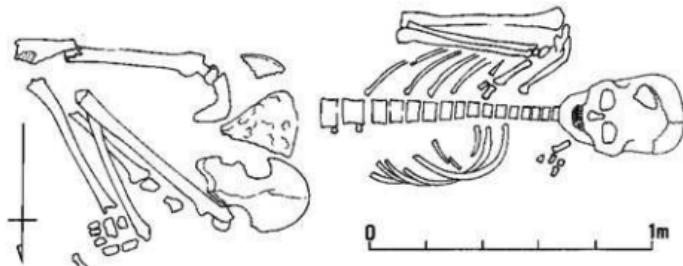


図43 1962年3月 山本清氏調査人骨出土状態

内面の調整は明らかでない。前期中葉の土器。

弥生土器壺（図44-2）。F区白色砂層の砂利層下から出土した土器。口径15.7cm、現存器高10.0cm。口縁部は良く開き、口唇部は丸味をもっている。頭部にヘラ描きの沈線があり、胸部の張りは余り強いとは考えられない。器壁は茶褐色で胎土中に砂粒が含まれているが焼成は良好である。調整は頸部の沈線の上方は粗いハケ、下は細かなハケ目が見られる。肩部は横・斜め方向にヘラナデが行われている。内面も口縁部はヘラによる横方向、肩部は方向を変えて斜め方向、それ以下は横方向のヘラナデが見られる。前期後葉の土器。

弥生土器壺（図44-3）。F区白色砂層中の砂利層下出土。口縁部・胸部以下を欠失している。頸部径14.4cm、胸部径25.0cmで肩部に段があり、その下にヘラ描き沈線3条がある。器壁は淡褐色、沈線以下は淡灰白褐色、胎土中に砂粒が多く含まれている。調整は肩部の段を削りだし、全面をハケ目で整え沈線を施してから、頭部は縦方向にヘラナデ、沈線以下は斜めにヘラナデ調整を行っている。内面は肩部から口縁部方向に斜めのハケ調整、胸部は横方向にハケ調整の後に横方向のヘラ調整が行われている。前期中葉の上器。

弥生土器壺（図44-4）。F区白色砂層の上半部から出土した。口径8.8cm、胸部最大径13.0cm、器高14.8cm、底径5.8cm、凹底である。口縁部は短く外反し肩部に7本を単位とした櫛描き沈線が4回繰り返され、その下に刺突による逆三角文がある。器壁は茶褐色で約1/2は黒斑である。器壁表面には部分的に剥落が見られる。胎土中に砂粒が多く焼成はやや弱い。調整は施釉部下は横ヘラ調整、胸部以下は斜め方向の短いヘラ調整で、底部には細かなハケ目が見られる。先ずハケ目による調整を行い、その後にヘラ調整を行ったと考えられる。内面はヘラ調整で終始し、場所によってヘラ調整の方向が変えられている。ヘラ調整が短いのは器形が小形であることに原因があると考えられる。器壁表面の荒れは供献後に風に飛ぶ砂が原因の一つと考えられる。中期前葉の上器。

弥生土器小形鉢（図44-5）。A-6区2層（赤褐色妙上層）出土の土器。口径7.5cm、1/5の小片である。口唇部が外方に僅か肥厚している。口縁部下に径3mmの小孔が1対ある。器壁は淡黒色、胎土中に小砂を含んでいるが焼成は良い。調整は口唇部から内面は横ナデ、外面は斜め方向の細かなヘラナデである。中期中葉の土器であろうか。

弥生土器無頸壺（図44-6）。A-10区3層下部出土の土器。口径10.0cm、胸部径21.5cm、残存器高9.0cm。口唇部が山形をなし鈍い棱線がある。胸部の張りは良く、球形をしていると考えられる。器壁は茶褐色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良好である。調整は外面はハケで縦に調整し、その後に斜めにハケ目を加えている。内面は疎らな斜め方向のヘラナデあげである。中期中葉の上器。

弥生土器鉢（図44-7）。F区南端崖面から採集。口縁部1/5、胸部1/3、底部完存の土器

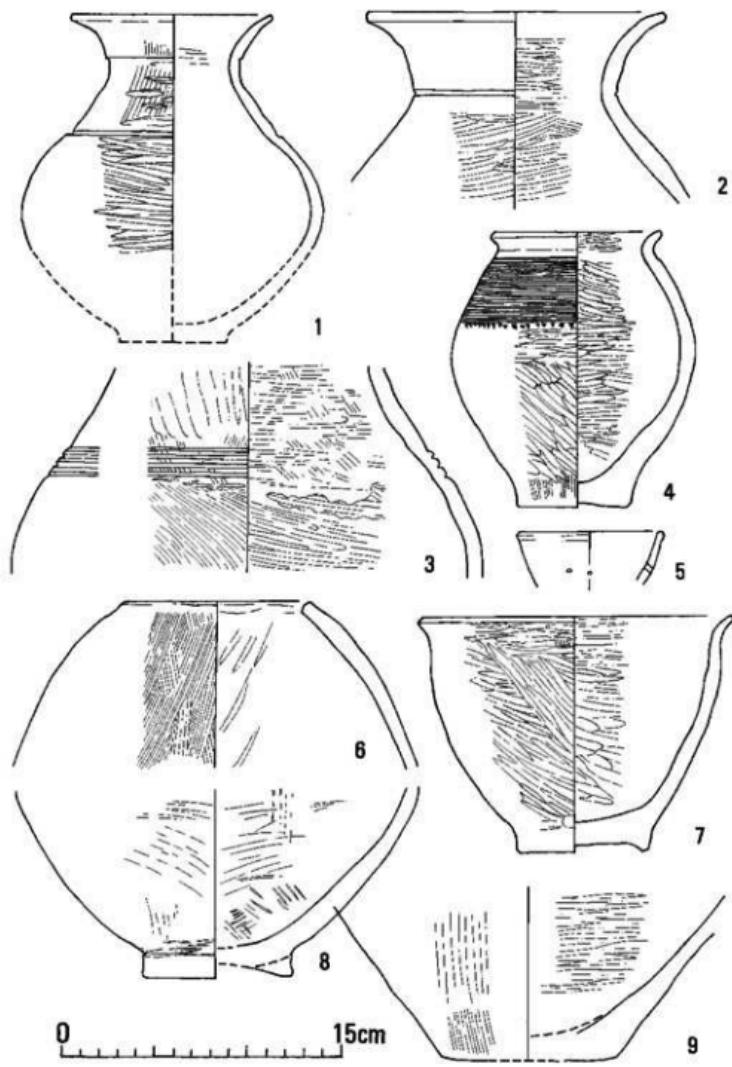


図44 A・G・F区出土弥生土器

である。口径16.6cm、底径7.0cm、器高12.7cm、凹底である。器壁は淡茶褐色で一部に黒斑がみられる。胎土中に砂粒があるが焼成は良好である。調整は外面はハケ日を全面に行い、その後にヘラナデを行っている。ヘラ調整も口縁部では細かく横方向に行い、それ以下は斜め方向に緩く、さらに角度を変えてヘラ調整を行っている、底面もヘラ調整が見られる。内面は口縁部は横方向にヘラ調整、それ以下は底部は緩やかな斜め方向から横方向に変化している。前期後葉の上器。

赤生土器底部(図44-8・9)。8はG区岸面の採集上器。壺型土器の底部と考えられる。底径8.0cm凹底、胴部径21.8cm、残存高10.2cm。器壁は茶褐色、内面は灰白褐色で、胎土中に砂粒が見られるが焼成は良い。底部側面に沈線状の線が巡っているがこれは底部貼付けの痕跡である。外面の調整は底部に極めて粗いハケ日があり、下胴部は斜めに粗いヘラ調整がある。内面底部は粗いハケが方向を変えて見られ、胴部附近にも綫方向に粗いハケ日があり、その上にヘラ横ナデが施されている。底部の形成は特殊で丸底に断面三角形の粘土帶を張付けて製作している。前期中葉の上器であろうか。

9も壺型上器の底部である。底径9.0cm、器壁は外面は淡褐色であるが大部分は黒色である。内面は一部

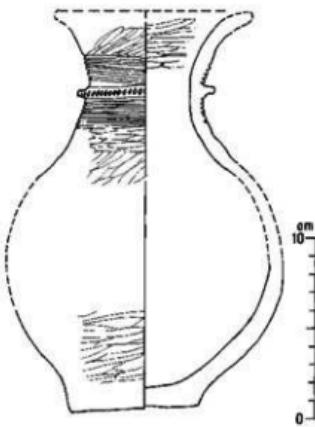


図45 23号人骨上方西側砂利層内出土赤生土器

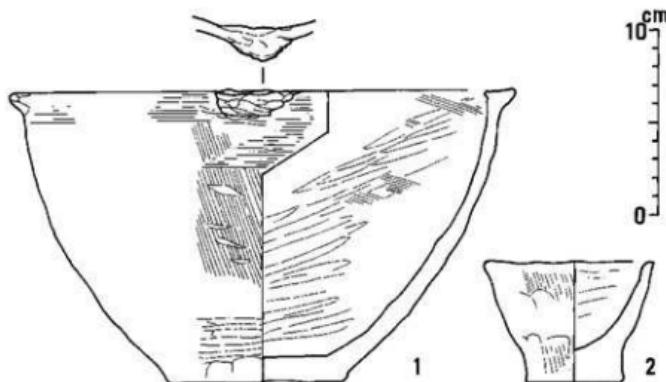


図46 A区南西探砂場出土赤生土器

黒色である。胎土中に砂粒が見られ焼成はやや弱く、内底面は剥落が著しい。調整はハケ目がまず施され、その後に縦方向の丁寧なヘラナデが行われている。内面は細かな横方向のヘラ調整である。前期後葉の土器であろうか。

弥生土器壺 (図45、図版67)。23号人 (図38、図版49参照)上方西、白色砂層内の砂利層出土の土器。口唇部と上肩部を失している。推定口径10.5cm、胸部最大径15.0cm、底径7.0cm僅かに窪んでいる。推定器高22.0cm。口縁部は良く開いていると考えられ、頸部に5本のヘラ描き沈線・突帯1条・ヘラ描き沈線6条と連続して装飾している。5条の沈線の最上段は3回の纏ぎで一回転しているが、2条目からは途中が剥落していて観察ができない。最下段の沈線は突帯張付けのために一部が潰れている。下段の6条の沈線は上から下へ螺旋状に纏め書きをしており上下の沈線の技法に違いがある。突帯は比較的高く断面コ字状でヘラ刻みが施されている。

器表は茶褐色で胎土中に砂粒が多く、焼成はやや弱い。また、内外面に剥落が多く飛砂に晒されていたと考えられる。外面の調整は頸部沈線上は斜め方向の短いヘラナデ、沈線下は横方向の短いヘラナデ、さらに斜め方向への短いヘラナデがみられ、底部は横方向のヘラナデ、そして指圧痕がある。内面は口縁部の横方向のヘラナデが観察できるだけである。前期末の上器である。

弥生土器鉢 (図46-1・2、図版68・69)

8月25日の午前中に調査現場附近の砂取り場で発見された上器で、第1層の上面から250cm下の白色砂層から出土した。

1 (図版68) は大形の耳付きの鉢で、口径24.0cm、底径9.1cm、器高15.8cm。底部は完全であるが、口縁部は3/4が欠失している。口縁部は直口に近く、耳部は逆し型である。耳は一対あると考えられ、幅3.2cm、厚さ1.4cmである。耳は張付けてありヘラでナデて成形している。器壁は淡褐色で大部分は黒斑で覆われ、一部に煤が付着している。胎土中に砂粒が含まれ、焼成はやや弱い。外面の調整は先ず全面に斜めにハケ目調整を行い、部分的にヘラナデを加えている。口縁部に横方向のハケ目、底部は指圧痕、横方向のヘラナデ、斜め方向の短いヘラナデを行っている。内面も緩い斜め方向のハケ目調整の後に、ハケ目を消すように交差するヘラナデを行っている。前期後葉の土器である。

2 (図版69) は小形鉢である。耳付き鉢と同じ地点で発見された。口径9.0cm、底径5.0cm、器高6.6cm、底部が大きく安定した器形をしている。口唇部が外に僅かに開き、器壁は淡褐色、胎土中に砂粒が多いが焼成は良好である。調整は外面に指によるナデが2段に行われ、その上にハケ目調整。内面は緩い斜め方向に指によるナデあげをしている。

1962年2月発見人骨附近出土土器 (図47、図版70~73)

2月19日金関、藤田が古墳遺跡の現状を見るために現地を訪れ、崩壊した砂丘に露出した人骨

(図49) を発見した。取り敢えず人骨出土状態を実測し周辺の調査を行い、右大腿骨の外方30cmから倒立した小形壺(図47-2)を発見し、さらに右足根骨外方30cmから壺(図47-1)を発見した。人骨は白色砂層の最上面、茶褐色砂層の最下面ともいえる層位で埋葬姿勢は仰臥伸展葬である。土器は人骨出土水準より深く、倒立した小形壺は-15~18cm、もう一つの壺は-22~25cm低い位置にあり白色砂層中の出上である。出土状態からこの人骨に副葬・供獻した土器とは考えらず、偶然同一地点から発見されたにすぎない。

1(図47-1、図版72)は口縁部の一部を欠失している。口径14.6cm、胴部最大径24.5cm、底径6.5cm平底で、器高26.2cmである。口縁部は大きく開き、口唇部はコ字状をしている。器壁は明淡褐色、胎土中には砂粒が多いが表面では殆ど見えない。焼成は良好である。全体にハケ調整が主となり、ヘラ調整で補っている。口縁部外面は口唇部も含めてハケ横、頸部から肩部にかけてハケ継の後に軽いヘラ横ナデを行っている。胴部もほぼ同様の調整でヘラ調整が軽く下胴部は斜め方向のハケ目、底部は縱方向のハケを上から下方向に行い底面近くはヘラ横ナデ、底面はヘラで粗くナデしている。内面は口縁部はヘラ横ナデが丁寧に行われ、頸部は緩い斜め方向のハケ目調整で、底面から胴部にかけてはハケ目調整を下から上へ行っている。前期後葉の土器。

2(図47-2、図版73)は、口径4.2cm、胴部最大径8.8cm、底径4.3cm平底、器高9.0cm。口縁部は僅かに開き胴部の張りは強く球形をしている。器壁は淡褐色、胎土中に砂粒が多いが表面では殆

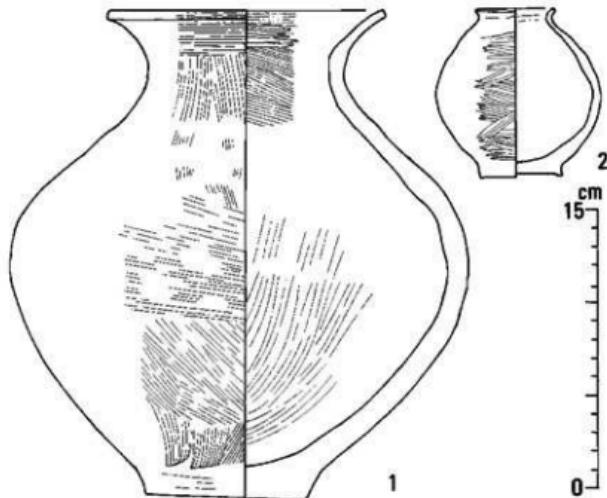


図47 1962年2月出土人骨付近出土埴生土器

ど見えない。調整はヘラで横・斜めと短くナデつけているが内面の調整は明らかではない。前期後
葉の土器。

(2) 古墳時代の遺構と遺物

2体の人骨とA区の粘土の貼り床の住居跡（工房跡？）、D区の土器窓状の遺構がある。

埋葬

27号人骨（図48・図版74）

29号人骨の置石とほぼ同一水準で発見された人骨、白色砂層の最上層に位置している。墓壇の存在、上部からの掘り込み、遺物の検出に務めたが明らかにできなかった。

人骨は男・成年、仰臥伸展葬、埋葬方位はN35°E、頭蓋骨頂水準は675.9cm、推定身長170.8cmである。人骨の遺存状態は良く骨の位置関係は正常であるが、右脛骨・右腓骨の下端部・右足根骨などが欠失しており、調査時の不注意によるものである。左右の下腕骨は完全に折り曲げ側胸部に接していた。下肢骨は揃えて完全に伸ばしている。手根骨は胸郭内または体側部にあり、第5腰椎が左にずれ、仙骨もやや浮き上がっている。左第1肋骨が側頭部にあり、上顎の前歯は胸部内に散乱している。上顎左右の犬歯（C）に抜歯が見られたが下顎はない。副葬品・供獻品は存在しなかった。

1962年2月発見人骨（図49、図版70～73）

2月19日金闇・藤田が古墳遺跡の現状を見るために現地を訪れ、崩壊した砂丘で露出した人骨を発見し緊急に調査を行った。人骨は下半身は正常な位置関係にあり、上半身の大部分、頭蓋骨は滅失していた。

腰椎の一部、下肢骨は平行して伸ばしており仰臥伸展葬、埋葬方位はN45°E。骨盤からやや離れ

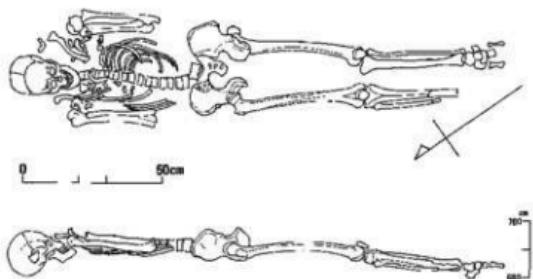


図48 27号人骨出土状態

て右桡骨と尺骨が平行しており、その北側約30cmに右上腕骨、それに接して肋骨4本が並び指骨が1個ある。右上腕の上方、肋骨を挟んで左上腕骨があり、その左方に左尺骨がある。下肢骨の在り方からすると上半身は位置関係にずれがあり、大部分が崖から崩落したと考えなければならない。先に弥生土器の部分で触れたように弥生土器は偶然に周辺から発見されたのであって、この人骨とは無関係な存在である。埋葬姿勢から古墳時代人とした。

1962年7月出土人骨 近藤正調査 - (図版76)

近藤正が5月と7月に古墳遺跡で調査した人骨2体の内の7月25日に調査した人骨であるが、聞き取りも充分でない。写真資料によるとA区に近接した場所で砂取り作業中に出土したと考えられる。人骨の遺存状態は極めて良く、白色砂層からの出土と考えられる。人骨は頭蓋骨・下顎骨・左右の肩胛骨・鎖骨・左上腕骨・胸椎・肋骨の一部が残っているに過ぎない。被葬者は女性・成年～老年である。推定年齢142.7cm、上顎左右に犬歯(C)と下顎左右の中切歯(I)に風習的抜歯がある。

砂取りの情況などからすると埋葬は頭部を東南にしている可能性が強い。副葬品・供獻品などの出土ではなく、埋葬姿勢も充分に知ることができないので、一応時代不明の埋葬とするが弥生人の可能性は極めて強い。

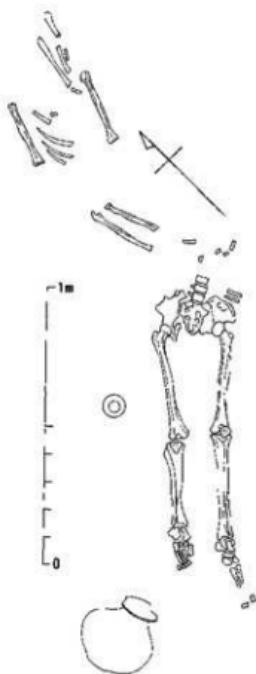


図49 1962年2月19日調査人骨出土状態

A-11・13×1・2層出土土器 (図50)

この区では包含層を上位に区分して調査している。ここで1・2層は第1層の上半部と下半部である。須恵器壺蓋・壺・高壺、土師器壺・壺・高壺がある。

須恵器壺蓋 (図50 1～3)。身受の無い蓋。口径12.8cm、器高4.1cm。口縁部は直立に近い状態で、口唇部は丸味を持っている。器壁は黒褐色、胎土中にには微細な砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、外面天井部はヘラ削りの後にナデが行われ、板目痕が残っている。また×印の窓印がある。7世紀前半の土器。2はつまみを持つ蓋壺であるがつまみは欠失している。口径13.9cm、口縁部は直角に折れ曲がっている。青褐色で胎土も良く焼成は良好である。3は環状のつまみを持つ蓋壺である。つまみの径は4.8cm、端部の断面は山形をして、つまみの周辺

部には張付け痕がある。残る部分の調整は横ナデである。2・3ともに7世紀後半の土器。

須恵器杯（図50-4～7）。蓋受けの有るもの（4～6）と無いものに分けられる。4は口径12.6cm、推定器高4.0cmである。蓋受けの立ち上がり良く、受部は横に延びている。器壁は青鼠色、胎土は良好で焼成も良い。調整は口縁部内外面とともに横ナデ、外面部底部はヘラ削り、内面は綫ナデで処理している。5は口径11.5cm、器高2.8cm。蓋受けの立ち上がりは短く内傾して、受部は僅かに右上に延び、立ち上がりに比較して良く延びている。器壁は青鼠色、胎土・焼成とともに良い。口縁部の調整は内外面とともに横ナデ、外面部底部はヘラ削り、内面部底部は綫ナデである。6は口径10.5cm、蓋受けの立ち上がりは内傾し短い。受部は右上に延びている。蓋杯の可能性が強い。器壁は灰白鼠色胎土・焼成とともに良い。調整は残存部分では横ナデが観察できる。3点ともに7世紀前半の土器である。7は高台の有る杯で、口径14.7cm、器高4.6cm。口縁部は直立に近く口縁部内面に凹線が

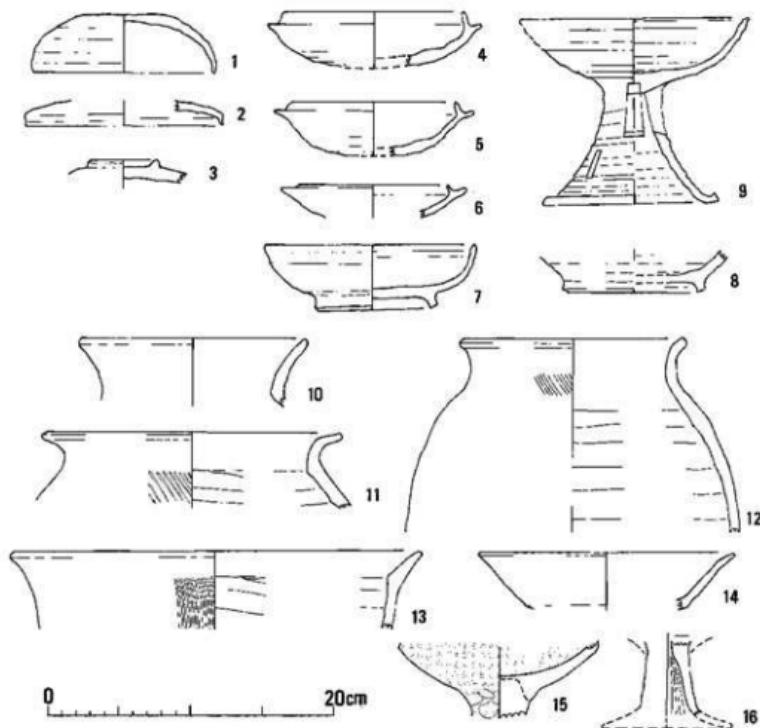


図50 A-11、13区1、2層出土土器（須恵器、土師器）

ある。高台内径は7.8cm、少し開き気味である。器壁は黒鼠色、胎土中に小砂粒があり焼成は弱い。高台の内外面には張付け痕があり、口縁部から高台附近まで横ナデである。内面も横ナデ、底面は縱ナデである。8も高台の有る壺で、高台の内径8.8cm、7と同様の焼成・調整である。ともに7世紀後半の土器。

須恵器高壺（図50-9）。蓋受けの無い高脚高壺。口径16.0cm、器高12.9cm、脚端部径12.2cm、脚高8.3cmである。壺部は緩く大きく広がり、脚部の広がりも良い。口唇部は外反し口唇は薄く丸味を持っている。脚部には2段の透かしがあり、上下の透かしの間に凹線、下段の透かしの下端に掛かるように凹線がある。脚端部は上に断面三角形状に肥厚している。脚部には長方形の透かしが2段あり、2個一対でその位置は90°ずれている。器壁は黒紫鼠色で、胎土中に砂粒があるが焼成は極めて良い。調整は壺部と脚部の接合部に張付け痕が見られる他は横ナデ、壺部底面は縱ナデである。

土師器壺（図50-12）。10は口径15.5cm。口縁部は良く開いている。口唇は丸く鈍い。器壁は茶褐色、胎土中に小砂があるが焼成は良い。調整は横ナデが観察できるのみである。11は口径20.2cm、口縁部は折れ曲がったように開いている。胴部の張りは強いと考えられる。器壁は明淡褐色、胎土中に砂粒が多く焼成はやや弱い。調整は口縁部は内外面とともに横ナデ、外面は極めて粗いハケ目、内面はヘラ搔取りである。10-12は6世紀後半から7世紀の土器。

土師器羽釜（図50-13）。小片で判断は困難であるが羽釜と考える。口径28.5cm、胴部の張りは殆どない。口縁部は僅かに開き口唇はコ字状をしている。器壁は明褐色、胎土は良好で焼成も良い。口縁部内外ともに横ナデ、外面は細かなハケ目で内面は横方向のヘラ削りである。6世紀後半から7世紀の土器。

土師器高壺（図50-14～16）。14は壺部を段を持つ高壺である。口径は17.8cm、内外面とともに円塗り、胎土は精良で焼成は良好である。5世紀後半の土器。15は高壺の壺部の下半部と脚部の一部で、内外面とともに円塗りである。脚の接合面は凸状に作られ、それに壺部を作り付けている。壺内面には丹塗り後に鋭い平行線4本が引かれ、施文具は金属器と考えられる。接合部には指圧痕が見られる。6世紀後半から7世紀の土器。16は脚部で上部に脚張付け痕がある。壺底面には接合のための放射状の押さえ痕がある。器壁は明褐色、胎土中に小砂があるが焼成は良い。調整は外面は摩耗して不明であるが、内面にはヘラ縱ナデが見られる。5世紀後半の土器。

A-11・13×3層川土土器（図51）

A-11・13×3では包含層を上下に区分して調査している。ここでの3層は2層の上半部を示している。弥生土器・須恵器・土師器がある。

弥生土器壺（図51-1）。複合口縁壺で、口径18.7cm、口縁部の立ち上がりは外へ開いて、口唇部はやや尖り気味である。器壁は灰白褐色、胎土中に砂粒が含まれ焼成は弱い。調整は口縁部の外面ともに横ナデ、内面は横ナデ、ヘラ横ナデ、ヘラ搔取りと連続している。後期中葉の土器であろうか。

須恵器蓋杯（図51-2）。つまみが有る大形の蓋杯と考えられる。口径20.7cm、現存高2.8cm。口縁部が屈折し、口唇部が僅かに外に開いている。器壁は青鼠色、胎土は良好で焼成も良い。調整は口縁部内外面は横ナデ、外面の大井部は整いヘラ削りとナデつけがあり宝珠型のつまみが考えられる。内面天井部は継ナデである。8世紀前半の土器。

須恵器壺（図51-3・4）。蓋受けの無い壺で、3は口径12.0cm、器高3.8cm。口唇部が僅かに外反している。器壁は青鼠色、胎土は良好であるが焼成はやや弱い。調整は口縁部は内外面ともに横ナデ、底面は糸切りで、中腹部分はヘラナデで糸切り後の荒れを調整している。4は口径12.0cm、器高4.0cm。3と同様の器形で器壁・調整も変わらない。

須恵器長頸壺（図51-5）。底部の小片で、高台がある。高台は外に開き、底面に僅かに座みがあり、高台の周辺には張付け痕がある。高台部の外径は10.0cm。器壁は鼠色、胎土も良く焼成も良好である。外面ともに横ナデで調整している。

土師器壺（図51-6・7）。6は口径20.0cm、口縁部は折れ曲がるように開き、口唇部は極端に薄くなっている。口縁部下にヘラ描きの沈線2条がある。肩部の張りは強いと考えられる。器壁は茶褐色、胎土中には砂粒があるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面はハケ目を施し、内面はヘラ搔取りの後に指によるナデつけを下から上へ行っている。5世紀の上器であろうか。7は口径13.5cm、複合口縁のような外観をしている。口唇部は丸く、内面が凹状で特殊な形

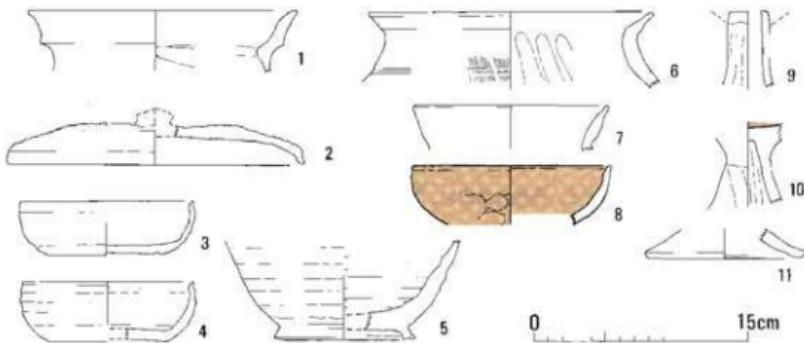


図51 A-13区3層出土土器（弥生土器、須恵器、土師器）

をしている。器壁は明褐色、胎土は良好で焼成も良い。調整は残存部分では横ナデが観察できる。4世紀末～5世紀初めの上器であろうか。

土師器坏（図51-8）。口径14.0cm、現存器高4.2cm、口縁部に開きは殆どなく、口唇部が僅かに外方に曲がっている。内外面ともに丹塗りで、胎土は精良、焼成も良い。口縁部外面から内面は横ナデ、外面は横ナデの下方はヘラによる軽い削りが見られる。時期は明らかでないが5世紀台の土器であろうか。

土師器坏（図51-9～11）。脚部と脚根部である。9は坏部の剥離痕が観察できる。脚部の上端は僅かに内側に傾き、端部はコ字状をしている。外面はヘラ継ナデ、内面は絞りがある。4世紀の土器。10は杯部内面は丹塗りである。脚部と坏部が連続して作られ、内面に粘土帯を張付けて坏部を製作している。5世紀後半の上器。11は根部径10.8cm、器壁は紅褐色、胎土は精良で焼成も良い。5世紀後半の上器。

A-10・12区2・3層出土土器（図52）

10・12区では1・2層の区分が不明瞭で、1層下部と2層上半部を区分せずに2・3層として取り上げている。弥生土器、須恵器、土師器が出土している。

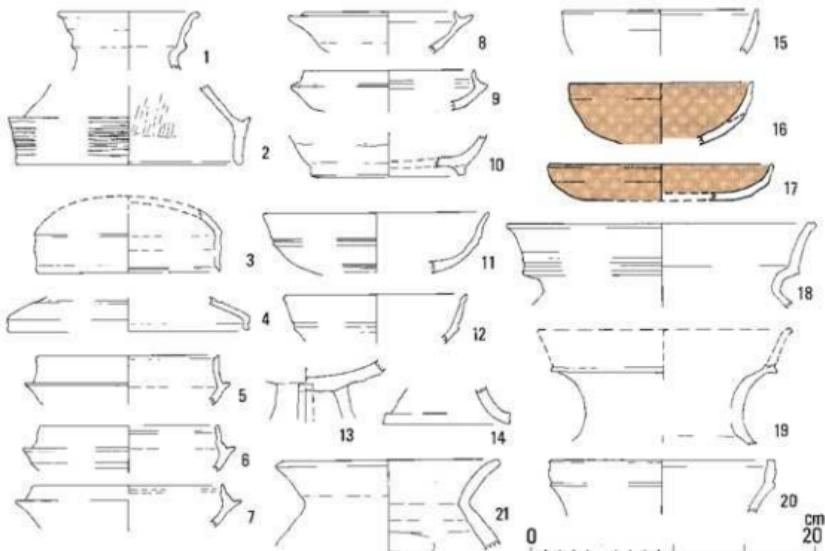


図52 A-10、12区2、3層出土土器（弥生土器、須恵器、土師器）

弥生土器壺（図52-1）。複合口縁壺。口径9.5cm、口縁部は良く立ち上がり、口唇部は肥厚している。口唇部直下に鈍い稜線がある。器壁は茶褐色で、胎土は良好で焼成も良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデである。後期後葉の土器。

弥生土器器台（図52-2）。鼓形器台。脚台部径16.0cm、脚台部10本の櫛描き平行線文がある。脚台施文部の上端部分は断面三角形状に粘土を張付け、器壁には張付けのためのクシ印が見られる。器壁は明褐色、胎土中に小砂があるが焼成は良好である。調整は末端部は内外面ともに横ナデを行い、その後にクシ描き平行線を書いている。筒部分はヘラ縦ナデ、内面もヘラ縦ナデをしている。後期前半の上器。

須恵器蓋壺（図52-3・4）。3は口径12.8cm、現存器高4.3cm、推定器高5.3cm。口縁部は直線的に立ち、口唇部内面に段があり、口縁部と天井部の境にも稜線がある。器壁は青鼠色、胎土は精良で焼成も良好である。5世紀後半の上器。4はつまみが有ると考えられる蓋である。口径16.8cm、口縁部は直立状態であるが口唇が小さく外反している。口縁部と天井部の境に鈍い凹線がある。器壁は青鼠色、胎土は良好で焼成も良い。調整は残存部分はすべて横ナデである。7世紀後半の土器。

須恵器壺（図52-5～10）。5は口径12.8cm、蓋受けの立ち上がりは良く伸び、受部は小さく横に出ている。器壁は青鼠色、胎土は良好で焼成も良い。調整は残存部分では横ナデで、受部の下方には自然釉が見られる。5世紀後半の土器。6は口径12.5cm。蓋受けの立ち上がりは僅かに内傾し、2段に伸びた形をし口縁部内面には小さな凹線がある。受部は斜めに立ち短い。器壁は青鼠色、胎土は良好で焼成も良い。調整は残存部分で横ナデである。6世紀前半の上器。7は口径13.3cm、立ち上がりは内傾し鈍い。口縁部内面に微妙に凹線があり、受部は斜め上に伸びているが鈍い。器壁は黒鼠色、胎土・焼成とも良い。残存部の調整は横ナデで受部下方は自然釉に覆われている。6世紀後半の上器。8は口径10.5cm。立ち上がりは短く、内傾している。受部は斜め上に伸び厚みがある。器壁は青鼠色で胎土も焼成も良い。残存部分の調整は横ナデである。9は口径12.1cm、立ち上がりは内傾し、受部は小さく僅かに突き出ている。器壁は黒鼠色、胎土も良好で焼成も良い。調整は残存部分では横ナデである。8・9は7世紀前半の上器。10は高台の有る壺で高台内径は10cm、器壁は青鼠色、胎土は良く、調整も良好である。高台内部の底面は糸切りで高台周辺は張付け痕が見える。内外面とも横ナデである。

須恵器高壺（図52-11～14）。11は蓋受けの無い高壺。口径15.9cm。口縁部は良く開いて外反している。口縁部下に凹線があり、その下方が稜線のように見える。器壁は灰青鼠色、胎土は良好で焼成も良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外底面はカキ印で、内底面は縦ナデである。12も蓋受けの無い高壺。口径12.7cm、口縁部の開きは少なく、口唇部が僅かに外反し、口縁部下に凹線1条がある。器壁は青鼠色、胎土は良好で焼成もよい。調整は残存部分は横ナデである。13は壺

底部と脚の一部の破片である。接合部の脚の径は5.0cm、長方形の透かし3箇所が観察できる。接合部はナデッケ、坏部底面にはヘラ削り、坏部内底面には横ナデに統いて縦ナデが観察できる。脚部は横ナデである。15は高环脚部壺である。壺部径9.0cm、開きは弱く、端部が肥厚している。青鼠色、胎土・焼成ともに良好である。いずれも6世紀後半の上器。

土師器壺（図52 15～17）。15は小片である。口径13.6cm、口縁部は直立に近く、口唇部内面に斜めの面があり、口唇は僅かに反っている。器壁は紅褐色、胎土は精良で焼成も良い。調整は残存部分すべて横ナデである。16も小片である。口径13.0cm、推定器高4.5cm。口縁部は僅かに開き口唇直下に稜線がある。内外面ともに丹塗りで、調整は口縁部の内外面は横ナデ、外面底部は軽いヘラ削りである。時期の詳細は不明であるが、5世紀台の上器であろうか。17は小片で口径15.7cm、器高2.5cm、高台の有無については確認できない。口径の割に器高が低く皿の範囲に入ると考えられるが坏とした。口縁部は僅かに剥きながら立ち上がっている。全面丹塗りで胎土は精良、焼成は良好である。調整は口縁部の内外面は横ナデ、外面底部は軽いヘラ削りである。時期不明であるが、7世紀台の七器であろうか。

土師器壺（図52 18～20）。18は複合口縁の壺。口径20.5cm、口縁部の立ち上がりは良く伸びて開いている。口唇部は上面にやや陥んだ平坦面があり、口唇は外に張り出している。立ち上がりの接合部は凸状になり、円線が見られる。器壁は紅褐色、胎土・焼成ともに良い。調整は横ナデである。19は立ち上がりが消失している。推定口徑16.6cmである。立ち上がり接合部は凸状に張り出している。器壁は茶褐色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。残存部分の内外面は横ナデ、肩部以下の内面はヘラ搔取りである。18・19は4世紀前半の上器。20も複合口縁である。立ち上がりは短く直立に近く、口唇部に僅かに外傾した平坦面がある。器壁は茶褐色、胎土は精良で、焼成もよい。5世紀中～後葉の十器である。

土師器壺（図52-21）。口径15.0cm。口縁部はく字状をなし良く開いている。器壁は淡茶褐色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、内面の上肩部以下はヘラによる横方向の搔取りである。

A-11・12北拡張区3層山土十器（図53）

11・12北拡張区でも包含層を上・下に分けて調査している。弥生土器・須恵器・土師器が出土している。

弥生土器壺（図53-1）。複合口縁壺である。口径13.3cm、口縁部の立ち上がりは短く僅かに開いている。接合部は鈍い稜線をなしている。口唇部は尖り気味で肥厚は見られない。器壁外面は黒茶褐色、内面は淡褐色、胎土は精良で焼成も良い。残存部分の調整は内外面ともに横ナデである。

後期後半の土器。

須恵器壺（図53-2）。口径9.3cm、口受けの立ち上がりは内傾し、口唇部は直立している。受部は斜めに伸びて長い。器壁は灰白褐色、胎土精良で焼成も良い。調整は横ナデで、受部から下方に自然釉が見られる。6世紀前半の土器。

須恵器壺（図53-3）。口縁部・底部が欠失している。胴部最大径は10.1cm、器壁は青鼠色、胎土精良で焼成も良い。調整は胴部以下はヘラ削りである。6世紀後半の上器であろうか。

土師器壺（図53-4～11）。いずれも複合口縁、または複合口縁が退化した形態である。4は口径13.3cm、立ち上がりは開きが少ない。口唇部は外方に小さく突き出て、立ち上がり基部も突起状をしている。明淡褐色で胎土は精良、焼成も良い。調整は内外面ともに横ナデである。5は口径

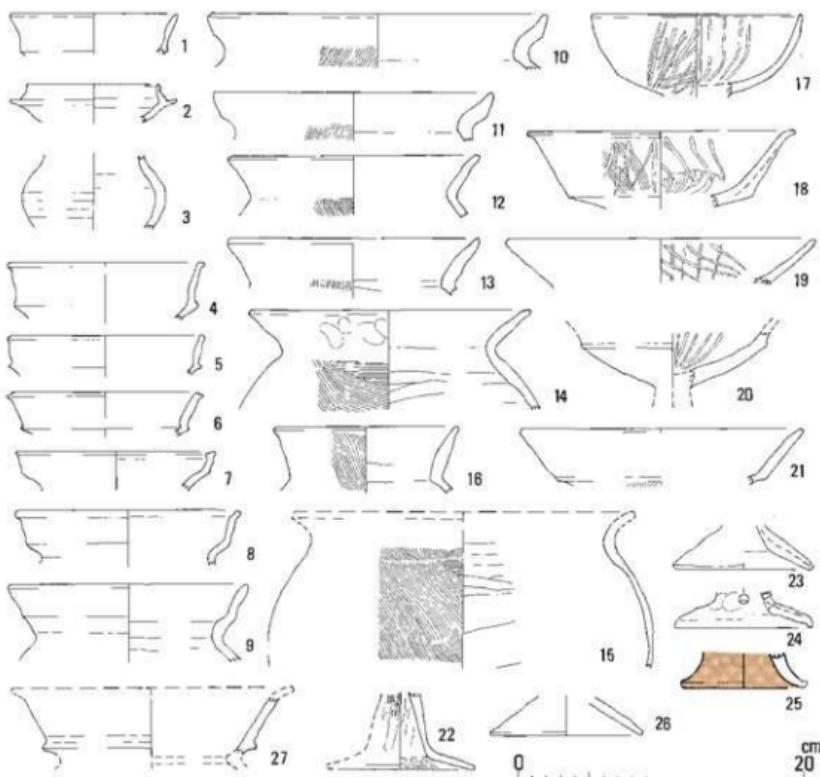


図53 A-11、12区北拡張区3層出土土器
(弥生土器、須恵器、土師器)

13.8cm、立ち上がりは開きが少なく、口唇部は内側に小さく突き出している。基部の張り出しは強く鋭い稜線となっている。器壁は灰白色、胎土・焼成とともに良好である。調整は横ナデが観察できる。6は4・5に比較して立ち上がりの開きが強く口唇部に窪みがあり、立ち上がり基部の張り出しは強く鋭い稜線となっている。器壁は茶褐色、胎土も焼成も良い。調整は横ナデである。この3例は4世紀前半の上器である。

7は複合口縁であるが立ち上がりは短く、開きも僅かである。口唇部は内外に肥厚し、内傾する平坦面を持っている。器壁は茶褐色で胎土も焼成も良好である。調整は横ナデ。8も複合口縁で口径15.4cm、立ち上がりは口唇部で折れ曲がった様に開いている。器壁は淡褐色、胎土中に砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は横ナデである。9も複合口縁で口径16.4cm。立ち上がりは開いているが、口唇部は厚みがあり鈍い感がある。器壁は茶褐色、胎土は良く焼成も良好である。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、肩部内面はヘラ搔取りである。10は複合口縁が一段と退化した形と考えられる。口径15.5cm、立ち上がりは短く太く口唇部は丸い。器壁は淡褐色、胎土中に小砂があるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、肩部内面はヘラ搔取りである。11は複合口縁がさらに一段と退化した形態といえる。口径19.5cm。立ち上がりとはいえない位である。口縁部は厚みを増し、口唇部は丸く内面の窪みもない。器壁は茶褐色で胎土中に小砂が含まれているが、焼成は良い。調整は横ナデ、肩部内面はヘラ搔取りである。7～9は5世紀中葉の土器である。

土師器壺（図53-12～16）。12は口径17.0cm、く字状の口縁部で口唇部は丸い。器壁は茶褐色で胎土中に砂粒があるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面はハケ目で整えている。13もく字状口縁、口唇部は丸く内面に凹線がある。器壁は茶褐色、胎土中に小砂があるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、肩部内面にヘラ搔取りが見える。14は口径19.5cm、口縁部の開きは大きく、口唇部が僅かに折れている感があり、肩部に小さな段がある。器壁は黒茶褐色、胎土は良好で焼成も良い。調整は口縁部の外面には圧痕がありその後に横ナデ、内面は横ナデである。肩部の段から下は横・斜め方向のハケ目で、内面は横方向のヘラ搔取りである。15は口唇部を欠いている。推定口径は23.5cmと大形である。口縁部は緩く開き口唇部は丸味を持っていると考えられる。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は短い斜めのハケ目と斜めの長いハケ目で整えられている。内面は口縁部に近い方は幅が狭く短い横方向のヘラ搔取り、胸部は幅広の斜め方向のヘラ搔取りである。16は小形壺、口径12.6cm。口縁部の開きは少なく口唇部は丸味を持っている。器壁は灰黒色、胎土・焼成とともに良好である。調整は外面は軽いハケ目、内壁は横ナデ、ヘラナデつけ、ヘラ搔取りと連続している。壺は5世紀中葉の土器である。

土師器高杯（図53-17～26）。壺部（17～23）と脚部（24～26）に分けられる。

壺部は17を除いて段を持つもので、暗文もある。17は楕円形の壺で口径14.7cm、口縁部は直立に近い。

口唇部は薄く丸味はあるが外間に僅かに窪みがある。器壁は明褐色で胎土中に砂粒が含まれるが焼成は良い。調整は横ナデ、坏部内面に暗文があり、底面の中心から放射状に口縁部方向にヘラを走らせてている。外面の暗文は緩い斜め方向に不規則に施し、その後に斜め方向の暗文を施し、脚との接合部にまでおよんでいる。18は段の有る坏部である。口径18.7cm、口縁部は大きく開き口唇部は屈折している。坏部は段の部分で接合せず内面に粘土を張り付けて形造っている。器壁は紅褐色、胎土中に小砂があるが焼成は良い。調整は内面は横ナデの後に、坏底面に密に方向も整わない放射状の暗文、さらに傾斜を変えて口唇部に達する暗文を施している。外面はハケ目の中に軽い横ナデ、さらに縦・斜めに暗文を施し、坏底面から接合部に向けて短い暗文が見られる。19は口径21.5cmの人形品である。段部分から上で大きく開いている。段接合面には斜めにハケ目があり粘土接合の下地としている。器壁は紅褐色、胎土・焼成ともに良い。調整は横ナデの後に坏内面に暗文を施している。暗文は底面中心部から放射状に施し、その後緩やかに斜め方向に施している。21は段の有る高坏で口径19.6cm、口縁部は良く開いて、口唇部は断面コ字状をしている。坏部内面の線は外面の線と異なりやや膨れている。器壁は茶褐色、胎土中は良好で焼成も良い。調整は横ナデで外面の段の下方にハケ目がある。

22は裾部径10.3cm、体部から折れ曲がるように開いている。体部上方には坏部の剥落痕がある。器壁は紅褐色、胎土は精良で焼成も良い。調整は体部は粗いハケ目にヘラの縦ナデでを加えている。下地の粗いハケは坏部の接合を容易にするものであろう。内面の体部はヘラ縦ナデつけ、裾部はヘラナデである。段をもつ高坏の脚部であろう。23は裾部径9.5cm、肉の厚い裾部であるが断面図で見るよう内面に粘土を張り付けて補強している。器壁は紅褐色、胎土・焼成は良であるが調整はやや粗である。外面はヘラ縦ナデ、内面は体部は縦にヘラ、裾部は横にヘラ調整をしている。24は裾部内径9.2cm、裾端部は糸底状に立っている。断面図で解るように体部から伸びた粘土の下面に粘土を張り付けて成形している。また、径7mm前後の円形の透かしがあるが個数は不明である。器壁は淡褐色、胎土は精良で焼成も良い。調整は透かし部分に圧痕があり、他はヘラナデである。25は裾部径8.5cm。内外面丹塗りである。器壁は茶褐色、胎土・焼成ともに良い。調整は横ナデである。26は22と同一形態の脚であろう。裾部径10.5cm、内外面ともに丹塗りである。器壁は淡褐色、胎土・焼成とともに良く、調整は横ナデ。これらの高坏は5世紀中葉の上器である。

G区1・2層出土土器（図54-1～13）

G区1層は黒褐色粘質砂土層である。1～12がこの層の出土十器で、2層は茶褐色砂層で13がこの層の出土上器である。弥生土器・須恵器・土師器がある。

弥生土器甕（図54-1）。口径19.7cm、小片である。頸部が極端に弯曲し、口縁部の立ち上がり

は内傾し、外面は断面で明らかなように段状になり凹線文の名残がある。器壁は淡褐色、胎土中に小砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は横ナデである。中期後葉の土器である。

須恵器蓋坏（図54-2・3）。2は身受が無い蓋坏で、口径12.7cm、器高4.5cm。口縁部は広がらず直立に近い。口縁部下に凹線2条がある。器壁は青鼠色、胎土・焼成は良い。調整は内外面とともに口縁部から天井部近くまで横ナデ、天井部は横ナデ、内面の天井部は縦ナデである。6世紀後半の土器。3も身受の無い蓋坏。口径13.6cm、器高3.8cm。口縁部は開いている。器壁は青鼠色、胎土・焼成も良い。調整は口縁部の内外面はともに横ナデ、天井部はヘラ削り、内面天井部は縦ナデである。7世紀前半の上器。

須恵器坏（図54-4・5・6）。4は口径10.6cm、器高4.7cm。蓋受けの立ち上がりは内傾している。口唇部に内傾した僅かな面がある。受部は斜めに伸びている。器壁は青鼠色、胎土中に小砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部内外面とともに横ナデ、底面はヘラ削り、内底面は縦ナデである。5は口径10.6cm、器高4.3cm、蓋受けの立ち上がりは内傾し、口唇は丸味をもっている。受部は斜めに伸びている。器壁は青鼠色、胎土は精良で、焼成も良い。口縁部の内外面はともに横ナデ、底面はヘラ削り、内底面は縦ナデである。ともに6世紀後半の土器。6は蓋受けの無い坏。口径10.8cm、器高4.5cm。口縁部は直立に近く、口唇部外が僅かに膨れている。内面は内傾した面である。器壁は青鼠色、胎土・焼成とともに良い。調整は口縁部の内外面とともに横ナデ、底面は糸切り。ナデと糸切りの中間はナデつけて処理している。糸切り作業後の調整であろう。内底面は縦

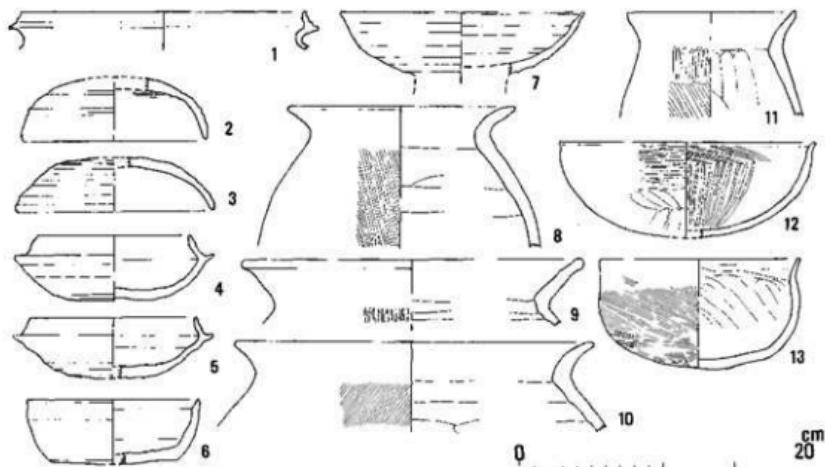


図54 G区1、2層出土土器（弥生土器、須恵器、土師器）
1～12—1層、13—2層

ナデ。8世紀後半の土器。

須恵器高杯（図54-7）。高杯部で、蓋受けの無いもので、脚部接合部分で折損している。口径17.0cm、杯部高4.3cm、胸部接合部の推定径は6.5cmで低脚の高杯と考えられる。器壁は黒鼠色、胎土は良く、焼成も良好である。調整は横ナデが主で、脚接合部に近い部分にヘラ削りがある。7世紀の上器。

土師器甕（図54-8～11）。8は口径15.6cm、残存胴部径18.8cm。口縁部は大きく外反しているが、二次的火で赤化している。器壁は淡紅灰色、胎土中には小砂を含み焼成は二次的火を受けているために観察できない。調整は口縁部は横ナデ、外面はハケ目で、内面はヘラ搔取りであるが二次的な火で剥落が著しい。9は口径23.3cm、口縁部は開き、口唇部は肥厚し、二つの面から成っているように観察できる。器壁は茶褐色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、内面はヘラによる横方向の搔取りである。10は口径21.5cm、く字状の口縁部で口唇部に向けて薄くなっている。器壁は明淡褐色、胎土中に砂粒が多いが焼成は良い。調整は口縁部は内外面ともに横ナデ、頸部以下は粗い幅太のハケ目、内面はヘラ横方向の搔取りであるがやや粗雑である。3点ともに6世紀後半から7世紀の土器。11は小型甕で、口径11.8cm、口縁部の開きも少なく胴部の張りも小さい。器壁は淡紅褐色、胎土中に砂粒が多く焼成もやや弱い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は粗いハケ目が縦・斜めに施されている。6世紀後半の土器であろうか。

土師器甕（図54-12・13）。12は1/4の破片。大形の甕で口径17.8cm、器高6.8cm。口縁部は僅かに開き、口唇部が小さく曲がっている。器壁は紅褐色、胎土は精良で焼成も良い。口縁部外面は細かな横方向のヘラナデ。底部は軽いヘラ削りである。ヘラ削りは同心円状に斜め方向に短く削り、さらに底面は方向を変えて斜めに削っている。口縁部内面は横ナデの後に暗文を緩め方向に、さらに底面から放射状に口縁部に向けて暗文を施している。時期不明であるが5世紀台の上器であろうか。13はただ一点2層（茶褐色砂層）出土の上器である。完形の大形甕で口径13.8cm、器高7.7cm。口径の割に深さがある。口縁部は緩く外反し、口唇部は丸味のある面が外傾している。胴部が僅かに膨らみ胴部径14.1cmである。器壁は淡褐色、胎土は良好であるが焼成はやや弱い。調整は口縁部外面は粗い横ハケ目、それ以下は底面まで細かなハケ目が見られる。ハケ目は口縁部側は斜め方向で底面に近くなるに連れて角度を減じ、底面では縦ナデといえるほどになっている。内面は口縁部はヘラ横ナデ、それ以下は底面近くから上に斜め方向にヘラ搔取り、底面はヘラナデつけで調整している。時期不明。6世紀台の上器であろうか。

A区住居跡－工房？－(図55、図版77)

A-10区、南に接する11区、西側の13区で調査した住居跡で、茶褐色砂層から検出した。調査は10区で茶褐色砂層中に、黄褐色粘土を多く含む層を検出したことが端緒であった。調査区を拡大した結果、不整に広がる黄褐色粘土面と柱穴？4箇所と円錐台形の構造物を検出した。北端部には長さ230cm、最大幅100.0cm、最小幅27.0cm、南側に広がる粘土面よりも37～51cm高い上手状の粘土帯を検出した。この粘土帯の上面には大小の凹凸があり、平坦な面は殆どない。この粘土帯はどの様な情況でできたのであろうか、北側の粘土が捲れて重なりあったのであろうか。粘土の集積されたものとの解釈もできる。

この粘土帯から約30.0cmの距離を置いて、底径67.0cm、上面の径26.0cm、高さ約28.0cmの円錐台形の構造物がある。上面には径28.0×17.0cm、深さ23.0cmの窪みがあるが、この深さは確定的なも

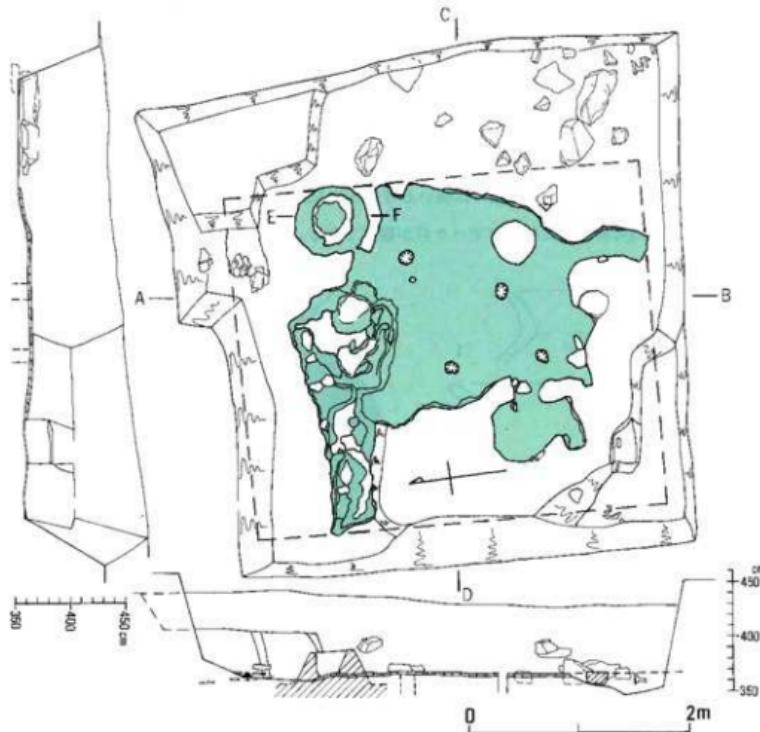


図55 A区住居跡（工房？）平面・断面図
青色は粘土多い。

のではなく、遺物も出土しなかった。この遺構の性格も充分には解明できない。

この粘土帯の南に粘土を含む厚さ2.0～3.0cm前後の面がある。この面の水準は367.4～364.9cm前后でほぼ平坦、特に踏み固められているという状態でもなかった。その広がりは不整な形で最大南北に240.0cm、東西に240.0cmである。この面に柱穴4個が点在している。南西隅の柱穴の径は不整な形で、径は11×12cm、北西は12×11cm、北東は11×12cm、南東は11×15cmで深さは確認できなかった。4個の柱穴の位置関係は菱形である。南西と北東を一对の柱として、他の2～3本を補助的な柱と考えると、柱中心間の距離は155.0cmで、想定する建物の規模（図55の点線部分）375.0×310.0cmと合致しない。差し掛け屋根程度の建物で作業小屋なのであろうか。床面直上の土器との関連を考えると、5世紀中葉の建築と考えられる。

A区住居跡 T工房？ 床面直上出土土器（図56、図版78）

住居跡床面に密着して出土した土器ではないが、何らかの関連があると考えられる土器群である。

土師器壺（図56-1～3）。1は口径12.0cm小型壺である。口縁部は余り開かず、胴の張りも少ない。器壁は茶褐色、胎土中には小砂を含み焼成はやや弱い。調整は口縁部の内外面とともに横ナデ、頸部には指圧痕があり軽いハケ臼と連続している。内面は横ナデに続いてナデつけがあり、肩部内面には横方向のヘラ搔取りがある。時期不明の土器である。2はU径19.3cm。く字型の口縁部で、口唇部は丸味をもっている。胴の張りは強いと考えられる。器壁は茶褐色、胎土・焼成ともに良い。調整は口縁部の内外面とともに横ナデでハケ臼が観察できる。ハケ臼は粘土接合部に調整のために行

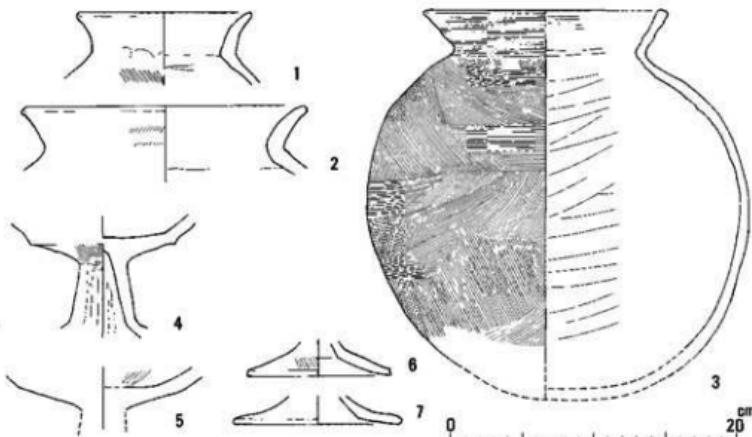


図56 A区住居跡（工房？）床面直上出土土器（土師器）

われたものであろう。肩部内面はヘラ搔取りである。5世紀中葉の土器。3は底部が欠失しているがほぼ全形を知ることのできる十器である。口径15.8cm、胴部最大径26.8cm、現存器高24.8cm、推定器高27.6cm。く字型口縁部で口脣部に厚みがあり外傾した面があり、断面形で見た場合に複合口縁の名残を感じる。器壁は淡茶褐色、胎土中の砂粒は少なく、焼成も良好である。調整は口縁部の内外面は横ナデ、器体は縦・横・斜めの細かなハケ目で整え、胴部以下も横・斜めそれに交差する斜め方向のハケ目を用いている。5世紀中葉の土器。

土師器高坏(図56-4~7)。4は段をもつ高坏であるが环の口縁部、脚の据部分が欠失している。段は明瞭な稜線として残り、接合部の張付け痕が残り、坏部と脚部の接合痕もまた残っている。器壁は明紅褐色、胎土・焼成ともに良い。調整は段から上は横ナデ、下はハケ目、坏部底面はハケ目である。脚部はハケ目の後にヘラナデ、内面もヘラナデと考えられる。5は坏部の一部が残っているに過ぎないが、脚の接合痕と坏部の暗文から考えて段をもつ高坏の可能性が高い。器壁は茶褐色、胎土中に小砂があるが焼成は良い。暗文は坏部底面の中心から放射状に施されている。調整は十分には解らないが脚接合部にヘラナデを見る事ができる。6は胸部裾で径は10.0cm。裾端部はコ字状をしている。器壁は紅褐色、胎土・焼成ともに良い。調整は横ナデの後にハケ目を加えている。7も裾部で径11.6cm、裾端部は丸味がある。器壁は紅褐色、胎土・焼成ともに良い。調整は横ナデ。高坏はすべて5世紀中葉の土器である。

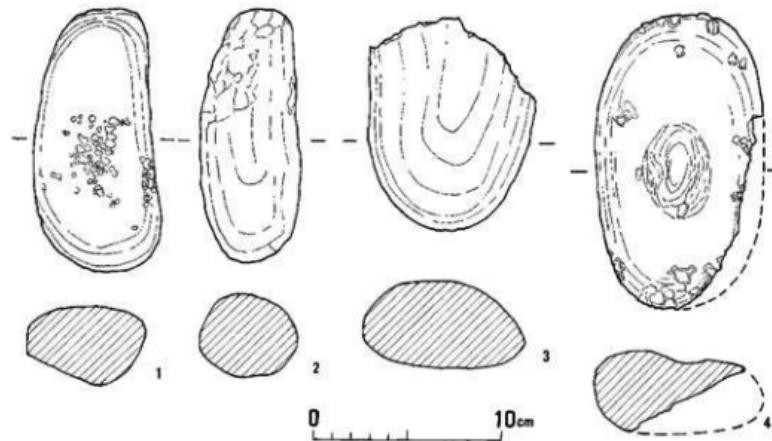


図57 A区出土石器1(敲石)

A区住居跡出土石器1（図57-1～4）

1は住居跡西南部出土。長さ14.1cm、最大幅6.5cm、重量635g。上面は平坦であるが、裏面は稜がある。砾を利用してした敲石で、中央部に無数の打痕がある。2はA-13区1・2層出土。長さ13.6

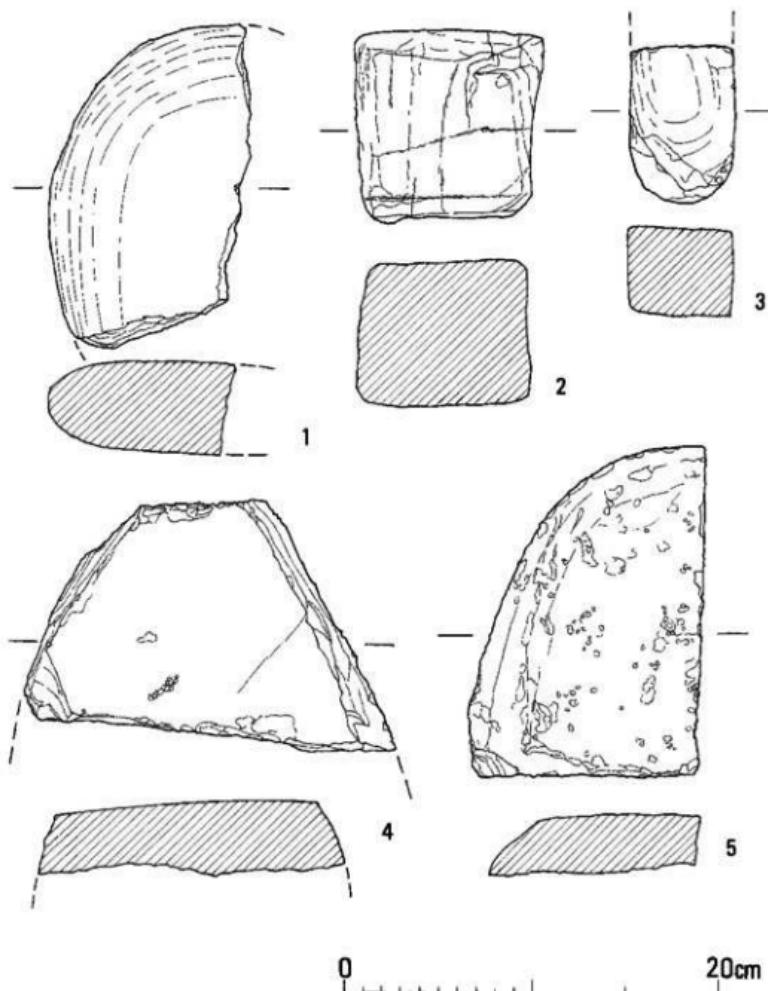


図58 A区出土石器2（砥石、水晶塊）

cm、最大幅5.3cm、厚さ4.5cm、重量538gで砾を利用している。先端部に打痕があり、敲石として使用したと考えられる。3はA-5×3層出土。上半部が欠失している。現存長11.5cm、最大幅9.0cm、厚さ4.7cm、重量575g、砾を利用した敲石であろうか。4はA-10×2・3層出土。下面が欠失している。長楕円形の砾で、長さ15.7cm、最大幅5.9cm、厚さ4.5cm、重さ756g、中央部に5×4.6cm、深さ5mmの長楕円形の窪みがあり、裏面にも窪みがあるが確認できない。

A区出土石器 2 (図58-1~5)

1はA-5区茶褐色砂岩出土。長さ14.5cm、幅10.0cm、厚さ4.9cm、重さ1501g。上下面は平坦で研磨痕がある。恐らく粗砥として利用したのであろう。2はA-13×2層から出土した。直方体で縦8.2cm、横8.1cm、高さ7.7cm、重さ1520g。上下・側面に研磨痕がみられる。これも砥石として利用されたのであろう。3はA区住居跡出土。長さ8.5cm、幅5.7cm、厚さ4.7cm、重さ397g。平面形は石斧のような形をしているが断面は方形である。両側面と底面には研磨痕があり砥石として用いたのであろうか。4はA-12×2・3層出土。長さ12.7cm、最大幅18.8cm、厚さ4.0cm、重さ1200gで台形をしている。表面は研磨され裏面は剥落している。本来は粗砥として使用されたのであろう。5はA-13×2層出土。長さ10.4cm、最大幅7.3cm、厚さ3.0cm、重さ1010g。楕円形を四分割した形をしている。表面は研磨を受けているが下面は剥離した面となっている。粗砥として使用されて

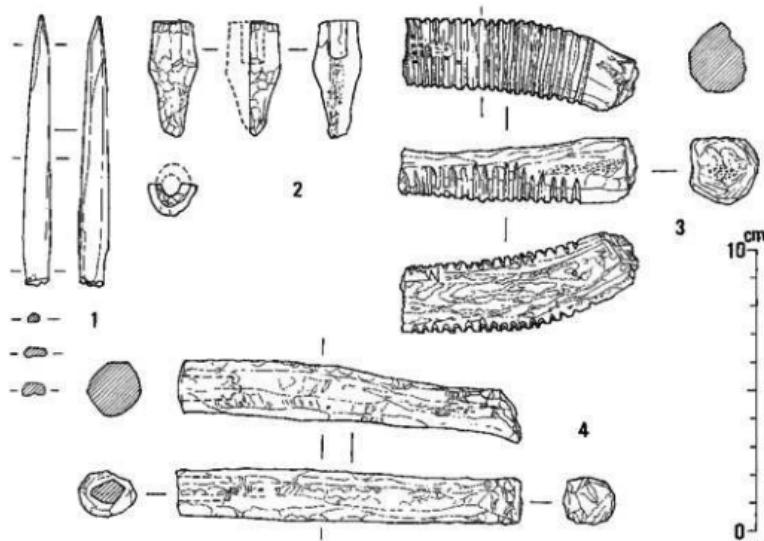


図59 A区住居跡（工房？）出土骨角器

いたのであろう。

A区住居跡「工房？」出土：骨角器（図59、図版79～82）

刺突器（図59-1）。A区住居跡北西区出土。骨製、長さ9.5cm、最大幅1.0cm、最大厚さ0.4cm、重さ4.45g、基部が折損している。先端部は表裏とともに二方面から斜めに面を取り尖らせていている。基部には一側面にのみ削りを入れている。断面図で明らかなように基部に近い部分が厚さが薄く、中央部分が厚みがある。これは骨髓部分を削り取った為で、中央部分の断面が歯状をしている。下面に僅かに見える溝みが骨髓にあたる部分なのであろう。

不明骨角器（図59-2）。A区住居跡南東区出土。骨製。長さ4.0cm、最大幅1.8cm、最大厚さ1.0cm。半分に割れていると考えられる。主体部先端は細かく削って整えられ、体部にも面取りが見られ、基部は鈍く尖り、細かに削り込まれている。主体部には径7mm、深さ1.3cm強の半円形の穴がある。本来的には径7mm、深さ1.3cmの円筒形で何かを挿入するための穴なのであろう。穴は髓の海綿状の部分に彫られているが、内面には付着物はない。

骨角器刀子柄（図59-3、図版79・80）。A区住居跡西南区出土。鹿角製。長さ8.2cm、最大幅2.3cm、最大厚さ2.6cm。刀子茎の挿入部は消失して、鹿角が火で焦げている。基部はやや弯曲して、小口部分に切断痕があり、三方から切られているが断面が階段状で鋭利に切断されているとはいえない。一面には滑り止めの溝が切られ、断面V字状の刻みが20箇所に見られ、幅も深さも間隔も一定していない。反対の面には鹿角の表文がみられ、全体に摩耗している。また、全面に艶があり充分に使用されたことを物語っている。手にした場合に掌に密着する感があり、尖用品として充分に機能していたといえる。

骨角器刀子柄（図59-4、図版81・82）。A区住居跡西南区出土。骨製。長さ12.1cm、幅1.7cm、厚さ2.0cm、32.5g。光形品である。茎挿入孔は髓の海綿状部分に、半而形径0.9×1.2cmの変形した梢円形、深さ1.9cmに彫られているが、内面に付着物はない。孔の底面に小さな穴があるが意図的に彫られたかどうか解らない。

全体に丁寧に削られ、背部は腹部の緩やかな線に比較して傾斜をつけて削り込み、末端部分で水平にして小口に達している。腹部の線は逆に殆どをほぼ水平に削り、端部で角度をつけて小口にしている。小口は斜めの面をつくり、背部側は細かに削って整えている。茎の挿入孔がやや浅く未完成の感がある。柄は全体として手で握った場合に掌に密着するような配慮がみられる。これらの骨角器は5世紀台の遺物と考えられる。

土製品玉・土鍤（図60）

土製品玉（図60-1）。A-5区2層出土。径2.2×2.2cm、厚さ1.3cm、孔は扁円形で径2.8×4.5mm、

下は径 2.5×2.5 mmで、一方から穿孔している。厚さは孔の周辺部で僅かに薄く、指を丸めて周囲を整え、上下面を指の平で押さえて成形したと考えられる。器壁は明褐色、胎土は精良で焼成も良い。側面に長さ1.0cm、最大幅3mmのヘラ痕がある。

土製品土錘 (図60-2~7)。2はA-4区1層出土。完形品。長さ2.6cm、小口径 2.5×2.6 cm、最大径3.0cm、重さ32.3gである。孔は梢円形で 3×6 mm、反対側の孔径は8mmである。両小口に植物の茎らしい压痕がある。器体は黒色、胎土は良く焼成も良い。3はA-7区4層出土。完形品で、長さ1.4cm、小口径 2.5×2.6 cm、最大径2.9cm、重さ45.0gである。孔は梢円形で 6×7 mm。器体は淡褐色で一部黒色、胎土中に砂粒が含まれ焼成はやや弱い。4はA-10区3層上部出土。折損品で約1/2が欠失していると考えられる。長さ3.5cm、小口径 2.3×2.5 cm、最大径2.8cm。孔径は梢円形で 4×7 mm。器体は灰白色、胎土は良いが焼成は弱い。5はA区住居跡東北区出土。完形品で長さ6.0cm、小口径 2.0×2.2 cm、最大径2.7cm、重さ45gである。孔は円形に近く 5×6 mmで一方から穿孔している。器体は茶褐色で一部が黒色、胎土・焼成とともに良い。6はA-5区3層出土。完形品で長さ5.6cm、小口径 2.5×3.1 cm、重さ54.8gである。孔は円形に近く径は6mmで一方穿孔している。器体は灰褐色で一部黒色、胎土中に小砂があり焼成はやや弱い。7はA-6区3層出土。半折品。長さ4.9cm、復原長6.9cm、小口径 1.5×1.6 cm、最大径2.2cm、小口から1.2cmの位置に径 5×5 mmの孔が器体に直角に開けられている。器体は灰白色、胎土は良いが焼成はやや弱く表面に剥落が見られる。この土錘は調査資料として唯一の資料である。

すべての土錘は粘土を掌で何度も握りしめて成形し、小口を整えた後に穿孔し焼成したか、また

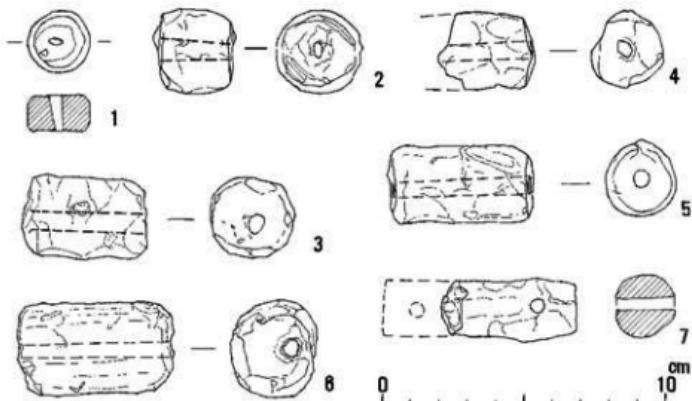


図60 A区出土土製品（玉・錘）

は心棒に粘土を巻き付けて握りしめて成形し、心棒を抜き去ってから小口を整えて、乾燥後に焼成したとも考えられる。

A区山上骨角器 (図61)

不明骨角器 (図61-1)。A-9区1層出土。骨製。図59-2で紹介した骨製品と同形態の遺物である。長さ2.0cm、最大幅1.15cm、最大厚さ8.5mm。半分に割れた状態と考えられる。主体部先端は削り込まれて尖り半円筒形。長さ1.6cm、幅8mmの半円筒形の彫り込みがある。割れた面を見るとき起部の付け根に向側から小さな切り込みがある。主体部にある半円筒形の彫り込み部分には付着物は見られない。半分に割れた状態と考えて復原すると、円筒形の主体部と尖った先端部からなり、柄をつけて刺突具としての用途が考えられる。しかし、同一形態で2個体出土するとこのままの形で光形品ではないかとも考えられる。その場合の用途は不明である。

不明骨角器 (図61-2)。骨製。A-3区3層出土。光形品。長さ2.7cm、最大幅1.2cm、砲弾形をしている。上面は径 1.2×1.2 cmのやや面のある円形で、径9×9mm、深さ1.2cmの円筒形の彫り込みがある。先端部分は細かく削って整え、主体部は全体に沿って削りが見られる。円筒形の彫り込みに付着物はない。

骨角器未製品 (図61-3)。A-6区2層出土。骨製、半折品。長さ2.7cm、最大幅1.0cm、厚さ7mm、断面形は変形の五角形である。平面形は鎌に類似して三面から削り先端を尖らせてあるが、下面は未成形で一部に焦げた部分がある。鐵の未製品であろうか。

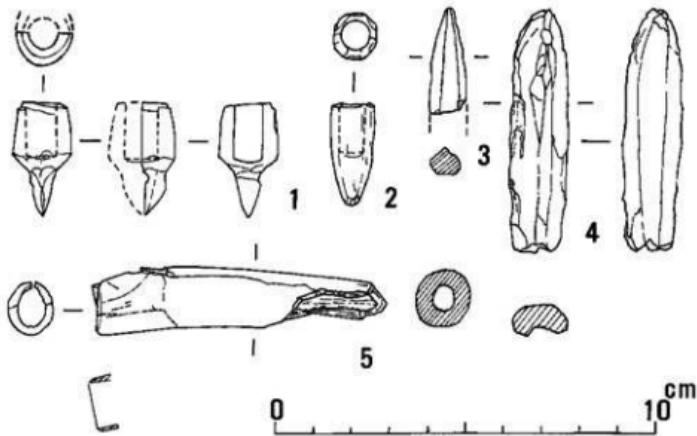


図61 A区出土骨角器

骨角器未製品 (図61-4)。A-13区2層出土。長さ6.4cm、最大幅1.5cm、厚さ8mm。断面は半環状で、下部には骨髓の海綿状部に当たると考えられる凹部がある。下端部は折れた面があり、先端は鈍く尖っており下端部よりもやや幅が広くなっている。上面は大きく分けて三面、下面は髓部分の四面は加工がよんのでないで二面に加工されている。恐らく骨鏃を意図して加工が行われていたと考えられる。

骨角器刀子柄 (図61-5)。A-11区3層。骨製品。長さ7.6cm、最大幅1.6cmで一部が折損している。左側約2.1cmに明らかに加工した痕跡を見ることができる。茎の挿入孔は加工痕のある側で、縦1.1cm、横7mmの挿入孔を設け、孔の周囲の骨を薄く削り加工している。挿入孔の深さは断面図で明らかのように茎 6×8 mmの孔があり、柄の末端部まで続いているので明らかにできない。骨髓の海綿状部分に加工を加えたのであろうが、折損し海綿状部分が風化したために、孔が貫通した状態になったのであろう。

A区出土装身具 (図62)

金環 (図62-1)。A-9区1層出土。小形のもので、外径1.8×2.0cm、厚さ6mm、6.2g。断面は梢円形。青銅芯に金鍍金をしている。

管玉 (図62-2)。A-6区2層出土。碧玉製。緑色、径4.25×4.15mm、孔径2.2mm、他方の径は4.2×4.15mmで孔径2.2mm、長さ1.5cm、重さ0.38308g、全面に艶がある。出土層位からすると古墳時代の遺物である。

A区出土铁器 (図63)

有機質の混じった砂層から出土する鉄器は、錆に砂が付着して塊状で出土することが多い。錆の除去作業は困難な作業で、実体を把握することが難しいことがある。

鉄器刀 (図63-1)。A-5区2層出土。

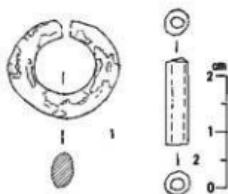


図62 A区出土装身具 (金環・管玉)

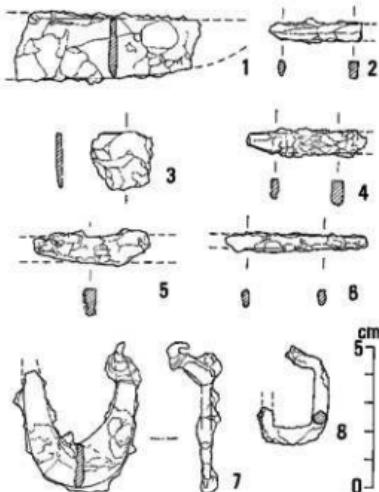


図63 A区出土铁器 (刀その他)

鉄刀の小片で、長さ6.3cm、最大幅2.5cm、厚さは鋸のために全体に薄くなり、最も厚いところで3mmである。形態から切先に近い部分と考えられる。

鉄鎌（図63-2～6）。3はA-5区2層出土。長さ2.2cm、幅2.0cm、厚さ2mm、鎌身であろうか。2はA-7区2層出土。鉄鎌の茎、長さ2.3cm、幅0.6cm、厚さ3mmである。4はA-6区3層出土。鉄鎌の茎、長さ4.1cm、幅9mm、厚さ4mmである。5はA-11区3層出土。鉄鎌の茎。長さ4.1cm、幅9mm、厚さ4mm。6はA区住居跡西北区山上。鉄鎌の茎。長さ5.0cm、幅5mm、厚さ3mm。

不明鉄器（図63-7・8）。7はA-4区3層出土。反さ5.0cm、幅4.0cm、厚さ4mm、外縁に刃がついているとは考えられない。全体にU字型をした鉄器であるが、側面図で明らかなように、右側部分が折れ曲がり先端が鉤状に曲がっている。8はA-6区1層出土。長さ3.0cm、幅2.5cm、厚さ5mm、断面円形である。本来は長方形の鉄器が折損したのであろうか。

D区（図64、図版83・84）

D区はA区東端部から約10m北、舌状の地形に5m前後の西向きの崖として取り残された地点で、相当部分が土取りによって破壊されていた。遺物が多く包含されている場所を選んで、南北に3m、東西に2mの調査区を設定して調査を行った。

断面図（図64）で明らかなように、複雑な状態を示しており遺物は主に第1層暗褐色土層とこの層に掘り込まれた袋状ピットから出土した。

第1層は暗褐色土層で水準は最高所で642.0cm、厚さ25.0～73.0cmで、多くの上師器・須恵器、炭・灰、獸骨などを含んでいた。南半部に上面幅140.0cm、下面幅175.0cm、深さ58.0cmの袋状の掘り込みがある。奥行きは73.0cmであるが、平面形はまとまりがない。この掘り込みは青灰白色砂上が充満し、強い熱を受けたかのように考えられた。その中に黄褐色粘土塊（C）を含む層が2層あり、赤褐色の岩塊（S）がみられ、土器片も含まれていた。またこの掘り込みに接して緑色の砂質粘土があり、南半部の最下層には幅125.0cm、厚さ14.0cmの斑文ある白色砂土層があり、中央から北寄りに2箇所の掘り込みがある。最も北にある片面を2段に掘り込んだピットでは火を受けた粘土や貝殻、獸骨、魚骨などを見ることができたが、平面的な調査は行っていない。

第2層は赤褐色粘土層で、厚さ46.0～73.0cm、北に向かって厚さを増している。この層の様相も複雑で第1層の2段に掘り込んだピットの底面に近い南側にレンズ状に堆積した層が見られる。淡褐色土層（p）の下に、白味を帯びた褐色土層（w）、さらに黒味を帯びた褐色土層（b）が堆積している。第3層に近い部分にはやや白味を帯びた土層（w）がある。第3層は黝黑色～黝褐色砂土層で、厚さ10～40cmで比較的平坦な層である。石塊（S）を含み、南端部に貝片・貝粉を多く含む層がある。

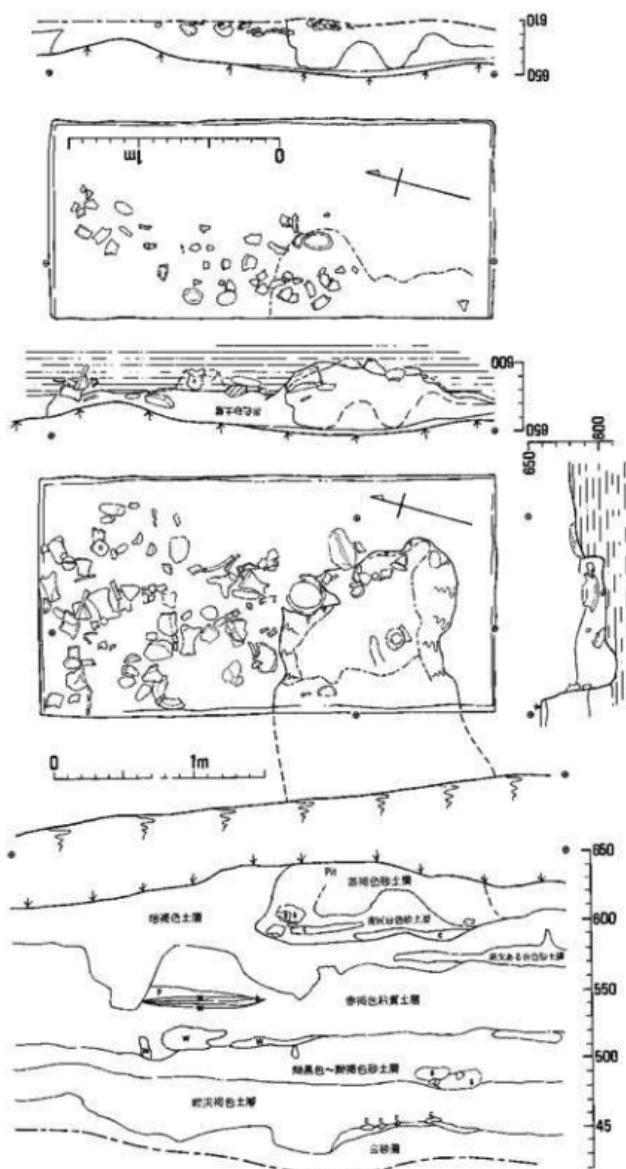


図64 D区平面・断面図

第4層は暗灰褐色上層で、厚さ22.0～37.0cmで中央部分が低くなり、掘り込みらしき溝があるが平面的には確認していない。この南に淡褐色砂上層が薄く広がり、上面に粘土塊（C）がみられた。

第5層は白色砂層で他の地区で主に弥生時代人骨を包含する層に該当すると考えられる。

D区は七器が第1層から集中的に出土し、あたかも七器溜の様相をなしていた。復原可能な上器は殆ど含まれず、復原して全体を窺うことができる土器は極めて少數である。また包含層自体が火を受けたようで、固く焼き絞った感があった。

D区出土上器（図65～69）

須恵器・土師器が集中して出土したが、ほとんど1層・1層内のピット状遺構から出土した上器で、復原可能な七器は少なく、須恵器では壺形土器が殆ど出土していない。特に注記しない土器は1層出土の上器である。

須恵器蓋坏（図65-1～8）。身受の無いもの（2～5）、つまみの有るもの（1・6～8）に分類できる。1は身受が有りつまみの無い型で、口径9.0cm、器高3.5cm、身受の立ち上がりは短く太い。受部も同様で整った形態をしている。器壁は灰鼠色、胎土中に微細粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部は内外面ともに横ナデ、天井部はヘラ削りの後にナデを行ない部分的に板日がある。内面底部は縦ナデである。2は身受が無いもので、口径10.3cm、器高3.9cm、口縁部は良く立ち、口脣部は丸味を持っている。器壁は青鼠色、胎土中に砂粒が含まれ燒成は良いが焼き歪みがある。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、天井部はヘラ削りの後にナデつけをしている。内面天井部は縦ナデ。天井部に窯印があり、ノ字の様に右下がりの斜線が交差せずに2回に分けて引いてある。3は口径9.3cm、器高4.3cm。口縁部がやや開いている。器壁は青鼠色、胎土に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、天井部はヘラ削りの後にナデ、内面天井部は縦ナデ。4は口径12.3cm、器高4.0cm、大型で口縁部は直立に近い。器壁外面は黒青鼠色、内面は青鼠色、胎土は精良で焼成も良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外側の天井部はヘラ削りである。5は口径18.1cm、器高4.5cm。口縁部はやや開き器壁は薄い。器壁は外面は黒鼠色、内面は青鼠色、胎土中に砂粒を含んでいるが焼成は良い。口縁部外面は横ナデ、天井部はヘラ削り、内面はすべて横ナデである。内面天井部に矢状の窯印がある。1～5は7世紀前半の土器である。

6は宝珠型つまみを持つ蓋坏である。口径13.9cm、器高3.8cm、口縁部が身受として直角に折れ曲がっている。器壁は青鼠色、胎土中に砂粒を含んでいるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外側天井部はヘラ削りでつまみ部分はナデつけている。内面天井部は縦ナデである。

7は口径13.2cm、器高3.0cm。口縁部は僅かに外反している。器壁は青鼠色、胎土中に砂粒が含ん

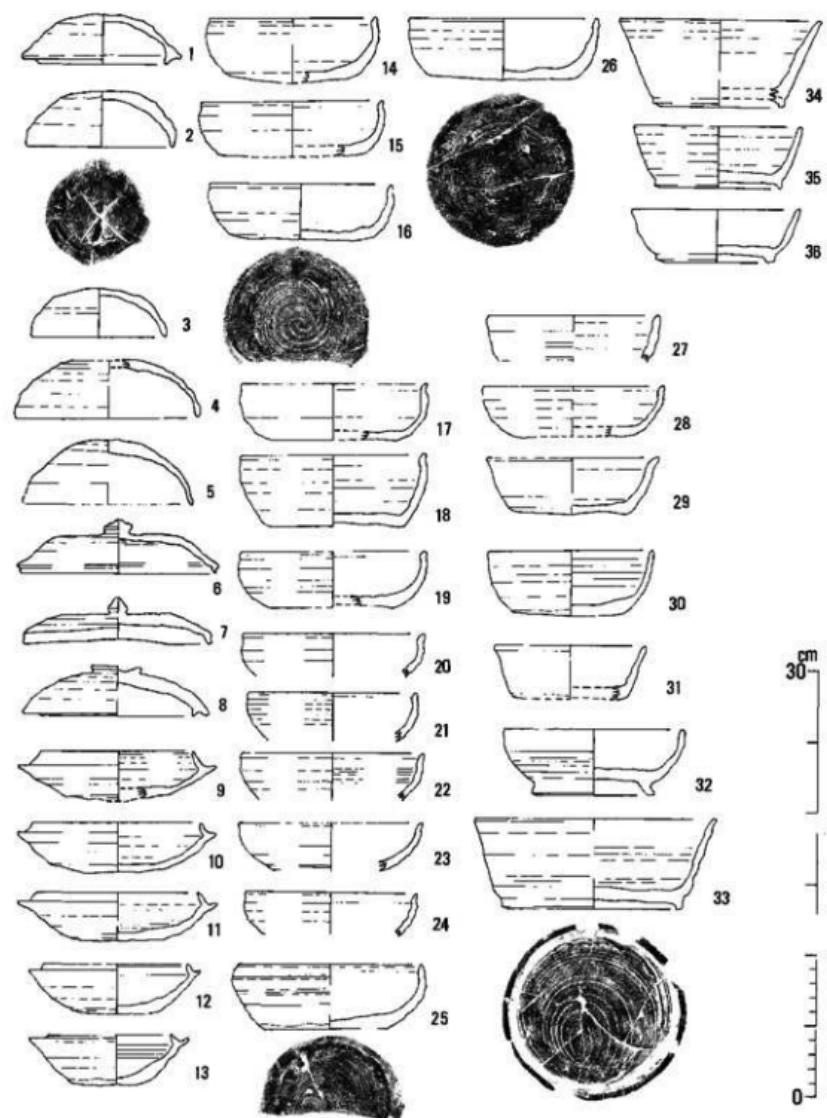


図65 D区出土土器I（須恵器1）

ではいるが焼成は良いが、焼き重みがある。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面はヘラ削りでつまみ周辺部はナデつけがある。内面天井部は縦ナデである。8は口径11.0cm、器高2.5cm。身受が有り環状のつまみが有る。身受の立ち上がりは短かい。器壁は厚く青鼠色、胎土中に砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部は内外面ともに横ナデ、外面の天井部はヘラ削り、つまみ部分はナデつけている。内面天井部は縦ナデである。6～8は7世紀後半の土器。

須恵器坏（図65-9～33）。蓋受けの有るもの（9～13）、蓋受けの無いもの（14～33）に分類できる。蓋受けの無いものには高台の無いものと、高台の有るものがある。9はピット状遺構内出土。口径11.0cm、推定器高3.6cm、蓋受けの立ち上がりは内傾して長く伸び、受部は僅かに斜めに上がっている。器壁は青鼠色、胎土も焼成も良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面底部はヘラ削りである。10は口径11.9cm、器高3.5cm。蓋受けの立ち上がりは内傾し、受部は横にほぼ水平に伸びている。器壁は青鼠色で外面に白い斑点状の自然釉がある。胎土は精良で焼成も良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、底面はヘラ削りで、内底面は縦ナデである。11はピット状遺構内出土。口径11.4cm、器高3.4cm。蓋受けの立ち上がりは内傾し、口唇部が薄く、外面が一段と内傾している。器壁は青鼠色、胎土中に小砂粒が含まれているが焼成は良く、一部に自然釉が見られる。調整は、口縁部の内外面とともに横ナデ、底面はヘラ削りで、内底面は縦ナデである。12は口径10.3cm、器高3.5cm、蓋受けの立ち上がりは内傾し短い。受部も同様に小さく短い。器壁は青鼠色、胎土中に微砂粒が含まれて焼成はやや弱い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、底面はヘラ削り、内底面は縦ナデである。13は口径8.8cm、器高3.5cm。蓋受けの立ち上がりは短く内傾し、受部は斜め上に伸びている。器壁は黒鼠色、胎土・焼成とともに良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、底部はヘラ削りで、一部にナデつけが見られる。内底面は縦ナデである。これらの坏は口径で大小に分けられ、口径の大きな坏は器高が低く扁平な感がある。7世紀前半の上器である。

蓋受けの無い坏は、高台の無いもの（14～31）と高台の有るもの（32～36）に分けられる。底部が欠失している坏もあるが、恐らく底部の成形技法が糸切りであることは共通していると考えられ、また高台の無い坏は口径の点で、極めて規格化されていることが指摘できる。15・18・20・22～27・30・33・34・36はピット状遺構内出土である。

蓋受けが無く高台の無い坏（14～26）は、14のように口径11.7cm、器高4.5cmと16のように12.7cm、器高3.9cmの群に二分できる。口径の大きな方は器高の点で16のように器高4.5cmと18のように器高5.0cmのやや深みのある型に分けることができる。しかし、口縁部は極めて共通しており口縁部が僅かに内湾しながら、口唇部が小さく外反していることである。器壁は黒鼠色・黒青鼠色・紫青鼠色・灰白鼠色などがあり、胎土中に微細砂粒を含んでいるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面とともに横ナデ、底面は糸切り技法で処理し、その間はナデつけている。これは糸切り後に行われた調

底である。内底面は縦ナデである。26～28は口縁部は直立に近く、口唇部は丸味をもっている。口径は26が13.0cm、27が12.0cmである。器壁は灰白紫鼠色・灰白鼠色・青鼠色、胎土・焼成とともに良い。調整は前者と同様である。29は口径12.2cm、器高3.9cmで、口縁部は緩く外反している。器壁は青白鼠色、胎土・焼成とともに良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、底面は糸切りでその間のナデは見られない。内面は粗い横ナデと底面の縦ナデである。30は口径11.8cm、器高4.6cm、口縁部は直立に近い。器壁は紫黒色、胎土は精良で焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデの痕跡が強く残り、底面は糸切りの後にナデ、内底面は縦ナデである。31は口径10.8cm、器高3.8cm、29と類似しているが口縁部に外反がみられない。器壁は青鼠色、胎土・焼成はともに良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデで底面は糸切りである。これらの上器は8世紀後半に位置づけられる。

高台の有る杯（32～36）は、口縁部が僅かに内湾する杯（32）と外に僅かに開く杯（33～36）に分けられる。32は口径12.7cm、器高4.6cm、器壁は灰黒鼠色、胎土・焼成は良い。調整は外面は高台近くまで横ナデ、高台は張付けたナデつけている。底面は糸切りである。内面も横ナデ、内底面は縦ナデである。33（図版87）は口径17.0cm、器高6.3cmの大型である。器壁は外面は灰褐色、内面は紅褐色、胎土は精良であるが焼成は弱い。調整は高台の外面まで横ナデ、高台は張付けている。内面は底面の一部まで横ナデで残りが縦ナデである。34は口径14.0cm、器高6.1cm。器壁は黒鼠色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。焼き歪みがある。高台の張付けが33とは異なる。調整は観察できる限り横ナデである。35は口径11.7cm、器高3.9cm。器壁は紫青鼠色、胎土は精良で焼成も良い。調整は高台の内面まで横ナデで底面は糸切り、内面も底面の一部まで横ナデ、底面は縦ナデである。36は口径11.8cm、器高3.7cm。器壁は黒鼠色、胎土精良で焼成も良い。調整は外面は高台近くまで横ナデ、底面は糸切りの後に縦ナデである。高台を持つ杯は調整方法が極めて類似している。横ナデが高台にまでおよび、張り付けた高台の痕跡を消す作業が行われている。32は7世紀後半。それ以外の杯は8世紀後半の土器であろう。

須恵器皿（図66-1～8）。1・5・6はピット状遺構内出土。1は口径13.8cm、器高2.8cm。口縁部は緩く開き口唇部は外傾した面となっている。器壁は紅紫褐色で一部は紅褐色である。胎土は精良で焼成は良いが焼き歪みがある。調整は杯と同様で、口縁部の内外面は横ナデ、底面は糸切りで処理し、中間部分はヘラによるナデつけである。内面は横ナデ、底面は縦ナデで処理している。5が口径14.0cm、器高2.8cmで同じ形態の上器である。2・3・4は口縁部が緩く外反するもので、2は口径14.8cm、器高2.3cm、凹底状をしている。器壁は黒鼠色、胎土は精良で焼成は良いが焼き歪みがある。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、底面は糸切りでその中間は軽いヘラ削りである。内底面はナデしている。3はやや小形で12.7cmで外面調整の横ナデと底面の糸切りの中間にヘラでナ

つけである。4は大型で、口径16.4cm、器高2.9cm、器壁は灰白青色、胎土中に微細な砂粒が含まれ、焼成がやや弱い。

6～8は高台の有る皿で、6は16.0cm、器高3.4cm。口縁部は開き、口唇部は丸味がある。器壁は青鼠色、胎土は精良で焼成も良い。調整は外側は口縁から高台の内側まで横ナデし、底面は糸切りである。内面は底面近くまで横ナデ、内底面は綫ナデである。高台部は張付けの後にナデを行い、さらに横ナデで整えたといえる。7は口径19.5cm、器高3.2cm、器壁は灰白色、胎土中に微細な砂粒が含まれているが、焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、高台部も同様に調整し、その中間は高台の張付け痕が観察できる。8は口径19.8cm、器高3.3cmで最も大形である。いずれも8世紀後半の土器である。

須恵器盤（図66-9・10）。9は一部がピット状遺構内出土。9は口径23.7cm、器高3.6cm。口縁部は高台からすぐに立ち上がり僅かに開き、口唇部は小さく外反し、つまんだように薄い。全体に器壁に厚みがあり重量感がある。灰鼠色、胎土は精良で焼成も良い。調整は口縁から高台まで横ナデ、高台部は張付け痕がみられ、底面には轆轤の回転痕がある。内面は横ナデ、内底面は綫ナデである。10は口径21.8cm、器高4.0cm。口縁部は高台から緩く開き、口唇部はやや尖り気味になっている。高台の端部も丸味がある。器壁は灰青鼠色、胎土中に微細な砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、高台部分も横ナデ、その中間に張付け痕が見られる。内底面は綫ナデである。ともに8世紀後半の土器である。

須恵器高坏（図66-11～18・21）。21が坏部で他は脚部である。蓋受けの無い低脚の高坏である。12・13がピット状遺構内出土。

11は坏部が欠失している。脚端部径は10.7cm、脚高は5.2cm、末端部は丸味をもっている。長方形の透かしが一对ある。器壁は青鼠色、胎土・焼成とともに良い。調整は坏部底面は綫ナデ、外側は脚部接合のための張付け痕あり。脚部内外面ともに横ナデである。12は坏部の大部分と脚根部が欠失している。脚部には2本の沈線があり、沈線の上方にヘラによる線状の透かし、下方に長方形の透かしがそれぞれ一对ある。器壁は黒鼠色、胎土中に砂粒が含まれるが焼成は良い。調整は脚窓の張付け痕と横ナデである。13も同様な破片であるが、坏部の広がりは小さい。長方形の透かしがある。14の脚端部径は10.0cm、脚高は6.3cm。脚端部は上下に肥厚し、凹面をなしている。二角形の透かしが3箇所にある。器壁は青鼠色、胎土は精良で焼成も良い。調整は脚部張付け痕が残り、脚内外面は横ナデである。15は脚端部径11.7cm、脚高9.0cm。脚端部は下端が垂直に伸びて立っている。1・2・1条と凹線があり、上の1条の凹線を切るようにヘラ描きの綫の透かし、中央の2条と下方の1条の凹線の間にもヘラ描きの綫の透かしがある。坏部底面・脚の外側に自然釉が見られる。器壁は灰緑色、胎土・焼成とともに良く、調整は脚部の張付け痕、脚部内外面の横ナデが見られる。

る。16は脚端部径11.0cm、脚高9.3cm。脚は良く開き、脚端部は上下に肥厚し凹面が見られる。脚中央部に凹線があるが透かしはない。器壁は青鼠色、胎土中に微小な砂を含んでいるが焼成は良い。調整は脚接合部に張付け痕があり、脚内外面は横ナデで、坏部には縦ナデが観察できる。全て7世纪前半の上器。

17は小型高坏で端部幅径は8.0cm、脚基部は膨らみを見せながら開いている。器壁は青黒鼠色、胎土は精良で焼成も良い。18は脚端部径9.0cmで良く開いている。器壁は青鼠色、胎土は精良で焼成も良い。調整は脚部接合部の張付け痕と脚部内外面の横ナデが観察できる。2点は7世纪前半の下器。21は坏部で口径13.8cmで17縁部は直立に近く17底部部は丸味をもっている。沈線が1条あり、

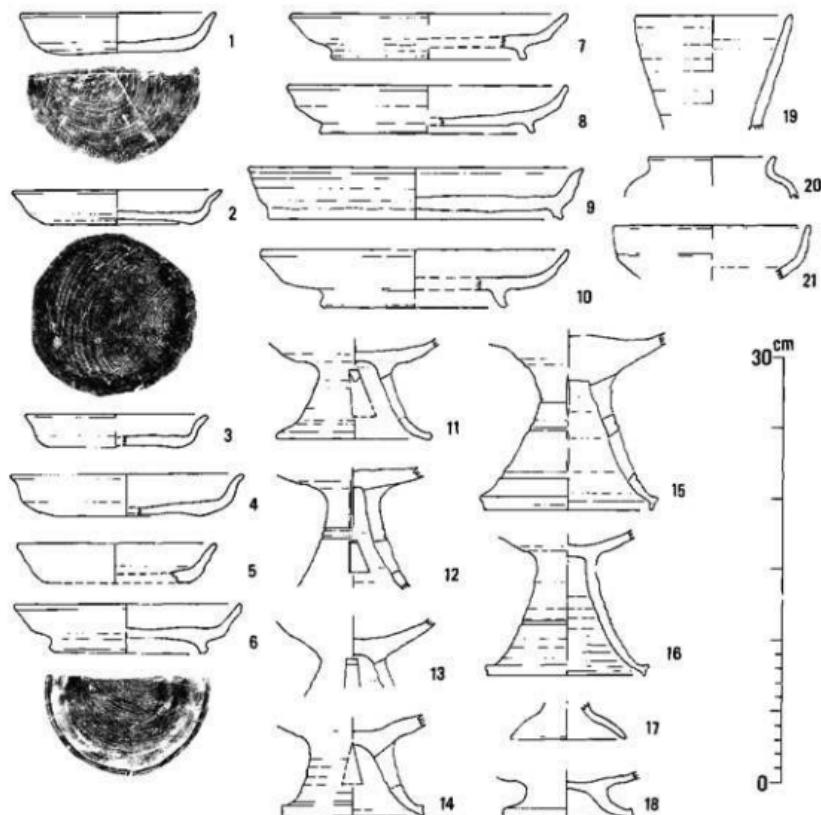


図66 D区出土土器II（須恵器2）

器壁は黒鼠色、胎土精良で焼成も良い。調整は横ナデ。高脚高壺の壺部であろうか。時期不明。

須恵器直口壺（図66-19）。口径11.0cm、肩部で折損している。口縁部は開き、口唇部は鈍く尖っている。器壁は青鼠色、胎土中に小砂があるが焼成は良い。調整は横ナデである。7世紀前半の土器。

須恵器小型短頸壺（図66-20）。小さな破片、口径8.9cm。口縁部が僅かに開いている。器壁は青鼠色、胎土・焼成ともに良い。調整は横ナデ。時期は不明である。

土師器（図67-68・69、図版85・86）

蓋壺・壺・壺・甌・羽釜・鉢・瓶が出上している。図67では2・4・11・12・13、図68では3・6・11がピット状遺構から出土している。

土師器蓋壺（図67-1）。1は土師器蓋壺で宝珠形つまみを持つ須恵器蓋壺を模倣した土器である。推定口径15.8cm、推定器高2.8cm。同種の須恵器から身受は無く、口唇部が直角に折れ曲がると考えられる。丹塗り上器で胎土は白色、胎土中に細砂が含まれているが焼成は良い。調整は丹塗りであるために充分に観察できないが、天井部は軽いヘラ削りが行われた後に横ナデが行われている。8世紀後半の上器。

土師器壺（図67-2）。口径10.7cm、器高4.0cm。小型で口縁部の開きは少ない。口唇部は鈍く尖り、丸底である。器壁の外面が丹塗りで内面は灰白色、胎土中に微細な砂を含み焼成はやや弱い。調整は底部から口縁部に向けて軽いヘラ削りが行われ、内面は口唇部を除いて全面に横方向のヘラ削りが短く行われている。時期不明。

土師器壺（図67-3・4）。3は口径13.5cm。口縁部は外反して開き、口唇部は丸味を持っている。肩部の張りは少ないと考えられる。器壁は明淡褐色、胎土には微細な砂が含まれており焼成はやや弱い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、肩部内面は横方向の短いヘラ搔取りがみられる。4は口径12.7cm。口縁部は僅かに開き、口唇部は薄くやや尖り気味である。口縁部内面と外面は丹塗りで、胎土自体が白灰色で微細な砂を含んでいるが焼成は良い。外面の調整は丹塗りで観察できないが、肩部内面は横方向に長い幅広のヘラ搔取りが見られる。3は6世紀後葉から7世紀、4は6世紀後半の上器。

土師器甌（図67-5～13、図版85）。小型・中型甌を図示した。全形を窺い知る事ができる程度に復原できたのは13のみである。口縁部の形態は様々で、肩部の張りは13を除いて少なく、底部は丸底と考えられる。調整は横ナデ、ハケ目、ヘラ搔取りが行われている。

5は口径23.5cm。口縁部は良く伸びて開いている。口唇部は僅かに折れ曲がり、口唇は丸味をもち、肩部の張りは少ない。器壁は明淡褐色、胎土中に小砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁

部は内外面とも横ナデ、外面は縦方向のハケ目と続き、内面は短い横ナデが見られ、極めて珍しい調整を行っている。6は口径23.4cm。口縁部は良く伸び大きく開き胸部の張りは殆どない。器壁は茶褐色、胎土中に砂粒が多いが焼成は良い。調整は口縁部は内外面ともに横ナデ、外面は斜め方向

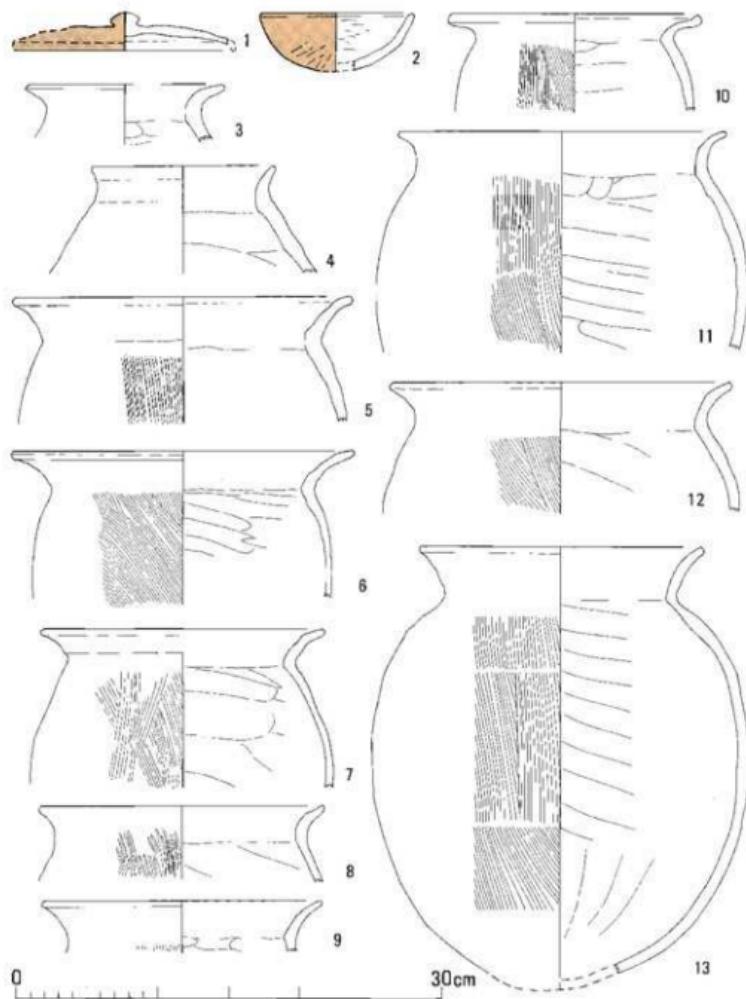


図67 D区出土土器III（土師器1）

のハケ目で整え、内面は横方向のヘラ搔取り、その下方はヘラ搔取りの後にナデを行い、搔取りの痕跡を消している。これも稀な調整である。7は口径19.7cm。口縁部は良く開き、5と同様に口唇部が折れ曲がっている。口唇は僅かな稜をもつが丸い。胸部の張りは少ない。器壁は淡茶褐色、胎土中に小砂粒を含み焼成はやや弱い。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、外面は斜め方向のハケ目が交差し、内面は幅の広い横方向のヘラ搔取りが行われている。8は口径19.7cm。口縁部は僅かに開き、口唇部が僅かに立ち、胸部の張りは少ない。器壁は淡褐色、外面はやや黒味を帯びている。胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は斜め方向の粗いハケ目、内面は緩い斜め方向の幅広のヘラ搔取りが見られる。9は口径19.5cm。口縁部は緩く開き、口唇部は丸味をもち、胸部の張りは殆どない。器壁は淡褐色、胎土中に小砂が見られ焼成はやや弱い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面は横方向の短いヘラ搔取りである。10は口径17.4cm。口縁部は開き、口唇部は丸味があり上に肥厚している。胸部の張りは少ない。器壁は淡黒色、胎土中に小砂が含まれ焼成はやや弱い。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、外而是縦・斜め方向のハケ目、内面は横方向の長い搔取りである。11は口径22.7cm。口縁部は開き、口唇は丸味をもっている。胸部の張りは小さい。器壁は明淡褐色で一部黒色である。胎土中砂粒が多く含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外而是縦・斜め方向のハケ目、内面は口縁に近い部分は横方向の短いヘラ搔取りで、それ以下は横方向の長い搔取りである。12は口径23.4cm。口縁部は大きく開いている。胸部の張りは小さい。器壁は淡茶褐色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外而是斜め方向のハケ目、内面は斜め上方方向のヘラ搔取りが丁寧に行われている。13(図版85)は壺形上器で底部は欠失しているが、唯一全体を知ることのできる資料である。口径19.6cm、胸部最大径26.3cm、現存器高30.4cm、推定器高31.7cmである。底部は欠失しているが丸底か平底の痕跡が残る程度と考えられる。口縁部は開き口唇部は丸味のある面となっている。胸部は張って倒卵形をしている。器壁は灰白褐色で胎土中に小砂が含まれ燒成はやや弱い。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、外而是胸部まで縦方向のハケ目、底部は斜め方向のハケ目で整えている。内面は底部は下から上方に向へるによる搔取り、胸部以上は左斜め上方へのヘラ搔取りが丁寧にされている。壺形上器は全て6世紀後半から7世紀にかけての土器である。

土師器(図68、図版86)

人形壺・羽釜・鉢を図示した。3・6・11がピット状造構山上器である。

土師器壺(図68-1~7)。1は口径32.2cm。口縁部は開き肉厚で、口唇部は丸味のある面となっている。胸部の張りは余り強いとは考えられない。器壁は淡黒褐色で内面は明茶褐色、胎土中に小砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外而是斜め方向の粗いハ

ケ目である。内面は横方向に幅広のヘラ搔取り、その後に横ナデを行っている。2は口径33.3cm。口縁部は開いている。胸部の張りは強いとは考えられない。器壁は外面は茶褐色、内面は紅褐色、胎土中に砂粒を含んでいるが焼成は良い。調整は口縁部は内外面ともに横ナデ、外面は粗い斜め方向のヘケ目、内面は細かくつなぐ横方向のヘラ搔取りである。3は口径30.4cm。口縁部は大きく開き口唇部は稜のある面となっている。器壁は明茶褐色で一部淡黒色、胎土中に小砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は太く粗いハケ目が継・斜め方向に走り、内面は幅太のヘラ搔取りが斜めに行われている。4は口径28.1cm口縁部は開き、口縁部内面は凹凸を繰り返している。胸部の張りは小さいと考えられる。器壁は灰白淡褐色、胎土中に小砂粒が多く含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は縱方向のハケ目で整えられ、内面は横方向のヘラ搔取りである。5は口径31.3cm。口縁部は大きく開き、口唇部は丸味をもっている。器壁は淡黒色、胎土は砂粒を含み焼成はやや弱い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、内面は横方向のヘラ搔取りである。6は口径29.5cm。口縁部は大きく開き、口唇部は薄く丸味を帯びている。器壁は外面は淡黒色、内面は紅褐色、胎土中に砂粒が多く焼成はやや弱い。調整

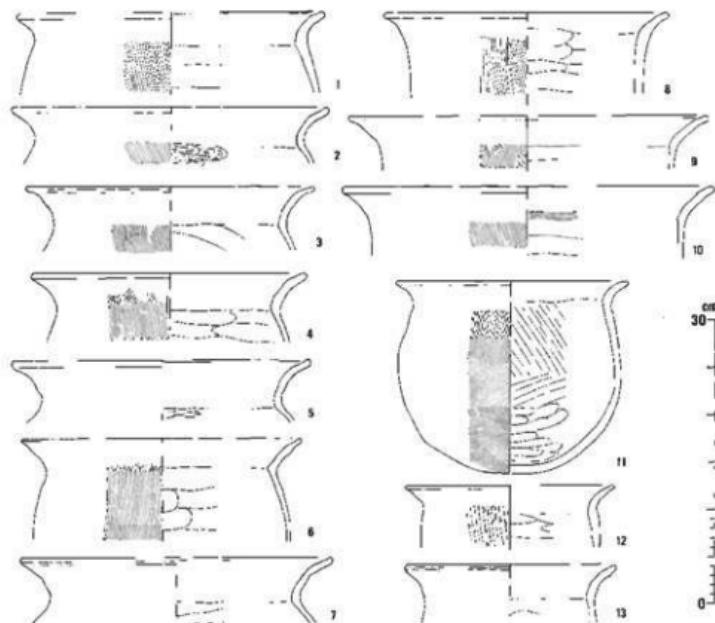


図68 D区出土土器IV（土師器2）

は口縁部は内外面ともに横ナデ、外面は太く粗いハケ目、内面は横方向に幅太のヘラ搔取りを行っている。7は口径32.5cm。口縁部は大きく開いている。器壁は外面は淡褐色、内面は淡黒色。胎土に砂粒を含み焼成やや弱い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、内面は横方向のヘラ搔取りである。これらの壺の口縁部の多様さは製作時の粘土接合面の処理によるものと考えられる。調整は口縁部の横ナデ、外面のハケ目と内面のヘラによる搔取りが共通している。6世紀後半から7世紀の上器であろう。

土師器羽釜（図68-8～10）。8は口径29.3cm。口縁部は開き肉厚である。胴部の張りは殆どない。器壁は淡茶褐色、胎土に砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部内外面ともに横ナデで、外面は斜めに粗いハケ目があり、内面は横方向のヘラ搔取りである。9は口径37.4cm。口縁部は大きく開き、口唇部内面に凹線がある。胴部の張りは全くない。器壁は茶褐色、胎土に小砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は斜め方向のハケ目、内面は横方向の丁寧なヘラ搔取りである。10は口径38.2cm。口縁部は開き肉厚で、胴部の張りはない。器壁は淡茶褐色、胎土には砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデで、一部にハケ目が残っている。外面はハケ目、内面は丁寧な横方向のヘラ搔取りである。大型で口縁部は開き胴部の張りは全くない。調整は口縁部は横ナデ、恐らく内面は横ハケ目調整の後に横ナデを行い、外面はハケ目、内面はヘラ搔取りで製作している。6世紀後半から7世紀の土器であろう。

土師器鉢（図68-11～13、図版86）。13はD区出土の遺物で復原できた唯一の上器である。口径23.5cm、胴部最大径23.4cm、器高20.0cm。口縁部は弯曲しながら開き、口唇部は丸味がある。口縁部下に粘土の接合痕であろうか小さな段が見られる。胴部は僅かに張り、丸底である。器壁は淡褐色、胎土には砂粒が含まれているが焼成は良い。全面に煤が付着している。調整は口縁部の内外面はともに横ナデ、外面は胴部までは継・斜めのハケ目で整え、底部になると横方向を主体としながらも、継・横方向のハケ目を短く施している。内面は底部が緩やかな斜め方向のやや幅広のヘラ搔取り、胴部から上方は方向を変え斜めの細かで丁寧なヘラ搔取りを行っている。12は口径11.4cm。口縁部は開き、口唇部は薄く丸味をもっている。外面には凹凸があり粘土接合の痕跡を残しているといえる。器壁は淡茶褐色、胎土には中・小砂粒が多く含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は太く粗いハケ目、内面は横方向のヘラ搔取りである。13は口径11.7cm。口縁部は開き口唇部は反転し、口唇に凹面が見られる。器壁は淡茶褐色、胎土に中砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ内面は横方向にヘラで搔取り、その後に横ナデを行っている。基本的に調整は甕の場合と異なるところはないし、口縁部の形態も良く類似している。6世紀後半から7世紀の土器である。

土師器瓶 (図69-1~6)。1は口径24.6cm。牛角把手一对がある。口縁部は断面で見ると蛇頭形をしている。粘土の接合の痕跡であろう。器壁は灰褐色で胎土には小砂が含まれていて、焼成はやや弱い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は粗いハケ目、内面は緩い斜めのヘラ搔取りである。牛角把手は先端部上面が剥落している。把手を取り付けるためのハケ目は横・縦・斜めと、接合部を押さえつけるように短く強く行われている。2は口径26.4cmで1より大型である。一对の牛角把手があり、大まかにヘラで成形してからハケ目で調整している。口縁部は折れ曲がるように開いている。器壁は淡茶褐色で胎土には中・小の砂粒が含まれて焼成はやや弱い。調整は口縁部の内外面ともにハケ目で整え、把手取り付けのために丁寧なハケ目が見られる。把手部分は側面・下面は把手から器体へとハケを、上面は把手部のみにハケ目を、付け根部には横方向にハケ目を施している。3~6は瓶底部である。3は瓶の下端部で径13.5cm。断面で明らかなように、端部で内部に張り出し厚さを増している。径8mmの円形の孔がやや上方に向けて開けられている。この小孔は焼成前に外から内に向けて穿孔されている。器壁は明褐色で内面は淡褐色で、胎土には砂粒が含ま

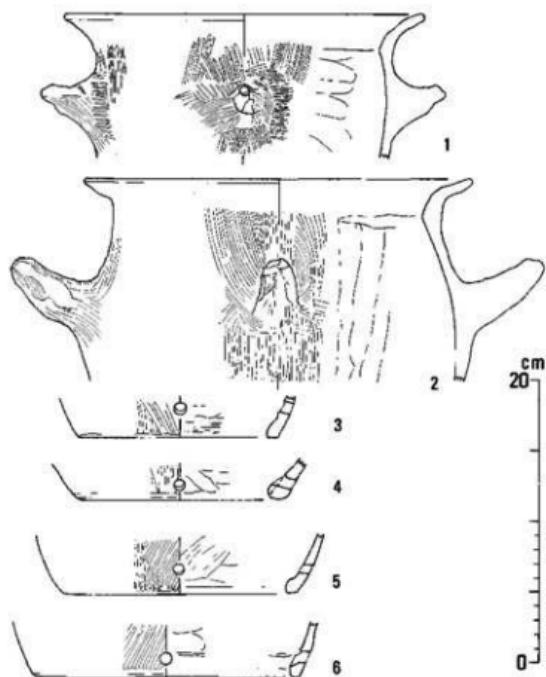


図69 D区出土土器V (土師器 3)

れているが焼成は良い。調整は外面はハケ目、内面はヘラ搔取りの後に末端部分を横方向にハケ日を施している。4は末端部径13.0cm。端部が肥厚している。径8mmの孔が焼成前に外から内に向けて施されている。器壁は灰褐色、胎土に中・小の砂粒が含まれ焼成はやや弱い。調整は外面は粗いハケ目、内面は細かなヘラ搔取りである。5は末端部径14.5cm。端部がコ字状に肥厚している。径7mmの孔が焼成前に穿孔されている。器壁は紅褐色、一部黒色、胎土には中・小砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は外面は粗いハケ目、内面は斜め上方向のヘラ搔取りである。6は末端部径17.0cm、端部内面が肥厚している。径9mmの孔がほぼ水平に穿たれている。器壁は灰褐色、胎土に中・小砂粒が含まれているが焼成は良い。6世紀後半～7世紀の土器。

瓶の端部に設けられた孔は基本的に2個一対であろう。瓶の底に置かれる蓋子・籠を支える棟をはめ込むためのものであれば2個一対で充分である。しかし瓶の下端部は窄まっているし、内面が凸状になっている部分を利用すれば蓋子・籠を填めることはできる。断面で見ると孔の位置はまちまちで内面の凸部の部分や上方に穿孔されている。上有る場合は蓋子を押さえるための棟の利用とも考えなくてはならない。瓶で蒸す物の重量を考えて蓋子を支える棟のための孔と考えるのが妥当なのである。内面の凸部は瓶の末端部の補強のためのものなのであろうか。

土製品土錐（図70）。D区北半部で出土した。長さ5.0cm、最大幅2.4cm、重さ60g、小口は縦1.9cm、横1.5cmで楕円形をしている。径2mmの孔がある。茶褐色で一部黒色、胎土は良く焼成も良い。制作方法については先に述べた。

土製品支脚（図71-1～3）。良く張った基部と太めの体部、2つの牛角状突起から成っている。体部が前傾するもの（1・2）と直立するもの（3）がある。

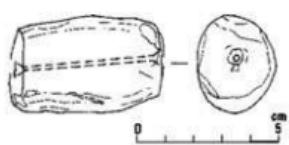


図70 D区出土土製品1（錐）

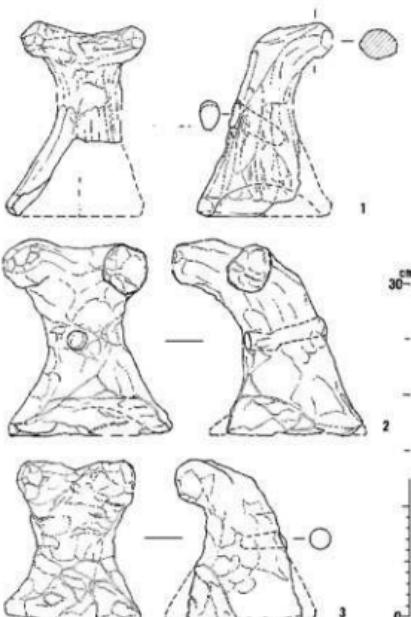


図71 D区出土土製品2（支脚）

すべてD区1層出土。1は器高17.3cm、推定の基部の径は10.0cmで済んでいる。体部中央部に2.1×1.7cm、深さ4.5cmの孔が斜め下に向けて開けられている。器体は背面が赤褐色、腹部が灰白褐色、胎土に微細な砂粒が含まれているが焼成は良い。全体にヘラでナデ付けて製作されている。腹部の灰白褐色は二次的な火の影響であろう。2は器高17.5cm、基部径12.5cmで済んでいる。体部中央に背面から径1.7cm、腹部から径1.6cmの円形の孔が穿たれているが途中で段違いとなっている。淡明褐色、胎土に砂粒が含まれているが焼成は良い。全体を指でナデて成形した後に粗いハケ目で調整している。3はやや小型で器高14.6cm、基部径は12.0cm、底面は平坦である。体部中央に背面から径1.5cm、深さ3.5cmの孔が穿たれている。器体は茶褐色で腹部は紅褐色で二次の火を受けている。胎土に砂粒が含まれているが焼成は良い。全体を指でナデ付けて製作している。6世紀後半以後の土製品である。

石器(図72-1~5)。5がピット状遺構内出土。他はすべてD区1層の出土品である。1は長さ21.2cm、最大幅9.9cm、重さ1960gである。断面は上方で凹に近い三角形で先端部も同様の断面である。先端から11.0cmの所に幅1.7~2.5cmの帯状の研磨が見られる。恐らく敲石として利用したと考えられるが、重量から

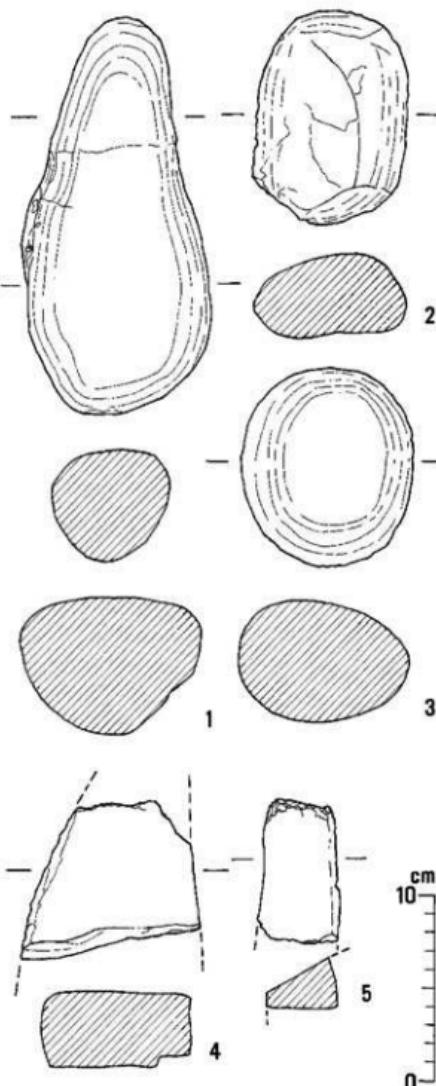


図72 D区出土石器(敲石・砥石)

考えて研磨部分に握りとなる紐などを取り付けて利用したのであろうか。2は長さ11.5cm、最大幅8.0cm、重さ660g、断面は楕円形に近く、先端部分に打痕が残っている。自然石を敲石として利用したのであろう。3も自然石を利用した敲石。長さ10.6cm、最大幅9.3cm、重さ1000g。円形に近い形をして周辺部に打痕がある。4は小砥。長さ8.0cm、最大幅9.3cm、厚さ4.0cm、重さ405gで台形をしている。上面に研磨痕が見られ、破断面にも軽く研磨が加えられている。5は砥石。長さ7.6cm、最大幅3.7cm、重さ89g、断面は台形で右側面と底面は破断し、上面・左側面が研磨されている。

鉄器(図73-1~4)。1は刀子、銹化が著しく辛うじて全形を知ることができる。闇があり、身の背が波状をし、切先が折損している。現存長15.8cm、身長7.7cm、推定長8.0cm、茎長8.1cmで身の割に茎が長い。身幅1.1cm、厚さ4mm。茎の幅1.0cm、厚さ3.5mm。各部の厚さは鋒のために変化しているといえる。2も刀子、銹化が激しく辛うじて形を知ることができる。闇が辛うじて観察されるが、茎が折損している。現存長8.6cm、身長7.1cm、現存茎長8mm。3は銹化が激しく全体の形も変化している。全長10.5cm、中央部の断面から鐵ではないかと考えられる。4も銹化が激しく形をとどめない程に変形している。全長11.3cm、右側の断面が菱形に近いことから矛を想定している。

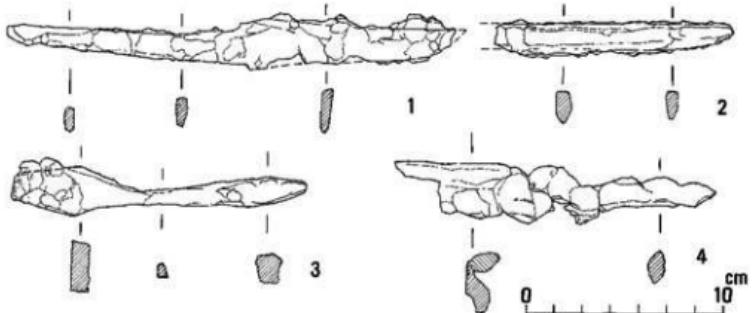


図73 D区出土鉄器(刀子その他)

第4節 第3次調査 1963年-昭和38年

(1) 弥生時代の遺構と遺物

14体の人骨（成人6・若年1・幼小児7）と仰臥屈葬？の男性・成年・埋葬姿勢不明の乳幼児3体を発見した。いずれの埋葬も墓壙は検出できなかった。埋葬施設として列石・置石・砂利群を伴うものがある。成人には翡翠勾毛・碧玉製管玉の副葬例があり、幼小児には貝輪・貝小玉を副葬する埋葬がある。また、卜骨が白色砂層（第4層）から発見され、供獻された上器も出土した。

企鵠丈夫は「魂の再生 子供墓考」「発掘から推理する」1975年朝日選書40で31~34号・38号人骨の出土状態から幼児の墓域、墓標を死児の魂のあり場所を確認するため、再生の希望に基づくものと考えを提示している。

埋葬

30号人骨（図74、図版88・89・90）

30号人骨は白色砂層から出土した。30・31・32・33・34・38号人骨は近接して発見され、38号人骨を除いて埋葬方位・埋葬水準も類似している。

人骨は小児（8~9歳）、仰臥屈葬、埋葬方位S12°E、頭蓋骨頂水準645.4cmである。右（東）に31号人骨が平行するように埋葬され、35号人骨は左（西）に約1mの間隔を置いて埋葬されている。墓壙は確認できなかった。

人骨の生理的位置関係に異常はなく、ほぼ水平に埋葬されているが、頸椎・胸椎などが消失している。埋葬姿勢は向上肢は完全に折り曲げ上腕骨を外側に桡骨・尺骨が平行した状態である。左大腿骨の下端が右大腿骨の下端上にあり、下肢骨は平行した状態であり、膝関節で折り曲げて埋葬されたことを物語っている。永井によると既に切歯が永久歯と交換していることから、8歳程度の年齢と考えられると記録している。また、前頭骨から頭頂骨にかけて病変がみられ頭蓋骨肥大が指摘されている。その原因を遺伝性溶血性貧血としている（永井昌文・福島一彦「古浦遺跡出土弥生時代人骨の病変」第40回日本人類学会・日本民族学会連合大会。『人類学雑誌』95:259 1987年。福島一彦「骨病変から見た弥生人の生活とルーツ」36~42p MUSEUM KYUSHU 77 2004年3月）。貝小玉2個を発見したが31号人骨副葬の貝小玉が移動した可能性も捨てきれない。

31号人骨（図74、図版88・89・91）

白色砂層から発見された。30号人骨と32号人骨の中間に位置し、埋葬方位、埋葬水準も類似している。

人骨は幼児（2~3歳）、仰臥屈葬、埋葬方位S19°E、頭蓋骨頂水準639.4cmである。人骨の生理

学的位置関係に異常はない。頸椎・胸椎の一部と肺骨などが消失している。右上肢は体側に沿って伸ばし、左上肢は上腕骨を外に前腕骨を完全に曲げて体側に置き、下肢骨は左右に開き、大腿骨からL型の状態で脛骨がある。永井の記録によると、全乳歯は萌出しているが大泉門はまだ開いていることから2歳位としている。貝小玉を左下肢骨周辺で発見し、周辺の砂を水篩して198個を発見した。

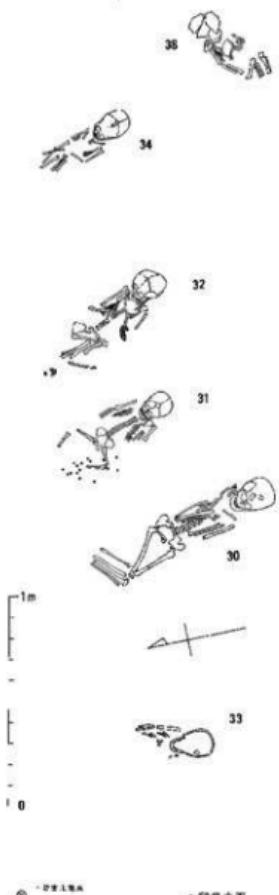


図74 30、31、32、33、34、38号人骨出土状態

貝小玉は、表4に計測値を示した。表4は貝小玉198個の中から任意で72個を選んだ。外径1.7～3.9mm、厚さ0.3～1.25mm、孔径0.7～2.0mmの範囲にある。着装部位については左足首の可能性が強いが断定はできない。(貝小玉については、木下尚子「東亞貝珠考」315～354頁『先史学・考古学論究』Ⅲ 白木原和美先生古稀記念献呈論文集 龍田考古学会 1999年を参照されたい)。

32号人骨(図74、図版88・89・92・93)

白色砂層から発見された。31号人骨と34号人骨の間に位置し、31号人骨との距離は50cm、34号人骨との距離は80cmであるが、埋葬方位、埋葬水準は類似している。

人骨は幼児(4～5歳)、仰臥屈葬、埋葬方位S30°E、頭蓋骨頂水準643.4cmである。頭蓋骨が右に傾いているが、人骨の位置関係に異常は見られない。左右の上腕骨は体側に沿い、前腕骨は曲げて胸郭上にある。右大腿骨は左寛骨の上にあり、右脛骨の上端部が大腿骨の下端部に乗り、右腓骨はやや離れて位置している。左大腿骨は下方に倒れ、脛骨と腓骨は上方に倒れて重なり合っている。肩肢の状態で埋葬されたと考えられる。墓壙は確認できなかった。眼窩前面縁に珊瑚に似た外観をした骨病変があるとされ、遺伝性溶血性貧血、鉄欠乏性貧血、多血症などを原因としている(永井

呂文・福島一彦「古浦遺跡出土弥生時代人骨の病変」第40回日本人類学会・日本民族学会連合大会。
『人類学雑誌』95: 259 1987年 福島一彦「骨病変からみた弥生人の生活とルーツ』 36~42p
MUSEUM KYUSHU 77 2004年3月)。

表4 31号人骨副葬貝小玉計測値

外径・厚・孔径(単位:mm)

1	3.9×3.9	1.25 2.0	19	2.4×2.3	0.9	1.3	37	2.2×2.15	0.8 1.25	55	1.95×1.9	1.0 1.3
2	2.4×2.45	0.95 1.7	20	2.5×2.5	1.0	1.2	38	2.6×2.5	0.75 1.1	56	2.45×2.3	0.8 1.6
3	2.3×2.25	0.85 1.0	21	2.6×2.5	0.5 1.4	39	2.65×2.45	0.8 1.25	57	2.6×2.45	0.5 1.2	
4	2.1×2.05	0.9 0.8	22	2.6×2.4	0.55 1.45	40	2.6×2.55	0.4 1.4	58	2.1×2.0	0.7 1.0	
5	2.4×2.3	0.95 0.7	23	2.1×2.0	0.3 1.0	41	2.35×2.3	0.5 1.2	59	2.5×2.5	0.6 1.0	
6	2.2×2.4	0.7	1.0	24	2.25×2.15	0.55 1.0	42	2.7×2.6	0.7 0.9	60	2.15×2.1	0.75 1.1
7	2.3×2.2	0.85 0.9	25	2.5×2.35	0.6 1.3	43	2.5×2.4	0.45 1.2	61	2.25×2.15	0.7 1.1	
8	2.8×2.7	0.6 1.3	26	2.8×2.75	0.7 1.4	44	2.5×2.5	0.8 0.8	62	2.5×2.5	1.0 1.2	
9	2.7×2.55	0.7 1.0	27	2.35×2.2	1.05 0.9	45	2.25×2.2	0.9 0.7	63	2.45×2.4	0.8 1.0	
10	2.0×2.0	1.0 1.0	28	2.2×2.2	0.7 0.8	46	2.7×2.6	0.5 1.3	64	2.3×2.25	0.9 0.9	
11	2.8×2.7	0.9 1.5	29	2.35×2.3	0.75 1.3	47	2.5×2.5	1.05 0.8	65	2.25×2.25	0.6 1.2	
12	2.35×2.3	0.75 1.1	30	2.3×2.3	0.55 1.4	48	2.55×2.5	1.05 1.2	66	2.35×2.3	0.8 0.9	
13	2.5×2.3	0.7	1.1	31	2.2×2.2	0.8 0.9	49	2.6×2.55	0.6 1.4	67	2.2×2.2	0.75 0.9
14	2.25×2.2	0.65 1.0	32	2.35×2.2	0.45 1.1	50	2.7×2.7	0.7 1.4	68	2.7×2.6	0.6 1.3	
15	2.5×2.4	1.0 1.0	33	1.9×1.7	0.5 1.1	51	2.05×2.05	0.9 0.8	69	2.1×2.0	0.65 1.1	
16	2.2×2.1	0.85 0.75	34	2.45×2.4	0.4 1.6	52	2.7×2.7	0.6 1.4	70	2.3×2.35	1.0 1.0	
17	2.35×2.35	1.0 1.1	35	2.3×2.2	0.7 1.4	53	2.0×2.0	0.9 1.3	71	2.4×2.35	0.8 1.0	
18	2.5×2.2	0.8 1.0	36	2.2×2.1	0.6 0.8	54	2.2×2.3	0.7 1.8	72	2.3×2.1	1.0 1.0	

計198個の中から任意で72個選択

表5 32号人骨副葬貝小玉計測値

外径・厚・孔径(単位:mm)

1	3.3×?	?	?	11	2.5×2.5	1.05	1.2	21	2.0×2.05	0.85	1.0
2	2.2×?	?	?	12	2.6×2.2	0.7	0.9	22	2.3×2.3	0.7	1.0
3	3.45×3.45	1.45	1.5	13	2.4×2.3	0.7	1.2	23	2.5×2.5	0.55	1.4
4	3.65×3.5	1.2	1.3	14	2.1×1.95	0.8	1.0	24	2.2×1.4	0.75	1.3
5	3.1×3.05	1.1	1.15	15	2.3×2.3	0.95	1.3	25	2.2×2.2	0.8	1.3
6	3.5×3.2	1.5	1.45	16	2.2×2.15	0.7	1.0	26	2.0×2.05	0.7	1.0
7	3.45×3.25	1.5	1.8	17	2.2×2.05	0.9	0.9	27	3.35×?	0.8	1.9?
8	2.5×2.55	0.7	0.9	18	2.5×2.5	0.7	0.8	28	2.1×?	0.6	1.15?
9	2.35×2.45	0.7	1.15	19	2.35×2.5	0.7	1.5	29	2.1×?	0.8	1.2?
10	2.3×2.3	0.8	1.0	20	2.0×1.85	0.9	0.45				

左前腕にハイガイ製貝輪5個(図版93)が着装され、貝小玉29個も検出した。(貝輪については第9章特論 木下尚子「古浦遺跡の貝輪」を参照されたい)。貝小玉29個の計測値を表5に示した。外径は1.85~3.65mm、厚さ0.7~1.5mm、孔径は0.45~1.9mmの範囲にある。(貝小玉については、木下尚子「東亞貝珠考」315~354頁、「先史学・考古学論究」Ⅲ 白木原和美先生古稀記念献呈論文集 龍田考古学会 1999年を参照されたい)。

33号人骨(図74、図版88・94)

白色砂層から発見された。30号人骨の西約1m西に位置している。埋葬水準は変わらないが、埋葬方位はやや異にしている。墓壙は確認できなかった。

人骨は幼児(3歳)、仰臥屈葬?、埋葬方位S11°W、頭蓋骨頂水準は642cm + αである。頭蓋骨は頭蓋骨から顔面骨が損壊し、下頬骨、右上肢、肋骨の一部が遺存するのみで、右上肢は体側に沿って伸ばしている。下頬左側の乳歯は全て萌出しており2~3歳程度の年齢と考えて誤りあるまい。副葬品・供獻物は出土していない。出土品、30・31・32号人骨との位置関係などから弥生時代人で仰臥屈葬と考えて誤りあるまい。

34号人骨(図74、図版88・95)

白色砂層から出土した。32号人骨の東80cmで出土し、南西54cmには38号人骨がある。埋葬方位は32号人骨と変わらないが、38号人骨とは異にしている。墓壙は確認できなかった。

人骨は幼児(2歳)、仰臥屈葬、埋葬方位S19.0°E、頭蓋骨頂水準625.4cmである。脊椎・骨盤など消失しているが、頭蓋骨・四肢骨などは遺存している。頭蓋骨は正面を向き、右上肢は体側に沿って伸ばし、左上腕骨は体側に沿っているが、前腕は内側に曲げて腹部上にある。左右の大軸骨は半

表6 34号人骨副葬貝小玉計測値

	外径・厚・孔径(単位:mm)									
1	3.0×2.9	1.2	2.0	13	2.4×2.4	1.2	1.6	25	2.0×2.0	0.55 0.9
2	3.0×3.05	0.95	1.8	14	2.2×2.2	0.55	1.15	26	2.3×2.4	1.25 1.2
3	2.5×2.6	1.1	1.5	15	2.3×2.4	1.4	1.4	27	2.5×2.5	1.25 1.1
4	2.4×2.35	1.05	1.4	16	2.3×2.45	0.95	1.3	28	2.6×2.9	1.35 1.3
5	2.45×2.45	1.1	1.1	17	2.3×2.4	1.3	1.1	29	2.3×2.35	1.15 1.1
6	3.05×3.05	1.1	1.4	18	2.2×2.3	1.0	1.4	30	2.3×2.4	1.1 1.05
7	2.4×2.45	1.25	1.3	19	2.15×2.2	0.9	1.0	31	2.4×2.5	1.35 1.2
8	2.2×2.25	0.55	1.0	20	2.5×2.4	1.3	1.2	32	2.6×2.65	0.9 1.7
9	2.75×2.85	0.9	1.2	21	2.4×2.55	1.15	1.2	33	2.3×2.35	1.05 1.05
10	2.2×2.2	0.8	1.1	22	2.0×2.15	0.6	1.0	34	2.3×2.35	1.3 1.1
11	2.35×2.45	1.4	1.2	23	2.8×2.9	1.1	0.9	35	1.8×1.8	0.7 1.0
12	2.35×2.45	1.3	1.2	24	2.9×2.95	0.75	0.9	36	2.2×2.2	0.5 1.15

行して並び、右脛骨と腓骨の下端部は右前腕骨に達し、左脛骨は折れ曲がったように下端部が骨盤の部位にある。これは埋葬時に左右の踵を脛部に接するように置いたためであろう。水井の觀察記録によると、大泉門はまだ $2 \times 2\text{cm}$ 程度開いているが、乳歯は萌出しているので、2歳程度の年齢であろうとしている。

貝小玉36個を体部から検出し、表6に計測値を示した。外径は $1.8 \sim 3.05\text{mm}$ 、厚さ $0.55 \sim 1.4\text{mm}$ 、孔径 $0.9 \sim 1.8\text{mm}$ である。(貝小玉については、木下尚子「東亜貝珠考」315~354頁『先史学・考古学論究』Ⅲ 白木原和美先生古稀記念献呈論文集 龍田考古学会 1999年を参照されたい)。

35号人骨(図75、図版96・97・98)

白色砂層から出土。34号人骨の北東部に位置している。発見の端緒はF又岸面に露出した石塊(図版96)からである。4個の石を検出したが、頭蓋骨の上方 24.0cm にある右(縦 20cm ・横 22cm ・厚さ 10.0cm)は墓壙掘り込み部分に置かれた調石、足部の 20.0cm 上方にある石(縦 30.0cm ・横 38.0cm ・厚さ 5.0cm)も同様の調石であろう。また、腹部上 10.0cm にある柱状の石(縦 42.0cm ・横 10.0cm ・厚さ 7.0cm)も置石で、埋葬者の腐敗に伴って沈下したと考えられる。頭部・足部の調石を墓壙掘り込み面とすると、墓壙の深さが頭部側が深いことになる。さらに 47.0cm 上方の右は墓壙上面の2個の調石からすると35号人骨には関係のない石(縦 22.6cm ・横 22.6cm ・厚さ 2.0cm)と考えなければならないが、墓壙上に盛り土を行い、その上に標識として置かれたとも考えられる。

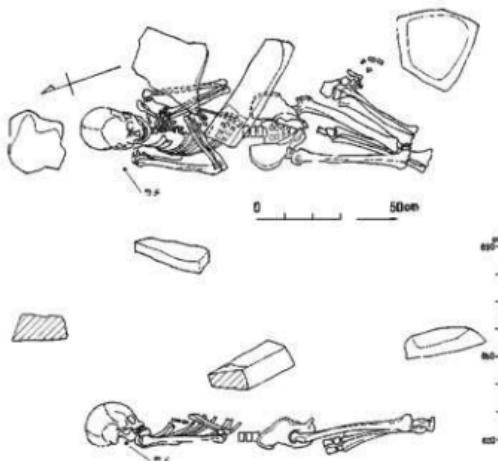


図75 35号人骨出土状態

人骨は女性・熟年、仰臥屈葬、埋葬方位N19°W、頭蓋骨頂水準631.2cm、推定身長155.5cmである。人骨の生理的位置関係は正常で、保存状態も良い。右上腕骨は体側に沿い、前腕骨は曲げて胸郭上有る。左上腕骨はやや肘を張ったように外に広がり、前腕骨は曲げて胸郭上に置き胸椎部分に達している。左右の大腿骨は膝関節部分が接触し、下肢骨は極端に折れ曲がり、右脛骨と腓骨の上端部は前に出て、足根骨は背部に接する位置にある。左下肢骨はやや外方にあり、大腿骨と平行している。埋葬時には足は背部近くに置き、膝を揃えて立てた状態と考えられる。左橈骨に骨折がみられる。

右上腕骨骨頭に接して碧玉製管玉1個(図版98)、左乳様突起附近で碧玉製管玉1個、計2個の管玉を検出した。上顎左右の大歯(C)に風習的抜歯がある。

碧玉製管玉(図85、図版48)。頭蓋骨右から出土した管玉は濃緑色、長さ9.9mm、径4.5mm、孔径1.8mm、重さ0.337g、風化は見られず全体に艶がある。研磨されていない小口がある。頭蓋骨左から出土した管玉は濃緑色、長さ1.16cm、径4.3×4.0mm、もう一つの小口の径は4.3×3.8mm、孔径2.1mmと1.8mmである。管玉は耳上位置から耳飾りまたは両側にまとめて髪の飾りと考えられる。

36号人骨(図76、図版99)

白色砂層から出土した。付属する施設もなく、墓壙も確認できなかった。35号人骨の北東2.6mに位置している。

人骨は女性・成年、仰臥屈葬、頭蓋骨頂水準667.0cm、推定身長150.8cmである。人骨の生理的位置関係に異常はなかった。頭蓋骨がやや右に傾き、右上腕骨は体側に沿い、桡骨・尺骨は完全に折り曲げ肩胛骨上有り、手根骨は鎖骨の下方の胸郭上有る。左上腕はやや肘を張り、桡骨・尺

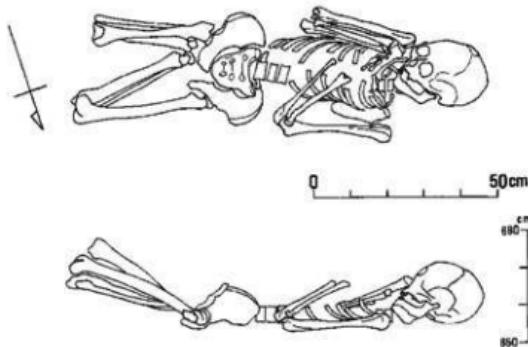


図76 36号人骨出土状態

骨は曲げて胸郭上に位置している。右大腿骨の下端は骨盤の位置より上にあり、脛骨・腓骨は大腿骨の下にあり、足根骨は右寛骨に近接した位置にある。左大腿骨は右大腿骨に平行して伸び、脛骨・腓骨の下端部は右寛骨に近く、足根骨は右足根骨に平行した位置にある。埋葬時には頭を揃え、脛部に接した位置に置き、膝は揃えて立て屈肢の状態であったと考えられる。上顎左右の犬歯（C）の風習的抜歯の可能性がある。

37号人骨（図77、図版100・101）

白色砂層から出土し、出土した位置は第1次調査C区の南に近接した区域であった。置石を伴ったが墓壙は確認できなかった。

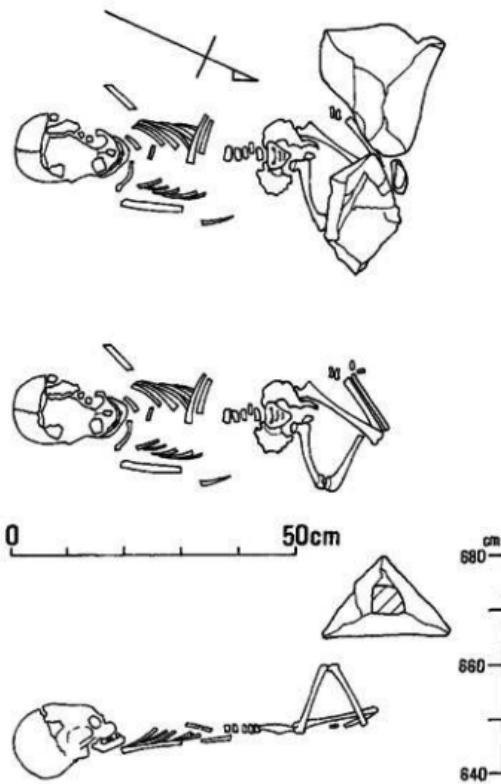


図77 37号人骨出土状態

質石は下肢骨側、膝関節の7.0cm上に置かれた3個の石からなっている。東側の石は変形の五角形で縦18.0cm、横12.3cm、厚さ2.3cmの扁平な石で、西側の石は三角形状の縦23.0cm、横21.3cm、厚さ14.7cm、断面も一角形状で、もう1個の石は東側の石に添うように置かれた縦7.0cm、横2.5cmの石である。すべて古浦海岸の砂丘に続く岩礁性海岸から搬入したと考えられる。

人骨は幼児（4歳）、仰臥屈葬、埋葬方位S23°E、頭蓋骨頂水準653.0cmである。左側頭骨部・前頭骨の一部が損壊し、頸椎・胸椎などが欠失している。右上腕骨は体側に添って伸び、前腕の桡骨は消失しているが、尺骨が遺存しており体側に添っている。左上腕は上・下端が消失して正常な位置関係とはいえないが前腕の桡骨・尺骨が平行して胸郭上にある。右上肢は体側に添って伸び、左上肢は前腕を曲げて胸の上に置いた状態である。右下肢骨は膝関節を頂点に立った状態で、左下肢骨は右に倒れて、膝関節が右足根骨上にある。右下肢骨は埋葬時とほぼ同じ状態にあると考えられる。埋葬は頭骨が最も低い位置にあり、胫骨の下端部が約9cm上にある。墓壙底面が傾斜している。

37号人骨は永井の記録によると、全乳歯が萌出し、中切歯・側切歯に咬耗が認められ、大泉門も閉鎖しているが、永久第1大臼歯が未萌出であるので4歳と考えるとしている。

右側頭部から左耳1個を発見したが供獻されたもののかどうか判断できない。しかし、白色砂層中で完全な形の貝を見ることはなかった。

38号人骨（図74、図版88・102）

白色砂層から出土したが、墓壙は検出できなかった。34号人骨の南東57.0cmで出土した。

人骨は乳児、仰臥屈葬、埋葬方位N58°E、頭蓋骨頂水準623.4cmである。頭蓋骨が損壊し、一部が胸郭上にある。右上肢骨は体側に沿って伸び、左上腕骨は消失しているが、桡骨・尺骨は重複して発見された。左右の上肢は体側に添って伸びされていたといえる。右下肢骨はL型になり、左下肢骨は脛骨・腓骨を上に大腿骨が下に重複した形で検出された。乳児であるために骨の保存状態は良好とはいえない。永井の記録によると、乳切歯が萌出した程度であるので1歳未満の乳児である。副葬品・供獻品・埋葬に伴う施設などは発見できなかった。

41号人骨（図78、図版103・104）

33号人骨の南東部で、北から41・40・39（古墳時代）と出土した。

41号人骨は白色砂層から出土したが、墓壙は確認できなかった。人骨は若年、仰臥屈葬、埋葬方位N63.5°W、頭蓋骨頂水準625.9cmである。人骨の遺存状態は良好とはいえない。脊椎骨・骨盤・肋骨などが消失し四肢骨が遺存している状態である。頭蓋骨はやや右に傾き、左右の上腕骨は体側に添っている。右前腕は曲げて胸部に置き、左前腕は肘関節から離れた位置にあるが異常ではない。左大腿骨は途中で折れており、左の脛骨と腓骨はやや離れているが大腿骨と平行し、右大腿骨の上

端部と交差している。右大腿骨は体側線に沿った形で伸び、脛骨は大腿骨と重複し、腓骨は大腿骨と平行して遺存している。この埋葬も37号人骨と同様に頭部が最も低い位置にある。

足部に近接してほぼ同水準で石塊が出土し、墓壙底に置かれた配行と考えられる。副葬品・供献品は出土しなかった。

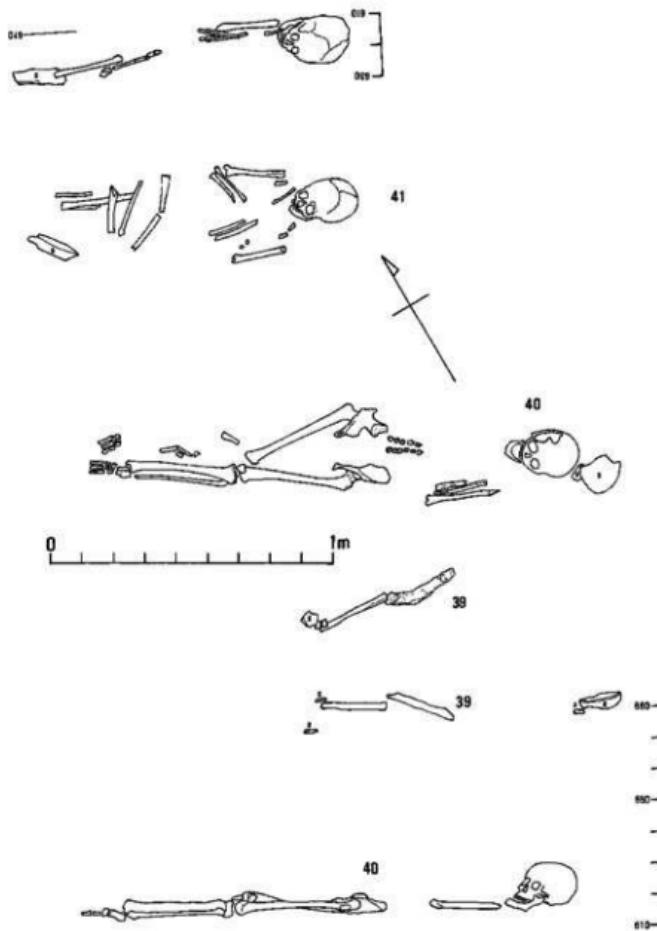


図78 39・40・41号人骨出土状態

42号人骨 (図79、図版105・106・107)

30号人骨の南に近接して43号人骨があり、頭蓋骨の北東47cmに42号人骨の足部が位置している。

42号人骨は白色砂層から出土し、頭部側に4個の置石と供献土器、足部側に3個の置石がある。頭部側の置石は後頭部を覆うように、縦28cm、横40.0cm、厚さ17.0cmの台形の石があり、僅かな間隙を置いて顔面から上半身を覆うように、縦27cm、横57.0cm、厚さ21.0cm、断面一辺形の台形の石がある。これらの石に差し掛けるように南側に縦32.0cm、横18.0cm、厚さ10.0cm、北側に縦26.0cm、横18.6cm、厚さ12.0cmの石が置かれている。足部には寛骨上に縦22.6cm、横33.0cm、厚さ12.0cm、下肢骨の上に縦18.0cm、横23.3cm、厚さ16.0cmの平面三角形の石、右足根骨上に縦18.0cm、横26.0cm、厚さ10.0cmの石が置かれている。また、頭部に関係のある2個の置石と北側の置石に囲まれた空間

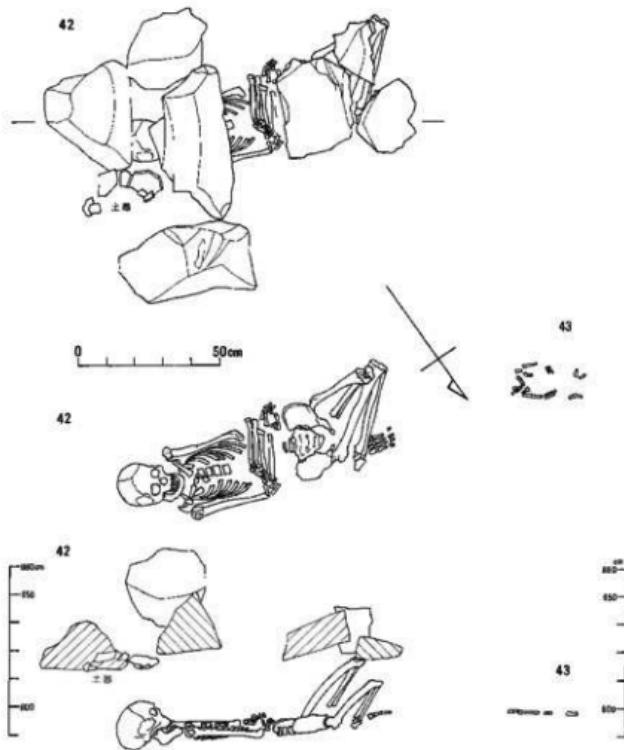


図79 42・43号人骨出土状態

に供献土器一臺（図80、図版106・107）が置かれていた。

人骨は女性・成年、仰臥屈葬、埋葬方位E20°S、頭蓋骨頂水準611.9cm、推定身長152.2cmである。骨の生理学的位置関係に異常はないが、腰椎が消失し、胸骨が細片となって遺存していた。両上腕骨は体側に沿って伸ばし、左右の前腕骨は腹部上に置かれ、左手根骨が右肘関節附近にあり、右手根骨は左対応の上辺にある。下肢骨は平面的には交差しているが足根骨の位置から埋葬時の状態に近い屈肢と考えられる。頭部が足部よりも低い位置にある。上顎の左右の犬歯（C）と上顎左侧切歯（I）に風習的抜歯がある。

供献弥生土器壺（図80、図版107）

42号人骨頭部周石の間に置かれ、墓壙の掘り込み面に置かれたと考えられる。口縁部と底部が欠失し、 $1/3$ 程度が出土したに過ぎない。現存器高14.8cm、推定器高24.5cm、胴部最大径26.6cm、肩部に削り出しの突帯があり沈線1本が見られる。胴部は良く張り玉蔵状をしている。器壁は明茶褐色で胎土中に砂粒は多いが、調整が丁寧に行われ器表には殆ど現れていない。調整はヘラでのナデが行われ、肩部の突帯直下から全面に施されている。突帯直下では短く横方向に、次第に角度をつけて斜め方向にナデしている。内面は底部から斜め上方方向にヘラナデを行い、肩部内面では横方向にヘラナデを行っている。焼成は極めて良い。前期後葉の土器。

43号人骨（図79）

42号人骨の西、30号人骨の南に近接し、白色砂層から出土したが墓壙は確認できなかった。

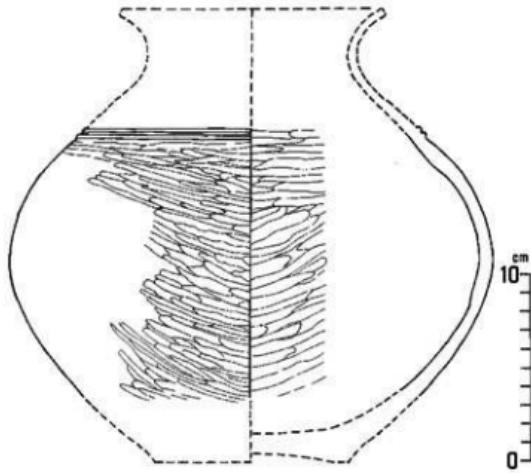


図80 42号人骨供献弥生土器

人骨は乳児、仰臥屈葬？、埋葬方位N52°W、埋葬水準610.4cmである。人骨の遺存状態は悪いが骨の生理学的な位置関係は正常である。頭蓋骨は破片となり、下頬骨片・上腕骨・下肢骨・右鎖骨が遺存している。下頬骨に沿って右鎖骨があり、右上腕骨は僅かに外方に広がり、前腕は緩く内側に曲げている。左上腕骨も僅かに外方に広げ、前腕はL型に曲げている。左右の大腿骨・脛骨は骨端部が消失しているが辛うじて残り、右下肢骨は重なり、左下肢骨はハ字状の位置関係にある。上肢骨・下肢骨の位置関係から仰臥屈葬と考えて誤りあるまい。小片の記録によると生後5ヶ月以内の乳児と考え、下頬骨の結合も不充分で、歯槽中に未萌出と考えられる歯がみられるとしている。副葬品は出土しなかった。

44号人骨（図81、図版108・109）

37号人骨の南東部に近接した位置に44・45・46号人骨は存在した。45号人骨は散乱し、44・46号人骨は平行して埋葬されていた。白色砂層でも上層に近い層から出土したが墓壙は検出できなかった。

人骨は男性・熟年、仰臥屈葬、埋葬方位E11°S、頭蓋骨頂水準は609.6cm、推定身長163.8cmである。人骨の遺存状態は非常に良い。頭蓋骨は左に僅かに傾き、右上腕骨は体側に沿って伸ばし、前腕の桡骨は緩く曲げて右対角線上に置かれ、尺骨は右対角线下に位置している。左上腕も体側に沿って伸ばし、前腕骨は対角線上にある。両手根骨は骨盤内に落下していた。下肢骨は膝関節で曲げて立てているが、脛骨は墓壙底面に横たわっている。このことは腐敗時まで墓壙内に空間が存在したこと

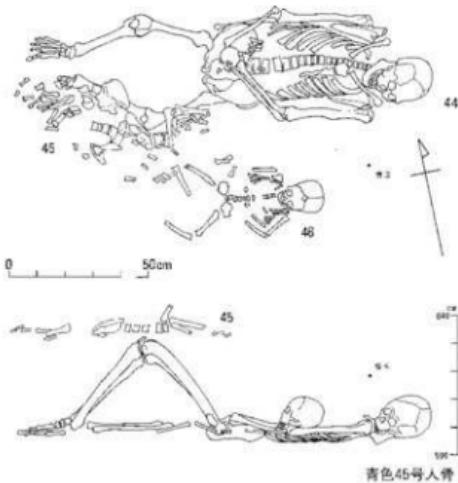


図81 44・45・46号人骨出土状態

を物語っている。脛骨は足根骨との位置関係から埋葬時の状態を保っているといえる。ほぼ水平に埋葬されている。上顎左右の大歯（C）と下顎左右の中切歯（I）に風習的抜歯がある。また、両変形性肘関節症の存在が指摘され、過酷な作業に原因があるのでとしている（永井昌文・福島・彦「古浦遺跡出土弥生時代人骨の病変」第40回日本人類学会・日本民族学会連合大会。「人類学雑誌」95：259、1987年 福島一彦「骨病変から見た弥生人の生活とルーツ」36～42p MUSEMU KYUSHU 77 2004年3月）。副葬品は出土していない。

45号人骨（図81、図版108）

44号人骨の膝関節上3.3cmに腰椎がある。平面的には左下肢骨に重なるように出土し、一部は45号人骨上にも分布している。44・46号人骨の墓壙は確認していないが墓壙に重複する位置である。

44号人骨は白色砂層の最上層部に位置して、灰黒色砂土層（第3層）、茶褐色砂層（第2層）に近接した部位にあり、遺存状態は44・46号人骨に比較してやや悪い状態であった。人骨は頭蓋骨・頸椎・胸椎などが存在せず、四肢骨も相当部分が消失し残存部分も破碎されている。しかし、遺存部分を見ると本来的な位置関係を保っていると考えられる。44号人骨の左大腿骨上に位置している45号人の上肢骨、上腕骨下半部と前腕の橈骨の上半部、この骨群と右寛骨、右寛骨と腰椎、右寛骨と大腸骨頭部、骨盤部と距骨の関係は埋葬時の姿勢を窺わせるものがある。上腕下半部と橈骨は体側に沿い、上腕骨と胸部に向けて完全に折り曲げた前腕骨、45号人骨右下肢骨上に位置する左橈骨は、右前腕骨と同様に肘関節で曲げた状態を物語っている。腰椎は水平な状態を保ち、寛骨とともに正常な位置関係にあり、大腿骨頭もやや移動していると考えられるが異常な位置関係ではない。距骨も骨盤の下方にあり、下肢骨が膝関節で曲げられ屈筋の状態であったことを物語っていると考えられる。45号人骨は女性・成年・仰臥屈葬？、埋葬方位E20°S？、埋葬水準638.1cmとすることができる。

ではこの様な情況になった原因は何であろうか。44・46号は完全に平行し、埋葬水準も一致している。年齢的な関係は44号人骨が男性・老年（40～59歳）、46号人骨幼児（2歳）であるので、親子または祖父と孫の関係を想定できる。

この二人の埋葬が同時、極めて近い時間でなければ、堆積が急速に進む白色砂層では、この様な位置関係を保つことは不可能に近いといわざるを得ない。特に置石などの地上標識が無いことがそれを裏付けるといえる。また地上標識は45号人骨埋葬時に完全に除去されたと考えることもできる。しかし、44・46号人骨は同時または極めて近い時間の埋葬と想定せざるを得ない。とすれば45号人骨は44・46号人骨とは関係なく後に埋葬されたと考えなければならない。

44・46号人骨の埋葬に際して、先に埋葬されていた45号人骨を地上に掘り揚げたにしては、さきに触れた人骨の位置関係を説明することは困難である。44号人骨と46号人骨の埋葬に時間差がある

としても、墓壙の掘形を想定すると44号人骨の情況は生じないと考えられる。

44号人骨は埋葬後に何らかの理由で部分的に攪乱されたと考えられる。その理由の一つとして茶褐色砂層内の石組造構の構築時に攪乱されたのではと考えることができる。石組造構に伴って散乱した人骨（図23・25）が存在したことはすでに触れた。44号人骨は仰臥屈葬で埋葬姿勢からすると弥生時代人である。しかし、前期弥生人でこの埋葬水準は極めて稀であるといわざるを得ない。前期以降の弥生人の可能性もある。

46号人骨（図81、図版109）

44号人骨の南に近接して埋葬され、埋葬水準も同じである。白色砂層から出土したが墓壙は検出できなかった。

人骨は幼児（2歳）、仰臥屈葬、埋葬方位E9°S、頭蓋骨頂水準610.1cmである。水井の記録によると、下顎の犬歯が萌出途上にあることから、年齢は満1歳と数ヶ月であろうとしている。人骨の生理学的位置関係は正常で、比較的遺存状態は良い。右上腕は体側に沿って伸ばしているが、前腕骨は消失している。左上腕骨は肘を張った状態で体側から離れ、前腕骨はく字状に曲げ、手根骨は腰部に当たる状態である。骨盤は一部消失しているが位置は正常で、下肢骨はく字状で外に開いて左右対称の位置にある。埋葬時に膝関節で曲げて立てた状態から左右に開いて倒れたと考えられる。水平に埋葬されている。

44号人骨附近出土管玉（図85）

44号人骨の上腕骨骨頭から南に16cm、頭蓋骨の上方7.4cmから出土した碧玉製管玉である。どの人骨に伴うものであるのか判断できない。古墳時代包含層から単独で出土した例はあるが、白色砂層からの出土例はこの資料だけである。

碧玉製で濃緑色で全体に艶がある。長さ1.075cm、径3.6mm、孔径は2.0・1.8mm、小口部に小さな欠失がある。

47号人骨（図82、図版110）

39・40号人骨の南西側に位置している。F区南側の崖面に頭蓋骨の露出を認めたので調査を行い白色砂層から発見した。墓壙は検出できなかった。人骨の遺存状態は悪く頭蓋骨も顔面は殆ど損壊し、四肢骨も骨端部が消失し骨体部が遺存している場合が多い。頭蓋骨・右上腕骨は調査中に崖が崩落し破損したために、原位置と考えられる所に置き回転し写真撮影を行った。

人骨は男性？・熟年、仰臥屈葬、埋葬方位E13°S、頭蓋骨頂水準655.6cmである。頭蓋骨はやや左方を向き顔面と右側頭部が損壊している。右上腕骨は下半部が遺存し体側に沿っているように考えられる。左鎖骨は比較的良く残り、肩胛骨の一部も検出された。左上腕骨は内に向かって伸び、前腕の尺骨は極端に折れ曲がり鎖骨に向かっている。下肢骨はL型になりほぼ平行している。左大

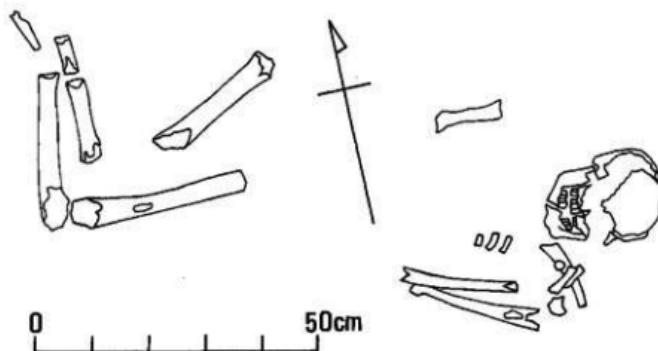


図82 47号人骨出土状態

脚骨は骨頭部が消失し、体部・下部が遺存しているが膝関節部分は消失している。脛骨は大腿骨下端に接しL型をしている。右下肢骨もほぼ並行しているが、右脛骨は折れて二分し、腓骨が下方に位置している。これは下肢骨が左に倒れた状態と考えられる。この出土状態からすると埋葬姿勢を仰臥屈葬と考えて誤りはない。上顎右犬歯（C）に風習的抜歯があり、左犬歯部分が損壊しているために充分に観察ができないが抜歯の可能性が考えられる。

48号人骨附近出土弥生土器壺（図83）

48号人骨（仰臥伸展葬－古墳時代）を調査するため東側崖面を掘削中に白色砂層中から出土した。48号人骨とは直接関係のない上器であり、また48号人骨の東側から人骨は出土していない。のちに触れるよう48号人骨の北東方向約60cmの白色砂層中でも3点の弥生土器と鹿角擬似餌が出土している。土器の一部は1964年に表面採集している。

土器は全体の1/3程度が遺存していた。口径13.5cm、器高20.0cm、胴部最大径16.4cm、底径7.5cmの壺型土器である。口縁部は大きく開き、肩部に段の痕跡がある。胴部に2条のヘラ描き沈線が巡らされている。胴部の張りは強いとはいはず。

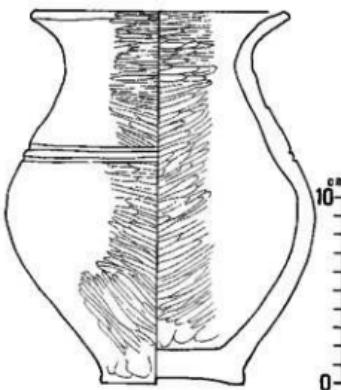


図83 48号人骨付近出土弥生土器

底部は凹底である。

器壁は淡褐色、胎土中に砂粒が多く、表面がやや剥離しているが、焼成は良好である。調整は全面ヘラナデであるが、沈線の間にヘラ調整は認められない。口縁部から段の痕跡の残る部位までは横ナデ、肩部から胴下部までは僅かに角度をつけた斜めのヘラナデから次第に角度を増し、底部では斜め方向のヘラナデで、底部側面には指圧痕をみることができる。内面も外面と同様の調整を行っている。口縁部は細かな横方向のヘラナデ、肩部から胴部までは斜め方向のヘラナデ、胴下部は斜め方向のやや長めのヘラナデがみられ、最後に指圧痕が観察できる。前期後葉の土器。

49号人骨（図84・85、図版111・112・113）

47号人骨の東南から出土した。白色砂層から出土し列石・誤石・砂利群を伴っているが墓壙は検出できなかった。人骨の遺存の程度は悪く頭蓋骨も前頭・頭頂・右側頭部が損壊し、幸うじて遺存する四肢骨も骨端部は消失している。

地上標識としての列石は人骨の南西部に3個の石塊を並べている。この方向は冬の季節風が吹きつける方向である。いずれの石材も長軸を南

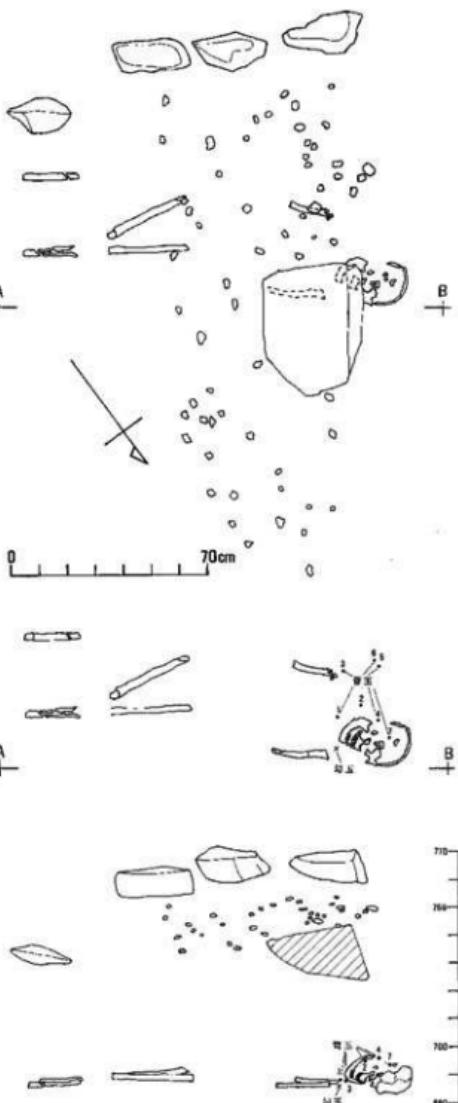


図84 49号人骨出土状態

東～南西に置いている。最も西の石は縦29.3cm、横14.6cm、厚さ10.6cm、約7cmの間隔を置いて縦26.6cm、横13.0cm、厚さ8.6cm、約3.0cmの間隔を置いて縦26.0cm、横11.0cm、厚さ8.0cmの石を並べている。設置水準は752～772cmの範囲で南西方向に次第に下降している。この列石から77.0cm離れて縦36.0cm、幅46cm、厚さ13.0cmの扁平な石があり、設置水準は767.0～771.0cm、位置的には頭蓋骨の一部と左上腕骨上に置かれている。本来的には頭蓋骨を覆うことを意図していたと考えられる。また、平面的には列石に連なる、縦22.6cm、幅12.0cm、厚さ6.6cmの石は設置水準から足部の置石と考えた。またこれらの列石・置石に関連するように砂利群が東西175.0cm、南北80.0cm、厚約20.0cmの範囲に極めて疎らではあるが分布している。列石と砂利が地上標識として存在するのであれば、設置水準からすると置石は埋没していた可能性が高い。極めて特異な埋葬施設を伴う埋葬である。

人骨は男性・熟年、仰臥屈葬？、埋葬方位E17°S、頭蓋骨頂水準619.4cmである。頭蓋骨の右側頭部、残存している四肢骨も骨端部分が消失している。頭蓋骨は左に傾き、左右の上腕骨は体側に沿っているが、橈骨・尺骨・手根骨などは消失している。寛骨も存在せず、下肢骨が辛うじて残存している。左右の大腿骨は右大腿骨が斜行し、左大腿骨と脛骨は一直線に並び、脛骨には多くの亀裂をみることができる。左脛骨は右脛骨と平行して存在しているが距離を置いている。上肢の埋葬時の状態については不明であるが、左下肢骨は膝関節で曲げて立てた状態から大腿骨は左に倒れ、脛骨は右に飛び、右下肢骨は押しつぶされる様に沈んだと考えられる。充分とはいえない状況であるが屈筋であり、全体としての埋葬姿勢は仰臥屈葬と考えることができる。また、注目すべきことは、前額から左眼窓上縁にかけて淡い青緑色の着色があり、その部分が他の部分よりも保存が良好であることが指摘できる。また、左右上顎犬歯（C）に風習的抜歯がみられる。

副葬品として翡翠製勾玉1・碧玉製管玉7（図85、図版112・113）が出土している。

トゲ骨を取りまく様に勾玉・管玉3（No.1・2・4）が散在し、管玉1（No.7）が頭蓋骨内に転落している。また、右上腕骨に近接して管玉1（No.3）、さらにその上方に管玉2（No.5ード・No.6）が出土している。出土状態から首飾りであろう。

勾玉。翡翠製勾玉、新潟県糸魚川産の翡翠で製作されている。部分的に鮮緑色でその他は白色。頭部と尾部の大きさは余り変わらない。長さ9.5mm、頭部厚さ2.0mm、尾

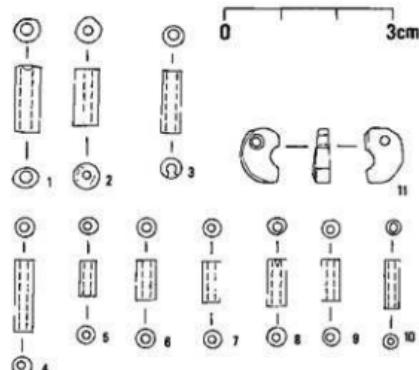


図85 35号人骨副葬・44号人骨付近・49号人骨副葬玉（1-35号左・2-36号右・3-45号・4-11-49号）

部厚さ2.55～3.0mm。頭部の背に近いところに穿孔されている。孔径2.2mm、裏面の孔径は1.2×1.6mmで一方穿孔。重さ0.375gである。

管玉1。碧玉製、濃緑色。長さ1.285cm、小口径3.35mm・3.35mm、孔径1.7mm・1.6mmで正円で一方穿孔。小口に小さな欠失がある。

管玉2。碧玉製、濃緑色。長さ7.0mm、小口径3.2mm・3.2mm、孔径1.5mm・1.45mm、小口にやや角がある。

管玉3。碧玉製、濃緑色。長さ7.0mm、小口径3.35mm・3.4mm、孔径1.5mm・1.5mm。全体に艶がある。

管玉4。碧玉製、濃緑色。長さ7.4mm、小口径3.4mm・3.4mm、孔径1.5mm・1.5mm。全体に艶がある。

管玉5。碧玉製、濃緑色。長さ8.2mm、小口径3.2mm・3.4mm、孔径1.6mm・1.8mm。全体に艶がある。

管玉6。碧玉製、濃緑色。長さ7.2mm、小口径3.4mm×3.1mm、孔径1.5mm・1.5mm。全体に艶がある。

管玉7。碧玉製、濃緑色。長さ8.3mm、小口径2.8mm・2.8mm、孔径1.85mm・1.45mm。全体に艶がある。

51号人骨

49号人骨の脛骨片が出土した地点よりもさらに崖内に入った場所で、白色砂層から出土した。右脛骨・上腕骨破片などを崖面で採集したが崖崩壊の危険が考えられたので調査を中止し、次回調査に譲ることとした。性別・年齢不明、埋葬方式、埋葬方位、埋葬水準も明らかでない。時期を判断する材料が極めて少ないが弥生時代の人骨と考えられる。

骨角器ト骨（図74・86、図版114・115・116・117）

ト骨は33号人骨の北西約1mから裏面を上に出土した。調査時の地表には上層の砂土が見られたが人骨撮影のために砂土を除去し、白色砂層を洗掘中に発見した。周囲には汚染もなく、一点の遺物も出土せず、なんらの構造物もなく単純に白色砂層中から出土した。

ト骨については、第9章特論に金関丈夫が鳥根新聞に1963年（昭和38）8月25日から8回に亘って連載した「ト骨談議」を転載した。ここでは実測図の説明程度に留めるが、計測値は多少の相違がある。実測図では山上後に破損し接合した部分の説明は省略した。

ト骨は鹿の中足骨の一部を利用し、縦に半裁して内面を利用してある。現存長5.9cm、最大幅1.2cm、厚さ1.5mm、重さ1.96gである。両端が折れて欠失しているために本末の長さは明らかにできない。しかし骨の両側には研磨痕があり、右端の下面に斜めの研磨面が観察できるので復原の想定線を定めた。想定復原長は6.8cmである。

骨体の上辺中央部に小さなV字型の切り込みがあり、下辺にもやや大きめの切り込みがあったと考えることができる。この切り込みを結ぶように浅い溝が刻まれていて、内面（鑽孔のある面）で

は最大幅1.0mm、長さ6.0mmの線状の彫り込みがあるが、両辺の切り込みとは位置がややすれている。裏面には最大幅2.0mmの彫り込みが、両辺の切り込みを結ぶように刻まれている。内面には中央の彫り込み線の左側に細い線が、裏面にも下辺の切り込みから左斜めに線が、右側にも下辺に平行に短い線が認められるがいずれも本来的な線かどうか判断できない。

鑽は中央の溝を挟んで左右に4個、

上下2段にあるので総数16個が並んでいる。その配列は鑽痕の大きさ、上下・左右の間隔、位置から整然と配置されているとはいえない。推定復原長から考えると16個以上に鑽・灼が行われたとは考えられない。

両端は欠失しているために、4個の鑽痕の大きさは判断できない。鑽の跡を上・下に分け、左から番号をつけて説明する。断面図で明らかなように半円形をしている。上辺側が立ち上がり、立ち上がった部分に鑽・灼の痕跡が残っている。底みは円形であるが必ずしも正円ではない。底は円く全体に滑らかな感がある。これは先端が錐状でなく、丸盤状の金属器で穿ったといえる。上列では側面図でも明らかなように立ち上がり部分にも鑽・灼の痕跡を見ることができる。特に灼の痕跡の強い部分を中心に記述する。

上-1。極めて小部分が残っているに過ぎないために規模を明らかにできないが、縁の部分に灼の痕跡が見られる。

上-2。縦3.25mm・横2.7mm、深さ?。中央に点状に、また下縁部に灼の痕跡がみられる。

上-3。縦2.7mm・横2.7mm、深さ?。立ち上がり部分に鑽の痕跡がみえる。灼は右下に点状に、周辺部に僅かにみえる。

上-4。縦2.9mm・横3.0mm、深さ?。下辺部と立ち上がり部分に灼の痕跡がみえる。

上-5。縦2.4mm・横2.7mm、深さ?。下辺部に僅かに灼の痕跡があり、立ち上がり部分に強い灼の痕跡がみえる。

上-6。縦2.4mm・横2.6mm、深さ?。中心部に点状に、周辺部に灼の痕跡があり、立ち上がり部分の上辺左右にもある。

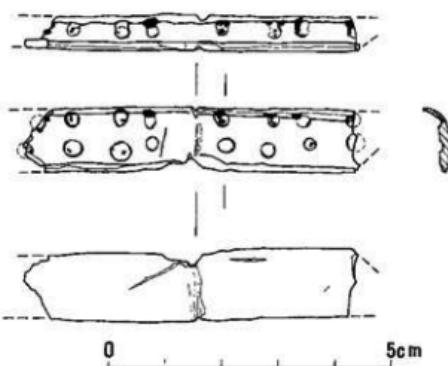


図86 骨角器（ト骨）

上-7。縦2.4mm・横2.4mm、深さ?。右下周辺部と立ち上がりの左辺に灼の痕跡がある。

上-8。縦?・横?、深さ?。立ち上がり左辺に灼の痕跡がある。

下-1。縦?・横?、深さ?。微かに残る鑽の痕跡で規模は確定できない。右下辺に灼の痕跡がある。

下-2。縦3.4mm・横3.4mm、深さ0.9mm。底の左下より点状、周辺部の左右に灼の痕跡がある。

下-3。縦3.4mm・横3.4mm、深さ1.0mm。中央右よりと周辺部に灼の痕跡がある。

下-4。縦2.6mm・横2.6mm、深さ0.7mm。周辺部に灼の痕跡がある。

下-5。縦3.2mm・横3.2mm、深さ0.7mm。周辺部に灼の痕跡がある。

下-6。縦2.9mm・横2.9mm、深さ0.7mm。周辺部に灼の痕跡がある。

下-7。縦2.5mm・横2.5mm、深さ0.5mm。中央右寄りと周辺部に灼の痕跡がある。

下-8。縦3.5mm・横?、深さ0.8mm。周辺部に灼の痕跡がある。

骨角器鹿角製擬似餌（図87-2、図版118・119-1～4）

48号人骨の東約70cmの地点で中期壺型土器（図90-6）が7月25日に出土し、写真撮影を行い出土地点を確認し、7月29日に弥生中期土器2点（図90-3・5）と鹿角製擬似餌（図82-2）を発見した。図版118は25日発見の壺型土器を出土地点に再度置いて撮影した写真である。写真撮影後に崖が崩落し出土状態の固定化は不可能となった。中期弥生土器は白色砂層（第4層）の上半部で出土しているが、この地区では4層の上半部に約25cmの淡黒色層があり灰黑色砂上層（第3層）とも区別され、1層の上半部の上層といえるが、この層自体は広範囲に分布することなく、極めて限定された範囲での情況であった。この層の下限の線は凹凸を繰り返し、その産みの中から擬似餌は出土した。4層から出土する土器は弥生前期後葉を土体とし、副葬・供献された土器を中心としている。この地点のように中期前葉から中葉の土器が存在することは初めて確認したことである。この土器群は時期を遡えて供献するために埋置されたと考えざるを得ない。擬似餌は供献されたのではなく、偶然に放置され埋没したと考えられる。

擬似餌は鹿角を利用して製作され、鋭利な刃物で丁寧に削りを繰り返している。一部が損壊しているものの全体を知ることができる。現存長10.0cm、推定復元長10.4cm、最大幅1.4cm、最大厚2.0cm、重さ20.2gである。全体的に見ると側面図では葉巻型をしており、左側線は緩やかな曲線を描いている。右側線は上半部では左側線と同様の線を示しているが、下端部で切れ込みを見せてている。上面図では全体に長方形ともいえる形態で、下端部に径1mmの孔が穿たれ体部を斜めに貫き、小口部に向けて幅3mm、深さ1.5mmの溝が彫られ、小口では溝の断面はV字型をしている。上端部は欠失しているが平らじて孔の存在を知ることができ、推定孔径4mmである。恐らく下端部と同じ作りと

考えられる。中央部分の断面は卵形である。現在では淡灰褐色であるがこれは風化が進んだ結果であって、製作した当初は白色か乳白色であったと考えられる。重さも現在の倍はあったのではないだろうか。

出土したとき地元の漁師の間でイカ釣り擬似餌だとする人と否定的な意見の人があり、古浦在住の川上清吉氏がイカ一本釣りに用いる「シラヤキ」(図88)と呼ばれている白色磁器を持参された。大小2点のシラヤキは出土した鹿角製擬似餌と全く同一といって良い形態をしていた。大型は大張糸(てぐす)が付いたままの状態で、左右の側線は対称的で、全長12.0cm、最大幅2.0cm、厚さ2.8cm、重さ105.6g、正面で105g、上下端の孔・小口部の溝も同様である。孔径は4.5mmで水平に貫通している。体部の断面は隅丸の方形である。全体に測線が左右対称、断面が隅丸方形、孔が水平に貫通しているなどの相違点を指摘できるが極めて類似性が強い。小型の「シラヤキ」は長さ11.0cm、最大幅1.8cm、最大厚さ2.2cm、重さ52.6g、左右の側線は非対称で左側線の張りが強い。上下端の孔径5mm、下端の孔は左下がりに開けられている点でも類似している。孔から小口に向けてじ字型の溝がある。断面は隅丸方形である。小型シラヤキは鹿角製擬似餌と同一形態で同一機能をもっているといえる。地元の人々の否定的意見は「そんな古い時代に、つい先頃まで使っていた道具と

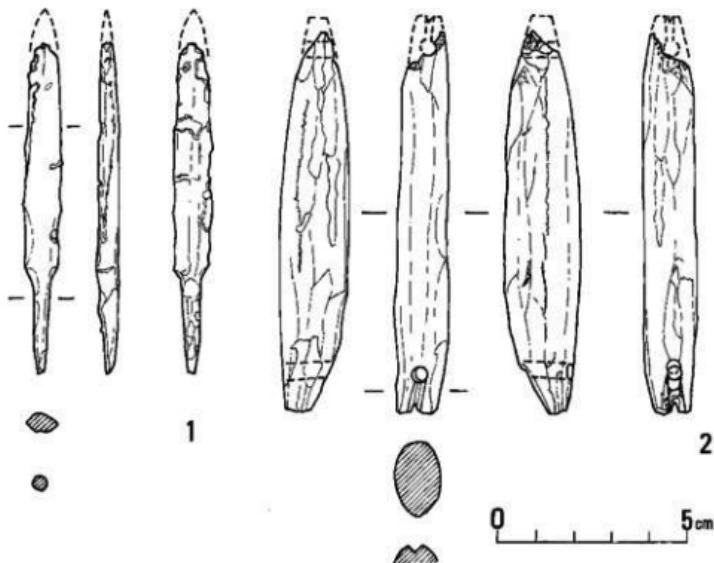


図87 骨角器(鉤・擬餌)

同じ物がある筈がない」という見解に集約できる。

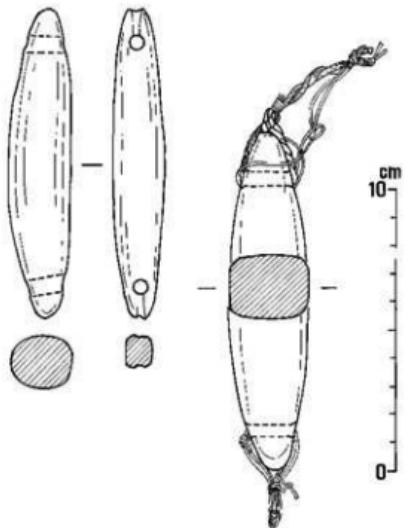


図88 イカ釣用擬鉤（古浦 川上清吉氏寄贈）

H・F区出土弥生土器（1）（図89-1～6）

1963年度調査区の1層（黒褐色粘質砂土層）、2層（茶褐色砂層）から出土した弥生土器を集成した。1はH区1層出土上の壺型土器。口径19.2cm、く字型の口縁部で、口唇部が上に肥厚している。器壁は淡褐色、胎土中に小砂が含まれている。調整は口縁部内外面ともに横ナデで、外面はハケ目。内面は下から上方向へナデあげている。中期中葉の土器。2はF区2層出土。口径26cmの人形壺、く字型の口縁部で口唇部が上下に肥厚し、口唇に凹線文3条が施されている。器壁は茶褐色、胎土中に微細な砂が含まれているが焼成は良い。

調整は口縁部内外面ともに横ナデ、外面は粗いハケ目。内面はやや細かなハケ目を方向を変えながら短く施している。中期後葉の土器。3はF区南端1層出土。壺型土器の底部で底径5.3cm、凹底である。器壁は茶褐色で一部に黒斑が見られ、表面には剥離がある。胎土中には微細な砂粒が含まれているが焼成は良好である。調整は外面は縱方向の丁寧なヘラナデ、内面は指圧痕がある。中期壺型土器の底部。4はII区2層出土。底径7.4cm、平底。器壁は淡紅灰褐色、胎土中に砂粒が多いが焼成は良好。調整は外面はやや粗いヘラナデ、内面は斜め方向のヘラナデあげである。前期後葉の壺型土器の底部。5はF区1層出土。底径11.0cm、平底。器壁は灰白褐色、胎土中に微細な砂粒を含んでいる。調整は外面はヘラナデ、内面は剥離が著しく観察できない。中期壺型土器の底部。6はF区南端1層出土。底径6.0cm、平底。器壁は外面は黒斑で覆われ、内面は茶褐色。胎土中には微細な砂粒が含まれている。調整は不明。中期壺型土器の底部。

II・F区出土弥生土器（2）（図90-1～5、図版120～123）

II・F区出土の弥生土器を集成した。3・5・6の出土状態については擬似鉤の項目すでに説

明を加えた。

1はH区2層の石組遺構上面から出土した壺型土器である。口径9.5cm、頸部に削り出しの段がある。器壁は淡褐色、胎土中に微細な砂が含まれ、焼成はやや弱い。調整は段の下方は粗いハケの後でヘラ調整をおこなっている。前期中葉の土器。

2はH区1層出土の壺型土器。H区2層出土の口縁部と接合できた。口径11.7cm、口縁部は開いているが口唇部で反転している。また、口唇が上方に僅かに肥厚している。器壁は淡灰白褐色、胎土中に砂粒を含んでいる。調整は外面は口縁部は細かなハケ目、頸部以下は縦方向のハケ目である。口縁部内面は横ハケ、それ以下はヘラナデである。中期中葉の土器。

3(図版120)は4層上半部で出土した長頸壺型土器。口縁部を欠失しているが全体を知ることはできる。現存器高22.3cm、推定器高22.8cm、推定口径11.7cm、胴部最大径15.2cm、底部径6.2cm、凹底である。口縁部は開き、肩部に段の痕跡を残し卵形の胴部へと連続している。器形は左右の均衡がとれずに粘土の接合面が凹凸を繰り返し滑らかさがない。頸部にはクシ書き平行線文と波状文を3回繰り返しており、クシの単位は4本で、上から下へと施文を行っている。器壁の外面は殆ど

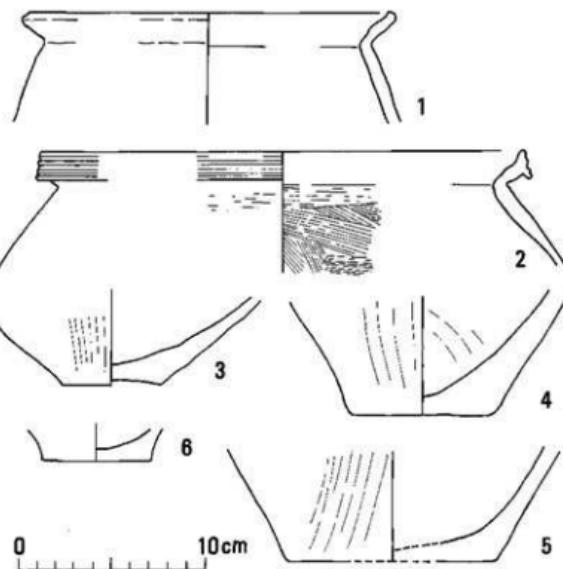


図89 H・F区出土赤生土器 1

黒色で縦方向に明茶褐色の部分がある。内壁は全面が明茶褐色である。胎土中には砂粒が多く含まれ、諸所に大粒の砂粒を見ることができる。全体に剥落した箇所がみられ、焼成は良いとはいえない。調整は外面はハケ目で継・斜め方向に調整した後に、ヘラで短く横方向にナデ、底部ではヘラで幅広く横方向にナデしている。口縁部内面は横にハケ目を行い、その後にハケ目で斜めのナデ上げてから、ヘラで細かに横方向にナデしている。底部では斜め方向にヘラでナデ上げている。ハケ目器具の痕跡として残っている最大のものは幅2.7cmである。(文様帶の下地にあるハケ目調整は図では省略した。)

4(図版121)はF区南端4層(白色砂層)で出土した壺型土器。底部が欠失している。現存器高14.5cm、推定器高17.3cm、口縁部径10.0cm、胴部最大径18.8cmである。頭部に断面二角形の貼付突帯がある。口縁部は開き、口唇部が僅かに肥厚し、口唇に溝みが見られる。胴部は良く張り正楕形である。器壁は茶褐色、胎土に砂粒が含まれているが調整が丁寧なために器表では観察できない。焼成は極めて良い。調整は口縁部の内外面は横ナデ、突帯以下はハケ目で整え、その後ヘラナデを行い、半円形状のヘラナデを繰り返し一種の文様化を試みている。頭部内面はヘラ横ナデ、胴部には指圧による凹形の痕跡が密に残っている。前期後葉末の土器である。

5(図版122)は4層上半部で出土した広口壺。擬似瓶に近接しているが層が異なり直接的な関係はない。口径11.7cm、器高23.0cm、胴部最大径22.5cm、底径7.5cm。口縁部は短く屈折し、球形の胴部に厚味のある平底である。頭部直下に蓋を保持するための径3~5mm、2個一対の孔が2組ある。孔は焼成前に外から突いて穿孔している。口縁部直下と胴部にクシ押し引きの文様が施されている。器壁は淡褐色、一部黒斑があり、胎土中には砂粒は余り含まれていないが器壁は全体に荒れている。調整は文様帶の下地のように粗いハケ目で整えられ、ハケの幅は2cm単位である。胴部から底部に掛けては縦方向のヘラが底部から胴部方向に施されている。内面はヘラで横方向にナデがみられる。中期中葉の上器である。

6(図版123)は白色砂層(4層)から3に近接してやや深い位置で出土した。口径11.5cm、器高17.5cm、胴部最大径12.5cm、底径4.5cm。く字状の口縁部で、胴部の張りは弱く、器壁に粘土接合部が小さな凹凸となって残っている。器壁は暗茶褐色、胎土中には砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部内外面とともに横ナデ、外面は細かなハケで整え、底部から胴部方向へヘラナデを行っている。内面はハケで横方向にナデしている。外面は口縁部から胴部に掛けて全体の2/3に煤が付着し、内面は底から2.0~5.5cm、幅3.5cmに炭化物が付着している。中期前葉の土器。

金闇丈夫は「日本の毒矢-経太子が使った新兵器」「発掘から推理する」1975年朝日選書40にこの上器の出土状態の写真を使用している。

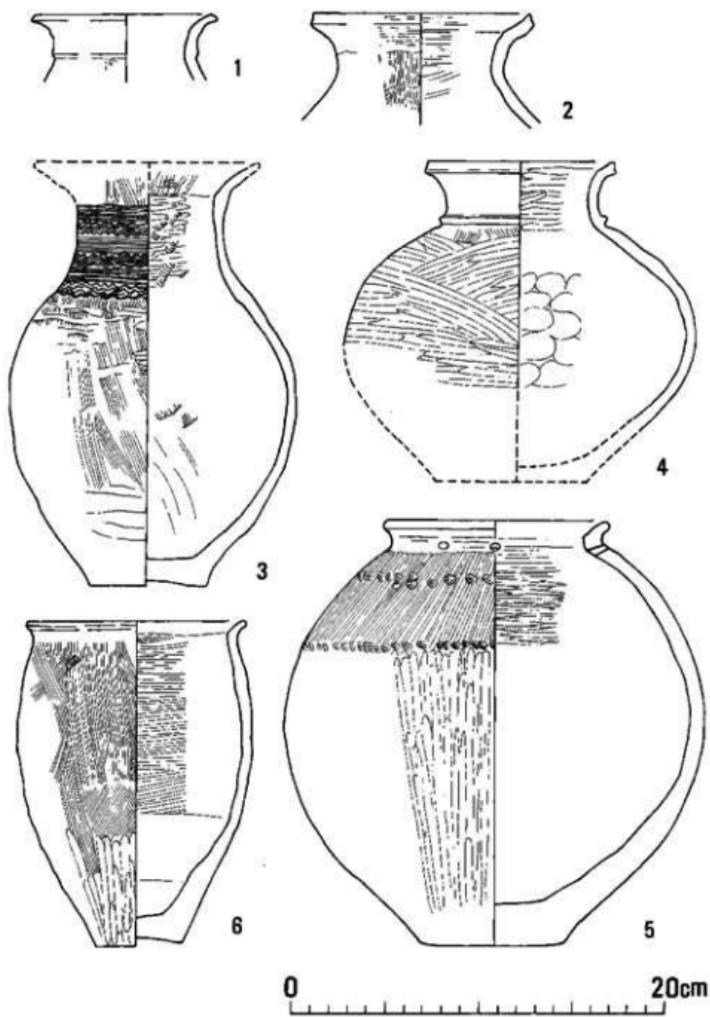


図90 H·F区出土泥生土器 2

(2) 古墳時代の遺構と遺物

39・40・48・50号の4体の埋葬、H区1層（黒褐色粘質砂土層）の置石遺構、2層（茶褐色砂層）での石組遺構が古墳時代に関連する遺構である。50号人骨は2層（茶褐色砂層）の下端部で出土し、埋葬姿勢・周辺部出土の土器は、古墳時代埋葬の指標となるものである。

埋葬

39号人骨（図78）

41号人骨（仰臥伸展葬）の南に近接して、40号人骨の上方約50cmで出土した。白色砂層の最上層といえる位置で保存は極めて悪い。墓壙は確認できなかった。

人骨は性別・年齢は不明で、埋葬姿勢も充分に解明できない状態であった。埋葬方位はE3°S、頭蓋骨頂水準680cmである。人骨は後頭部と下肢骨・左大腿骨・脛骨が遺存した状態で、保存状態は極めて悪く砂中に埋葬されているのに竹ヘラで検出するにも困難な状態であった。大腿骨・脛骨とともに骨体部分のみで、大腿骨の下端は脛骨より僅かに高い位置にあり、脛骨は水平の状態であった。この状態で埋葬姿勢を考えることは困難であるが、仰臥伸展葬と考えて誤りあるまい。

40号人骨（図78、図版103・124）

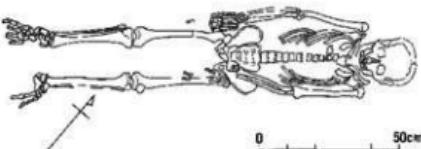
1層（白色砂層）出土。41号人骨（仰臥屈葬）の南に近接して出土したが墓壙は確認できなかった。人骨は女性・成年、仰臥伸展葬、埋葬方位E30°S、頭蓋骨頂水準630.4cmである。骨の生理的位置関係は正常で、右上肢骨・頸椎・胸椎などが消失している。頭蓋骨は左に僅かに傾いている。左上腕骨は体側に沿って伸ばし、前腕の桡骨・尺骨は完全に折り曲げて肩部を向いている。腰椎が微かに残り骨盤も相当部分が消失しているが、大腿骨頭が結合する窓臼を中心には遺存している。左下肢骨は大腿骨・脛骨・腓骨と直線的に伸ばし足根骨に達している。右大腿骨は下端部分が左大腿骨に接するように曲げられ、脛骨の上・下端が消失してしているが幸うじて遺存し、足根骨は左足根骨に平行する位置にある。埋葬は水平に行われている。

48号人骨（図91、図版125）

35号人骨の北東部の白色砂層（第4層）の上半部から出土したが、墓壙は確認できなかった。人骨は女性・若年、仰臥伸展葬、埋葬方位N50.5°S。頭蓋骨頂水準673.7cmである。骨の位置関係は正常で遺存状態は比較的良好である。頭蓋骨は上を向き、右上肢は体側に沿って伸ばし、手根骨は大腿骨の上端に達している。左上腕骨も体側に沿って伸ばしているが、前腕はやや内に曲げ、窓臼上に達している。手根骨は大腿骨頭上にある。埋葬時に腸骨翼の上にあった桡骨・尺骨の下端部が腐敗とともに窓臼内に滑り落ちたのであろう。下肢骨は平行して完全に伸ばし、足根骨は少しばかり左右に開いている。水平に埋葬されている。

永井の記録によると、右下顎のM3（第3大臼歯）は既に萌出しているが、頭蓋縫合は完全に離

図91 48号人骨出土状態



開し、上腕骨の近位骨端線、大腿骨遠位骨端線が明瞭に認められるので、15歳位から20歳の間、恐らく17、8歳と考えられるとしている。残存歯には年齢に比して齶齒が多く認められ、さらに左足根月状骨と楔状骨とに病的癒合が認められたとしている。また上顎右大歯(C)の風習的抜歯を確認している。

50号人骨(図92、図版126)

第1次調査で作製したB-1～C区トレンチ東南壁断面間に平行して第2層(茶褐色砂層)下端から出土した人骨である。この附近では第2層は茶褐色と白色の砂が混じり斑入りの状態になっている。墓壙は確認できなかった。骨の遺存状態は良いとはいえない。

人骨は男性・熟年、仰臥伸展葬、埋葬方位N52°E、頭蓋骨頂水準701.4cm。頭蓋骨はやや右に傾き、脊椎の線と乖離しているかのようにみえるが、頭蓋骨の右への傾きからすると異常とはいえない。右上腕骨は体側に沿って伸びし、橈骨・尺骨は内に曲げて寛骨に達している。左上腕骨も体側に沿って伸びし、下端部でやや離れているが、指骨が大転子に沿った位置で出土している。骨盤の遺存状態は良くないが大腿骨頭頃との関係は正常である。両下肢骨は平行して真っ直ぐ伸びし、右足骨が外に開いているが異常ではない。水平に埋葬されている。風習的抜歯はない。

右足外方10cm、埋葬水準672cmで足骨のみ発見した。ほかに関連した人骨は存在しないので番外2号として整理した。

50号人骨関連上器(図93)

50号人骨の周辺で須恵器・土師器を確認した。恐らく墓壙を掘り込んだ際に混入した土器と考えられる。

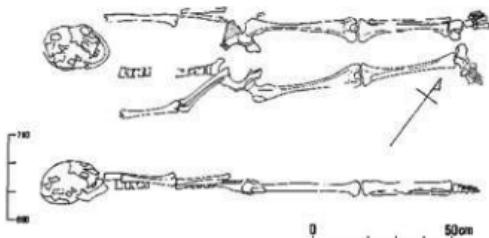


図92 50号人骨出土状態

須恵器壺(図93-1)。壺の小片で、口径12.0cm、推定器高4.0cm、蓋受けの立ちあがりは垂直に近く、口唇部は丸味を持っている。受部は斜めに短く伸びている。器壁は灰青鼠色で胎土は良好、焼成も良い。調整は口縁部内外面ともに横ナデで、外面底部はヘラ削りである。6世紀後半の土器。

土師器壺(図93-2~4)。2は16.7cm、口縁部は厚味があり緩く開いている。器壁は淡茶褐色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良好である。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、外面は継ハケ目で整え、内面はヘラ搔取りである。ハケの最大幅は3cmである。3は口径19.5cm。口縁部は緩く外反している。器壁は淡茶褐色、胎土中に小砂が含まれ、焼成はやや弱い。調整は外面は剥落が著しく観察が不可能であるが、口縁部内面は横ナデ、そして丁寧な横方向のヘラ搔取りである。4は口径31.4cmの大型壺の小片である。器壁は灰白褐色、胎土は良好で焼成も良い。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、内面は丁寧な横方向のヘラ搔取りである。この3点の上部器は6世紀後半~7世紀の上器と考えられる。

これらの土器は基本的に第1層に包含される上器群である。第1層には8世紀に下る土器も含まれているが、50号人骨の周辺からは出土しなかった。偶然の結果の可能性も考えなければならないが、現状では50号人骨男性・熟年・仰臥伸展葬は後期古墳時代人と考えなければならない。

番外 1号人骨

50号人骨の北寄りの黒褐色粘質砂上層(第1層)中、表面から約80cmの深さで新規に包んだ人骨を発見した。恐らく砂取り中に発見した人骨をまとめて内埋葬したのである。出土地点・層位・埋葬姿勢・埋葬方位など不明であるが、上顎左侧切歯(I₁)と犬歯(C)に風習的抜歯が認められた。

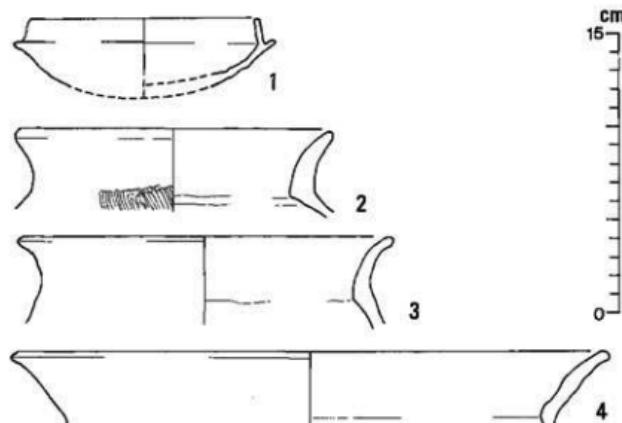
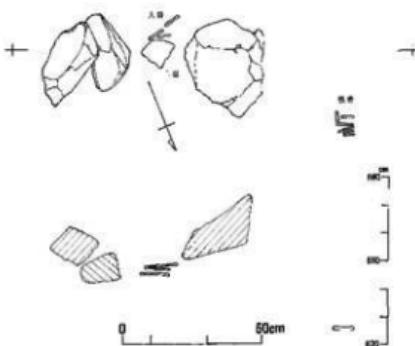


図93 50号人骨関連土器(須恵器・土師器)

H区1層石群（図94）

H区1層（黒褐色粘質砂土層）で発見した石群である。二組3個の石からなり、間隔は20.0cmである。東の石は横34.6cm、縦23.0cm、厚さ14.0cmでやや斜めに沈んだ状態で、西の石は横31.0cm、縦12.0cm、厚さ10.3cmと横26.6cm、縦12.6cm、厚さ10.0cmの2個の石が一部が重なった状態で出土した。出土状況からみて地上標識としての置石の可能性を考えて調査したが墓壇も検出できなかった。石の間に土器片と骨が出土したが、骨は人骨であるのか獣骨なのか判断できない状態であったし、土器も時期を判断することはできなかった。骨が人骨だとしても埋置したと考える深さではない。黒褐色粘質砂土層の有機質含有の程度から考えて骨が遺存する可能性は低い。また東側の石の北西部から石組より約10cm深い位置から獸骨が出土したが石組との関係は把握できなかった。2組の石群の位置から考えて、幼小児の埋葬を充分に考えることができるが、埋葬として断定する材料が充分ではなかった。



石組造構（図95）

H区2層（茶褐色砂層）で出土した造構で、第1次調査（1961年）に調査した右組造構と連続すると考えられ、岡上復原の結果、石組の間隔は約1.70mである。石組の東北部分の右8個は砂取り作業で下を抉られて崩落していた。石組造構の出土範囲は南北に2.46m、東西2.30m、南西に約92cm離れて3個の石が点在している。石組は全体に散漫な状態にみえるが基本的には長辺を傾斜面に対して横方向に置いて、積み上げたというよりも斜面に敷き並べた状態である。これは第1次調査で確認したことと同じである。また、斜面の傾斜度は約30°で、第1次調査時の傾斜度が22~35°であったこととも違和感はない。ただ調査範囲が狭かったことによって土器の出土も少なく、人骨の出土は見られなかった。南西部の右については石組の傾斜面との関連から右組造構の一部であるといえる。

G・H区1層出土土器（図96）

須恵器は6世紀後半から7・8世紀、土器は6世紀後半から7世紀の土器を中心に出土地してい る。

須恵器蓋坏（図96-1～4）。つまみの無いものと、つまみの有るもののが出土している。1は口

径12.8cm、現存器高3.1cm。口縁部は開き、口唇部は尖り気味で、天井部との境に凸線がある。器壁は青鼠色、胎土は良好で焼成も良い。調整は口縁部内外面ともに横ナデである。6世紀後半の土器。2は環状のつまみを持つもので、口径13.0cm、器高3.0cm。身受は小さく直立して、つまみ部の径は4.0cmであるが低平である。器壁は黒鼠色、胎土に小砂が含まれているが焼成は良い。調整

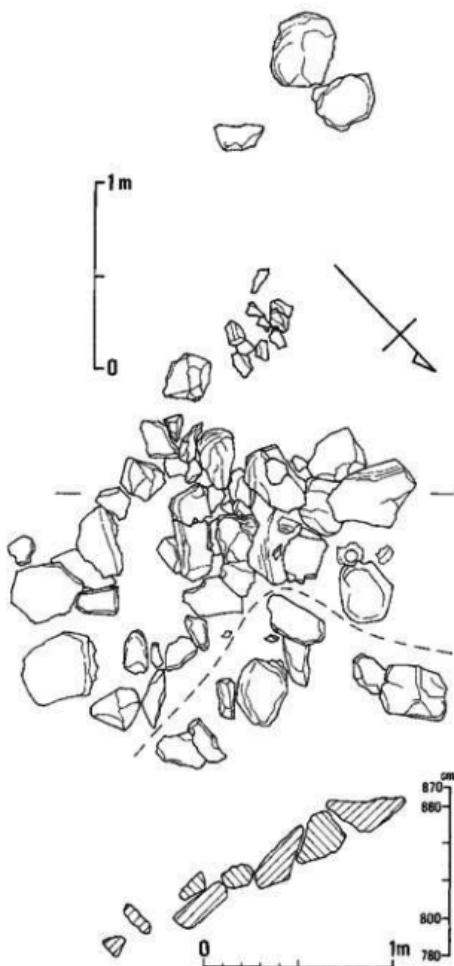


図95 G区石組遺構

は外面に灰緑色の自然釉があり観察できないうが、内面は横ナデ、天井部は縦ハケである。7世紀後半の土器。3は口縁部の破片である。口径16.0cmと大形で、口縁部は内に折れ曲がるように立っている。器壁は黒鼠色、胎土中に小砂を含んでいるが焼成は良い。調整は内外ともに横ナデである。7世紀後半の土器。4は口径16.0cmの人形で、口縁部の内面に鈍い突起がある。器壁は黒鼠色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は残存部分で横ナデである。8世紀後半の土器。

須恵器坏 (図96-5~12)。蓋受けの有るものと(5~7)、無いものがあり、高台の無いものと有るもの(9~12)がある。5は口径11.4cm、器高4.5cm。蓋受けの立ち上がりは高く内傾し、受部は短く斜めに伸びている。器壁は灰白色、胎土は良く焼成も良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、底面はヘラ削りで、内底面は縦ナデである。6世紀後半の土器。6は口径11.6cm、器高3.8cm、扁平な感がある。蓋受けの立ち上がりは内傾し短い。器壁は黒鼠色、胎土は良好で焼成も良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、

底部はヘラ削りで、内底面は縦ナデである。7は口径11.6cm、推定器高4.0cmで低平な感がある。蓋受けの立ち上がりは内傾し、受部は横に短く伸びている。口縁部と底部の境界に凹線がある。器壁は黒鼠色、胎土・焼成は良い。調査は残存部は内外面ともに横ナデである。6・7は7世紀後半の土器。8は口径11.8cm、器高4.0cm。口縁部は直立に近いが、底部は口唇部で僅かに外反している。器壁は黒鼠色、胎土は精良で焼成も良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、底面は糸切り

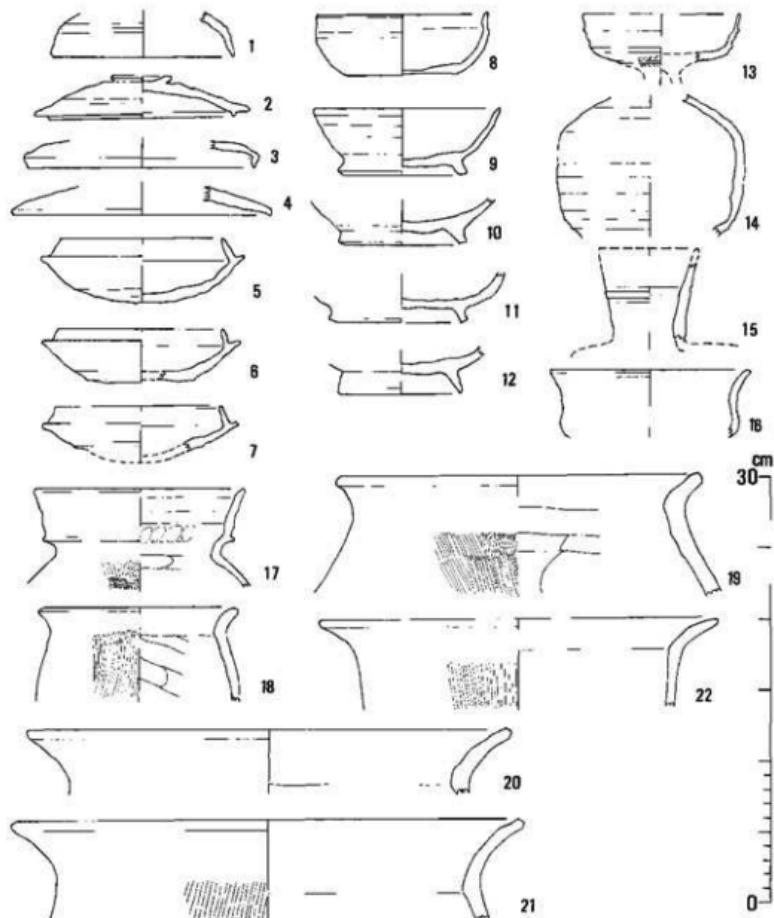


図96 G・H区1層出土土器（須恵器・土師器）

で処理し、その間は糸切り後にナデつけて処理している。8世紀後半の土器。

9は高台の有る环で、口径13.0cm、器高5.7cm、高台内径8.0cm。口縁部は直線的に広がり、口唇部は僅かに外反している。高台は開き厚みがある。器壁は外面は黒鼠色、内面は鼠色である。調整は内底面は綫ナデ、それ以外は外面の高台まで横ナデ、高台は貼り付けている。外底面に筆描きのX印があり、内底面にもヘラ描きの線がある。10は高台内径8.0cm。器壁は青鼠色、胎土中に小砂を含んでいるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、内底面は綫ナデ、外底面はナデつけている。高台の張付け痕が明瞭に残っている。11は高台内径8.7cm、高台内の底面は糸切りで、高台周辺はナデつけている。それ以外は10と同様である。ともに7世紀後半の土器。12の高台は細く高く末端部が尖り氣味である。器壁は黒鼠色、胎土中には小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデと考えられ、内外底面は綫ナデで処理している。時期不明の土器であるが、恐らく8世紀台の土器であろう。

須恵器高坏（図96-13）。高坏部断片。口径10.9cm、口縁部は直立に近い。口縁部下に断面三角形の凸線、底面近くに突線があり、その下方にクシ刺突による羽状の文様がある。器壁は黒鼠色、胎土は良好で焼成も良い。調整は残存部分では横ナデ。内面は黒色の自然釉が覆っている。6世紀から7世紀の土器。

須恵器長颈壺（図96-14）。首と底部を欠失している。肩部径12.5cm。器壁は黒鼠色、胎土は良好で焼成も良い。調整は内外面ともに横ナデで、外面底部近くにヘラ削りがみられる。6世紀から7世紀の土器。

須恵器横瓶（図96-15）。横瓶の頸部、2本の凹線がある。口縁部・胸部以下を欠失している。器壁は黒鼠色、胎土・焼成とともに良い。6世紀から7世紀の土器。

須恵器碗（図96-16）。口径14.0cm、残存器高4.7cm。口縁部は開き、僅かに膨らみを見せて底部となっている。器壁は白青鼠色、胎土・焼成は良いが焼き歪みがある。調整は残存部では横ナデである。恐らく8世紀の土器であろう。

土師器には壺・小型甕・大型甕・羽釜がある。

土師器壺（図96-17）。複合口縁の壺。口径14.5cm、接合部からの立ち上がりは僅かに開き、口唇部で外反している。接合部は凸線状をなして、肩部にはハケ廿調整の上にクシ描きの平行線文がある。器壁は外面は淡黒褐色、内面は茶褐色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。口縁部の内外面は横ナデ、外面はハケ目で整えている。内面は接合部に指圧痕が規則的に見られ、横ナデ、横方向の丁寧なヘラによる搔取りがある。4世紀の土器。

土師器小型甕（図96-18）。口径13.4cm、口縁部は僅かに開き、肉太の口唇部である。肩部の張りは少なく口径とほぼ同じ位である。器壁は灰白褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は口縁部は内

外面ともに横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面は左上方向のヘラ搔取りである。6世紀後半から7世紀の土器。

土師器大型壺（図96-19～21）。口径25.2cm、口縁部はく字状で肉太である。胴部の張りは強いと考えられる。器壁は明褐色、胎土中に砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は縦・斜め方向のハケ目を短く重ねている。内面は幅広のヘラ搔取りを横方向に行っている。20は口径33.0cm、口縁部は大きく広がり、内面には粘土接合痕が小さな凹凸として残っている。器壁は明褐色、胎土中に砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部内外面ともに横ナデで、内面は横方向のヘラ搔取りが見られる。21は口径35.0cm、口縁部は大きく広がり、内面には粘土接合痕が残っている。器壁は茶褐色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面には横方向のヘラ搔取りが見られる。大型壺は6世紀後半から7世紀の土器。

土師器羽釜（図96-22）。口径27.7cm、口縁部は大きく外反し、胴部の張りは見られない。器壁は淡褐色、胎土中に砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面は横方向の丁寧なヘラ搔取りの後にナデを行っている。6世紀後半から7世紀の土器。

G区2層出土土器（図97-1～21）

2層（茶褐色砂層）出土の土器は、弥生上器・須恵器・上師器がある。1・2、11・14・15は石組造構に関連して出土した。

弥生土器壺（図97-1・2）。1は石組上から出土した複合口縁壺。口径14.1cm、立ち上がりは外反し、弯曲する体部の内側に粘土を張り付けて立ち上げている。器壁は茶褐色、胎土は精良、器壁は薄く焼成は良い。調整は口縁部外面は横ナデ、内面はハケ目で整え、その後に丁寧な横方向のヘラの搔取りをしている。2も石組上出土の複合口縁壺。口径19.4cm、立ち上がりは良く伸び大きく開いて接合部は突堤状をしている。器壁は明褐色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部から外面は横ナデが接合部までおよび、内面はハケ目と斜め上方向へのナデである。1・2ともに弥生時代後期末の土器。

須恵器蓋杯（図97-3～8）。身受の無いものと身受の有るものがある。3は口径12.9cm、口縁部は直線状に開いて、口唇部は短く曲がっている。口縁部と火井部の境界には突線がある。器壁は淡黒色、胎土・焼成とともに良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデである。5世紀後半の土器。4は口径13.3cm、器高4.1cm、口縁部は直立に近く口唇部内面に段の痕跡がある。器壁は黒臘色、胎土・焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面天井部はヘラ削り、内面天井部は縦

ナデである。5は口径15.0cm、器高4.8cm、4と形態的にも大きな相違ではなく、器壁が青鼠色である点が異なる。調整もほぼ同じである。6は口径15.7cm、器高6.1cm、口縁部は直立に近く、口唇部内面の段の痕跡は希薄である。器壁は灰白鼠色、胎土中に小砂が含まれているが、焼成は良い。

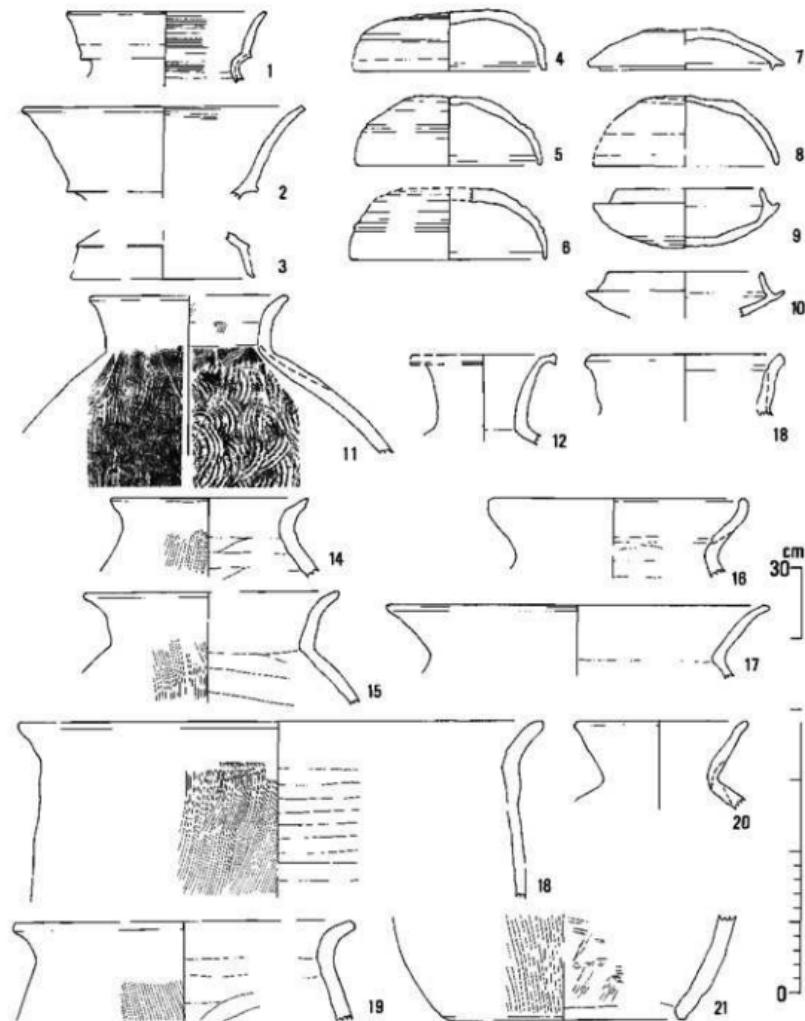


図97 G区2・3層出土土器（弥生土器・土師器・須恵器）

調整は4と変わりない。4・5・6は6世紀後半の土器。7は身受けがある。口径12.0cm、器高2.8cm、扁平感が強い。身受けの立ち上がりは小さく短く内傾している。器壁は青鼠色、胎土・焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面大井部はヘラ削りの後に板刃の敲き痕、内面大井部は継ナデである。8は口径12.9cm、器高4.9cm。口縁部はやや開いて、口唇部は尖り気味である。器壁は青鼠色、胎土・焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、大井部はヘラ削り、内面天井部は継ナデである。7世紀後半の土器。

須恵器壺（図97-9・10）。9は蓋受けが有る。立ち上がりは内傾し太く、口唇部は尖り気味である。器壁は青鼠色、胎土中に小砂があるが焼成は良い。調整は口縁部外側、内面は中心部付近まで横ナデ、外面底部はヘラ削り、内面中心の小部分が継ナデである。10は口径10.7cm、推定器高は2.7cmで扁平な感がある。蓋受けの立ち上がりは比較的高く、口唇部内面には斜めの面がある。とともに7世紀後半の土器である。

須恵器壺（図97-11）。石組下端から出土。口径15.7cm。口縁部は僅かに開き、口唇部は丸味があり、全体に土師器のような感がある。胸部は球状をなしている。口縁部の粘土張付けを窺うことができる。口縁部の内外面はともに横ナデ、外側は平行叩き、内面は同心円叩きで調整している。器壁は黒青鼠色、表面は灰緑色の自然釉で覆われている。時期は不明である。

須恵器提瓶（図97-12）。口径10.0cm、口縁部は外反し、口唇部は上下に肥厚している。器壁は青鼠色、胎土・焼成とともに良い。残存部の調整は横ナデ、内面に接合痕がある。時期不明。

須恵器壺（図97-13）。口径13.2cm、口縁部は肉厚で僅かに開き、口唇部で外反している。内面に粘土の接合痕が凹線となっている。器壁は斑点状の灰緑色自然釉と黒褐色自然釉で覆われている。胎土中に小砂を含んでいるが焼成は良い。調整は横ナデ。時期不明。

土師器壺（図97-14～16・20）。14は石組下端出土。口径13.7cm。口縁部は僅かに開き、口唇部で反転している。器壁は淡茶褐色、胎土中に小砂を含んでいるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外側は継方向のハケ日、内面はヘラによる軽く短い搔取りである。15は口径17.6cm、口縁部は開き、口唇部は外反している。胸部の張りは強い。器壁は明褐色、胎土中に小砂が含まれている。焼成は良い。調整は口縁部の内外面は横ナデ、外側は継方向のハケ日、内面は緩い斜め上方向のヘラ搔取りである。16は口径17.5cm、口縁部は内側に向かって弓曲している。内面に粘土接合痕が残り、接合痕を押された後が凸線となっている。器壁は淡褐色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデで、口唇部に近い部分で右上へのナデがみられる。内面の接合部分から下はヘラナデである。20は口径11.5cm、口縁部は開き、口唇部は丸味をもっている。器壁は明褐色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ。内面にはナデつけがみられる。いずれも5世紀後半の土器。

土師器壺（図97-17～19）。17は口径25.7cm、口縁部は良く広がっている。器壁は茶褐色、胎土・焼成ともに良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、内面は横方向のJ字なヘラ削りである。5世紀後半の土器。18は口径36.5cmの大型壺。口縁部は内厚で僅かに開いている。肩部の張りは殆どなく器壁は薄い。器壁は淡黒茶褐色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外側は斜め方向のハケ目、内面は幅の狭く浅いJ字なヘラ搔取りである。大型で器壁を薄くするための調整と考えられる。5世紀後半の上器であろうか。19は口径23.5cm、大型壺である。口縁部は外反し全体に肉厚である。器壁は明茶褐色、胎土中に砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外側は斜め方向のハケ目であるが剥落が著しい。内面は横・斜め方向のヘラ搔取りである。6世紀後半から7世紀の上器。

土師器瓶（図97-21）。瓶の下半部である。端部径16.0cm、急激に狭めた感がある。器壁は淡灰色で一部黒色、内面は明褐色である。胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は外側は綫方向のハケ目、内面は綫・横方向の短いナデで、末端部分は横ナデで整えている。器壁に肥厚は見られない。恐らく孔部分は欠失しているのであろう。6世紀後半から7世紀の土器。

H区 2層出土土器（図98・99・100）

H区 2層出土の土器を紹介する。器形を中心に分類したために時期の点でやや混乱している。量的には土師器が最も多く、須恵器、弥生土器がそれに続いている。

H区 2層出土土器（図98）

弥生土器壺（図98-1～5）。全て複合口縁壺で後期後葉末の土器である。1は口径16.8cm、口縁部は開き、立ち上がりは上器接合の痕跡であろうか、内外面ともに緩やかな凹凸がある。立ち上がりの接合部は角張っているが突堤状ではない。肩部にクシ描きの平行線文と波状文があり、クシは6本単位で繰り返している。器壁は淡灰褐色、胎土も精良で、焼成も良い。調整は口縁部の内外面は横ナデ、肩部内面はJ字なヘラによる搔取りである。2は口径17.8cm、口縁部は開き、粘土の接合痕であろうか凹凸が連続している。立ち上がり接合部は突線状をしている。肩部にはクシ描きの波状文22本があり、8・8・6単位のクシで繰り返している。器壁は淡褐色、胎土は精良で焼成も良い。調整は口縁部の内外面は横ナデ、外側は弱いハケ目の上に施文している。内面は横方向のJ字な短いヘラ削りで整えている。3は石組の上から出土した。口径18.5cm立ち上がりの広がりは1に近い。接合痕を観察することが可能である。器壁は外側は淡黒色、内面は明淡褐色、胎土は精良で焼成も良い。調整は口縁部の内外面で横ナデ、内面はヘラ搔取りである。4は口径18.5cm、立ち上がりはやや強く開いている。接合部は突線状をなしている。器壁は淡褐色、胎土は精良で焼成も良い。調整は残存部分では横ナデである。5は口径15.7cmと小型である。立ち上がりは良く開き

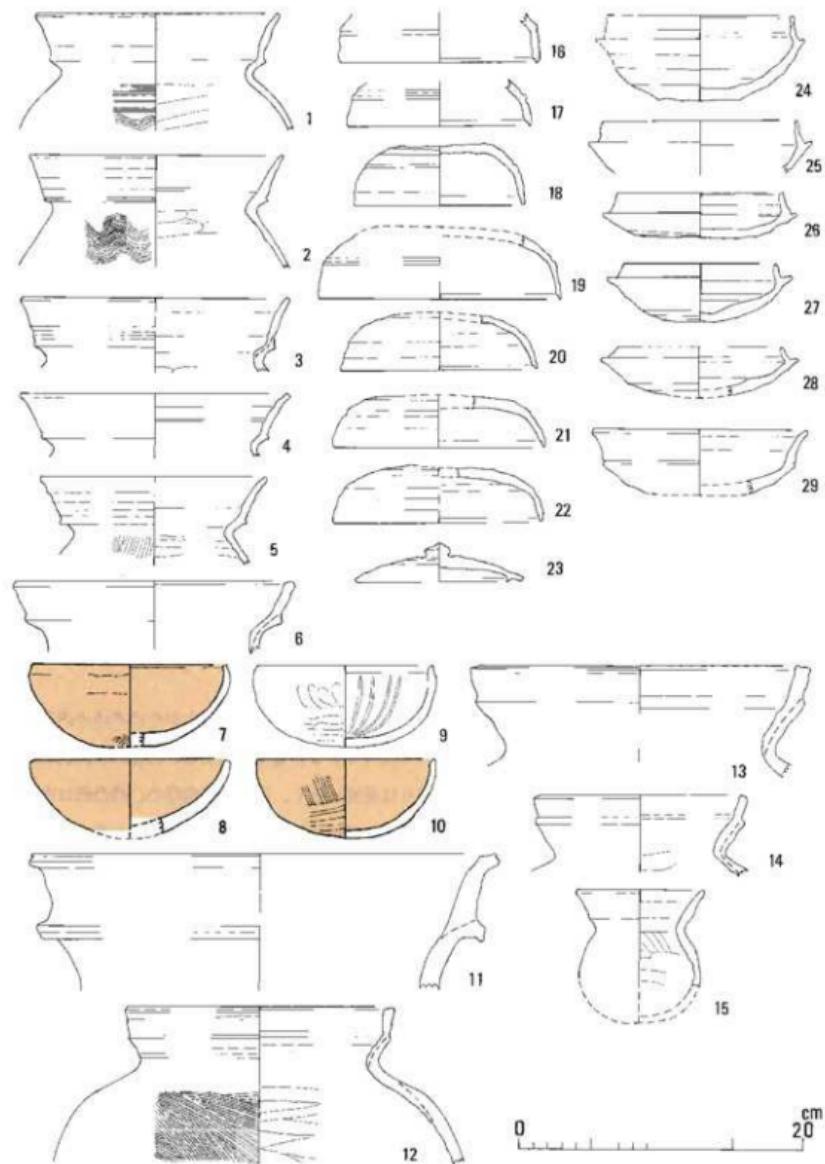


图98 H区2层出土土器（弥生土器・土师器・須恵器）

伸びている。器壁は淡褐色、一部淡黒色、胎土・焼成ともに良い。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、内面は幅の狭い丁寧なヘラ搔取りである。これらの土器は口径15~18cmと規格化されている。胎土も精良な粘土を使用し、調整は横ナデ、ハケ、ヘラ搔取りと技法的に確立している。

土師器壺（図98-7~10）。7は口径13.6cm、器高5.9cm、口唇部が僅かに内傾している。内外面とも丹塗り、胎土・焼成ともに良い。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、外部底面は粗いハケ日、内底面はヘラナデである。8は口径13.5cm、推定器高5.5cm。内外面とも丹塗りである。胎土は黄褐色、焼成はやや弱い。調整は丹塗りのために確認できない。9は口径12.3cm、器高5.8cm。口唇部がつまみあげたように立っている。器壁は明茶褐色、胎土は精良で、焼成も良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデで、指圧痕が残っている。底面にかけて横方向の軽いヘラ削りがみられる。内面には底面から口唇部に向けて放射状の暗文がある。10は口径12.5cm、器高5.5cm。口縁部は直立している。全面丹塗り、片は外底面は縱方向、その他は横方向、内底面を縱方向に塗り、その他は横方向に塗っている。外面は粗いハケ日の後に横ナデ、底面は縱方向の軽い削りの後に周辺を半円状に削っている。胎土は明褐色、削りはやや稚であるが焼成は良い。いずれも5世紀中葉から後葉の土器。

土師器壺（図98-6・11~14）。複合口縁壺で4世紀（11）・5世紀中葉から後葉の土器である。11は大型壺で口径32.5cm、立ち上がりの開きは少なく、口唇部と接合部がコ字状の突帯の様相をしている。器壁は厚く、灰白褐色で内面は灰色、胎土は良く焼成も良好である。調整は残存部では横ナデ、内面の下方部分は横ナデの後に再び軽いナデを行っている。

6は口径19.3cm、立ち上がりの開きは少なく、口唇部は厚味がある。立ち上がりは本体の内側に粘土をはりつけ、本体の先端は明瞭な段状となって残っている。器壁は明褐色、内面は淡黒色、胎土・焼成ともに良い。12は口径18.6cm、立ち上がりは垂直に近く、口唇部が肉厚で、接合部は内外面ともに窪んでおり、本体部分は段として残っている。器壁は明褐色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部から貯部まで横ナデ、内面貼り付け部分は凹凸面となっている。13は口径22.1cm、立ち上がりは開きが少ない。口唇部は幅広く窪みがある。立ち上がりは本体に幅広く貼り付けて製作し、本体部分が段となって残っている。器壁は淡褐色、胎土・焼成ともに良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデである。1964年第4次調査時の1層出土の上器と接合できた。14は口径14.0cm小型の壺である。立ち上がりは短く、開きも少ない。立ち上がりは本体に幅広く張り付けられて頸部以下にまで達している。本体部分は段となって残っている。器壁は灰白褐色、胎土・焼成ともに良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、内面はヘラ搔取りである。

6・12~14は5世紀中葉から後葉の土器。この時期の複合口縁壺の製作技法を知ることができる。

土師器短頸壺（図98-15）。15は口径8.7cm、現存器高6.9cm、推定器高9.4cm。口縁部は開き、複

合口縁の痕跡を残している。胸部の張りは少なく球形で丸底と考えられる。器壁は灰白色、胎土・焼成とともに良い。調整は口縁部から肩部外面は横ナデ、胸部以下は粗いハケ日、口縁部内面は軽い削り、肩部はヘラナデ、胸部以下は斜め上方向の粗いヘラ搔取りである。5世紀中葉から5世紀後半の上器。

須恵器蓋坏 (図98-16~23)。16は口径13.8cm、口縁部はほぼ直立し、口唇部内面に明瞭な段を持ち、口縁部と天井部の境に凹線がある。器壁は灰白色、胎土・焼成とともに良い。調整は残存部分で横ナデである。17は口径12.9cm、口縁部はやや開いているが、口唇部内面に明瞭な段がある。天井部近くに凸線と凹線がある。器壁は青鼠色、胎土・焼成は良い。調整は残存部で横ナデである。18は口径12.0cm、器高4.0cm、口縁部は直立に近く、口唇部内面に段がある。また口縁部と天井部の境に凹線がある。器壁は青鼠色、胎土・焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、天井部はヘラ削りである。この3点の蓋坏は5世紀後半の土器。

19は口径17.0cm、現存器高4.5cm、推定器高5.0cmで大型の蓋である。口縁部は直立に近く、口唇部内面には鈍い段があり、口縁部と天井部の境に窪んだ面がある。全体に低平な感がある。器壁は青鼠色、一部に灰緑色の自然釉がある。胎土・焼成は良い。調整は残存部分では内外面ともに横ナデである。6世紀前半の土器。20は口径13.9cm、推定器高4.0cm。口縁部はやや開き、口唇部は内傾する面となっている。全体に低平な感がある。器壁は黒青鼠色、胎土の中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は天井部のヘラ削りを除くと横ナデである。21は口径14.8cm、推定器高3.7cm。口縁部は直立に近く、口唇部の内面に不明瞭な段がある。全体に低平な感がある。器壁は灰白鼠色、胎土は良く焼成も良い。調整は天井部外側がヘラ削りでそれ以外は横ナデである。22は口径14.6cm、推定器高3.9cm。口縁部はやや開き断面形が蛇頭形をして、全体に扁平な感がある。器壁は黒鼠色、胎土・焼成とともに良い。調整は口縁部から天井部近くまで内外面ともに横ナデ、内面天井部は縦ナデ、外面天井部はヘラ削りである。20~22は6世紀後半の上器。23は身受けと宝珠型つまみが有る。口径9.7cm、器高2.8cm。身受けの立ち上がりは内傾し小さい。器壁は黒鼠色、胎土・焼成は良い。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、外面天井部はヘラ削り、つまみ周辺部はナデつけている。内面の天井部は縦ナデである。7世紀前半の土器。

須恵器坏 (図98-24~29)。蓋受けの有るものと無いものがある。24は石組上面から出土した。口径13.2cm、器高6.0cm。蓋受けの立ち上がりは僅かに内傾し厚味があり、口唇部は平坦な面を持っている。受部は口上に小さく伸びている。器壁自体に厚味があり調整も丁寧に行われている。器壁は青鼠色、胎土中に砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデで、内面は底面の中心部分に近いところまで横ナデが行われている。外面のヘラ削りは幅広で丁寧に行われている。25は口径13.7cm、蓋受けの立ち上がりは内傾し口唇部は丸味をもち、僅かに内弯してい

る。受部は上に小さく伸びている。器壁は白青鼠色、胎土・焼成は良い。調整は残存部分では横ナデである。26は口径11.7cm、器高3.1cm、蓋受けの立ち上がりは内傾し、口唇部は平坦な面となっている。受部は小さく短かく、扁平な坏である。器壁は黒鼠色、胎土・焼成は良い。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、外底面はヘラ削り、内底面は継ナデである。27は口径10.7cm、器高4.0cm。蓋受けの立ち上がりは僅かに内傾し、口唇部は尖り気味である。受部は太く横に伸びている。器壁は黒鼠色、胎土の中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、内面は底面の中心に近い部分まで横ナデがおよんでいる。外底面はヘラ削りで、内面の中心部分は継ナデである。28は口径11.6cm、器高3.6cm。蓋受けの立ち上がりは内傾し太く短い。受部は横に伸びている。器壁は黒鼠色、胎土・焼成とともに良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、内底面は継ナデ、外底面はヘラ削りである。26～28は7世紀前半の土器。29は口径15.0cm、器高4.7cm。口縁部は開いている。器壁は黒青鼠色、胎土・焼成とともに良い。調整は残存部分では内外面ともに横ナデである。時期不明。

須恵器蓋坏・坏の資料は、石組上で出土した坏（24）が5世紀後半に遡り、6世紀後半から7世紀におよんでいる。

H区 2層川土器（図99）

甕型土器・瓶を集成した。弥生土器を1点含むが、土師器甕は5世紀中葉から後葉の群と6世紀後半から7世紀に属する群に分けることができる。瓶はこの群に含まれる。

弥生土器甕（図99-1）。1は口径14.7cm。く字型の口縁部であるが、折れたように開いている。口唇部に凹線1条が巡らされ、口縁部直下にも凹線がある。内面には粘土接合時の本体部分が段のような痕跡となって残っている。器壁は明褐色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は継方向のハケ目、内面はヘラ搔取りである。後期前葉の上器。

土師器小型甕（図99-2～4）。2は口縁部と底部を火している。推定口径は9.8cm、やや開いた短い口縁部が想定される。胴部は良く張り球形である。外面は丹塗り、器壁は明褐色、胎土は精良で焼成も良い。調整はやや粗く、外面はヘラナデで整え、内面には3段の接合痕がある。接合痕はヘラでナデつけ、胴部以下には指圧痕がある。3は口径8.7cm、く字状の口縁部で口唇部は丸味をもっている。器壁は淡紅色で二次的な火を受けている。胎土・焼成とともに良い。調整は口縁部の内外面は横ナデ、外面は斜め方向のハケで整え、横方向に近い短いハケ目で補っている。4は口径9.5cm、く字状の口縁部。器壁は淡褐色、胎土に小砂が含まれているが焼成は良い。口縁部の内外面はともに横ナデ、外面は継方向のハケ目と横方向のハケ目で整えられている。内面は横方向の幅広の

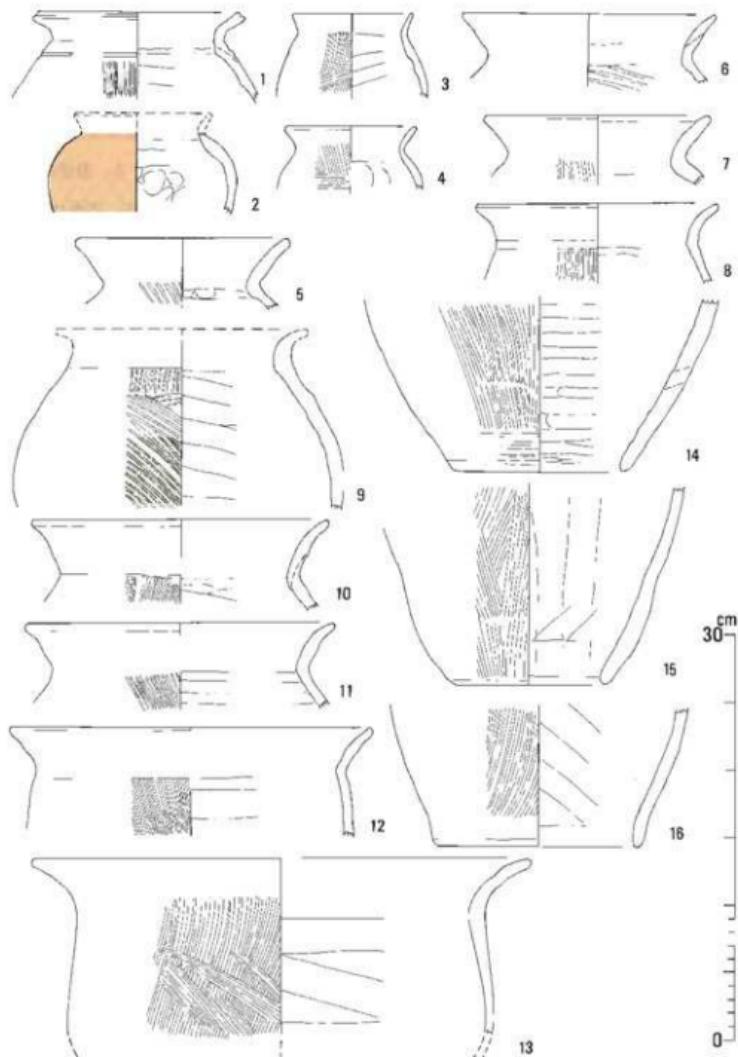


図99 H区2層出土土器（弥生土器・土師器）

軽い搔取りの後にナテている。この3点の土器は5世紀中葉から後葉の土器。

土師器甕 (図99-5~13)。5~8は中型甕、9~13は大型甕。5は口径15.5cm、口縁部は開き、口唇部は良く伸びている。50号人骨の上方から出土した。器壁は明褐色、胎土には小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は極めて粗いハケ目。内面は接合痕が残りヘラナデが見られ、それ以下はヘラ搔取りである。6は口径18.6cm。口縁部は良く開き、接合部の器壁は厚味があり、内面に接合の痕跡が見える。口唇部は丸味を持っている。器壁は淡褐色、胎土には小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、内面は斜め上方向の鋭いヘラ搔取り。7は口径16.3cm、口縁部は良く開いている。器壁は灰白褐色、胎土には砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面はハケ目、内面はヘラ搔取りである。8は口径17.4cm。口縁部は外反し、接合痕であろうか窪んだ面がある。器壁は茶褐色、胎土に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面はヘラ搔取りである。中型甕は6世紀後半~7世紀の土器。

9は口唇部を欠失している。推定口径は18.3cm。口縁部は強く外反している。肉厚の器体で、胸部の張りは強い。器壁は淡紅褐色。胎土には砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面は横ナデ、外面は粗い縦・横・斜めのハケ目で、内面は緩い斜め上方向の丁寧なヘラ搔取りである。10は口径21.7cm、口縁部は良く開いて伸びている。内外面に接合痕が見られる。器壁は明褐色、胎土・焼成は良い。調整は口縁部の内外面は横ナデ、外面はハケ目、内面はヘラ搔取りである。11は口径22.5cm、口縁部は良く開いている。口唇部は器壁がやや薄く、口唇は丸味をもっている。器壁は明褐色、胎土・焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は斜め方向の粗いハケ目、内面は幅の狭い横方向の搔取りである。12は口径26.5cm、口縁部は開いて、胸部の張りは少ない。器壁は外面は淡黒褐色、内面は明淡褐色、胎土・焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は斜め方向と緩い斜め方向の短いハケ目で整えている。13は口径36.5cmと極めて大型である。口縁部は緩く大きく開き胸部の張りは殆どない。器形的には中型甕の範疇に入るといえる。器壁は淡茶褐色、内面は明褐色、胎土には小砂が含まれているが焼成は良い。調整は全体に丁寧で、口縁部の内外面は横ナデ、外面はやや粗い斜め方向のハケ目と緩い斜め方向の細かなハケ目、内面は横・斜め方向の丁寧なヘラ搔取りである。大型甕もまた6世紀後半から7世紀の土器である。上部器蓋型土器の場合、小型甕は5世紀、中・大型甕は6世紀後半から7世紀の資料である。

土師器甕 (図99-14~16)。14は末端部径12.0cm。端部は直線的に窄まり、口唇部は丸味をもっている。器壁には粘土の接合部が2箇所認められるがあまりも間隔が近い。器壁は淡茶褐色、胎土には小砂が含まれているが焼成は良い。調整は端部内面と外面に横ナデがあり、外面は丁寧なハケ目、内面は横方向の幅の狭いヘラ搔取りが丁寧に行われている。出上した破片には孔は認められな

いし、端部内面に肉厚の様子も見られない。15は末端部径11.0cm、14に比較するとやや細身である。器壁は茶褐色、胎土に砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は末端部の内外面に狭い範囲に横ナデが認められる。外而是ハケ目で整え、内面は末端部へ向けて幅広のヘラ搔取り、さらに短い斜め方向のヘラ搔取り、最後に横方向の幅広のヘラ搔取りが見られる。16は末端部径14.5cm。細身でやや絞り気味に端部が形造られている。器壁は茶褐色、胎土には小砂が含まれているが焼成は良い。調整は端部の内外面に横ナデがあり、外面はハケ目で整え、内面は斜め方向の幅広のヘラ搔取りが行われている。

瓶は全体に丁寧に製作されて製作技法も統一されている。出土した破片に孔も端部内面を厚く作り、貯水を留めるためと考えられる部分がない。ただ単に出土した破片に見られないであろうか。6世紀後半から7世紀の土器である。

土師器高坏 (図100-1~26)。坏部に段の有るものと無いものに分類でき、丹塗り暗文が施されているものがある。

1は大型高坏で口径24.0cm、脚接合部の径は4.3cmである。坏は大きく広がり、口唇部で折れ曲がるように開き、段は明瞭で断面三角形の突帯状をしている。器壁は明褐色、胎土は精良で焼成も良い。調整は外面ではまず横ナデを行い、ハケ目で整え暗文を施している。暗文は右上から左下へ、さらに左上から右下へと施している。内面は横ナデ、ハケ目、内底面に中心部分から段の附近まで放射状に暗文を施し、その上方に右上から左下方へ、次ぎに方向を変えて暗文を施している。内外面ともに井桁紋をなしている。調整は横ナデ・ハケ目・暗文の順序である。2は口径18.0cm、脚接合部径3.1cm、脚高7.2cm、脚端部径10.0cmである。口縁部は良く開き、口唇部で一段と開いている。段は三角形の突帯状に明瞭に残り、脚は折れ曲がるよう開いている。坏の内外面、脚外面が丹塗りである。器壁は明紅褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は内底面は中心から外方向のナデ、段から上は横ナデ、外底面は指圧痕がみられる。脚外面は縱方向のヘラナデ。脚端部内面は横ナデ、脚内面はヘラ削りである。暗文は内底面の中心部から口縁部まで放射状に施されている。3は口径16.7cm、脚接合部径3.0cm、脚高6.1cm、脚端部径10.9cmである。口縁部は開いているが、段は余り明瞭とはいえないが、上に凹面として接合痕が残っている。脚は良く開いている。器壁は明褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は坏部外面はハケ目その後に横ナデ、底面・接合部はハケ目、脚部はハケ目の後にヘラ縦ナデを行っている。坏部内面は底面はナデ、それ以外は横ナデの後に暗文を施している。暗文は坏の中心部から口縁部へ放射状に施しているが、口縁部の近くではやや右に傾いている。口縁部脚部内面は端部は横ナデ、脚部はヘラ削りである。4は口径16.6cm、脚接合部径2.5cmである。口縁部は開き、11唇部で一段と開いている。段はコ字状突帯の形で残存している。器壁は紅褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は外面は横ナデの後に暗文を施し、暗文は口縁部で右に寄

曲しているために図上ではS字状をしている。内面は剥落が著しいが、横ナデの後に暗文が底重心央から口縁部へ放射状に施されている。5は口径17.5cm、口縁部の開きは少ない。段は明瞭に残り、下方に小さな突帯状に垂下している。器壁は茶褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は外面は段下方まで横ナデ、それ以下はヘラナデである。内面はナデの後に斜め方向の軽いハケ日、さらにナデを行い暗文を施している。暗文は内底部から口縁部へ放射状に施し、口縁部近くでは右に振っている。内面の調整は横ナデ・ハケ目・ナデ・暗文の順序で行われている。6は口径15.7cm、口唇部で一段と開いている。段は断面で観察できる接合部よりも下にあるが断面三角形の突帯状をしている。器壁は明褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は外面は横ナデ後に斜め方向のハケ日で調整し暗文を施している。段から下はハケ目調整のみである。内面は横ナデ、部分的なハケ目、段から上方に斜め方向の暗文、さらに底重心部から短い暗文が口縁部方向に施されている。7は口径15cm、段は断面三角形の突帯状で垂下している。器壁は明褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は外面では斜め方向のハケ日、それを部分的にナデで消して暗文を施している。内面は口唇部近くに横方向のハケ目を残すようにナデを行い、その後に暗文を施している。ハケ・部分的ナデ・暗文の順序で調整している。8は环口縁部と脚部の大部分が欠失している。推定口径は18.6cm、脚接合部径は3.3cmである。段は断面三角形の突帯状をしている。段の上下と脚部に接合痕が残っている。器壁は明褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は外面は段直下まで横ナデの後に暗文、段の下方はヘラナデである。9も环口縁部と脚部が欠失している。段はあるが顯著ではない。器壁は外面は明褐色、内面は灰白色、胎土・焼成とともに良い。調整は段から上方は横ナデの後に暗文、内面も同様である。10は脚部は欠失している。口径15.0cm、脚部接合部径2.2cmで口縁部は口唇部で一段と開いている。段の上に接合面がある。器壁は明褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は外面は横ナデの後にハケ日、内面は横ナデ、横方向の部分的ハケ日・暗文の順序である。図示した部分での暗文を施す順序は、縦方向の暗文、右斜め方向の暗文、左斜め方向の暗文といえるが、全体では余り規則性は見られない。11も10と同様である。口径14.6cm、段は痕跡程度に残っており、外面は丹塗りである。器壁は明褐色、胎土・焼成は良い。調整は外面は全面に横ナデ、その後は段から上方と口縁部内面まで横ナデを行い、ハケ調整が行われている。内面は横ナデの後に部分的なハケ目、その後に暗文を施している。暗文は右斜め、左斜め、横方向の短い暗文の順序である。13は口径19.3cm。段は僅かに残っている。器壁は外面は淡黒色、内面は灰白色で胎土も焼成も良い。調整は残存部全面に横ナデでハケ日も暗文も見られない。14は輪型の环部で低脚である。口径13.8cm、脚木端部径8.3cm、器高9.6cmである。口縁部の広がりは少なく、环部は口縁の割に深い。器壁は明褐色、胎土に砂粒が含まれ調整はやや粗である。环部内面は横ナデであるが大部分は軽いヘラ削りで整え、外面は口縁部から脚端部までヘラでナデつけている。1~14まで5世紀中葉の土器。

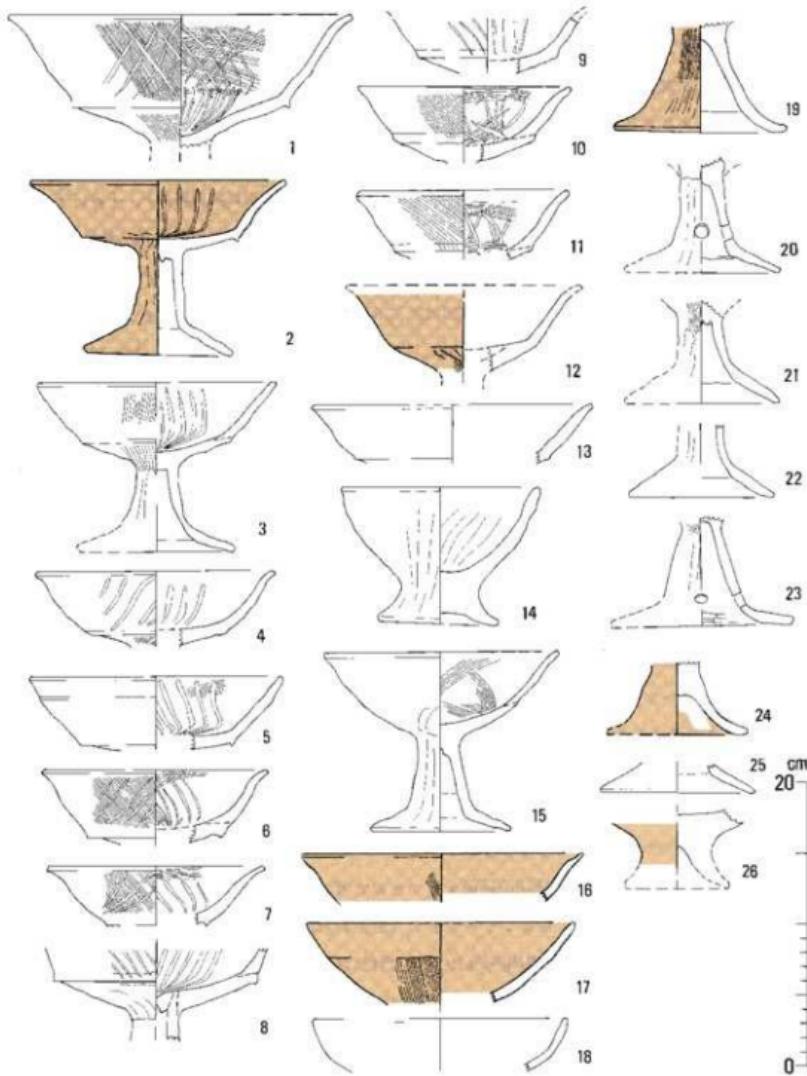


図100 H区2層出土土器（土器）

15は16.5cm、脚接合部径3.2cm、脚端部径9.8cm、器高12.5cmである。口縁部は広がり、脚は折れ曲がるように開いている。接合部の段は痕跡程度で窪んだ面として残っているに過ぎない。器壁は明褐色、胎土・焼成ともに良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、坏接合部分はヘラ横ナデ、それ以下はヘラナデである。坏部の内面には規則性のないハケ凹が見られる。脚部は縦方向のヘラナデ、脚端部の内面は横ナデ、脚部はヘラ削りである。16は坏部片である。口径19.6cm。残存部分は内外面ともに丹塗りである。胎土・焼成ともに良い。調整は口縁部外面は横ナデ、それ以下はハケ凹の後に軽くナデている。内面は全面横ナデである。17は坏部片で口径19.0cm、段の痕跡もない。胎土の中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部は内外面ともに横ナデ、外面には粗いハケ日があり、全面丹塗りである。18も坏部片で、口径17.5cmで、口縁部は開くことなく立ち上がっている。器壁は淡褐色、胎土・焼成ともに良い。調整は残存部分は横ナデである。15～18は5世紀後半の土器である。

19は脚端部径12.0cm、緩やかに開いている。外面は丹塗りで胎土は淡白褐色で良好である。調整は外面が緩ハケの後に横ナデを行い丹を塗っている。内面の端部は横ナデ、ヘラ削りである。20は脚端部径11.0cm、坏部が剥落した痕跡が残っている。脚は折れ曲がるように開いており、直径1.0cmの孔が1箇所だけある。器壁は明茶褐色、胎土・焼成は良い。調整は外面は縦方向のヘラナデの後に横ナデを行い、末端部内面はナデつけており、2箇所に布の压痕がある。筒状部はヘラ削りである。21は脚端部径10.8cm、脚は良く広がり、裾部が内厚である。器壁は紅褐色、胎土・焼成とともに良い。外面の調整は縦方向のハケ目のために縦方向のヘラナデを行っている。内面は末端部で粗な横ナデ、筒部はヘラ削りである。22は脚端部径10.0cm、21に類似した器形をしている。器壁は紅褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は外面は縦方向のヘラナデ、末端部内外面は横ナデ、筒状部はヘラ削りである。23は脚端部径12.3cm、脚端部は折れ曲がるように開き、径9mmの孔が3箇所にある。器壁は茶褐色で一部黒色、胎土・焼成とともに良い。調整は外面が縦方向のハケの後にヘラ横ナデ、末端部はヘラ横ナデである。内面は末端部はヘラナデ、孔の下辺は横方向の短いヘラ削り、筒状部はヘラ削りである。24は低脚で碗状の坏部をもつものと考えられる。脚端部径9.5cm、外面は丹塗りで脚端部内面は部分的に丹を見ることができる。器壁は淡褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は内外面ともに横ナデである。25は脚端部径10.7cm、器壁は灰白色、胎土精良で焼成も良い。26は推定脚端部径7.2cm、脚端部が剥離し低脚の製作技法を知ることができる。外面には月が塗られ、胎土は灰白褐色、胎土の中に小砂が含まれて焼成はやや弱い。調整は観察できない。19～26は5世紀中葉の土器である。

5世紀中葉の高坏では坏部の段が特徴的で突線状をなすものがあるが、次第に不明瞭になり、5世紀後半には段は基本的に消滅する。暗文は低脚高坏では見ることができない。暗文を行う場合の

調整は丁寧に行われ、ハケ・ナデ・暗文、ナデ・ハケ・暗文、ナデ・ハケ・ナデ・暗文の順序で施されている。暗文は坏部の内面・外面、坏部の内面のみに見られ、極めて規則的なものと不規則なものがある。基本的には規則的な施文から不規則な施文へと変化するのであろう。5世紀後半の高坏には暗文は見られない。

土製品土鍤 (図101 1・2)。H区2層出土。長さ5.8cm、最大幅4.0cm、最大厚3.6cm、重さ80g。全体に堵円形で小口部には径8mmの孔がある。器体は茶褐色で一部は黒色、胎土に砂粒が含まれているが焼成は良い。2はH区1層出土。長さ5.6cm、最大幅2.5cm、最大厚2.6cm、重さ36g。器体は紅褐色、胎土・焼成ともに良い。粘土を手で擦りしめてから小口を整えて製作している。

骨角器骨巣 (図87-1)。H区2層出土。先端部が欠失し側面・基部に剥落がある。推定長9.6cm、茎長2.7cm、身幅8~9mm、最大厚さ6mm、重さ4.6g。身は先端部に向けて幅・厚さを減じている。全体に小さな縫があり部分的に剥落しているが丁寧に削り製作している。身の断面は梢円形に近く、基部は径4mmの円形である。時期不明。

石器 (図102-1~4)。1はH区2層出土。敲石。全長13.3cm、最大幅4.1cm、最大厚3.5cm、重さ300g、断面三角形。両端に打痕があり、全体に風化が見られ灰白褐色である。2はH区2層出土。磨石。長さ10.9cm、最大幅7.8cm、最大厚2.6cm、重さ471g。3はG区2層出土。砥石片。長さ9.5cm、最大幅6.1cm、厚さ1.9cm。灰白青色で表面は風化している。上面・右側面に研磨の痕跡を見ることができ、下面是部分的に剥離している。

4もG区2層出土。砥石片。白色、長さ6.2cm、幅4.7cm、厚さ4.5cm、断面は6面体で4面に研磨痕があり、各面は必ずしも平坦ではない。

鉄器鉄鎌・不明鉄器 (図103 1~9)。1はH区2層出土。鉄鎌、両端が欠失している。長さ11.1cm、幅5~6mm、厚さ6~7mm。断面方形、全体に銹化が進んでいる。2はH区2層出土。鉄鎌、両端が欠失している。長さ11.0cm、幅5mm、厚さ6mm、全体に銹化が進んで、断面も変形している。3はH区2層出土。鉄鎌、両端が欠失している。長さ2.5cm、幅7mm、厚さ2mm、断面長方形で銹化が著しい。4はH区2層出土。鉄鎌、両端が欠失している。長さ4.4cm、幅7mm、厚さ4mm、断面長方形で銹化が進んでいる。5~9は不明鉄器で、G区石組上から出土した。一部が欠失している。5・6が同じ形をしており7~9は幅・厚さ・弯曲の程度から同様な個体と考えられる。5は一端に径1.1cm円

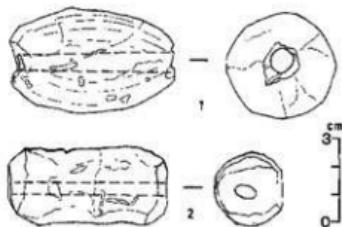


図101 土製品（土鍤）

形に径3mmの孔があり、体部は幅6mm、厚さ2mm、断面長方形で内曲している。石組造構自体一部が砂取りで崩落しており混入の可能性がある。

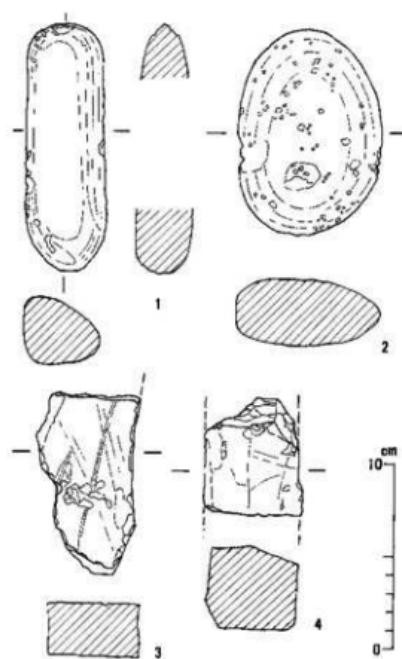


図102 石器（鎌石・砥石）

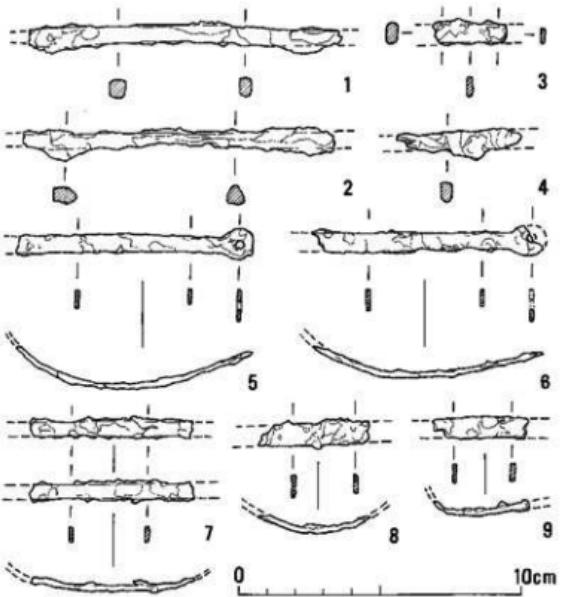


図103 鉄器 (1~4鐵鎌・5~9不明鐵器)

第5節 第4次調査 1964年—昭和39年

(1) 弥生時代の遺構と遺物

仰臥屈葬 6体、仰臥屈葬？ 2体、仰臥伸展葬？ 1体、埋葬姿勢不明 2体が弥生時代人と考えられる人骨である。頭蓋骨に青斑ある人骨、配石・立石、置石を伴う人骨、風習的抜歯をもつ人骨を調査した。60号人骨は中期弥生式土器が副葬され、中期埋葬を明らかにした。

埋葬

60号人骨（図104、図版127）

60号人骨は38号人骨の東から出土した。白色砂層の下部から出土したが墓壙は確認できなかった。

人骨は女性・老年、仰臥屈葬、埋葬方位N64°W、頭蓋骨頂水準は578.4cm、推定身長147.1cmである。頭蓋骨はやや左に傾斜している。前額・前頭崎・鼻部・眼窩周辺から下顎にかけて青斑（第5章図2参照）が見られた。青斑が左側にのみあるのは、頭蓋骨が左に傾斜していたためであろう。

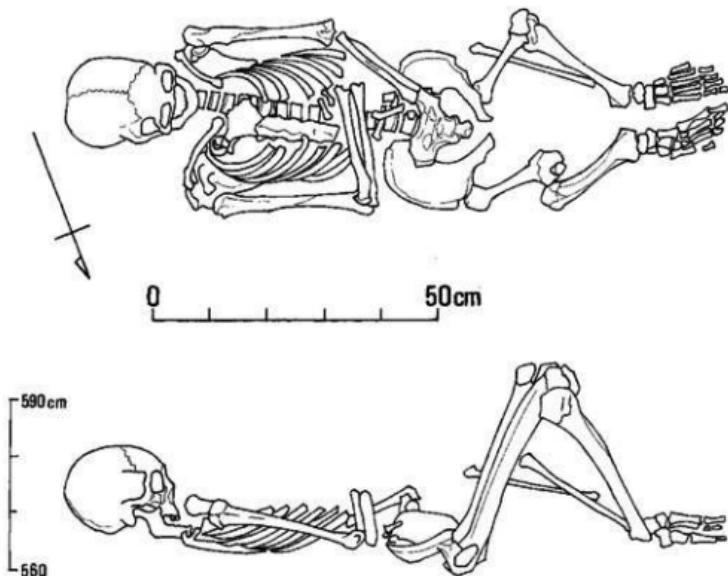


図104 60号人骨出土状態

人骨の遺存状態は良く、人骨の生理的な位置関係に異常は見られなかった。左上腕骨は体側に沿って伸ばし、前腕骨はやや曲げて舟盤上にあり、手根骨は腰椎上から出上した。右上腕骨は体側に沿って伸ばし、前腕骨は直角に曲げて左胸郭の下端に置かれている。左右の下肢骨は足首を揃え、膝を立てた状態で、左右の腓骨は上端部が脱落しているが、良く埋葬時の姿勢を保っている。風習的抜

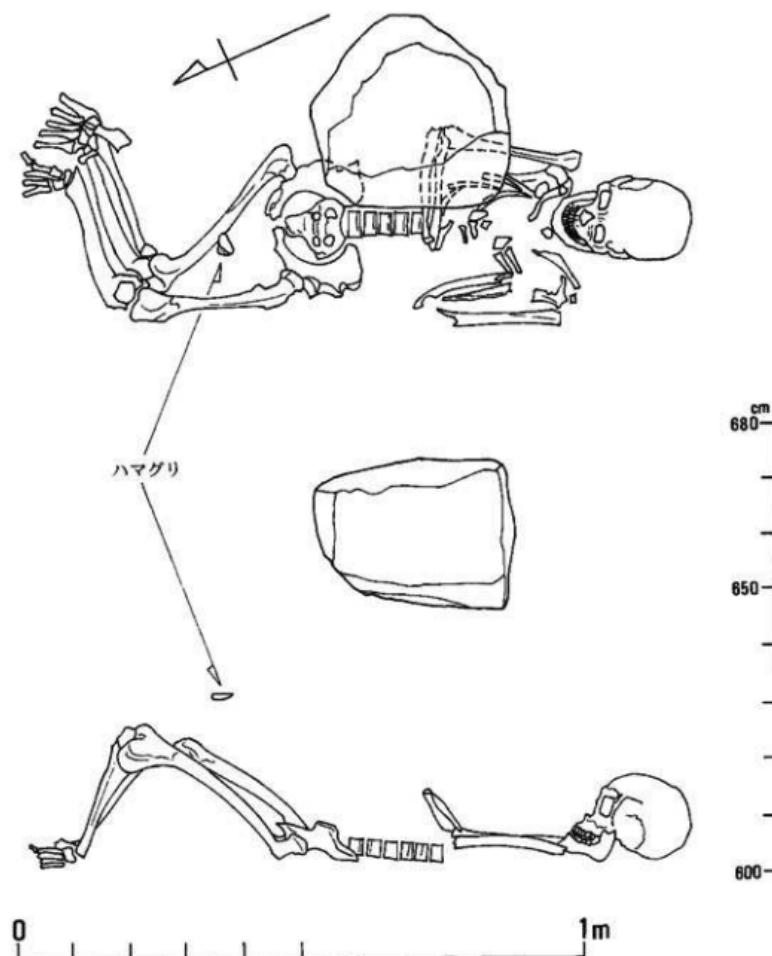


図105 61号人骨出土状態

歯については不明である。副葬品は出土していない。

61号人骨（図105、図版128）

60号人骨の南、42号人骨の東南、白色砂層の上半部で出土したが、墓壙は検出できなかった。

人骨は女性・成年、仰臥屈葬、埋葬方位S24°W、頭蓋骨頂水準617.1cm、推定身長147.9cmである。腹部・右上腕骨上約45cmに置石がある。置石は長さ35cm、幅34cm、厚さ26.6cmである。これが墓壙上面に置かれたとすると、墓壙の深さは約47.0cmと推定される。

人骨の遺存状態は60号人骨よりやや悪い状態で、頸椎・胸椎・肋骨などが消失しているが、埋葬状態を知るには充分である。頭蓋骨は僅かに右を向いている。右上腕骨は体側に沿って伸ばし、前腕骨は屈折して腹部上に乗っている。左上腕骨も体側に沿って伸ばし、前腕は完全に折り曲げて肩部に達している。下肢骨は足首を揃え、膝を立てた状態で、右下肢骨が左に傾斜しているが、埋葬時の状態を良く保っている。右大腿骨の上方約7cmにハマグリが出土した。特に副葬品は伴わなかった。下顎の左右犬歯（C）に風習的抜歯が認められ、上顎の左右犬歯の風習的抜歯の可能性がある。

64号人骨（図106、図版129）

39・40号人骨の東で出土した。白色砂層の上半部で出土したが、墓壙は確認できなかった。

人骨は性別不明・年齢不明、仰臥屈葬？、埋葬方位E47°S、頭蓋骨頂水準651.4cmである。極めて保存状態が悪く、頭蓋骨も後頭骨・蓋底骨、左上腕骨、下肢骨、足根骨が辛うじて遺存しているに過ぎないし、上腕骨・下肢骨も上・下端が消失している。しかし、全体の位置関係に異常はない。

左上腕骨は骨体部分が遺存して体側に沿っている。下肢骨も骨体部が遺存しているのみであるが、完全に平行しく字状に展開している。左足根骨との関連から埋葬時の状態を保っていると考えられる。想定できる骨盤の位置からすると、やや距離があり屈駆の状態ではあるが、膝で曲げて立てた状態とは言い難い。副葬品は伴わなかった。

65号人骨（図107、図版130）

61号人骨の東に近接して出土した。70号人骨の約15cm上方に位置している。白色砂層の上半部で出土したが、墓壙は確認できなかった。人骨の保存状態は悪く歯牙・四肢骨が辛うじて残る程度で

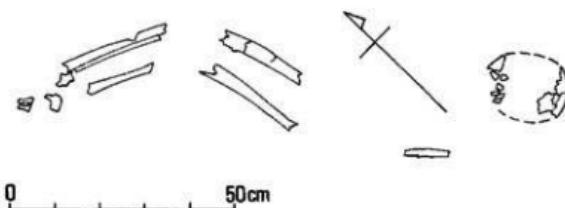


図106 64号人骨出土状態

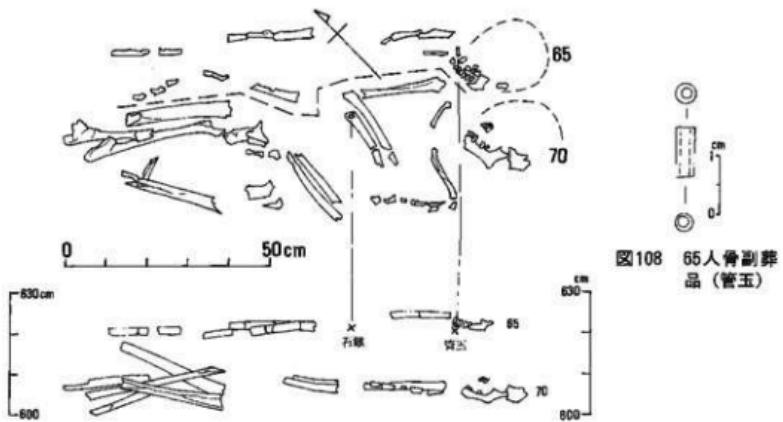


図107 65・70号人骨出土状態

図108 65人骨副葬品（管玉）

ある。

人骨は小児、仰臥屈葬？、埋葬方位E45° S、埋葬水準633.4cm。歯牙の状態から乳歯が永久歯に生え替わる時期の小児である。人骨は右上腕骨は体側に沿った位置にあり、左下肢骨はく字状に曲げた状態で、右大腿骨は真っ直ぐに伸び、右脛骨はやや左にずれた位置にある。殆ど水平の状態で出土しており、仰臥伸展葬の可能性があるがあえて仰臥屈葬とした。次ぎに触れる右鏡がこの人骨との関連が強いことも弥生人骨で仰臥屈葬であることを裏付ける。

副葬品として右肩部、歯牙より僅か下で碧玉製管玉（図108）、左対骨にあたる位置から右鏡1（図109-2）が出土した。出土水準は管玉・右鏡はほぼ同一水準で出土している。

碧玉製管玉（図108）。長さ8.85mm、径3.6mm、孔径1.9mm・2.0mm、0.169g。暗緑色で全体に艶がある。小口はやや角のある円形である。

石製品右鏡（図109-2、図版147左）。サヌカイト製右鏡、5角形平基、長さ1.3cm、基部幅1.3cm、厚さ2.5mmである。

66号人骨（図110・111、図版131～137）

66号人骨は63号人骨の南東部に位置している。石組造構の実測を完了して北東部から石を除去し、途中で断面写真撮影のために灰黒色砂土層（第3層）と白色砂層（第4層）を調査したところ、白砂層で弥生前期土器群（A土器群）を発見した。さらに灰黒色砂土層と白色砂層の境界で右群

を発見し、それが66号人骨に伴う列石（図版131・132）であることが明らかとなった。この列石は地上標識として白色砂層の上面近くに位置し、灰黒色砂土層（第3層）の形成によって埋没したと考えられる。それは白色砂層の形成の最終時期を推定することを可能とし、第3層形成の時期に一定の時間を与えることになる。

列石8個（図版133）は長軸を横位置にL形に並べ、北側に4個、西側（海側）に4個を配置している。北側は4個の石を僅かに間隔を開けたり重ねたりしながら約1m、西側は北側の石よりやや大型の4個の石を密接した状態で約2m、北に1個の石がやや離れて配置されている。いずれの石も余り高低差がないように設置されており、それは冬季の西・西北の風や飛砂に対する配慮なの

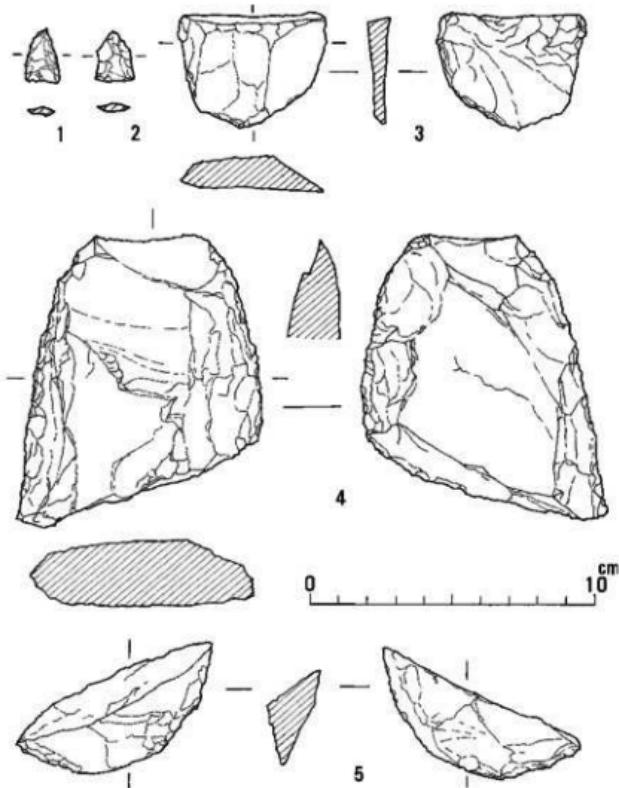


図109 石器（石鎚・石斧）

- 1 A土器群伴出
- 2 65号人骨剖群
- 3 65号人作壁部上
- 4 66号人骨伴出
- 5 66号人骨下層

であろうか。

北側列石のほぼ中央部、約15cm離れた位置に、南に傾いた長さ60cm、最大幅20cmの石が、その南側に2個の板石が置かれていた（図版134）。この60cmの石は地上標識として本来は直立した状態に設置されたと考えられ、また2個の板石は立石の基礎を支えるために置かれたのではないだろうか。

立石の東側の基部に近接して弥生土器壺（図版135）が供獻されていた。壺型土器の底部は60cm東に離れた位置で出土した。また南東部で人骨と同じ水準で打製石斧（図109-4）が出土した。この他に2点の土器が出土したがこの埋葬との直接的な関連はないと考えられる。

人骨は保存状態が悪く埋葬姿勢も明らかにできない状態であった。人骨は男性・熟年、仰臥伸展葬？、埋葬方位N2°E、頭蓋骨頂水準605.4cmである。人骨はL型列石の西寄りに、頭部を北に向けて埋葬されていた。列石の下端、立石下端、2個の板石からの深さは10cm程度でそれを墓壙の深さに

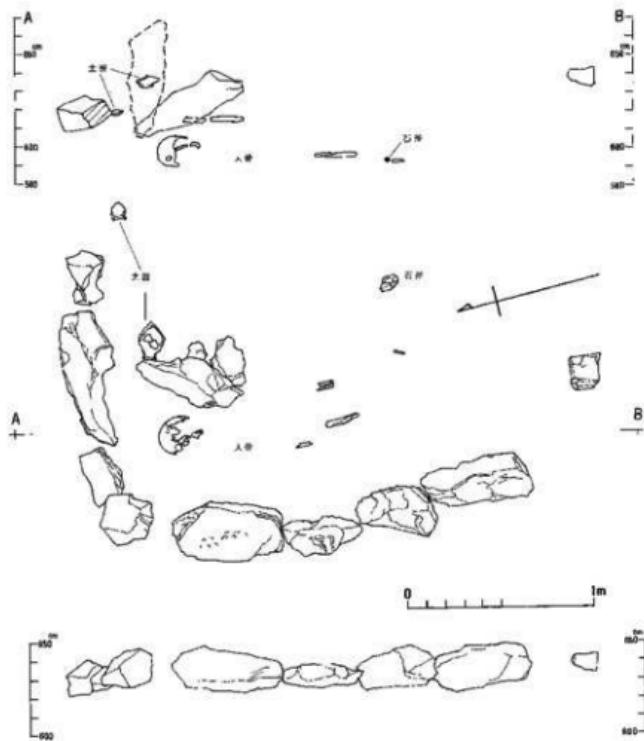


図110 66号人骨出土状態

近いとすると、頭蓋骨が露出する状態で脳を立てた屈肢の状態では埋葬できるとは考えられない。少なくとも盛土の存在を考えなくてはならないが、仰臥屈葬の可能性は低いと考えざるをえない。

頭蓋骨は左に僅か傾き、顎面は肩触し、下頸も右半部、右上腕骨・左右人腿骨・左脛骨の骨幹部分が少うじて残っている状態である。右上顎犬歯（C）は風習的抜歯が行われ、その他の犬歯については明らかにできなかった。

供獻上器から弥生中期中葉の埋葬であることは否定できない。埋葬姿勢については地上標識との関連から仰臥伸展葬を想定しなければならない。前期の仰臥屈葬から中期には仰臥伸展葬へと変化したのであろうか。

66号人骨供獻土器（図111・1～3、図版136・137）

1は立石基部東側に供獻された壺型上器で、底部は東に60cm離れた位置で出土したが、供獻時に底面が径約4.0cmの円形に打ち抜かれている。口径7.3cm、器高16.6cm、胴部最大径14.3cm、底径6.0cm、凹底である。口縁部は直立し、口唇は僅かに丸味をもち外傾している。胴部の張りは強く、垂露状をしている。底部は腰高で後に触れるように特色のある技法で製作されている。器壁は淡灰白褐色、上胴部から底部にかけて1/3が黒斑となっている。胎土は精良で焼成も良い。口縁部から底部は1/4、胴部1/3が欠失している。

調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、肩部から胴部にかけては縦ハケ日で整え、梯状器具で刺突文を施している。その後、胴部から下に縦方向の短いヘラナデ、最後に胴部に短い横方向のヘラナデを行い、刺突文と縦方向のヘラナデの一部を消している。底部は指圧痕がみられる。底部の製作は器体底部は丸底を作り、その中央に円筒形の粘土塊を貼り付け、側面から粘土帶で補強し、さらに底面に粘土を張り付けて凹底として完成している。内面は肩部から胸部にかけて指によるナデあげ、胸部以下はハケによる調整である。

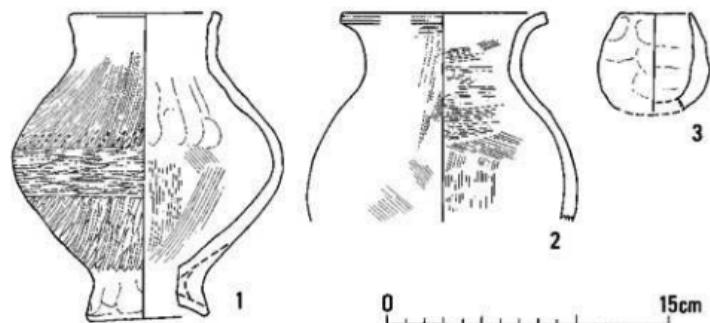


図111 66号人骨副葬・関連弥生器

底部の打ち抜き（図版137）は供獻時に行われたと考えられ、器体の一部の欠失も供獻時の儀礼との関連があると考えなければならない。

2は66人石岡中出土の壺形土器で、出土地点・水準も不明である。約1/4の破片で口徑10.9cm、胴部最大径14.6cm、残存器高11.3cmである。口縁部は開き口唇部に凹線がある。胴部の張りは強く全体に倒卵形をしていると考えられる。器壁は淡黒灰褐色、胎土の中に小砂が含まれ、焼成はやや弱い。調整は口縁部内外面はともに横ナデ、外面は頸部から胴部はヘラ縦ナデ、胴部以下はハケヒ。内面は横と縦方向のハケ目で整えられている。中期後葉の土器。3は手づくね土器で1/3の破片である。口徑3.9cm、残存器高5.1cm。全体に肉厚であるが僅かに内傾する口縁部は薄く尖っている。器壁外面は灰黒褐色、内面はやや白味を帯びているが全面赤褐色である。胎土には微小な砂粒が含まれ焼成はやや弱い。内外面ともに指圧痕があり手づくね土器である。出土層位から弥生前期後葉の土器と考えられる。2点の土器は偶然に66号人骨の埋葬施設の範囲から出土した上器で、埋葬に直接関連のないことは上器の時期で明らかである。また打製石斧もII土地点が墓域外であり、人骨と同一水準から出土していることを合わせ考えると、副葬品ではなく白色砂層中に散在していた石斧が偶然列石で埋め込まれ、II土したとするべきである。

66号人骨関連石器（図109 4・5）

4は66号人骨石岡中で出土した、サヌカイト製の板状打製石斧である。II土状態から考えて先に触れたように、副葬品とはできない。長さ10.4cm、最大幅8.3cm、厚さ2.3cm。刃部と頭部の一部を欠失しているが、両面ともに丁寧に加工されている。

5は66号人の下脛から出土したサヌカイト製の板状打製石斧刃部の一部である。長さ3.5cm、厚さ1.7cm。両面ともに丁寧に加工され摩耗は殆ど見られない。4と同一個体と考えられるが接合することはできない。

『日本の考古学』Ⅲ 和島誠一編「弥生時代」で藤田等が担当した「埋葬」311頁 昭和41年1月 河山書房新社 に列石墓の一例とした66号人骨埋葬遺構は南北が逆に図示されている。訂正しお詫びします。

67号人骨（図112、図版138）

65・70号人骨の東南から出土した。また、67号人骨・68号人骨は一部が重複し、69号人骨は北側に近接して出土している。

67号人骨は白色砂層（4層）上半部で発見されたが、墓壙は確認できなかった。人骨の保存状態は良く埋葬状態を知ることができる。人骨は男性・熟年、埋葬方位N35°E、頭蓋骨頂水準579.9cm、推定身長167.2cmである。

67号人骨は、頭蓋骨、頸椎、右上腕骨の上半部が、68号人骨の頭蓋骨・胸部・左上腕骨の上半部

と重なった状態で出土したが、人骨の位置関係に異常はない。頭蓋骨は完全に行を向いている。左右の上腕骨は体側に沿って伸ばし、前腕は肩部方向に完全に屈曲して、両手根骨は胸郭上にある。左下肢骨は足方に傾き右脚骨と交差する状態であるが、足根骨の位置から屈筋状態で埋葬され腐敗時に足方に傾いたと考えられる。右下肢骨は屈筋の状態で、膝骨も埋葬時の位置にあり、仰臥屈葬の状態を良く保っている。埋葬時には墓壙底部に傾斜があり足方が約7cm深くなっている。風習的抜歯については不明である。副葬品・供斎品は出土しなかった。

68号人骨（図112、図版138・139）

67号人骨と一部が重複して白色砂層の上半部で出土したが、墓壙は確認できなかった。また重複

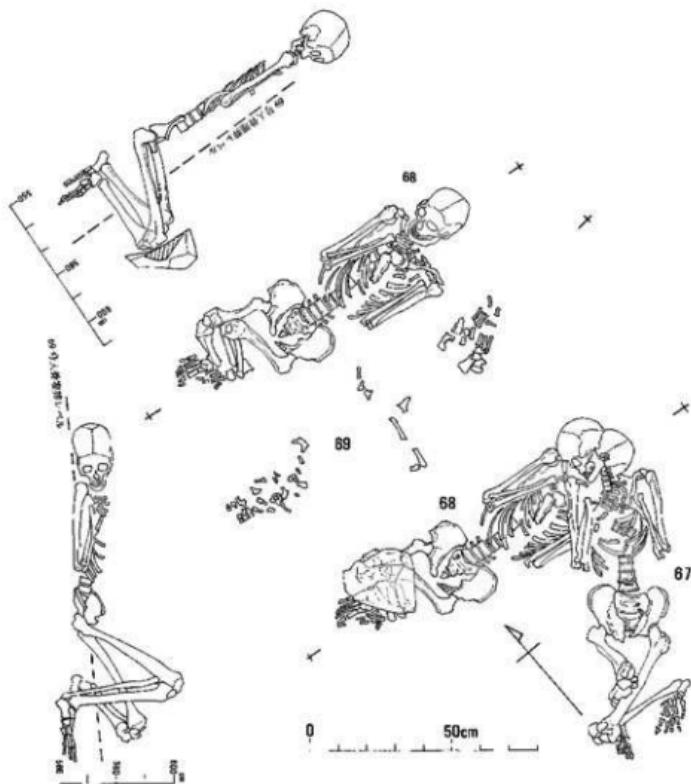


図112 67・68・69号人骨出土状態

していたにも関わらず破損することもなく、骨の位置関係に異常はなかった。下肢骨膝関節上に触れるように置石があり、置石は台形で縦25.0cm、横25.0cm、最大厚12.0cmである。

人骨は男性・熟年、埋葬方位N86°W、頭蓋骨頂水準569.9cm、推定身長163.7cm。埋葬姿勢は67号人骨と類似し、頭蓋骨はやや右に傾き、両上腕骨は完全に屈曲して肩部に向け、手根骨は下顎骨に接するような位置に置かれている。下肢骨は左膝関節が右に倒れ、右大腿骨の下端に接して屈曲の状態である。左中足骨・基節骨が右距骨・距骨に接する位置にあり、足首の位置をややすらして埋置している。ほぼ水平に埋没しているが足方が僅かに低い。上顎左右の大歯（C）に風習的抜歯がある。副葬品・供献品は出土しなかった。

置石は膝関節に接した状態である。地上に置かれた置石からすると墓壙の深さは35cm程度と考えることができる。

69号人骨（図112、図版138）

68号人骨の南約40.0cmで出土した。白色砂層の上半部から出土したが墓壙は確認できなかった。68号人骨と頭位は逆方向である。

人骨は性別不明・成年、埋葬姿勢不明、埋葬方位W7°S、埋葬水準569.9cmである。68号人骨の左上腕骨から右に20cm離れて、69号人骨の左右の足根骨・指骨が原位置で出土した。頭蓋骨は破片の状態でも発見できず、頸椎・歯牙などが一群となって発見され、また脛骨・大腿骨の破片が散乱した状態で出土した。これらの骨は同一人骨と考えられる。埋葬水準からすると68号人骨よりも約10cm浅く、67号人骨とほぼ同じ水準である。風習的抜歯については不明。副葬品は出土しなかった。

70号人骨（図107、図版130・140）

65号人骨と一部が重複して出土した。白色砂層の上半部で出土したが墓壙は確認できなかった。人骨の遺存状態は悪く頭蓋骨の一部・下顎骨・四肢骨が確認できた。

人骨は男性？・熟年・仰臥屈葬、埋葬方位E45°S、埋葬水準615.9cmである。頭蓋骨は殆ど消失し、頭蓋骨に関しては左側頭骨の鼓室部附近、下顎骨と上顎の歯牙数本が遺存していたが位置関係に異常はなく、完全に右に倒れた状態であった。左右の鎖骨が残っている。四肢骨は骨幹部が遺存した状態である。右上腕骨は体側に沿って伸ばし、前腕骨は曲げて胸部に置かれている。左上腕は遺存状態が悪く、小さく破断しているが体側に沿って伸ばしている。前腕骨は屈折して骨盤に連している。下肢骨は折り重なった状態で複雑な様相をしているが、膝関節で曲げ屈筋の状態から腐敗が進むとともに下方に倒れたと考えられる。足根骨の位置が崩壊して不明であるために、完全な形での屈筋の状態を復原することができない。風習的抜歯については不明である。副葬品・供献品は出土しなかった。

71号人骨（図113、図版141）

67・68号人骨の北東の白色砂層の上部から出土した。墓壇は発見できなかった。人骨の遺存状態は良好とはいえないが、埋葬姿勢を知ることはできる。

人骨は女性・熟年、仰臥屈葬、埋葬方位N60°E、頭蓋骨頂水準574.8cmである。頭蓋骨は左に向き、下顎骨とややずれた状態である。左上腕骨の上端が肩胛骨上にあり体側に沿って伸ばしているが、前腕骨は消失している。幸いなことに指骨が胸郭に当たる部分に遺存しているので、前腕は屈折して胸郭上に置かれたといえる。右上肢は完全に消失しているが、これも幸いなことに指骨が右大腿骨に近接して遺存しており、体側に沿って伸ばしていたといえる。左寛骨が辛うじて遺存しており、左大腿骨が下方に伸び、脛骨は骨幹部が屈折して遺存しているが、一部がやや離れた位置で出土している。側面図で明らかなように、左下肢骨は一定の角度をもっており、膝関節で曲げ、屈筋の状態であったことを示している。右大腿骨は左大腿骨側に倒れ、軽骨・腓骨は消失しているが、一定の角度をもち左下肢骨と同様の状態であったことを示している。上顎左右の大歯が腹習的抜歯の可能性がある。副葬品・供献品は出土しなかった。

72号人骨

67・68号人骨の東、白色砂層の上部から出土した。墓壇は確認できなかった。遺存状態は良好とはいえないし、頭蓋骨と上腕骨が発見された。北に位置する71号人骨との間で長管骨数片が出士しこれを散乱人骨として処理したが、72号人骨に関連する人骨の可能性がある。

人骨は男性・熟年、埋葬姿勢不明、埋葬方位不明（西南～東北？）、頭蓋骨頂水準640.4cm。上顎左右の大歯（C）は腹習的抜歯が行われている可能性がある。副葬品・供献品は出土しなかった。

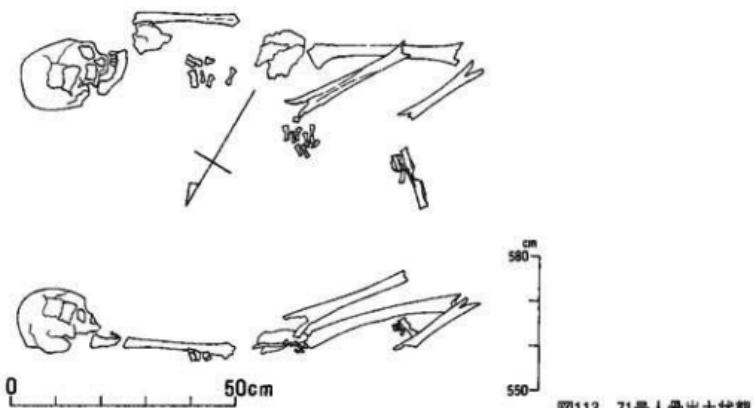


図113 71号人骨出土状態

A・B土器群(図114)

66号人骨北の白色砂層から出土した土器片群で、A群は出土水準640cm、B群は出土水準610cm前後でB群が約30cm深い位置にある。A群東西方向に180cm・南北方向に95cmの範囲から土器が出土した。出土状態は特に集中するということもなく、礫と混在した状態で出土した。長管苷が2点出土したが遺存状態が悪く人骨・獸骨の判断を下すことはできなかった。

B土器群もA土器群と同様な状態で出土し、東西170cm・南北115cmの範囲から出土した。土器は中央部に集中しているが、特に造構を伴う状態ではないが、A土器群と同様に礫を伴っていた。

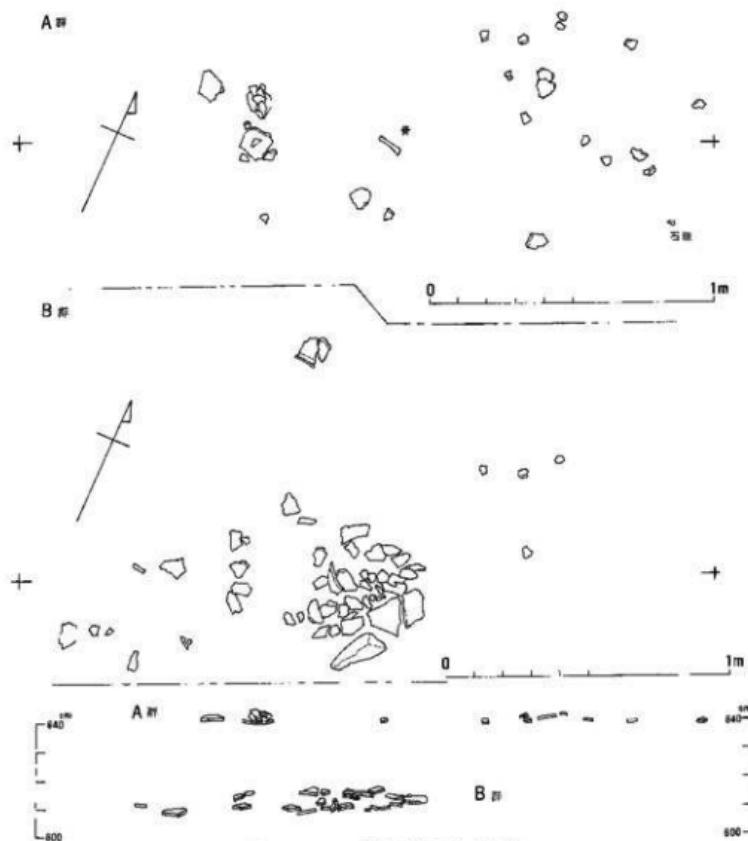


図114 A・B群赤生土器出土状態

A群関連弥生上器 (図115、図版143・144)

弥生土器壺 (図115-1、図版143)。口径12.6cm、器高26.8cm、胴部最大径21.3cm、底径7.8cm。口縁部は小さく開いて、胴部の張りは強く倒卵形をして、回底である。器壁は明茶褐色、胎土に砂粒が多いが表面では僅かしか見えず、焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、頸部から胴部附近まで斜め方向のハケ、胴部以下は縱方向のハケ目がみられる。その後、頸部以下胴部附近まで縱方向の短いヘラナデを部分的に行い、胴部以下は縱方向のヘラナデを重ねて施している。内面は横方向のナデ、底部から胴部までは斜めから横方向のヘラナデを丁寧に行い、その後に右下から左上方向にハケ目で整えている。ハケ幅は2.5cmである。前期後葉の上器で朝鮮系無文土器とされている上器である。

弥生土器小型壺 (図115-2、図版144)。A土器群下から出土した。口径6.0cm、器高16.6cm、胴部最大径12.9cm、底径5.6cmで僅かに窪んでいる。口縁部は小さく僅かに広がり胴部の張りは強い。

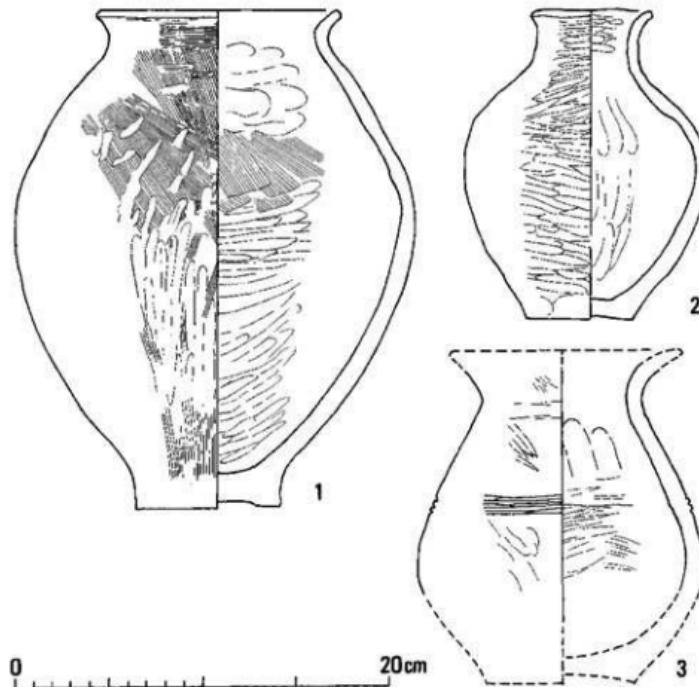


図115 A群関連弥生土器

器壁は明褐色、胎土には砂粒を多く含んでいるが焼成は良い。調整は内外面ともにヘラで整えていて底部には圧痕がある。ヘラ調整は口縁部から頸部は短い横方向の調整、肩部は斜め上方向、胴部以下は横から緩い斜め方向の調整である。内面は短い横方向の調整で、底部から胴部まではやや幅広の縦方向のナデである。ヘラナデの下地にハケ調整がある。前期後葉の土器。

弥生土器小型壺（図115-3）。頸部から胸部にかけての破片で全体を知ることができない。推定口径12.0cm、現存器高13.8cm、推定器高17.7cm、胸部最大径15.4cmで器高の1/3附近にあり胸部にヘラによる沈線3条がある。器壁は淡褐色、一部紅色胎土に砂粒を含んでいるが焼成は良い。調整は頸部外面に斜め方向の粗いハケ目があり、その下方に横方向のヘラナデ、肩部は斜め方向のヘラナデ、沈線の下は斜め方向のヘラナデが見られるが不明瞭である。前期後葉の土器。

石器石鐵（図109-1、図版147右）。A上器群東南端から出土した。サヌカイト製。平基、三角鐵。長さ1.9cm、基部幅1.2cm。断面は菱形であるがやや形が崩れている。前期後葉の石鐵と考えられる。

B群関連弥生上器（図116、図版145・146・148・149）

弥生土器壺（図116-1、図版145・146）。口径16.0cm、器高29.0cm、胸部最大径23.9cm、底径8.1cm、平底である。口縁部は大きく広がり、口唇には凹部がある。胴部は良く張り玉態状をしている。胸部最大径が器高の1/2附近にあり、全体に安定した形態である。頸部に断面コ字状の貼付け突帯があり、突帯の上下は貼付け後の押さえで凹面となっている。肩部にヘラ挫きの沈線3条があり、胴部には断面三角形の貼付け突帯2条がある。また、粘土接合部が小さな凹凸となっている。器壁は明茶褐色で下胴部の約1/2が黒斑で覆われている。胎土に砂粒が多いが表面には余り現れていない。調整は継または斜め方向のハケ目調整を全面に行い、その後ヘラナデを行っている。口縁部から頸部突帯までは短い横方向のヘラナデを間隔を置いて行い、頸部突帯から沈線までは横方向の長めのヘラ調整を上下に分けて、沈線から胴部突帯までは上下にハケ目を残してやや長めのヘラ調整をしている。胴部から底部は突帯を除いて横方向の長めのヘラ調整を密に施している。胴部に剥離（図版146）が2箇所にある。前期後葉の土器。

弥生土器小型壺（図116-2、図版148）。B土器群下から出土した。口径7.3cm、口縁部の3/5が欠失している。器高11.5cm、胸部最大径9.5cm、底径5.3cmである。口縁部は僅かに開き、胴部の張りも少なく器高の1/2に胴部最大径がある。底部は大きく器体に厚味があり、凹底で半円形は椅円形をしている。器壁は明茶褐色、底部から下部にかけて黒斑がある。胎土に砂粒が多く含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面は横ナデ、下地の調整として継ハケを行い、粗い横方向のハケ目で調整しているが、部分的に下地のハケ目が残っている。前期後葉の土器。

弥生土器鉢（図116-3）。口径15.1cm、器高12.3cm、底径6.5cm。口縁部は小さく開き、口唇部は

僅かに丸味をもっている。器壁は茶褐色、胎土に砂粒が多く含まれているが焼成は良い。調整は口

縁部外面は緩い斜め方向の粗いハケ、口縁部直下は斜め方向のハケを基本に紙、緩やかな斜め方向のハケ凹が交錯している。底部は縦方向のハケ凹を地文に、その上を斜め方向のヘラナデで底部から口縁方向に調整している。内底面は剥落して観察できない部分があるが、底から上方に向へラでナデ、その後に口縁部を中心へラで短く丁寧にヘラナデを行っている。前期後葉の土器。

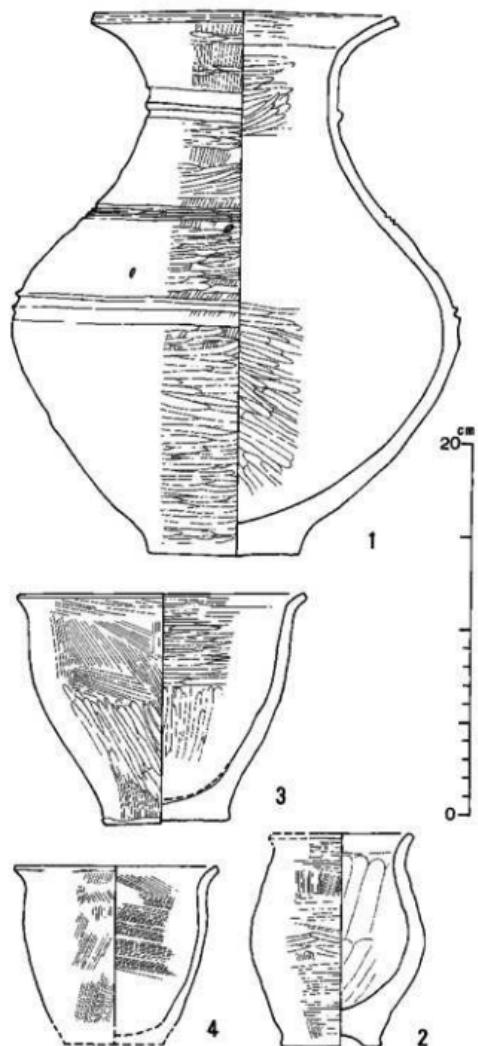


図116 B群関連弥生土器

弥生土器小型鉢（図116-4）。口径11.0cm、現存高8.4cm、推定器高9.5cm。口縁部は僅かに開き、口唇部は丸味をもっている。器壁は淡褐色、胎土の砂粒が含まれている。調整は外面は縦方向の短い纏まりのないハケ目、内面は口縁部の限られた範囲に粗い斜め方向のハケ目、それ以下は横方向の細かなハケ凹で整えている。前期後葉の上器。

A・B上器群として出土した土器は、A上器群では壺型上器に限られ、B土器群では壺・鉢型土器である。既に弥生土器が埋葬と直接関係のない状態で单独出土した事については紹介したが、この様に複数の土器が出土した例はこれ以外に存在しない。弥生時代の生活遺構、生活の痕跡もない状態では、いずれの例も埋葬に

関係のある儀礼に伴う土器と考えなければならない。

弥生土器（図117、図版142）

調査期間中に白色砂層から出土した弥生土器と1・2層で出土した2点の土器を紹介する。

弥生土器壺（図117-1、図版142）。66号人骨の下、4層上半部から出土した土器で、A・B土器群と関連があると考えられる土器である。肩部が欠失しているが全体を知ることができる。口縁15.5cm、推定器高25.8cm、胴部最大径21.0cm、底径7.4cmである。口縁部は開き、胴部は良く張っている。頸部に突帯が剥落した痕跡があり、調整の下地である縦方向のハケ目が観察できる。このハケ目の上方幅約6mmにハケ目のない部分があり、これは凸帯を張り付けた時にナデつけによってハケ目が消されたのであろう。肩部に2条のヘラ描きの沈線がある。胴部には粗いハケ目が幅1.2cmで横方向にあり、ハケ目の上には幅約5mmの剥落した痕跡があり、断面に示したようにやや垂れ下がった断面三角形の突帯が張り付けられている。粗いハケ目は突帯を張り付けるための下地である。底部は平底である。器壁は明褐色、底部は黒斑が覆い、胴部にも黒斑が見られる。胎土に砂粒が含まれているが焼成は良く、他の土器に比較して器壁が薄い。内底面は剥落している。

調整は頸部は縦方向のハケ目、肩部の沈線から胴部までは縦方向のハケ目を下地に、細い横方向のヘラ調整を行っている。胴部から底部にかけて縦方向のハケ目を下地に横方向から斜め方向、さらに幅広の横方向のヘラ調整を行っている。内面は口縁部から頸部にかけて僅かに傾斜したヘラ調整と横方向のハケ目で沈線附近まで同じように調整している。沈線と胴部突帯の間は斜め方向のハケ目を下地に、斜め上方のヘラナデ、底部は方向を変えた斜め方向のヘラナデである。前期後葉の土器。

弥生土器壺（図117-2）。壺型土器の口縁部で66号人の下、白色砂層の上半部から出土して、A・B土器群と関連があると考えられる。口縁12.7cm、残存器高4.6cmである。

口縁部は開き、頸部にヘラ描きの沈線3条がある。器壁は紅褐色、胎土に砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は外面で粗い縦方向のハケ目後に斜め方向の短いヘラナデ、内面は短い横方向のヘラナデである。前期後葉の土器。

弥生土器壺（図117-3）。壺型土器の頸部から肩部の土器片で、2と同様の出土状態である。3条のヘラ描き沈線がある。器壁は紅褐色、胎土に砂粒が含まれているが焼成は良い。外面の調整は斜め方向のハケ目を下地に、斜め方向のヘラ調整を方向を変え交差するようにおこなっている。内面も同様に下地に斜め方向のハケ目、そのうえに横方向のヘラナデをしている。前期後葉の土器。

弥生土器壺（図117-4）。胴部破片。71・72号人骨の間で白色砂層上半部から出土した。残存器高8.8cm、胴部最大径19.1cmである。頸部にヘラ描き沈線が辛うじて残っている。胴部最大径が器

高の1／3位にあり、図115-3と同様の器形になると考えられる。器壁は明紅褐色、内面は灰白色、胎土に砂粒を含んでいるが焼成は良い。調整は沈線ドにハケ目が僅かに観察できるし、肩部にも小部分であるが粗いハケ目が残っている。その上をへらで綴い削め、横方向のヘラナデが行われている。胴部は器壁がやや痩んだ面があり、その部分は約1.5cm幅に粗いハケ目が複雑に施されている。中央部では縦方向、それを打ち消す様に左斜め、さらに横、そして右斜め、左斜めと粗いハケ目が方向を変えながら連続している。これは図117-1の胴部の断面三角形の突帯の下地の作業と同じ手法で、突帯を張り付けるための下地の拘えである。内面は左斜めの粗いハケ目調整の後に斜め・横方向のヘラナデがみられる。前期後葉の土器。

弥生土器底部（図117-5）。壺型土器の底部。底径5.3cm。器壁は灰白色、胎土に砂粒が含まれ

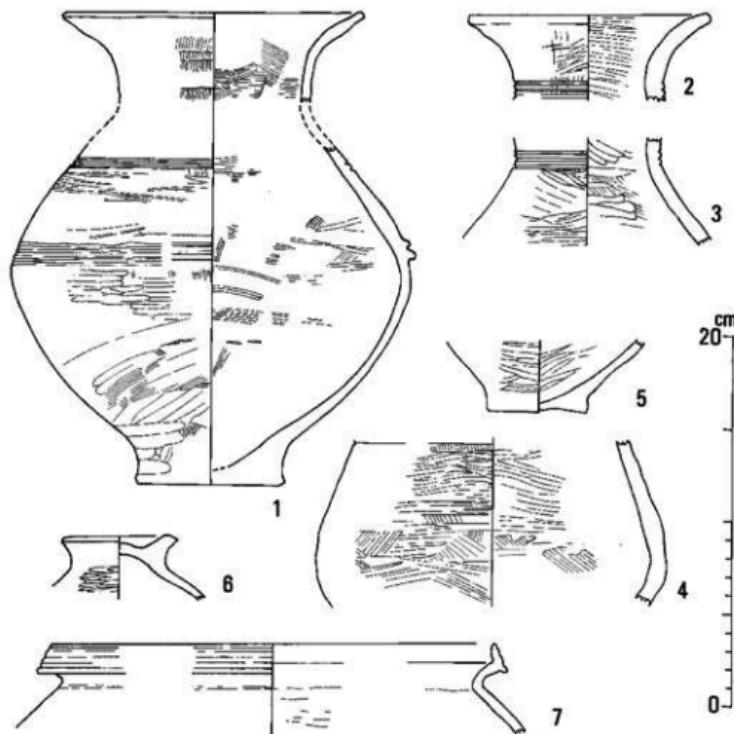


図117 弥生土器
 1～3 66号人骨下（4層上半）
 4・5 71・72号人骨頭（4層上半）
 6 1層
 7 2層

ているが焼成は良い。調整は内外面ともにヘラナデである。底面には粗いハケ目とみえる調整痕がある。前期後葉の土器。

弥生土器蓋（図117-6）。F区1層川土。蓋型土器としては唯一の土器。上面径5.0cm、残存器高3.4cm。器壁は明褐色、内面は灰黒色、胎土に小砂が含まれ焼成はやや弱い。調整は横方向の短いヘラナデである。前期後葉の土器。

弥生土器大型甕（図117-7）。F区崖面の2層から検出した土器で、大型ではあるが器壁は薄い。口径23.8cm、口縁部は上に肥厚し立ち上がり、下方にも僅かに肥厚し、この面に不明確な凹線が見られる。器壁は淡茶褐色、胎土に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面は横ナデ、外面は粗いハケ、内面は横方向のヘラ削りである。後期前葉の土器。

（2）古墳時代の遺構と遺物

2体（男性・性別不明）の入骨と茶褐色砂層中に構築されている石組遺構、須恵器・土師器紡錘車などの土製品・石器・鉄器・骨角器などが出土している。

埋葬

62号人骨（図118、図版150）

一群となって出土した44・45・46号弥生時代入骨の西南に位置し、白色砂層の上半部から出土した。人骨は崖面で検出したので墓壙断面の検出に努力したが確認することはできなかった。しかし、墓壙内・上と考えられる範囲でサヌカイト片・弥生土器・須恵器・土師器を検出することができた。人骨の保存状態は良く、左足の基節骨・末節骨の一部が欠失しているのみである。

頭部・左下肢骨側に置石がある。頭部側の置石は頭蓋骨の上方約10cmに位置にあり、長さ35.0cm、

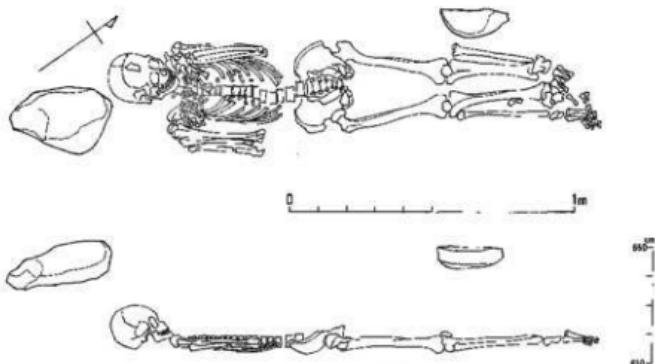


図118 62号人骨出土状態

幅24.0cm、厚さ8.0cm。左下肢骨側の質石は半月形で長さ22.0cm、幅10cm、厚さ8.0cmである。質石は墓壙上に置かれていたと考えられるので、墓壙の深さは30.0cmと推定することができる。

人骨は男性・成年、仰臥伸展葬、埋葬方位N35°E、頭蓋骨頂水準620.6cm、推定身長161.4cmである。頭蓋骨は僅かに右に傾き、左右の上肢骨は完全に屈曲して肩部に達し、手骨は上胸部に置かれていた。下肢は描えて完全に伸ばし、右腓骨の下端が右に移動しているが異常ではない。左右上肢の完全な屈曲は埋葬姿勢としては不自然さがないとはいえない。埋葬時に縛縛した可能性を考えなくてはならない。風背の抜歯はなく、副葬品も存在しない。

62号人骨関連石片（図109-3）

骨盤の上方から出土したサヌカイト片。長さ3.9cm、幅5.3cm、最大厚さ1.2cm。一面は加工されたよう見えるが、一面は単に剥離された面が残っており、縦断面図では刃をつけた痕跡は窺えない。66号弥生時代中期埋葬に因連して出土したサヌカイト製石斧とは区別せざるを得ない。

62号人骨関連土器（図119）

62号人骨に関連する十器を集成した。1・3・5～8、10は人骨上部、2・4・9・11～14は人骨周辺部出土土器である。

弥生土器壺（図119-1）。複合口縁壺。口径18.8cm、口縁部の立ち上がりは開いて、接合部は断面三角形の突堤状をしている。器壁は褐色、胎土・焼成ともに良い。調整は残存部分の内外面は横ナデである。後期末の上器。

須恵器壺（図119-2）。環状のつまみの有る蓋壺である。口径16.0cm、器高2.9cm、口縁部は直立に近い。器壁は黒鼠色、胎土に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部内面・外面は天井部まで横ナデ、外面天井部はヘラ削り、つまみの周辺はナデつけている。内面天井部は縦ナデである。7世紀末の上器。

須恵器壺（図119-3・4）。3は口径13.9cm。残存器高4.8cm。蓋受けの立ち上がりは強く、口唇は内傾した面となっている。受部は右上に短く伸びている。器壁は青鼠色、胎土に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部内外面とともに横ナデ、底面はヘラ削り、内底面は縦ナデである。5世紀後葉の上器。4は口径14.0cm、蓋受けの立ち上がりは折れ曲がるように立っている。受部は小さく右上に伸びている。器壁は灰白色、胎土は精良であるが焼成はやや弱い。調整は残存部は横ナデである。6世紀前半の土器。

須恵器型土師器壺（図119-5）。口径13.8cm、推定器高4.6cm。口縁部は僅かに開き、底部には窪んだ面があり、付け高台が剥落した痕跡である。全面丹塗りで胎土は精良、焼成は良い。調整は口縁部の内外面は横ナデ、内底面は縦ナデ、外底面は横ナデである。7世紀末の上器。

須恵器高壺（図119-6）

高壺の壺部と脚の一部の破片である。口径12.9cm、脚接合部径4.5cm、

透かしの痕跡があるが形態や数は不明である。口縁部は斜めに開き、底面との境界に凹線がある。器壁は古鼠色、胎土・焼成は良い。調整は环部は内外面ともに横ナデ、内底面は縦ナデである。脚接合部は貼り付け痕がある。6世紀後半の土器。

須恵器小型臺（図119-7）。口径16.0cm、口唇部は上下に肥厚している。器壁には内面に青緑色、口唇部から外面にかけて褐色の自然釉が掛かっている。胎土は白灰色で精良、焼成も良い。7世紀前半の上器であろうか。

土師器臺（図119-8～10）。8は複合口縁の大型盃。口径24.0cm、接合部からの立ち上がりは短く直立に近い。口唇は凹線があり内傾した面となっている。接合部は本体の器壁が小さな段となつて残っている。器壁は淡明灰白褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は残存部分では横ナデである。9も複合口縁である。口径15.0cm、接合部からの立ち上がりは開いているが、短く口唇は僅かに産みを持ち外向きの面となっている。接合部本体に張り付けたというよりも乗せた感じとなり、本体の痕跡は外面からは窺えない。器壁は茶褐色、胎土には砂粒が含まれているが焼成は良い。10は口径14.8cm、丹塗り土器。口縁部はく字状で良く開いている。胎土は灰白色で小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面肩部は軽い縦ナデ、内面は横方向の短いへら搔取りである。3点ともに5世紀中葉から後葉の上器。

土師器高坏（図119-11～13）。11は段のある高环の环部である。口径20.0cm、口縁部は大きく開き、段は痕跡程度に残っている。器壁は茶褐色、内面は暗茶褐色、胎土・焼成は良い。調整は外面

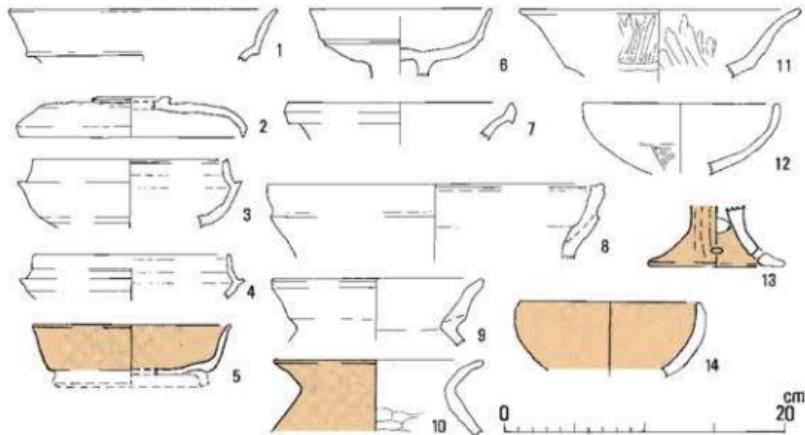


図119 62号人骨関連土器

1. 3. 5～8 人骨上部
2. 4. 9. 11～14 人骨関連

は縦方向の粗いハケ、さらに横ナデを行い、内面は横ナデのみである。調整後に内外面に暗文を施しているが、外面は基本的に縦方向、内面は斜め方向の暗文であるが極めて不規則・不鮮明な暗文である。12は段の無い高坏の坏部である。口径13.8cm、口縁部の開きは少ない。器壁は茶褐色、胎土上に砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、内底面はナデ、外面はハケで調整している。13は高坏脚部。脚端部径9.6cm、脚部径3.8cm。脚は小さく広がり、径6mmの透かし孔がある。丹塗りで内面にまでおよんできている。胎土は精良で、焼成も良い。調整は外面がヘラ縦ナデ、内面はヘラで抉っている。これらの高坏は5世紀中葉から後葉の土器。

土師器坏（図119-14）。口径12.8cm、残存器高5.3cm、口縁部は僅かに内傾している。胎土は明褐色で小砂を含んでいるが焼成は良い。調整は口縁部外面で横ナデ、底面で軽いヘラ削り、内面は底面近くまで横ナデが行われている。6世紀後半以降の土器。

62号関連土器は、弥生土器後期末の壺型上器が最古の上器であり、最も時期的に下るのは須恵器型上師器で付け高台をもつと考えられる坏で7世紀末と考えられる。5世紀代の上師器は茶褐色砂層（第2層）の中心的な上器群で、既に触れた各区の第1層（黒褐色粘質砂土層）に包含される七器の組み合わせと一致している。この人骨の年代を決定するのは困難であるが6・7世紀代の七器の存在を考えると、古く考えても占墳時代後期を過らない時期の人骨と考えなくてはならない。

63号人骨（図120、図版151）

49号弥生時代人骨の南に近接して、白色砂層の上半部から出土したが墓壙は確認できなかった。人骨の保存状態は悪く、やうじて埋葬姿勢が推察できる程度であった。

人骨は性別不明・成年・仰臥伸展葬？、埋葬方位E30°S、埋葬水準677.8cmである。頭蓋骨は輪郭を確認でき、歯牙が頭蓋骨の前面に散乱し、四肢骨の骨幹部分、寛骨の一部がやうじて遺存した状態である。しかし人骨の位置関係に異常は認められなかった。右上肢骨は消失し、左上腕骨が体側に沿うと考えられる状態に伸ばされている。寛骨数片があり、左大腿骨が寛骨近くで山上した。右大腿骨は細片化し3片に分かれており、右膝蓋骨がその延長上にあった。右脛骨は細片となって

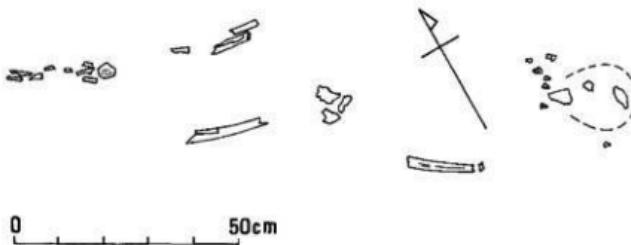


図120 63号人骨出土状態

はいるが大顎骨・膝蓋骨の延長線上に位置している。この情況から考えて仰臥伸展葬の可能性が強いといえる。下顎の左右の中切歯 (I_1) と側切歯 (I_2) の風呂的抜歯が認められた。副葬品は出土しなかった。

石組遺構（図121、図版152・153）

石組遺構は北東から南西に伸び、全長7.45m、幅55～133cm、傾斜度30°～35°で茶褐色砂層上で発見した。南西に80～120cmの所に2個の石材があるが石組との関連については明らかにできなかった。東北端では石が2個で構成され、南西に向かって次第に個数が増加し5～6個で構築されている。東北端から4～6.5m附近には4個の石材が石組下辺から僅かに離れた位置に一列に置かれている。

石組は第1・3次の情況と同様で、積み上げるというよりも斜面に貼り付けているといった状態で、比較的大形の石材を下辺に横位置に置き、その上手に石を貼り付けて全体が構築されている。3～5m附近では大型の石材が縦位置で置かれ、崩壊を防ぐために補強したかのように考えられる。先に挙げた4個の石材は補強のために準備されたのではないだろうか。石組上からの遺物の出土は比較的少なく、人骨は発見できなかった。

1層出土土器（図122）

弥生土器・土師器を集成した。弥生土器は壺型土器1点、土師器は壺・甕・壺・高壺である。

弥生土器壺（図122-1）。複合口縁壺である。口径15.7cm。立ち上がりは僅かに開いている。接合部は突端状をしているが、実際には粘土の接合とは関係なく形作られている。器壁は薄く明淡褐色、胎土・焼成ともに良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデで、内面は横方向のヘラ搔取りである。後期木の土器。

土師器壺（図122-3～5）。2は口径16.0cm、口縁部は良く開き口唇部には窪みがある。器壁は明淡白褐色、胎土に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は内外面ともにハケ目で縦・斜め方向のハケ目、内面は緩い斜め方向のハケ目である。4世紀の上器。

3は口径11.0cm、口縁部の伸びは短く外側は折れるように開いている。肩部の張りは強く球形で、内面は頸部下部分から丹を塗り、外側は全面に丁寧な丹塗りである。胎土は白色で外側は淡赤に変色している。調整は外側は丹塗りで観察できないが極めて滑らかな状態である。内面は短い横方向の幅の狭いヘラ搔取りである。4は口径12.5cm、口縁部は器壁が厚く僅かに開いている。器壁は淡灰白褐色、胎土・焼成ともに良い。調整は口縁部横ナデ、肩部は極めて粗いハケ目、内面は横方向の丁寧なヘラ搔取りである。5は口径17.3cm、口縁部は折れ曲がるように開き、頸部・肩部がある。

胸部の張りは強い。器壁は淡灰褐色、胎土に砂粒を含んでいるが焼成は良い。調整は口縁部・頸部は横ナデ、肩部以下は粗いハケ日、内面は短く緩い斜め方向のヘラ搔取りである。5世紀中葉から後半の十器。

土師器壺(図122-6~14)。6は口径19.5cm、口縁部は良く伸び開いている。胸部の張りも強い。

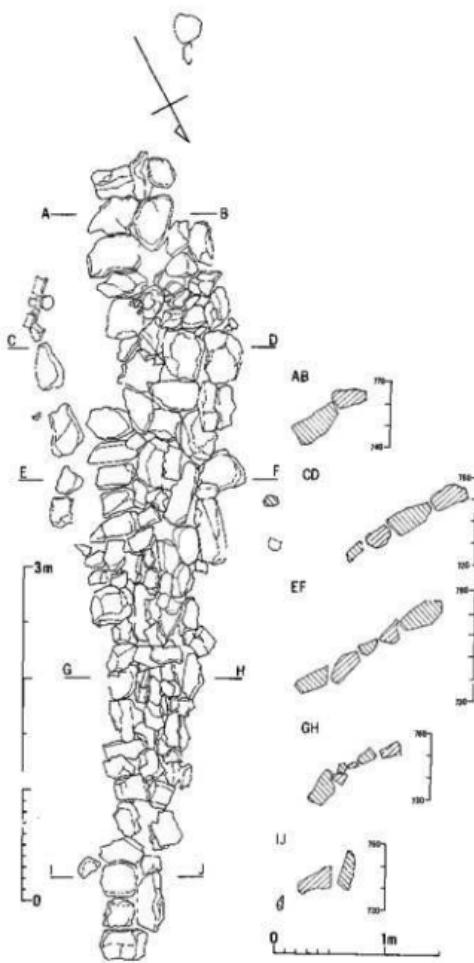


図121 石組遺構出土状態

器壁は淡褐色、胎土に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面上に指圧痕があり疎らで粗なハケ日、内面は横方向を中心としたヘラ搔取りである。7は口径21.5cm、口縁部は大きく開き、口唇部で折れ曲がり、胸部の張りは少ない。器壁は黒茶褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は口縁部は横ナデ、外面上は日の細かなハケ日、内面は斜め方向のヘラ搔取りである。8は口径20.5cm、口縁部は外反して開いている。器壁は茶褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は口縁部は横ナデ、外面上は斜め方向の粗いハケ日、内面は横方法の粗いハケ日と幅の狭い丁寧な搔取りである。9は19.7cm、口縁部は良く開いている。胸部の張りは小さい。器壁は暗茶褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は口縁部外面上は横ナデ、胸部は斜め方向のハケ日で、内面は軽い横ハケ日、横方向の丁寧なヘラ搔取りである。10は口径14.7cm、小型壺、口縁部は短いが開いている。胸部の張りは少ない。器壁は紅褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は口縁部の内外面と

もに横ナデ、外面はハケ目、内面には接合痕があり丁寧なヘラ搔取り。11は口径19.8cm、口縁部は短いが開き、胴部の張りは少ない。器壁は茶褐色、胴部の張りは少ない。調整は口縁部外面は横ナデ、次いでハケ目。内面は口縁部は横方向のハケ目、次いでヘラ搔取りである。6～11は5世紀中期から後半の土器。

12は口径21.7cm、口縁部の開きは少なく口唇部が外反し、胴部の張りは強いといえる。器壁は淡明褐色、胎土に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、内面は横

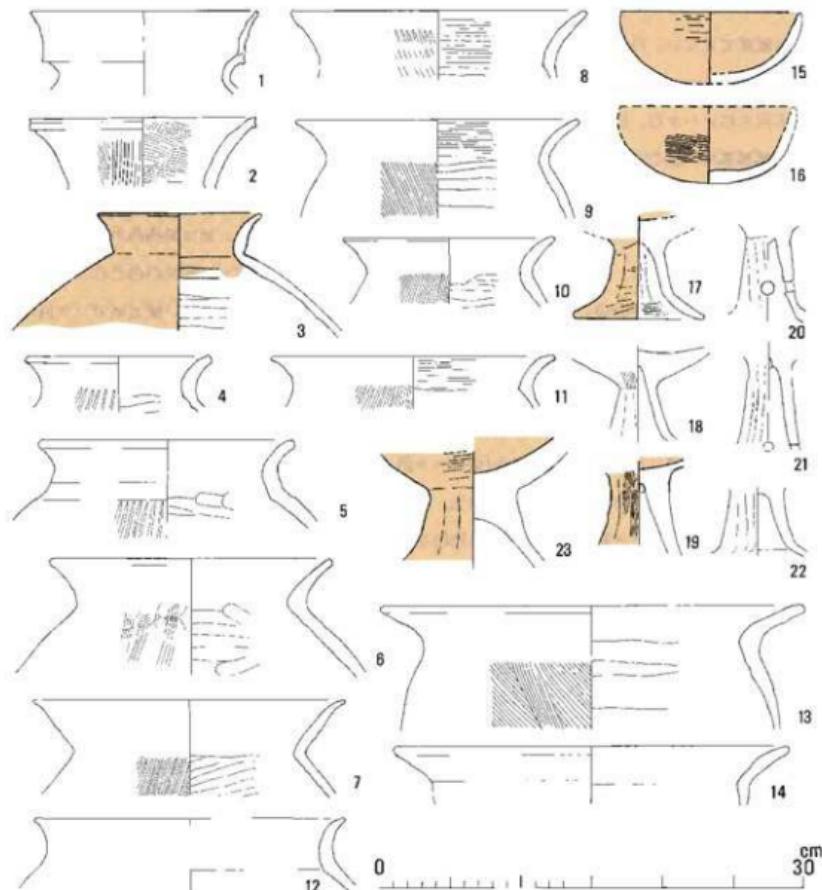


図122 1層出土土器（弥生土器・土師器）

方向のヘラ搔取りである。13は口径29.6cm、口縁部は良く伸び大きく開き胴部の張りは少ない。器壁は茶褐色、胎土に砂粒を含んでいるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデで、斜め方向のハケ日で整え、内面はヘラ搔取りである。14は口径27.5cm、口縁部は伸びて開き、胴部の張りは殆どない。器壁は淡明白褐色、胎土中に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は内面のヘラ搔取り以外は全て横ナデである。12~14は6世紀後半から7世紀の土器。

土師器壺（図122-15・16）。15は口径13.8cm、器高5.1cm。口唇部は尖り気味である。器壁は全面丹塗りで、胎土は灰白褐色で小砂を含んでいるが焼成は良い。調整は口縁部外面が粗な横ナデ以外は観察できない。丹塗りは外面に比較して内面は丁寧に塗っている。16は口唇部を欠いている。推定口径12.4cm、推定器高5.4cm。全面丹塗りで、胎土に小砂が含まれて焼成はやや弱い。調整は横方向の粗いハケ日、底面は粗いハケの後にヘラでナデしている。ともに5世紀台の土器であろう。

土師器高壺（図122-17~23）。高壺は壺部が欠失した例のみである。17は脚端部径9.0cm、脚部高5.0cm、外面は丹塗りで、内面も端部は丹が塗られている。胎土は灰白色、胎土は精良で焼成も良い。調整は外面はヘラ綻ナデ、内面は端部がハケ目とヘラ削りである。18は脚端部が欠失し、壺部が僅かに残っている。脚部の接合痕が残っている。器壁は明褐色、胎土に砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は接合痕の上方はハケ、脚部はヘラ綻ナデ、内面は端部は短い横方向のハケ日とヘラ削りである。19は脚端部が欠失し壺部が僅かに残っている。壺部底面を含めて丹塗り。器壁は灰白褐色、胎土・焼成とともに良い。20~23は脚端部を欠いている。20は透かし孔は径8mmで2箇所、21は径6mmで3箇所、23には透かし孔はみられない。器壁は淡褐色で23は紅色で丹塗りと見誤る位の色である。調整は外面はヘラ綻ナデ内面はヘラ削りである。23は脚端部を欠いているが、壺部が一部残存しており肉厚である。器壁は灰白色、胎土は精良で焼成も良い。調整は壺部外面はヘラ横ナデ、接合部以下はヘラ綻ナデ、脚内面は繊維を束ねた状態のものでナデつけている。壺部内面は極めて滑らかである。高壺は5世紀後半から6世紀の上器と考えられる。

須恵器（図123）。

壺蓋・壺・高壺・平瓶・壺・駒がある。6世紀後半から8世紀におよぶ資料である。

須恵器蓋壺（図123-1~15）。つまみの無いもの（1~13）と環状のつまみの有るもの（14~15）がある。1~11は全体に極めて規格化され、調整は同一手法で行われている。1は口径13.6cm、器高3.9cmで低平な感がある。口縁部は直立し、内面に小さな段を持ち天井部との境界の稜は凹線となっている。器壁は青鼠色、胎土に小砂を含んでいるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、天井部はヘラ削り、内面の天井部は綻ナデである。2も口径12.8cm、器高3.4cm、やや小型であるが1と変わらぬ所はない。3~9は口縁部がやや外に開き、内面の段の痕跡はますます退化し、8・9のように凹線と変化しているものもある。しかし口縁部と天井部の境界の稜は凹線となっ

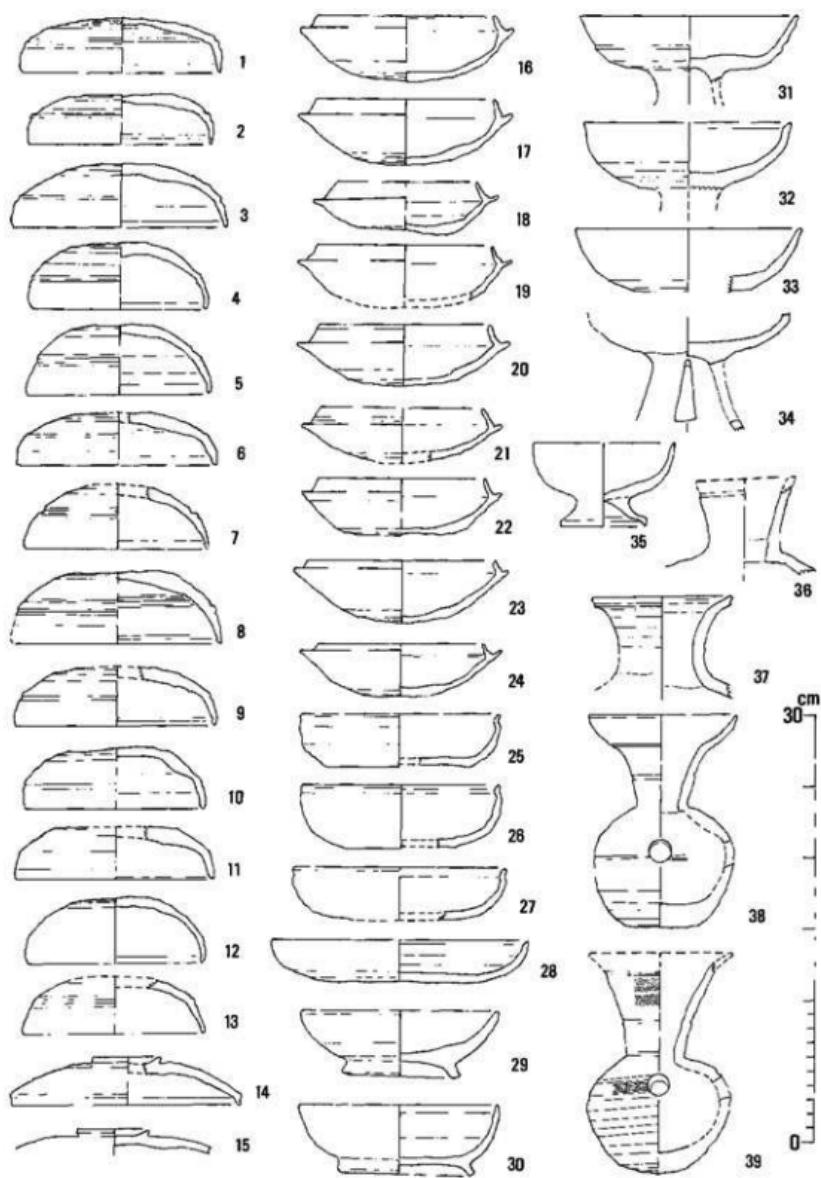


図123 1層出土土器（須恵器）

て残っている。3は口径14.8cm、器高4.5cmでやや大型であるが低平である。6・9も低平な壺蓋である。10・11は口縁部は立っているが口縁部内面の段は消失し、口縁部と大井部の接は10では凹線として残り、11では消失している。調整は口縁部の内外面は横ナデ、大井部はヘラ削り、内面の天井部は縦ナデである。1～11は6世紀後半の上器である。

12は口径12.1cm、器高4.6cm、口縁部は僅かに内窵している。「口縁部内面の段も稜も消失している。13は口径12.5cm、推定器高4.1cm、口縁部はやや開いている。内面の段は消失し、稜は残っている。調整は口縁部の内外面は横ナデ、天井部はヘラ削り、内面の天井部は縦ナデである。12・13は7世紀前半の上器である。

14・15は環状のつまみが有る。14は口径15.8cm、器高3.4cm、口縁部は折れ曲がるように立っている。稜の部分に自然釉が見られる。器壁は青鼠色、胎土には小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面はともに横ナデ、天井部はヘラ削り、つまみの周辺部は貼り付け痕が見られる。内面天井部は縦ナデである。15は大井部の残片であるが全面に自然釉が掛かっている。この2点は7世紀後半の土器である。

須恵器壺（図123-16～27・29・30）。壺には蓋受けの有るもの（16～24）と無いもの（25～30）があり、蓋受けの無いものは高台の無いものと有るもの（29・30）に分けることができる。蓋受けの有る16～23も規格化されていはいるが、蓋受けの立ち上がりや、受けの形には細かな相違がある。16は口径12.5cm、器高4.7cm、立ち上がりは内傾しているが、口唇部は内傾した面となって受部も厚味があり右上に伸びている。17は蓋受けの立ち上がりは強く16とは趣を異にしているが、口唇部の内傾した面は16と同様で、18・19も同じことが指摘できる。20は蓋受けの口唇部は丸味をもち、21・23では完全に消失している。調整は口縁部の内外面とともに横ナデ、底面はヘラ削り、内底面は縦ナデである。この調整の技法は共通している。16～23は6世紀後半の土器である。

23は口径13.0cm、器高4.5cm、蓋受けの立ち上がりは内傾しているが短く低い。受部も右上に伸びてはいるが短い。器壁は黒鼠色、胎土に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面とともに横ナデ、底面はヘラ削り後にナデしている。内底面は縦ナデである。24は受部の伸びがややあるが器形・調整を含めて変わりない。7世紀前半の上器。25～27は蓋受けがなく、口縁部は口唇部で小さく外反している。より一層規格化が進んでいる。25は口径13.8cm、器高3.5cm、器壁は青鼠色、胎土・焼成とともに良い。調整は口縁部の内外面とともに横ナデ、底面は糸切り、内底面は縦ナデである。この種の土器では糸切りの後に切り口の周辺をナデつけているものがある。26は25とは同形同大であるが、27は口径がやや大きい。8世紀後半の上器。

29・30は高台の有る壺である。29は13.5cm、器高4.6cm、口縁部は緩く広がり、口唇部は丸味をもっている。器壁は淡黒青鼠色、胎土に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面

ともに横ナデ、ヘラ削りの後横ナデと続き、高台を貼り付け底面は横ナデ、内底面は縦ナデである。30は口径13.8cm、器高4.9cm、口縁部は直立に近く、口唇部は丸味をもっている。全体に深みのある器形である。器壁は紫鼠色、内壁は淡黒色で、胎土は小砂を含んでいるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面は横ナデ、高台の内側にまで横ナデが見られ、高台の周囲は貼付痕があり、底面は糸切りである。内底面は縦ナデである。とともに7世紀後半の土器。

須恵器皿（図123-28）。口径18.0cm、器高2.8cm、口縁部は僅かに開き、口唇部は尖り氣味である。器壁は灰青鼠色、胎土・焼成ともに良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面はヘラ削りの後横ナデ、底面は糸切りである。内底面は縦ナデである。8世紀後半の土器。

須恵器高杯（図123-31～35）。35は全形を知ることができるが、それ以外は坏部・脚部片であるが、坏部に善受けは見られない。

31は口径15.3cm、脚部が一部残っている。口縁部は開き、口唇部は丸味をもっている。稜線があり、坏部下端に透かし孔のヘラ刻みがある。透かし孔の形は長方形と考えられ、2箇所に設けられている。器壁は淡黒色、部分的に灰黒色、胎土は良いが焼成はやや弱い。調整は口縁部の内外面とともに横ナデ、稜の下からヘラ削り、脚部張付けのためのナデがある。内面は底面近くまで横ナデがおこなわれ、底面は縦ナデである。32は口径14.5cm、脚部は欠失している。口縁部は直立に近く、口唇部は短く外反している。脚部に透かし孔の痕跡が2箇所ある。器壁は灰黒鼠色、胎土には小砂が含まれ、焼成はやや弱い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は粗いヘラ削りがあり、脚部の貼り付け痕がみられる。内底面は縦ナデである。33は口径15.9cm、坏部のみである。口縁部は開き口唇部は丸味を帯びて、稜はない。器壁は灰黒鼠色、胎土には沙粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面はヘラ削りと連続している。内底面は縦ナデ。34は口縁部と脚部が欠失している。口縁部は直立に近いと考えられ、稜はない。脚部に一角形の透かし孔がある。器壁は淡黒色、坏部内面は灰白黒褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は外面は脚貼り付け痕を除いて横ナデ、坏部内面も横ナデ、内底面は縦ナデである。35は小型高杯。口径9.9cm、器高5.9cm、根部径6.0cm。口縁部は直立し、坏部に稜ではなく、脚部に透かし孔もない。器壁は黒鼠色、胎土に小砂を含んでいるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面はヘラ削り、脚部の張付け痕、脚部の横ナデと連続している。この一連の高杯は7世紀の土器である。

須恵器平瓶（図123-36）。口縁部と体部を欠失している。推定口径7.0cm、器壁は青鼠色、外面と内面の一部が淡緑色の自然釉に覆われている。頸部には貼付け痕があり、内面にはヘラのナデつけ、指圧痕も見られる。7世紀の土器。

須恵器壺（図123-37）。口頭部のみである。口径9.7cm、口縁部は開き口唇部は段をもっている。器壁は白青鼠色、胎土に小砂が含まれ焼成は良い。調整は内外面ともに横ナデで、下方に貼付け痕

がある。7世紀の土器。

須恵器疊(図123-38・39)。38は口径10.4cm、器高14.9cm、胴部最大径10.0cm、口縁部は折れ曲がるように開き、口縁部下端と頸部に凹線、胴部に径1.7cmの孔があり、孔を切るように凹線がある。底部はヘラ削りで調整され平底状をしている。器壁は黒鼠色、胎土に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は外側は孔の下方まで横ナデ、それ以下は底面までヘラ削りで、内面も口縁部から頸部の途中まで横ナデ、それ以下は絞りがある。7世紀の上器。39は口縁部を欠失している。推定口径は10.0cm、残存器高15.0cm、推定器高15.5cm、胴部最大径10.0cm、胴部に径1.5cmの孔がある。頸部と頸部基部に凹線各1条。胴部の孔の上・下端に凹線各1条がある。また、口縁部下端に櫛描き平行線文と波状文が2段巡らされ、胴部の凹線の間にカキ日の上に櫛刺突文がある。器壁は灰鼠色、胎土には小砂が含まれているが焼成は良い。調整は外側は口徑部から胴部凹線まで横ナデ、孔の下端から底面までヘラ削りである。6世紀の上器。

2層出土土器(図124-1~23)

弥生上器・土師器を集成した。弥生土器は注口上器・器台・土師器は壺・高环・坏・小型丸底土器である。1・3~8・10~12・14・23・25は石組遺構上で出土した上器である。

弥生土器注口(図124-1)。注口部分で、先端が欠失し、基部には貼付け痕がある。現存長8.0cm、推定長8.8cm、基部外径4.0cm、先端部推定外径1.3cm、基部内径2.7cm、残存部先端内径1.0cmで断面は漏斗状をしている。器壁は灰白褐色、胎土は精良で焼成は良い。調整は基部から先端部に向けてヘラナデ、基部に近い部分に器体に交差して6条の櫛描き平行線文があり、下面で交差している。後期中葉から後葉の土器。

弥生土器器台(図124-2)。受台部・基台部が欠失している。中央部の径10.4cm、残存部高8.0cm、基本的に鼓形器台と同形であるが、全体に大型である。受台部には断面三角形の突帯、基台部にも断面三角形の幅広の突帯がある。恐らく粘土接合部の痕跡が遺存したのであろう。器壁は灰白褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は外側は横ナデ、内側は頸部はヘラ横ナデであるが、台部の内側は充分に観察ができないがナデの可能性が高い。後期中葉から後葉の土器。

土師器壺(図124-3~10)。3は口径18.5cm、残存器高11.2cm。口縁部は良く開き、胴部の張りは余り強くない。器壁は淡褐色、胎土に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面は横ナデ、細かなハケ目と続き、内面は丁寧なヘラ搔取りである。4は口径20.5cm、良く開いた口縁部である。器壁は明淡褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、内面は丁寧なヘラ搔取りである。5は口径19.7cm、良く開いた口縁部である。器壁は茶褐色、胎土に小砂を含んでいるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、内面は軽い丁寧なヘラ搔取り

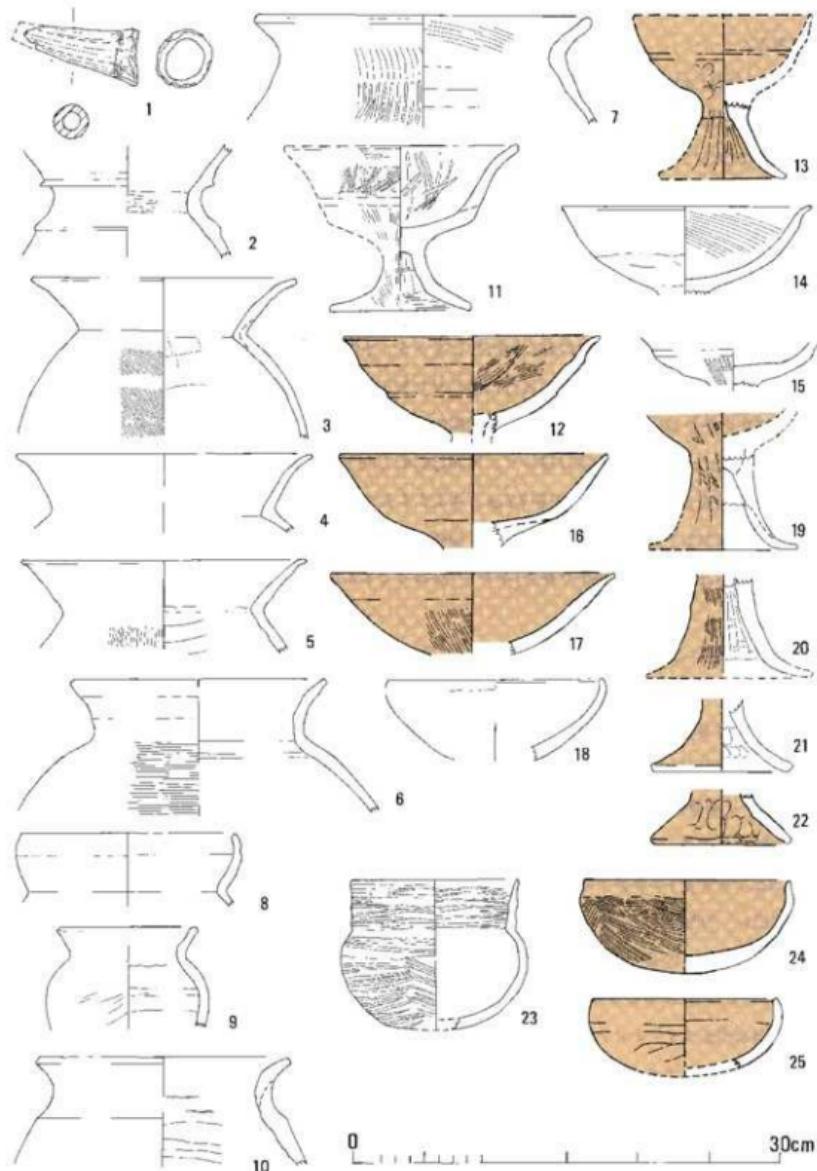


図124 2層出土土器（弥生土器・土篋器）

である。

6は口径17.2cm、口縁部は開きが少なく、口唇部に厚味がある。器壁は淡褐色、胎土に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は縦方向のハケ日の後に粗い横ナデで整えている。内面は指圧痕があり、その上を粗いハケ日で整え、さらに軽い削りで調整している。他に例を見ない調整法である。7は口径22.1cm、開きの少ない口縁部である。器壁は外面は淡黒色、内面は灰白褐色、胎土に小砂が含まれており焼成はやや弱い。調整は口縁部の内外面とともに横ナデ、外面は極めて粗いハケ日、口縁部内面は横ナデの後に斜めの粗なハケ日で再度整えている。内面は横方向のヘラ搔取りである。

8は口径15.0cm、口縁部は内寄し袋状をしている。器壁は明褐色、胎土に小砂を含んでいるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデである。9は小型甕で、口径9.5cm、肩部最大径11.4cm、胴部の張りは少ない。器壁は外面は明褐色、内面は淡褐色、胎土に砂粒を含んでいるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面は横ナデ、外面は斜め方向のナデあげ、内面はナデつけ、横ナデ、ナデあげと連続している。10は口径17.5cm、外反する太く短い口縁部で、肩部に鈍い稜がある。内面には接合痕がある。器壁は灰白色、胎土・焼成ともに良い。調整は口縁部の内外面ともに横ナデ、外面は斜め方向のナデ、内面は横方向のヘラ搔取りである。これらの甕は5世紀中葉から後葉の土器。

土師器高坏(図124-11~23)。高坏の坏部に段を持つものと段の無いものがある。11は口径16.5cm、器高11.5cm、脚末端部径10.0cm。坏部は開き段がある。脚部は緩やかに開いている。器壁は明褐色、坏部内面は灰黒色、胎土に小砂が含まれているが焼成は良い。調整は口唇部から段までハケ日の後に横ナデ、暗文を加えている。坏部底面はハケ目、脚部は横ナデの後にハケ目。坏部内面は底面から口縁部へ暗文を施し、さらに方向を変えて疎らに短い暗文を施している。脚部内面は短くヘラ削りを繰り返し、裾部はハケ日の後に粗い横ナデを加えている。12は坏部で段がある。口径18.0cm、坏部は段の部分で屈折せずに開いている。内外面とも丹塗りで、胎土は精良で灰白色、焼成は良い。口縁部から段まで横ナデ、段から下方はヘラナデ。内面は口唇部ヘラナデの後にハケ目で整えている。内底面はナデと考えられる。13は段が痕跡程度残っている。推定口径12.5cm、推定器高11.5cm、脚末端部径9.8cm、坏部は楕型で口縁部の開きは少なく、段が残っている。全面丹塗りで脚部内面にまでおよんでいる。器壁は灰白色、胎土は精良で焼成も良い。調整は口縁部の内外面、段までは横ナデと考えられ、段の下方は指圧の後にナデ、脚部はヘラ縦ナデである。脚末端部は内外面ともに横ナデである。脚内面はヘラ搔取りで、丹は外面上に比較して薄い。坏部内面は剥落して観察が困難である。14は口径17.7cm、明確な段はないが、粘土の接合痕が線となって残っている。口縁部は開き口唇部は外反している。器壁は紅褐色、内面はやや黒味を帯びている。調整は口

唇部から段痕跡まで横ナデ、それ以下は軽いヘラ削りと部分的に強いヘラ削りが見られ、指圧の後に軽いナデが行われている。口唇部内面は横ナデ、口唇部から外面の横ナデに当たる部分が、粗いハケ目の後に斜め方向の細かなヘラナデである。内底面は縦ナデである。15は坏部片で口縁部を欠いているが段がある。器壁は紅褐色、胎土・焼成ともに良い。調整は段の下方まで横ナデ、脚接合部までは粗いハケ日である。内底面はナデである。16は口径16.7cm、段は見られず、口縁部は大きく開いている。内外面丹塗り、胎土は明褐色で精良で焼成も良い。調整は口縁部から粘土接合部まで横ナデ、それ以下はヘラナデ、内面は口縁部は横ナデ、それ以下はナデつけである。17は口径19.8cm、口縁部は良く開いて、坏は浅い感がある。段はなく粘土接合部の器形の変化も見られない。全面丹塗りで、胎土は灰白褐色で精良、焼成も良い。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、外側はハケ日の後に軽いナデ、内面はナデしている。18は口径15.0cm、口縁部は内弯している。器壁は茶褐色、胎土に小砂が含まれているが焼成は良い。調整はヘラナデ、内面はナデあげである。

19から23は高坏脚部。19は脚高7.0cm、脚末端部径10.4cm、坏部は椭型と考えられる。脚は緩やかに開いている。外面と坏部内面は丹塗り、胎土は茶褐色、小砂が混入しているが焼成は良い。脚部内面に粘土接合痕が段として残っている。調整は外面はヘラ縦ナデの後に軽いハケ日、脚部内面はヘラ削り、裾部は横ナデである。20は脚部片で末端部を欠いている。脚は緩く広がり、外面は丹塗りである。胎土は灰白色で精良、焼成も良い。調整は外面はヘラナデの後にハケ日、脚部内面はヘラ削り、裾部は横ナデである。21は脚末端部径9.5cm、緩く開いている。外面は丹塗りで、器壁は明淡褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は外面はナデ、内面もナデ、指圧痕、裾部はナデである。23は脚末端部径9.3cm、緩く開いている。内外面丹塗り、脚部内面の内弯は軽い。調整は外面は全面に指圧痕、裾部はナデ、内面は全体に指圧痕が見られる。一群の高坏は5世紀後葉の上器である。

土師器小型丸底土器（図124-23）。口径11.6cm、器高10.6cm、脚部最大径13.0cm。完形品ではなく1/3程度出土している。口縁部は直立に近く、口唇部で器壁は一段と薄くなり、口唇は丸味を持っている。器壁は紅茶褐色、胎土には微小な砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部から胴部にかけては横ナデの後に縦方向のハケ日、疎らな横方向のヘラナデを行っている。ヘラ削りは肩部では水平に近い状態で右から左へ、胴部から底部にかけては底の中心に向けて、底面は直線的に削り、その後にヘラナデを半円状に行っている。口縁部内面は横ナデの後に疎らなヘラ横ナデで調整している。5世紀中葉の土器であろう。

土師器坏（図124-24・25）。24は2層下端から出土した。口径14.5cm、器高6.5cm、口縁部は小さく外反している。内外面ともに丹塗りで、器壁は淡褐色、胎土に微小な砂粒が含まれているが焼成は良い。調整は口縁部内外面ともに横ナデ、外面はハケ目で、方向を変えながら3度調整してい

る。25は底部を欠失している。口径12.9cm、推定器高5.5cm、口縁部は内弯している。内外面ともに丹塗り、器壁は淡褐色、胎土・焼成とともに良い。調整は口縁部は横ナデ、それ以下は横方向の丁寧なヘラ削り、底面は中心に向かって斜めに削り下している。2点の环の年代は5世紀中葉の土器であろう。

第2層出土土器（図125）

須恵器を集成した。坏蓋・环・直口壺・聰・把手付碗が出土している。2・4～10が石組造構上から出土した。

須恵器蓋坏（図125-1～3）。口径13.0cm、器高5.5cm、口縁部は直立に近く、口唇部は僅かに外に張っている。口唇には明瞭な段があり、稜線も明瞭で口径の割に器高がある。器壁は青鼠色、胎土・焼成とともに良い。調整は口縁部から稜を越えて大井部近くまで横ナデ、大井部は丁寧なヘラ削りである。内面は横ナデが大井部近くまで見られ、天井部は縦ナデである。5世紀後半の土器。

2は口径12.6cm、器高3.9cm。口縁部は直立し、口唇部は尖り氣味である。内面の段は見られないが稜があり、天井部には敷物痕がある。器壁は青鼠色、胎土に小砂を含んでいるが焼成は良い。調整は内外面とともに口縁部から天井部近くまで横ナデ、大井部はヘラ削り、内面は縦ナデである。

3は口径12.8cm、器高4.5cm。口縁部は外に僅かに開き、口唇は尖り氣味で内側に段が見られる。器壁は黒鼠色、胎土・焼成とともに良い。調整は口縁部から大井部近くまで内外面とともに横ナデ、天井部外面はヘラ削り、内面は縦ナデである。3・4は6世紀後半の土器。

須恵器坏（図125-4～7）。4は口径10.5cm、器高5.9cm。蓋受けの立ち上がりは良く伸び内傾している。口唇部に厚味があり口唇は僅かな段を持ち内傾している。受部は右上に伸びているが短く厚味がある。底面に「一」の窓印がある。器壁は黒鼠色、胎土に小砂を含んでいるが焼成は良い。調整は口縁部から底面近くまで横ナデ、底面は丁寧なヘラ削り、内面も底面近くまで横ナデ、底面は縦ナデである。5世紀後半の土器。

5は口径13.0cm、器高4.8cm、蓋受けの立ち上がりは厚味があり、口唇部は丸味があるが一芯面となっている。受けは上に伸びているが厚味は少なく短い。器壁は灰白鼠色、胎土に小砂を含んでいるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面とともに横ナデ、底面はヘラ削り、内底面は縦ナデである。

6は口径11.4cm、器高4.6cm。蓋受けの立ち上がりは細く口唇部は尖り氣味で内傾している。受部も上に伸びているが薄く短い。器壁は濃青鼠色、胎土に小砂を含んでいるが焼成は良い。調整は口縁部の内外面とともに横ナデ、底部はヘラ削り、内面は縦ナデである。7は口径11.3cm、器高4.2cm。蓋受けの立ち上がりは短く内傾している。受部は上に伸びて厚味がある。器壁は黒鼠色、胎土には小砂が含まれているが焼成はよい。調整は口縁部の内外面とともに横ナデ、底部はヘラ削り、内底面

は縦ナデである。5～7の坏は6世紀後半の土器である。

須恵器直口壺（図125-8）。肩部以下の破片である。高台部径7.9cm、推定肩部最大径15.0cm。厚味のある高台があり周辺に貼付け痕がある。器壁は青鼠色、胎土・焼成ともに良い。調整は内面は底面まで横ナデ、外面は3段のヘラ削りがあり肩部は横ナデである。6世紀後半の土器。

須恵器壺（図125-9）。口頭部が消失している。底径5.0cm、推定肩部最大径9.1cm、肩部に2条の凹線がある。肩部に櫛刺突によるノ字状文があり、底面はヘラ削りで平底としている。器壁は黒鼠色、胎土・焼成ともに良い。調整は文様の下方まで横ナデ、2段のヘラ削りがある。内面は底面近くまで横ナデ、底面はヘラ先でナデつけている。6世紀後半の上器。

須恵器把手付椀（図125-10）。1／6の小片である。口径7.4cm、残存器高4.5cm。口縁部は内傾して、口唇部は僅かに傾斜した面となっている。2条の稜線があり、貼付け痕が見られ、外面は褐色の自然釉で覆われ調整の観察はできない。器壁は青鼠色、胎土は精良で焼成は良い。調整は内面に横ナデを観察することができる。5世紀の土器。

土製品土錘（図126）。1層出土。長さ5.6cm、最大径2.2cm、重さ31.2g、完形品。器壁は明褐色、胎土・焼成とともに良い。断面は円形で、小口部で窄まっている。小口近くに斜めの線が観察され、粘土を掌中で握り壓めて製作したと考えられる。時期不明。

土製品支脚（図127-1・2）。2点ともに1層出土。1は器高17.4cm、推定基部径10.8cm、牛角突起1と基部幅1/2が欠失している。体部は直立し牛角突起の左右への広がりは大きい。体部背面に径2.0cm、深さ2.4cmの穴がほぼ水平に開けられ、周辺に剥離がみられる。器壁は全体に赤褐色、二次的な火を受けている。胎土に小砂が含まれて焼成はやや弱い。調整は突起部分はヘラナデ、体部は指圧痕が不規則に見られる。底部は窪んでいる。2は器高20.0cm、基部径13.5cm、体部幅14.8cmである。牛角突起1、体部の一部が欠失している。体部は直立し、牛角突起の広がりは少ないが大きく突きだし、突起の基部には高さ2.0cm、幅3.0cmの突起がある。器壁は淡褐色、胎土に小砂が

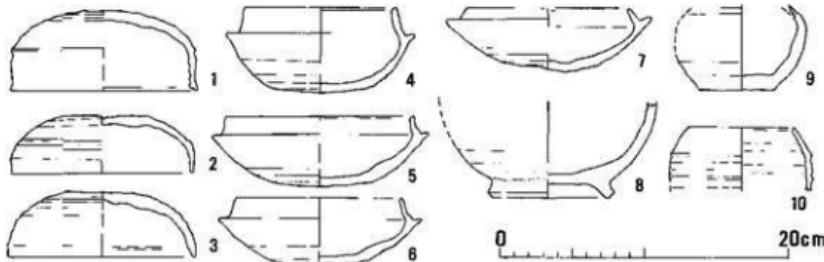


図125 2層出土土器（須恵器）



図126 土製品（土煙）

含まれているが焼成は良い。調整は全体にヘラナデで整え、基部裾は丁寧な指圧痕がある。底部は底面で底面はヘラ削りで整え、指先で突いて内面を整えている。また一部に植物繊維の圧痕がある。6世紀後半から7世紀の土製品である。

土製品紡錘車(図128、図版154-1・2・3)。1層出土。上面径2.7cm、下面径4.1cm、高さ2.1cm、中央に径6mmの孔があり、重さ39gである。器壁は黒色、胎土精良、焼成も良い。調整は各面とともにヘラで丁寧に調整されている。上面は同心円状、側面の施文部分は横方向のヘラナデの後に縱方向のヘラナデ、無文部分は細かな横方向のヘラナデ、下面は周辺に沿って短く矢印状している。

文様は上面には孔から放射状に12本の線をヘラで引き、さらに外周に沿って円形に線を施し、最後は側面において側面文様の一部となっている。側面は5個の山形文を書き、線の交点に向けて垂直の線を描いているが、必ずしもこれに拘らずに斜線や空白の状態の部分もあるし、側面図に示すように短い斜線と×印を描いている部分もある。また下辺に沈線を巡らしているが一周していない。下面は孔の周辺に僅かに荒れがみられる。文様は星形を描いて全体を区画している。星形の線は孔側から周辺に向けて引き、各脚の間を小さな山形文で埋めている。山形文は2段と3段がある。上・下辺は規画性があるが側面に関しては規画は充分とはいえない。

土製品当具(図129-1・2)。1は2箇出土。下部は5.5×5.1cmの円形、高さ3.9cm、つまみ部には8×7mm、10×6.5mmの変形の孔がある。重さ84.6g。器体は茶褐色、約半分は黒色。胎上に小妙

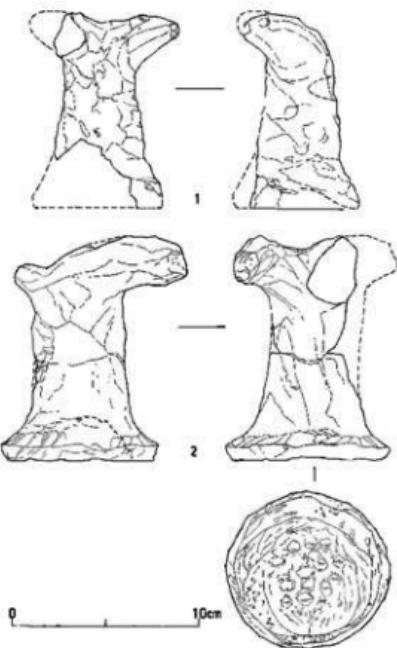


図127 土製品2（支脚）

が含まれ焼成はやや弱く、全体は手づくねで調整している。下面（当て面）は平坦でヘラによる圧痕があり、先ず細く短い線を施してから太い長めの圧痕8本を施している。

2も2層出土。下面是4.3×4.3cmの円形、高さ3.75cm、つまみ部に13×6mm、17×8mmの変形の孔がある。重さ58.9g。焼成前の穿孔であるために胎土が突き出ている。器壁は明淡褐色であるが下面は淡黒色である。胎土には小砂が含まれ焼成はやや弱い。表面は荒れが見られるが全体に手づくねで製作され、下面是平坦で何らの加工もない。

石器砥石（図130）。2層出土。長さ9.6cm、幅3.9cm、高さ5.0cm。上面と左側面に研磨痕がある。上面は縦断面図で明らかに半円形に摩耗痕があり、側面は極めて軽い摩耗である。石の日は細かい。

鉄器（図131-1～4）。1は鉄矛、1層出土。全体に腐蝕が進んでいるが辛うじて原型を留めている。残存長14.1cm、身幅1.3cm、厚さ5mm、袋部径2.8cm。2は鉄矛袋部、1層出土。1と接合できる可能性をもっている。腐蝕が進み小口部分で形が推測できるに過ぎない。外径2.8cm、内径1.8cm。3は鐵の茎部、2層出土。腐蝕が進んでいるが辛うじて原型を留めている。長さ5.2cm、幅4mm、厚さ1.5mm。4は鐵の茎部、1層出土。腐蝕が進んでいるが辛うじて原型を留めている。長さ6.3cm、幅7mm、厚さ3mm。

骨角器（図132-1～3）。1は骨製刀子柄、1層出土。端部を欠失している。現存長7.0cm、挿入孔側で幅1.2cm、厚さ9mm、断面は長円形である。挿入口は4.0×6.0mmの長円形で深さは不明である。全体に丁寧に削られ、特に下辺部は一段と細かに削られている。古墳時代遺物。

2は骨製刀子柄、4層上半部出土。挿入孔部分が欠失している。現存長7.9cm、幅1.5cm、厚さ1.4

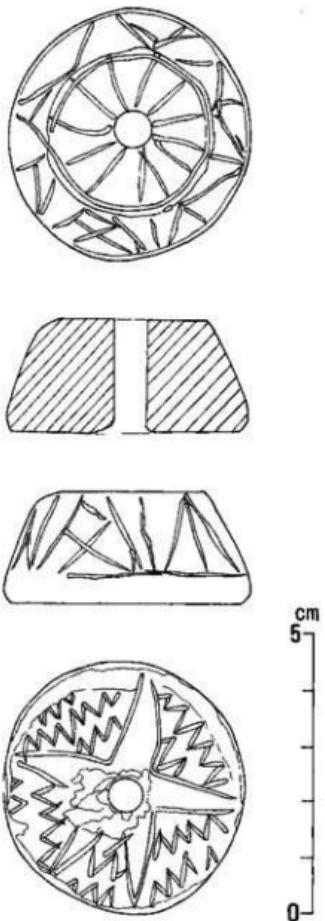


図128 土製品3（紡錘車）

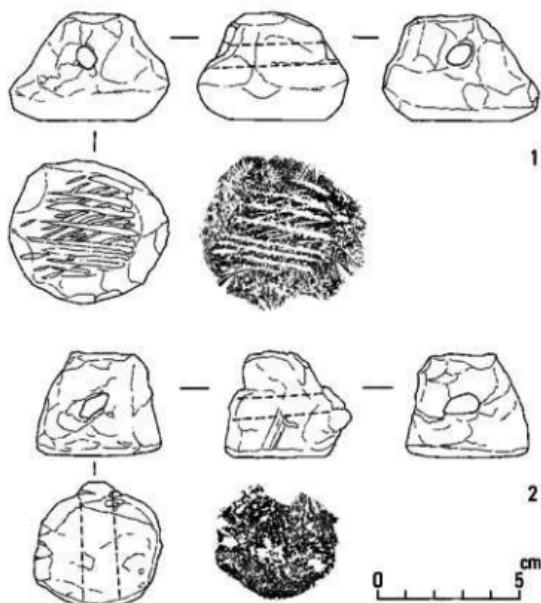


図129 土製品（当て具）

cm、断面は円形である。挿入孔は残存部分で 7×6 mmで円形に近く、深さは 7.0 cm で柄の端部にまで達しているが、軸の部分が崩壊した可能性も考えなくてはならない。全体に丁寧に削られている。柄末端部は切断痕が残り、中央付近に三角形状に鋭い刺突痕があり、間隔は 2.15 mm、穴の径は 0.7 mm である。骨を切断する時の金属製の固定具の痕跡であろうか。小口の切断痕は数回に涉って刻み込んでいる。弥生時代の遺物の可能性をもつものである。

3 は骨製鎌、2 層出土。完形品で全長 8.6 cm、先端部分 2.4 cm は鋭く削り、断面は菱形で幅 7 mm、厚さ 4 mm。中央部は断面半月形で幅 8 mm、厚さ 5 mm、茎部は断面円形で丁寧に削っている。古墳時代遺物。

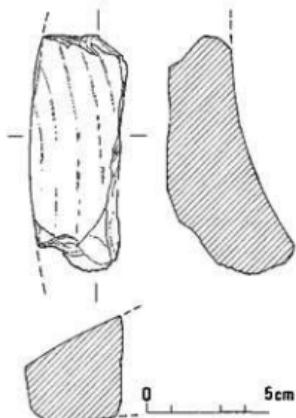


図130 石器（砥石）

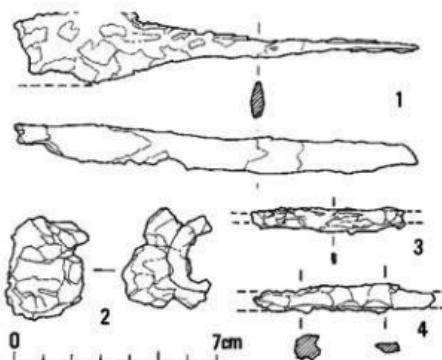


図131 鉄器（矛・鎌）

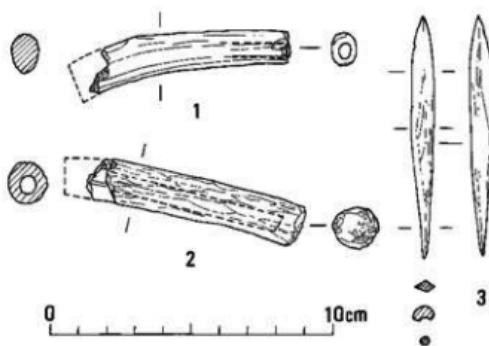


図132 骨角器（刀子柄・鎌）

第8章 島根県・古浦遺跡出土の弥生～古墳時代人骨

中橋孝博・永井昌文

古浦遺跡は島根県松江市の西北、島根半島の八束郡鹿島町の日本海に面した砂丘上に位置する。この地に遺跡が存在することは既に戦前から知られ、時おり採砂作業等に際して人骨や考古遺物が出土していた。当初はしかしいずれも古墳時代のものと考えられていた様だが、金闇丈夫（金闇、1975、1976）らによる1962、63年度の本格的な発掘調査によって、弥生時代前期にまで遡る包含層が確認され、大量の保存良好な弥生人骨が管状や貝輪、貝小片、あるいは各種の土器等と共に出土した。

衆知のよう、近年、北部九州を中心としていわゆる「渡来系」弥生人の存在が広く認められるようになり、日本人の形成にこれら大陸からの渡来人達が従来考えられていた以上に重要な役割を果たしたものとの認識が固まりつつある。しかし、弥生人骨の出土は依然として九州や山口県の日本海側沿岸に偏り、渡来の波がどの様な地理的、時代的な推移を見せるのか、出土人骨によるその具体的な検証作業は今なお大きな制約を受けたままである。

山口県の上井ヶ浜遺跡から日本海沿岸を東へ200キロ余り隔った古浦遺跡は、そうした検証作業に於て重要な位置を占めている。現在までのところ、人骨の個体数、保存状態共に、有意の検証に耐え得るまとまった弥生人資料としては、当遺跡が地理的に最も東に位置していると考えられる。しかも人骨の多くが時代的に弥生時代前期まで遡るとされることから、渡来人的形質の発現経過や抜歯問題等を考える上で、古浦人骨のもたらす情報は大きな意義を持つ。既に当遺跡出土人骨の一部については幾つか報告がなされているが（金闇、小片、1962；永井、1984）、発掘から30年余り経てようやく全資料をまとめる機会を得たので、以下に人類学的な検討結果を報告する。

遺跡・資料・方法

古浦遺跡は、島根半島の北岸、八束郡鹿島町古浦の日本海に面した風成砂丘上に営まれた埋葬遺跡である。当地の砂は貝小片を多量に含む極めて微細な砂粒からなり、そのPH値も8.7と、強い塩基性を示すこと、また基壙が深いところで地表から5m下に位置したことも手伝って、人骨の保存状態は全体的に極めて良好である。

表1 古浦遺跡出土人骨一覧

No.	性	年齢	時代	保存状態	族	國	推定身長(cm)	伴出遺物	補記
20	♂	青年	弥生前期	△	?	-	-	-	前頭部に青斑。安達徳雄氏採集。
21	?	幼児	"	○	-	-	-	骨玉2	4~5歳。青斑(前頭骨右半)。
22	?	老年	"	△	(C I ₂ I ₃ C)	152.6	-	-	-
23	?	幼児	"	○	-	-	-	貞輪左4	1歳位。
24	?	幼児	"	○	-	-	-	貞輪左6	2歳位。ハマグリ2。
25	?	乳児	"	△	-	-	-	-	6~9ヶ月。黒煙灰ではない。
26	?	成年	"	○	C - + - C	144.6	-	-	列石・黒石。
27	♂	成年	古墳時代	○	C - + - C	170.8	-	-	-
28	?	幼児	弥生前期	○	-	-	-	貞輪右5 貝小玉28	1歳位。
29	?	幼児	"	○	-	-	-	貞輪右3・左2 貝小玉22	2~3歳。貝石。
近藤I	?	老年	" ?	○	C - C	-	-	-	-
II上IV	♂	青年	" ?	X	C - C	-	-	-	-
白木III	♂	老年	" ?	△	C(I ₂) - (C) C	-	-	-	-
1410	♂	老年	" ?	△	-	165.5	-	-	背椎ゆき。
1411	♂	成年	" ?	○	C - + - C	-	-	-	-
1401	♂	老年	" ?	△	C - - C	-	-	-	青斑(前頭部)。
30	?	小兒	" ?	○	-	-	-	貝小玉2。	8~9歳。頭蓋に病変。
31	?	幼児	弥生前期	○	-	-	-	貝小玉198。	2~3歳。
32	?	幼児	"	○	-	-	-	貞輪左5 貝小玉29	4~5歳。
33	?	幼児	"	X	-	-	-	-	3歳位。
34	?	幼児	"	○	-	-	-	貝小玉36。	-
35	♀	成年	"	○	C - C	155.5	骨玉2。	-	左椎骨連枝部骨折。
36	?	青年	"	○	C - - C	150.8	-	-	-
37	?	幼児	"	△	-	-	-	-	4歳位、巻貝1、貝石3
38	?	乳児	"	○	-	-	-	-	6~8ヶ月。
39	?	?	古墳時代?	X	?	-	-	-	-
40	?	成年	古墳時代	X	?	-	-	-	-
41	?	若年?	弥生前期	△	-	-	-	-	12歳位。
42	?	成年	"	○	C - L C	152.2	-	-	-
43	?	乳児	"	X	-	-	-	-	-
44	♂?	青年	"	○	C - C	163.8	-	-	-
45	♀	成年	"	X	-	-	-	-	-
46	?	幼児	"	○	-	-	-	-	1~2歳。
47	♂?	青年	"	△	C - (C)	-	-	-	-
48	?	若年	古墳時代	○	C - C	-	-	-	-

No	性	年齢	時代	保存状態	族	歯	推定身長(cm)	伴山遺物	補記
49	♂	成年	弥生前期	△	C	C	-	勾玉1、菅玉3、列石4、置石1、青銅。	
50	♂	老年	古墳時代	X	なし?	-	-		
51	?	?	成年前期	X	?	-	-		
番外1	♂	成年	老生?	X	?	-	147.9		
60	♀	老年	弥生前期	O	?	?	147.1		置石1、ハマグリ、青斑(前頭部)。
61	?	成年	?	O	C	C	147.9		
62	♂	成年	古墳時代	O	なし?	-	161.4		置石2
63	?	成年	古墳時代?	X	(C)	(C)	-		
64	?	?	弥生初期?	X	-	-	-		
65	?	小児	弥生前期	X	-	-	-		10歳位。
66	♂	老年	弥生中期	X	(C)	(C)	-	玉1。	立石8、立石1、立石基礎1
67	♂	老年	成年前期	O	?	?	167.2		
68	♂	老年	?	O	C	C	163.7		
69	?	成年	?	X	?	?	-		椎骨または散乱。左鎖骨骨折。
70	♂?	老年	弥生前期	X	?	?	-		
71	♂	老年	?	X	C	C	-		
72	♂	老年	?	X	(P.) C	C	-		頭骨のみ。

人骨の多くは種々の配石や置石等を伴う埋葬遺構中に見いだされ、貝輪や貝小玉、菅玉、勾玉等の豊富な副葬品も伴っていた。中には貝輪などを装着した1、2歳の幼児骨も検出されている。なお、弥生前期人骨包含層からは、他に鹿の中足骨を用いたト骨も発見された(金闇、1975、1976)。

表2 古浦遺跡弥生時代出土人骨

年齢	男性	女性	不明	計
乳兒(<1)	-	-	3	3
未 或 人	幼兒(1-5)	-	11	11
小兒(6-11)	-	2	2	
若年(12-19)	-	1	1	2
成年(20-39)	5	4	1	10
成 人	熟年(40-59)	12	4	0
不 明	老年(60-)	1	0	2
不 明	不明(20-)	0	1	2
不 明	計	0	3	3
		18	11	22
				51

出土人骨を表1に一覧する。表2には人骨の性、年齢構成を示したが、人骨総数は51体を数える。各人骨の所属時代については藤田等による考古学的検証の結果、仰臥伸展葬の個体は古墳時代に所属する可能性が高いことが指摘され（別項参照）、それに基づいて計数すると、51体の出土人骨の内、弥生人骨が44体（66号人骨だけ弥生中期に属すが、他は前期後半）、古墳人骨が7体となる。

計測は主にMartin-Saller（1957）に従い、頭蓋についてはその他W.W.Howells（1973）、鼻根部については鈴木（1963）の方法を用いた。また、顔面の平坦度はYamaguchi（1973）の方法を、脛骨については一部、森本（1971）の方法をそれぞれ用いた。なお、性判定には筆者らの算出した弥生人に対する判別関数（Nakahashi&Nagai, 1986；中橋1988）を援用した。また、抜歯の判定は土井ヶ浜弥生人（中橋、1990）で用いた基準に従った。

結 果

1. 形態

1-1. 頭蓋

古墳人骨の頭蓋は、比較的大きく頑丈で、特に男性では、眉弓部や各筋付着部が強く発達した、全体的に屈強な外観を呈する個体が目につく。

頭蓋の計測結果を表3に、また表4、5には男女それぞれ主要項目についての比較結果を示した。なお、上述のように当集団は時代的にかなりの広がりを示すが、この間に文化的な断絶を示す考古学的評定ではなく、一応、当地に居住した集団によって営まれた一連の墓地と見なされているので、ここでは古墳集団として一括集計し、その結果に基づいて以下の各分析を行った（集計に含まれる古墳人骨は男女各1体ずつで、女性は四肢の一部のみ。）

図1、2に土井ヶ浜弥生人（企闘、他、1960）を基準とした偏差折線を示した。

脳頭蓋：男女とも、土井ヶ浜を始めとする比較群に比して頭長がやや短く、また頭高がかなり高い点が目につく。頭幅がやや広いことも手伝って少し短頭傾向が見られ、男性（78.4）は中頭型の上位に留まるものの、女性の頭長幅示数（80.4）は短頭型に分類される。ただ、頭幅が比較的大きい割には、最小前頭幅が男女とも狭い（男93.2、女91.0）。

また、特に女性のバジオン・ブレグマ高は、例数の少なさによる影響もあるようが、北部九州弥生人（中橋、永井、1989）や現代人をもかなり上回っている。男性もまた、現代人（原田、1954）程ではないにしろ、弥生人としては北部九州と共に最も高い集団となっており、縄文人（金高、1928；池田、1988）や西北九州弥生人（内藤、1971）などはもとより、地理的には一番近い土井ヶ浜ともこの点で確差が認められる。これに付随して長高、幅高示数も、それぞれ弥生人としては高い。

表3 古漢遺跡出土赤土人骨・頭蓋計測値

Martin No.		男性						女性					
		N	Mean	S.D.	Max.	Min.	N	Mean	S.D.	Max.	Min.		
M 1	頸底大長	1C	180.0	6.09	188	-	169	9	174.9	5.61	183	-	169
M 8	頭底大幅	11	141.4	5.01	146	-	131	9	140.6	6.39	152	-	132
M 17	Ba-Br高	7	137.7	4.86	146	-	132	7	134.6	5.97	144	-	128
M 8/1	頭頂部示数	10	78.4	4.08	85.8	-	72.3	9	80.4	2.91	84.0	-	75.9
M 17/1	頭頂高示数	7	75.8	2.47	78.1	-	71.0	7	76.8	1.74	78.7	-	74.0
M 17/8	頭顎高示数	7	58.8	5.24	106.9	-	91.7	7	95.5	4.31	99.3	-	89.5
M 5	頭基底長	7	102.4	8.00	111	-	91	7	99.3	5.22	106	-	93
M 9	最小前凹幅	9	93.2	6.61	103	-	83	8	91.0	7.87	99	-	76
M 11	兩耳幅	10	127.9	5.69	138	-	119	8	125.6	5.37	135	-	117
M 12	最大後頸幅	10	109.7	5.77	119	-	102	9	106.6	4.67	113	-	98
M 23	頭蓋水平周	9	521.4	14.55	546	-	502	7	511.3	16.63	532	-	491
M 24	橫張長	11	312.6	10.14	326	-	295	9	307.6	10.83	321	-	290
M 25	正中矢状弧長	8	368.0	10.50	388	-	356	8	365.1	14.30	388	-	341
M 40	經長	7	95.7	7.30	104	-	85	7	91.9	4.38	103	-	89
M 43	上顎幅	9	106.4	5.85	115	-	98	7	103.7	5.06	110	-	97
M 44	西眼高	9	101.3	4.33	106	-	94	7	97.6	3.60	101	-	92
M 45	蝶骨弓高	9	139.2	4.27	146	-	133	7	132.6	6.45	140	-	121
M 46	中顎幅	10	105.8	5.31	113	-	96	7	99.3	5.35	105	-	88
M 47	顎高	6	122.2	7.44	132	-	112	5	110.4	6.66	118	-	103
M 48	上顎高	8	73.3	4.40	79	-	67	7	68.7	4.35	75	-	63
M 47/45	顯示示数(K)	6	87.3	4.49	95	-	81.8	5	84.8	5.37	90.6	-	77.0
M 47/46	顯示示数(V)	6	114.0	8.47	120.8	-	99.1	5	112.1	4.85	117.0	-	104.0
M 48/45	上顎示数(K)	8	52.6	3.24	56.8	-	48.6	7	51.9	3.11	55.1	-	46.7
M 48/46	上顎示数(V)	8	69.7	4.69	75.0	-	59.3	7	69.3	3.89	75.0	-	63.0
M 51	額高差(左)	9	43.0	1.69	44	-	39	7	41.0	2.52	44	-	37
M 52	額高差(右)	8	35.3	2.31	38	-	31	7	33.4	1.27	35	-	31
M 52/51(L)	額高示数(左)	8	82.1	5.73	92.7	-	72.1	7	82.1	6.11	89.2	-	72.1
M 54	鼻竇	9	26.1	2.76	29	-	20	7	26.3	1.98	29	-	23
M 55	鼻高	9	53.7	3.39	58	-	49	7	47.9	3.02	53	-	41
M 54/55	鼻示数	9	48.6	3.76	52.9	-	40.8	7	55.0	3.88	59.2	-	50.0
M 50	右眼窩間幅	9	18.1	2.97	22.7	-	14.0	8	17.7	2.49	20.0	-	12.7
M F	鼻根橋張長	8	21.5	3.25	26	-	16	8	20.4	3.16	23	-	14
M 50/F	鼻根橋曲示数	8	86.8	8.11	90.8	-	80.8	8	87.3	3.58	90.9	-	81.8
M 57	鼻骨鼻小脣	8	7.5	2.16	10.8	-	5.0	8	7.9	1.83	9.8	-	5.3
M 72	全側面角	7	85.7	2.56	90	-	83	7	83.4	2.57	87	-	80
M 73	鼻側面角	7	89.4	2.70	92	-	86	7	88.5	2.07	93	-	87
M 74	齒槽側面角	7	73.7	7.63	86	-	64	7	70.1	3.72	76	-	66
M 65	下顎張闊度	6	128.2	3.87	131	-	122	7	125.7	6.73	131	-	111
M 66	下顎角幅	8	111.0	6.12	121	-	103	8	100.8	7.98	112	-	89
M 68	下顎骨長	7	76.4	7.59	89	-	69	7	72.4	4.72	79	-	68
M 69	オトガイ高	7	32.1	2.91	36	-	27	7	30.1	3.98	36	-	25
M 70	下顎枝高(左)	6	66.8	3.81	73	-	64	6	57.0	0.63	68	-	56
M 71	下顎枝幅(左)	8	36.9	4.45	44	-	31	9	33.6	2.30	36	-	30
M 71/70	下顎枝示数(左)	6	54.2	7.39	68.8	-	48.4	6	57.6	4.34	63.2	-	52.6
M 79	下顎枝角	6	120.3	9.03	130	-	107	8	126.8	4.92	134	-	119
H.VRR	Vertex Rad.	11	125.7	3.95	131	-	121	8	122.4	3.85	127	-	118
H.NAR	Nasion Rad.	10	94.1	6.15	103	-	83	8	89.0	3.21	95	-	84
H.SSR	Subsp. Rad.	9	96.4	5.53	105	-	87	7	89.7	3.35	96	-	86
II.PRR	Pyrrost Rad.	7	99.9	4.49	106	-	94	7	96.4	3.87	100	-	92

表4 主要頭蓋計測値の比較（男性）

	古瀬 (歴生)		北九州市 (歴生)		土井・武田 (歴生)		西北九州 (歴生)		広田*		沖縄・古賀 (歴文)		大東日本** (現代)	
	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1 頭蓋最大長	10	180.0	118	183.7	52	182.8	21	182.8	26	166.0	60	184.2	108	181.4
8 頭蓋最大幅	11	141.4	117	142.4	54	142.6	20	144.9	25	147.2	62	144.9	108	139.3
17 Ba-Bw高	7	137.7	101	137.7	43	134.7	15	134.6	17	130.7	26	135.5	108	139.3
8/1 頭長幅示数	10	78.4	104	77.7	48	78.1	20	79.2	25	89.0	55	78.7	108	76.6
17/1 頭長最大幅	7	75.8	91	75.3	42	73.7	15	74.2	17	78.7	25	73.3	108	76.9
17/8 頭幅差示数	7	98.8	91	97.0	43	94.3	14	93.1	17	88.5	26	93.6	128	106.1
45 肩骨弓幅	9	139.2	103	140.0	27	139.4	12	138.4	7	137.7	16	141.0	106	131.5
46 中頭高	10	105.8	114	104.7	37	103.1	17	105.0	10	99.6	31	103.8	107	99.9
47 頭高	6	122.2	80	123.8	36	123.4	14	117.1	11	109.9	25	115.7	66	122.2
48 上顎高	8	73.3	114	74.8	35	72.4	17	68.1	12	62.9	28	66.3	92	71.8
47/45 顎示数 (K)	6	87.3	71	88.4	24	88.5	12	84.6	7	79.9	10	80.4	64	91.4
47/46 顎示数 (V)	6	114.0	74	118.4	31	119.3	14	111.8	9	111.2	18	110.4	65	122.2
48/45 上顎示数 (K)	8	52.6	95	53.3	21	51.9	12	49.3	7	45.6	10	47.0	90	53.5
48/46 上顎示数 (V)	8	69.7	105	71.5	31	70.0	17	64.8	10	63.7	22	63.1	91	71.8
51 眼窓高 (左)	9	43.0	89	43.2	38	42.7	15	43.1	9	43.1	40	43.2	108	43.0
52 眼窓高 (右)	8	35.3	93	34.5	40	34.2	15	32.8	9	31.8	38	33.2	108	34.1
52/51 眼窓示数 (左)	8	82.1	86	79.9	38	80.1	15	76.2	8	74.2	32	77.5	108	80.2
54 鼻幅	9	26.1	117	27.1	38	27.1	16	27.8	12	25.9	36	26.5	108	25.9
55 鼻高	9	53.7	116	52.8	39	53.1	16	51.0	12	45.5	30	48.1	108	52.2
54/55 鼻示数	9	48.6	113	51.4	37	51.0	16	54.4	11	56.4	27	54.7	108	49.8
72 全側面角	7	85.7	85	81.5	34	83.6	15	82.0	7	84.1	19	81.5	92	83.8
74 齒槽側面角	7	73.7	83	69.8	35	71.0	-	-	6	66.0	20	70.1	107	70.7

* : 広田・馬の年 (以下同じ)

1) 中橋・永井 (1989)

2) 金間・島 (1960)

3) 内藤 (1971)

4) 清野・宮木 (1926), 金高 (1928)

5) 原田 (1954)

表5 主要頭蓋計測値の比較（女性）

	古瀬 (歴生)		北九州市 (歴生)		土井・武田 (歴生)		西北九州 (歴生)		広田*		沖縄・古賀 (歴文)		大東日本** (現代)	
	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1 頭蓋最大長	9	174.9	86	177.0	32	176.0	15	178.1	22	159.7	46	176.1	57	172.8
8 頭蓋最大幅	9	140.6	81	138.4	32	138.1	15	139.3	23	144.4	49	141.5	57	131.0
17 Ba-Bw高	7	134.6	66	130.7	29	128.1	7	127.3	8	127.1	21	129.7	57	131.3
8/1 頭長幅示数	9	80.4	72	78.1	30	78.5	15	78.2	18	90.2	41	80.3	57	77.6
17/1 頭長示数	7	76.8	62	74.1	28	72.8	7	71.2	7	79.9	20	73.6	57	76.0
17/8 頭幅示数	7	94.5	56	94.9	29	92.8	7	92.5	8	90.4	20	91.9	57	98.0
45 肩骨弓幅	7	132.6	61	131.3	20	131.9	6	130.2	4	126.0	10	132.6	57	123.9
46 中頭高	7	99.3	67	99.8	23	98.5	11	95.9	6	91.8	23	99.7	57	93.4
47 頭高	5	110.4	45	116.3	23	114.2	9	101.9	4	103.3	14	105.1	14	112.9
48 上顎高	7	68.7	66	70.1	22	68.3	12	60.9	4	62.0	17	62.0	55	68.2
7/45 顎示数 (K)	5	4.8	34	88.7	17	86.6	6	81.7	3	81.1	7	79.2	14	90.8
7/46 顎示数 (V)	5	112.1	39	116.7	21	115.9	9	109.5	4	110.8	13	106.8	14	119.0
8/45 上顎示数 (K)	7	51.9	49	53.7	17	51.8	6	47.6	3	47.9	7	48.0	55	55.0
8/46 上顎示数 (V)	7	69.3	57	70.2	21	69.3	11	63.5	4	63.3	14	62.3	55	72.9
51 眼窓高 (左)	7	4.0	66	41.6	24	40.3	10	41.1	4	39.3	22	41.7	57	40.5
52 眼窓高 (右)	7	38.4	65	34.1	25	33.3	10	31.2	4	30.3	14	32.6	57	34.0
2/51 眼窓示数 (左)	7	82.1	62	82.0	21	82.6	10	75.9	4	77.7	13	78.0	57	83.9
54 鼻幅	7	26.3	72	26.6	20	26.0	12	26.6	5	24.8	27	25.4	57	25.0
55 鼻高	7	47.9	71	49.8	23	49.0	12	46.3	4	44.0	21	44.9	57	48.6
4/55 鼻示数	7	55.0	69	53.5	20	53.0	12	57.4	4	58.0	20	56.1	57	51.4
72 全側面角	7	83.4	48	83.5	22	83.6	10	81.5	3	84.7	12	81.5	55	83.0
74 齒槽側面角	7	70.1	47	67.9	22	70.5	-	-	3	65.7	13	68.7	55	67.1

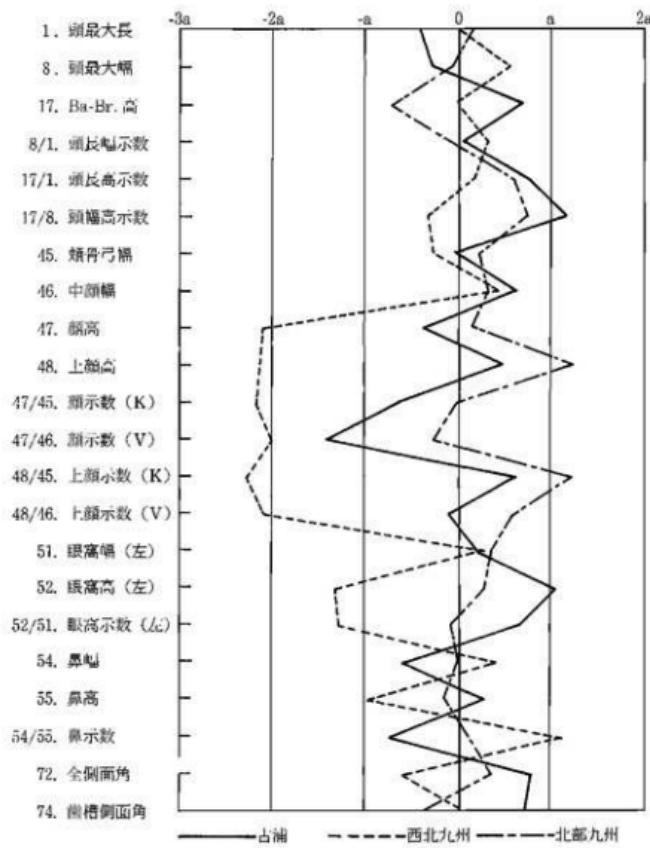


図1 土井ヶ浜弥生人を基準とした頭差折線（男性）

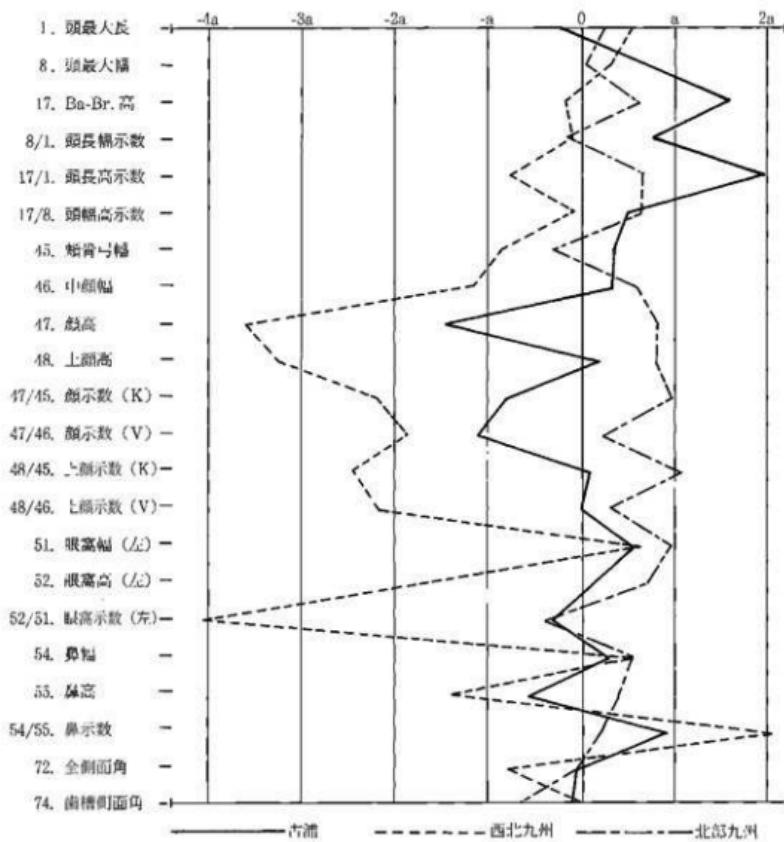


図2 土井ヶ浜弥生人を基準とした偏差折線（女性）

顔面頭蓋：男女ともに高顎傾向が強い。顔面幅径は、他の弥生人と同様、かなり広いが、高径もまた大きく、北部九州ほどではないにしろ、十井ヶ浜を少し上回る傾向を見せる。これに伴って、顎示数、上顎示数共に大きく、例えばKollmanの上顎示数は男性52.6、女性51.9で共に中上顎型(mesen)に属す。この点で低・広顎を特徴とする縄文人やいわゆる十石系の弥生人等との差が大きい。

眼窩にも同傾向が明かで、それぞれ土井ヶ浜や北部九州弥生人の類似性と同時に、縄文人などの低眼窓型とは確差が見られる。鼻型については女性でやや高示数(55.0、広鼻型chamaerhin)に傾くものの、男性は逆に北部九州(51.4)などよりさらに狭鼻傾向が強く(48.6-中鼻型mesorrhin)、好対照をなしている。また、顔面側面角は比較的大きく、歯槽性突顎等は見られない。

表6 鼻根部計測値の比較(男性)

	古瀬 (弥生)		北九州 (弥生)		上井ヶ浜 (弥生)		西北九州① (弥生)		沖縄② (縄文)		吉母浜③ (中世)		西瀬日本 (近代)	
項目	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
50 前歯高間幅	9	18.7	114	19.0	26	18.3	14	18.8	28	19.8	18	18.8	89	17.7
F 鼻根横径長	9	21.5	114	21.5	24	21.1	13	24.4	17	25.7	15	21.7	89	20.5
50/F 鼻根弯曲示数	8	86.8	114	88.7	24	87.2	13	76.7	17	77.5	15	86.6	89	86.2
57 鼻骨最小幅	8	7.5	120	8.2	24	8.1	13	10.2	-	-	17	7.9	88	6.9

1) 松下(1985) 2) 池田(1988) 3) 中橋・永井(1985)

表7 鼻根部計測値の比較(女性)

	古瀬 (弥生)		北九州 (弥生)		上井ヶ浜 (弥生)		大友① (弥生)		沖縄 (縄文)		吉母浜 (中世)		西瀬日本 (近代)	
項目	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
50 前歯高間幅	8	17.7	73	18.3	16	19.1	9	17.4	23	18.3	25	17.8	57	16.8
F 鼻根横径長	8	20.4	70	20.2	16	21.1	-	-	10	22.1	25	19.8	57	19.3
50/F 鼻根弯曲示数	8	87.3	70	90.5	16	90.8	-	-	10	80.9	25	90.3	57	87.3
57 鼻骨最小幅	8	7.9	74	8.2	15	8.3	8	11.0	-	-	24	7.7	57	7.0

1) 松下(1985)

男性では唇間部の発達が強いため、鼻根部の陥凹も深くて立体的な印象を与える個体が散見されるが、縄文人、あるいは西北九州弥生人のように鼻骨や上顎骨前頭突起が強く彎曲、傾斜した立体的な鼻根部とは異なって、かなりの扁平傾向が見られる。表6、7に示したように、鼻根弯曲示数において縄文人(池田、1988)等との隔たりは大きく、この点でもいわゆる渡来系弥生人に近い傾向を示すが、ただ、男女とも十井ヶ浜よりは幾分彎曲が強いようである。

表8、9は、鼻骨の他、顔面各部の平坦度を山口(1973)に従って計測した結果である。鼻骨のみで計っても、やはり土井ヶ浜よりはやや弯曲が強いようだが、金隈遺跡など北部九州弥生人には近く、いずれにしろ縄文人等と較べるとその差異は明かであろう。ただ、前頭部、上顎部等については、東日本縄文人等とは明かな差が見られるものの、西日本縄文人とその差は明確ではない。山口(1980)が、前頭骨の平坦度には日本の東西で地域差があることを指摘しているが、西日本の古人骨は概して東日本より扁平性が強いようで、例えばこの表にも示したように、西日本縄文人と北九州弥生人の間に大差は見られず、古浦弥生人もまたそれらに類似している。こうした地域差が何に由来するのか、縄文時代から指摘されている東西の地域差の一つとして興味ある問題だが、山陰地域や北部九州域の縄文人はまだ資料が少なく、この特徴の時代や地域による変化には不明な点が多い。古浦人骨は一応、扁平な顔面を特徴とすると見えようが、その意味するところの評価にはまだ検討すべき余地があると言うべきだろう。

表8 顔面平坦度の計測結果(男性)

計測項目	古浦(男)		土井ヶ浜(男)		北九州(男)		北九州(古)		西日本(現)		東日本(現)	
	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
頬骨弦	9	100.4	36	100.1	105	100.1	36	100.7	48	99.6	28	99.6
頬骨垂線	9	14.2	36	14.6	105	14.8	36	14.4	48	14.7	28	16.4
頬骨示数	9	14.1	36	14.5	105	14.8	36	14.3	48	14.8	28	16.5
竹歯	10	8.0	31	8.4	105	8.5	41	8.4	21	10.1	16	10.2
骨垂線	10	2.2	31	2.1	105	2.5	41	2.3	21	3.6	16	4.6
骨示数	10	27.2	31	24.2	105	29.2	41	26.9	21	35.3	16	45.5
上顎骨弦	7	106.0	22	104.9	65	103.3	26	104.2	20	102.9	11	102.8
上顎骨垂線	7	22.6	22	21.0	65	21.6	26	22.5	20	22.6	11	22.9
上顎骨示数	7	21.4	22	20.1	65	20.9	26	21.6	20	21.9	11	22.2

西日本(現)：北九州、津雲、古浦縄文人の集計値
山口(1988)

表9 顔面平坦度の計測結果(女性)

計測項目	古浦(女)		土井ヶ浜(女)		北九州(女)		北九州(古)		西日本(現)		東日本(現)	
	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
前頭骨弦	5	98.1	19	97.6	55	96.1	23	95.2	35	96.5	21	97.6
前頭骨垂線	5	12.2	19	13.7	55	13.4	23	12.7	35	13.8	21	14.4
前頭骨示数	5	12.4	14	14.0	55	14.0	23	13.3	35	14.3	21	14.8
鼻骨弦	7	7.9	20	8.5	62	8.3	28	7.7	18	10.6	8	9.3
鼻骨垂線	7	1.9	20	1.7	62	1.9	28	1.7	18	3.9	8	3.2
鼻骨示数	7	25.1	20	20.2	62	24.3	28	22.0	18	36.7	8	33.6
頬上顎骨弦	6	100.8	16	99.0	33	99.7	13	99.1	16	97.0	6	101.0
頬上顎骨垂線	6	19.5	16	19.6	33	20.4	13	20.5	16	19.8	6	21.8
頬上顎骨示数	6	19.3	16	19.9	33	20.5	13	20.7	16	20.4	6	21.6

西日本(現)：北九州、津雲、古浦縄文人の集計値
山口(1988)

下顎：古浦弥生人の下顎では、特に男性において下顎角が強く外反した個体の存在が目につく（図版1参照）。そのためか、表10、11に示したように、男性では土井ヶ浜に較べて下顎頭間幅では下回るのに比して、下顎角幅が非常に広くなっている。ただ、下顎枝高が著しく高い為に、下顎枝示数でみると、現代人よりもむしろ小値に留まっている。また、オトガイ高は比較的低く、頬高がやや低くなる一因となっている。

表10 下顎骨計測値の比較（男性）

項目	古浦 (弥生)		北九州 (弥生)		土井ヶ浜 (弥生)		深堀2) (弥生)		沖縄 (縄文)		吉母浜 (中世)		西南日本 (近代)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
65 下顎頭間幅	6	128.2	49	132.9	35	131.2	3	127.3	30	131.2	18	122.7	85	123.7
66 下顎角幅	6	111.0	33	108.4	42	106.8	-	-	46	103.1	19	102.8	86	97.1
68 下顎長	7	76.4	44	75.1	42	76.0	3	75.3	46	75.9	19	73.3	86	65.2
69 オトガイ高	7	32.1	88	35.7	47	33.3	3	30.7	31	32.3	16	32.1	85	35.6
70 下顎枝高(左)	6	66.8	26	64.5	45	62.2	3	61.0	38	62.0	15	59.9	87	59.6
71 下顎枝幅(左)	8	36.9	46	37.4	54	36.4	3	34.3	53	33.8	19	35.9	87	34.7
71/70 下顎枝示数	6	54.2	25	59.7	44	58.5	3	56.4	38	54.9	15	61.2	86	58.5
79 下顎枝角	6	120.3	51	120.8	43	123.9	3	124.0	45	122.7	19	121.2	86	128.3

1) 大庭 (1958) 2) 内藤 (1967)

表11 下顎骨計測値の比較（女性）

項目	古浦 (弥生)		北九州 (弥生)		土井ヶ浜 (弥生)		深堀 (弥生)		沖縄 (縄文)		吉母浜 (中世)		西南日本 (近代)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
65 下顎頭間幅	7	125.7	34	126.8	22	124.8	5	123.6	22	123.9	28	118.0	19	114.1
66 下顎角幅	8	100.8	26	100.4	25	102.5	-	-	36	95.7	28	95.9	19	91.6
68 下顎長	7	72.4	26	72.5	25	71.4	6	73.2	34	74.3	28	71.9	18	67.9
69 オトガイ高	7	33.1	55	32.3	23	30.8	6	26.8	10	28.3	22	29.9	16	31.7
70 下顎枝高(左)	6	57.0	20	59.2	28	57.3	6	50.8	30	56.4	23	56.1	19	55.5
71 下顎枝幅(左)	9	33.6	34	35.3	31	34.7	6	31.3	40	32.6	28	34.7	19	32.0
71/70 下顎枝示数	6	57.6	20	61.0	28	60.8	6	62.0	30	57.9	23	62.1	18	57.6
79 下顎枝角	8	126.8	34	125.2	26	126.0	6	127.8	37	122.5	25	121.5	16	128.6

1-2. 四肢骨

上肢骨（表12, 13）

著しく長く、かつ太くて頑丈な傾向が見られ、特に男性上腕骨では、強大な三角筋粗面を持つ個体が目につく。

男女とも骨体の長さは土井ヶ浜（財津、1956）をも上回る傾向を見せ、比較群中では女性の前腕骨を除いて、いずれも最高値を示している。男性では骨幹諸径でも縄文人を上回っており、長径の

大きさのために反厚示数では目立たないものの、筋付着部の良く発達した頑丈な上肢の持ち主と言える。女性では一応そうした傾向は見られないようである。また、骨幹の断面形状に、縄文人のような扁平性は見られず、土井ヶ浜や北部九州弥生人（中橋、永井、1989）に比較的近い示数值となっている。

下肢骨（表14, 15）

男性では上肢同様、著しく長くて太い傾向が明かであるが、女性ではそれ程でもない。男性の各長径はやはり比較群中では最高値となっているが、女性では一応得られた資料で見る限りは、特に

表12 上肢骨計測値（男性、左）

部位	古墳 (弥生)			北部九州 (弥生)			人口 (弥生)			大友 (弥生)			津宮1) (開文)			九州2) (現代)		
	N	M	S.D.	N	M	N	M	N	M	N	M	N	N	M	N	M	N	M
1 最大長	6	316.3	10.84	22	302.6	29	305.3	11	291.4	36	284.3	106	295.3					
2 全長	6	311.3	11.69	17	296.8	23	300.0	8	285.8	35	280.6	106	290.6					
5 中央最大径	7	24.0	2.00	76	23.3	61	23.1	34	23.4	50	24.1	106	21.9					
6 中央最小径	7	18.2	1.63	76	17.4	61	17.6	33	17.6	50	17.8	106	16.9					
7 骨体最小周	10	65.2	3.71	81	63.9	66	63.7	33	63.5	50	64.0	106	61.8					
7a 中央周	7	70.4	6.02	75	67.8	57	67.5	33	68.2	50	69.3	106	63.7					
6/5 骨体断面示数	7	76.2	1.06	76	74.9	61	76.5	33	75.0	50	73.9	106	79.1					
7/1 長厚示数	6	20.5	1.32	22	21.3	28	20.8	11	22.4	36	22.7	106	20.9					
統計																		
1 最大長	5	245.6	2.07	37	236.5	27	236.9	6	231.5	27	230.6	64	219.9					
2 機能長	5	230.2	2.95	28	220.0	24	222.4	9	215.8	28	217.4	64	208.2					
3 最小周	7	43.0	3.42	78	43.1	51	42.5	15	41.7	38	44.0	63	40.1					
4 骨体横径	6	18.2	1.94	79	17.2	51	17.4	25	17.1	42	17.1	63	16.0					
4a 骨体中央横径	6	16.0	1.67	50	16.0	33	16.0	25	16.4	-	-	63	15.2					
5 骨体矢状径	6	13.3	0.82	79	12.5	31	12.0	25	12.4	42	12.0	63	11.7					
5a 骨体中央矢状径	6	13.0	1.26	50	12.6	34	12.4	26	12.4	-	-	63	11.9					
3/2 長厚示数	5	19.4	1.08	28	19.8	24	19.4	5	20.5	27	20.5	61	20.4					
5/4 骨体断面示数	6	71.1	8.74	79	72.6	51	69.6	25	72.3	42	70.2	60	71.4					
5a/4a 中央断面示数	6	81.4	5.36	50	78.6	38	77.8	25	75.2	-	-	-	-					
尺骨																		
1 最大長	5	264.0	4.18	12	253.2	26	258.5	9	249.6	19	249.1	62	236.2					
2 機能長	5	231.8	3.11	15	224.7	21	226.2	13	222.9	25	219.7	64	209.2					
3 最小周	6	38.3	2.59	63	37.4	35	38.2	22	37.2	34	37.7	66	35.8					
11 矢状径	8	13.3	0.89	100	13.2	49	13.2	26	15.0	50	14.3	63	12.8					
12 横径	8	17.4	1.69	100	17.6	49	17.2	26	17.2	50	16.3	64	16.5					
3/2 長厚示数	5	16.7	0.96	15	16.8	21	17.2	13	16.8	25	17.4	63	17.0					
11/12 骨体断面示数	8	74.4	6.40	100	75.4	49	77.2	26	88.0	50	88.5	63	74.9					

1) 清野・平井(1928)

2) 専類(1957), 濱口(1957)

下脛の腓骨の長さにおいて逆に縄文人を下回っている。男性の骨幹諸径はやはり太く、北部九州弥生人程ではないものの、津雲縄文人（消野、半井、1928）や大友弥生人（松下、1981）を上回っている。大脛骨の断面に柱状性は認められないものの、男女とも骨体上部にやや扁平傾向が見られた。また、胫骨にも縄文人ほどではないが男女とも幾分扁平傾向が窺われた。

長、周径比（表16）

少數例ながら、長径、周径比を求め、表16に示した。縄文人等に較べて前腕や下脛部が相対的に短い点では、北部九州弥生人や土井ヶ浜弥生人に比較的近い。また、下肢に比して上肢がやや太く、この点では土井ヶ浜などを少し上回るが、縄文人や広田弥生人ほど顕著なものではない。腓骨と胫

表13 上肢骨計測値（女性、左）

	古浦 (翁生)			北部九州 (翁生)			山口 (翁生)			人友 (翁生)			津雲 (翁文)			九州 (現代)		
	N	M	S.D.	N	M	N	N	M	N	N	M	N	N	M	N	M	N	M
上腕骨																		
1 最大長	5	285.6	17.66	11	283.2	31	284.4	4	262.3	21	264.4	36	271.7					
2 全長	5	281.4	17.33	8	282.3	29	279.4	4	257.8	19	259.6	36	268.6					
3 中央極大径	8	20.5	1.41	35	21.0	43	20.4	20	21.0	40	19.7	36	19.8					
6 中央最小径	8	15.6	1.06	36	15.3	43	15.4	20	15.8	41	14.0	36	14.8					
7 骨体最小周	9	56.6	3.12	47	56.9	49	56.0	19	57.6	42	53.9	36	54.8					
7a 中央周	8	60.6	3.81	33	60.7	41	59.1	19	61.8	40	56.5	36	56.9					
6/5 骨体断面示数	8	76.8	7.43	35	73.2	43	75.9	20	75.9	40	71.3	36	75.3					
7/1 長径示数	5	20.2	0.66	11	19.8	31	19.6	11	22.4	21	20.4	106	20.9					
桡骨																		
1 最大長	4	211.8	9.22	17	215.1	21	219.1	2	207.0*	24	208.2	12	199.2					
2 機能長	4	198.3	7.59	11	204.3	20	208.2	2	194.0*	26	196.4	12	187.0					
3 最小周	5	37.8	2.86	52	37.9	36	37.4	9	40.4	30	36.4	12	34.7					
4 骨体横溝	6	16.2	1.60	56	15.7	39	15.4	11	16.4	34	14.6	12	14.5					
4a 骨体中央横溝	5	15.2	1.92	21	14.3	28	14.2	11	15.9	-	-	12	13.5					
5 骨体欠状溝	6	11.0	0.00	56	10.9	39	10.4	11	11.2	34	9.8	12	9.7					
5a 骨体中央欠状溝	5	11.2	0.84	24	10.8	28	10.6	12	10.9	-	-	12	9.7					
3/2 長厚示数	4	19.2	0.95	11	17.7	19	17.9	1	19.7*	25	18.2	11	18.1					
5/4 骨体断面示数	6	68.6	6.26	56	69.3	39	68.1	11	68.7	34	67.5	10	68.3					
5a/4a 中央断面示数	5	74.6	10.41	24	75.7	28	75.2	11	69.7	-	-	-	-					
尺骨																		
1 最大長	5	232.8	9.36	6	236.5	24	236.9	1	223.0	12	227.2	12	215.0					
2 機能長	5	203.4	9.24	8	207.6	25	208.0	2	207.0	12	198.6	12	189.2					
3 最小周	6	33.0	3.69	34	34.4	30	34.2	7	33.9	24	32.8	12	32.1					
11 矢状溝	6	11.3	1.21	54	11.2	41	11.3	12	12.8	37	11.3	12	10.9					
12 横溝	6	15.0	1.67	54	16.0	41	15.5	11	15.9	37	13.6	12	13.9					
3/2 段厚示数	5	16.1	1.77	7	16.5	25	16.4	2	16.7	12	16.4	12	16.8					
11/12 骨体断面示数	6	76.4	12.61	54	70.4	41	73.4	11	82.0	37	85.5	12	77.5					

骨の大きさの比でも土井ヶ浜に似て、縄文人とは確差が認められる。以上、長、周径比でみると、一応、土井ヶ浜や北部九州弥生人に比較的近い特徴を見せるが、上肢の大きさなどに、恐らくは当地の漁業を含む生業形態に関連した特徴が現れているようである。

表14 下肢骨測値(男性、左)

	古瀬 (男牛)			北畠九州 (男牛)			山口 (男牛)			大分 (男牛)			沖縄 (縄文)			九州(1) (現代)		
	N	M	S.D.	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	
大腿骨																		
1 最大長	5	451.6	15.86	60	430.9	37	434.4	15	420.1	19	414.1	59	406.5					
2 自然位長	5	447.8	15.32	18	427.7	26	432.8	17	413.9	19	411.0	59	403.2					
6 中央矢状径	8	29.5	2.51	162	29.7	72	29.1	41	28.6	47	29.0	59	26.5					
7 中央横径	8	28.1	1.55	166	28.0	72	27.2	42	26.4	47	26.0	59	25.6					
8 中央圓	8	90.0	5.98	161	90.8	72	88.9	41	87.0	47	87.4	59	82.4					
9 骨体上横径	9	34.6	1.42	115	32.6	74	32.7	38	31.6	43	30.7	59	29.4					
10 骨体上矢状徑	9	26.9	0.78	115	26.2	74	26.0	38	25.2	43	25.5	59	24.3					
8/2 長厚示数	5	20.6	1.09	18	21.4	26	20.5	16	21.4	19	21.2	59	20.4					
6/7 中央断面示数	8	104.8	4.91	162	106.4	72	107.6	41	108.6	47	111.8	58	103.8					
10/9 上骨体所面示数	9	75.0	3.35	115	80.5	74	80.0	39	80.1	43	83.1	58	82.8					
脛骨																		
1 全長	4	354.3	18.89	27	346.6	19	350.5	10	345.3	20	340.0	61	320.3					
1a 最大長	5	360.0	16.14	52	350.5	21	356.9	11	354.8	22	343.6	60	326.9					
8 中央最大径	5	31.4	2.41	74	32.0	36	30.6	43	31.0	46	32.3	61	27.8					
8a 宗垂孔位最大径	6	36.0	2.83	153	36.5	60	35.7	35	34.5	38	35.2	60	30.6					
9 中央横径	5	21.6	1.67	75	22.9	36	22.3	43	21.4	46	20.4	61	21.1					
9a 宗垂孔位横径	6	24.3	2.34	153	25.3	59	25.1	36	23.3	38	22.2	61	23.7					
10 骨体厚	5	84.2	6.61	74	86.5	35	83.6	41	83.4	45	84.5	62	78.4					
10a 宗垂孔位厚	7	96.1	6.82	151	96.9	58	95.5	34	92.6	38	92.8	61	88.9					
10b 最小径	6	76.3	6.35	122	78.4	63	75.4	38	75.6	41	76.7	60	71.3					
9/8 中央断面示数	5	68.9	4.31	74	72.2	36	73.0	43	69.1	46	63.3	61	76.1					
9a/8a 宗垂孔位断面示数	6	67.7	4.82	152	69.5	59	70.5	35	67.7	38	63.0	60	77.5					
10b/1 長厚示数	4	22.3	1.66	26	22.7	19	21.5	10	21.9	20	22.9	60	22.4					
腓骨																		
1 最大長	3	361.3	9.61	8	347.9	14	343.6	-	-	-	329.5	58	322.9					
2 中央最大径	5	16.6	2.30	46	17.0	34	16.8	-	-	-	17.8	59	14.5					
3 中央最小径	5	11.4	1.14	46	11.6	34	11.4	-	-	-	12.2	59	10.0					
4 中央圓	5	47.2	5.72	27	47.2	34	47.2	-	-	-	51.3	59	41.5					
4a 最小圓	6	39.3	5.54	24	39.7	25	40.1	-	-	-	39.2	59	35.6					
3/2 中央断面示数	5	69.5	9.98	46	68.3	34	67.9	-	-	-	68.6	59	69.5					
4a/1 長厚示数	3	11.8	1.63	8	11.0	13	11.8	-	-	-	12.0	58	11.1					

1) 阿部 (1955), 藤嶋 (1955)

推定身長（表17）

ピアソンの推定式を大腿骨に適用して推定身長を求めるとき、表17に示したように男性は165.4cm、女性は150.7cmとなった。男女とも少數例での結果なので多少の偏りはあるが、特に男性は土井ケ浜弥生人などをやや上回る長身例となっている。筋肉の良好な発達を窺わせる太い四肢骨と併せて、健強な男性像が浮かび上がる。

表15 下肢骨計測値（女性、左）

	古浦 (弥生)			北部九州 (弥生)			山口 (弥生)			人友 (弥生)			鹿児 (縄文)			九州 (現代)		
	N	M	S.D.	N	M	N	M	N	M	N	M	N	N	M	N	M	N	M
大腿骨																		
1 最大長	5	397.4	22.23	34	405.5	30	403.9	5	386.8	22	388.2	13	380.1					
2 自然位長	4	390.0	24.67	11	403.0	26	399.5	4	378.3	22	381.7	13	375.9					
6 中央矢状径	6	23.9	2.47	112	25.7	50	25.5	30	25.5	45	25.2	13	23.6					
7 中火筒	8	27.6	2.13	112	26.3	60	26.2	30	25.2	45	24.2	13	23.2					
8 中火筒	8	80.4	4.72	111	81.5	50	80.9	29	80.4	45	78.0	13	74.2					
9 骨体上横溝	10	31.9	1.85	86	30.5	50	31.0	30	29.7	42	28.4	13	27.5					
10 骨体上矢状溝	10	21.3	1.49	86	23.2	50	23.0	30	22.7	42	22.2	13	21.3					
8/2 長厚示数	4	20.0	1.10	11	20.8	26	20.2	4	20.3	21	20.3	13	19.8					
6/7 中央断面示数	8	86.8	8.61	112	98.3	50	97.5	31	102.1	45	104.5	13	102.0					
10/9 上骨体断面示数	10	66.9	6.04	86	76.4	50	74.5	30	76.5	42	78.2	13	77.1					
脛骨																		
1 全長	5	313.2	14.96	20	324.3	20	326.8	3	313.0	17	319.8	14	301.0					
1a 最大長	5	318.4	18.28	30	329.3	23	331.0	4	324.8	17	324.4	14	306.6					
8 4中央最大径	6	27.0	1.55	46	27.0	31	26.9	24	27.6	42	27.3	14	24.7					
8a 根養孔/4中央径	8	30.9	2.47	97	30.8	42	30.5	19	30.4	37	30.5	14	28.1					
9 中央横径	6	18.5	1.62	46	20.4	31	19.1	26	19.7	42	17.9	14	18.8					
9a 根養孔位横径	8	20.4	1.77	98	22.3	42	21.6	20	21.1	36	19.4	14	21.1					
10 骨体周	6	73.3	3.83	46	74.5	30	72.6	23	75.3	42	73.4	14	70.1					
10a 采養孔位周	9	83.0	6.56	96	83.2	42	82.2	18	81.6	35	81.3	14	78.2					
13a 最小周	9	67.3	4.33	82	68.6	44	67.5	24	68.3	35	67.6	14	63.6					
9/8 中央断面示数	6	68.6	4.47	46	75.7	31	71.1	23	72.1	42	65.8	14	76.3					
9a/8a 根養孔位断面示数	8	66.1	3.86	97	72.4	42	71.2	18	70.4	36	63.6	14	74.9					
10b/1 長厚示数	5	21.6	1.25	20	21.3	20	20.3	3	21.4	17	21.1	14	21.2					
腓骨																		
1 最大長	5	308.6	21.38	2	328.0	17	324.0	-	-	8	316.9	14	300.6					
2 中央最大径	6	15.8	1.94	34	14.7	29	14.8	-	-	32	14.7	14	12.9					
3 中央最小径	6	10.7	2.80	31	9.8	29	9.6	-	-	32	10.0	14	8.6					
4 中央周	6	42.3	3.56	34	40.7	28	41.0	-	-	32	42.8	14	36.8					
4a 最小周	6	37.0	4.47	8	35.6	21	37.3	-	-	20	34.0	14	32.3					
3/2 中央断面示数	6	66.7	9.71	34	67.3	29	65.2	-	-	32	68.3	14	67.6					
4a/1 長厚示数	4	12.1	1.24	2	10.8	17	11.6	-	-	8	11.0	14	10.8					

表16 四肢骨の長・周径比の比較(男性・左側)

	古浦	脛骨最大長		脛骨最小長		上腕骨最大長		上腕骨最小長		肱骨中央周	
		N*	M	N	M	N	M	N	M	N	M
山口	(弥生)	5	77.6	5	79.7	9	72.4	5	56.1		
北部九州	(弥生)	28	77.6	30	82.2	69	71.7	35	56.5		
大友	(弥生)	30	78.2	56	81.3	121	70.4	61	54.6		
広田	(弥生)	9	79.4	13	84.5	37	73.0	-	-		
津需	(縄文)	5	83.8	8	84.6	24	77.8	7	54.0		
吉胡	(縄文) 1)	13	82.4	11	83.4	21	74.7	20	61.5		
吉母浜	(中世) 2)	28	80.2	23	82.5	54	74.7	57	62.3		
西南日本	(現代)	16	77.1	15	83.2	20	71.2	19	55.4		
畿内	(現代) 3)	84	74.5	62	80.4	83	75.0	61	52.9		
		30	76.1	30	80.2	30	76.9	30	52.0		

各平均値より算出 (*例数の平均)

1) 大場 (1955), 石川 (1981) 2) 小林・永井 (1985) 3) 古本 (1984)

表17 推定身長の比較

古浦	(年)	男性		女性	
		N	M	N	M
山口	(弥)	6	165.4	6	150.7
(上井ヶ浜)		49	163.3	35	151.4
北部九州	(弥)	36	163.7	24	151.1
隈・西小豆	(弥)	80	162.1	52	151.2
西北九州	(弥)	37	163.5	14	152.1
大友	(弥)	16	158.8	8	147.9
広田	(弥)	15	159.1	2	149.0
北部九州	(縄)	14	154.0	10	142.8
津需	(縄) *	8	159.2	6	150.5
吉胡	(縄) *	13	159.9	16	147.3
北部九州・山口	(古)	22	158.9	18	147.7
吉母浜	(中)	40	162.8	15	150.2
		18	159.7	22	146.5

*右大腿骨最大長の平均値より算出

2. 風習的抜歯（表18）

古浦弥生人にはほぼ例外なく風習的抜歯の痕跡が認められた。歯牙脱落が著しくて形式を確定出来ない例が4例存在するが、その他の観察可能な成人21例と17、8歳の若年1例の全てに抜歯が見られた。津雲や吉胡、稻荷山といった縄文後晩期の代表的な抜歯集団ではやはり100%かそれに近い抜歯頻度が報告されているが（宮本1925；清野・金高、1929；大倉1939；中山1952）、弥生人集団では土井ヶ浜や広田遺跡のように7-80%に達する例がある他はこのような高率例は見られず（森成、1987；中橋、1990）、異例の存在と言える。

表18 古浦弥生人の抜歯型式

型式	性別	古浦弥生人の抜歯型式			計
		男性	女性	不明	
C	C	9	4	0	13
C	C	0	2	0	2
C	C	1	1	0	2
C	C	0	1	0	1
C	C	0	1	0	1
C	C	1	0	0	1
(C)	(C)	0	0	1	1
(C)	(C)	1	0	0	1
計		12	9	1	22

また、12歳前後の1例には抜歯が見られなかったが、17、8歳の女性では既に上顎側犬歯が抜去されていた。十井ヶ浜では12、3歳以降から抜歯が施行されたことが明らかだが、古浦の若年人骨はごく少数に限られているため、遅くとも思春期以降ということは言えるにしろ、何歳位からこの風習が行われていたのか正確には限定し難い。

表18に抜歯型式別に集計した結果を示した。抜歯型式について、特に十井ヶ浜との比較で注目されるのは、上顎犬歯主体の抜歯であることでは一応共通しているが、しかし十井ヶ浜では1例も確認できなかった下顎の全切歯、あるいはそれに犬歯を加えた抜歯型式が存在し、また、上井ヶ浜では上顎犬歯に次いで多かった上顎側切歯の抜去がここでは2例しか確認できないこと等が上げられる。つまり、十井ヶ浜に較べて、その抜去形式に縄文的色彩がやや濃い傾向がみられる。なお、63号人骨は古墳人骨の可能性が指摘されているが、この個体は上顎犬歯に加えて下顎切歯を対象とした、西日本の縄文晩期～弥生前期に盛行した抜歯を施しており、この時代の抜歯形式としてはやや異例の存在となる。当個体は遺存状態が悪く、仰臥伸展葬か否か不明確な点もあるようなので、あるいは弥生前期に所属する可能性も考慮に入れておくべきかも知れない。また、十井ヶ浜では抜歯

型式にかなり明確な男女差とそれに絡んだ左右差が観察されたが、古浦ではそうした明確な違いは見いだせなかった。あえて言えば下顎人歯を抜いている3例がいずれも女性だということ、下顎歯等も抜く比較的複雑な抜歯を行っているのは女性（図版2参照）に多そうだ、といったようなことだが、これも僅かな例数での結果なので、今後の追加資料による検証を待つべきであろう。

3. 病変、その他

3-1. 病変

古浦人骨に見られた病変を代表するものとして、30号小児骨（8-9歳）頭蓋冠の著しい病的肥厚が上げられる（図版3参照）。

前頭骨から頭頂骨にかけて、外板緻密質の菲薄化と、最大3cm程に達する海面質様の肥厚性変化が起きている。その他の副鼻腔を含む顔面骨や体部骨に変化は見られない。こうした頭蓋冠の著しい肥厚を起こす病因として、福島（1988）は、Thalassemiaに代表される遺伝性溶血性貧血や、鉄欠乏性貧血、多血症等をあげている。その何れなのかの確定診断はまだ困難なようだが、例えばThalassemiaは中国南部を発生中心にもつ遺伝性疾患とされているだけに、今後の古病理学的研究の進展が待たれる貴重な一例と言えよう。

また、35号女性人骨の左橈骨遠位部に見られた骨折は、いわゆるColles骨折である。前に手を突いた時などに起こる現代人でも最も頻度の多い骨折とされ、上井ケ浜を始めとする古人骨にも多く報告されている（熊谷、1958；小片、1981、池田、1993）。当例では恐らくこの骨折を仄とする手首関節の炎症性変化も見られた。

3-2. 着色、変形

古浦人骨には、表1にも示したように、頭骨表面が淡緑色に変色した例が3例確認された。このうち1401号熟年男性人骨については金闇ら（金闇、小片、1962）が、生前、前頭骨に円形銅板をあてていたmagicianと覚しき1例として考察を加えている。20号人骨は、保存不良のため残念ながら頭蓋の全体像は確認できないが、やはり熟年男性であり、1401号とはほぼ同じ前頭部中央に青斑が見られる。また、21号は、4-5歳の幼児骨で、前頭骨の右半が淡く変色していた。なお、20号と1401号の時代的な関係については、残念ながら明確な知見は得られていない。

21号は着色部位が少し異なっていることもあって、他の成人2例と同因によるものかどうかは疑問だが、いずれにしろ、こうした性、年齢を同じくする着色例が複数存在するということは、こうした特殊な成員の存在を確認させ、当時の社会生活の一端を窺う上で特記すべき事例となろう。

3-3. 人骨の年齢構成

当遺跡出土上人骨の年齢構成に関して気付く問題点として、未成人骨の占める比率があげられる。即ち出土51体の内、18体（35.3%）を未成人骨が占めていたが、この比率は特に乳児死亡者の何等かの要因による欠落のため、不適に低くなっている可能性が高い。金闇（1976）は子供墓の存在等を指摘しているが、そうした墓地から出土した人骨の大半は、1、2歳以上の幼児骨であった。しかし、一般的に子供の死亡者の大半は乳児骨で占められるのが普通であり、医療の進んだ現代でさえ、出産後間もない乳児期が一番危険な年代で、時代や地域を問わず乳児死亡者が幼児死亡者の2倍近くに達する事例が多く報告されている（水島、1962；鬼頭、1983、中橋、永井、1985、1989；Owsley & Bass, 1979；Mensforth, 1990）。

当遺跡ではしかし、幼児骨数11体に対して、乳児は僅かに3体に過ぎず、明かに不自然な偏りを見せている。乳、幼児骨は脆弱で腐食され易いため、遺跡出土人骨では正当な比率を保って出でる方がむしろ稀ではあるが、当遺跡の場合、骨の保存に適した砂の諸性質（Nakahashi & Nagai, 1986-1987）や、大際の他の人骨の極めて良好な保存状況から考えても、乳児骨のみが砂中に消失してしまったとは考え難い。従って、可能性として、他にも乳児死亡者を主とする未検出の墓域があるのか、あるいは乳児死亡者はこの墓地に埋葬しなかったり、別の扱いをしていたことなどが考えられよう。彼らの正確な死亡状況を知り、古人口学的な検討を加えることは、彼らの生きざま、死にざまを明かにすることでもあり、弥生社会の具体的な復元作業において貴重な知見をもたらすことが期待される。今後の当地での継続的な調査進展が待たれる。

総括・考察

島根県八束郡鹿島町の日本海に面した砂丘上に位置する古浦遺跡から、金闇丈人らによる1962、63年度の調査によって、44体の弥生人骨と7体の古墳人骨が出土した。特に弥生人骨の所属は前期にまで遡るものが多いと考えられ、土井ヶ浜遺跡などで指摘されたいわゆる「波米系」形質の地理的、時代的な推移を探る上で貴重な資料となろう。以下にその人骨群に就いての人類学的な検討結果を概括すると、

- ・男性では全体的に眉間や筋付着部の発達が強くて獰強な外観を呈する個体が目立つ。女性ではそうした特徴は明かではない。
- ・脳頭蓋では、男女とも高頭傾向が顕著である。また、女性にやや短頭性が見られた。
- ・顔面骨は高顎性が強い。眼窩、鼻型にも同傾向が見られる。歯槽性の突歎傾向は弱い。

- ・鼻根部を始めとして、顔面の平坦性が顕著である。
- ・四肢は全体的に著しく長く、特に男性においてその傾向が顕著である。
- ・男性四肢骨の骨体は全体的に太く頑丈だが、女性ではそれほど目立たない。
- ・上腕骨の扁平性、大腿骨の柱状性などは見られないが、大腿骨体上部に扁平性が、また、脛骨にも幾分扁平傾向が認められた。
- ・推定身長は男性 165.4、女性は150.7cmで、高身長である。
- ・四肢のプロポーションにおいて、前胸、下腿が相対的に短い。
- ・以上の頭蓋、四肢にわたり、やや性差が大きい傾向が見られた。
- ・熟年男性人骨 2 体のほぼ前頭部中央に、生前の円形銅板付着を想起させる変色（淡緑色）が認められた。また、別の 4～5 歳の幼児骨前頭部右半にも同様の変色が見られた。
- ・1 体の小児骨頭蓋冠に、Thalassemia を疑わせる著しい肥厚性病変が認められた。
- ・人骨の年齢構成において、乳児骨が不自然に少なく、他所に埋葬されたのか、あるいは埋葬されなかった可能性を考えられる。主にこの乳児骨の不足のため、全體に対する未成人死亡者の比率は 35.3% と、この時代としては低すぎる割合になっている。

古浦弥生人の系統的な位質づけについては、形態上、その著しい高顎性や偏平な顔立ち、高身長、

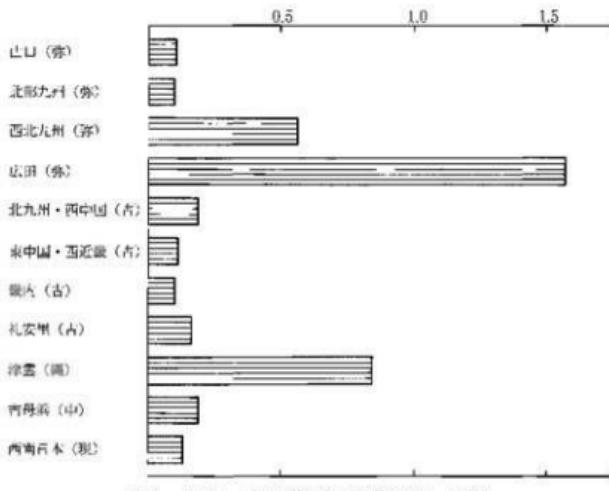


図3 ペンローズの形態距離（頭蓋 9 項目、男性）

前腕や下腿の相対的な短さ、等の諸特徴から考えて、一応は、北部九州を中心に分布するいわゆる「渡来系」弥生人の一群と見なして大過なかろう。図3、4、5に示した種々の分析結果も、そうした考えを裏付けている。ただ同時にまたこれらの分析結果は、古墳弥生人の骨格形態が、例えば地理的に最も近くてその関係が注目される土井ヶ浜弥生人との比較に於て、男女とも頭高がより高く、男性四肢がさらに長大で太いことなど、必ずしも一致しない点もあることを示している。多変量解析で全体的に見ても特に土井ヶ浜に近いという結果にはなっていない。むしろ図4の主成分分析では畿内占墳人等との近さも浮かんできているが、ただ、諸項目の計画数が最大でも10例前後に留まっていることを考慮すれば、ここにみるような微妙な差異に基づいて類縁関係の議論を重ねることは賢明ではなかろう。男女でやや傾向を異にする点が多く見られた点についても、あるいは資料数の少なさに起因する可能性も考えられる訳であり、現状では、ともかくも形態的に從来知られている縄文人や西北九州弥生人等とは明かに異なる特徴の持ち主であること、いわゆる「渡来系」弥生人と同系か少なくともそれに近い特徴を持つ一集團として理解しておきたい。

ただ、その渡来系集團との関係で興味深い点は、先に判別閾値法によって各地弥生人の中の縄文

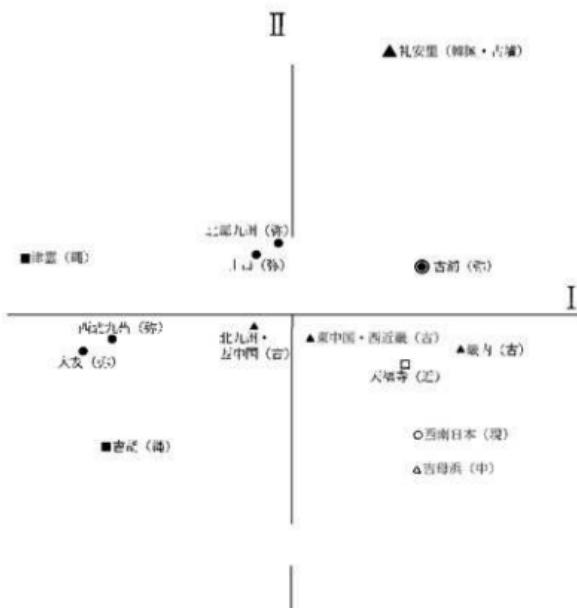


図4 主成分分析(頭蓋9項目、男性)

人タイプの比率を求めたところ（中橋・永井、1989）、北部九州を中心に土井ヶ浜から古浦へと、地理的に遠ざかるほど、その比率が上昇する傾向にあるということ、特に女性でその傾向が顕著であるという点である。つまり、形態上の地理的な勾配の存在が示唆された訳だが、ただ上記のように例数がまだ充分ではなく、時代差の問題もあるので結論を急ぐ訳にはいかない。この問題の検証は、渡来人による遺伝的影響の時代的、地理的拡散の状況や、渡来人の男女構成の問題等とも直結しており、今後この山陰地域の古人骨研究の中で引き続き検討していくべき重要な課題となろう。

また、形態上の問題と併せて、抜歯風習に基づく図6の結果は、古浦弥生人の系統問題を考える上で興味深い問題を提起している。古浦の抜歯型式には、土井ヶ浜と較べて下頸切歯や上頸側切歯の抜去率に差が認められ、春成（1987）の指摘するようにこれらの点でいずれも土井ヶ浜より縄文的傾向が強い。各歯の抜去頻度から求めた図6の結果もそうした古浦抜歯のやや縄文寄りの特徴を良く現しており、つまりは形態面での結果とうまく整合しない可能性が窺えるのである。

これがどの様な要因に因るものなのか、現状ではいずれとも判断が困難だが、その解決には何よりも当地域の縄文人の実態を明らかにすることが不可欠であろう。北部九州から山陰あたりにかけての縄文晩期人はどの様な形態と抜歯風習を持っていたのか、可能性として、当地域の地理的な位置を考えれば、例えば既に弥生以前から中国華北の新石器人に見るような「渡来人」の形質が現れても何等不自然ではないし、また、抜歯風習にしても、同時代の大陸沿岸部の抜歯状況がまだ殆ど不明であることを考えれば、我々が縄文の伝統としている犬歯や下頸切歯抜去すら、無条件に

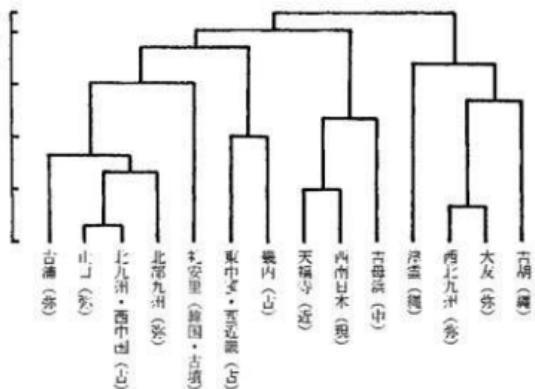


図5 クラスター分析（頭蓋9項目、男性）（ユークリッド距離、群平均法）

我が独自の伝統要素と見えるのかどうか、まだ充分検討の余地を残しているように思われる。いずれも、今後とも引き続き検討を続けて行く必要のある、山陰地方での人類学上的重要課題となろう。

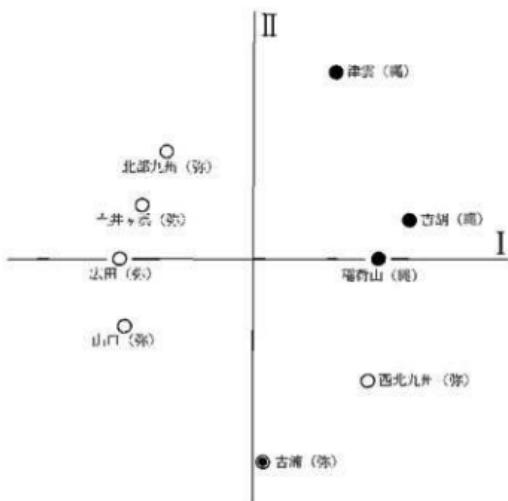


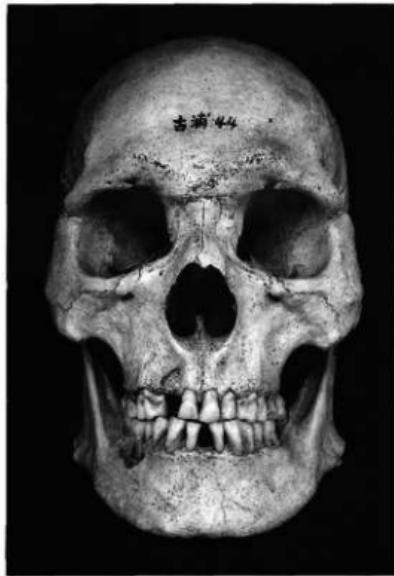
図6 拔歯型式の比較（中橋・1990）

文 献

- 阿部英世（1955）：「現代九州人大頭骨の人類学的研究」、人類学研究2。
 福島一彦（1988）：「西南日本弥生人の骨病変について」、福岡医学雑誌、79。
 京田忠昭（1954）：「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」、人類学研究1。
 春成秀爾（1974）：「拔歯の意義2」、考古学研究20。
 春成秀爾（1987）：「拔歯」、弥生文化の研究8、雄山閣。
 Howell, W.W. (1973) : Cranial variation in man. Pap. Peabody Mus. Archael. Ethnol., Vol.67, Harvard Univ.
 池正次郎（1988）：「吉備地方海岸部の縄文時代人骨」、考古学と関連科学（藤木 義昌先生吉希記念論集）
 池田次郎（1993）：「古墳人」、古墳時代の研究、1、雄山閣出版。
 青鍋命達（1955）：「九州人下顎骨の研究」、人類学研究2。
 石沢命達（1931）：「吉良貝塚人骨の人類学的研究、第3部、下肢骨の研究」、人類学雑誌46。

- 金高勘次（1928）：「吉胡貝塚人骨の人類学的研究、人類学雑誌43。
- 金間丈夫（1975）：「発掘から推理する」、朝日選書40、朝日新聞社。
- 金間丈夫（1976）：「日本民族の起源」、法政大学出版局。
- 金間丈夫・小片丘彦（1962）：「着色と変形を伴う弥生前期人の頭蓋」、人類学雑誌69。
- 金間丈夫・永井昌文・佐野一（1960）：「山口県豊北町土井浜遺跡出土の弥生式時代人頭骨」、人類学研究7。
- 今鎮島、小片丘彦・峰和治・竹中正巳・佐藤正史・徐男（1993）：「金海唯安里古墳群出土人骨」、全海唯安古墳群Ⅰ、釜山大学校博物館。
- 鬼頭宏（1983）：「日本二千年の人口史」、P.H.P研究所。
- 金高勘次（1928）：「吉胡貝塚人頭骨の人類学的研究、人類学雑誌43。
- 清野謙次・半井隆（1928）：「津呂貝塚人骨の人類学的研究、第3部、上肢骨の研究：第4部、下肢骨の研究」、人類学雑誌43。
- 清野謙次・金高勘次（1929）：「三河国吉胡貝塚人の抜歯及び歯牙変形の風習に就いて」、史前学雑誌1。
- 清野謙次・宮本博人（1926）：「津呂貝塚人骨の人類学的研究、第2部、頭蓋骨の研究」、人類学雑誌41。
- 熊谷正哉（1958）：「山口県七井ヶ浜遺跡発掘弥生前期人骨の骨病変に就いて」、人類学研究5。
- Martin Saller（1957）：Lehrbuch der Anthropologie. Ed. I. Gustav Fischer Verlag. Stuttgart. 松下孝幸（1981）：「佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨」、大友遺跡、佐賀県呼子町文化財調査報告書1。
- 松下孝幸（1985）：「福岡県小郡市横隈狐塚遺跡出土の弥生時代人骨」、小郡市文化財調査報告書第27集、小郡市教育委員会。
- Mensforth,B.P.（1990）：Paleodemography of the Carlson Annis (Bt-5) late archaic skeletal population. Am.J.Phys.Anthrop.,82.
- 溝口静男（1957）：「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」、人類学研究4。
- 水島治夫（1962）：「生命表の研究」、生命保険文化研究所。
- 宮本博人（1925）：「津呂貝塚人の抜歯風習に就て」、人類学雑誌40。
- 森本岩太郎（1971）：「脛骨横断指數の算出をめぐらす—Martin法への反省」、人類学雑誌79。
- 永井昌文・中橋孝博・上肥直美・山中良之・船越公成（1984）：「鳥根県吉浜遺跡出土の弥生人骨」、解剖学雑誌60。
- 内藤芳鶴（1967）：「人骨」、深堀遺跡、考古学研究報告第1号、長崎大学第2解剖。
- 内藤芳鶴（1971）：「西北九州出土の弥生時代人骨」、人類学雑誌79。
- 中橋孝博（1987）：「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」、人類学雑誌95。
- 中橋孝博（1988）：「古人骨の性判定法」、日本民族・文化の生成（永井昌文教授追憶記念論文集）、六興出版。
- 中橋孝博（1990）：「土井ヶ浜弥生人の風習的抜歯」、人類学雑誌、98。
- 中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県吉浜遺跡出土人骨」、吉浜浜遺跡、下関市教育委員会。
- Nakahashi,T and M.Nagai (1986) : Sex assessment of fragmentary skeletal remains. J.Anthrop. Soc. Nippon, 94.
- Nakahashi,T. and M.Nagai (1986-87) : Preservation of human bone in prehistoric and historic sites on western Japan. Asian Perspectives, 27.
- 中橋孝博・永井昌文（1989）：「弥生人の形質、男女差、寿命」、弥生文化の研究1、雄山出版。
- 中橋孝博・十肥直美・永井昌文（1985）：「全殻遺跡出土の弥生時代人骨」、史跡全殻遺跡、福岡市埋蔵文化財調査報告書123。

- 中山英司（1952）：「人骨」、吉胡貝塚、文化財保護委員会。
- 小片丘彦（1981）：「日本古人骨の疾患と損傷」、人類学講座 5、雄山閣。
- 大場秀夫（1935）：「吉胡貝塚人骨の人類学的研究、第 4 部、上肢骨の研究」、人類誌 50。
- 大堀正俊（1958）：「山口県七井ヶ浜跡発掘弥生式前期人骨の下顎骨について」、人類学研究 5。
- 大倉辰雄（1939）：「三河国稻荷山貝塚人ノ抜歯、及ビニア歯形ノ屬舊ニ就テ」、京都医学雑誌 6。
- Owsley,D.W. and Bass,W.M. (1979) : A demographic analysis of skeletons from the Larson site (39ww2) Walworth County, South Dakota: Vital statistics.Am.J.Phys.Anthrop.,51.
- 專頭時義（1957）：「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」、人類学研究 4。
- 鈴木尚（1963）：「日本人の骨」、岩波新書 477。
- Yamaguchi,B. (1973) : Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania. Bull.Natn.Sci.Mus. Series D.6.
- Yamaguchi,B. (1980) : A study on the facial flatness of the Jomon crania. Bull.Natn.Sci.Mus.Tokyo,6.
- 山口敏（1982）：「縄文人骨」、縄文文化の研究 1、雄山閣
- Yamaguchi,B. (1987) : Metric study of the crania from protohistoric sites in Eastern Japan. Bull.Natn. Sci.Mus.Series D.13.
- 山口敏（1988）：「東日本の古墳・横穴墓出土人骨の顔面平坦度計測」、日本民族・文化の生成（永井昌文教授退官記念論文集）、六興出版。
- 財津博之（1956）：「山口県上井ヶ浜跡弥生前期人骨の四肢長骨に就て」、人類学研究、3。

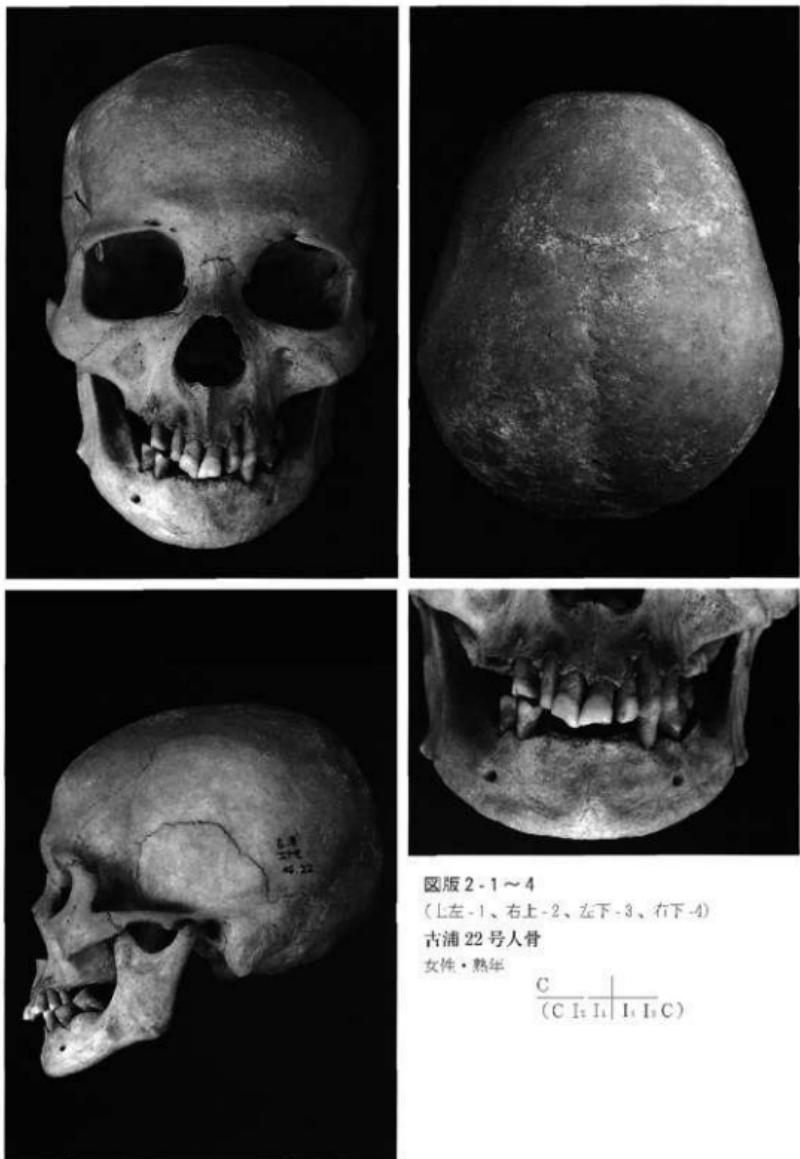


圖版 1-1 ~ 3
(上左·1、右·2、左下·3)

古浦 44 号人骨

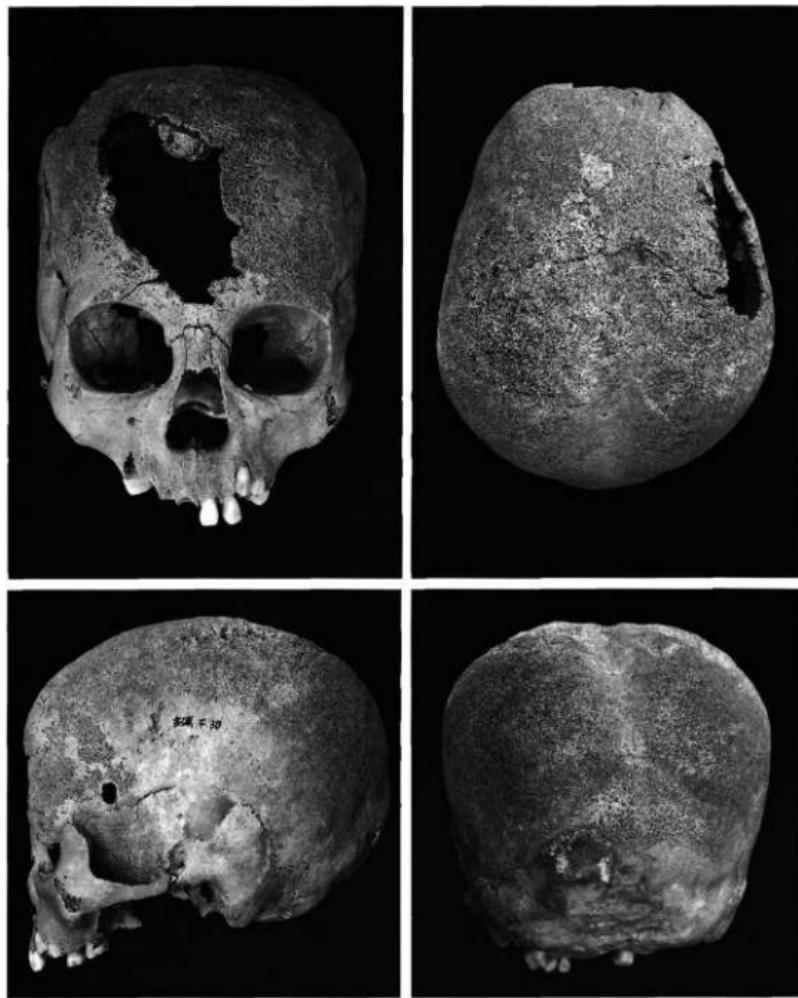
男・熟年

C C
 |
 I₁ | I₂



図版 2-1~4
(上左-1、右上-2、左下-3、右下-4)
古浦 22 号人骨
女性・熟年

C
(C I₁: I₁ | I₁: I₁ C)



圖版 3-1~4
(上左-1、右上-2、左下-3、右下-4)
古浦 30 号人骨
性别不明・小児病変

第9章 特論 古浦遺跡の貝輪

木下尚子

古浦遺跡では、6体の幼児が合計39個の貝輪をはめていた。ハイガイ製品がその9割を占め、1割は熱帯産オオツタノハ製品である。貝輪の個々の大きさ、重さ、貝種について表1に示した。貝輪の内径は手首側が小さく、肘側がやや大きいようである。これらはいずれも丁寧に製作され、作風に一定の共通性を認めることができる。すなわち、全体の研磨が入念、厚さが均一で板状に近い、孔内側面がなめらか、貝の右殻と左殻をゆるやかに区別しているという共通性である。

以下、着装主体ごとに説明を加えよう。

2号人骨貝輪（図1） 2～3歳児が右腕に6個、左腕に8個、合計14個のハイガイ貝輪を着装する。着装総数は6体中最多である。貝輪は全体に入念で、全面よく研磨され、表面はなめらかで艶がある。いずれも孔内面は凹く研磨され、着装への配慮が認められる。左腕の手首側3個（図1の7・8・9）は表上側の研磨面が広く、内孔面の研磨もわずかで、作風が他の貝輪とやや異なっている。ほとんどの貝輪表面には、多くの小孔があり、材料のハイガイが打ち上げ貝（海岸に打ち上げられた貝殻）であったことを示している。

23号人骨貝輪（図2の15～18） 1歳児が左腕に4個のハイガイ貝輪を着装する。貝輪は2号人骨例と同様、全体に入念な作りである。表面に褐色の付着物がのこり、貝輪の保存状態はあまり良くない。いずれも内孔面はなめらかである。打ち上げ貝を使用したものであろう。

24号人骨貝輪（図2の19～24） 2歳児が左腕に5個のハイガイ貝輪を着装する。2号例と同様、全体に入念な作りである。保存状態も良く、均一な作風をなす。研磨が行き届き、貝の肋が文様のように見える。打ち上げ貝の使用であろう。

28号人骨貝輪（図2の25～29） 1歳児が左腕に5個のハイガイ貝輪を着装する。24号例と同様、よくそろった作風をなす。打ち上げ貝を使用したのである。

29号人骨貝輪（図3の30～34） 2～3歳児が右腕に3個のオオツタノハ貝輪、左腕に3個のハイガイ貝輪を着装する。オオツタノハ貝輪は古浦における唯一の南海産貝輪である。貝の色彩を留めた美しい仕上りである。表面、孔内側面、裏面ともに非常に丁寧な研磨を施している。ことに裏面周縁部の波状部分の研磨は入念で、細い研磨面を数条認める。ハイガイ貝輪も丁寧な作りである。大型のハイガイを用いているため、やや厚手である。他のハイガイ貝輪に比べて取り扱いが明瞭で、作風もやや異なる。研磨が行き届き、貝の肋が文様のように見える。打ち上げ貝の使用であろう。

32号人骨貝輪(図3の35~39) 1歳児が左腕に5個のハイガイ貝輪を着装する。貝輪は保存状態が悪く、すべて全体の6割ほどを残すにすぎない。比較的のよい図3-38の貝輪は、24号人骨例と同様丁寧な作りである。残存する形状からみても、全体によくそろった作風といえる。

表1 古浦遺跡貝輪一覧

人骨 no.	左右脚別の着装状態ならびに 使用貝殻	貝輪内径 (mm)		重さ (g)		図との対応
		長径	短径	個別	小計	
2号	右幸1	1 ハイガイ右殻 (6)	44	31	8	図1 1
		2 ハイガイ右殻 (5)	45	33	8	2
		3 ハイガイ右殻 (4)	46	30	9	3
		4 ハイガイ右殻 (3)	43	32	9.5	4
		5 ハイガイ右殻 (2)	41	32	10.5	5
		6 ハイガイ右殻 (1)	41	31	10	55 6
	左	1 ハイガイ左殻 (8)	46	32	9.5	7
		2 ハイガイ左殻 (7)	48	30	9	8
		3 ハイガイ左殻 (6)	42	30	8	9
		4 ハイガイ左殻 (5)	45	31	8	10
		5 ハイガイ左殻 (4)	46	31	10	11
		6 ハイガイ左殻 (3)	41	29	10.5	12
		7 ハイガイ左殻 (2)	42	29	12	13
		8 ハイガイ左殻 (1)	42	28	10.5	77.5 14
23号	左	1 ハイガイ左殻 (1)	42	31	5.5	図2 15
		2 ハイガイ左殻 (2)	40	30	6	16
		3 ハイガイ右殻 (3)	40	29	7	17
		4 ハイガイ右殻 (4)	42	28	7.5	26 18
24号	左	1 ハイガイ左殻 (1)	42	27	7	図2 19
		2 ハイガイ右殻 (2)	38	30	6	20
		3 ハイガイ左殻 (3)	38	28	6	21
		4 ハイガイ左殻 (4)	40	27	7.5	22
		5 ハイガイ左殻 (5)	39	28	5.5	23
		6 ハイガイ左殻 (6)	39	28	7	39 24
		7 ハイガイ左殻 (1)	39	27	5.5	図2 25
28号	右	1 ハイガイ左殻 (1)	41	27	5	26
		2 ハイガイ左殻 (2)	41	27	5.5	27
		3 ハイガイ右殻 (3)	41	27	5.5	28
		4 ハイガイ右殻 (4)	42	27	5.5	29
		5 ハイガイ右殻 (5)	42	28	5.5	27 29
29号	右	1 オオツタノハ (1)	45	32	19	図3 30
		2 オオツタノハ (2)	47	32	16	31
		3 オオツタノハ (3)	48	33	13	48 32
32号	左	1 ハイガイ右殻 (1)	44	30	10	33
		2 ハイガイ右殻 (2)	45	35	10	20 34
32号	左	1 ハイガイ右殻 (1)				図3 35
		2 ハイガイ右殻 (2)				36
		3 ハイガイ右殻 (3)				37
		4 ハイガイ右殻 (4)				38
		5 ハイガイ右殻 (5)				39

※1：貝輪に記入された番号に従って配列

※2：()内の数字は手背側からの順番。

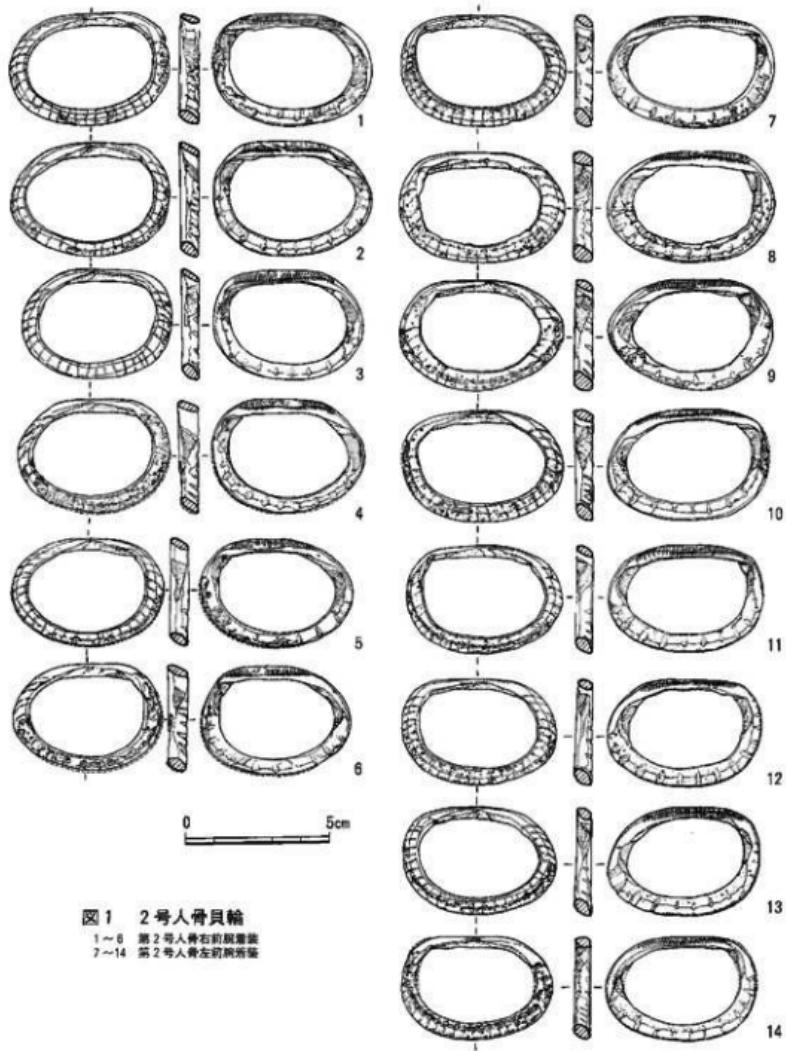


图1 2号人骨贝轮

1~6 第2号人骨右前腕部
7~14 第2号人骨左前腕部

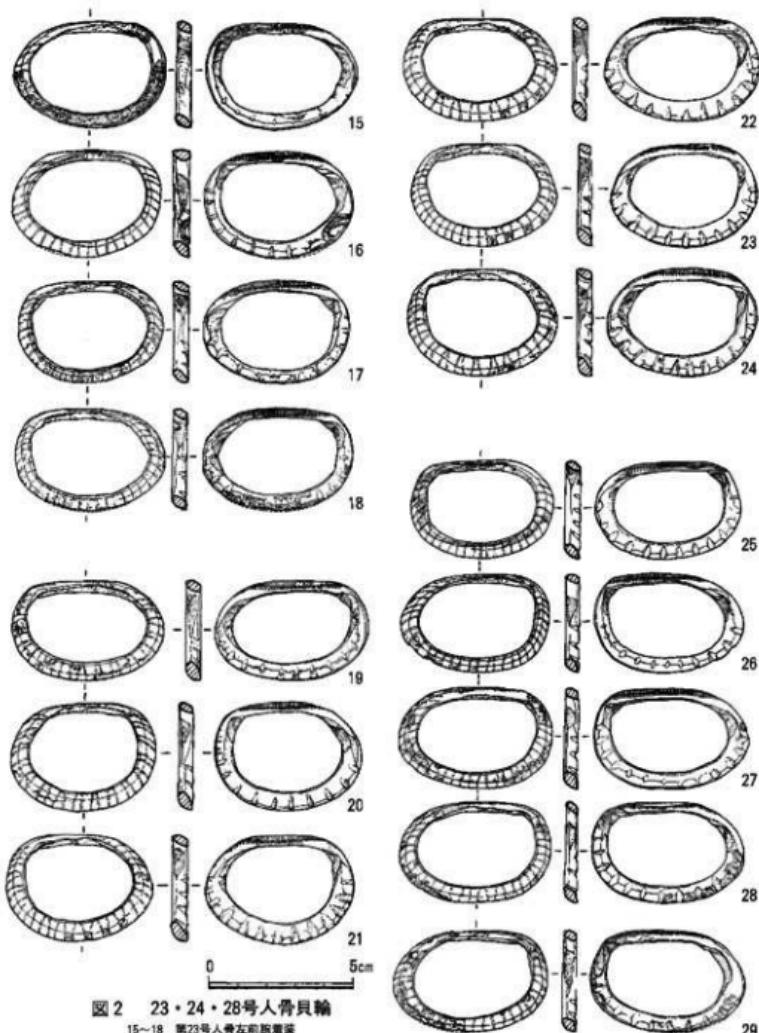


図2 23・24・28号人骨貝輪

15~18 第23号人骨左前腕環
19~24 第24号人骨左前腕環
25~29 第28号人骨左前腕環

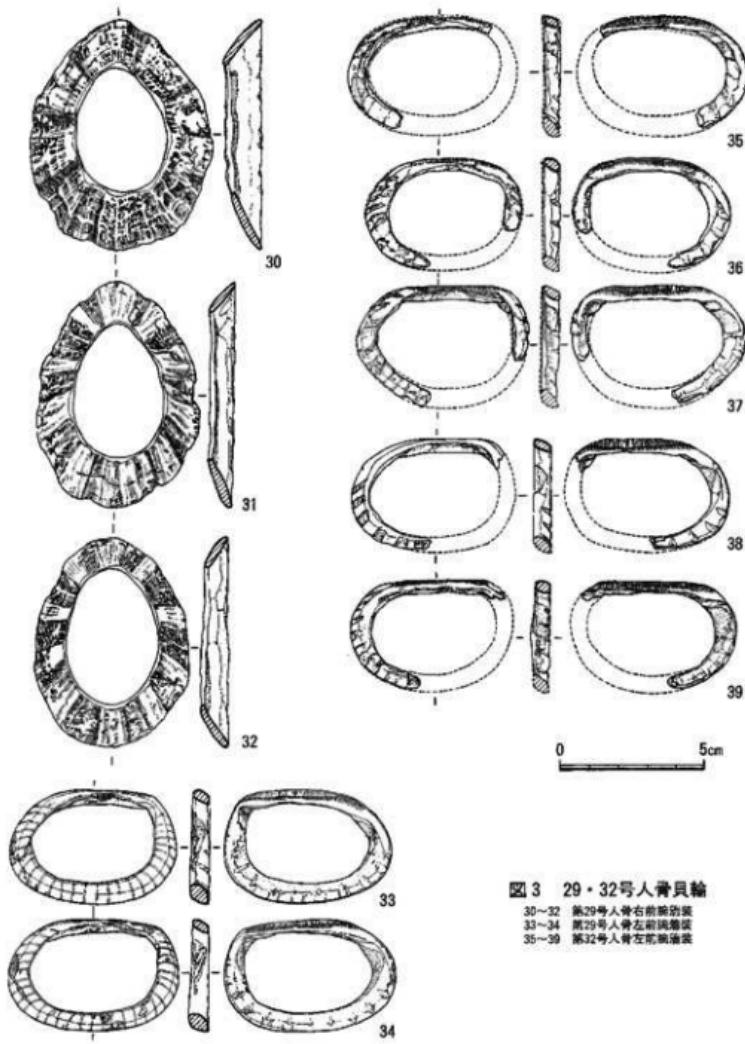


图3 29·32号人骨貝輪
 30~32 第29号人骨右前胸肋袋
 33~34 第29号人骨左前胸肋袋
 35~39 第32号人骨左肱胸肋袋

弥生時代の子供用貝輪論—古浦遺跡の貝輪によせて

木下尚子

はじめに

1. 弥生時代の子供の貝輪
2. 子供の貝輪の系譜 1 貝輪使用型の分類
 - 2 I型 (一枚貝・笠貝貝輪独立型)
 - 3 II型 (二枚貝・笠貝貝輪共有型)
 - 4 III型 (南海産貝輪共有型)
3. 結語

はじめに

弥生時代前期の墓地古浦遺跡では、16名の子供のうち6名が貝輪を着装していた。子供の貝輪着装例は弥生時代の西日本にしばしば認められ、また縄文時代晩期にも数例知られている。後者については秋田県柏子所貝塚（大和久 1966）、愛知県稻荷山貝塚（清野 1969）、宮城県里浜寺下圓貝塚（松本 1919）等がある。しかしこれらは、成人女性が貝輪を着装するという縄文時代の一般的な貝輪着装の原則（渡辺 1969）に照らすと例外的であり、その分布は東日本にかたよっている。

弥生時代について小れば、貝輪をはめた状態でみつかった子供は現在6遺跡13例知られる。着装状態は確認できなかったものの、貝輪が未成人骨にたしかに対応するという例を含めると、その数は14遺跡24例、人骨に必ずしも対応しないが子供用貝輪とみられるものの数は14遺跡122個にのぼる。またこれら遺跡の分布は古浦遺跡例をのぞくと中・北部九州と山口県西岸にかたよっており、壺形墓や箱式石棺墓を伴う文化と関連が強い。

このようにみると、弥生時代における子供の貝輪習俗は縄文時代のそれとは連続せず、弥生時代新たに登場していた可能性が高いといえる。この習俗は、どのように登場したのだろうか。以下、子供用貝輪の系譜について、古浦遺跡例を糸口に検討を試みたい。

1. 弥生時代の子供の貝輪

表1は現在しられる弥生時代の子供用貝輪一覧である。着装状況の明らかでないものをも含め、14遺跡30例を示した。表2はこれらの内径である。以下各遺跡例について、他の装身具との関係に

もふれながら簡単に紹介していこう¹⁰。

1-1 古浦

古浦遺跡は、日本海に面した砂丘に立地する弥生時代前期中ごろから中期の集団墓地である。埋葬人骨48体のうち成人は27体、未成人は16体である（九州大学医学部解剖学第二講座1998）。埋葬施設は弥生中期の石碑墓1基をのぞきすべて上塙墓である。1歳から5～6歳までの子供が左腕ないし両腕に貝輪を着装している。着装者の割合は未成人骨の38%にあたる。未成人用貝輪総数は39である。

使用された貝は二枚貝綱のハイガイと腹足綱のオオツタノハである。前者は36例、後者は3例である。ハイガイは三河湾・瀬戸内海・有明海などの内湾砂泥の干潟に生息するとされる（奥谷ほか1986）。ハイガイの生息可能な環境を遺跡周辺に求めると、巾海が候補にあがるが、現在巾海にハイガイは生息していないという。弥生時代初頭における生息の可能性も、周辺丘塚の貝等から判断すると、低いといわざるをえないようである¹¹。オオツタノハは房総半島以南や南西諸島に分布する、ツタノハガイ科の南島種である。この時期オオツタノハが琉球列島から九州方面に搬入されていることは、すでに複数の遺跡例が示している（木下1980）。

さて、古浦における装身具の特徴の一は、ヘアバンドの使用である。成人前頭部上に、人類学者が青斑とよぶ円形の銅鏡痕がこっている。金関丈夫によると「死後表層の軟部の崩壊後に、皮膚上にあった円形の銅板が背面に接着し、水酸化することによって汚染されたものと考えられ」、「円形の銅板を固定したはちまき様のバンドの使用が想像される」。青斑のある成人は4例で、成人骨の15%にあたる。興味深いことに、同様の青斑が4～5歳の未成人頭骨のこめかみ部付近にもある。ヘアバンドは古浦遺跡の成人と未成人に、共通する装身具といえる。

特徴の二是、大人の装身具と子供のそれとが明らかに異なっている点である。勾爪は前者にのみともない、貝輪・貝製円玉は後者にのみともなう。

特徴の三是、貝輪材料が遠隔地の貝だという点である。ハイガイ・オオツタノハ貝輪は、ともに古浦例とほとんど同形のものが響灘・玄界灘・五島灘沿岸を結ぶ地域に分布し（木下1982）、さらに前者は松江市西川津（川原・内田ほか1980）に、後者は八束郡小浜¹²にもみられる。古浦人は当時の沿岸交易路を通して貝輪材料入手していた可能性が高い。

1-2 土井ヶ浜

土井ヶ浜遺跡は、響灘に面した砂丘に立地する弥生時代前期中ごろから中期後半の集団墓地である（乗安ほか1982,83,84,85,89）。11次にわたる発掘調査によってこれまでに123基の埋葬構造と297体（成人194体、未成人39体）の人骨を検出している。埋葬施設は上塙墓・配石墓を主体とし石棺墓が加わる。子供用貝輪のうち着装状態の判明しているのは3号人骨と237号人骨に伴う貝輪10例

表1 弥生時代の子供用貝輪一覧 崇()内は着装数(右・左)

(総数122)

No.	遺跡・所在地	番号・遺構・年齢等	着装目録番号・貝輪・着装状況	時期	その他・(口輪小計)
1	古浦 島根県八束郡鹿足町古浦	12号人骨 二塊墓 2~3歳 / 14 ハイガイ(6-8) 崇 2.23号人骨 土塙墓 1歳 3.24号人骨 土塙墓 2歳 4.28号人骨 一塊墓 1歳 5.29号人骨 土塙墓 2~3歳 6.32号人骨 土塙墓 4~5歳	4 ハイガイ(0-4) 6 ハイガイ(0-5) 5 ハイガイ(0-5) 5 オオツリノ貝(3-2) 5 ハイガイ(6-5)	前期~中期	右口輪1/6左口輪1/2 (39)
2	土井ヶ浜 山口県周南市北町神代上	1.2号人骨 石棺墓 幼児 2.28号人骨 土塙墓 幼児 3.23号人骨 土塙墓 幼児 4.採集 5.採集 6.採集 7.23号骨 8.採集	8 ハイガイ 1 ハイガイ(0-1) 1 イモガイ科(32個) 1 イモガイ科(好型) 1 ユキノカサ 1 アツシデガイ ^中 1 アフソデガイ	初期~後期	1~4次調査 同上 同上 8次調査 F 8南区第4層 9次調査 J 2区 (23)
3	中ノ浜 山口県周南市豊浦町川郷	1.5号人骨 石棺墓 幼児	3 サルボウ	前期~中期	1次調査資料 改葬骨に付属 (3)
4	出ノ本 長崎県佐世保市高町	1.18号人骨 石棺墓 3歳	1 マツバガイ	前期末~中期	着装状況を確認できない (1)
5	芦田山 福岡県行橋市前川	1.1 地区都人骨 腹棺墓 3~4歳	1 アカガイ	中期後半	着装状況を確認できない (1)
6	大友 佐賀県東松浦郡大友町 長崎県長崎市深堀町	1.13号人骨 腹棺墓 幼児? 3 クマキガイ 2.13号人骨 腹棺墓 幼児? 1 イモガイ科目 3.20号人骨 内棺墓 7歳 4. 1次4粒腹外 小瓦?	3 クマキガイ 1 イモガイ科目 7 オオツリノ貝(3-4) 3 クマキガイ	中期前半 前期末か 中期後半~後期初頭 初期~中期	后津城保管資料 着装状況を確認できない 着装状況を確認できない 着装状況を確認できない (14)
7	深堀 長崎県長崎市深堀町	1.8号人骨 土塙墓 10歳前後 2.8号人骨 腹棺墓 4~5歳	9 タマキガイ(3-5) 20 サルボウ他 (9-11)	中期 中期 中期	18号口輪右:444左:95,1件各1 タリガ(3.7件)代田92左:95右:92 タリガ(2.7件)7 (29)
8	企屋 福岡県福岡市博多区企屋	1.6号人骨 腹棺墓 5~6歳	1 シイショウガイ科貝 ^中	中期前半	着装状況を確認できない (1)
9	伯玄社 福岡県春日市伯玄町	1.85号人骨 腹棺墓 小兒	1 シイショウガイ科貝	中期前半	着装状況を確認できない (1)
10	鏡音堂 福岡県筑紫野市鏡川町片瀬	1.10号人骨 腹棺墓 幼児	1 シイショウガノ貝 ^中	中期後半 1992年出土	(1)
11	佐方 佐賀県三養基郡大城町葛原	1.5号人骨 腹棺墓 小兒	2 シイショウガイ科貝+ イモガイ(好型)	中期中期	着装状況を確認できない (2)
12	二塚山 佐賀県三養基郡上富村隣 6歳前後	1.25号人骨 腹棺墓	1 イモガイ科貝(好型) (4-6)	中期前半	(4)
13	大道小学校校庭 熊本県山鹿市方保田	1. 捨棺墓 幼児	2 イモガイ科貝(好)	中期後半	着装状況を確認できない (2)
14	陣山 熊本県熊本市出水町陣上	1.1号人骨 腹棺墓 7歳前後	1 シイショウガイ科貝	後期初期	着装状況を確認できない (1)

である（図3の3～11）。128号人骨の貝輪は老年の女性127号人骨の胸に抱かれて埋葬された幼児に伴うものである（図2の1～8）。127号の足元にハイガイ貝輪が8個まとまっており、いずれも小型であることから、これらを128号に対応する貝輪とみている。

埋葬遺構から遊離してしまった貝輪のうち、内径の大きさからみて子供用貝輪と判断できるものが5点ある。それらはイモガイ科ヨコ型貝輪と同タテ型貝輪（図4の3～4）、スイショウガイ科貝輪（図5の1～2）、ユキノカサ貝輪（図3の1～2）である。このうちのイモガイ科ヨコ型とスイショウガイ科貝輪には、同型の大入用貝輪がある。後者は男性が着装し、また女性人骨にも伴っている。土井ヶ浜出土の貝輪総数は40、子供用貝輪数は22で、これは全体の55%にあたる。

土井ヶ浜の装身具の特徴は、大人用と子供用の装身具が二つの面で区別されている点である。第一の区別は玉類と指輪の有無である。ガラス丸玉と指輪は大人にのみ伴い、ヒスイ勾玉は子供にのみ伴う。第二の区別は、両者に共通する装身具（管玉・貝製臼玉・貝輪）の貝輪においてみられる。スイショウガイ科とイモガイ科貝輪は大人と子供に共通に使用するが、一枚貝・マツバガイ・ユキノカサガイ貝輪は子供に限られる。

土井ヶ浜遺跡においては、装身具全体が大人と子供を“区別する機能”と“つなぐ機能”をあわせており、貝輪にもこの両面を認めることができる。

1-3 中ノ浜

中ノ浜遺跡は十井ヶ浜と同様、菅藪に面した砂丘に立地する弥生時代前期中ごろから中期の集団墓地である（秉安ほか 1985、潮見・岩崎ほか、1984）。9次の調査によって95基の埋葬遺構と128体（成人80体、未成人27体）の人骨を検出している。埋葬施設は土壙墓・配石墓が右棺墓・覆石墓に相半ばし、小児用覆棺が加わる。子供用貝輪は第1次調査第3号石棺の改葬人骨（幼児）に伴っていた。貝輪は3点、1個は尺骨に遇っていたというが、原状を復元することはできない。すべてサルボウ製で、入念なつくりである。

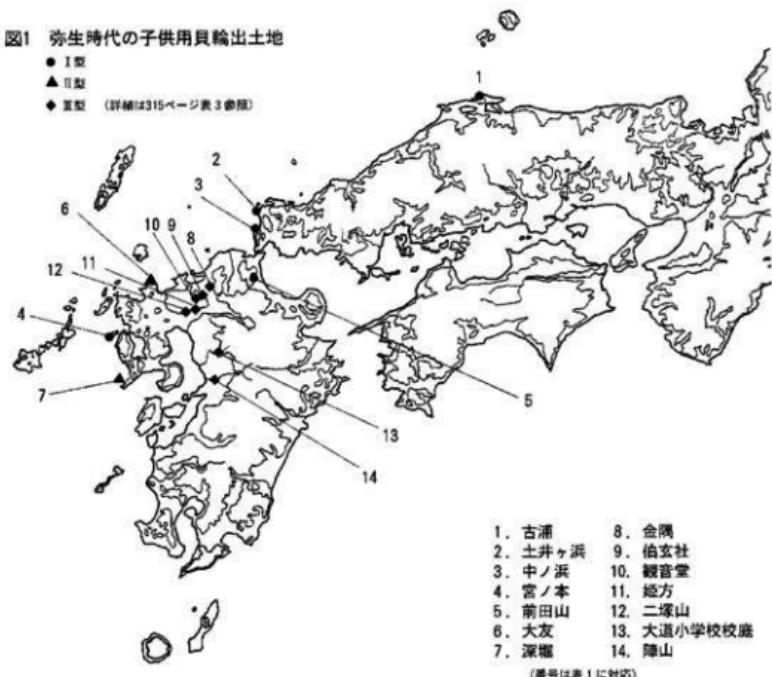
ここではスイショウガイ科・イモガイ科貝輪と貝製臼玉は大人用装身具、一枚貝貝輪は子供用装身具、両者に共通するのは管玉である。

1-4 宮ノ本

宮ノ本遺跡は、高島の海岸砂丘に立地する弥生時代前期末から中期中頃にいたる集団墓地である（久村ほか 1980）。4次の調査によって35基の埋葬遺構と45体（成人30体、未成人9体）の人骨を検出している。埋葬施設は土壙墓と右棺墓が相半ばし、これに小児用覆棺が加わる。

子供の貝輪は、18号人骨（8歳）に伴ったマツバガイ1点に留まる（図3の12）。貝輪は胸部附近にあったが、着装状態をとどめてはいなかった。これに対し女性の貝輪着装者は6体、貝輪は12個を数える。5体は一枚貝輪を、1体はイモガイ科貝輪を着装している。マツバガイ貝輪は内側、

図1 弥生時代の子供用貝輪出土土地



表面ともによく研磨されている。

宮ノ本における大人と子供の貝輪の違いは明瞭である。また女性に限って貝輪をはめており、一枚貝が主体をしめる点は縄文文化の伝統に共通する。

1-5 前田山

前田山遺跡は、京都平野をのぞむ低丘陵上に展開する集団墓地である（長峯・水島ほか 1980）。I区において弥生前期末から古墳時代前期の墓地を検出している。遺構は土壙墓が大半を占め、埴輪、石棺蓋等が加わる。248基の埋葬遺構のうち、人骨の確認できたものは21基にすぎない。

この中の1基の壇内に貝輪があった（図2の12）。棺内には3～4歳の幼児骨が残存していた。貝輪は、右腕の骨が存在したと報告者が推定する位置でみつかっている。形状状態はわからない。木村幾太郎氏は、着装されていたのではなく副葬品であった可能性が強いとしている。また子供が貝輪を伴っていることに関して、「前代からの呪術的意味を保持して子供に副葬したもの」としている（木村 1987）。貝輪はアカガイ製で、入念な研磨がほどこされている。

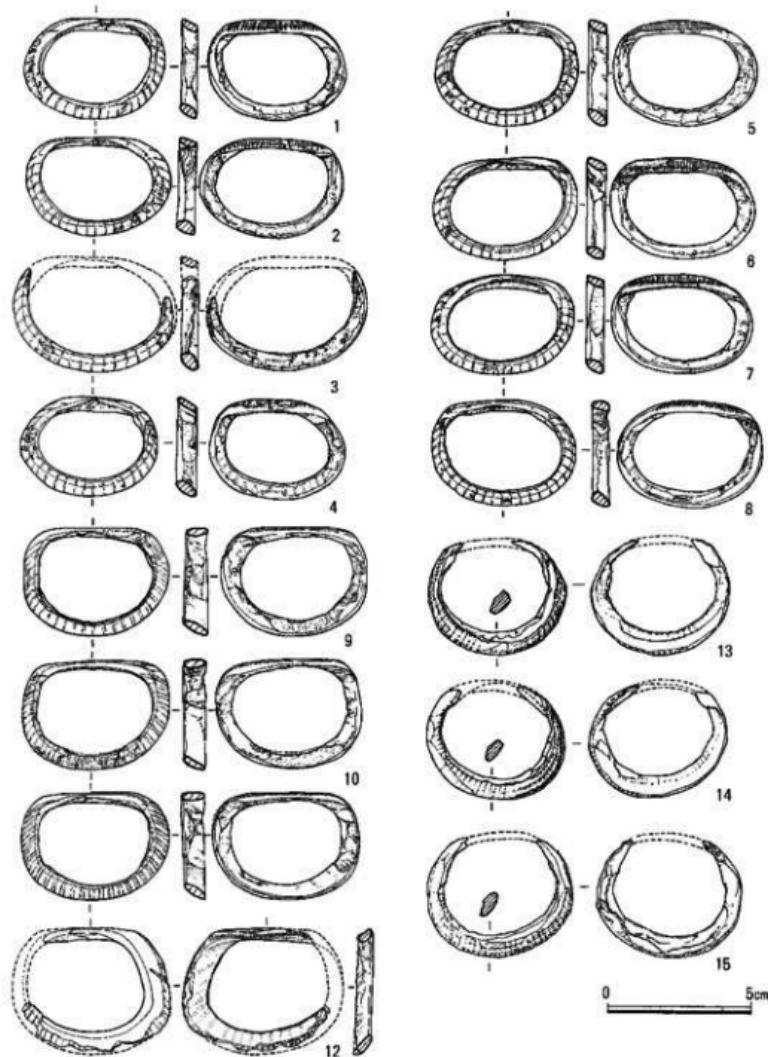


図2 子供の貝輪（二枚貝貝輪）

1～8 土井ヶ浜126号人骨共伴

9～11 中ノ浜3号石棺B人骨共伴

12 前田山149号人骨共伴

13～15 大友（1次）4号石棺外

表2 弥生時代子供用貝輪の大きさ一覧

貝輪番号は着装の場合手を前から剥離に、非着装・着装状況不明の場合は内径の小さい方から大きい方に並べる。() 内は復元推定値。単位:mm

遺跡	No.	貝輪内径		遺跡	No.	貝輪内径		貝輪内径	
		長径	短径			長径	短径		
古浦2号人骨	右:ハイガイ (2~3歳)	1 2 3 4 5 6	41 41 48 46 45 44	31 32 32 30 33 31	2 (幼児)	土井ケ浜3号人骨 マツバガイ	1 2 3 4 5 6	45 45 46 48 50 50	33 36 36 37 38 41
	左:ハイガイ	1 2 3 4 5 6 7 8	42 42 41 43 45 42 48 46	28 29 29 31 31 30 30 32		土井ケ浜128号人骨 ハイガイ (幼児)	1 2 3 4 5 6 7 8	(56) 57 57 36 39 39 40 40	(41) 44 28 29 30 30 30 33
古浦23号人骨	左:ハイガイ (1歳)	1 2 3 4	42 40 40 42	28 29 30 31		七戸町浜237号人骨 左:タマキガイ (幼児)	1	44	40
古浦21号人骨	左:ハイガイ (2歳)	1 2 3 4 5 6	42 38 38 40 39 39	27 30 28 27 28 28		採集 イモガイ科員 (ヨコ型)	1	33	33
						採集 イモガイ科員 (タテ型)	1	38	30
						採集 ユキノカサ	1	42	30
						4番 アツソデガイ	1	(53)	(38)
						アツソデガイ	1	45	29
古浦28号人骨	左:ハイガイ (1歳)	1 2 3 4 5	39 41 41 42 42	27 27 27 27 28	3 (幼児)	小ノ浜1次3号左湾人骨 ハイガイ	1 2 3 4 5	39 39 40 51 (42)	29 29 31 43 32
						宮ノ木18号人骨 (8歳)	1	51	43
古浦29号人骨	右:タマキガイ (2~3歳)	1 2 3	45 47 48	32 32 33	5	前田山1地区49号人骨 (3~4歳)			
	左:ハイガイ	1 2	44 45	30 35	6	大友1次8号人骨 タマキガイ (幼児?)	1	42	(31)
古浦32号人骨	左:ハイガイ (1歳)	1 2 3 4 5	() () () () ()	() () () () ()		大友1次9号人骨 イモガイ科員 (幼小児?)	1	(64)	(50)

遺跡	No.	目輪内径	
		長径	短径
Va 大友2次50号人骨 (7歳)	1	41	28
	2	54	37
	3	51	38
	4	47	34
	左: サルガウ	1	
	2	49	37
	3	50	39
人友1次4号石棺外人骨 (小兒?)	1	47	37
	2	48	35
	3	49	40
7 深掘8号人骨 (10歳前後)	1		
	2		
	3		
	左: タマキガイ	1	
	2		
	3		
	4		
	5		
深掘18号人骨 (4~5歳)	右: サルガウ	1	
	2		
	3		
	4		
	5		
	6		
	7		
	8		
	9		
	10		
	11		
	12		
	13		
	14		

他に装身具として上塙墓2基と右棺墓1基から管玉が検出されている。遺構の大きさからみて成人に伴うものであろう。

1-6 大友

大友遺跡は、玄界灘に面した砂丘に立地する弥生時代前期中頃から後期初頭に至る集団墓地である（東中川・藤田ほか 1981）。4次の調査により128基128体（成人76体、未成人25体）の埋葬人骨が検出されている。埋葬施設では土塙墓、石棺墓、甕棺がほぼ同じ割合で存在する。

子供の貝輪着装は1例で、7歳児が両腕にオオツタノハ貝輪を着装していた。また遺物の対応がやや不確かであるが、1次8号人骨に二枚貝貝輪3個、1次9号人骨にイモガイ科貝輪1個が伴っている。1次4号石棺外で検出された二枚貝貝輪3個は人骨と対応しないが、大きさから未成人用貝輪と判断できる。大友遺跡の貝輪総数71個のうち、子供の貝輪は14個、全体の20%にあたる。

大友遺跡において、子供にのみ伴う装身具を認めることはできない。これに対しガラスおよびヒスイ製玉類、ゴホウラ貝輪は大人にのみ伴っている。貝輪（二枚貝・イモガイ科貝・オオツタノハ）と管玉は、大人と子供に共通する装身具である。このように大友遺跡では、子供側から大人を区別する装身具がみられず、かわって両者をつなぐ装身具が多い。

1-7 深堀

深堀遺跡は、五島灘に面した砂丘に立地する、弥生・古墳時代前期末から中期中ごろまでの集団墓地である（内藤ほか 1967）。3次の発掘調査によって、27基の埋葬遺構と26体（成人13体、未成人14体）の人骨が検出された。埋葬施設は土塙墓を主体とし、甕棺墓と右棺墓（1基）が加わる。

貝輪着装者は女性と子供に限られ（女性5名、未成人2名）、貝輪は二枚貝製のみで、これらの点は縄文時代の習俗に共通している。また、ここでは4～5歳の子供が両腕に20個の貝輪をはめている。同遺跡の女性の貝輪着装数は2個から24個なので、数の多少は年齢の高低によるものではなさそうである。深堀例は、遺跡の弥生人が縄文時代的要素を継承する一方で、子供に関してすでに縄文時代とは異なる貝輪習俗をもっていたことを示している。

1-8 金隈

金隈遺跡は福岡半野をのぞむ丘陵に位置する、弥生時代前期末から後期初頭に至る集団墓地である（折尾ほか 1972、橋口・折尾 1973、中橋 1985）。6次の発掘調査によって、469基の埋葬遺構と136体の人骨（成人101体、未成人35体）が検出されている。埋葬施設は甕棺墓を主体とし、これに土塙墓と右棺墓（2基）が加わる。

146号甕棺出土のスイショウガイ科貝輪については、すでに折尾学氏と橋口達也氏による詳細な報告がある。それによると、川土情況から判断して貝輪はすでに着装状態ではなく副葬品と考えられ、その形態は上井ヶ浜型に属し、左手着装にふさわしい形状とされる。金隈遺跡には他に男性の

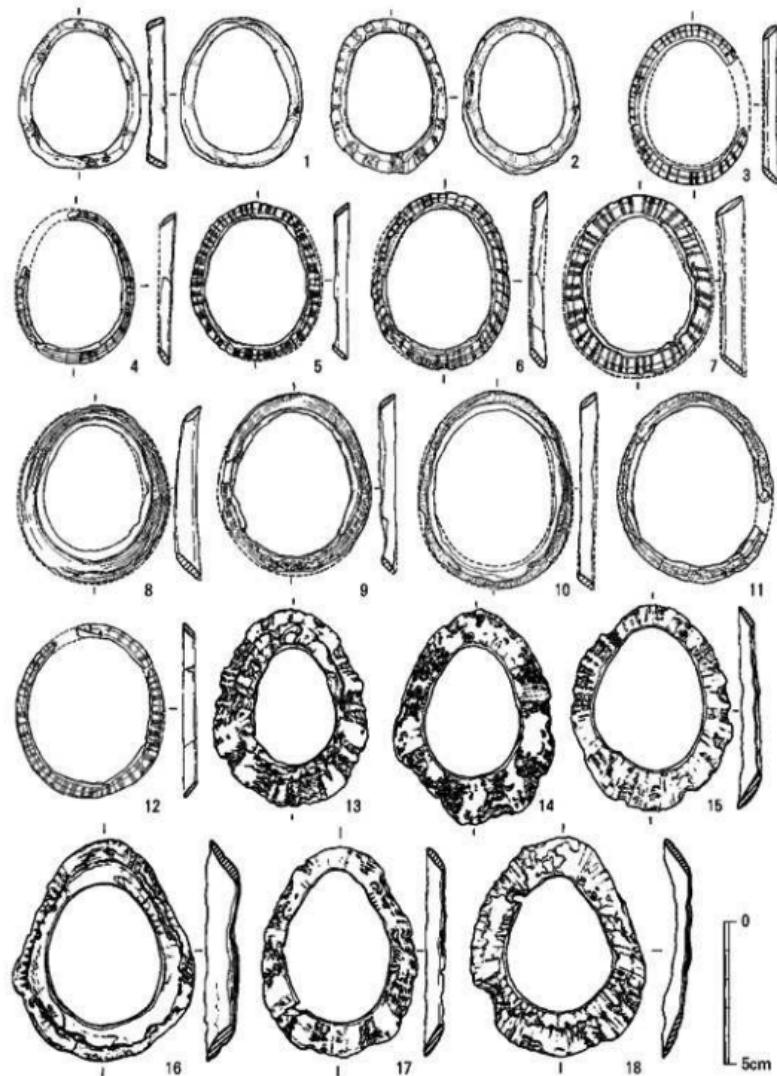


図3 子供の貝輪（笠貝貝輪）

1. 土井ヶ浜（1次）採集 2. 土井ヶ浜（1～5次）採集 3～11. 土井ヶ浜3号人骨複製
12. 宮ノ本16号人骨共伴 13～18. 大友（2次）50号人骨複製

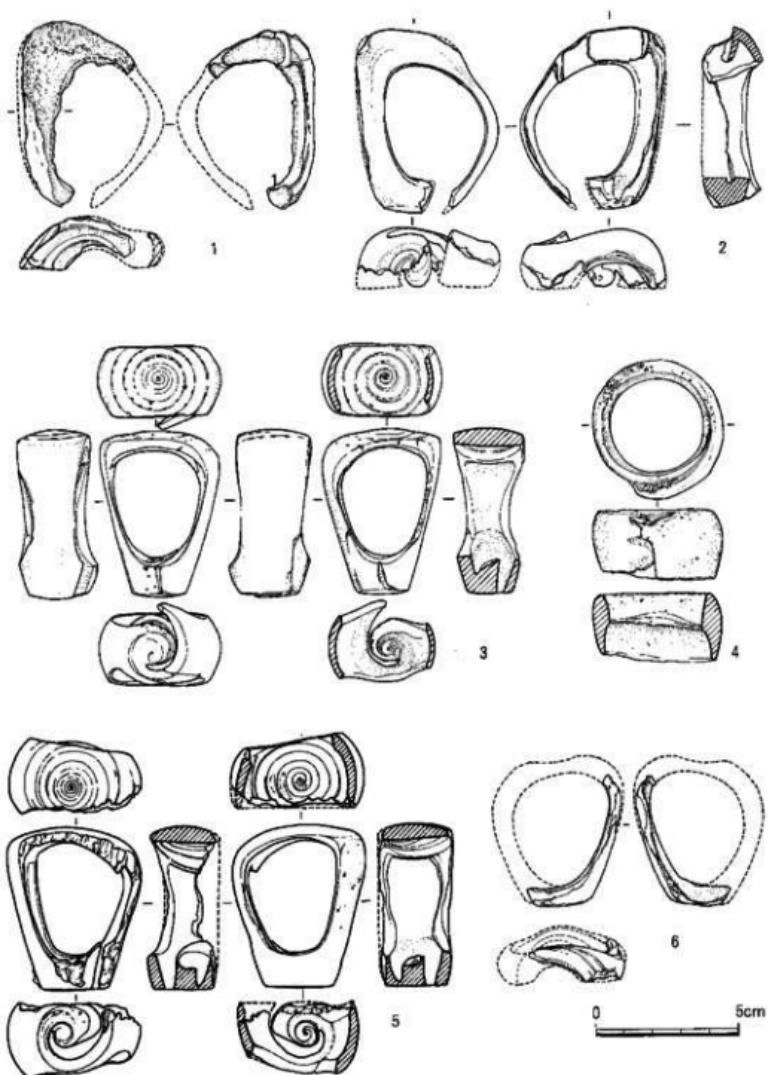


図4 子供の貝輪（南海産貝輪）

1. 陣山1号人骨共伴（スイショウガイ科貝） 2. 金磯46号人骨共伴（スイショウガイ科貝）
 3・4. 土井ヶ浜（1～5次）採集（イモガイ科貝） 5. 鹿方3号人骨共伴B（イモガイ科貝）
 6. 佐室社85号人骨共伴（スイショウガイ科貝）

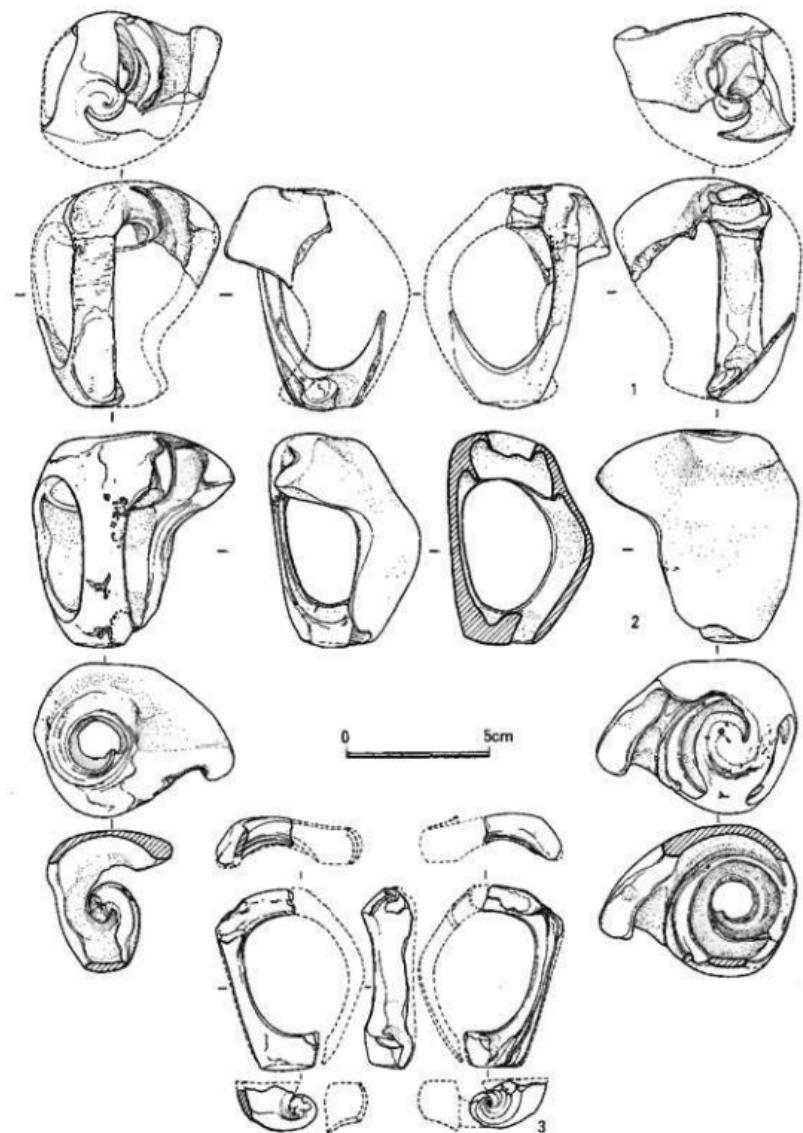


図5 子供の貝輪（スイショウガイ科貝輪）

1. 土井ヶ浜（8次）4層出土
2. 土井ヶ浜（8次）表層出土
3. 指方3号人骨共伴A

貝輪着装例があるので、幼児の貝輪着装もこれに共通する習俗と理解できる。金隈において他の装身具は極めて乏しく、成人に石製垂飾りが1点伴うにすぎない。これまでの表現にしたがえば、成人と未成人を区別する装身具は玉で、つなぐ装身具はゴホウラ貝輪だといえよう。

1-9 伯玄社

伯玄社遺跡は筑紫平野をのぞむ低丘陵上に位置する、弥生前期後半から中期にいたる集団墓地である（渡辺ほか 1968）。発掘調査によって、182基の埋葬遺構と11体（成人10体、未成人1体）の人骨が検出されている。埋葬施設は槨棺墓を主体とし、土壙墓が加わる。

伯玄社遺跡で検出された装身具は子供用のスイショウガイ科貝輪1点だけである（図4の6）。85号墓棺に伴う貝輪は保存状態が悪く、全体の4割ほどを留めるにすぎない。復元すると諸岡型貝輪に近い形状になる。

1-10 銀音堂

銀音堂遺跡は、那珂川によって開拓された低地をのぞむ低丘陵上に位置する、弥生時代前期末から中期後半にいたる集団墓地である（澤田ほか 1994）。1987年と1992年に発掘調査され、弥生時代の槨棺墓92基と土壙墓12基、27体の人骨が検出された。報告された装身具は、74号墓棺の男性に伴う12個の管玉と、80号墓棺の幼児に伴うスイショウガイ科貝輪である。

スイショウガイ科貝輪は、中期中頃から後半の槨棺墓（K80）内で、幼児の尺骨が貫通した状態でみつかった。着装貌の左右については報告されていない。貝輪はやや分厚い諸岡型貝輪である。

1-11 姫方

姫方遺跡は佐賀平野にのぞむ低い独立丘陵上に位置する、弥生時代中期前半から後期前半の集団墓地である（木下ほか 1974）。10次にわたる発掘調査によって、430基以上の埋葬遺構が検出されている。埋葬施設は槨棺墓を主体とし、石棺墓と土壙墓が加わる。

貝輪は中期中ごろの小児用槨棺（第3号槨棺）内に2点遺存したが、人骨との関係は不明である。貝輪の内径の大きい方を仮にAとし、小さい方をBとしよう。貝輪Aはスイショウガイ科貝輪で、全体の4割を失い、保存状態はよくない（図5の3）。復元形は金隈出土の子供用貝輪と同様である。貝輪Bはイモガイ科貝輪である（図4の5）。保存状態はあまりよくないがほぼ完形で、土井ヶ浜の小型イモガイ科貝輪によく似ている。貝輪Aを意識したのか、本来左右対照に近い形状のイモガイの一方の肩部を擦りおとして、スイショウガイ科貝輪の形状に近づけようとしたらしい。

姫方遺跡における装身具は2点の貝輪だけである。

1-12 二塚山

二塚山遺跡は佐賀平野にのぞむ段丘上に位置する、弥生時代前期末から後期前半にいたる集団墓地である（七田ほか 1979）。一つの段丘尾根を占拠している墓地のはば全域を完全に調査した貴重

な例である。発掘調査によって241基の埋葬施設と64体（成人52体、未成人6体）の人骨を検出している。埋葬施設は甕棺墓を主体とし、石棺墓と土塚墓が加わる。

子供の貝輪は59号人骨（6歳前後）の右前腕に通った状態で4個みつかった。すべてイモガイ科貝製で、保存状態は良好ではない。いずれも全体の3割を留めるにすぎず、復元すると橢円形に近い円型の貝輪になる。

二塚山では、他に成人（71号甕棺）がゴホウラ貝輪を右腕に8個着装しているので、大人も子供も共通して南海座貝輪をはめていたことがわかる。また成人用上襦墓に伴ってガラス勾玉・管玉・小玉がみつかっている。二塚山において玉類は大人の装身具だったらしい。

1-13 大道小学校校庭

大道小学校校庭遺跡は、菊池川によって開拓された盆地をのぞむ台地上に位置する、弥生中期後半を中心とする甕棺墓地である（限 1983）。甕棺の発見はすでに1969年にさかのぼるが、最近山鹿市教育委員会が発掘調査し、現在調査報告書作成中であるため、調査を担当された中村幸史郎氏の教示と実見によってのべる。

未成人貝輪が検出されたのは、中期後半の小児甕棺内である。甕棺内に人骨はのこっていたが着装情況等不明である。貝輪は小型のイモガイ科タテ型貝輪で、同様の大きさの貝輪が、2個重なったまま進行している。他の装身具等との関係は不明である。

1-14 陣山

陣山遺跡は白川流域の洪積台地上にある弥生時代の甕棺墓地である（熊本市教育委員会 1972）。1956年下水道工事中、一組の合口甕棺がみつかり、乙益重隆氏が発掘調査した。甕棺は後期初頭の型式で、中に子供の骨と貝輪の残片があった。わたしは国学院大学陳列室において、貝輪を実見した。

貝輪はスイショウガイ科貝製で、保存状態はあまりよくない（図4の1）。全体の6割を遺すにすぎないが、復元すると金腰例と同様の形状になる。

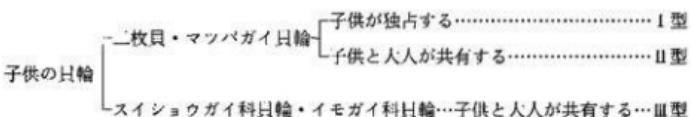
2. 子供の貝輪の系譜

2-1 貝輪使用型の分類

子供の貝輪に注目して弥生時代の装身具をみると、弥生時代の装身具には“大人と子供を区別する機能”と“つなげる機能”的あることに気づく。このような視点で表1を並べ替えたのが表3である。

子供の貝輪として特徴的な二枚貝・マツバガイ貝輪のあり方に注目してみよう。子供用貝輪はまず、二枚貝または笠貝貝輪を伴うグループと、これを伴わないグループにわかれる。前者はさらに、二枚貝・マツバガイ貝輪を子供が独占するグループと、子供と大人とが共有するグループにわかれる。

る。また後者では南海産貝であるスイショウガイ科貝・イモガイ科貝を使用し、子供と大人は多くの場合貝輪を共有している。これらをそれぞれⅠ、Ⅱ、Ⅲ型に分けた。



以下各型について検討していこう。

2-2 Ⅰ型（二枚貝・笠貝貝輪独占型）

近海産の二枚貝・マツバガイ貝輪を子供が独占するこのグループは、子供と大人の区別を子供の側から示している点に特徴がある。反対に、大人の側から子供を区別する装身具は玉類などにみられるものの、一貫性に欠けている。

2-2-1 マツバガイ貝輪の系譜

子供だけの装身具にはマツバガイ貝輪の使用が顕著である。マツバガイは本州・四国・九州・韓半島にひろく生息する、近海に一般的な笠貝である。しかし貝輪としての利用は多くない。例をあげると、長崎県対島佐賀貝塚の1例（繩文後期、正林ほか 1989）、広島県沼田跡馬鹿渡岩陰遺跡の繩文前期前半の層からみつかったよく研磨されたマツバガイ貝輪破片5点（稻葉ほか 1979）、福井県鳥浜貝塚（繩文前期、森川 1979）の1点、岩手県日高貝塚（繩文後晩期、草場ほか 1971）の1点等である。

マツバガイと似た使用の認められるのが南海産笠貝のオオツタノハと北方笠貝のユキノカサである。東日本の縄文遺跡では、伊豆諸島のオオツタノハが早くから頻繁に登場している（今橋 1980）。ユキノカサ貝輪は佐賀貝塚、福島県大畠貝塚（縄文中期、小林ほか 1975）、網取C地点貝塚（縄文前・後期、渡辺ほか 1968）、寺脇貝塚（縄文後・晩期、渡辺ほか 1966）、兵庫県賀茂遺跡（弥生中期、新井 1915-16）等に知られる。

マツバガイ、オオツタノハ、ユキノカサはともに生息域を異にする貝であるが、外見上はともに笠状をなし、加工に際して同心円状にわれやすく、素材として共通の性質をそなえている。これらは分類学上でツタノハガイ科、ユキノカサガイ科であるが、原始腹足目カサガイ類としての呼称がある。笠貝貝輪はそれぞれ縄文時代に使用例があるものの、多くは時期・分布域において弥生時代の使用例と隔たりがある。

ここで注目したいのが朝鮮半島と中国の類例である。上老人島山登貝塚（韓国慶尚南道統營郡欲知面老大里、縄文後・晩期併行期、金・朴 1989）の女性は、左前腕に貝輪を3個着装していた。貝種は二枚貝（ベンケイガイ2個）とマツバガイ（1個）である。また中国吉林省延吉小宮子（縄

表3 子供用貝輪を中心としてみた弥生時代の装身具使用情況

反品番 No.	遺跡名	a子供だけの装身具	b子供と男性の兼用具	c子供と女性の装身具	d大人だけの装身具
1 古浦	貝輪(二枚貝・タマガイ)	ヘアバンド 管玉	ヘアバンド	管玉	勾玉
2 上井ヶ浜	貝輪(二枚貝・タマガイ) 貝輪(カバガイ)* ヒスイ勾玉	管玉 管玉 管玉	管玉(カバガイ・科・化け物)* 管玉 管玉	管玉	指輪 ガラス丸玉
3 中ノ浜	貝輪(二枚貝)	管玉	管玉	管玉	管玉
4 寺ノ本	貝輪(カバガイ)				管玉(アカガハ・化け物)
5 前田山	貝輪(二枚貝)				管玉(二枚貝・カバガイ)
6 大友		貝輪(カバガイ・科・二枚貝) 管玉	貝輪(カバガイ・科・二枚貝) 管玉	管玉	管玉(アカガハ) ガラス管玉・丸玉 ヒスイ勾玉・丸玉
7 深瀬				貝輪(二枚貝)	管玉
8 今原			貝輪(カバガイ・科)		石製手飾
9 伯玄社	貝輪(カバガイ・科)				
10 綱音堂	貝輪(カバガイ・科)				
11 塚方	貝輪(カバガイ・科・化け物)				
12 横山	貝輪(カバガイ・科)			貝輪(カバガイ・科)	ガラス勾玉・小玉・管玉
13 大高小学校校庭	貝輪(カバガイ・科)				
14 佛山	貝輪(カバガイ・科)				

貝輪使用型

I型：二枚貝・管玉貝輪独占型（子供が二枚貝・笠貝貝輪を独占的に使用）

II型：二枚貝・笠貝貝輪共有型（子供と大人が二枚貝・笠貝貝輪を使用）

III型：南海産貝輪共有型（子供と大人が南海産貝輪を使用）

*若装状態ではなかったが、貝輪の大きさから子供用と推定されるもの

→他遺跡の情況と比較して、表内位置の移動が可能であることを示す

文後期晩期～弥生中期併行（三上 1971）の石棺内検出の貝輪にも、マツバガイに酷似するものがある⁴⁴。縄文晩期にマツバガイとユキノカサ貝輪を出した対島佐賀貝塚には、韓半島からもたらされたキバノロ製品がみられ、彼地との関係をうかがわせる（正林ほか 1989）。弥生時代の西日本でいっせいに始まる笠貝類の使用習俗を、大陸の習俗の影響とみることはできないだろうか。

2-2-2 笠貝と二枚貝の共存

古浦29号人骨は右腕にオオツタノハ貝輪を3個、左腕に二枚貝貝輪を2個着装していた。この事実は、古浦人にとってオオツタノハも二枚貝も同様に使用できる貝輪素材とみなされていたことを示唆する。同じことは先にあげた韓国山登貝塚の二枚貝とマツバガイの併用にもいえようである。二枚貝貝輪と笠貝貝輪は、密接な関係にあったといえる。

ところで、縄文時代の貝輪は二枚貝のフネガイ科やタマキガイ科を中心とした女性専用の装身具であり、そこには縄文文化の精神性が込められていた（渡辺 1969）。一方弥生時代の貝輪素材であるハイガイもフネガイ科の貝で、貝殻の大小の違いころあれ外見上双方はよく似ている。つまり二枚貝貝輪にかんする限り、弥生時代と縄文時代の素材は、同類なのである。しかし弥生文化の貝

輪は、これを子供がはめている一点において、縄文の貝輪と文化的にはっきり区別される。したがって、たんに素材が共通していることをもって、弥生時代の貝輪が縄文時代の貝輪の延長にあるとはいえない、わたしは考えている⁷⁾。二枚貝貝輪と併用された笠貝貝輪がこの問題の鍵になるだろう。前述のように笠貝貝輪の着用を大陸的習俗とみれば、I型の貝輪習俗は笠貝貝輪の着装習俗を仲立ちに作られた、弥生文化独自の貝輪習俗ということができよう。

2-3 II型（二枚貝・笠貝貝輪共有型）

子供の貝輪と同じ種類のものを成人もはめるこのグループでは、貝輪は大人との連続性を示す裝身具として意味をもつ。以下大友遺跡の支石墓に伴う貝輪を糸口に、大友人の貝輪習俗を検討し、それにもとづいて子供の貝輪をみていく。

大友遺跡の57号支石墓では男性が右腕に3個の貝輪を着装していた。3個のうち2個はゴホウラ製組合せ貝輪で、1個は二枚貝製組合せ貝輪である。両者の形態はほぼ同一で、両者間に貝種による製作意識の差をうかがうことはできない。ここでは貝は自然形状の如何や生息域の遠近を問わず、貝殻は単なる素材である。

「貝は単なる素材」という見方を敷衍して大友出土の貝輪67点をみると、貝輪が北部九州型の貝輪7点を除き、すべてほぼ円形をなしていることに気づく。円形貝輪は大友遺跡の貝輪の主体をしており、これらは着装ルールにおいて北部九州弥生社会の貝輪とも、縄文的な伝統の貝輪とも異なっている。大人・子供・男・女を問わず、みな同様に貝輪を着装しているからである。

こうした背景に、大友遺跡が北部九州の弥生社会に南海庄の大型貝貝を供給した、貝交易の基地であったという事情がある。大友人のとともに貝輪素材が豊かに集積していたことが、彼らに自由な貝輪習俗を実現させた一因であることは否めない。しかし貝輪を円形に統一する嗜好や、その素材が二枚貝でもゴホウラでもイモガイでも、あるいはオオツタノハでも区別をしないという価値感や、男女・大人子供それぞれが貝輪をはめるという習俗には、しかるべき根拠があるはずである。支石墓の3個の貝輪は、こうした大友遺跡の貝輪習俗を凝集した例といつていい。支石墓という朝鮮半島系の墓を背景にしているところからみて、大友人の貝輪習俗が、朝鮮半島の影響を受けている可能性は高いと思う。

2-4 III型（南海庄貝輪共有型）

III型では子供は南海庄貝輪のみを着装する。ここではI型やII型に特徴的な二枚貝や笠貝類の使用はまったくみられず、他の装身貝もきわめて少ない。

III型の遺跡のうちほぼ全面発掘をおこなった金隈と二塚山では、貝輪を着装した成人男女例がそれぞれみつかっている。発掘調査面積の小さい遺跡、例えば伯玄社では、近くの門田遺跡において男性のゴホウラ貝輪着装例があり、大道小学校校庭では、菊池川下流の年の神遺跡において男性の

ゴホウラ貝輪着装例がある。同様の他例についても、付近に成人の貝輪着装例を容易に求めることができる。

以上から、Ⅲ型の各遺跡において、子供に共通する貝輪を大人が本来はめている可能性は、高いといえる。したがって、これらは表3のa欄ではなくb欄またはc欄におさまるべきものとみてい。すなわちⅡ型とⅢ型は同様の装身ルールにもとづいているといえる（表3の矢印はこのことに対応する）。

ところで、Ⅲ型における貝輪の特徴は、貝殻全体を使用して螺旋構造をとりこんだ立体的な造形であり、この点でⅠ型やⅡ型の主体をなす平たく円い貝輪と決定的に異なっている。わたしはⅢ型の貝輪を、北部九州弥生人が創造した農耕祭祀用の呪具だと考えている。Ⅲ型において貝輪をはめる人物の存在比は、Ⅰ型やⅡ型におけるよりずっと低く（例えばⅢ型の金隈では1.5%、Ⅰ型の古浦では12.5%、Ⅱ型の入友では14%）、貝輪着装にきびしい社会的選択が行われていたことを示している。子供の場合も同様である。Ⅲ型における子供の貝輪は、こうした厳しい社会的選択が幼小時からなされていたことを示す点で、Ⅰ型やⅡ型と異なっている。

3. 結語

子供と大人の貝輪習俗について、もう少し整理しよう。表4は表3から貝輪のみ抜き出して同様にまとめたものである。ここでは弥生時代の貝輪を、二枚貝輪、笠貝輪、南海産貝輪の3タイプに分類した。着装状態ではない資料については（ ）を用いて示した。表5では表4のb・cを一括し、また（ ）内の例も1例とみなして、さらに単純化した。

表5をみよう。使用型のⅠ型とⅢ型は、貝輪の種類と着装習俗において対照的である。Ⅰ型では子供が二枚貝・笠貝輪をほぼ独占する一方で、少数の大人が南海産貝輪をはめている。ここでは子供と大人の貝輪のはめ方が明らかに異なっている。これに対しⅢ型では両者の貝輪は南海産貝輪に統一され、他種の貝輪がまったくない。貝輪習俗がここでは單一的である。Ⅱ型は、Ⅰ型の子供とⅢ型の大人が共存した中間的状況を示している。三者の地理的関係をみると、Ⅰ型は山陰沿岸、響灘沿岸、西北九州沿岸をむすぶ海岸地域に分布するに対し、Ⅲ型は北部九州の内陸側平野部を中心に分布し、Ⅱ型は北部九州に近い西北九州沿岸にある（図1）。つまりⅠ型とⅢ型がはっきりと分布域を異にするのに対し、Ⅱ型は両者の中間地帯に分布している。三者の時期的関係をみよう。Ⅰ型では前期中頃から中期に継続する遺跡が多いのに対し、Ⅲ型では前期後半から後期前半に至るものが多く、Ⅱ型は両者の間に位置する（表6）。

以上から各型の関係を次のように整理できる。弥生時代前期中ごろ、子供と大人がそれぞれ異なる腕輪をはめる習俗が西日本の日本海沿岸部に登場し（Ⅰ型）、これが南海産貝類を入手していた

表4 子供用貝輪を中心としてみた弥生時代の貝輪使用情況(1)

使用型	No.	a	b	c	d	
I	1	○ ○				
	2	○ ○	○	(●)		
	3	○			●	●は表3と同じ。
	4	○ ○			○	貝輪使用型
	5	○			●	I型：一枚貝・笠貝独立型 II型：一枚貝・笠貝共有型 III型：南海産貝輪共有型
II	6		● ● ○		●	月輪記号凡例：
	7			○		○：一枚貝輪 ○：笠貝貝輪 ●：南海産貝輪
	8		●			貝輪の使用情況分類
	9		(●)			[a]：子供だけの貝輪 [b]：子供と男性の貝輪 [c]：子供と女性の貝輪 [d]：大人だけの貝輪
	10		(●)			() 内は推定。
III	11		(●)	(●)		
	12			(●)		
	13			(●)		
	14		(●)			

表5 子供用貝輪を中心としてみた弥生時代の貝輪使用情況(2)

例	5	8	○ ○ ○ ○	数	i	使用情況	a b c d	a b c d	a b c d	a b c d	a b c d	a b c d	
							I	II	III				

貝輪記号：○ ○ ● はそれぞれ1選択例を示す

○：一枚貝輪、○：笠貝貝輪、●：南海産貝輪

使用者情況：a - 子供だけの貝輪、b + c - 子供と大人の貝輪、d - 大人だけの貝輪

西北九州沿岸人によって、二者間の区別の曖昧な輪輪習俗に変化し(II型)、さらに前期末以降、北部九州半野部の人々に受容されて、結局子供と大人を区別しない單一的輪輪習俗が成立した(III型)。

I型の輪輪習俗の由来は、前述の笠貝貝輪と円形貝輪の検討をふまえると、朝鮮半島や中国に求めることができる。弥生時代初期におけるこうした外来の装身習俗をそのまま残したのが、貝輪をはめた古墳遺跡の幼児たちであった、と結論していいだろう。

表6 貝輪使用型別にみた遺跡の継続期間（弥生時代）

使用型	遺跡名	前期		中期		後期		
		中期	後半	前半	中期	後半	前半	中期
I型	古浦							
	上井ヶ浜							
	中ノ浜							
	宮田							
II型	山田							
	大友							
	深堀							
	伯母社							
III型	鏡古墳							
	金隈							
	二塚							
	山方							
IV型	大道小学校							
	山							

最後に、子供と大人を区別する行為について若干触れておきたい。装身具に限ってみると子供であることを積極的に表示する行為は縄文時代ではなく、弥生時代になってから認められる。これを示す貝輪以外の最古の例は、福岡県カルメル修道院出土の弥生時代前期後半以前の子供の墓（木棺墓）でみつかった錫製の3個の小型腕輪である（山崎1976、山崎ほか1992）。錫製腕輪の着用は明らかに外来の習俗であり、貝輪において、子供の着用が外来習俗であると述べたことと矛盾しない。また弥生時代初めの環濠集落である福岡県板付遺跡には、外濠の内側に子供だけの墓地が2箇所あり、子供を大人の墓地から明確に区別している（山崎1990）。古浦遺跡でも子供の墓ばかりが列をなしているので、子供を区別する意識があったのかもしれない。弥生人は装身具以外でも、子供を区別していたといえる。

縄文時代にも子供を大人から区別する意識は存在した。子供専用の櫛梳共はすでに縄文前期に登場しており（菊池1983）、また岡山県津雲遺跡の事例から、幼小児専用の埋葬地区を推定する説もある（春成1981）。帝釈寄倉岩陰の再葬墓の未成人骨約20体（縄文後期）は、葬法も成人のそれとは区別したものであったという。一方、大人と子供の合葬、同形式の墓の使用など両者に共通する要素も多い。これらをふまえ、辻村純代氏は、中国地方の墓地において子供を区別する意識が縄文晩期まで継承されていたとすれば、これが弥生時代の子供墓につながる、という考え方を示している（辻村1993）。

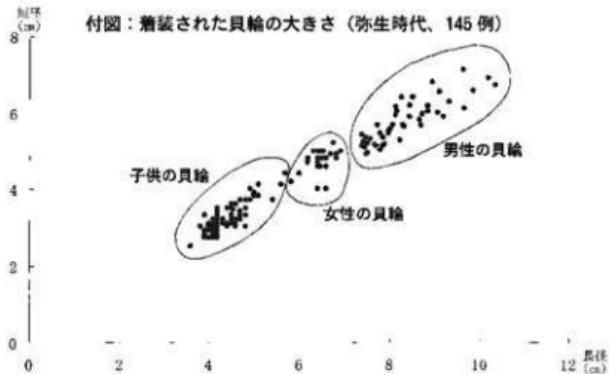
縄文文化の子供観が、弥生文化のそれとどう関係するのかはむずかしい問題であるが、腕輪習俗をみると限り、子供を区別する新たな考えが朝鮮半島から農耕文化とともに渡来していることは確かである。古浦遺跡の貝輪習俗は、渡来人がもたらした新たな習俗を端的に映し出しているとみるとができる。

古浦遺跡の貝輪について考察する機会を与えてくださった藤田等先生、ならびに鹿島町教育委員会の赤澤秀則氏に感謝申し上げる。また小稿を記すにあたって、下記の方々にご教示を賜り、各機関にお世話になった。記して感謝したい（五十音順、敬称略）。

網尾 勝、木村幾多郎、澤田康夫、高安克巳、中村幸史郎、春成秀樹、平野芳英、三島 格、水島稔夫、松下孝幸、山崎純男、国学院大学考古学研究室、上井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム、福岡県那珂川町教育委員会、山鹿市博物館、山口県豊北町教育委員会。

《註》

- (1) 本文中のいくつかの用語を、以下のような内容で使用する。人骨の年齢による区分は「成人・未成人」とし、成人は人類学でいう若年以上（13歳以上）、未成人は同じく小児以下（12歳以下）とする。「男性、女性」はいずれも成人男性、成人女性を意味する。貝輪の大きさによる区別は「大人用・子供用」とし、大人は先の成人に、子供は未成人に対応する。着装されていない貝輪を大人用か子供用か判断する場合、長径57mm、短径44mmを基準とし、これより小さいものを子供用、大きいものを大人用とした。この数値は、貝輪を着装する性別、年齢の明らかな人骨がはめていた145個の貝輪について統計をとり析出した（付図参照）。



- (2) 以前はゴホウラとされていたが、2004年に土井ヶ浜出土の貝輪を再検討した結果、小型の貝輪はゴホウラと同じスイショウガイ科のアツソデガイ型である可能性の高いことを確認した。アツソデガイ型であるとの明らかなものについては、素材名を改めた。
- (3) アツソデガイとゴホウラを比較する場合、貝殻全体をみると両者の区別は容易だが、貝輪に加工された場合の区別は面倒である。小型の貝輪について現在検討を進めている段階であり、ここではスイショウガイ科貝と表記する。
- (4) 烏根県西川津遺跡で弥生時代の貝輪が調査されているが、ハイガイは検出されていない（高安ほか1989）。ハイガイの生息等については烏根大学理学部地質学教室高安克巳氏、前水洋大校網尾勝氏（いずれも1993

- 年現在)、千葉県立中央博物館黒住耐二氏のご教示をえた。また貝についても、奥谷 1986、白井 1977を参照した。
- (5) 佐々木古文化研究所資料
- (6) 文献(三上 1971、475ページ)には、「大型の巻貝を輪切りにしたもの」として貝輪の写真(第109図)を掲げている。この記述から貝輪が二枚貝製でないことは確かのようである。掲載写真をみると、笠貝類の貝輪の可能性が高い。これについては、木村幾太郎氏も同様に指摘している(木村 1990)。
- (7) この点においてわたしの考えは木村幾太郎氏と異なる。木村氏は前田山例を縦文的範疇の遺物と解釈しているのに対し、わたしは外米要素とみるからである(木村 1987)。

《参考文献》

- 稻葉昭彦ほか 1979 「帝釈馬鹿岩陰出土の貝製品」『広島大学文学部帝釈馬鹿岩陰出土品発掘調査報告書Ⅱ』
- 新井新也 1915-16 「玉貝・海貝及び弥生式土器を混出する石器時代の遺跡」『人類学雑誌』第30卷11号~第31卷2号
- 今橋浩一 1980 「オオツカノハ型貝輪の特殊性について」『古代探査』
- 大和久彌平 1966 「柏子所跡塚-第2次・3次発掘調査」秋田県・能代市教育委員会
- 奥谷篤司ほか 1986 「決定版生物大図鑑・貝類」世界文化社
- 折尾学ほか 1972 「福岡市金隈遺跡第二次調査概報」福岡市教育委員会
- 金岡丈夫・小片弓彦 1962 「着色と変形を伴う弥生前期人の頭蓋」『人類学雑誌』第69卷3・4号
- 金岡丈夫ほか 1961 「山口県上井浜遺跡」「日本農耕文化の生成」
- 川原和人・内田律夫ほか 1989 「朝日川河川改修工事に伴う川津遺跡発掘調査報告書V」島根県土木河川課・島根県教育委員会
- 菊池実「聖棺葬」 1983 「縄文文化の研究」第9卷
- 木下之治ほか 1974 「姫方遺跡」佐賀県教育委員会
- 木下尚子 1980 「弥生時代における南海産貝輪の系譜」「日本民族文化とその周辺」
- 1988 「南海産貝輪はじまりへの予察」『日本民族・文化の生成』永井昌文教授追悼記念論文集
- 木村幾太郎 1981 「貝輪」「大友遺跡」呼子町郷土史研究会
- 1987 「菱身貝」「前田山遺跡」行橋市教育委員会、112ページ
- 1992 「貝輪と埋葬人骨」「季刊考古学」第38号、60ページ
- 清野謙次 1969 「日本貝塚の研究」
- 九州大学医学部解剖学第二講座 1988 「九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人資料集成」「日本民族・文化の生成」六興出版、11~12ページ
- 草場俊一・金子浩昌ほか 1971 「貝島貝塚」花泉町教育委員会
- 今東編・寺九重 1989 「山登貝塚」
- 隈昭志 1983 「熊本県山鹿市大通小学校出土の弥生式土器」『考古学雑誌』第69卷第1号、熊本市教育委員会
1972 「熊本市東部地区文化財調査報告書」
- 小林行雄・馬自順一ほか 1975 「大畠貝塚調査報告」福島県いわき市教育委員会
- 澤田勝大・佐藤昭則ほか 1994 「福島県猪苗代郡那珂川町大字片桐所在遺跡群の調査」中川町文化財調査報告書第33集、那珂川町教育委員会
- 湖見浩・岩崎卓也ほか 1984 「史跡中ノ浜遺跡」豊浦町教育委員会

- 七田忠昭ほか 1979『二塚山』佐賀県教育委員会・新郷土刊行会
- 正林謙ほか 1989『佐賀貝塚』長崎県佐町教育委員会
- 白井洋平 1977『原色沖縄海中動物生態図鑑』新星図書
- 高安克己・角館正勝 1989「西川津遺跡弥生層出土の貝類について」出典は川原ほか1989に同じ。
- 辻村純代 1993『古代日本における了供の発掘』『考古論集』潮見一治先生追憶記念事業会編
- 内藤芳篤ほか 1967『深堀遺跡』長崎大学医学部解剖学第一教室
- 中橋孝博 1985『金隈遺跡出土の弥生時代人骨』『史跡金隈遺跡』福岡市教育委員会
- 長峯正秀・水島稔夫ほか 1987『前田山遺跡』行橋市教育委員会
- 乗安和二・ほか 1982『土井ヶ浜遺跡第7次発掘調査概報』豊北町教育委員会
- 1983『土井ヶ浜遺跡第8次発掘調査概報』豊北町教育委員会
- 1984『土井ヶ浜遺跡第9次発掘調査概報』豊北町教育委員会
- 1985『十井ヶ浜遺跡第10次発掘調査概報』豊北町教育委員会
- 1989『土井ヶ浜遺跡第11次発掘調査概報』豊北町教育委員会
- 1985『中ノ浜遺跡第9次発掘調査概報』豊浦町教育委員会
- 橋口達也・折地学 1973『小児骨に伴ったゴホウラ製貝輪』福岡市金隈市146号棟の調査。『九州考古学』47春或秀爾『櫛文合葬論』1980『信濃』第32巻4号
- 東中川忠美・藤田等ほか 1981『人灰遺跡』呼子町郷土史研究会
- 久村貞男ほか 1980『宮ノ本遺跡』佐世保市教育委員会
- 松下孝幸ほか 1993『土井ヶ浜遺跡と弥生人』土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム
- 松本彦七郎 1919『陸前宮戸山里浜の古入骨発掘につきて』『歴史と地理』第3巻1号
- 馬口順一ほか 1966『守船遺跡』いわき市教育委員会
- 1968『小名浜一小名浜周辺の遺跡調査報告書』いわき市教育委員会
- 三上次男 1971『豆溝江流域における箱式石棺墓』『満鮮原始墓の研究』
- 森川昌和ほか 1979『鳥浜貝塚』福井県教育委員会
- 山崎純男 1976『京ノ隈遺跡－福岡市西区川島所在の占領と経塚の調査－』段谷地所開発株式会社
- 山崎純男 1990『環濠集落の地域性－九十九地方』『季刊考古学』31、雄山閣
- 山崎龍雄ほか 1992『カルメル修道院内遺跡II』福岡市教育委員会
- 渡辺誠 1969『縄文時代における貝製腕輪』『古代文化』第21巻1号
- 渡辺正気ほか 1968『福岡県伯玄社遺跡調査概報』福岡県教育委員会

小稿は1993年12月に執筆したもので、今日のレベルでは内容やデータに不足する部分がある。可能な範囲で加筆修正したが、不十分さは否めない。表2と図1では福岡県春日市門田K65の貝輪、佐賀県袖比梅坂の貝輪、愛媛県松山市祝谷6丁目遺跡の貝輪、熊本県菊池郡合志町福原出土の貝輪、以降南北方出土の貝輪が欠落している。また土井ヶ浜遺跡ではその後新たな資料が発表されているが、ここでは1993年段階のデータに基づいていることをご了承いただきたい（2005年3月）。

古浦遺跡出土の擬似餌

島根県埋蔵文化財調査センター

内田律雄

1. はじめに
2. 資料の観察
3. 「しらやき」
4. 擬似餌の類例
5. 原始・古代のイカ漁
6. 古浦遺跡の擬似餌の時期と性格

1. はじめに

昭和38年（1963）7月30日付け、当時の『島根新聞』は第二次古浦遺跡の発掘調査について次のような見出いで報道した^①。

「日本最古の弥生人 古浦遺跡 イカの擬餌も発見」

金闇丈夫先生を団長とする調査で、保存状態良好な弥生時代前期の人骨とあわせて、弥生中期層から「シカの角を長さ十センチ[中]尖部直延二センチの紡錘状に糸を通す穴をあけたもの。」という外観をし、「この下に針をつけてイカをつるが現在原下で一本づりに使っている白磁製の擬餌と寸分ちがわないところから調査団一行も舌をまいていた。」として、この骨角器をその当時まだ使われていた漁具と比較して、その機能を説明している。

その発見より二十年を経て静岡大学考古学研究室で、調査團が舌をまいたというこの骨角器と出会いうことができた。それは、発掘調査当時、鳥取大学医学部の助手として調査を担当されていた藤田等先生との出会いでもあった。藤田先生はその時の様子を次のように回顧されている^②。

「擬餌は第四層から単独で出土した。出土したときに発掘見物にきていた漁師の一人が『これはイカ一本釣用のしらやきと同じだ』といって、見物人の間で2000年前にそんなものがあるはずないと議論になり、ではしらやきを持ってくるといって走って行った。しらやき（擬餌）を見た時、余り似ているので驚いた。相違点は材質で鹿角か白い釉薬の焼き物かというだけであった。」

静岡大学でのこの擬餌との出会いは、漁具に少なからず興味を持っている筆者にとっては、感激以外の何物でもなかった。それは発掘調査に携わった人々の感動さえも伝わってくるような気さえした。もうそれだけで満足だった。

その後、藤田先生から原稿の依頼を受けたとき、自分に出来るのだろうかという一抹の不安があっ

た。しかし、イカは『出雲國風土記』にも記され、木簡資料も出土していることから、いつかは取り組んでみたいと思っていたテーマであつたので挑戦することにした。最初にこの機会をあたえていただいた藤田等先生に感謝いたします。

2. 資料の観察

出土した資料は一個体で、鹿角製である(図1)。現存する長さ10.1センチ、中央での径は 1.9×1.4 センチで梢円形。重さは20.2グラムである。鹿角の両端を削り、一孔ずつ、合計二孔をあけている。孔は径3ミリ。擬似鰯の一端は、孔の一部を残し、先端が欠けている。復元すれば全長は10.5センチほどになろう。孔の位置は端部から1センチで、孔から端部に断面V字形の溝が施してある。

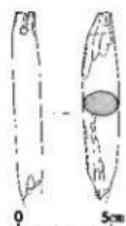


図1 古浦遺跡出土鹿角製擬似鰯

3. 「しらやき」

それでは藤田先生がこの骨角器に「余り似ているので驚かれた「しらやき」とは如何なるものなのか。しばらく、この骨角器からはなれ、「しらやき」を追ってみよう。

「しらやき」はその色調から「白焼き」=白く焼いた焼き物という意味であろう。発掘当時もこのしらやきは漁師によってイカの一本釣の擬似鰯として使用されていた。藤田先生の手元には、発掘当時、鹿島町の漁民が使用していたしらやきが数点採集されている。そこでまず漁具を収集している民俗資料館をたずねて、当地方に残る同様な資料を調査した。

山陰地方の民俗資料館には僅かではあるが他の漁具に混じってこのしらやきが保管されている。いずれの資料も大同小異であるが、よくみると微妙に形態やサイズが異なり、時期や地域によって工夫がなされてきたことが窺える(図2)。これらを形態の上から、A・B・C類の三種に大別した。

「しらやき」A類

5・6・7は鳥根町歴史民俗資料館所蔵資料。5・6は縦に長い紡錘形で中央での断面は隅丸長方形である。6は長さ9.7センチ、中央は 1.8×1.7 センチ、5は長さ11.9センチ、中央で 2.9×2.4 センチを測り、前者を大型化したもの。7は長さ10センチの円柱状。中央での径は1.8センチで両端の径が中央よりやや小さくなっている。

8は隠岐郡知夫村郷土資料館所蔵資料。「しらやき」としては最大のもの。長さ13.2センチ、中央は 2.2×2.8 センチの隅丸長方形。9は隠岐海洋自然館所蔵資料。長さ10.6センチ、中央部は1.8センチ四方の隅丸方形を呈す。10は兵庫県香住町金比羅神社資料館所蔵資料。長さ11.6センチ、中央部で 2.1×1.8 センチを測る。6や9の資料をやや大型化したものである。

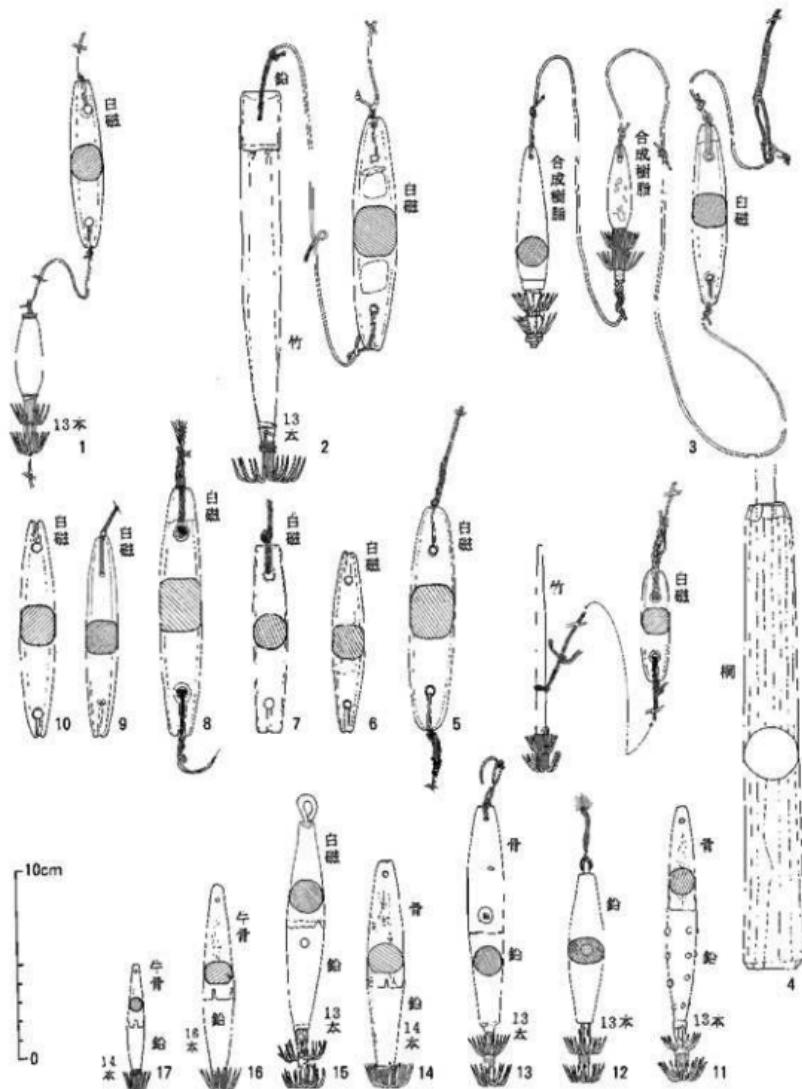


図2 「しらやき」各種 (1) : A類 (1~10) 、B類 (11~17)

1: 香住町金比羅神社資料館、2: 堺城都知夫村郷土資料館、3: 堺城都海士町歴史民俗資料館、4: 佐渡郡横川郷土博物館、5・6・7: 濱根町歴史民俗資料館
8: 墓成郡知夫村郷土館、9: 墓成郡洋浜自然館、10: 香住町金比羅神社資料館、11・12: 墓成郡西ノ島町歴史民俗資料館、13: 浜田市森根島水産試験場
14・15: 浜田市歴史民俗資料館、16・17: 香住町金比羅神社資料館

これらの資料は、地域によって若干の相違はあるが、いずれも、磁器製でいわゆる白釉がかけられている。それぞれの生産地を確認していないので不明な点が多いが、無釉の部分が一面のみか、どちらかの端部のみにみられるので、特に大量生産が行われたのではなく、他の磁器製品と同時に焼かれたと思われる。両端に近いところに孔が穿たれ、その孔から端部に向い紐をかける浅い溝が施されていることが注意される。

この「しらやき」の下方に釣針が着けられるのであるが、四ヶ所においてそのような例を確認した。図2-1は兵庫県香住町金比羅神社資料館所蔵資料で、「しらやき」の下方に四個の釣針が着けられる（図示したのは一個）。それらは同部に赤布が巻かれており、鉤部は錐型の13本、二段の釣針である。シロイカ用の釣針であるとの説明がある。「しらやき」は長さ8.8センチ、中央部は1.9×1.6センチの梢円形。図2-2は隠岐郡知夫村郷土資料館所蔵資料で、長さ12.4センチ、中央部が2.7×2.3センチの隅丸長方形の「しらやき」の下方に、長さ20.8センチ、13本、一段釣針が着けられる。釣針の同部は竹製で、一方の端は鉛錐が装着されている。この竹製の釣針には魚の切り身など餌が装着された可能性もある。図2-3は隠岐郡海七町歴史民俗資料館所蔵資料。長さ9.5センチ、中央部が1.8センチ四方、重量40グラムの「しらやき」の下方に、二つの釣針が着けられている。釣針はいずれも二段の合成樹脂製である。図2-4は佐渡郡相川町郷土博物館所蔵資料である。一本トンボと呼ばれる。長さ4.8センチ、中央部が1.4センチ四方の小形の「しらやき」の下方19.5センチに長さ12.0センチの釣針が着けられている。釣針は端部を尖らせた竹製の胸部で、10本二段である。この釣針はヒキテと呼ばれ、イカの切り身が餌として巻きつけられる。この「しらやき」と釣針は、長さ25.0センチ、径3.0センチの桐製の握り部のある釣竿に着けられ、比較的浅いところにいるイカを釣ったことが報告されている^{〔註〕}。

これら1~4によって「しらやき」の使用法が知られる。その機能は「しらやき」を島根半島部では、「シマメイカダマシ」、兵庫県香住町では「イカヨセ」と呼ばれていることからイカ用の振餌であることは明らかである。

「しらやき」B類

この「しらやき」と釣針の両方の機能をもたらすものが、B類とした図2-11~17である。このうち13は浜田市の島根県水産試験場所有資料で、長さ15.0センチの最大のものである。最小のものは17の兵庫県香住町の金比羅神社所蔵資料で長さは6.9センチである。いずれも葉巻状の形態であるが、その川央から鉤部にかけては鉛が使用されている。これは鍼を兼ねた工夫である。鉤部と反対端の半分に「しらやき」が使用されているのは益田市歴史民俗資料館所蔵の15のみで意外に少ない。多くは骨製である。そのうち金比羅神社所蔵資料の16と17は牛骨であることが確認されている。15の船部には円形の貝殻が嵌め込まれている。12は全体が鉛製であるが、川央部にやはり円形の貝

殻が象嵌されている。15以外は厳密に云えば「しらやき」とすべきでないが、便宜上ここに含めた。「しらやき」B類で注意されるのは、ところによってはツノと呼ばれているように、中央から半分を牛角や鯨骨等の動物の骨が使用されていることである。

「しらやき」C類

C類としたのは、佐渡でトンボヤマデ³¹、沼津ではサッポロビシ³²と呼ばれているものである(図3、図4)。図3-18(隱岐郡西ノ島町中央公民館蔵)は「しらやき」A類を利用したもので、一端の孔に真鍮製(?)の針金を通して固定し、二俣にした先端に釣針を差けるようになっている。図3-19~図4-22はこの種の漁具専用に焼かれたもので、「しらやき」A類を大きくしたものである。真鍮製の針金は鉛で補強するのが通例である。深いところのイカをねらったものである。このC類はB類と組合って使用される。図3-19(浜田市:島根県水産試験場蔵)はその一例で、「しらやき」B類は、骨製のものと合成樹脂製の両方が着けられている。「しらやき」A類が使用されている図3-18の資料が、C類の代用なのか、組形であるのかわからないが、かなりの効果があつたらしいことは、この種が日本海や太平洋側の広い範囲で使用されていたことによって知られる。八戸では昭和20年代になると一方で8~10木ものB類を着けて、浅・深両方にいるイカを釣るようなアサリシキも考案された³³。

4. 摳似鉤の類例

さて、「しらやき」がイカ釣具であることを確認したので、古墳遺跡出土資料を検討することにしよう。古浦遺跡出土資料(図1)は鹿角製であること以外は「しらやき」A類に酷似している。特に両端の孔から最端部への溝も同じであることが「しらやき」以前のイカ釣具であることを推定させる。図5は古浦遺跡出土資料に類似した考古資料を集めたものである。それらは、山口県篠石遺跡³⁴、福岡県海の中道遺跡³⁵、長崎県串島遺跡³⁶、熊本県沖ノ原遺跡³⁷、三重県白浜遺跡³⁸の5遺跡、13資料である³⁹。個々の遺跡と遺物については、それぞれの報文にゆずり、これらの類似遺物について古浦遺跡出土資料と比較する。

まず、類似資料の特徴についてまとめると次のようである。

ア. 時期は不明なものもあるが、今のところ古墳時代後期から平安時代の間である。

イ. 材質は鹿角か鯨骨製である。海の中道遺跡と串島遺跡では骨角器の材料となる鯨骨も出土している。

ウ. 全体に資料が少ないので、あえて形態分類すれば、a類=棒状又は中央部がややふくらむ短冊型(4・6・9・10・11・12)、b類=S字型(2・3)、c類=スプーン型(1)としておく。

エ. 両端にある孔が欠けるものが多い(3・6・9・10・11・12)。これは海の中道遺跡の報告の中で山崎純男氏が考察されているように、「孔の一方に針をつけ、一方を紐に結び、撋似鉤

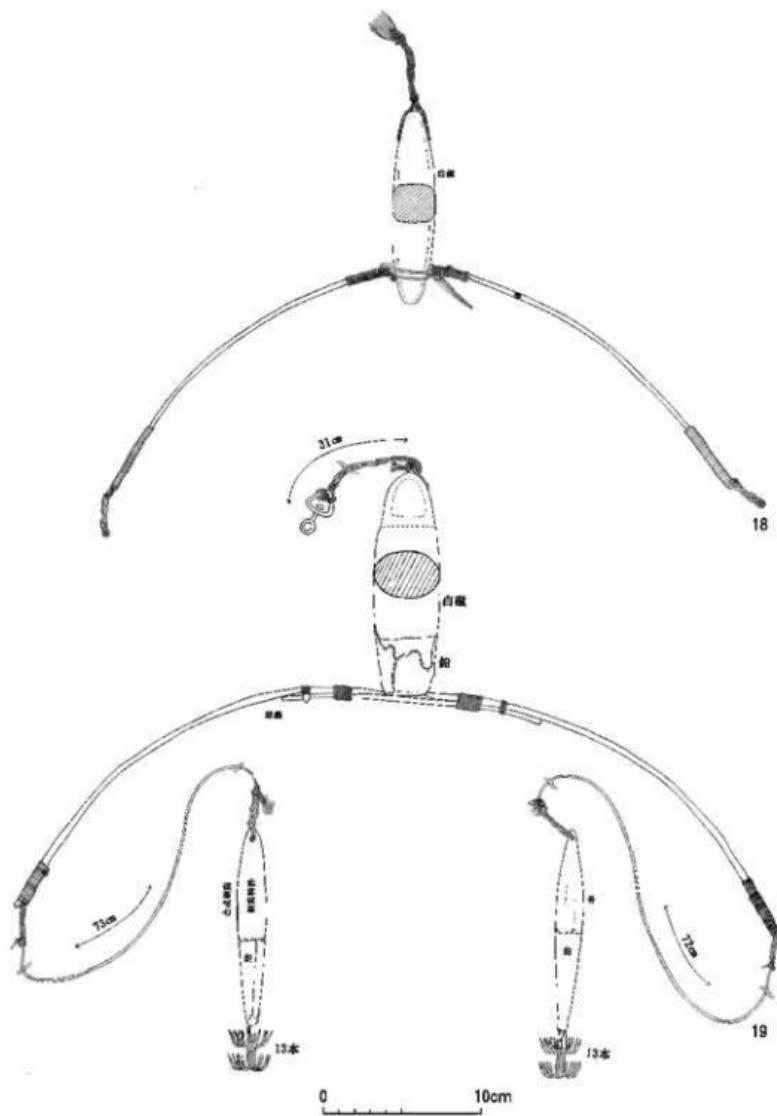


図3 「しらやき」各種(2) C類

18: 隅城郡西ノ島町中央公民館、19: 岐阜市農林水産試験場(大田市: 清水津吉)

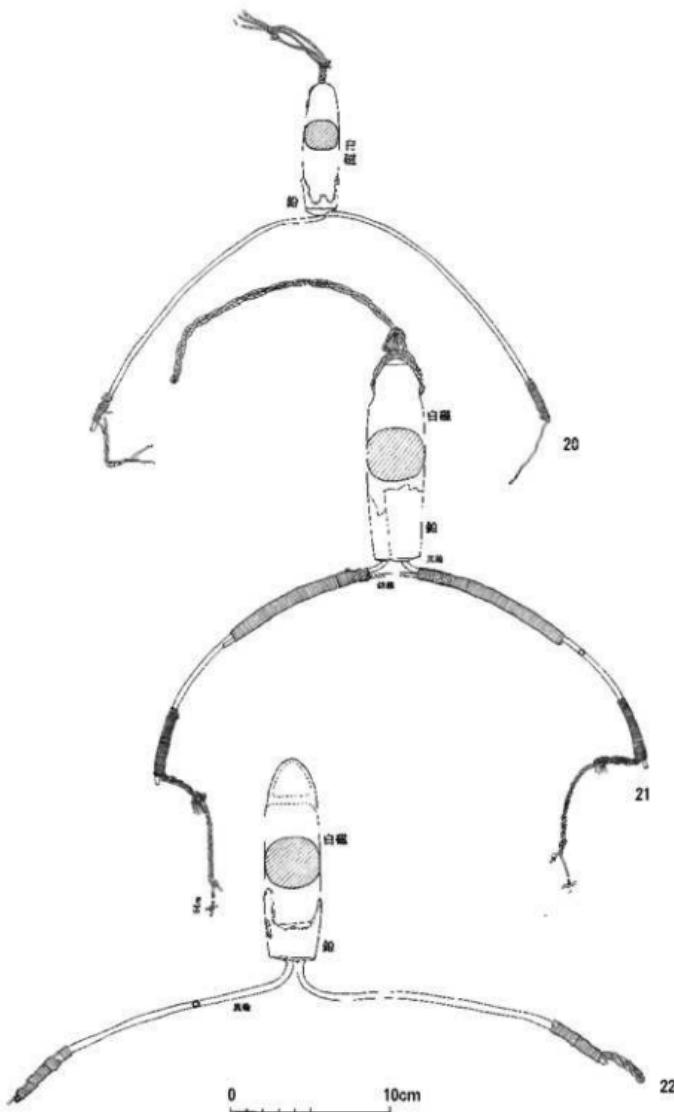


図4 「しらやき」各種 (3) C類

20：香住町金比羅神社資料館、21・22：隠岐郡海士町歴史民俗資料館

と使用された可能性が強い』ためと考えられよう。

オ、いずれの資料も海浜部の遺跡からの出土である。

カ、今のところ、出土遺跡は西日本であり、日本海側に片寄りがある。

このような諸特徴を古浦遺跡出土資料と比較すると、鹿角製であること、両端に孔があること、その孔の一方が使用時に欠けていること、形態分類に当てはめればa類となること、海浜部の遺跡からの出土であること等と共通点があげられる。しかし、「しらやき」にもみられる孔から端部にむかう溝は、類似資料には皆無であるところが異なっている。

5. 原始・古代のイカ漁

前項で検討したように古浦遺跡出土資料の類似資料（図5）は、ほぼ古代に限られる。そこで古代のイカの立地に関係する資料を古浦遺跡出土資料や類似資料と比較してみたのが表である。

『延喜式』では、若狭、丹後、隱岐、出雲、豐前から主に調として貢納されている。藤原京・平城京といった宮城や太宰府出土の木簡資料は『延喜式』に重なる。木簡資料の中で隱岐と出雲が藤原京で出土しており、特に隱岐はイカの貢納が量的に目立っている⁴³⁾。

擬似鉤も三重県白浜遺跡出土例を除けば、西海道に偏在するが太宰府の存在を考えれば、ほぼ文献や木簡資料と重なる傾向があると云ってよいであろう。

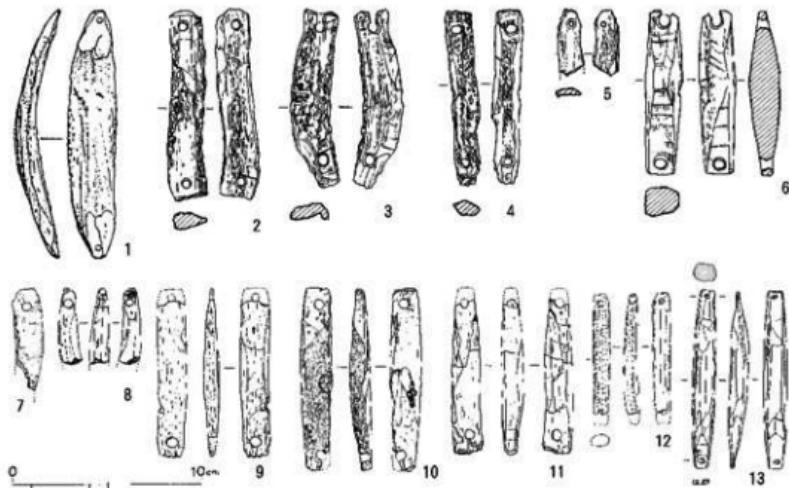


図5 各地出土擬似鉤 (1:山口櫻花石、2~6:福岡櫻花の中道、7~11:長崎県本島、
12:熊本県沖ノ島、13:三重県白浜)

イカは軟体動物であり普通は遺跡において遺存体を見ることはない。しかし、コウイカ類は体の間に厚い甲があり、縄文時代の貝塚から発見されているので原始時代から捕獲されていたことは確かである。仙台湾から三陸海岸にかけての縄文時代中期～後期の遺跡では鹿角製の鉛形釣針が偏在して出土している³³。縄文時代の釣針の中では最も今日のイカ釣針を連想させる形態である。三陸地方の縄文人はこうした鉛形釣針でイカを釣ったのであろうか。楠本政助によれば、金華山沖において実験されたところ、三十分ほどのあいだに四十数匹釣れたことを報告され、この種の釣針がイカ釣りを目的として開発されたと推定されている³⁴。イカの遺存体が残らないように、その漁具も遺物としては明確でない。但し、江戸時代の遺構とされる神奈川県の葉山御用邸内遺跡では、ここで「しらやき」B類とした、近年まで使用されていたいわゆるツノの祖形が出上している³⁵。骨角部に直接鉄製の針6本を束ねて挿入している。現存のところ考古資料として確認できる最古のツノである。

6. 古浦遺跡の擬似餌の時期と性格

以上、古浦遺跡出土の擬似餌について、考古資料や民俗資料を比較しながら検討したが、最後にその時期と性格について触れてむすびとしたい。

表

道 国	殖 営 式	木 筒					発掘資料 擬似餌(図番号)
		太宰府	平城宮	藤原宮	宮	宮	
北陸道	佐渡		—	—	—	—	
	越後	—	—	—	—	—	
	越中	—	—	—	—	—	
	能登	—	—	—	—	—	
	加賀	—	—	—	—	—	
	越前	—	—	—	—	—	
	若狭	酒・交易穀物	—	—	—	—	
山陰道	丹後	中男作物	●	—	—	—	
	但馬	—	—	—	—	—	
	因幡	—	—	—	—	—	
	伯耆	—	—	—	—	—	
	隱岐	酒	—	●	—	—	
	山陰	酒	中男作物	大賛	●図1	—	
	石見	—	—	—	—	—	
山陽道	長門	—	—	—	—	●図5-1	
	豊前	酒	—	—	—	—	
西海道	筑前	○	—	—	—	●図5-2~6	
	對馬	—	—	—	—	—	
	肥前	—	—	—	—	—	●図5-7~11
	筑後	—	—	—	—	—	●図5-12
	肥後	—	—	—	—	—	
	—	—	—	—	—	—	
	—	—	—	—	—	—	

(図5-13は除く)

まず、遺跡出土の資料について、a類=棒状、b類=S字形、c類=スプーン形に分類したが、これらはすべてがイカ釣具と考えることはできないであろう。棒状のa類は中央がふくらむものもあり、主としてヤリイカやスルメイカ類をねらった「しらやき」A類に対応させてイカ釣具としてよいと考える。S字形としたb類は全体の形がエビにも見えるので、今日、コウイカ類をねらうエビガタ、あるいはスッテと呼ばれているものに似ている。スプーン形としたc類は、現在スプーンとよばれている、マグロ、ブリ、サワラ等の大型魚類をねらった擬似餌であろう。スプーンには多くの場合、3本束ねの針が着けられる。そして、a・b・c類いずれも、孔の一方には鉄製釣針が装着されたと考えられる。資料の多くが、孔の一方が欠損しているのはそのためであろう。一種の使用痕である。くりかえすことになるが、占浦遺跡出土資料は考古資料の中では最も「しらやき」A類に近く、両端の孔から端部にむかう溝も同じである。しかし、他の資料にはその溝のみられるものはない。ここに占浦遺跡出土資料が他の資料より後川の要素があると云える。

また、「しらやき」は磁器で造られている。日本における磁器生産の開始は17世紀前半であり¹⁶、 「しらやき」を使用したイカ釣具がこれをさかのぼることはない。一方、骨角を擬似餌にしたイカ釣具は近年まで使用されていた。古浦遺跡出土資料はその材質や形態、使用痕からみて、あきらかにイカの擬似餌である。これは、「しらやき」 A類との間に、どちらかが模倣した関係にあることを示している。

「しらやき」 A類として図2-4に示した佐渡の一本トンボは明治18年農商務省農務局発行『水産博覧会第1区第1類審査報告』にも図示されているが¹⁷、その「しらやき」に相当する部分には「サダリ」として説明が加えている。それが今日残されているような陶磁器製であるのかは確かめる術がない。同報告にはソクマタも載せられているがそれらは磁器製のC類ではない。但し、明治33年発行の『新潟県水産試験場報告』には、一本トンボの「しらやき」のところにアワビの貝殻が装着したものが図示してある¹⁸。これは「しらやき」と同様な集魚機能を期待したもので、ここで図示した「しらやき」 B類にも部分的に使用されている(図2-15、12)。このようにみると「しらやき」が普及するのは近代以降のことのようである。やがて「しらやき」や骨角製の釣針は、彩色豊かな種々の形態の合成樹脂のものへ分化し、手釣はコンピューターの導入による機械化・自動釣具へと変わり、各種の「しらやき」はその役目を終えたようである。操業も季節を問わなくなつた。

「しらやき」は、特にA類としたものは、山陰地方に多くみることができる。どうやらこのA類は、山陰地方で考案され、一部は佐渡にも伝わったが、基本的にはこの地方でしか使用されなかつたようだ。その背景には佐渡と並んで隱岐という良好なイカの漁場があつたことが一番に考えられる。

このように、古浦遺跡出土擬似餌は、鉄製釣針とくみあわさったイカ釣具に相違ないけれども、

その時期は7～8世紀以降、日本海の山陰海域で生まれ、「しらやき」の出現以降に消えていったと推定することができよう。しかし、究極的には「しらやき」C類へと展開していったのであり、そこにはこの種の漁具の日本近海でのイカ漁の発達に果たした役割に測りしれないものを感じる。

山陰沖の夏の夜をかざる漁火は今も絶えることはない。

なお、最後になりましたが、資料を集成するために次の方々と関係機関からご協力と御教示をいただきました。氏名を記して感謝するだいです。(順不同、敬称略)

藤田 等、池田哲夫、山崎純男、渡辺 誠、大橋康二、松井 章、袖原恒平、柳原信也、村尾秀信、久保和士、閑 和彦、古賀信幸、柳平規子、由木進一、三田健一、島根町歴史民俗資料館、知夫村郷土資料館、隠岐海洋自然館、金比羅神社資料館、海上町歴史民俗資料館、柏川町郷土博物館、島根県水産試験場、益田市歴史民俗資料館

注

- 1.『島根新聞』昭和38年7月30日付
2. 藤田 等「島根県 古墳遺跡」『探訪 弥生の遺跡』西日本編 1987
3. 池田哲夫ほか「海府の研究－北佐渡の漁港習俗－」両津市郷土博物館 1986
4. 池田哲夫「佐渡のイカ漁 その周辺のことなど－」『漁民の活動とその習俗Ⅰ』神奈川大学日本常民文化研究所調査報告 第17集 1993
5. 神野善治「駿河湾北部のイカ釣漁」『沼津市歴史民俗資料館紀要』8 沼津市歴史民俗資料館 1984
6. 「八戸のイカ釣」八戸市博物館 1992
7. 小野忠熙「後石遺跡」「山口県文化財摘要」第4集 山口県教育委員会 1961
8. 山崎純男ほか「海の中道遺跡II」朝日新聞社西部本社・海の中道遺跡発掘調査実行委員会 1993
9. 高野喜河ほか「串島遺跡」長崎県文化財調査報告書第51集 電源開発株式会社・長崎県教育委員会 1980
10. 閑 昭志ほか「沖ノ原遺跡」五和町教育委員会 1988
11. 萩本 勝ほか「白浜遺跡発掘調査報告」本浦遺跡群調査委員会 1990
12. この他にも二三の遺跡で、見方によっては同様な骨角器と考えられるものもあるが、形態が違うので集めからはずした。例えば、二河の福荷山貝塚出土の有孔牙器（縄文晩期）と報告されているもの（清野謙次『日本貝塚の研究』1969）、若狭の浜浦遺跡出土の鹿角製有孔品（古墳前期）と報告されているもの（『若狭大飯』同志社大学文学部考古学調査報告 第1冊 同志社大学文学部 1956）等である。
13. 奈良国立文化財研究所木簡データーベースによる。
14. 渡辺 誠『縄文時代の漁業』雄山閣考古学述書7 1984
15. 楠本政助『縄文人の知恵にいどむ』筑摩書房 1976
16. 「紫山御用郡内遺跡発掘調査報告」「書陵郡紀要」第31号 1979
17. 大橋康二氏のご教示による。
18. 注4。
19. 注4。

着色と変形を伴う弥生前期の頭蓋*

金関丈夫・小片丘彦

島根県八束（やつか）郡鹿島町古浦（こうら）砂丘の埋葬遺跡は、從来古墳時代遺跡として報告され¹⁾²⁾、この遺跡から発見された人骨は古墳時代人、その人骨に見られる抜歯のあとは古墳時代人の抜歯風習の証拠とみなされた²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾。

しかし、山本助教授の報告¹⁾にもある通り、この遺跡から発見された遺物の中には、多数の土師器や須恵器と共に、少數ながら弥生土器やその破片も混っており、1948年8月と1954年7月に山本氏の同所で発掘した2体の人骨、これは從来発見された同遺跡の人骨中、原位置、原姿勢のまゝ獲られた唯一の材料であり、いずれも抜歯のあとをもっているが、2体とも土器は伴わず、1954年の1体に5個の碧玉製の小形の管玉が伴っているのみであった。しかし、この管玉は山本助教授によると、弥生時代のものとも考えられるものだとことであるから、従ってその人骨が古墳期のものであるという証拠にはならない。

このような事情から見て、抜歯風習のあとのある古浦砂丘人骨の所属する時代は、これまでの調査では、まだ決定的に明らかにされたとはいゝ難い事情にある。

しかし、日本における抜歯風習は、九州の1、2の地方の水上生活者には、近代まで遺っていたことが、近頃わかつて来たから⁶⁾、古墳時代までこれが残っていたとしても、別だん不思議はない。ことに從来の古墳時代人骨はみな、比較的上層階級者のものと見られており、これに抜歯のあとはなくとも、砂丘の共同埋葬者の如き一般庶民階級者と見られる人々の間には、なお古い風習が、同じ時代まで保たれていた可能性がないとはいえない。

そこで、われわれの教室では、この遺跡をも一度よく調べることにした。その一つの目的は、上記の、抜歯のある人骨の所属する時代を明らかにすることであったが、いま一つはこの遺跡が、少數の弥生土器の他に、非常に豊富な、各時代の土師器や須恵器を含むことは明らかであるから、古墳期における庶民の遺した遺跡として、貴重な意味を持つものであり、もし人骨がこれに伴うものだとすれば、その時代における庶民階級者の形質、その埋葬風習、その他一般の生活状態をも幾分明らかにすることが出来るかも知れぬということであった。調査には金関、小片⁷⁾の他に、教室の藤田等助手、島根大学の山本清助教授、島根県立博物館の近藤正技官、九州大学の永井昌文助教授が当たり、松江第3中学校の池田満雄教諭等の援助を仰いだ。

調査の地点は、砂丘の現存部の北端の、從来人骨や遺物の出土した地点—これはいまは砂採り作業によって消滅している—に接続した部位である。調査の結果は将来なお数回の発掘をつづけた後の詳報にゆずるが、この地点では、上層の須恵器、上部器の包含層の下に、少量の弥生前期の上器を含む層があり、原埋葬姿勢を保つ保存のいい人骨は、すべてその層の直下にあることが判明した。その上層の上部器層からも、保存不良な人骨の破片が遊離して、或いは無秩序に収容された形で出土したが、これらの骨は下層よりとりあげられた疑いが濃い。従って、從来の、この地点から発見された、保存の良い人骨は、ほとんど疑いなく弥生前期に属するものであろう、という結論になり、この遺跡に関する限り、「古墳時代の抜歯人骨」という考えは、一応否定されなければならないことになった。

いまここで報告しようとする人骨も、これと同一地点から、砂採りの際偶然掘り出されたもので、1961年11月のはじめ、かねて同所の遺物や人骨に興味をもって採集していた、同部落の小学生川上一義君から提供されたものである。その発見の位置や、包含層もほぼ明確であって、他の人骨と同様、弥生前期の人骨と見られるものである。上顎面上部の右半に、砂採作業の際に起きた破損がある他は、保存のきわめて良好な男性頭蓋で、推定年齢は熟年である。

その一般形態は、從来の同遺跡発見の人骨と大差なく、その簡単な計測値は下表の通りである。この人骨には、上顎左右犬歯の抜歯のあとのあることも、1929年発見のNo.1人骨(?)、1923年発

計測表

脳頭蓋最大長	182mm	頬骨弓幅	133mm
脳頭蓋最大幅	142mm	鼻高	49mm
Basion-Bregma高	135mm	全側面角	86°
地平周径(g1上)	513mm	上顎示数(Kollmann)	54.14
脳頭蓋長幅示数	78.02	眼窓示数(ε)	79.76
脳頭蓋長高示数	74.18	横頭顔示数	93.66
脳頭蓋幅高示数	95.07	縦頭顔示数	47.80
頭長	87mm	垂直頭顔示数	52.55
上顎高	72mm		

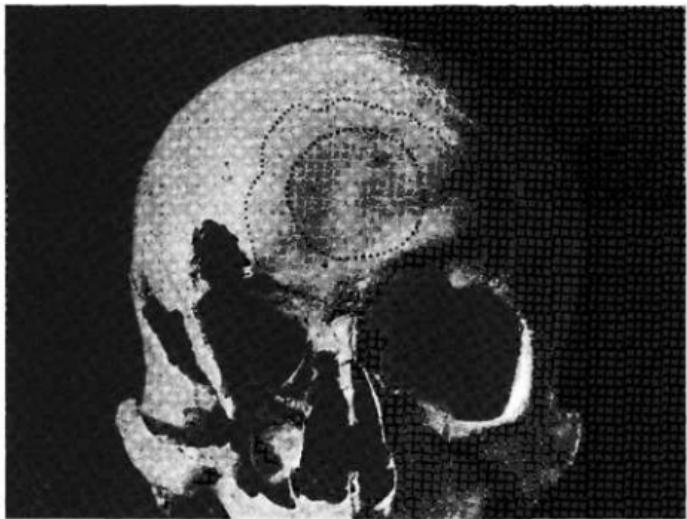
見のNo.3人骨(?)、1958年発見のNo.4人骨(?)、No.5人骨(?)、1961年発見のNo.6人骨(?)と同様である。ついでながら、古浦砂丘遺跡発見の、上顎前方歯槽部の残存する成人頭蓋14例中には、7例の抜歯骨があり、そのうちの6例が、上顎左右犬歯を抜く例だ、ということになる。

この頭骨には、前頭鱗の外面の下部に、両側の眼窓上線とその間の鼻部を基底として、上方及び両側方に凸弯を描く一つの不規則な線によって囲まれた、他とは不共通な外観を呈する、一つの特殊な面がある。正中部が最も高く、Glabellaよりその部までの弧長は65mmである。側方の凸弯部

は、左右とも側頭線に及んでいる。左右両線間の最大弧幅一面の横径は95mmである。この縁に沿うてその外（そと）に幅約10mmの腐食面が帯状にこの面を包んで走り、その下端が両側とも眼窓上縁に終わっている。

こうした縁をもつ問題の欠円形の前頭面が、この頭骨の表面の一般と異なる性状を呈する点は二つある。一つは、その面全体に、他の部に見るような顯著な一肉眼で見えるほどの一erosion部が少しもなく、一様に滑沢であること。いま一つは、その面に淡緑色の着色のあることである。

この着色は、問題の面の全体にわたっているが、部分によって濃淡があり、その部分は3区画に分かれている。そのうち着色の最も濃いのは、眉間に25mmの、正中線上の一点を中心とする、弧直径37.5mmの正円形の部分である。その境界線は著明で、規則正しい曲線を描いている（第1図の内側の点線）。この円の外を、これより淡色の帶緑輪状面が周んでいる。その面の外縁の境界線は不著名で、不規則な山入りをもっている（第1図の外側の点線）。その線の最高部は正中線上で眉間よりの弧長57mmにある。線の下端は眉間に下にわたっている。左右外側点を結ぶ横強幅は59mmである。



第3の面は、この第2面の外周をなす輪状の部で、左右両側とも、その下端は眼窓上縁に終わっている。一見しただけでは緑色の色調を呈せず、周囲の黄褐色の面とほとんど同様に見えるが、精査して辛うじてかすかな緑色の調子が見られる。この面の外周を前記の駆逐帶が囲んでいる。

全体から受ける印象は、緑色の色素源に直接に接したのは、中央の正円部であり、その周辺は、

骨面に沿うて diffuse した色素の浸潤による着色、さらにその外周は、色素よりもむしろ主としてこれに伴う何物かの液状物質の diffusion による変化であるかのように思われる。またこれらの物質が骨表面を浸潤することによって、酸性物質による外界よりの腐蝕に対する抵抗性が或る程度獲得されたものかと思われる。

以上の着色は疑いもなく銅錫によるものであって、もちろん偶然的のものであるが、死後表面の軟部の崩壊後に、皮膚上にあった円形の銅板が骨面に接着し、水酸化することによって汚染されたものと考えられる。

このような例は他にも何んではなく、近代の台湾在住漢族の老年の女性頭骨には、しばしばこの現象が見られる¹⁾。これは、布製の、幅約 5 cm の「捐君眉」と称するはしまき状のバンドを、着装のまゝ埋葬する。そのバンドの正面に、円形の銅製の飾板を着けているために起る現象である。その着色の原因が判明している例であるが、これから類推して、古浦人骨の場合におけるさきの推定は認りないと思う。そして、もしうだとすると、古浦人骨の場合にも、このような円形の銅板を固定したはしまき様のバンドの使用が想像される。台湾紗人の場合には、捐君眉は老後に至ってはじめて使用されるので、日常のバンド使用のために生ずる頭骨の deformation は見えないが、永井博²⁾の発表³⁾によると、先年われわれが鹿児島県種子島広田の弥生中期の遺跡で発見した男性頭骨には、円板形の頭飾品によると思われる、前頭骨における円形の圧痕とともに、asterion 上部における不自然的狭窄のあとのあることが認められ、はしまき様バンドの、若年時よりの日常不断の使



用が推定されている。

ところが、問題の古浦人骨においても、同じ部分にこれに類する狭窄が認められる。即ちこの頭骨には、両側とともに、側頭骨の側頭線の後方への凸縁部の後方からはじまって、頭頂骨の乳様角部を含み、さらに後頭骨の鱗部に移つて上項線の外端部にわたるまでの後頭面を含む部位が、全体として平坦となり、前頭方向の断面上における同部のふくらみを失っている。その形状の正確な記載は困難であるが、側頭骨乳様部と頭頂骨乳様角との間には、幅約 5 cm の、前後に走る浅い、短い溝が

はされ、その溝の最深部の深さは5mmに達している。この頭骨の後面観では、この部のふくらみを欠くため、その匡画線の側縁の下部は、側頭骨側頭面の匡画線が脱われ、左右の両側間は著しく狭窄している（第2図）。結局、全体として、幅約5cmのバンドを、はしまき様に使用することによって生じた、不自然な圧痕だと見れば、理解できるような形態である。但し、この程度の狭窄は、自然的にも皆無ではない。広田の場合も古浦の場合も、決定的に後天性の変形だと断言することはできないが、その程度において不自然であるかと思われる。少なくとも100例に近い広田頭骨にも、14例の古浦頭骨にも、他には見られない形態である。変形の疑いは極めて濃厚だといわなければならぬ。

こうした推定が成り立つとせば、広田の場合には殊に、他の約100体の人骨にはそうした例のないことから、その個体における特殊の頭飾法が推定される。同時に、その人骨に伴う一般服飾品が、他の例に比して格段に豊富であった等の事実から、その人が一種の特定の職分者、恐らく一種のmagicianではなかったかとの疑いがもたれる。古浦の場合にも、やはり特殊の個人であったかの疑いがあり、若年時から日常不斷に特殊の頭飾を着したというのは、広田の場合と同様に、或る特殊の職分者、恐らくはmagicianの如きものではなかったかと推定される。広田の弥生中期遺跡人の場合には、老年の女性のすべてが、その服飾品や埋葬形式の特殊性から見ると、一種の巫、南島の今日の用語に従えば神人（カミンチュウ）であったかの觀を呈している中に、このようなたゞ一人の男性の咒師と思われるものが存在している。その服飾品・咒品でもあったの豊富さが他を凌いでいる点から見て、多くの巫にまつた咒力を、この現は持つものであつたらしく、その骨格全體が、男性ではありながら極めて女性的な様相を呈していることは、そうした体质者にこそ、最も強い魔力があるとする今日の南島人の信仰¹⁵にも通ずるところがある。古浦の弥生前期人の場合には、女性におけるそうした特殊例はまだ発見されていない。ここでは男性咒師かと想像されるこの1例が見つかっただけである。別に女性的な骨格者でもなかった。

広田の変形頭骨に認められたような前頭面の圧痕は、古浦頭骨には認められなかった。着色の原因となった円形の銅板は、さまで厚いものではなく、骨の表面の形に従って曲がり得る程度の厚さのものであつただろう。

文 献

* 長谷部言人博士喜寿記念論文

- (1) 山本 清, 1954: 上傳器を主とする砂丘遺跡の埋葬例について, 日本考古学協会彙報別冊3, 19~20頁
- (2) 小片 保, 1956: 山口県八束郡恵庭町古浦砂丘遠跡発掘報告, 米子, 1~24頁
- (3) 小片 保他3, 1956: 日本古墳時代人骨の抜歯, 鳥取解剖業績, 第4編, 124~133頁

- (4) 小片 保他 3, 1957: 古墳時代の抜歯. 解剖誌. 32巻 2号付録. 5頁
- (5) OGATA,T/etc, 1958: Einige zusätzliche Beweismaterialien der Zahnmutilation bei den protohistorischen Menschen in Japan. Arb. Anat.Inst.Univ. Tottori,Heft VIII.s.449~452.
- (6) 小片丘彦, 1961: 日本古墳時代人頭蓋における抜歯例の追加. 第16回日本解剖学会(中国・四国地方会)(岡山)
- (7) 羽原又吉, 1951: 日本古代漁業経済史. 東京, 294頁. 長崎県瀬戸町の家舟(エブキ)の女性に或女式の意味の抜歯の慣行のあったことが記されており、これが近代まで伝承されていたことは国分直一教授によって確かめられた。また大分県津留の、かっての家舟の生活者“シャー”的人々にも近代までこの風習のあったことが、佐藤曉氏によって採集されている。
- (8) 金門丈夫, 1939: 台湾における墳墓骨の死後着色に就いて. 解剖. 14巻 2号. 31~33頁
- (9) 永井日文, 1961: 前額扁平のある広田弥生式人頭蓋. 第16回日本人類学会・日本民族学協会連合大会(神戸)
- (10) 国分直一教授の1960年の与那国島調査ノートより。

(鳥取大学医学部解剖学教室)

この論文は「人類学雑誌」第69巻3・4号 77~81頁 昭和37年3月に発表されたものである。

*長谷部言人博士喜寿記念論文は御注として記載してあるが、編集の都合上「文献」の項目に入れた。

ト骨談議

金 関 丈 夫

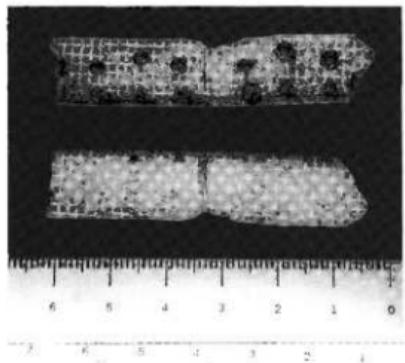
(一)

八東郡鹿島町古浦の砂丘は、弥生前期の土器を包含する厚い砂層が地上から約5mの深さに構たわり、その層から、当時の入骨が、埋葬されたままの姿勢で、多数出ています。ことし(1963)の7月20日から8月3日にかけての発掘調査で、この弥生前期の入骨は20体、従来のものと合せて、50体以上が発見されました。

これらの人骨には、同一の層のうちでも、やや浅い層から出るものと、それより深い層から出るものとがあり、伴って出る土器はいずれも弥生前期のものですが、深い方から出るものには弥生前期の土器のうちでも、もっとも古い形式の土器が伴っています。すなわちこの層の人骨は、弥生人骨のうちでも、最も古い時代の人骨と認めなければなりません。おおまかに見て、紀元前3世紀ころの人骨だということになります。

ことしの発掘で、思いもよらぬ発見があったのは、こうした弥生最古の人骨の一つである、第33号小兒骨と全く同じレベルで、人骨から1cmとは離れていない地点から、一片のト骨(ぼくこつ)を得たことがあります。このことは先般來、新聞紙上にもいろいろと報道されましたため、それ以来、ト骨とはいったい何だ、という質問を、違う人からしばしばうけますので、ここに紙上をかりて、一括してお答えすることにしました。

先ず、われわれが今度発見したト骨ですが、これは図に見るような、長さ5.8cm、幅1.4cmの小さな骨片で、その後しらべたところでは、鹿の中足骨の骨体の一部を、縦割りにしたものだとわかりました。



図版1 古浦ト骨

両端が欠けているので、もとの長さはわかりませんが、骨の中央に、裏表とも横の溝が一線刻まれており、裏側すなわち骨の内面には、これを境にして両方に、2列にならんで各列3個、合計6個ずつの凹いくぼみがあります。しかし、両方の折れた端にも同様のくぼみの部分欠けたものが見えていますから、もともと、少なくとも、16個以上はあったものです。2列のうち、一方の列はほぼ整然とならんでいますが、いま一方の列では、各3個のうちの中央の凹みが、どちらも少し列をはなれて、縁(へり)

の方へ寄っています。何かの意味があったかも知れません。

さて、これらのくぼみの内面やその周辺には、いずれも骨が焼かれて、黒く焦げた跡が、多かれ少なかれ残っています。いわゆる灼骨（しゃくこつ）のあとであります。くぼみは鑿（サン、きり）をもって穿たれたものですが、直径は3-4ミリ、底は円く、輪をのぞき込んだようになっていますから、尖った錐で穿ったものではありません。小さな丸ノミのようなものでドリルされたものです。

骨の表がわ、すなわち外面にはこのくぼみはありません。しかし縁に近いところで、内面の灼骨の影響をうけて、変色したところが數カ所あります。図の左の隅の一つが、亀裂のために、他の部分から離れています。内面では、この亀裂は、隣り合った二つのくぼみを縦につなぎます。

以上のような所見は、この骨片が、占（うらない）に用いられた卜骨であることを、明らかに示しております。卜骨としては、日本ではこれが最古の遺物であることも次のような事例によって判りました。というのは、従来日本で発見された、古代の卜骨の遺品としては、神奈川県三浦半島南下浦市のいくつかの洞窟から発見された（1951年、赤坂直忠氏報告）14例の卜骨がありますが、併出する土器から見て、弥生後期のものと考えられております。その後、新潟県佐渡の千種（ちぐさ）遺跡から発見（1952年）された一例は、弥生終末、土師期直前のころのものといわれております。すなわち、いずれも紀元3世紀初頭に近いころのものであります。もっとも、最近の八幡一郎博士よりの通信によって、昨年から今年にかけ、横須賀市人浦の洞窟から、またまた多数の、弥生時代の卜骨が発見されたことを知りました。詳しい時代は不明ですが、しばらくこれを除外すると、こんどの古浦の卜骨の発見によって、日本の卜法の歴史を、約5世紀さかのばらせることが出来る、という、たいへん興味ある事実がわかったのであります。

（二）

日本の卜骨による占法についての最も古い記載は、魏志の倭人伝の中の一節にあります。これは3世紀はじめの頃の、日本人の風俗をしるしたもの的一部分ですが、これに

「その風俗は、なにか事を為したり、旅に出たりするのに、その可否が問題になる場合には、いつも骨を灼（や）いてトして吉凶をうらう。先ずそのト骨を告げて、事を決することは、中国の令亀の法の如きもので、火によってできた亀裂（ひび）を見て、その兆（しるし）を判断するのである。」

という意味のことをいっています。後にもいうように、中国には非常に古くから、亀の甲を焼き、これによって生ずる亀裂の兆によって事を占う、いわゆる亀卜の法がありました。一般にひび割れのことを亀裂といったりする。また、トや兆の字が、その亀裂の姿からきた象形であることなどは、この方法がいかにポビュラーであったか、と言ふことを表しています。

龜甲の他に、骨を焼いてトする骨トの風もありました。新石器時代から殷（イン）の時代のはじめのころにかけては、龜甲よりも骨の方がよけいに用いられています。しかし、倭人伝の書かれた西晉（シン）のころには、専ら龜トの方が知られていたのでしょうか。ここに令龜とあるのは、もちろんこの龜トのことです。

日本の文献では、古事記の人石屋戸（アメノイワト）の段に、天照大神が岩戸にかくれたとき、諸神は「天児屋命（アメノコヤネノミコト）と布刀玉命（フトダマノミコト）とを召し、犬香山（アメノカグヤマ）の真男鹿（マオシカ）の脣をまるごと抜き、天香山の犬波々迦（アメノハハカ）を取って、占いまかわしめた。」とあります。

すなわち、天児屋命に命じて犬香山の牡鹿の脣骨と、波々迦というものを取って、うらないをさせた、というのでありますが、平安朝中期の、まだ龜トの風習が盛んであった時代に書かれた字典（倭名抄）に「朱桜」の和名を「波々迦」または「加邇波佐久良」といっています。「カニハサクラ」は櫻の字をあててもいいでしょう。とにかくハハカは桜の一種でいまではウワミズザクラ、コンゴウザクラと呼ばれる庭桜であろうということになっています。香具山の桜の花のことは、万葉集の歌の中でも、かずかず詠まれています。

さて、後世にはこうした骨うらないをするものが、神祇をつかさどる中臣（なかとみ）氏の配下のト部（うらべ）氏となるのでありますが、中臣氏やト部氏の祖がすなわちこの天児屋命なのであります。書紀の神代紀の大物主神（オオモノヌシノカミ）の崩順の条には

「天児屋命は神事をつかさどる宗源である。それで太占（ふとまに）のト事（うらえごと）をもって仕えまつらしめた。」とあります。

この文章は、同時に、骨を焼いて神意をうかがうト事が「ふとまに」といわれたであろう、ということをも教えているようです。古来の学者は、みなそのように解しています。伴信友（バンノブトモ）は、その大著「正ト（ふとまに）考」の中で、灼骨の際に生ずる龜裂のつくる模様、すなわち「兆」を、和諺では「まち」という。この「まち」と「ふとまに」の「まに」は同語であると、断定し、上の「ふと」は美称だといっています。この断定には疑いの余地はありますが、ふとまにが灼骨のト法であったことについては現代の諸学者も、疑っていないようです。

すると、古事記の固生みの段で最初に水蛭子（ひるこ）を生んだ失敗の原因を尋ねて、神意を問うことがあります。このとき天つ神は、布斗麻邇にト相（うらない）いて詔（の）りたもう一書紀の一書にはこれにも「太占」の字をあてて、ふとまにと訓ませていますとある、その布斗麻邇も、やはり灼骨によるト事であったことになります。

このように、日本の神話の発端にすでに顔を出しておらず、日本の神事の根源をなしているト法の、もっとも古い遺物が、古浦の遺跡から発見されたのであります。

(三)

日本における先史時代の、卜骨の実物は、右にいう通り、弥生時代のものが残っていますが、龜トの痕跡、つまりト甲の方は、まだ見つかっていません。文献の上からは、日本書紀の崇神天皇の第七年二月の条に、その世にあたって災害が頻発する。天皇は神慮をはかりかねて、

「なんぞ命神龜（うらへ）て、以て災いを致せることの由を極（きわ）めざらん。」と詔っています。この卜事の結果として、大物主神が、人和の三輪山に祀られることになるわけですが、それはさておき、この記事から見ますと、神龜を用いて卜する、いわゆる龜卜の法が、このころ、おそらくとも書紀編纂のころまでには、もう起こっていた、とも考えられます。しかしながら、本居宣長などのいうように、書紀の記述の一般の風である漢文的修辭にすぎないのであって、事実は骨卜であっても、中國風に「命神龜」などと書いたかとも考えられます。万葉集卷五の老病に沈む74歳の山ヒ憶良（やまのうえのおくら）が自らを哀れむ文に、「禍わいの伏する所巣りの隠る所を知らんと欲して龜卜の門、巫祝の室、往きて問わざるなし」といっているのも、これが漢文学忠愛者の作品であるだけに、やはり同じ疑問がおこります。いずれもこれだけでは、どちらとも決められません。しかし、万葉集卷十六に、車持氏の娘が、夫を恋うて、瀕死の病床で詠んだ歌があります。それに「ト部ませ、龜もな焼きそ」という句がありますから、書紀編纂のころには、龜卜の法はあったと見ていいようです。

ところが、万葉集には、龜卜の他に、骨卜に関する歌もあります。卷十四には、いつも引かれる、有名な「武藏野のト部阿燒きまさでにも、告（の）らぬ君が名、ト（うら）に山にけり」だと、同じ卷の東歌（あずまうた）に「このもと山のましばにも、告らぬ妹が名、肩にいでむかも。また卷十五の、雪（ゆき・壱岐）の連（むらじ）の宅磨（やかまろ）の死をいたむ歌に、「壱岐の海人（あま）の七手（ほって）のト合（うらへ）阿燒きて」というようなものがあります。万葉集の時代には、龜卜、骨卜、ふたつとも知られていたことが、これでわかります。後世にも、民間の神事には、これらの卜法はふたつながら遺されています。

さて、崇神朝以後における卜事を記録したものは、紀紀、祝詞、風土記などに骨とも龜ともわからず、しばしば見えております。それをいちいちここに羅列してもおもしろくありませんから、略しますが、宮廷や宮廷中心の社会では、王朝時代には、もっぱら龜卜が用いられたものようです。令議解（りょうぎげ）には、養老令の神祇伯の職掌の、「ト兆」の語の義を「トは龜を灼くなり。兆は龜を灼くときの縦横の文なり。おおよそ龜を灼きて吉凶を占うはこれト部の執業なり。」といっています。龜とのみあって、骨の字は見えません。延喜式にも、臨時祭式に「年中所用の龟甲すべて50枚を限りとなす。」などと龜卜のことはいくつも見えていますが、ト骨の料のこととは見えません。統日本紀、三代実錄などの記事も、卜法の判明するものは、みな龜卜です。

後年になっても、上朝時代の文献に見えるものは、みな龜トです。たとえば源川院御時百首（太郎百首とも初度百首ともい）に源師時の歌があります。

「かなふやと龜のますらに問はばやな、恋しき人を夢に見つるを」この「ますら」は正占（まさうら）であります。ただし、同じ集に人江匡房（まさふさ）の歌で、鹿の肩焼ききを詠んだものがありますが、これは単に占事記の古事を、引きごとにしたにすぎません。匡房は、6月と12月に神祇官で行われた「御体御ト」すなわち、玉体の向こうう半牛闘の安否をうらなう龜トの式事を「江家次第」の中にくわしく記録しています。

当時の文献としては、他にもいろいろあります。たとえば、いまいいた源師時には、保延元年（1135）に「長秋記」の著があり、龜トの法をこまかに記録しているそうです。また師時よりもわずか先輩だった藤原清輔の「奥義抄」にも、龜トの記事があり、そのうちには、自分らが龜の甲を灼くように、奥のえびすは鹿の肩骨を灼いて占う、ということを、いっているようです。

結局、平安の京では、もはや龜ト一点ばかりですが関東以北には、この時代にも、骨トの風がまだ残っていた、ということになります。どうもこの、都に龜トが盛行し、田舎に肩やきが引きつづきのこっている、ということは、後者の方が前者よりも古かった、前者は後からはいってきたものであろう、という想像の材料になりそうです。おそらくそれが事実だったでしょう。古代中国でも、ト骨よりト甲のほうがあとから流行しております。このことはまた後章に申しのべます。

（四）

さて、獸骨や龜甲を灼いてするト事は、どういう方法で行われたか、その方法が問題ですが、以上の、上代の日本の文献では、そのことのあったことを知るだけで、その方法については、ほとんど何もわかりません。

これを知るための材料としてはト骨やト甲の直接遺物がありますが、ある程度の文献もあります。ただ、日本の文献は時代が新しく、これによって古代の風を推察するのは、危険がないとはいわれません。また、直接遺物にしても、ト甲の方は、日本では古いものは残っていません。

ところが、中国の方ではト骨ト甲とともに、非常に古いものが残っています。文献にしても、ちょうど日本の弥生期に相当する時代の文献があって、直接日本のト法の説明にならなくても、非常に参考になります。

先ず文献の方ですが、尚書とか左伝以下の古い記録や史書、或いは詩經などに散見する事例だと礼記に見える、繁雑な制度を擧げることは省略して、龜トの方法を書いた、史記の龜策伝を見るにしましょう。

この伝は、史記の著者司馬遷の死後、その欠本を補って、紀元前1世紀の後半のころ、つまり、

日本では弥生前期の終わりころ、梧少孫という人が書き足したものであります。龜卜のやり方をしてきたものとしては、最も古いものであります。そのもっとも肝腎なところだけを、大略、つぎに紹介しましょう。

まず、揚子江産の龜の、当時の寸法で長さ一尺二寸のものを二十四とて、太卜官にわたす。但しこの一尺二寸というのは、天子の用で、諸侯以下になると、だんだん小さくなる、ということが、或る注釈書に見えてます。太卜官は吉凶をえらんで、その腹甲をとり、帝王が軍を発するときは、廟堂の上で、これを鑽（きりでほりくぼめる）して、吉凶を決する。

その順序は、まず清水で龜甲を洗い、いろいろのまじないをする。それから卜にかかるのですが、まず造（端・かまと）でもって鑽を灼く。鑽は金属製の錐（きり）であります。さて、このあたりから錯文、脱文があるらしく、意味がはっきりとれなくなります。しかし判読しますと、この灼けた鑽を龜甲の中央と、首側と足側とに、もみこんで、穴をほる。それぞれ3度ずつほる。それがすむと、またまたその穴のところを灼く。灼くには刷もしくは刷木を用いる。すなわち堅い木を焼いて、それを穴のところへ、あてがうのでしょうか。その中央を灼くのを正身、首側を灼くのを正首、足側を灼くのを正足という。この「正」は事の是非を問うことあります。それで伴信友はその著の「ふとまに考」に、「正ト考」の字を当てているのです。さて、これもそれぞれ3たびずつ灼く。これによって生じた龜裂の状態を見て、卜官が吉凶をきめる、ということのようです。

この、龜甲を灼く刑は、一定の植物名であるかどうかは判りません。唐の司馬貞は刑は「若木」なりと注しています。そういわれてもまだ判りませんが、さきにのべた天波々連のハハカを、日本

でも葉若木といったことがあります。学のあるものが、刑は若木なりの注を頭にもって、そんな字を充てたのでしょうか。これは余談です。

これによると、龜甲に穴をうがったために鑽を灼く。それからもういちどその穴のところを灼いて、龜裂をつくらせる、ということになります。鑽を灼く約かないを別問題とすると、龜甲に穴をほってその穴のところを灼く、というのが、この方法の根本であるようです。

なおこの他にも、龜卜の方法に関する漢代の文献としては、断片的ではありますが、孔安國が尚書の洛誥篇を注したものに「卜するには先ず墨にて龜に画がき、然る後これを灼く。兆が順なるときは墨を食す」といっています。兆は龜裂の像、食すとは墨にかさなることであります。唐代にも、尚書を注した孔穎達が、こ



図版2 陝西省漢西（レイセイ）
張家坡出土の西周時代
のト骨（牛の肩骨）

れと同様のことをいっています。亀甲を灼く前に、墨をもってこれを書き、卜兆がこれに重なることを古とした風は、日本にも近いころまであった亀卜の風です。してみると、これらの漢代の文献は、いずれも、日本の卜法をしらべる上にも、充分役に立つようです。

しかし、中国の卜法は、このような文献をまつまでもなく、非常にたくさんの実物が、発見されていて、それによって知ることができます。その最も古いものは、山東省を中心として、東にも西にもひろがっている、いわゆる龍山文化に伴うものですが、そのうち一ぱん日本に近いところから出たのは、昭和8年に、われわれが発掘した、関東州の旅順に近い海岸羊頭塚（ヤントウツ）遺跡から出たものです。それは一個の、鹿の左の肩骨ですが、山東省のものには、この時代、あるいはそれより古くから、もう獸骨、亀甲ふたつながら、用いられています。

この龍山文化の西のひろがりは陝西省から甘粛省に達していますが、最近甘粛省臨夏の大河庄や、陝西省澧西（レイセイ）の客省庄の龍山文化層から、牛の肩骨を灼いた卜骨が出ています。

龍山文化は、北支では新石器時代の最晩期であります。これが終わると、河南省では、殷（イン）文化がおこります。殷代の遺物は安陽のいわゆる殷墟（インキョ）ことに小屯部落からたくさん出ています。

輝県の褚邱や琉璃園からも、安陽と同時代のものがでています。また同じ殷代で、安陽や鄭州よりも古い時代のものが、隴海線沿線の、鄭州で発見されています。卜骨もあり亀甲もありますが、殷代のものには鑄灼だけでなく、卜骨ト甲とともに、文字を刻んだものが現れます。いわゆる甲骨文字でその字がいまの漢字の根元であり、その文が中国の記録のはじまりであることは、世間によく知られている通りです。この卜骨によって中国古代の伝説時代は、一躍して歴史時代にとびこんできたのです。

殷につづく西周時代のものは、最近、さきの陝西省澧西の張家坡から発掘されています。卜骨、ト甲とともに、文字を刻した獸類の長骨も一個発見されています。周代の卜骨の発見はこれがはじめてであります。写真に示すものはその一例で、牛の肩骨の関節部に近い部分を鑄、灼したもので、その痕は2列に並んでいます。鑄灼の前に、骨の面を削りとて、整治しています。

（五）

古代中国の、非常に多数の卜骨やト甲の遺物の実際の所見から、その卜法をうかがう、という段になりましたが、ここでは、そのうち数も比較的多く、よく整理されている、河南省鄭州の殷代の材料を利用することにしましょう。

ト骨、ト甲を出す鄭州の遺跡はその文化層が三つに分けられます。二里崗の下層がいちばん古い層で、これは龍山文化層のすぐ上になります。次が二里崗上層、そして最上層に人民公園層があり

ます。この人民公園層の文化が、安陽の小屯文化と同時期にあたります。すなわち鄭州遺跡は、殷代の初期から、後期にわたる、各時代の文化を含んでおり、そのそれぞれに卜骨（ト甲）が発見されているのです。

まずその材料を見ましょう。獸骨としては各層とも牛骨が大多数をしめ、猪（ブタ）は下層にも出るが、中層に多くて、上層ではなくなります。羊は下層、中層にわずかに出るだけで、これも上層では出ていません。鹿は下層、中層になくて、上層にわずかに現れます。すなわち、牛には変化がありませんが、他の動物は、時代によって出現数がちがっています。龜甲の方は、下層にわずか一例、中層になく、上層になると一躍して、獸骨の二倍近くの数が見えます。龜甲の使用は、龍山文化期にも既にあります（山東省人辛莊）が、鄭州の後期や、安陽のときに至って、非常に一般的になります。これは殷の後期以後の文化の一つの特徴だといえるようです。

獸骨は二里崗でただ一例の牛の頭骨があった以外は、どの動物のも、みな肩胛骨すなわち肩骨を使用しています。これはこの骨が幅が広くて使用に便利なのと、薄くて亀裂を生じやすいためであります。後世、他の骨を用いるようになったのは、肩骨の代用として、例外的に使用されたので、もともとは肩骨だったことがわかります。だから民族学の方では、このト法の一般名称をScapulomancyすなわち肩卜（かたうら）といっているわけです。龜甲の方は腹甲を用いていますが、背甲より平坦で、これを磨研して薄くするのに便利だったからだと思われます。

つぎに、これらの材料に対する加工の方法であります。一般にはいわゆる鑽、灼、すなわち骨の面に穴を掘って、その部分を灼くという方法がとられています。二里崗からはこの他に、すでに文字を骨片に刻んだものが出ていますが、このころはまだ一般化していないようです。

鑽、灼を施行する以前に、約半数は骨や甲を削ったり、磨いたりもしています。しかし後期には、この事前の加工の例は少なくなります。

鑽は1面のみに施されています。後期にわずか1例、2面に鑽された例が出ます。その用具は、二里崗から実物が出土しています。長さ5.5㌢前後の、銅製の柱状の錐で、断面の円いもの、菱形のもの、八角に近いものなどあり、その端は、刃わたり6.5-8.0㍉の直線的、あるいは弧線状の刃をもっています。直線的の刃は、鑽窓の底が平たくなり、弧線状のものは丸底になります。骨や甲には平底、丸底のくぼみが多く、他に漏斗状のものもあります。これは錐のさきが尖ったものを用いたのであります。史記の龜策伝に見るよう、穿孔の際、この鑽をあらかじめ灼いて、焼孔を作ったかどうか、その詳しい観察が報告書には記されていませんが、あらかじめ鑽を灼かないもののあったことは、鑽痕のみあって、灼痕のない例もあることから察せられます。しかし、全然鑽痕がなくて、灼痕のみというのが、下層、中層には約半数あります。肩骨の中央の骨の薄い部分では、鑽是不可能でもあり、また不必要でもあったのです。



図版3 鄭州二里崗出土のト骨

灼く前に骨を刻るのは、鑽だけではなく、鑿（サク）の方法もあります。これはノミあるいは刀で刻したもので、鄭州では上層のみに現れます。平ノミで四角な平底の溝を刻ったり、溝を刻ったりしています。安陽では薬研（ヤゲン）掘りの溝が盛んになり、骨甲に文字を刻したものは、その裏面に溝を刻んで、その部分に焼木をあてています。商代（陝西、張家坡）になると、鑽のあるなしにかかわらず、ほとんど全部に、方形平底の鑽痕があります。

最後に灼の方法に移ります。一面を灼くのが普通で、多くは鑽窓に焼木をおしあてて焼いたものですが、鑽しないで、直接骨を灼くものが、下層、中層には半数以上あります。両面に焼木をあてたものも、下層、中層にはありますが、上層のものは片面だけで、そのほとんど全部に、鑽と灼とが共存し、ことに龜甲は全部灼前に鑽されています。輝県の琉璃閣（安陽同時代）のものには、灼によって鑽孔が裏面に透っているものが多いです。また或るものは、鑽痕のみあって、未灼のものもあります。鑽灼のあとは、どこのものも、多くは密集的であります。

以上を要約すると、紀元前十数世紀のころから、中国河南省で、殷人によって行われたものは、はじめは牛の肩骨が普通で、後期になって龜甲が圧倒的に多くなっています。方法としては、灼く前に鑽するもの、鑽しないで灼くものがありましたが、のちにはほとんどすべて鑽後に灼いています。また後期には両面を灼くものが多くなっています。文字を刻んだものは、前期からすでに現れている、といったような事になります。写真は二里崗発見のト甲で、龜甲を用いたものとしては今までに発見されたもののうちで、最も古い例の一つですが、中央部と首側部に二群の鑽灼のあとがあります。足側のものはありませんが、史記の龜策伝に見た、正身、正首にあたるものかもしれません。

(六)

ついでに、殷代より以前の、北支の晚期新石器時代、すなわち龍山文化期の例を一瞥しておきましょう。さきに述べた、関東州羊頭庄の例は、鹿の肩骨ですが、漏斗形すなわち、さきの尖った鑽で穿たれた穴が3個、灼痕が4個あり、鑽痕の一つには灼かれたあとなく、また灼痕の2は、鑽痕のないところを、直接焼いたものです。反対の面には、中央部に龜裂があります。骨は鑽灼以前に、削って薄くされた、関節部に近い部分です。すなわち殷代の初期、中期のものと、ほとんど変わりありません。

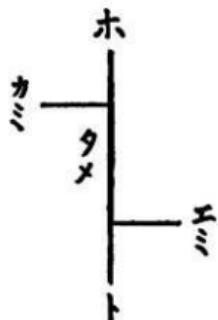


図1 マチの形（対馬の亀甲）

陝西省客省庄のものは、発見された六個の卜骨が、すべて羊の肩骨で、これには鑽痕のあるものが一例もなく、みなじかに焼いています。この羊の肩骨のじか焼き、という方法は、その周辺に居住した、遊牧民のモーコ人のやり方そのままであります。元史には、太祖ティムシンが、羊の肩骨を焼いてトったのちに事を行ったことを載せています。皇宋事實類苑（巻四十九）には、この西戎の羊卜の方法が詳細に記録されており、バラスという人が、1771～1801年にペーテルスブルグで刊行した「モーコ民族誌集成」にも、この民族の羊卜の風俗が、さらに詳細に記されていますが、客省庄の卜骨の事例は、その地方性、その時代性、その材料と方法の点からみて、このモーコ人の羊卜と古代中国の卜法との間に、何らかの関連のあったことを、強く暗示するものようです。

さて、中国のことはこのくらいにして、日本の方へ移りましょう。日本の宮廷では、武家時代に入って、神祇官がしだいに衰微してきます。卜部の如きも、いつのころからとなく、失業状態におちり、亀卜のやり方は忘れられてしまった、と人々は考えていました。もっとも、保元の長秋記（既述）だと、大永の清原宣賢の神代卷抄などには、卜部の秘伝を記載したものがあるようです。しかし、その実技は滅びた、と思われていたのです。

ところが、元禄9年（1696）対馬の社家で藤原齊延（マサノブ）という人が「対馬岡ト部亀卜次第」という本を著わし、その方法を詳記したのですが、対馬にはなおその実技の遺っていることが、これによって知られたのであります。これに力を得て、伴信友は、対馬に伝わる、これ以外の伝書や伊豆八丈島や同國白浜の伊古奈比咩神社、常陸の鹿島神社、越後蒲原郡の伊夜日子神社など、諸国に伝わる記録を集めて、その正卜考の資料としたのであります。元米、宮廷の卜事には、対馬、壱岐、伊豆の卜部が微されたことは、延喜式の臨時祭式にも「その卜術の優長者を、伊豆五人、壱岐五人、対馬十人とする。在都の者は、その卜術がよほど抜群のものでない限り採用しない」と定めてあるくらいですから、対馬や伊豆に、その遺風が長くのこったというのは、うなずけることであります。

さて、ここでは信友の正卜考に引かれた資料をもとにして、江戸時代まで行われていた、亀卜の方法の大略を要約しましょう。その方法は、先ず亀の腹甲を斧や、刀子で削って薄くする。これを晒して脂をぬく。その一面にマチを掘る。あるいはマチ形を墨書きする。これに沿うて、ハハカの木の端を燃したもので灼く。ハハカは皮つきの庭桜を、箸のように削ったものであります。この木は燃えやすくて、煙が出ないとあります。灼くときは息を吹きつけながら灼く。灼くかたはしから、

兆竹（さましだけ）で水をそそぐ。兆竹は竹べらのさきを三つ折りにした即製の匙のようなもので、これで水をたらすのです。灼熱されたところが、急に冷却するので、亀裂が生ずるわけでしょう。最後に、その反対側の面に墨を塗ると、亀裂の線に墨が入って、これを拭うたあとにその姿がはっきりと残る。これをト食（うらばみ）という。前述の漢代の食墨とは文字は似てますが、意味はちがうようです。この兆（しるし）を、神庭人（さにわびと）すなわちト人が見て、吉凶をうらなうのであります。

以上の用具のうち、斧、刀子、甲掘り、兆竹などの名は、みな延喜式にト事の用具として挙げられていますから、以上のやり方はよほど古くからの遺風であったことがわかります。

吉凶をどう占ったか、と申しますと、はじめに刻され、或いは画かれたマチ（これをタメともいう）の各部に対する、亀裂の方向によるのでありますが、そのマチ（タメ）の形は、対馬のものは挿区のようなもので、その各部に、区中のような名称があります。たとえば、ホの部分の亀裂が、縦線の延長の上にできると、ト人は「ホ、ウルワシ」と告る。これは吉です。亀裂が左に開くと「ホ、サラビタ」（凶）と申します。すべてこのように、きまたト辞があります。袖中抄に引く藤原仲丈の歌「ははか火に誓える亀のト牛やタメとはしるは君が逢へるか」だと、源師時の「思いかね亀のまさらに言問へば、タメと合ひたりと聞くぞうれしき」などは、みなこのト法を詠みこんだものであります。漢の食墨は、つまりこの「タメと合ひたり」の意味であります。

さて、この方法は、中國の鑽、灼の法とは異なっています。むしろ鑽、灼あるいは漢代の文献に見る墨、灼の法に近いものですが、殷や西周の例に見るような文字を刻む代わりに、マチ（タメ）形を刻したり、描いたりしたもの、とも考えられます。

右のような亀トの法は、対馬には今なお遺っている、ということです。ただし対馬では、亀トの他に鹿の肩灼きも知られていたらしく、元文2年（1737）の対馬豆駿（つづ）村の領主杉村采女の書付けにそのことが記されているそうです。

（七）

さらに驚くべきことは、万葉集に武藏野のト部肩焼こうたわれその存在が平安末期のころまでは、奥のえびすのわざとして書きとめられている、その関東の地に、亀トならぬ鹿の肩トの風が、最近に至るまで、引きつづき遺っていた、或いは今も遺っている、ということであります。

元禄9年（1696）の「一宮巡詣記」という本に、上野国甘樂郡貫前（ぬきさき）神社の肩トの記事が見えているそうですが、正ト考によると、鹿の肩骨を短冊形に截り、灼いた錐をもってこれを穿孔する。その難易によって、来るべき一年間の吉凶をトす、とのことです。亀裂による方法とは異なっていますが、恐らくその前には鑽、灼そして亀裂を見た時代があったものでしょう。貫前神

社の肩卜はいまもまだづびているそうです。

また「神伝鹿ト秘事記」という本には、武藏国多摩郡の阿伎留神社で、鹿の肩骨に、墨でマチカタを書き、火に焼いて、亀裂の如何によって、年間の吉凶を占う、とあるそうです。これは明治以後にすたれたとのことです。同岡豊島郡ト方神社の神体が、鹿の肩骨を焼いたものだったとの、荷田東満呂の談話も、正ト考に引かれています。この御神体も、そう古いものとは思われません。

これらの近世の文献に見る肩焼きにも、墨、灼の方法によるものがあり、この点では、近世の肩卜の方法と異なるところはないようです。しかし、日本古代の肩卜の方法がその通りであったとは申されません。

日本古代の肩卜、すなわちフトマニの法を知るには、古代の遺物を見るより他はありません。その材料として、從来知られていたものは、さきにもいう通り、三浦半島南下浦市B洞窟から出土ものと、佐渡の千種から出土るものがあります。材料はいずれも鹿の骨ですが、肩骨の他に、南下浦市のものは、肋骨をも利用しています。

南下浦町里沙門B洞から出土た、肩骨には、骨の表裏に、二列にならんだ、小さいやや不規則な円形の灼痕があり、それを連ねて各一線の亀裂が入っています。肋骨の例でも、片面に灼痕のあるものがあります。また間口洞のものにも灼痕のある肩骨が出ています。いずれも面を削ったあとや、鑽痕や整痕は見えないようです。すなわち、無整治、無鑽、無整、有灼、有兆という部類にはいります。

千種のものは一個の鹿の肩骨で関節部に近い部分ですが、面は削られて、いわゆる整治されております。その面に3個の灼痕が一列にならんで、一本の亀裂が、それらを結んでいます。3個のうちの2個には表裏に透る孔があり、その縁の状態を写真で見ますと、鑽せられたものではなく、刀子の如きもので、整られたものようです。有整治、無鑽、有整、有灼、有兆の部類と見られます。これらのタイプの肩卜は、いずれも中国古代の遺物に見えたものであります。

さて、これらの弥生・晩期の肩卜よりも、さらに四、五百年は古いだろう、と見られるこのたびの、古浦遺跡発見の肩卜の手法を見る順序になりました。まずその材料は、鹿の中足骨です。このような長骨が利用された例は、中国でも稀れであり、日本でははじめてであります。骨は二つに割られ、その縁には鋭い利器で削ったあとがあります。これは一種の整治と見ていいようです。ただし骨面を削って、薄くしようとしたあとは見えません。それから、骨の表裏ともに、横線が刻されています。これには灼痕が伴っていませんから、中國式の整痕とは別のものと思われますが、これに対する亀裂の位置や方向が、問題になったものと思われます。

次ぎに鑽痕と灼痕とは、ほとんど完全に重なっています。その灼痕は、鑽後に同所を灼いた、というよりも、鑽（キリ）を焼いて、焼き穴を作った、そのために生じた灼痕のようであります。こ

のことは、錯痕に近接して、縁の立ち上がった個所の内面に、キリの横腹が当たって、そのためにできた凹みが見えますが、その面がひどく焦げ、その焦痕は骨の外面にまで及んでいる、という状態からも、想像されます。つまり、鑽灼同時に施行され、龜策伝に見るような2度臼の灼は行われなかったのであります。一方の端の方に2個のくぼみを結ぶ割れ目がありますが、地圧による破損と思われます。龜裂すなわち兆ではないかも知れません。要するに、有整治、有整、有鑽灼のタイプと見られます。2度臼の灼のあとがないのは、或いは最初の鑽灼だけで臼的を達したために、省略されたものか、とも思われます。この骨が長骨であること、稀有ですが、中国では絶無ではありません。

(八)

古浦砂丘から発見された卜骨は、日本では最も古い時代のものであり、弥生前期の文化に伴うものであります。すると、大陸古代における同様の風習から見て、これは弥生文化に伴って、大陸から渡来した風習だと見ていいでしょうか。現に骨を鑽するための鑽は、金属製品、恐らくは青銅器だった、と思われます。というのは、古浦のこの文化層には、後にもいうように、青銅器の存在が知れているからであります。この青銅器は、弥生以前の文化にはなかったものであります。

本居宣長や伴信友は、日本の骨トは、神代の遠いむかしからあった日本本来のもので、後世に及んで中國の龜トの風が輸入され、これにとて代わったのだ、と考えました。しかし、これら人びとの時代には、中国に、骨を灼いてする卜法のあったことはまだよく知られていなかったのです。それで、龜トは中国、骨トは日本、という風にはっきりと割り切って考えることができたのです。宣長などは、龜トをとり入れたために、日本固有の骨トの衰えたことを歎いているのであります。

しかし、以上に一わたり見わたして来たところから結論しますと、日本の骨トの風習はやはり、弥生文化とともに伝來した、大陸文化の流れの一枝だと考えるのが、もっとも当然だ、と思われます。大陸では、前にもいう通り、関東州の新石器時代晚期の例が、地域的には日本に一番近いものであります。そのころはまだ大陸でも龜トの風は、少なくとも一般的ではなかった。その、骨トを土体とする風が、朝鮮半島をへて、弥生の初期に日本に入った、と考えるのがいいようです。ただし朝鮮の遺跡からは、卜骨はまだ一例も発見されていませんが、これは将来発見の可能性があることと予測できます。日本に龜トの風の入ったのは書紀や万葉集の歌のできた、奈良朝あるいはその少し前のことと、骨トと龜トとは、渡来の時期が別々であったのではないでしょうか。壱岐や対馬には、神功皇后の朝鮮川兵の際、龜トの術がかかる地から伝來した。それが両島の卜部の起源だ、との伝説がありますが、これはもとより信用の限りではありません。

最後に、これを利用した例について、考えて見ましょう。万葉集の車持氏の娘や、山上憶良の歌

や文に見るように、その時代には個人的の問題の解決に、これが利用され、職業者すなわちト部氏の門を叩く、ということもあったようですが、後にはもっぱら宮廷における匡家の大事、聖体の安否というような事件、また地方では、神社を中心とした社会の、集団生活に関する問題に利用されたもの、と考えられます。個人問題の方は、恐らく陰陽師の活躍によって解決されることに、後世ではなってきたのでしょうか。なにしろ陰陽の方では方術を以って運命を変えることができるという、利益があったのですから。

古浦遺跡をのこした人びとは、この骨をどういう風に利用し、誰がその事に当たったのでしょうか。この考えを最後に加えて、筆をおくことにしましょう。

先ほどの調査で、この古浦の弥生前期の文化層から、一体の特殊な人骨の出たことは、すでに学界にも報告しました。それは額（ひたい）のまん中に、直徑3.5㌢くらいの、銅製の円板の痕のこった、男性の骨でしたが、いろいろな点から、恐らくは当時の呪師（マジシャン）であったろうと考えたのでした。当時のマジシャンは、今日の神官の如く、単に宗教的儀式を司る、というのではなく、神事はすなわち政治でもあった時代でありまして、呪師はその属している集団の、統率者でもあったのです。古浦の当時の集団の大きさはわかりませんが、恐らく各世代に一人の呪師がいて、これを統率していた。ひたいの銅飾は、その権力のシンボルだった、と思われるのです。その集団の大事を決定するのに、こうした呪師が、骨を灼いて神意を卜した。その卜辞が決定的の施政方針になったことが想像されます。

こうした呪師と思われるものの遺骨は、今年度の調査でも1体発見されています。ひたに緑色の銅斑がのこり、この遺跡から出土した他の人骨には例のない、上質の玉（ギョク）製の勾玉（まがたま）や、これも上質の管玉（くだたま）を、この遺跡の場合としては、比較的多く身につけていました。そうした特殊の人骨が、ト骨発見の地点と同じ層で、しかも2倍とはなっていないところから見出されたのです。

以上のように推定することが可能ならば、古浦発見の一片のト骨は、いまから二千数百年前の、古浦の漁民社会、ひいては、当時の日本の地方小集団の社会構造を知る上にも、また、大きく見て、日本の神道の形態の核心をきわめる上にも、意義ある貢献をもたらすものだ、ということはできないうえですか。

一完=（松江市雜賀町山口医大教授、国際人類学会常任委員）

この金関丈夫先生の「ト骨談議」は1963年（昭和38年）8月25日から9月1日にかけて、鳥根新聞に8回にわたって連載されたものです。当時先生から頂戴した新聞の切り抜きを資料として使用しました。本文にはペンで誤植の訂正と僅かな加筆が見られ、また、冒頭欄外に「藤田等君 一浦

半島のは もと猪骨と発表 斎藤忠にしたがい鹿骨とした、と肉太のペンの書き込みがあります。

各項は、縦書き、1行15字、112～172行で書かれ、各項毎に井桁文様の中に、ト骨談義の題目が配されて（一）～（八）の番号が付けられている。最後に先生の住所と職名があるが途中は省略した。また、編集の都合上横書きにあらためた。また、図版3は鄭州二里崗出土のト甲の写真が挿入されていたが、良好な図版が得られなかったので、同遺跡出土のト骨の写真と差し替えた。

先生は当時、山口県立医科大学解剖学教室に勤務されていたが、単身赴任で、宇部市の研究室に寝泊まりされ、週末には松江市の御自宅に帰省されていた。「ト骨談議」発表当時、藤田は鳥取大学医学部第二解剖学教室に勤務していた。

（2004年7月 藤田 記）

第10章 総括

層位

古浦遺跡は風成砂丘上に立地している。砂丘の活動期には砂の堆積は激しく、休止期になると堆積は停滞し植物が繁茂し有機物が堆積する。人間の活動がそれに加わるとさらに変化が生じる。砂丘は風雨によって移動し再堆積を繰り返し、雨によって浸食され谷を形成する。古浦遺跡は海岸線に最も近い砂丘の前面の急傾斜地を避けて、後背緩傾斜面に形成されている。

調査は4年継続したが、トレチを設定したのは第1次調査と第2次調査の一部期間のみで、調査の大部分は包含層上に堆積する数メートルの白色砂層を除去し、階段状に掘り下げた後に調査を行った。そのために層の観察は方向性を欠くことになったが、崩落しやすい砂層に設定するトレチより深い位置まで層位を観察することができた。層は南北方向ではほぼ水平を保ち、東西方向では西（海側）から東（内陸側）へ傾斜している。断面の色は乾燥・日照の程度、有機物・貝粉の混入の度合、再堆積によって変化する。

F区東壁断面図（第6章、図6）では、第1層赤土混じり粘土層、第2層有色斑点を交える白色砂層、第3層灰黒色砂土層、第4層白色砂層（上半部有色斑文ある白色砂層、下半部純砂層）、第5層黒色砂層を確認することができた。24号人骨は第4層の下半部に埋葬されている。

B3～C東南壁断面図（第6章、図4）では、第1層黒褐色砂土層、第2層淡黒褐色砂土層、第3層黄褐色砂層、第4層茶褐色砂層、第5層白色砂層で構成されている。第1層と第2層の間に小範囲ではあるが白色砂層が間層として存在している。

第1次調査で設定したトレチA-4～9区北壁（第6章、図5）では、第1層黒褐色砂土層、第2層赤褐色砂土層、第3層暗褐色砂層、第4層白色砂層、第5層黒色砂層、第6層白色砂層と連続している。

再堆積の可能性の少ないF区を中心に考えると、第5層黒色砂層にあたる層は他の地点では確認作業を行わなかったが、砂丘の基層として安定した状態にあると考えられる。

第4層白色砂層は弥生時代前期から古墳時代の大部分の埋葬が行われた層であり、貝粉が多く混入し基本的に有機物の混入は認められないが、調査区の南東部分では有機分の混入が認められた。しかしこの層は各地区で確認され、最も安定した層である反面急速に堆積が進行した層でもある。

第3層の灰黒色砂土層は極めて薄い層で短期間に形成されたと考えられ、B-3～C東南壁では確認されていないが、A-4～9区北壁では第5層黒色砂層として存在している。

第2層の有色斑点を交える白色砂層は、B-3～C東南壁では石塊が多く存在する第3層黄褐色

砂層が基本的に該当し、第4層の茶黃褐色砂層は有機質の含有の程度によって識別された可能性が強い。A-4~9区北壁の第3層暗褐色砂層がF区第2層に該当すると考えられる。この層もまた砂丘の活動期に形成された。

第1層赤土混じり粘土層は他の地区では確認されない層である。しかし、B-3~C東南壁の第2層淡黒褐色砂土層、A-4~9区北壁の赤褐色砂土層が層位的に該当する層と考えられ、B-3~C東南壁の第1層黒褐色砂土層、A-4~9区北壁の第1層黒褐色砂土層は再堆積の可能性が強い。様々な山土遺物からすると砂丘上での生活は相当活発であったと考えることができる。

最終的な層位は第1層上に堆積する無遺物層の純砂層を除外して整理すると、

第1層 黒褐色粘質砂土層

第2層 茶褐色砂層

第3層 灰黑色砂土層

第4層 白色砂層

第5層 黑色砂層

に分類することができる。

土器

古浦遺跡で出土した土器は表面採集品を含めて弥生土器、土師器、須恵器である。縄文土器は確認していないが層位的には第4層白色砂層の最下端か第5層を広範囲に調査することによって発見できる可能性があると考えられる。

弥生土器は前期・中期上器については埋葬に供献、または埋葬儀礼に関係して埋蔵された土器が基本であって、第4層白色砂層中で主に出土している。供献された土器は2号人骨小兒（H輪右6個・左8個）の置石に伴う前期壺型土器1点と66号人骨の立石近くで出土した中期壺型土器のみである。この他に単独で出土した前・中期上器、砂利群に伴って出土した前期土器で後葉の上器が量的に多く、前葉に遡る可能性がある土器はF区砂利層から出土した壺型土器1点で、中葉の土器は表面採集土器を含めると前葉より量的には拡大している。前期弥生土器は量的には少ないので前期後葉の土器が主体で、完形に近い状態の土器がある。中・後期土器は前期上器よりも一段と量的に少なく、第4層白色砂層中で完形に近い形で数点が出土し、第2層茶褐色砂層では筒型土器が出土している。第4層白色砂層、第2層茶褐色砂層から多くは破片で出土している。後期土器は小片で出土し直接埋葬に伴う土器はない。後期土器では畿内様式の土器がみられる。また、注口土器の注口部が第1層から出土している。全体的に供献・埋葬儀礼に伴う上器以外は小片が多く、量的にも少なく砂丘上で生活をしていたとは考えられない。埋葬に供献された土器は前期後葉・中期中葉の土

器である。単独出土する上器が埋葬儀礼に伴うのであれば、埋葬は単純に前期埋葬とのみはいえない。

上部器は第2層を中心に出土し、石組造構の下層から5世紀中葉の土器が出土し、石組造構上面を中心に5世紀中葉～後葉の上器が多く出土している。A区第2層茶褐色砂層で発見した粘土の貼り床住居跡は5世紀台の生活の場が出現したといえる。6～7世紀の上部器は第1層黒褐色粘質砂上層・D区で多く出土している。器種も多様で生活面としての砂丘を考えなくてはならない。

須恵器は1点の古式須恵器把手付楕の小片が出土しているが、それ以外は第2層茶褐色砂層の石組造構の上面から出土する5世紀後半の蓋壺・壺が少量出土しているし、6世紀の須恵器もまた数点出土している。最も多量に見られるのは第1層黒褐色粘質砂土層で、6世紀から7世紀の生活用具が土師器とともに大量に出土し、砂丘面での生活・生産活動が活発に行われていたことを物語っている。またD区の土器溜め状造構は砂丘における生活の一端を物語っている。

層位と時期

埋葬・土器との関連からすると、第4層白色砂層は前期前葉から中葉に墓地としての利用が始まったがそれは極めて稀な状態で、前期後葉から中期中葉にかけて急速に堆積が進むなかで墓地として利用された。それは埋葬に伴う地上標識がこの層の中に埋没していることから知ることができる。

中期中葉に埋葬された86号人骨の列石・立石は第3層灰黒色砂上層に一部が埋没している。これは中期中葉以後に灰黒色砂上層の堆積が開始されたことを物語っている。灰黒色砂土層は薄く、場所によっては確認できない層である。そのことは極めて短期間に形成されたことを物語っている。

第2層茶褐色砂層には石組造構が構築されている。石組造構上面から出土した土器と石組造構下層から出土した上器が接合できたのは、石組造構の構築に際して掘削が行われたことを示しており、石組造構の構築の時期が5世紀中葉以後であることを知ることができる。その意味では第2層は5世紀を中心に堆積した層と考えることが可能で、また石組造構下層から第3層茶褐色砂層の下端から第3層が、弥生中期後葉から古式土師器の段階に堆積した可能性が強い。また占墳時代の埋葬がこの層の下端から第4層の上端にかけて存在することも指摘できる。第2層茶褐色砂層自体は急速に堆積が進んだことを物語っており、この層自体は広範囲に存在している。

第1層から生活に直接関係のある造構は出土していない。しかし、有機物は多く含まれ生活面であることは否定できない。層としても安定しており極めて緩やかに堆積が進んだと考えられる。50・62号人骨に関連した上器から第1層を生活面とした人々、または第1層形成直後に埋葬が行われたことも否定できない。

石組遺構（図1）

古浦遺跡における最大の構築物で、第2層茶褐色砂層中に構築されている。石組遺構は調査区の東寄りA-1区で第1次調査で発見され、第3・4次調査で引き続き出土し、埋葬人骨分布図（図2）の南東端66号人骨上にまで達している。調査期間中にも砂取りが行われており、第3次調査の石組遺構の一部が崩落していたことからも、砂取りが小規模な形で休み無く進行していたことを物語っている。

石組遺構全体図（図1）でも明らかなように、各年度毎の石組遺構に間隙があり、完全に連結することができなかつたが全長約20.6mにおよんでおり、未調査部分の南北方向に伸びる可能性をもつていて。また山本清の1948年（昭和23年）の調査でも該当する層に多くの石塊が存在することが示す（第4章図2参照）されており、また小片保の1956年の調査でも第4層に自然石の並列していることが指摘されている。これらのことから佐陀川河畔近くまで約65m前後の長さに構築されていた可能性も考えなくてはならない。

石組遺構は、第2層中に構築されている。第2層は遺跡全域で安定した状態で存在し、砂丘の活動期であることは層の厚さ・観察から考えられる。また、第2層茶褐色砂層を掘削して構築している。そのことは一例ではあるが石組遺構下層から出土した上器片と石組遺構面上から出土した土器が接合できたことによって説明できる。

石組は砂丘の傾斜面（約20°～30°）に対して22°から35°の傾斜を保ち、傾斜の上方、西（海側）に向かって構築している。基本的には下辺に大型石材を横位置に置きその上方に石塊を敷き並べている。積み上げたというよりも斜面に貼り付けた場合で、凹凸突出部の周間に張り巡らされている貼石の情況に類似している。

石組遺構の上面からは5世紀中葉から後葉に比定される土師器や須恵器が多く出土し、6世紀台の須恵器が極めて稀に小片で、人骨もしばしば放棄された状態で出土している。このことは構築の時期が少なくとも5世紀後葉に遡ることを物語っている。

石組遺構について埋葬に伴う構築物であるとの見解があるが、傾斜の上面に向けて構築することは、一辺5～10m前後の方形の埋葬遺構

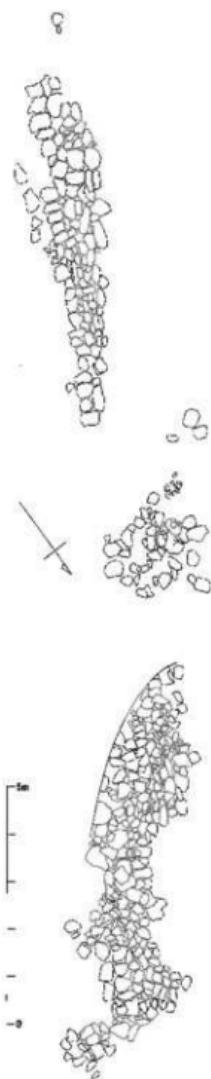


図1 石組遺構（1961・1963・1964年）

を想定しても遺構上面を傾斜した状態で放置したとしても相当量の労力を必要としたであろうし、埋葬遺構の上面を水平に保たなくとも吹き寄せる砂を除去する事は困難を伴ったであろう。一辺が全長21m弱の埋葬遺構を想定することは困難であるし、調査区域においては石組造構が屈折した可能性は皆無であった。考得るのは砂防のための石組造構で、降り積もる砂を排除しながら保守したと考えられる。南西方向に延伸する可能性は強く、また北東方向に伸びる可能性を示していることも否定できないとなると、砂防堤の可能性はさらに強くなるといえる。この砂防堤の維持管理は膨大な作業を必要としたことはいうまでもない事である。A区東端部における住居跡（工房跡）の存在は砂防の必要性を示すものではないだろうか。

鹿角製擬似鉢

擬似鉢に関しては既に特論で内川律雄が論証しているので再度触れないが、出土層位は7章図版118で明らかなように第4層の上半部で部分的に認められた淡黒色層の小さな窪みから出土している。周辺で弥生中期土器が出土しているが直接的な関連は認められなかった。民俗例の「しらやき」と同一の形態を持ち、恐らく磁器「しらやき」の祖形であり、内川が説くように山陰独自に発達したイカ釣り擬似鉢であることは誤りあるまい。内川は磁器「しらやき」が出現した7～8世紀以後に消滅したと考えている。第4層自体が弥生前中期から主に後葉の埋葬、主に弥生前期後葉の埋葬が見られ、また上半部では弥生中期中葉、古墳時代の埋葬も確認されているので出土層位から時期を断定することはできないが、時期的には弥生中期から古墳時代前期の可能性をもつ資料と考えられる。今後の出土例の増加を待ちたい。

ト骨

ト骨の詳細については第3次調査、金闇丈夫「ト骨談議」のなかで詳細に論証しているので再度触れない。30～34号人骨幼小児埋葬が集中する西南端の33号人骨の西南部、出土層位は第4層白色砂層の中位で出土した。周辺に何らの遺構も遺物もなく単独の出土であり、底の左足骨を半裁して利用している。先の人骨は副葬・供獻した上器は存在しないが目輪を着装した32号人骨や臼小玉を伴う弥生前期、恐らく後葉の埋葬である。このことがト骨の年代を直接説明する事にはならないが、一つの蓋然性を与えることは否定できない。

埋葬

墓域 調査期間中に調査した人骨は総数49体（仰臥屈葬29・仰臥屈葬？7、仰臥伸展葬6・仰臥伸展葬？2、不明5）で、調査期間外で記録のあるもの仰臥屈葬1・仰臥伸展葬1、上半身のみで埋葬姿勢が不明の例1体、記録のない人骨は6体である（表1参照）。記録にない人骨には保存状

態などから弥生人が含まれていることは明らかである。

人骨は南北20.6m、東西10.6mの範囲（図2参照）で出土しているが、これは単にこの区域が調査対象に選ばれたからに過ぎない。記録に残る人骨も砂取りで発見され連絡を受けて調査したり、偶然人骨の出上に出会ったり、発見した人骨を保管して提供を受けたものも含まれている。

分布には濃淡があり調査区域の中央部分から南西方向に集中している。ことに仰臥屈葬・仰臥葬？では幼小児（29～34・38・43号人骨）埋葬がある地区が集中度が高い。この部分では29～31が頭位をほぼ同じ方向に採り、間隔も等しい距離を保ち、西に近接する29号人骨が外部施設としての置石をもつ他は何らの標識もない。砂丘活動の活発なこの時期の埋葬としては方向性と一定距離を保っているのは、死亡が時間的に集中した可能性が高いと考えられる。また重複したり、44号人骨（男性・老年）と46号人骨（？・幼児）が近接して頭位を同じくして埋葬され、その上部に一部散乱しながらも山上した45号人骨（女性・成年）もある。25号人骨（？・乳児）のように26号人骨

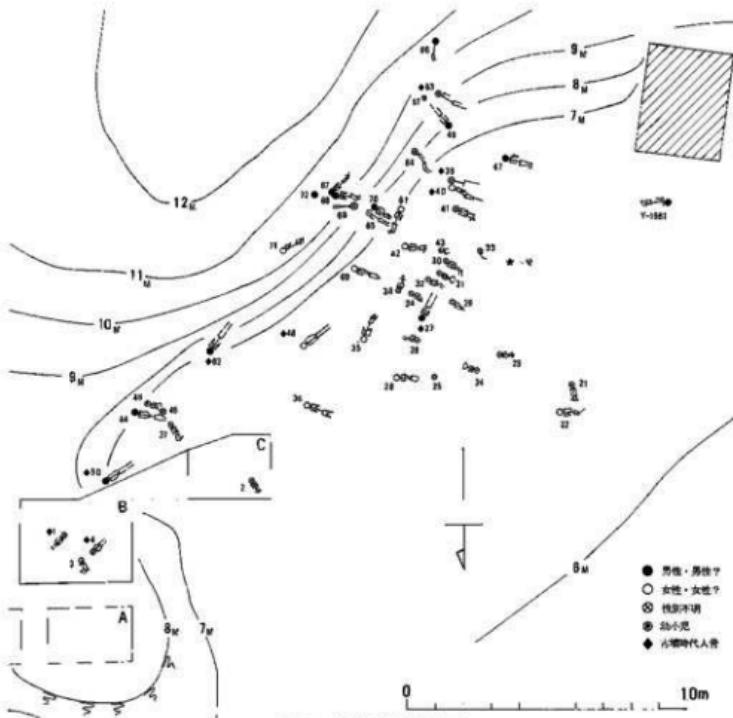


図2 埋葬人骨分布図

表1 古墳遺跡出土人骨一覧 (1961~1964年)

No	性・年齢	埋葬姿勢	埋葬方位	副葬品・供獻土器	族	鑑	推定身長	頭面レベル	備考
					(cm)	(cm)			
2	?・小兒	仰臥屈葬	E45°S	貝輪左ハイガイ 6 右輪左ハイガイ 8	-	-	-	-	-
3	?・乳兒	仰臥屈葬	S35°E	-	-	-	-	-	-
1	?・小兒	仰臥伸展葬	N40°R	有孔円盤型骨製品 1	-	-	-	-	古墳時代
4	?・小兒	仰臥伸展葬	N35°E	-	-	-	-	-	古墳時代
21	?・幼児	仰臥屈葬	S5°E	碧玉製管玉 2 (左右) 貝輪右半部	-	-	711.6	4~5歳。青斑(貝 輪右半部)	-
22	女・青年	仰臥屈葬	E5°N	-	C (C, I, L, J, C)	152.6	+695.4	-	-
23	?・幼児	仰臥屈葬	E	貝輪左ハイガイ 4	-	-	+664.3	1歳	-
24	?・幼児	仰臥屈葬	N60°W	貝輪左ハイガイ 6	-	-	690.9	2歳 ハマグリ 2	-
25	?・乳兒	散乱?	-	-	-	-	+765.0	26号人骨列石上にあ り。6~9ヶ月。	-
26	女・成年	仰臥屈葬	E8°S	-	C C	144.6	+693.1	半円形に列石。青石 あり。	-
28	?・幼児	仰臥屈葬	N68.5°E	貝輪右ハイガイ 5。 貝輪左T2.306側	-	-	670.3	1歳	-
29	?・幼児	仰臥屈葬	S56°R	貝輪右オクタゴン 3. 左ハイガイ 2. 貝小玉 2	-	-	+676.4	2~3歳。青石 4。	-
27	男・成年	仰臥伸展葬	N35°E	-	C C	170.8	+675.9	古墳時代	-
30	?・小兒	仰臥屈葬	S12°E	貝小玉 2.	-	-	645.4	8~9歳	-
31	?・幼児	仰臥屈葬	S19°E	貝小玉 198.	-	-	639.4	2~3歳	-
32	?・幼児	仰臥屈葬	S30°E	貝輪左ハイガイ 5. 貝小玉 25.	-	-	+643.4	4~5歳	-
33	?・幼児	仰臥屈葬?	S11°W	-	-	-	+642+α	3歳	-
34	?・幼児	仰臥屈葬	S19°E	貝小玉 36.	-	-	625.4	2歳	-
35	女・成年	仰臥屈葬	N19°W	碧玉製管玉 2 (左右) 側面部	C (C)	C (C)	155.5	+631.2	-
36	女・老年	仰臥屈葬	E24°S	-	C (C)	150.8	+667	-	-
37	?・幼児	仰臥屈葬	S23°E	-	-	-	653	青白 1 (右側頭部) 青白 3. 4歳	-
38	?・乳兒	仰臥屈葬	N58°E	-	-	-	+623.4	-	-
41	?・若年?	仰臥屈葬	N63.5°W	-	-	-	+625.9	東枕方に配石。12歳	-
42	女・成年	仰臥屈葬	E20°S	-	C I.C	152.2	+611.9	-	-
43	?・乳兒	仰臥屈葬?	N32°W	-	-	-	610.4+α	-	-
44	男・青年	仰臥屈葬	E11°S	碧玉製管玉 1 (左前) 側上方 (A面)	C L, L	C C	163.8	+609.6	-
45	女・成年	仰臥屈葬?	E20°S?	-	-	-	+638.1+α	頭面骨なし。	-
46	?・幼児	仰臥屈葬?	E9°S	-	-	-	+610.1	2歳	-
47	男・青年	仰臥屈葬	E13°S	-	C C	-	+655.6	-	-
49	男・成年	仰臥屈葬?	E47°S	碧玉製管玉 1. 碧玉管玉 ?	C C	C C	-	+694.9	列石 1. 青白 1. 砂 利。青白
51	?・?	?	?	-	-	-	-	-	-
39	?・?	(仰臥伸展葬?)	(E3°S)	-	不明	-	680.4	古墳時代?	-
40	女・成年	仰臥伸展葬	E30°S	-	不明	-	+630.4	古墳時代	-
48	女・若年	仰臥伸展葬	N50.5°E	-	C -	-	+673.7	古墳時代	-
50	男・老年	仰臥伸展葬	N52°E	-	-	-	+701.4	古墳時代	-

No	性・年齢	埋葬姿勢	埋葬方位	副葬品・供獻上器	抜 歯	推定身長 (cm)	頭頂-ヘル (cm)	備 考
番外1	男・成年	?	?		T ₁ C	-	-	新聞に包んだ状態。 時期不明。
番外2	?	?	?		-	-	-	足根骨のみ。
60	女・老年	仰臥屈葬	N67°W		不 明	147.1	+578.4	青斑(頭部)。
61	女・成年	仰臥屈葬	S24°W	(C) C	(C) I C	147.9	-617.1	青斑1・ハマグリ
64	?・?	仰臥屈葬?	E47°S		-	-	-654.4	遺存状態不良。
65	?・小兒	仰臥屈葬?	E45°S	發玉(下顎 骨右側)、石器1	-	-	-633.4	10歳。70と重複。
66	男・老年	仰臥屈葬?	N22°E	盞1(中期胎生十箇)	C	-	-605.4	立石1・立石器2。 L形石1、支柱中間
67	男・老年	仰臥屈葬	N35°E		不 明	167.2	-579.9	68と重複。
68	男・老年	仰臥屈葬	N86°W		C	163.7	+572.4	青斑1。67と重複
69	?・成年	?	W7°S		不 明	-	+669.9	足根骨は原位置。他 は散乱。頭骨なし。
70	男?	熟年	E45°S		不 明	-	1615.9	65と重複。
71	女・熟年	仰臥屈葬	N60°E		C	-	1574.8	
72	男・熟年	?	?		C	-	+640.4	頭骨のみ。
62	男・成年	仰臥伸展葬	N35°E			161.4	1620.6 青斑2。古墳時代	
63	?・成年	仰臥伸展葬?	E30°S		T ₁ I ₁ C(I ₁)	-	1677.8	古墳時代?。遺存状 態不良。
山本田	男・熟年	仰臥屈葬	W?		I ₁ I ₂ (I ₁)C	-	?	青斑。1962.3.14調査。
藤田	?・?	仰臥伸展葬	N46°E		I ₁	-	-	55骨なし。骨盤・下枝 骨頭位置。古墳時代 上半身のみ。1962.7. 笠岡調査。
近藤1	女・成年	?			C I ₁ C	142.7	?	
113IV	男・熟年	?	?		I ₁ C C	-	?	
1401	男・成年	?	?		C ?	-	-	青斑(前頭部)
1410	男・老年	?	?		不 明	165.5	?	脊椎癒合。
1411	男・成年	?	?		C C	160.5	?	
20	男・熟年	?	?		不 明	-	?	青斑(前頭部) 安達 池澤氏採集。

(I₁：中切歯、I₂：I₁の側切歯、C：犬齒、P₁：一小臼歯)

(女性・成年) の列石上に放置された人骨、また69号人骨(?)・成年) のように足根骨は原位置にあり、他の骨は散乱し頭蓋骨がない人骨がある。番外2人骨のように足根骨のみが正常な位置を保って他の部分の骨がない例、重複する65号人骨(?)・小兒)・70号人骨(男性?)・熟年)、67号人骨(男性・熟年)・68号人骨(男性・熟年)がある。埋葬時期の時間差があるとしても、墓域としての認識がなくては広範囲の砂丘ではどの地点でも選ぶことが可能であり、重複は避けうることと考えなくてはならない。

仰臥伸展葬(6体)・仰臥伸展葬?(2体)は屈葬に比べて数が少なく、記録として残っている人骨が1体ある。分布も散漫で埋葬も南北方向を軸にしている場合が多い。特に重複することもなく、北西部で1号人骨(?)・小兒)と4号人骨(?)・小兒)が近接して埋葬されている例がある他は2~4mの距離を保っている。また藤田が1962年に偶然調査した人骨は砂丘の最高所に近い位置

に埋葬されており仰臥屈葬が選んだ地域よりも一層分散した状態を示している。

1949年山木清は調査によって仰臥屈葬人骨1体（第4章図2・図版1）を調査している。佐陀川左岸に近い調査区で出土した人骨は古浦遺跡発見の人骨1号であるが、この調査は第4章調査の歴史でも触れたように、佐陀川左岸の道路に面した砂丘の宅地化に伴って遺物が出土し、人骨が何十体と発見されたことが遠因となっている。この人骨の出土層、出土状況などの詳細は不明であるが、山本の調査によって仰臥屈葬人骨が発見されたことは弥生人埋葬の可能性を窺わせるに充分である。調査地点から約45m地点での人骨の出土はこの砂丘が広範囲に墓地として利用されていたことを物語っている。勿論この埋葬と今回調査した墓域とが直接関係があり墓域が連続していたとする必要はない。しかし、仰臥屈葬を埋葬姿勢とする墓域が存在していたことは否定できない。恐らく村共同体単位の墓域が砂丘内側の緩斜面に点在していたと考えなければならない。

埋葬姿勢 古浦遺跡出土の人骨の埋葬姿勢が基本的に仰臥屈葬と仰臥伸展葬に二分できる。仰臥屈葬は埋葬に伴う副葬品、供獻土器から弥生時代の埋葬であることは否定できない。しかし、弥生中期中葉の埋葬である66号人骨（男性・熟年）は地上施設としての立石・立石基礎・列石・供獻土器を伴っているが、人骨の遺存状態が悪く埋葬姿勢が明らかにできないが、地上標識と人骨埋蔵の深さを考えると、下肢骨を立て曲げた屈肢状態での埋葬是不可能である。盛土をして埋葬することは可能であるが列石は地上標識として生きたとしても、立石は埋没する可能性が高い。その意味でこの中期中葉の埋葬は仰臥伸展葬である可能性が高い。出土人骨で弥生時代の人骨でありながら埋葬姿勢に？を付した埋葬は仰臥伸展葬の可能性があり、中期埋葬の可能性を持っている。

仰臥伸展葬は数的に少なく副葬品としては、1号人骨（？・小児）に伴う有孔凹盤型骨製品のみである。しかし50号人骨（男性・熟年）・62号人骨（男性・成年）に関連して、供獻土器・須恵器・土師器が出土している。これらの土器は第1層に包含される上器で50号人骨は第2層茶褐色砂層の下端から出土し、6世紀後半の須恵器、6世紀後半～7世紀の土師器、62号人骨では弥生後期後葉、上器・須恵器は5世紀末から7世紀末の広範囲な時期の土器が伴っている。このことからすると、後期古墳時代を過らない時期の埋葬といえる。これ以外の人骨には伴出した土器はないし、第4層白色砂層の上部から出土している。伴出した上器は見られず、墓壇も確認されていない。このことは古墳時代の人骨でありながら第2層の形成途中で埋葬された可能性を考えられ、50・62号人骨より古い時期の埋葬と考えなければならない。

古浦人骨の埋葬姿勢は弥生時代前期後半を中心に仰臥屈葬が、中期中葉以後は仰臥伸展葬の可能性が強く、古墳時代埋葬では仰臥伸展葬が一般的であると指摘できる。

埋葬水準（図3） 表1にある頭蓋骨頂水準を基礎に作製したのが、古墳・弥生時代人骨埋葬水準である。頭蓋骨が消失している場合は埋葬水準を基準とした。年度毎に調査した人骨を記載して

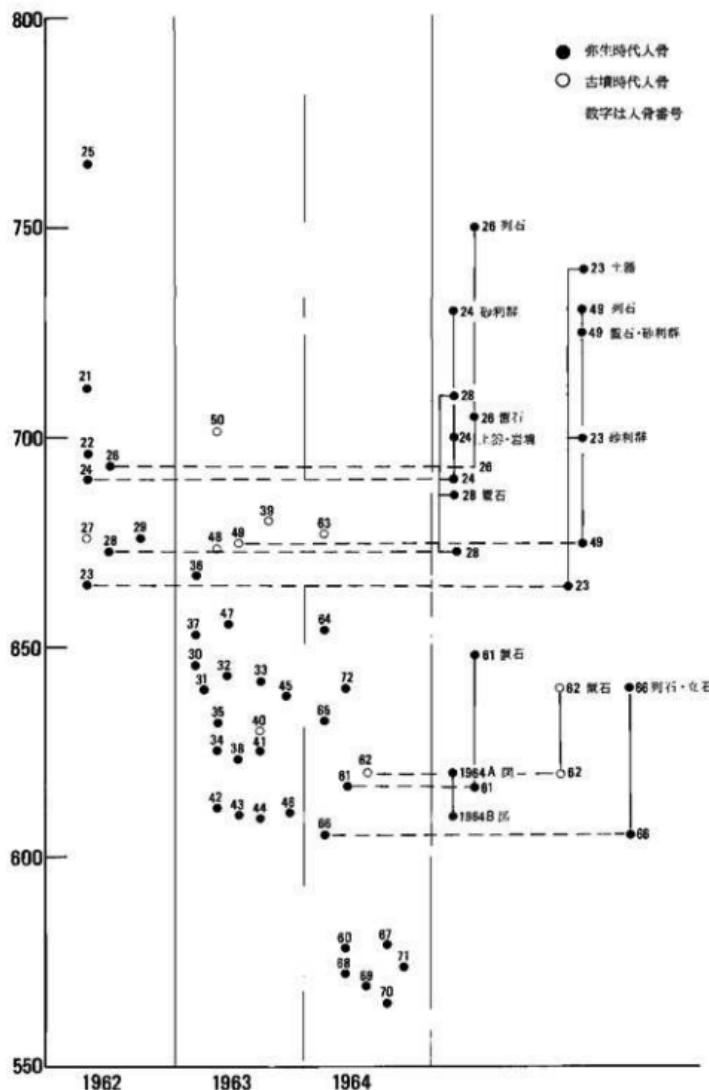


図3 古墳・弥生時代人骨埋葬水準

いるが、1961年第1次調査に関しては基礎水準が異なり、水準基礎杭が抜き去られたために補正することができなかったので記載から除外した。第1次調査で出土した1体（古墳時代2・弥生時代2）の人骨の埋葬水準は、7mより僅かに低い水準であったと考えることができる。

人骨の埋葬水準は、調査年度を追って深くなっていることが指摘できるが、それは調査区が全体に南東方向に向かい、砂丘の緩傾斜面を東に追う形になったためである。1964年度の5.7m前後の人骨群はその代表的な例である。

全体的に古墳時代人骨は浅い位置にあるといえるが、62号人骨は古墳時代人で第4層上半部から出土して深い位置にある。それは出土地点によるもので、最終年度の調査としては最も北に位置しているからである。50号人骨は第2層から出土した唯一の人骨で古墳時代後期人と考えることができる。1962年の埋葬水準とはほぼ似た水準であるがこれも調査地点を勘案すれば理解できる水準である。

図3の右端に列石・置石・砂利群・供獻土器の埋置を表している。また砂利群に伴う土器の出土水準を表した。古墳時代人骨で置石を伴う唯一の埋葬であるが、埋葬水準と置石の差は小さい。置石が地上標識として置かれた—埋葬時の地表を示しているとすると、墓壇の深さは頭蓋骨の高さを加味しても30cm程度である。

弥生時代の人骨に関しては、人骨と地上標識の関係は30cm前後が基本である。49号人骨のように置石・列石まで50cm、23号人骨と上部の砂利群から出土した上器との関係も図示したが、埋葬に直接関係のないものであることを説明するに十分な位置関係である。むしろ砂丘が発達する時期は様々な要因で地表は東西に傾斜しているものの、平坦でないことを示しているとも考えられる。25号人骨は26号人骨の列石上に放置された人骨で、本来の埋葬水準は26号人骨とほぼ同様の埋葬水準であったと考えなければならない。

埋葬姿勢と年齢構成（表2・3・4参照） 弥生時代人骨の埋葬年齢は表2に示した。実年齢は永井昌文による分類を基準とした。総数34体、男性8・女性8・不明18体である。不明の殆どは若年以下の少齡層で幼児11体が圧倒的な数である。熟年の多いことが指摘できるが、女性の場合成年の占める比率が高いことは出産に伴う死であろうか。

古墳時代人骨（表3）は10体で性別・年齢不明が4体であることが大きな比重を占めており体数

表2 弥生時代人骨の性別・年齢別構成

年齢	乳児	幼児	小児	若年	成年	熟年	老年	不明	計
性別									
男	0	1~5	6~11	12~19	20~39	40~59	60~	-	8
女	-	-	-	-	1	4 (3)	-	-	8
不明	1	10 (1)	2	1 (1)	-	4	3	-	18
計	1	11	2	1	5	10	-	3	34

() は?の数。実年齢は永井昌文分類

表3 古墳時代人骨の性別・年齢別構成

		表3 各項目別入院の性別								
		乳児	幼児	小児	青年	成年	老年	老年	不明	計
性別		0	1~5	6~11	12~19	20~39	40~59	60~		
	男					2	1			3
女						1				2
不明						1			4	5
計		1	1	1	1	4	1	1	4	10

萬年合註永井門文分類

表4 埋葬姿勢不明人骨の性別・年齢別構成

性別	年齢		乳児	幼児	小児	若年	成年	熟年	老年	不詳	計
	0	1~5	6~11	12~19	20~39	40~59	60~				
男					2	3	1			6	
女						1					
不詳								2		5	
計						3	4	1	2	12	

実年齢は水井昌文分類

の少ないこと、埋葬年代に聞きのあることが考えられるので、問題を指摘する材料とはならない。また、埋葬姿勢不明の性別・年齢別構成(表4)についても同様なことがいえる。

埋葬方位（図4・5・6） 弥生時代人骨（成年～老人）埋葬方位（図4）は、頭位を東南方向、中でも東南東の例が多い。逆に北西方向を示すものは散漫に分散しており、北東2、南西1例で、男性よりも女性の方が分散度は高い。弥生時代人骨（乳児～幼児）埋葬方位（図5）では、東南方位を探り、どちらかというと南南東を示すものが多いことが指摘できる。北西方向は2、北東3例である。弥生時代全体を通じて南東方向を探る場合が多いことを指摘できる。

古墳時代埋葬については、例数として少なく、時期的に幅広く考えなければならないが、緩斜面に直交する例の多いことは分布の項で触れた。しかし、頸位（図6）を北東に探る例が多く、南東位は2例である。その意味では弥生時代よりも時期を越えて方向性をもつ

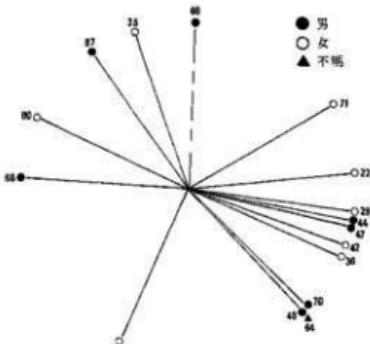


図4 弥生時代人骨（成年～老人）埋葬方位

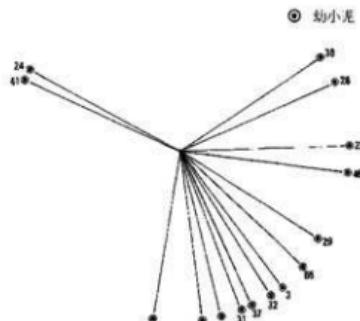


図5 弥生時代人骨（乳児～若年）埋葬方位

ているといえる。

風習的抜歯 古浦の風習的抜歯については既に春成秀爾「抜歯」『弥生文化の研究』8 85頁 1987年雄山閣で紹介している。本書でも第8章で中橋孝博・永井昌文によって論じられており、成年・熟年に出現頻度が高いことや、抜歯型式が山口県土井ヶ浜に比較して縄文的色彩が強いこと、さらに下顎切歯を抜歯した例があり、西日本の縄文晩期～弥生前期に盛行した型式が認められるしながらも、古墳時代人骨の可能性のあることを指摘している。

表3は埋葬姿勢・性別・年代別の抜歯をまとめたもので、弥生時代人は基本的に仰臥屈葬・

仰臥屈葬？の埋葬姿勢をとるものと、供獻土器で時期の明らかな66号人骨（仰臥伸展葬？）で、仰臥伸展葬・仰臥伸展葬？の埋葬姿勢をとるものを古墳時代人骨として取り扱っており、抜歯型式については「日本民族・文化的生成」2 11～12頁1988年 六興出版によった。

弥生時代人で抜歯があるのは、男性成年1・熟年5例、女性成年4・熟年3例である。男性成年の出上数は1体であるから100%の出現率である。男性熟年は熟年？を入れて7体で5例の抜歯があるので、出現率は71.4%である。ただし、72号人骨は頭蓋骨のみで埋葬姿勢は不明で、抜歯については上顎左右の大歯？とされている。女性は成年4体、熟年も3体全てに抜歯があり出現率は100%で、極めて高い出現率である。抜歯不明とされるのは4体で、男性・熟年2（67・70号人骨）と女性・老年（60号人骨）の3体である。抜歯が認められないのは性別不明・若年？（12歳）のみである。また、45号人骨には頭蓋骨が存在しなかった。

古墳時代で抜歯が認められるのは、男性・成年（27号人骨）・女性・若年（48号人骨）と性別不明・成年（62号人骨）で、抜歯不明は女性・成年（40号人骨）、性別・年齢不明（39号人骨）である。抜歯が認められないのは男性・熟年（50号人骨）・男性・成年（62号人骨）で、どちらも後期古墳時代の人骨である。

埋葬姿勢不明には頭蓋骨のない人骨51・69（性別不明・成年）号人骨・番外2号人骨があり、抜歯は男性・熟年2・成年2体に認められ、抜歯がないのは男性・熟年（50号人骨）1体のみである。抜歯不明は男性・老年・熟年に各1体づつ認められる。

弥生時代の抜歯型式は、男性・成年（49号人骨）では上顎左右の大歯（C）、熟年では上顎左右

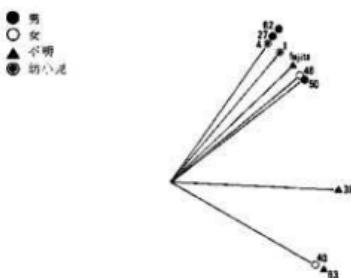


図6 古墳時代人骨埋葬方位

の犬歯の抜歯（44・68・山木Ⅲ号人骨）が基本で、66号人骨では右上顎犬歯、47号人骨では左上顎犬歯の抜去の可能性が考えられている。さらに上顎犬歯の抜歯に加えて、44号人骨では下顎左右の中切歯（I₁）、山本Ⅲでは上顎左右の側切歯（I₂）の抜歯の可能性が考えられている。

女性の成年では、上顎左右の犬歯（C）の抜歎（26・35・42）、61号人骨は上顎左右の犬歯抜歎の可能性が考えられ、下顎の左右犬歯の抜歎が行われている。26号人骨では下顎左右の犬歯も抜歎されており、上下顎の左右犬歯の抜歎は26・61号人骨に認められることになる。また42号人骨では上顎左側切歯（I₁）の抜歎が行われている。熟年では36・71号人骨で上顎左右の犬歯の抜歎の可能性が考えられ、22号人骨では上顎右の犬歯の抜歎と下顎左右の犬歯、側切歯、中切歯の可能性が考えられている。

表5 埋葬姿勢・性別・年齢別の抜歎分類

性別		男	女	不明
年齢	年齢			
若年	若年	C (49)	C (26) C (35) I ₁ C (42) (C) (61)	
成年	20 39	C (44) (C) C (47)	C (66) (C ₁ , I ₁ , C) (C) (36)	
既婚	40 59	C (68) C (I ₁) (I ₂) C (山木)	C (71)	
乳母	若年	C (48)		
既婚	成年	C (27)		
研究	不明			
若年				
成年		I ₁ C (山木) C (34)	(C) L ₁ L ₁ (C) (63)	
既婚	熟年	C (72) C (65) C (10)	C I ₁ I ₁ C (山木)	

注1. 中切歯、L₁ 側切歯、C一大犬歯、P 小臼歯
() は可操作性あり。() 内番号・人名は人骨別を示す。
※抜歎式は「日本民族・文化の生成」2 1988年六興出版によった。

古墳時代人骨では、若年（12～19歳）で上顎右犬歯の抜歯（48号人骨）があり、成年では上顎左右の犬歯の抜歯（27号人骨）が見られる。

小片保は「日本古墳時代の抜歯」鳥取大学解剖学教室業績第四輯1956年で古墳時代前期または中期の3体の人骨に抜歯があることを指摘し、1号人骨女性・熟年の上顎左右の犬歯、3号人骨男性・熟年の上顎左右の犬歯、2号人骨女性・若年～壮年の上・下顎の左中切歯に抜歯があるとして、2号人骨の抜歯型式を前例のない型式としている。

埋葬姿勢不明の人骨では、男性の上顎左右の犬歯の抜歯（1411・川上IV・1401号人骨）、抜歯の可能性（72号人骨）が指摘され、川上IV号人骨では下顎左右の犬歯の抜歯の可能性も指摘されている。女性では近縁人骨で上顎左右の犬歯、下顎左右の中切歯（I₁）が抜歯されている。また、性別不明・成年の63号人骨では上顎左右犬歯の抜歯が可能性としてあり、下顎左右の中切歯と側切歯が抜歯されている。抜歯型式から考えると、近縁人骨は弥生時代の44号人骨（男性・熟年）の型式と同様であり、63号人骨（性別不明・成年）は弥生時代女性・熟年の22号人骨に到達する前の段階と考えることができる。

弥生時代には性別不明の成年（41号人骨）では抜歯は認められず、男性では成年以上で上顎左右の犬歯（C）の抜歯が一般的で、下顎左右の中切歯（I₁）、上顎左右の側切歯（I₂）の抜歯が加わっている。女性では上顎左右の犬歯の抜歯から下顎左右の犬歯の抜歯へ進み、さらに上顎の側切歯の抜歯へと進行すると考えられる。22号人骨の存在は注目せざるを得ない。

古墳時代は出土例も少なく、年代も断片的にしか解っていないが、古墳時代後期と年代を推定できる2例には抜歯は認められない。男性の上顎左右の犬歯の抜歯は弥生時代男性に通じるものであり、男性・若年（48号人骨）の上顎右犬歯の抜歯が抜歯開始年齢を示しているかのようである。古浦砂丘に埋葬された古墳時代人は古墳を築造することもなく個々に埋葬されている。これらの人々は恐らく庶民を代表する人々であろう。

小肥直美・田中良之は「古墳時代の抜歯風習」（『日本民族・文化の生成』1 197～215頁1988年 六興出版）で九州を中心とした古墳時代人骨において103体中に24体（出現率23.3%）に抜歯の存在を確認し、弥生時代終末～古墳時代初期から抜歯例は次第に増加し、4～5世紀に頂点に達しそれ以後減少すること。抜歯型式は単純で上顎第1小臼歯・第2側切歯の偏側性抜歯が多いこと（上顎左右犬歯の抜歯は佐賀県妻山石棺～4世紀～女性・成年～熟年で確認されている）。抜歯儀礼は基本的に1回、開始年齢を成年期と推定している。抜歯目的を服喪を目的とすることが妥当であるが、中小豪族の相続儀礼に伴う可能性があり、抜歯の社会的意義の変化を説いている。さらに親族構造の変化に対応し、この様な抜歯を行った階層が中小古墳の被葬者に限られていると結論している。

古浦遺跡の古墳時代埋葬は後期後半には抜歯風習は認められない。上顎犬歯に見られる抜歯風習は若年（12～19歳）で開始され、恐らく服喪に伴う行為であろうが年代を明らかにできない。

埋葬姿勢不明の入骨群も上顎左右の犬歯の抜歯は、抜歯型式からだけで年代を推測することはできない。それは弥生・古墳時代人で最も基本的な抜歯だからである。

いずれにしても古浦における風習的抜歯は弥生・古墳時代を通して縄文時代抜歯の型式を強く踏襲しているといえる。

青斑と副葬品・供獻品・外部施設（表6）。 青斑のある人骨については金関丈夫・小片丘彦「着色と変形を伴う弥生前期人の頭蓋」77～82頁『人類学雑誌』第69巻3・4号 1962年で詳細な検討が加えられ、本書の第9章に再録している。この論文では川上一義君が採集した人骨の頭蓋骨に見られる青斑と変形について論証したものである。人骨は男性・熟年、上顎左右の犬歯に抜歯があり、前頭骨の正中線上の一点を中心とする径37.5mmの正円に濃い着色がみられ、その周辺に淡い着色部があり、その原因は銅鏡によるものであるとして、台湾在住漢族の老年の女性頭骨にこの現象がみられ、その原因を「招き墨」というはちまき状のバンドを着装したまま埋葬し、バンドの正面に銅製の飾板があることを紹介している。またこの頭蓋骨には狭窄が認められ、同様な現象が種子島・広川遺跡の頭蓋骨にも認められることからこの装飾品の着用者を「一種の特定の職分者、恐らく一種のmagicianではなかったかとの疑いがもたれる」と結論している。この人骨は表6の1401男性・熟年入骨である。また、中嶋孝博・永井昌文も第8章で検討している。

古浦遺跡ではこの人骨を含めて6体-20号（性別年齢不明）・21号（性別不明・幼児）・49号（男性・成年）・60号（女性・老年）・山本Ⅲ（男性・熟年）・1401（男性・熟年）が出上り、全て前頭部に青斑がみられる。青斑の状態は様々で巻頭図版3に60号人骨頭蓋骨を掲載した。21号人骨では前頭部右半に青斑が認められる。

性別では男性熟年2・成年1、女性・老年1、幼児1、不明1で年齢的には幅広く着用しているといえる。抜歯は男性では上顎の左右犬歯に見られ、山本Ⅲ号人骨では上顎左右側切歯、1401号人骨では下顎左右の犬歯の可能性が考えられている。女性は抜歯の出現頻度が高いのに60号人骨では抜歯は不明とされている。埋葬された位置は特に青斑のある人骨が集中する事はなく分散している。

副葬品については49号人骨は翡翠製勾玉1・碧玉製管玉7個の首飾りを伴い、地上標識としての列石4・横石1と埋葬を覆うかのように砂利群がある。翡翠製勾玉（翡翠は糸魚川産）は古浦遺跡唯一の出土例であり、管玉についても21号人骨（性別不明・幼児）・35号人骨（女性・成年）で側頭部の左右から各1個、44号人骨（男性・熟年）左前腕上方18cmから1個、65号人骨（性別不明・小児）から1個出土しているに過ぎない。これ以外には1954年に山本清の調査した人骨に5個の管玉（小片1956年論文忠誠1号人骨）が伴っているに過ぎない。

管玉は35号女性人骨で左右側頭部から各1個ずつ出土しており、耳飾りとして使用された可能性が高いが、両脇に分けた髪の留め具とも考えられる。その意味では21号人骨は女兒の可能性が高い。

貝輪・貝小玉は幼児・小児に伴って、貝輪+貝小玉、貝輪、貝小玉の三形態に分類できる。貝輪はハイガイ製36個・オオツタノハ製3個で、左右の前腕に着装するのは2号人骨(年不明)右6個・左8個、29号人骨(2~3歳)右3個(オオツタノハ製)・左3個で、残り4体は23号人骨(1歳)左4個、24号人骨(2歳)左6個、28号人骨(2~4歳)左5個、32号人骨(4~5歳)左5個と

表6 青斑と副葬品・供獻品・外部施設(弥生前期)

No	性・年齢	青斑	拔 鑿	副 葬 品	供 獻 品	外部 施設	備 考
2	?・小児			貝輪右6・左8 蓋1。		置石2。	
20	?・?	○前頭部		?	?	?	安達徳雄氏 採集
21	?・幼児	○前頭部右半		管玉2(左右側頭 部)			4~5歳
23	?・幼児			貝輪左4			1歳
24	?・幼児			貝輪左6 日輪右5、貝小玉 2396	ハマグリ2		2歳
28	?・幼児			貝輪右3・左2、 貝小玉72		置石4	2~3歳
29	?・幼児			貝小玉2			8~9歳 貝小玉2?
30	?・小児			貝小玉198			
31	?・幼児			貝輪左5、貝小玉 29			2~3歳
32	?・幼児			貝小玉36			4~5歳
34	?・幼児			貝小玉36			2歳
35	女・成年	C	T	管玉2(左右側頭 部)			
37	?・幼児				巻貝1	置石3	4歳
41	?・若年					配石(墓 壇内)	12歳
44	男・熟年	C	T	管玉1(左前腕上 方18cm)			
49	男・成年	○前頭部	C	勾玉1・管玉7		列石、置石 1、砂利骨	
60	女・老年	○前頭部	不 明				
61	女・成年	(C) C	(C) C		ハマグリ	置石1	
65	?・小児			管玉1・石繩1			10歳
66	男・熟年	C			蓋1	さら?、E.C. 基盤、外付	弥生中期
68	男・熟年	C	C			置石1	
1本III	男・熟年	○前頭部	C(T.)	(T.) C			
1401	男・熟年	○前頭部	C	C			

左前腕着装が多い。

貝小玉は手首・足首・頸部に着装した状態で出土した例はなく埋葬面に散布した状態で出土したが、28号人骨では人骨の上下から出土し、金闇丈夫は発掘当時「貝衣」の存在を考え、衣服に縫いつけられた貝小玉を想定していた。

貝輪と貝小玉を併用する28号人骨（2～4歳）・29号人骨（2～3歳）・32号人骨（4～5歳）人骨の3体で、貝小玉単独は30号人骨（8～9歳）を混入と考えて除外すると、31号人骨（2～3歳）、34号人骨（2歳）である。いずれにしても幼児・最大年齢で見ても4歳以下に限られている。その点では21号人骨（幼児）の管下の副葬は、前頭骨の青斑と合わせ考えると特異な存在である。

外部標識としての列石・置石・立石は7例、墓壙内配石1例である。置石のみは5例で幼児2例、小児1例、女性・成年1例、男性・熟年1例である。砂丘が活動期で白色砂礫が堆積するなかでの地上標識はどれくらいの期間役を果たしたのであろうか。

特異な存在は前期では49号人骨（男性・成年）は青斑・抜歯・装身具としての勾玉1・管玉7、地上標識としての列石4・置石1・砂利群を伴っている。これが古浦における宗教的・政治的な中心人物である。中期中葉の66号人骨（男性・熟年）はこの人物の系列に繋がる人物と考えられる。

古浦では装身具としての貝製品は4～5歳以下の幼児に限られる傾向を指摘することができる。下（勾玉・管玉）は成人にみられ、数的に限られている。ただ青斑をもつ系列では例外的な存在があり、21号幼児は成人用装身具としての耳飾り管下を着用している。

鹿島町南講武で調査された堀部第1遺跡は、古浦遺跡にはほぼ並行する時期の遺跡と考えられるが、長者の墓とされる径約50mの円丘を半円形環状に取り廻む墳墓は55基確認され、地上標識として覆石や置石を伴い、内部施設として箱式木棺を用い、しばしば供献土器を伴っている。副葬品としては2号墓の管下4点・右鎖14点が出土し、管下4点が頭蓋骨と想定される位置で左右に2点ずつ出土し耳飾りを想定させる。この他には5号墓・28号墓で右鎖各1点、21号墓で漆塗堅桶1点、4号墓でエゴノキの実が約30点出土している。副葬品としては量的に多いとはいえないが、内部施設としての木棺は古浦の埋葬が土壤墓を想定できるのと余りにも異なりすぎる。また、墓地が一定の規制のもとに構成されている点で様相を異にしている。これは農民と漁民という生活基盤の違いに基づくのであろうか。

報告書の作製のために石材鑑定を静岡大学理学部海洋科学科海洋地質学北里洋教授にお願いしましたが、藤田の退官に伴う転宅でこの資料を紛失してしまいました。先生のお力を生かすことが出来なかった事が残念です。お詫び申します。また、須恵器・土師器について島根県埋蔵文化財調査

センター広江耕史氏、鹿島町教育委員会赤澤秀則氏、弥生土器については財団法人広島県埋蔵文化財センター伊藤実氏に多大の御教示を戴きました。東森市良氏、島根大学考古学研究室、大社町猪日收藏庫からは掲載資料の提供をいただきました。記してお礼の言葉とします。

第11章 古浦砂丘遺跡関係文献目録

報告・論文・学会発表

考古学

山本清「上師器を主とする砂丘開拓について」『日本考古学協会彙報別編』3 1964年10月
小片保「山陽国八束郡恵美町古浦砂丘遺跡発掘報告』 1956年

「弥生文化の時代」『鹿島町誌』鹿島町 1962年12月

金闇丈夫・藤田等「島根県八束郡鹿島町古浦砂丘遺跡」『日本考古学協会第29回総会研究発表要旨』1963年4月

勝部昭「古浦砂丘遺跡第二次調査参加記」『菅原考古』第2号 1963年8月

金闇丈夫・藤田等「島根県八束郡鹿島町古浦砂丘遺跡」『日本考古学協会昭和38年度大会研究発表要旨』1963年10月

山本清「山陰の上師器」『山陰文化紀要』6号 島根大学 1965年12月

藤田等「島根県八束郡古浦遺跡」『日本考古学年報』14 昭和36年度 1966年刊

金闇丈夫「島根県八束郡古浦遺跡」『日本考古学年報』15 昭和37年度 1967年刊

金闇丈夫「島根県八束郡古浦遺跡」『日本考古学年報』16 昭和38年度 1968年刊

金闇丈夫「島根県八束郡古浦遺跡」『日本考古学年報』17 昭和39年度 1969年刊

池田義雄・東森市良「出雲の國」学生社 1973年11月

東森市良・前島巳基・松本岩雄「弥生式土器集成『八雲立つ船上記の丘研究紀要』」1977年3月

『古代史発掘』4 満談社 1975年1月

金闇丈夫「トコ談義」『発掘から推理する』朝日新聞社 1975年6月

神澤勇一「弥生時代・古墳時代および奈良時代のトコト甲について」『駿台史学』38 1976年

三島格「貝の道 南海貝座使用の説輪」『貝をめぐる考古学』 1977年

「古浦砂丘遺跡」「八雲立つ船上記の丘」28、29合併号 島根県立八雲立つ船上記の丘 1978年3月

山本清監修「さんいん古代史の周辺」(七) 山陰中央新報社 1978年9月

「鹿島の遺跡小集」鹿島町教育委員会 1979年3月

山本清監修「さんいん古代史の周辺」(中) 山陰中央新報社 1979年4月

「古浦遺跡(八束郡鹿島町古浦)」「八雲立つ船上記の丘」37 島根県立八雲立つ船上記の丘 1979年7月

東森市良「古浦遺跡」「島根県大百科事典」(上) 山陰中央新報社 1982年7月

岡俊彦「古浦遺跡」「日本考古学小辞典」ニューサイエンス社 1983年9月

「古浦砂丘遺跡の問題」「菅原考古」16 島根大学考古学研究会 1983年9月

木下尚子「弥生時代における南海貝座の系譜」「国分寺一博上古紀念論集 日本民族文化とその周辺 考古編」1980年10月

前島巳基「日本の古代遺跡 20 烏祖」保育社 1985年2月

「古浦砂丘遺跡」「鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書」1 鹿島町教育委員会 1986年3月

奥原省一郎・三宅博士「八束郡鹿島町古浦遺跡表採資料について」『島根考古学会誌』3 1986年11月

『鹿島の遺跡小集』第2集 鹿島町教育委員会 1986年10月

『目でみるかしまの歴史』鹿島町立歴史民俗資料館開館特別展図録 鹿島町立歴史民俗資料館 1987年10月

藤田等「島根県古浦遺跡」「探訪弥生の遺跡」西日本編 有斐閣 1987年12月

- 「古代狹田土器の興亡」特別展区誌 鹿島町立歴史民俗資料館 1989年10月
- 『兜島を掘る-よみがえる伝説の資料』特別展図録 鹿島町立歴史民俗資料館 1992年10月
- 『下水管埋設事業に伴う古浦砂丘遺跡立会調査報告書』兜島町教育委員会 1993年3月
- 『古浦遺跡』『日本歴史地名大系第33巻 烏根県の地名』平凡社 1995年7月
- 片岡宏二『日本出土の松菊里型土器』『弥生時代渡来人と土器・青銅器』雄山閣出版 1999年
- 『渡来人登場 弥生文化を開いた人々』特別展図録 大阪府立弥生文化博物館 1999年4月
- 『開拓者の眠るところ 速報! 堀部第1遺跡木棺墓群』特別展図録 鹿島町立歴史民俗資料館 1999年11月
- 加藤光伸『石に固執した弥生墓の系譜-弥生前期～中期墓制の地域相-』『汗と夢』第8号 広島県立廿日市高等学校研究紀要 2000年3月
- 『坤々の源流-山雲・石見・尾根の弥生文化-』特別展図録 大阪府立弥生文化博物館 2000年4月
- 徳永 陸『山陰地域における弥生文化成立期の墓制』『弥生の墓制(1)-墓制からみた弥生文化の成立-』第48回埋蔵文化財研究集会 2000年8月

風土記関係論文

岡 和彦『古代村落とその周辺』『風土記と古代社会』培文房 1984年

人類学関係論文

- 小片保・大賀英利雄・小村京子・益本宗『日本古墳時代人骨の抜歯』『鳥取大学解剖学教室業績第4集』 1966年12月
- 余慶丈太・小片丘彦『若色と変形を伴う弥生前期人の歯蓋』『人類学雑誌』第69巻3・4 1962年3月
- 永井昌文・中橋孝博・十聖直美・田中良之・船越公威『島根県古浦遺跡出土の弥生人骨』第40回日本解剖学会九州地方会『解剖学雑誌』60: 202 1985年
- 永井昌文・中橋孝博・土肥直美・田中良之・船越公威『島根県古浦遺跡出土の弥生人骨』第40回日本解剖学会九州地方会『解剖学雑誌』93: 203 1985年
- 松下孝季『島根県古浦遺跡出土の人骨』『島根考古学会誌』3 1986年11月
- 永井昌文・福島一彦『古浦遺跡出土弥生人骨の病歴』第40回日本人類学会・日本民族学会連合大会『人類学雑誌』95: 259 1987年

新聞報道

- 『毛髪から二千年前の人骨 山陰で最初・山雲族研究に光』『朝日新聞』地方版 1948年8月20日
- 『出雲古代文化研究に新資料 土師期の人骨か 島大・山本教授ら発掘』『朝日新聞』地方版 1954年7月27日
- 『珍しい庶民の埋葬遺跡(古墳時代)を発掘 他に類のない資料 鹿島町古浦砂丘米月17日から調査』『島根新聞』1961年11月19日
- 『早くも人骨など発見 鹿島町の古浦遺跡 発掘調査始まる』『島根新聞』 1961年12月18日
- 『盆地らしきもの発見 鹿島町の古浦遺跡 発掘調査はかかる』『島根新聞』 1961年12月21日
- 『乳児の人骨を発見 古浦遺跡発掘調査石積みの下から』『島根新聞』 1961年12月25日
- 『古墳時代より以前か 鹿島町の古浦遺跡 人骨など調査進む』『島根新聞』 1961年12月26日
- 『古浦遺跡は弥生時代 幼児の人骨と土器發掘』『島根新聞』 1961年12月27日
- 『四才児の骨発見 犀群式石積みは無関係 弥生式土器も出る』『毎日新聞』地方版 1961年12月27日
- 『四体目の幼児人骨 古浦遺跡 一応調査を終わる』『島根新聞』 1961年12月28日

- 「早くも人骨など発見 鹿島町古浦の砂丘遺跡 発掘調査始まる」『島根新聞』 1962年8月25日
- 「ヤヨイ期の人骨発見 子どもにめのうの耳飾り 古浦砂丘 第二次発掘調査始める」『朝日新聞』地方版 1962年8月26日
千年に及ぶ遺跡埋葬 古浦遺跡 全国に例のない古代宝庫』『島根新聞』 1962年8月31日
- 「弥生・奈良期の“遺跡の宝庫” 石組み埋葬の北限地 完全な人骨5体も出土る」『読売新聞』地方版 1962年9月1日
弥生前期の墓地発見 古浦砂丘 社会構成に手掛かり』『朝日新聞』地方版 1962年9月1日
- 「古浦砂丘遺跡調査終る 弥生人の生活にメス 貴重な鐵冶跡発見」『島根新聞』 1962年9月4日
- 「弥生期充実に成る 島根 砂丘遺跡調査終る」『毎日新聞』 1962年9月4日
「海戸内とも交流? 古浦砂丘の第2次発掘終る 民衆生活に貴重な資料」『朝日新聞』地方版 1962年9月5日
- 金関丈夫「砂丘と人・古浦の发掘を終えてーー“彼らは漁民だった”= 其の小珠も數千個 砂丘地の一部を子供森」『毎日新聞』地方版 1962年9月8日
- 金関丈夫「古浦遺跡調査の意義」(上)『島根新聞』 1962年9月8日
- 金関丈夫「古浦遺跡調査の意義」(下)『島根新聞』 1962年9月9日
発掘調査はじめた 鹿島町の古浦砂丘遺跡』『島根新聞』 1963年7月21日
- 「ついの晩片を発見 紀元前二千年か 全国でも二例 古浦遺跡」『島根新聞』 1963年7月24日
- 「更に六体の人骨発見 古浦遺跡“弥生”第三のメカニク」『島根新聞』 1963年7月26日
「貴重な弥生文化研究 古浦遺跡の発掘調査進む」『島根新聞』 1963年7月29日
- 「日本最古の弥生人 古浦遺跡調査 イカツリ擬似も発見」『島根新聞』 1963年7月30日
- 「最古の“ト骨”を発見 島根・古浦砂丘ヤヨイ遺跡で」『朝日新聞』地方版 1963年8月1日
- 「ヒスイのまが玉発見 古浦遺跡、碧玉の菅玉も」『島根新聞』 1963年8月2日
「貴重な弥生人の生活資料 ト骨や擬似なども 古浦砂丘遺跡調査終る」新聞名不詳 1963年8月4日
- 金関丈夫「ト骨談議」(一)『島根新聞』 1963年8月25日
- 金関丈夫「ト骨談議」(二)『島根新聞』 1963年8月26日
- 金関丈夫「ト骨談議」(三)『島根新聞』 1963年8月27日
- 金関丈夫「ト骨談議」(四)『島根新聞』 1963年8月28日
- 金関丈夫「ト骨談議」(五)『島根新聞』 1963年8月29日
- 金関丈夫「ト骨談議」(六)『島根新聞』 1963年8月30日
- 金関丈夫「ト骨談議」(七)『島根新聞』 1963年8月31日
- 金関丈夫「ト骨談議」(八)『島根新聞』 1963年9月1日
「完全な人骨2体発見 古浦遺跡発掘 稽政を司る巫女か」『島根新聞』 1964年7月26日
- 「さらに四体を発掘・予算不足で調査打ち切り・古浦砂丘遺跡 学術的解明お預け」『島根新聞』 1964年7月28日
- 「さらに人骨4体 古浦砂丘遺跡調査」『島根新聞』 1964年7月30日
「古浦砂丘遺跡(鹿島)を守れ 松江考古学談話会が保存を要望 放置され消滅寸前 貴重な弥生人の生活跡 土砂採取や住宅建設」『中国新聞』地方版 1975年5月25日
- 「鹿島町の町づくりに 古浦砂丘遺跡生かして 山本名誉教授ら申し入れ 町長も積極姿勢」『山陰中央新報』 1987年12月18日
「発掘報告書やっと実現 鹿島町の古浦砂丘遺跡 遺物も常設展示へ」『朝日新聞』地方版 1989年1月22日
古浦砂丘遺跡(鹿島)出土の土器 朝鮮半島の技法で製作 弥生前期松葉型 持ち込まれた可能性も!『山陰中央新報』 1998年1月30日

図・図版・表一覧

【図】

第1章 自然環境

- 図1 烏根半島地域の地形概観
- 図2 鹿島町周辺の地形概観
- 図3 鹿島町周辺の表層地質
- 図4 鹿島町東部の断層と水系のずれ
- 図5 鹿島町における月別平均気温と降水量
- 図6 鹿島町における年平均気温の推移
- 図7 鹿島町における年降水量の推移
- 図8 烏根東部の植生
- 図9 鹿島町周辺の地形分類
- 図10 古浦付近の海成・風成砂の正規確率紙上の粒径累加曲線

第2章 歴史的環境

- 図1 北鶴武氏元遺跡出土土器
- 図2 占浦遺跡と周辺の遺跡
- 図3 塚部第1遺跡5号墓
- 図4 佐太前遺跡出土土器

第3章 立地

- 図1 遺跡付近地形図

第4章 調査の歴史

- 図1 八束郡恵美村佐陀川南岸砂丘、造物包含地写真撮影位置図（昭和23年8月実測）山本 清
- 図2 人骨出土地点付近関係位置要図（昭和23年8月）

第5章 調査日記（抄）

- 図1 鹿島町大字吉浦字砂山埋蔵文化財所在地見取図 昭和36年11月16日鹿島町教育委員会提供
- 図2 60号頭蓋骨青銅スケッチ

第6章 層位

- 図1 トレンチ配置図
- 図2 1961年A-1・2・3区北壁断面図
- 図3 1961年B-1～C区トレンチ位置図
- 図4 1961年B-1～C区トレンチ東南壁面断面図
- 図5 1962年A-4～9区北壁断面図
- 図6 1962年F区東壁断面図

第7章

第1節 表面採集

- 図1 弥生土器1（前期土器）
- 図2 弥生土器2（中期土器）
- 図3 弥生土器3（後期土器）
- 図4 土師器1
- 図5 土師器2
- 図6 頸壺器1
- 図7 頸壺器2

- 図8 須忠器 3
 図9 1製品1(飯蛸壺)
 図10 上製品2(土器製作用具 当貝)
 図11 1製品3(上鮑)
 図12 上製品4(文貝1)
 図13 土製品5(文脚2)
 図14 骨角器(刀子柄)
 図15 石材(隨岐黒曜石塊)
- 第2節 第1次調査(1961年—昭和36年)
- 図16 2号人骨出土状態
 図17 2号人骨供獻弥生上器
 図18 3号人骨出土状態
 図19 A・B区出土弥生上器
 図20 1号人骨出土状態
 図21 1号人骨副葬骨角器(骨製有孔円板)
 図22 4号人骨出土状態
 図23 A-1区石組遺構付近散乱人骨と1号人骨出土状態
 図24 石組遺構出土状態
 図25 石組遺構上人骨出土状態
 図26 A-3区1層遺物出土状態
 図27 A-1・2・3区1・2層出土上器(須忠器・土器)
 図28 B-2・3・4区1・2層出土上器(弥生土器・須忠器・土器)
 図29 A-1・2区3層出土上器(弥生土器・須忠器・土器)
 図30 B-1区3層出土上器(弥生土器・須忠器・土器)
 図31 B-3区3層出土上器(土器)
 図32 土製品1(上鮑)
 図33 土製品2(文脚)
 図34 石器
 図35 骨角器
- 第3節 第2次調査(1962年—昭和37年)
- 図36 21・22号人骨出土状態
 図37 21号人骨副葬苔玉
 図38 23号人骨出土状態
 図39 24号人骨出土状態
 図40 25・26号人骨出土状態
 図41 28号人骨出土状態
 図42 29号人骨出土状態
 図43 1962年山本清調査人骨出土状態
 図44 A・C・F区出土弥生土器
 図45 23号人骨上方西側砂利群出土弥生土器
 図46 A区南西採砂場採集弥生土器
 図47 1962年2月出土人骨付近出土弥生土器
 図48 27号人骨出土状態
 図49 1962年2月人骨出土状態
 図50 A-13区1層出土土器(弥生土器・須忠器・土器)
 図51 A-11・13区1・2層出土土器(弥生土器・須忠器・土器)

- 図52 A-10・12区2・3層出土土器（弥生上器・須恵器・土師器）
 図53 A-11・12区北抵張区3層出土土器（弥生上器・須恵器・土師器）
 図54 G区1・2層出土土器（弥生土器・須恵器・土師器）
 図55 A区住居跡（「T房？」）平面・断面図
 図56 A区住居跡（「T房？」）床面直上山土土器
 図57 A区出土石器1
 図58 A区出土石器2
 図59 A区住居跡（「T房？」）出土骨角器
 図60 A区出土土製品（玉・土錐）
 図61 A区出土骨角器
 図62 A区出土袋身具（金環・菅玉）
 図63 A区出土鉄器（刀その他）
 図64 D区平面・断面図（十層出土状態）
 図65 D区出土土器（須恵器1）
 図66 D区出土土器（須恵器2）
 図67 D区出土土器（土師器1）
 図68 D区出土土器（土師器2）
 図69 D区出土土器（土師器3）
 図70 D区出土土製品1（十錘）
 図71 D区出土土製品2（支脚）
 図72 D区出土石器
 図73 D区出土鉄器
 第4節 第3次調査（1963年-昭和38年）
 図74 30・31・32・33・34・38号人骨出土状態
 図75 35号人骨出土状態
 図76 36号人骨出土状態
 図77 37号人骨出土状態
 図78 39・40・41号人骨出土状態（39・40号人骨は古墳時代人）
 図79 42・43号人骨出土状態
 図80 42号人骨供献弥生上器
 図81 44・45・46号人骨出土状態
 図82 47号人骨出土状態
 図83 48号人骨付近出土弥生上器
 図84 49号人骨出土状態
 図85 35号人骨副葬・44号人骨附近・49号人骨剣轔玉類（勾玉・菅玉）
 図86 骨角器（卜骨）
 図87 骨角器（鐵・擬似鉄）
 図88 イカ釣擬似鉄（川上清吉氏寄贈）
 図89 II・F区出土弥生上器1
 図90 H・F区出土弥生上器2
 図91 48号人骨出土状態
 図92 50号人骨出土状態
 図93 50号人骨関連須恵器・土師器
 図94 H区1層石群
 図95 G区石縞道構出土状態
 図96 G・H 1層出土土器（須恵器・土師器）

- 図97 G区2層出土上器（弥生土器・土師器・須恵器）
- 図98 H区2層出土土器（弥生土器・土師器・須恵器）
- 図99 II₂層出土上器（弥生土器・土師器）
- 図100 H区2層出土土器（土師器）
- 図101 土製品（土峰）
- 図102 石器（敲石・砥石）
- 図103 鉄器（鉄鏃・不明鉄器）
- 第5節 第4次調査（1964年—昭和39年）
- 図104 60号人骨出土状態
- 図105 61号人骨出土状態
- 図106 64号人骨出土状態
- 図107 65・70号人骨出土状態
- 図108 65号人骨副葬品玉
- 図109 A土器群伴出石鏃・65号人骨伴出石鏃・66号人骨伴出打製石斧・66号人骨下唇出土打製石斧
- 図110 66号人骨出土状態
- 図111 66号人骨副葬品・闇道弥生土器
- 図112 67・68・69号人骨出土状態
- 図113 71号人骨出土状態
- 図114 A・B群弥生土器出土状態
- 図115 A群闇道弥生土器
- 図116 B群闇道弥生土器
- 図117 弥生土器（66号人骨下唇・4層上半・全、全、71・72号人骨間・全1層、F区壁面）
- 図118 62号人骨出土状態
- 図119 62号人骨闇道土器
- 図120 63号人骨出土状態
- 図121 石組遺構出土状態
- 図122 1層出土土器（弥生土器・土師器）
- 図123 1層出土土器（須恵器）
- 図124 2層出土土器（弥生土器・土師器）
- 図125 2層出土土器（須恵器）
- 図126 土製品1（土縫）
- 図127 土製品2（文縫）
- 図128 土製品3（貼縫車）
- 図129 土製品4（土器製作用具・当て具）
- 図130 石器（砥石）
- 図131 鉄器（矛・鎌）
- 図132 骨角器（刀子柄・鐵）
- 第8章 古浦遺跡出土の弥生時代人骨
- 図1 上井ヶ沢弥生人を基準とした偏差折線（男性）
- 図2 下井ヶ沢弥生人を基準とした偏差折線（女性）
- 図3 ベンローズの形態距離（頭蓋9項目、男性）
- 図4 主成分分析（頭蓋9項目、男性）
- 図5 クラスター分析（頭蓋9項目、男性）（ユークリッド距離、群平均法）

第9章 特論

古浦遺跡の貝輪

- 図1 2号人骨貝輪
図2 23・24・25号人骨貝輪
図3 29・32号人骨貝輪
弥生時代の子供用貝輪論　古浦遺跡の貝輪によせて—
図1 弥生時代子供用貝輪出土地
図2 子供の貝輪（一枚貝輪）
図3 子供の貝輪（笠貝貝輪）
図4 子供の貝輪（南海底貝輪）
図5 子供の貝輪（スイショウガイ科貝輪）

付図：着装された貝輪の大きさ

イカ釣擬似頭について

- 図1 古浦遺跡出土旋角製擬似頭
図2 「しらやき」各種（1）
図3 「しらやき」各種（2）
図4 「しらやき」各種（3）
図5 各地出土擬似頭

ト骨談義

- 図1 マチの形（対馬の龜甲）

第10章 総括

- 図1 石組遺構出土状態（1961・1963・1964年）
図2 埋葬人骨分布図（1961～1964年）
図3 古墳・弥生時代人骨埋葬水準
図4 弥生時代人骨（成年～老年）埋葬方位
図5 弥生時代人骨（乳児～若年）埋葬方位
図6 占墳時代人骨埋葬方位

【図版】

- 巻頭図版1（カラー）　遺跡遠景（北より）
巻頭図版2（カラー）　遺跡近景（北より）
巻頭図版3（カラー）　60号人骨頭蓋骨（1964年）

第3章 立地

- 図版1 古浦遺跡（1959年～昭和34年）

第4章 調査の歴史

- 図版1 山本 清輔在人骨（1948年～昭和23年8月15日）
図版2 小片 保調査第1地点（1956年～昭和31年8月20日）

第5章 調査日記（抄）

- 図版1 暖を取る（1961年）
図版2 調査風景（1961年）
図版3 調査関係者（1962年）
図版4 36号人骨尖端（1963年）
図版5 F区発掘情况（1964年）
図版6 調査関係者（1964年）

第7章 遺構と遺物

- 図版1 遺跡遠景（北より） 1961年
図版2 遺跡近景（北より） 1961年
図版3 B - 3 ~ C区東南壁面（1961年）
図版4 F区東壁断面（1962年）
図版5 弥生土器（前期）
図版6 弥生土器（前期）
図版7 弥生土器（前期）
図版8 弥生土器（前期）
図版9 弥生土器（中期）
図版10 弥生土器（中期）
図版11 弥生土器（中期）
図版12 弥生土器（後期） 烏根大学蔵
図版13 土師器（時期不明）
図版14 土師器（時期不明）
図版15 土師器（時期不明）
図版16 須恵器（5世紀後半）
図版17 須恵器（8世紀後半）
図版18 須恵器（8世紀後半）
図版19 須恵器（8世紀後半）
図版20 須恵器（6世紀後半）
図版21 須恵器（6世紀後半）
図版22 十製品（飯蛸壺）
図版23 上製品（当貝）
図版24 十製品（上鏡）
図版25 上製品（支脚）
図版26 石材（羅核黒曜石塊）
図版27 2号人骨山七状態（1961年）
図版28 2号人骨ハイガイ貝輪着装状態
図版29 2号人骨供獻弥生土器（前期）
図版30 2号人骨右前腕着装ハイガイ貝輪
図版31 2号人骨左前腕着装ハイガイ貝輪
図版32 C区弥生土器山上状態
図版33 弥生土器（中期）
図版34 A - 1区石組付近散乱人骨
図版35 1号人骨山七状態（1961年）
図版36 1号人骨出土状態（1961年）
図版37 石組遺構出土状態（1961年）
図版38 石組遺構断面
図版39 石組遺構上七器山上状態
図版40 石組遺構と土器
図版41 上師器（4世紀前半）
図版42 石組遺構上（一部石組遺構下）出土土師器（5世紀中葉）
図版43 石組遺構上出土十脚器（時期不明）
図版44 A区表層出土骨角器未製品
図版45 1号人骨副葬骨角器

- 図版46 21号・22号人骨（手前）出土状態（1962年）
- 図版47 22号人骨出土状態（1962年）
- 図版48 碧玉製管飛
- 図版49 23号人骨左前腕着装ハイガイ製貝輪
- 図版50 24号人骨と4層砂利群
- 図版51 24号人骨出土状態（1962年）
- 図版52 24号人骨左前腕着装ハイガイ製貝輪
- 図版53 24号人左前腕着装ハイガイ貝輪と貝
- 図版54 25号人骨（26号人骨列石上）出土状態（1962年）
- 図版55 26号人骨出土状態（1962年）
- 図版56 26号人骨蓋石と列石
- 図版57 26号人骨と蓋石・列石（一部）
- 図版58 28号人骨出土状態（1962年）
- 図版59 28号人骨左前腕着装ハイガイ製貝輪
- 図版60 28号人骨副葬貝小玉（一部）
- 図版61 28号人骨副葬貝小玉（2396制）
- 図版62 29号人骨出土状態（1962年）
- 図版63 29号人骨右前腕着装オツタノハ製貝輪・左前腕着装ハイガイ製貝輪と貝
1962.3.14出土人骨（山本 清調查）
- 図版65 1962.3.14出土人骨（山本 清調査）
- 図版66 F1×4 潟砂利群下出土弥生土器（前期）
- 図版67 23号人骨上方西側砂利群出土弥生土器（前期）
- 図版68 砂採区場4層出土弥生土器（前期）
- 図版69 砂採区場4層出土弥生土器（前期）
- 図版70 1962.2.19出土人骨と弥生土器（前期）
- 図版71 1962.2.19出土人骨と弥生土器（前期）
- 図版72 1962.2.19出土人骨付近出土弥生土器（前期）
- 図版73 1962.2.19出土人骨付近出土弥生土器（前期）
- 図版74 27号人骨と29号人骨蓋石（1962年）
- 図版75 1962.2.19出土人骨と弥生土器（前期）
- 図版76 1962.7.25出土人骨（近藤 正調査）
- 図版77 A区住居跡（T.房？） 西から（1962年）
- 図版78 A1×住居跡（T.房？） 出土土師器（5世紀中葉）
- 図版79 A区住居跡（T.房？） 出土骨角器（A面）
- 図版80 A1×住居跡（T.房？） 山土骨角器（B面）
- 図版81 A区住居跡（T.房？） 出土骨角器（A面）
- 図版82 A1×住居跡（T.房？） 出土骨角器（B面）
- 図版83 D区塙面（西から） 1962年
- 図版84 D1×最上面（北半部）土器出土状態
- 図版85 D区出土土師器（6世紀後半～7世紀）
- 図版86 D1×ピット床山土山土師器（6世紀後半か～7世紀）
- 図版87 D区出土須恵器（8世紀後半）
- 図版88 30～34・38号人骨出土状態（1963年）
- 図版89 30～32号人骨出土状態（1963年）
- 図版90 30号人骨出土状態（1963年）
- 図版91 31号人骨出土状態（1963年）

- 図版92 32号人骨出土状態（1963年）
- 図版93 32号人骨左前腕着装ハイガイ製貝輪
- 図版94 33号人骨出土状態（1963年）
- 図版95 34号人骨出土状態（1963年）
- 図版96 35号人骨と置石（1963年）
- 図版97 35号人骨出土状態（1963年）
- 図版98 35号人骨碧玉製管飛出上状態（1963年）
- 図版99 36号人骨出土状態（1963年）
- 図版100 37号人骨出土状態と置石（1963年）
- 図版101 37号人骨出土状態（1963年）
- 図版102 38号人骨出土状態（1963年）
- 図版103 40号（奥）・41号人骨出土状態（1963年）
- 図版104 41号人骨出土状態（1963年）
- 図版105 42号人骨置石と供獻赤生土器
- 図版106 42号人骨出土状態（1963年）
- 図版107 42号人骨供獻赤生土器（前期）
- 図版108 44・45号人骨（右上方）出土状態（1963年）
- 図版109 44・46号人骨（右）出土状態（1963年）
- 図版110 47号人骨出土状態（1963年）
- 図版111 49号人骨置石・列石・砂利群（1963年）
- 図版112 49号人骨副葬翡翠勾玉・碧玉管下出土状態（1963年）
- 図版113 49号人骨副葬碧玉製管玉・翡翠製勾玉
- 図版114 ト骨と33号人骨（右上方）出土状態（1963年）
- 図版115 ト骨出土状態（1963年）
- 図版116 ト骨（A面）
- 図版117 ト骨（B面）
- 図版118 振似鉗と弥生土器（中期）
- 図版119-1 振似鉗（A面）
- 図版119-2 振似鉗（B面）
- 図版119-3 振似鉗（C面）
- 図版119-4 振似鉗（D面）
- 図版120 弥生土器（中期） 48号人骨北側
- 図版121 弥生土器（前期） 48号人骨北側
- 図版122 弥生土器（中期） 48号人骨北側
- 図版123 弥生土器（中期） 48号人骨北側
- 図版124 40号人骨出土状態（1963年）
- 図版125 48号人骨出土状態（1963年）
- 図版126 50号人骨出土状態（1963年）
- 図版127 60号人骨出土状態（1964年）
- 図版128 61号人骨出土状態（1964年）
- 図版129 64号人骨出土状態（1964年）
- 図版130 65号人骨（上）・70号人骨出土状態（1964年）
- 図版131 石組遺構・66号人骨列石と4層弥生土器群（A図）
- 図版132 石組遺構（左端）・66号人骨列石と副葬弥生土器（中央）、4層弥生土器群（A図）
- 図版133 66号人骨列石・立石出土状態（1964年）
- 図版134 66号人骨・立石と副葬弥生土器

- 図版135 66号人骨副葬弥生七器（中期）
 図版136 66号人骨副葬弥生上器（中期）
 図版137 66号人骨副葬弥生七器（中期）
 図版138 67号（右）・68号人骨と置石、69号人骨（左端）出土状態（1964年）
 図版139 68号人骨・置石出土状態（1964年）
 図版140 70号人骨出土状態（1964年）
 図版141 71号人骨出土状態（1964年）
 図版142 弥生七器（前期） 66号人骨下層A上器群関連
 図版143 弥生上器（前期）－A土器群
 図版144 弥生土器（前期） A七器群
 図版145 弥生上器（前期）－B土器群
 図版146 粗陶
 図版147 石鏡
 図版148 弥生土器（前期）－B七器群
 図版149 弥生七器（前期）－B上器群
 図版150 62号人骨出土状態（1964年）
 図版151 63号人骨出土状態（1964年）
 図版152 石組遺構出土状態（1964年）
 図版153 石組遺構上面（部分）
 図版154-1 上製品（鋸鍛車）
 図版154-2 土製品（鋸鍛車）上・側面
 図版154-3 土製品（鋸鍛車）下面
 第8章 烏県・古浦遺跡出土の弥生時代～古墳時代人骨
 図版1-1・2・3 古浦44号人骨（男性・老年）
 図版2-1・2・3・4 古浦22号人骨（女性・老年）
 図版3-1・2・3・4 古浦30号人骨（性別不明・小児・病変）
 特論
 着色と変形を伴う弥生前期の頭蓋
 図版1 古浦頭骨
 図版2 古浦頭骨後面観
 ト骨談義
 図版1 古浦遺跡出土のト骨。表（上）と裏（下）
 図版2 西周時代のト骨（陝西省渣舌山上）
 図版3 鄭州三里崗出土のト骨

【表】

第1章 自然環境

- 表1 鹿島および周辺の気候資料
 表2 施島町古浦付近の砂質堆積物の資料の採集地点
 表3 鹿島町古浦付近の砂質堆積物の粒度組成（全資料）
 表4 施島町古浦付近の砂質堆積物の粒度特性（全資料）
 表5 鹿島町古浦付近の砂質堆積物の粒度組成
 表6 施島町古浦付近の砂質堆積物の粒度特性
 表7 鹿島町古浦付近の砂質堆積物の鉱物組成

第7章 造橋と遺物

- 表1 28号人骨副葬貝小玉計測値

表2	28号人骨副葬貝小玉重量
表3	29号人骨副葬貝小玉計測値
表4	31号人骨副葬貝小玉計測値
表5	32号人骨副葬貝小玉計測値
表6	34号人骨副葬貝小玉計測値
第8章 古浦遺跡出土の弥生時代人骨	
表1	古浦遺跡山上人骨一覧
表2	古浦遺跡弥生時代人骨
表3	古浦遺跡山上弥生人骨・頭蓋計測値
表4	主要頭蓋計測値の比較（男性）
表5	主要頭蓋計測値の比較（女性）
表6	鼻根部計測値の比較（男性）
表7	鼻根部計測値の比較（女性）
表8	顎面平坦度の計測結果（男性）
表9	顎面平坦度の計測結果（女性）
表10	下顎骨計測値の比較（男性）
表11	下顎骨計測値の比較（女性）
表12	上肢骨計測値（男性、左）
表13	上肢骨計測値（女性、左）
表14	下肢骨計測値（男性、左）
表15	下肢骨計測値（女性、左）
表16	四肢骨の長・周径比の比較（男性・左側）
表17	推定身長の比較
表18	古浦弥生人の抜歯型式
第9章 特論	
古浦遺跡の貝輪	
表1	古浦遺跡貝輪一覧
弥生時代の子供用貝輪論	
表1	弥生時代の子供用貝輪一覧
表2	弥生時代子供用貝輪の大きさ一覧
表3	子供用貝輪を中心としてみた弥生時代の装身具使用情況
表4	子供用貝輪を中心としてみた弥生時代の貝輪使用情況（I）
表5	子供用貝輪を中心としてみた弥生時代の貝輪使用情況（II）
表6	貝輪使用型別にみた遺跡の継続期間
古浦遺跡出土の擬似頭	
表1	古代イカ貢納関係史料
「骨談議」	
表1	マチの形（対馬の龜甲）
第10章 総括	
表1	古浦遺跡出土人骨一覧表
表2	弥生時代人骨の性別・年齢別構成
表3	古墳時代人骨の性別・年齢別構成
表4	埋葬姿勢不明人骨の性別・年齢別構成
表5	埋葬姿勢・性別・年齢別の抜歯分類
表6	青斑と副葬品・供斎品・外部施設

あとがき

永年の念願であった古浦砂丘遺跡の報告書を、上梓することができたことは望外の喜びです。金関丈夫先生の弥生時代人研究の最後の大規模な調査で、報告書を刊行することで、先生の御恩に少しでも報いることができたのではないかと考えています。

調査関係者では金関丈夫先生を初めとして、先生に連なる永井昌文先生、また三島格先生が亡くなられ、山本消先生、近藤正氏も旅立しまわされました。調査を行った頃は若かった私も70代になりました、時間の過ぎることの早さを感じながら原稿を書きました。

この報告書は藤田の静岡大学退官年（1995年＝平成7年3月）に出版することを予定していました。自然環境・特論を執筆して戴いた林正久・中橋孝博・木下尚子・内田伸雄の各氏は原稿提出日を厳守して戴いたのですが、藤田が様々なことで期限を守ることができず今日になってしまいました。また鹿島町教育委員会にも多大の御迷惑をお掛けしたことを深くお詫びします。

あれもこれもと考えながら不充分な内容となった責任は藤田にあります。記憶を辿ることの難しさを痛感しました。当時数ヵ所であった山陰の弥生前期遺跡も膨大な数になり、様々な点で変化しています。

調査は年度によっては科学研修費や島根県の補助金で行いましたが、調査費が不足する事が多く、調査参加者の貯金や全員の持ち金を出し、旅費を計算して再配分したこともありました。ある人は鈍行列車で食事もせずに、九州まで帰ったと言っていました。私自身、次の調査予定地に着いた時に十円札が1枚残っていました。提供して戴いたお金を返却したのかどうか記憶にありません。

金関先生は経費節約の為に松江の家から毎日通って来られました。勿論、地元の先生方も同じでした。交通費を差し上げたかどうかかも定かではありません。

調査中に宿泊した平安（ひらやす）旅館が1泊3食で500円だったことも幸いしました。驚いたことに素泊まりは100円でした。朝、母屋で抹茶を御馳走になったことも忘れないことです。そして月末の宿代の支払いに困ったこともあります。しかし、公務員としての私の月給が1万円あまりだったことも事実です。池田内閣の所得倍増論の遙か前の時代でした。

地元の皆さん数人が調査補助員として働いて下さいましたが、賃金が払えずスコップ・一輪車を賃金の一部として引き取って戴いたこともあります。夏の暑さ除けの天幕、そのための機材も無料で提供して戴き、鹿角製擬似餌の出上したときの皆さんの議論、地元の小・中学生、松江高校の協力も戴きました。数え切れない位の善意に支えられての調査でした。余りにも遅すぎますが、改めて御礼申します。

穂波町轍にて 2004年10月15日 藤田 等 記。

図 版



図版1 遺跡遠景（北より） 1961年



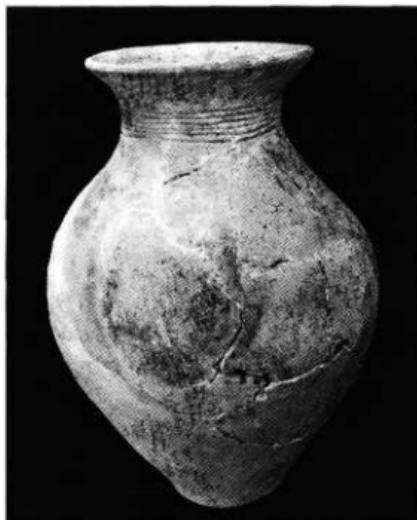
図版2 遺跡近景（北より） 1961年



図版3 B-3～C区東南壁面（1961年）



図版4 F区東壁断面（1962年） 頭蓋骨は24号人骨



上左 圖版 5 弥生土器（前期）

右 圖版 6 弥生土器（前期）

下左 圖版 7 弥生土器（前期）

右 圖版 8 弥生土器（前期）